三重県埋蔵文化財調査報告１１５－３２

一般国道23号中勢道路（12工区）建設事業に伴う

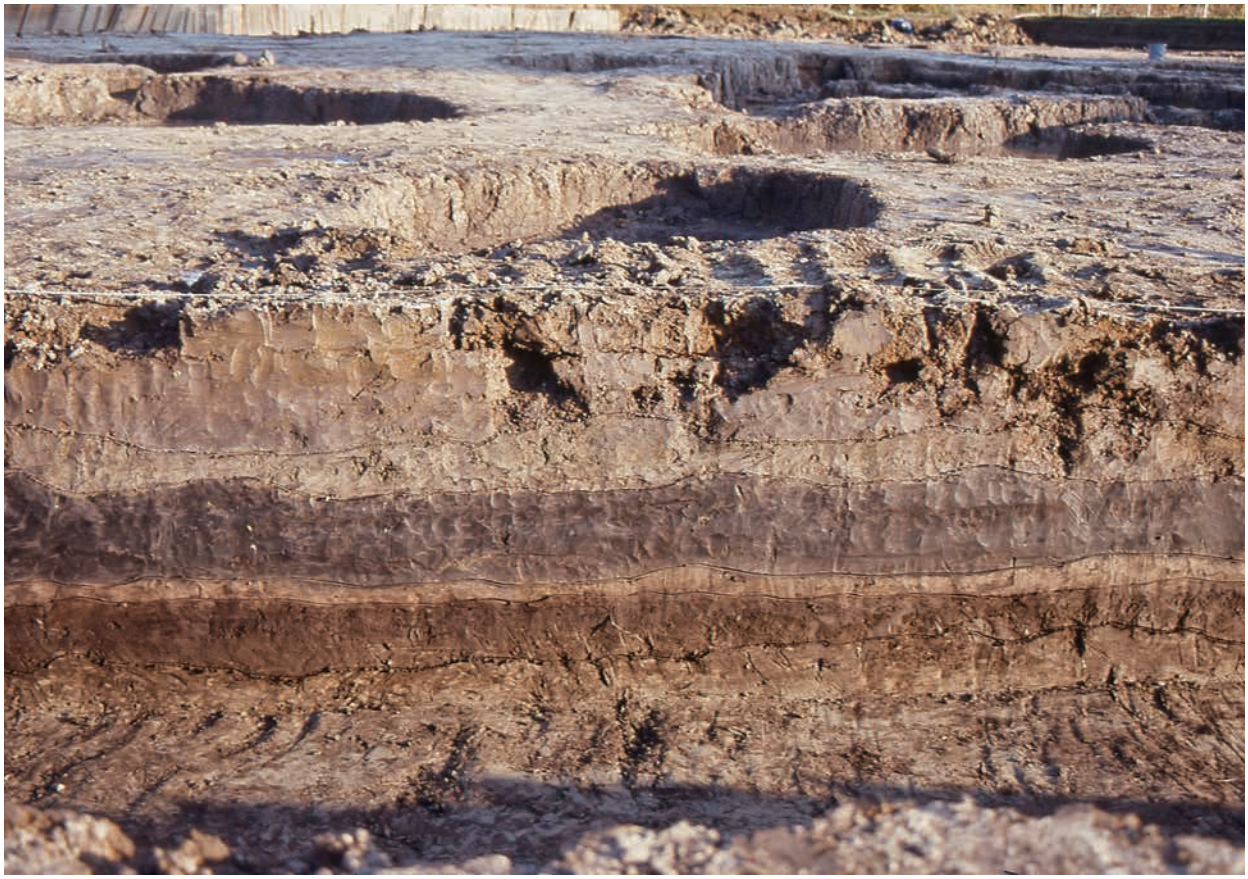
相川西方遺跡発掘調査報告

２０１４（平成26）年11月

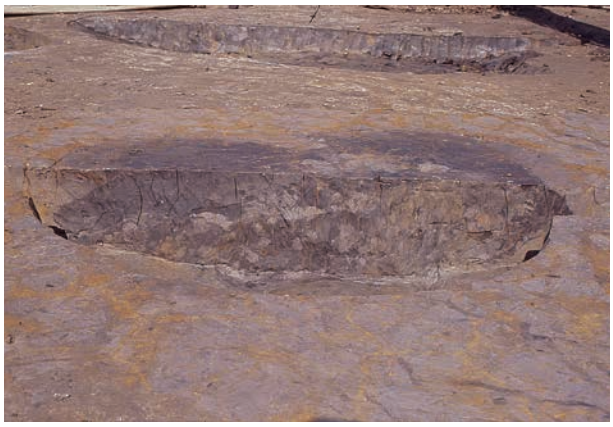
三重県埋蔵文化財センター

相川西方遺跡から伊勢湾方向を望む

第３次調査区Ⅰ地区表土掘削状況（南から）



下層確認　２トレンチ（西から）



ＳＫ395（南西から）

ＳＫ464（南東から）

ＳＫ465（南東から）

ＳＫ501（南西から）

ＳＫ536（南から）

ＳＫ544（南から）

ＳＫ667（西から）

ＳＫ700（東から）

ＳＫ486　土器出土状況（南西から）

半截状態の土器（右上より時計回りに16、67、９、88、10、６）

序

三重県の北東部に位置している伊勢平野は、西側に布引山地があり東側には伊勢湾が広がる随所に豊かな自然が残された地域です。この伊勢平野の中央部、津市の南を流れる相川と岩田川の河口部には日本三津で知られる安濃津が所在し、両河川の間に位置する半田丘陵上には、三重県内でも初期に須恵器生産が始まったことで知られる遺跡が多く分布するなど、この地域は古くから新しい技術・文化を受容していたことで知られます。

今回報告する相川西方遺跡は、一般国道23号中勢道路建設に伴い遺跡の現状保存が困難な部分について、緊急発掘調査を実施したものです。この遺跡では初めての調査となりましたが、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての粘土採掘坑が多く検出され、土器生産地帯の歴史を大きく遡り、全国的な土器生産体制の変革を考えるうえで重要な遺跡であることが判明しました。

開発が進み私たちの生活が便利になることは重要なことではあります。しかし、いにしえの人々がこの地に遺した「証し」を保存し、私たちの祖先の営みを知り今の暮らしに活かすことも、私たちが豊かに暮らしていくためには重要なことであります。消滅してしまった遺跡を、「記録保存」という形で少しでも皆様に知っていただき、埋蔵文化財保護へのより一層のご理解とご協力を願うばかりです。

末筆となりましたが、調査にあたり、多大なるご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成26年11月

三重県埋蔵文化財センター
所長　野原　宏司

例　言

１．本書は、三重県津市久居相川町に所在する相川西方遺跡の発掘調査報告書である。

２．本遺跡の調査は、一般国道23号中勢道路建設に伴い、三重県教育委員会が国土交通省中部地方整備局長より委託を受けて、平成20～23年度にかけて実施した。また、整理・報告書作成業務を平成24･25年度に実施した。
調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の全額負担による。

３．調査および整理は、次の体制により実施した。
調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
調査協力　　津市教育委員会
土木作業　　第１次調査：【平成20年度】株式会社アート、【平成22年度】橋本技術株式会社
第２次調査：株式会社中浦土木
第３次調査：安西工業株式会社
第４次調査：株式会社四門

４．現地調査については、第１次調査：【平成20年度】淺尾太・野嶌美沙子、【平成22年度】淺尾太・西口剛司、第２次調査：淺尾太・野嶌美沙子、第３次調査：松葉和也・淺尾太・西口剛司、第４次調査：西口剛司・星野浩行が担当した。

５．本書は山中由紀子が執筆・編集した。遺構写真撮影は現地調査担当者が、遺物写真撮影についても現地調査担当者が行い、補足的に山中が撮影した。室内整理業務は黒川敬子・太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・山口香代・平井治代が補佐した。また、松田順一郎氏（史跡鴻池新田会所管理事務所）には玉稿を賜った。その他、自然科学分析・遺物の保存処理を実施し、その受託機関による成果報告を掲載した。

６．発掘調査及び整理作業においては、周辺在住の方々や津市教育委員会にご協力いただいた。特に以下の方には様々なご教示をいただいた。（敬称略、所属は当時。順不同）
津村義博（三重県立博物館）、松田順一郎（史跡鴻池新田会所管理事務所）、山田昌久（首都大学東京）、中村光司（津市教育委員会）、辻康男

７．本書に関連した調査成果については、『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報21』（三重県埋蔵文化財センター　2009年）・『同　22』（同　2010年）・『同　23』（同　2011年）・『同　24』（同　2012年）、『中勢道路調査ニュース』№51（三重県埋蔵文化財センター　2008年）・『同』№52（同　2009年）・『同』№53（同　2010年）・『同』№54（同　2010年）・『同』№55（同　2011年）・『同』№57（同　2011年）等で随時報告してきたが、本報告書をもって正式報告とする。

８．本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

凡　例

<地図類>

１．本書で使用した地図類は、国土地理院発行1/25,000地形図、津市地形図及び都市計画基本図1/2,500（津市都市計画情報提供サービス　http://www.info.city.tsu.mie.jp/tokeijoho/index.html）である。
２．挿図の方位は全て座標北で示している。磁針方位は西偏６度50分、真北方位は座標北の東偏０度17分（平成21年度）である。
３．本書で用いた座標値は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海抜高である。

〈遺構類〉

1．土層図は層の区分は実線で、実際に掘り下げた部分を一点鎖線で表現している。また、遺構に関わる土層の中で、本来は更に続くが側溝等で切られている場合、その壁は破線で表現している。その他、土層図遺構面や遺構のライン、層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。
2．遺構平面図で、調査に関わる畔や側溝により不明であるが想定される遺構のラインは破線で表現している。また、オーバーハングがある場合、そのラインについても破線で表現している。
3．土層図の色調は基本的に、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版）に準拠した。しかし、記録類がない場合は掲載していない。
4．当報告書での遺構番号は、下記のように100の位の数字を変えて、それぞれ通番としている。
　　第１次：番号なし　第２次：１～　第３次：301～　第４次：601～
5．遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、見通し図となっている。
6．遺構番号の頭には、遺構の種別を示す以下の記号と、通番の数字の組合せにより表記している。
　　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑　ＳＺ：不明遺構　pit：ピット・柱穴
7．遺物出土状況図の遺物に付された数字は遺物報告番号を示す。
8．土坑は「土壙」とも表記されるが、当報告では土坑で統一する。しかし、他から引用する場合は引用文献の表記に従う。

〈遺物類〉

1．遺物番号は、調査年次・遺物の種別に関わらず、通し番号で付与した。
2．遺物実測図類は実物の1/4を基本とし、それ以外の縮尺のものについてはその都度表記している。
3．出土遺物は基本的に番号順に配置したが、レイアウトや整理上の都合等で若干前後した部分がある。
4．本書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。
5．遺物観察表は、全ての遺物を合わせて、以下の要領により作成している。
　報告番号・・・・挿図掲載番号である。
　実測番号・・・・実測段階の登録番号である。
　種類・・・・・・遺物の大分類を示す。弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、石器、木製品等。
　器種等・・・・・種類を細分した器種・器形等を示す。
　グリッド・・・・調査時に設定した地区名を示す。
　出土遺構・・・・出土した遺構を記した。No.を付した土器等は取り上げ時の区分番号である。
　法量・・・・・・遺物の法量を示す。口径は口縁部径、器高は遺物の高さ、底部径を示す。
　調整技法の特徴・遺物観察時に確認した主な調整技法を記した。外は外面、内は内面を示す。
　胎土・・・・・・小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
　焼成・・・・・・焼成時の状態を「良～不良」で区別した。
　色調・・・・・・その遺物の代表となる色調を記載した。但し、大きく色調が異なるものは部位も表記している。外は外面、内は内面を示す。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。
　残存・・・・・・残存度を主な部位を示した上で分数表記した。但し、部位が表記していないものは全体からみた残存度を分数で表記し、残存がわずかなものは小片、全体が残っているものは完存と記した。
　備考・・・・・・遺物の特徴となる事項を記した。また、『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報22～24』で掲載された際の挿図番号を概報番号として記した。
6．本書では、遺構・出土土器の年代については、全体を通じて以下の文献を参考にした。
　赤塚次郎「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 2001年
　川崎志乃「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター　2001年
　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年
　泉雄二「第四章　斎宮跡の土器」『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ　内院地区の調査　本文編』斎宮歴史博物館　2001年
　『古代の土器１　都城の土器集成』1992年、『古代の土器２　都城の土器集成Ⅱ』1993年、『古代の土器３　都城の土器集成Ⅲ』1994年　いずれも古代の土器研究会編
　藤澤良祐「瀬戸地方の北部系山茶碗窯」『尾呂』瀬戸市教育委員会　1990年

〈挿図・写真〉

1．挿図と写真図版の遺構・遺物番号は、報告番号と対応している。
2．遺物の写真は、すべて縮尺不同である。

本　文　目　次

Ⅰ　前言 ……（山中） 1
　1　調査の契機 …… 1
　2　調査の体制 …… 1
　3　調査の経過 …… 3
　4　調査の方法 …… 7
　5　整理・保管の方法 …… 8
　6　文化財保護法等にかかる諸通知 …… 8
Ⅱ　位置と環境 ……（山中） 9
　1　地理的環境 …… 9
　2　歴史的環境 …… 9
Ⅲ　基本層序 ……（山中） 14
Ⅳ　調査の成果－遺構－ ……（山中） 26
　1　第２次調査区 …… 26
　2　第３次調査区 …… 59
　3　第４次調査区 …… 63
Ⅴ　調査の成果－出土遺物－ ……（山中） 120
　1　縄文時代、弥生時代後期～古墳時代初頭 …… 120
　2　古墳時代後期以降 …… 124
Ⅵ　自然科学分析 …… 138
　1　自然科学分析の目的 ……（山中） 138
　2　第２次調査区検出土坑に関する自然科学分析
　　……（パリノ・サーヴェイ株式会社　田中・松元・斎藤） 138
　3　第２次調査出土籠製品および出土木材、手焙形土器底部の植物遺体について
　　……（パリノ・サーヴェイ株式会社　高橋・田中） 142
　4　胎土分析および古環境復元について
　　……（パリノ・サーヴェイ株式会社　矢作・石岡） 145
　5　出土木製品の樹種調査結果 ……（株式会社吉田生物研究所） 169
Ⅶ　相川西方遺跡の地質条件とその地形発達 ……（松田） 170
　はじめに …… 170
　1　遺跡周辺の地質と地形 …… 170
　2　第２次調査地で採取された不撹乱試料 …… 176
　3　発掘調査範囲の層序対比 …… 180
　まとめ …… 181
Ⅷ　調査のまとめ ……（山中） 183
　1　密集土坑の類例 …… 183
　2　相川西方遺跡の事例について …… 185
　3　粘土採掘活動の復元 …… 192
　4　相川西方遺跡産粘土の土器 …… 193
　5　総括 …… 199

挿　図　目　次

第１図　中勢道路（11～14工区）内遺跡位置図 …… 2
第２図　第１次調査トレンチ位置図 …… 4
第３図　調査区位置図 …… 6
第４図　周辺遺跡位置図 …… 11
第５図　調査区名と土層断面位置図 …… 16
第６図　第３次調査区Ⅰ地区北壁土層断面図 …… 17
第７図　第２次調査区北壁土層断面図 …… 18
第８図　第3次調査区Ⅰ地区南北方向、第2次・第3次調査区Ⅰ地区東西方向土層断面図 …… 19
第９図　第3次調査区Ⅱ地区、第4次調査区Ⅰ地区東西方向土層断面図 …… 20
第10図　第3次調査区Ⅱ地区、第4次調査区Ⅰ・Ⅱ地区南壁土層断面図 …… 21
第11図　第2次、第4次調査区深掘トレンチ土層断面図・柱状図 …… 25
第12図　遺構平面略図１ …… 27
第13図　遺構平面略図２ …… 28
第14図　遺構全体図１ …… 29・30
第15図　遺構平面略図３ …… 31
第16図　ＳＫ１・３・５・６・７遺構図 …… 33
第17図　ＳＫ13・14・16～19遺構図 …… 34
第18図　遺構全体図２ …… 35・36
第19図　ＳＫ20・23～25・27・29遺構図 …… 37
第20図　ＳＫ28・32・36～38遺構図 …… 38
第21図　ＳＫ35・45遺構図 …… 39
第22図　ＳＫ40～42・46・48～50遺構図 …… 40
第23図　ＳＫ47遺構図 …… 41
第24図　ＳＫ51～54・56遺構図 …… 42
第25図　ＳＫ55・57遺構図 …… 43
第26図　ＳＫ58～61遺構図 …… 44
第27図　ＳＫ62・63・65・66・68・69遺構図 …… 45
第28図　ＳＫ67遺構図 …… 46
第29図　ＳＫ70・71・73遺構図 …… 47
第30図　ＳＫ72・74～76・79遺構図 …… 48
第31図　ＳＫ78土層断面図 …… 49
第32図　ＳＫ77・83遺構図 …… 50
第33図　ＳＫ84～87・89・90遺構図 …… 51
第34図　ＳＫ91・94・103・104遺構図 …… 52
第35図　ＳＫ106・109～111・115遺構図 …… 53
第36図　ＳＫ107遺構図 …… 54
第37図　ＳＫ116・120遺構図 …… 55
第38図　ＳＫ118・122・127・128・133遺構図 …… 56
第39図　ＳＫ130～132遺構図 …… 57
第40図　ＳＤ39遺構図 …… 58
第41図　ＳＫ301・311・318・330・336遺構図 …… 61
第42図　ＳＫ310・322遺構図 …… 62
第43図　ＳＫ328土層断面図 …… 63
第44図　ＳＫ344～346・350・352遺構図 …… 64
第45図　ＳＫ353・356・360・366・368・374遺構図 …… 65
第46図　ＳＫ370・373遺構図、ＳＫ363・372・397土層断面図 …… 66
第47図　ＳＫ377・379遺構図 …… 67
第48図　ＳＫ380～382・384遺構図 …… 68
第49図　ＳＫ386・387・389～391・393遺構図 …… 69
第50図　ＳＫ394～396・398・400・403遺構図 …… 70
第51図　ＳＫ401・404・405遺構図 …… 71
第52図　ＳＫ406・408・409遺構図 …… 72
第53図　ＳＫ411～413・417遺構図 …… 73
第54図　ＳＫ415・416・419・420遺構図 …… 74
第55図　ＳＫ421・423・425・427・429遺構図 …… 75
第56図　ＳＫ426・428・430・431遺構図 …… 76
第57図　ＳＫ432～435・440・441遺構図 …… 77
第58図　ＳＫ436・437遺構図 …… 78
第59図　ＳＫ436～439・442・443・451遺構図 …… 79
第60図　ＳＫ444～448・450・456遺構図 …… 80
第61図　ＳＫ457～461・463遺構図 …… 81
第62図　ＳＫ462・464・465・468・471遺構図 …… 82
第63図　ＳＫ467・469・470・473～475遺構図 …… 83
第64図　ＳＫ472・479・480遺構図 …… 84
第65図　ＳＫ476～478遺構図 …… 85
第66図　ＳＫ482・484・486・487遺構図 …… 86
第67図　ＳＫ489・492～494・496・500遺構図 …… 87
第68図　ＳＫ495・497・499遺構図 …… 88
第69図　ＳＫ501～504遺構図 …… 89
第70図　ＳＫ505～507・510・526～528遺構図 …… 90
第71図　ＳＫ508・511～513・515遺構図 …… 91
第72図　ＳＫ517・518・520・559遺構図 …… 92
第73図　ＳＫ520遺構図 …… 93
第74図　ＳＫ521・522・524遺構図 …… 94
第75図　ＳＫ523・525・529・531・534・535遺構図 …… 95
第76図　ＳＫ533・536・537・539遺構図 …… 96
第77図　ＳＫ538・540・542～544・547遺構図 …… 97
第78図　ＳＫ546・548・549遺構図 …… 98

第79図　ＳＫ541・549・550・553遺構図 …… 99
第80図　ＳＫ509・551・555土層断面図 …… 100
第81図　ＳＫ556～558・610遺構図 …… 101
第82図　ＳＫ618・629・630・633・638・642遺構図 …… 102
第83図　ＳＫ644・647・652・654・655・657遺構図 …… 103
第84図　ＳＫ658・663・664・668・673・680遺構図 …… 104
第85図　ＳＫ685・686・692～694・701遺構図 …… 105
第86図　ＳＫ705～707・710・720・721遺構図 …… 106
第87図　ＳＫ722・724・725・730遺構図 …… 107
第88図　オーバーハング詳細図１ …… 108
第89図　オーバーハング詳細図２ …… 109
第90図　第２次調査区出土遺物実測図１ …… 125
第91図　第２次調査区出土遺物実測図２ …… 126
第92図　第１・２次調査区出土遺物実測図 …… 127
第93図　第３次調査区出土遺物実測図１ …… 128
第94図　第３次調査区出土遺物実測図２ …… 129
第95図　第３次調査区出土遺物実測図３ …… 130
第96図　第４次調査区出土遺物実測図１ …… 131
第97図　第４次調査区出土遺物実測図２ …… 132
第98図　第１・２・３・４次調査区出土遺物実測図 …… 133
第99図　第４次調査区出土遺物実測図 …… 134
第100図　ＳＫ47リン酸・カルシウム分析試料採取位置 …… 138
第101図　堆積物分析試料の層序と分析層序の採取位置 …… 147
第102図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その１）…… 154
第103図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その２）…… 155
第104図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その３）…… 156
第105図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その４）…… 157
第106図　砕屑物・基質・孔隙の割合 …… 158
第107図　胎土中の砂の粒径組成散布図 …… 159
第108図　堆積物試料における重鉱物組成および火山ガラス比 …… 161
第109図　火山ガラスの屈折率 …… 162
第110図　堆積物分析試料における花粉化石群集 …… 163
第111図　伊勢平野周辺の地質図 …… 165
第112図　鈴鹿市内分布遺跡出土土器胎土中の砂の粒径組成散布図 …… 167
第113図　久居台地、高塚丘陵とその周辺の地形分類図 …… 170
第114図　相川の谷口より上流側主要区間とその周辺の
　　デジタル標高モデル …… 175
第115図　第2次調査地で採取された不撹乱試料とその堆積・土壌構造 …… 177
第116図　粘土採掘坑検出面以下の層序を示す柱状断面図 …… 178
第117図　久居台地と相川谷の地形変遷 …… 181
第118図　相川西方遺跡遺構変遷図１ …… 188
第119図　相川西方遺跡遺構変遷図２ …… 189
第120図　褐灰色粘土と遺構との関係 …… 190
第121図　胎土分析試料出土遺跡位置図 …… 195
第122図　阿形遺跡　胎土分析試料 …… 195

表　目　次

第１表　中勢道路（11～14工区）内遺跡発掘調査経過一覧 …… 3
第２表　基本層序一覧 …… 15
第３表　第６図第３次調査区Ⅰ地区北壁土層断面注記 …… 22
第４表　第７図第２次調査区北壁土層断面注記 …… 22
第５表　第８図第３次調査区Ⅰ地区南北方向、
　　第２次・第３次調査区Ⅰ地区東西方向土層断面注記
　　…… 23
第６表　第９図第３次調査区Ⅱ地区、
　　第４次調査区Ⅰ地区東西方向土層断面注記
　　…… 23
第７表　第10図第３次調査区Ⅱ地区、
　　第４次調査区Ⅰ・Ⅱ地区南壁土層断面注記
　　…… 24
第８表　遺構一覧表１ …… 110
第９表　遺構一覧表２ …… 111
第10表　遺構一覧表３ …… 112
第11表　遺構一覧表４ …… 113
第12表　遺構一覧表５ …… 114
第13表　遺構一覧表６ …… 115
第14表　遺構一覧表７ …… 116
第15表　遺構一覧表８ …… 117
第16表　遺構一覧表９ …… 118
第17表　遺構一覧表10 …… 119
第18表　遺物観察表１ …… 135
第19表　遺物観察表２ …… 136
第20表　遺物観察表３ …… 137
第21表　リン酸・カルシウム分析結果 …… 139
第22表　種実分析結果 …… 140
第23表　樹種同定結果 …… 142
第24表　脂質分析結果 …… 144

第25表　分析試料一覧 …… 146
第26表　薄片観察結果１ …… 150
第27表　薄片観察結果２ …… 151
第28表　薄片観察結果３ …… 152
第29表　薄片観察結果４ …… 153
第30表　放射性炭素年代測定結果 …… 160
第31表　暦年較正結果 …… 160
第32表　重鉱物・火山ガラス比分析結果 …… 160
第33表　花粉分析結果 …… 162
第34表　出土木製品樹種同定表 …… 169
第35表　焼成実験テストピースの法量変化 …… 191
第36表　相川西方遺跡周辺の住居を検出した遺跡 …… 197

写　真　図　版　目　次

巻頭１　相川西方遺跡から伊勢湾方向を望む
巻頭２　第３次調査区Ⅰ地区表土掘削状況・
　　下層確認　２トレンチ
巻頭３　ＳＫ395・464・465・501・536・544・667・700
巻頭４　ＳＫ486　土器出土状況
　　半截状態の土器
図版１　第３次調査区Ⅱ地区と松阪方面の山並みを望む …… 201
　　第３次調査区Ⅱ地区と青山高原を望む
図版２　第４次調査区Ⅰ地区 …… 202
　　相川西方遺跡と半田丘陵を望む
図版３　第２次調査区調査前風景 …… 203
　　第２次調査区
図版４　第３次調査区Ⅱ地区調査前風景 …… 204
　　第３次調査区Ⅰ地区
図版５　第３次調査区Ⅱ地区 …… 205
　　第４次調査区Ⅰ地区
図版６　第４次調査区Ⅱ地区 …… 206
　　ＳＫ17土層
　　ＳＫ19土層
　　ＳＫ１遺物出土状況
図版７　ＳＫ20遺物出土状況 …… 207
　　ＳＫ23遺物出土状況
図版８　ＳＫ28遺物出土状況 …… 208
　　ＳＫ28遺物出土状況拡大
　　ＳＫ36土層
　　ＳＫ32土層
　　ＳＫ32土層　東側オーバーハング部分
図版９　ＳＫ74遺物出土状況 …… 209
　　ＳＫ74遺物出土状況拡大
　　ＳＫ47土層
　　ＳＫ61土層
　　ＳＫ107土層
図版10　ＳＫ83土層・遺物出土状況 …… 210
　　ＳＫ94遺物出土状況
図版11　ＳＫ91遺物出土状況 …… 211
　　ＳＫ91遺物出土状況拡大
　　ＳＫ122土層
　　ＳＫ123土層
　　ＳＫ131土層
図版12　ＳＫ100土層・遺物出土状況 …… 212
　　ＳＫ100遺物出土状況拡大
　　ＳＫ133土層
　　ＳＫ322遺物出土状況
　　ＳＫ387土層
図版13　ＳＫ132土層・遺物出土状況 …… 213
　　ＳＫ132土層　南側オーバーハング部分
　　ＳＫ391土層
　　ＳＫ404土層
　　ＳＫ412土層
図版14　ＳＫ311土層・遺物出土状況 …… 214
　　ＳＫ319土層・遺物出土状況
図版15　ＳＫ344土層・遺物出土状況 …… 215
　　ＳＫ384遺物出土状況

図版16　ＳＫ382遺物出土状況 …… 216
ＳＫ382土層
ＳＫ415土層
ＳＫ430土層
ＳＫ433土層
図版17　ＳＫ435土層・遺物出土状況 …… 217
ＳＫ436土層・遺物出土状況
図版18　ＳＫ434土層 …… 218
ＳＫ443土層
ＳＫ448土層
ＳＫ460土層
ＳＫ458遺物出土状況
図版19　ＳＫ463土層 …… 219
ＳＤ466土層
ＳＫ471土層
ＳＫ475土層
ＳＫ480土層
ＳＫ484土層
ＳＫ492土層
ＳＫ500土層
図版20　ＳＫ505遺物出土状況 …… 220
ＳＫ505土層
ＳＫ506土層
ＳＫ510土層
ＳＫ512土層
図版21　ＳＫ520遺物出土状況 …… 221
ＳＫ529土層・遺物出土状況
図版22　ＳＫ534遺物出土状況 …… 222
ＳＫ534土層
ＳＫ535土層
ＳＫ537土層
ＳＫ538土層
図版23　ＳＫ539木片出土状況 …… 223
ＳＫ547遺物出土状況
図版24　ＳＫ558土層 …… 224
ＳＫ680土層
ＳＫ693土層
ＳＫ701土層
ＳＫ610土層・遺物出土状況
図版25　ＳＫ633土層・遺物出土状況 …… 225
ＳＫ638土層・遺物出土状況
図版26　ＳＫ652土層・遺物出土状況 …… 226
ＳＫ664土層・遺物出土状況
図版27　ＳＫ706土層・遺物出土状況 …… 227
ＳＫ720土層・遺物出土状況
図版28　ＳＫ722遺物出土状況 …… 228
ＳＫ722土層
ＳＫ710土層
ＳＫ725土層
ＳＫ727土層
図版29　出土遺物１ …… 229
図版30　出土遺物２ …… 230
図版31　出土遺物３ …… 231
図版32　出土遺物４ …… 232
図版33　出土遺物５ …… 233
図版34　出土遺物６ …… 234
図版35　出土遺物７ …… 235
図版36　出土遺物８ …… 236
図版37　出土遺物９ …… 237
図版38　出土遺物10 …… 238
図版39　出土遺物11 …… 239
図版40　出土遺物12 …… 240
図版41　出土遺物13 …… 241
図版42　出土遺物14 …… 242
図版43　種実遺体 …… 243
図版44　木材・植物遺体顕微鏡写真 …… 244
図版45　樹種顕微鏡写真 …… 245
図版46　胎土分析試料１ …… 246
図版47　胎土分析試料２ …… 247
図版48　胎土分析試料３ …… 248
図版49　胎土薄片顕微鏡写真１ …… 249
図版50　胎土薄片顕微鏡写真２ …… 250
図版51　胎土薄片顕微鏡写真３ …… 251
図版52　胎土薄片顕微鏡写真４ …… 252
図版53　胎土薄片顕微鏡写真５ …… 253
図版54　重鉱物・火山ガラス顕微鏡写真 …… 254
図版55　花粉化石顕微鏡写真 …… 255

Ⅰ　前　言

1　調査の契機

中勢道路は、三重県中勢地域の道路網を充実させるとともに、交通緩和と周辺の適切な土地利用を図り、地域の経済発展に寄与するため、昭和58年４月、一般国道23号のバイパスとして、鈴鹿市玉垣町から松阪市小津町までの延長33.8kmが都市計画道路として決定された。

この計画地内の埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和58年度に三重県教育委員会が行った分布調査の結果をもとに、建設省中部地方建設局（当時）と三重県教育委員会が協議を行った。そして、現状保存が困難な場合には事前に発掘調査を実施して、記録保存を図ることとなった。

事業の実施にあたっては、昭和63年度から平成17年度までは、国土交通省中部地方整備局（平成12年までは建設省中部地方建設局）・三重県・社団法人中部建設協会の三者で協定書を締結し、進めてきたが、平成18年度以降は、現地作業を含めた委託契約書を国土交通省中部地方整備局と三重県で締結し、事業を推進している。

2　調査の体制

中勢道路建設事業に伴う発掘調査は、三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センター調査研究２課（平成23年度までは調査研究Ⅱ課）が担当している。本書で報告する相川西方遺跡の調査・整理年度の体制は以下のとおりである。

〔平成20年度〕調査研究Ⅱ課

課　　長	田村陽一
中勢道路担当	
主　　幹	上村安生
主　　査	薗部英幸
主　　事	淺尾　太・前野謙一
技　　師	原田恵理子・水橋公恵・野嶌美沙子
臨時技術補助員	才木　薫
業務補助職員	黒川敬子・太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・山口香代・西山実公子・中西千鶴・浜崎佳代・中村敬子・小倉靖子

〔平成21年度〕調査研究Ⅱ課

課　　長	田村陽一
中勢道路担当	
主　　査	松葉和也・薗部英幸
主　　事	淺尾　太・西口剛司
技　　師	水橋公恵・野嶌美沙子
業務補助職員	黒川敬子・太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・平井治代・山口香代

〔平成22年度〕調査研究Ⅱ課

課　　長	田村陽一
中勢道路担当	
主　　査	松葉和也・森田啓司・淺尾　太・西口剛司
主　　事	星野浩行
技　　師	水橋公恵
業務補助職員	黒川敬子・太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・平井治代・山口香代

〔平成23年度〕調査研究Ⅱ課

課　　長	田村陽一
中勢道路担当	
主　　幹	竹内和昭
主　　査	松葉和也・西口剛司・星野浩行・水橋公恵
業務補助職員	黒川敬子・太田浩子・森川絹代・北岡佳代子・平井治代・山口香代

〔平成24年度〕調査研究２課

課　　長	田中久生
主　　幹	竹内和昭
主　　査	岩脇成人・山中由紀子
業務補助職員	黒川敬子・太田浩子・

第１図　中勢道路（11～14工区）内遺跡位置図（１：50,000）（国土地理院１：25,000『津西部』『津東部』『松阪港』『大仰』から）

第１表　中勢道路（11～14工区）内遺跡発掘調査経過一覧

工区		遺　跡　名	所在地	対象面積（㎡）	調査面積（㎡）	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23
11工区	45	鳥羽見城跡	津市神戸	4,400	410													410	
	46	上はんの木古墳	津市神戸	1,600	190													190	
	47	藤谷窯跡群	津市半田	—	—	昭和50年　発掘調査(津市教育委員会)													
小　計				6,000	600	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	600	0
					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12工区	48	相川西方遺跡	津市久居相川町	18,000	1,940											1,000		940	
					8,742												3,472	3,000	2,270
	49	丸地遺跡	津市垂水	7,100	560												560		
					0														
	50	城ノ越遺跡	津市久居小野辺町	16,300	1,430												240	1,070	120
					0														
	51	東山神遺跡	津市久居小野辺町	13,300	1,210													1,030	180
					0														
	52	本宮遺跡	津市久居野村町	11,300	1,600												1,200	400	
					2,850														2,850
小　計				66,000	6,740	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,000	2,000	3,440	300
					11,592	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,472	3,000	5,120
13工区	53	向山遺跡	津市高茶屋小森町	28,000	1,780								1,380	400					
					2,393										2,393				
	54	池新田遺跡	津市木造町	16,300	554							554							
					1,961										1,961				
	55	木造赤坂遺跡 旧：赤坂遺跡	津市木造町	17,500	1,192							1,192							
					24,370								6,570	11,500	6,300				
	56	井手ノ上遺跡	津市木造町	12,500	800							800							
					370									370					
	57	舞出北遺跡 旧：舞出遺跡	松阪市舞出町	9,600	960	810		150											
					11,170		4,090	3,380				3,700							
	58	舞出南遺跡 旧：松垣内遺跡	松阪市舞出町	16,300	1,200	1,200													
					0														
	59	赤部遺跡 旧：新屋庄遺跡	松阪市嬉野新屋庄町	16,800	1,190			1,190											
					16,820						6,300	7,000	3,520						
	60	筋違遺跡	松阪市嬉野新屋庄町	37,000	3,680			1,640				2,040							
					13,280				2,900				10,380						
小　計				154,000	11,356	2,010	0	2,980	0	0	0	4,586	1,380	400	0	0	0	0	0
					70,364	0	4,090	3,380	2,900	0	6,300	10,700	20,470	11,870	10,654	0	0	0	0
14工区	60	筋違遺跡	松阪市嬉野新屋庄町	—	770			770											
					5,410				5,410										
	61	柏木遺跡	松阪市嬉野川北町	31,000	1,470			1,470											
					2,990					540	2,450								
	62	横堤遺跡	松阪市嬉野津屋城町	21,500	1,140			1,140											
					0														
	63	中林・中道遺跡 旧：狭間遺跡	松阪市中道町	18,600	1,010			1,010											
					8,470				1,040	5,240	2,190								
	64	小津遺跡 旧：東浦遺跡	松阪市小津町	23,000	1,424			1,190		84	150								
					11,220				280	3,780	7,160								
小　計				94,100	5,814	0	0	5,580	0	84	150	0	0	0	0	0	0	0	0
					28,090	0	0	0	6,730	9,560	11,800	0	0	0	0	0	0	0	0

※ 調査面積の上段は第１次調査、下段は第２次以降の調査　　アミカケは、松阪市（嬉野町）教育委員会による調査

森川絹代・北岡佳代子・
山口香代

〔平成25年度〕調査研究２課

課　　長　　田中久生
主幹(課長代理)　　穂積裕昌
主　　査　　岩脇成人・山中由紀子
業務補助職員　　黒川敬子・太田浩子・
森川絹代・北岡佳代子・
山口香代

3　調査の経過

昭和58年から始まった中勢道路建設に伴う埋蔵文化財の保護協議では、相川西方遺跡は周知の遺跡として登録されていたため協議対象となっていた。

現地調査は、平成20年度から23年度に行い、その順に調査次数を与えている。

平成20年度は第１次調査（平成20年10月15日～同年12月15日）とし、幅２ｍを基本としたトレンチ状の調査区16か所（Ａ～Ｐ区）を設定した。そのうち、南東側の９か所で土坑や溝状の遺構を確認し、土師器や須恵器などが出土した。

この結果を受け、3,472㎡を対象範囲として平成21年度に第２次調査（平成21年５月11日～同年12月21日）を行った。

平成22年度の第１次調査（平成22年４月30日～同年６月28日）では、幅２ｍを基本としたトレンチ状の調査区17か所（１～17区）を設定した。東側段丘部分の７か所（１～７区）では遺構・遺物は確認されなかったが、段丘下北西側の浅い谷部の11か所（８～17区）で土坑や溝状の遺構を確認し、壺・甕などの弥生土器、山茶椀などが出土した。

この結果を受け、遺構・遺物の見られた段丘下を調査範囲とし、まず同年度に3,000㎡を対象として第３次調査（平成22年７月29日～平成23年１月31日）を、翌23年度に残りの2,270㎡を対象として第４次調査（平成23年５月17日～同年11月25日）を行った。

最終調査面積は10,682㎡で、土師器・木製品・石製品等コンテナケース42箱分の遺物が出土した。

〔調査日誌（抄）〕

調査地は高所から流れ込む水が多く、検出面が粘質土であるという状況が重なって、雨の後には調査区が水没し排水後もぬかるむなど水に悩まされた調査となった。特に第２次・第４次調査では台風の影響を受け、幾度となく水没した。また、前述のように検出面は水がついた後はドロドロであるが、反対に乾燥すれば硬く締まりひび割れ、精査・掘削は困難を極めた。調査の経過は以下のとおりである。

（第１次調査【平成20年度】）

平成20年11月４日　調査前写真撮影後Ａ区から開始。遺構・遺物とも確認できず、念のため深掘り。

11月６日　Ｄ区、耕作土より土器１点が出土するも遺構なし。

11月11日　Ｇ区、平面で溝と思われる遺構１条確認。土坑複数確認。遺物はなし。

11月20日　Ｋ区東端の土坑から土師器台付甕台部。

第２図　第１次（平成20・22年度）調査トレンチ位置図（１：5,000）（『津市地形図及び都市計画基本図』（１：2,500）から）

11月26日　現地調査完了。埋戻し開始（～12月３日）。

（第２次調査）

平成21年５月27日　調査前写真撮影。

６月１日　機械掘削開始（～10日）。多数の遺構（土坑か）が見られる。

６月９日　埴輪１点出土。

６月16日　作業員による作業開始。

６月18日　ＳＫ10等底面から植物繊維出土。繊維の下に白い砂が敷かれる。

６月19日　ＳＫ15平面が検出時よりも倍に広がる。多数の遺構が下層でオーバーハング。

６月26日　ＳＫ24土層図作成、第３層が地山と類似。ＳＫ23、藁のような植物繊維の中から土器が出土。

６月29日　ＳＫ28、手焙形土器とその周辺に籠が出土。

７月14日　暑い。ＳＫ47半截、土層図作成・写真撮影。その後残りを掘削中にまた籠が出土。ＳＫ49からも藁もしくは籠の残骸と思われる繊維が出土。

８月３日　記録的な遅さで本日梅雨明け。土日の降雨で朝から排水、精査・遺構掘削が難航。

８月７日　掘削作業中止。首都大学東京・山田昌久氏による調査指導。ＳＫ47籠取り上げ。

９月１日　粘土部分の遺構は深いものでも黒い層に届く程度。採掘の狙いは褐灰色粘土か。

10月６～８日　降雨のため休工。８日台風18号知多半島上陸、過去10年間で最大の台風。調査区は完全水没し、一部オーバーフロー。調査区北壁崩落（～14日休工）。

10月15日　津市立南が丘小学校見学（20名＋引率１名）。

11月４日　12時より航測実施。

11月５日　午前、個別遺構写真撮影。

11月９日　津市政記者クラブにて資料提供。

11月14日　現場プレハブ内で現地説明会。56名来場。９時頃雨が上がる。希望者のみ現場見学としたが、ほぼ全員が見学。

11月26日　下層確認調査（～27日）。重機２台で３か所のトレンチ掘削。１トレンチの木は加工痕がなく自然木と判断、埋め戻す。

11月27日　現地調査終了。

11月30日　埋戻し開始（～12月８日）。

（第１次調査【平成22年度】）

平成22年５月18日　作業開始。

５月27日　８区掘削。土師器小片が土坑状遺構から出土。

６月１日　12区掘削。白黒混じり層から弥生土器出土。上層客土から山茶椀出土。

６月８日　掘削完了、埋戻し開始（～14日）。

（第３次調査）

８月18日　調査前写真撮影。

８月23日　Ⅰ地区掘削開始（～24日）

８月25日　Ⅱ地区表土掘削開始（～９月２日）。

８月30日　作業員による作業開始。

９月７日　ＳＫ316高杯脚出土。ＳＫ311土師器甕出土。いずれも弥生後期～古墳初めか。

９月10日　ＳＫ310台付甕、底に正立し出土。ＳＫ322土師器片、オーバーハング部際で出土。いくつかの遺構で１～数点の自然石が埋土に混じる。埋土は粘土であり不自然。

９月17日　Ⅰ地区掘削・清掃完了。Ⅱ地区、ＳＫ344のみ埋土が特異。遺物も弥生末～古墳初頭のものとは異なり、別時期の遺構か。

９月21日　Ⅰ地区全景写真撮影。土坑の調査方法を、略測図作成後半截して土層確認、２層以上の場合は土層図・写真撮影実施、単層の場合は写真撮影のみとする。オーバーハング部分の図化表現についても決める。

９月22日　Ⅰ地区実測開始（～27日）。

第３次調査現地説明会

第３図　調査区位置図（１：5,000）（『津市地形図及び都市計画基本図』（１：2,500）から）

11月８日　ＢＥ～ＢＨ12～14付近の地山の堆積がこれまでとは異なる。
11月18日　ＢＲ14・ＳＫ520より長胴甕が出土。
12月16日　午前航測、午後個別写真撮影、測量。
12月18日　現地説明会。約180名の参加を得る。
平成23年１月25日　埋戻し完了。
（第４次調査）
平成23年６月14日　Ⅱ地区表土掘削開始（～22日）。
６月27日　暑さのため扇風機を設置。精査開始。
６月28日　猛暑。遺構は比較的浅い。ＳＫ609・614・615には植物根状のものが多く見られた。
６月29日　気温35℃。ＳＫ610より土器片・杭状木製品が同じレベルで出土。
６月30日　猛暑日35℃超え。遺構掘削完了、清掃と同時進行でＳＫ610出土状況写真撮影。取り上げ、ＣＤ５の木製品は加工されているようだ。ＳＫ610も土器周辺を中心に植物根が多く見られた。午後、全景写真撮影、遺構実測着手（～７月４日）。
７月４日　Ⅰ地区表土掘削（～29日）。
７月12日　Ⅱ地区埋戻し開始（～15日）。
７月19日　台風６号接近のため嵐、休工（～22日）。
７月26日　表土掘削続き。検出面より上方で長胴甕２個体出土、上層遺構があるのか。
７月27日　昨日と同様長胴甕２点出土。
８月１日　涼しい、嬉しい！　ベルコン設置。
８月３日　精査開始。検出面が粘土のため作業に困難を極めるが、複数遺構を確認。
８月４日　ＳＫ620には木片が多数みられる。ＢＹ６付近の側溝にいくつかの小杭状のものがある。ＣＡ・ＣＢ辺りの検出面に南北方向の黒い粘土層が溝状に見えるが、旧河道なら小杭があってもよいか。暑いためか、精査のペースが落ちる。
８月10日　猛暑。ＳＫ629、木製品らしきもの出土。加工痕？あり。
８月31日　台風12号接近、台風対策等を行う。
９月１日　台風接近のため休工（～６日）。
９月５日　台風12号では、紀伊半島中心に豪雨の被害が甚大であった。調査区水没。調査区西壁・北西隅壁が約20ｍに渡り崩れる。
９月７日　崩れた調査区壁の復旧。
９月15日　午後、津市立香海中学校２年生３人見学。
９月20日　台風15号接近のため大雨、台風対策。
９月21日　暴風警報発令、休工。
９月22日　調査区水没。この調査で３回目。前回土留めを行った壁面の隣が崩れたか。
９月26日　台風後の環境整備。ぬかるみで調査不可。
９月29日　引き続き遺構掘削。攪乱多くドロドロ。
９月30日　遺構掘削完了!!
10月13日　航空測量。個別遺構写真撮影。
10月20日　午後、津市立南が丘小学校５・６年生「地域学習」現場見学（30名＋引率３名）。
10月22日　10時30分～15時、地元対象の現地説明会開催。16名参加。
10月24日　10時～18時、松田順一郎氏現地指導。埋戻し開始（～30日）。

４　調査の方法

本調査は以下の手順で進めた。

① 表土及び包含層を重機により除去した。次いで、排水対策用のトレンチを第２次調査では北・東壁に沿って人力で掘削した。しかし、山側からの流水が激しく、調査区内の水はけも非常に悪かったため、調査区が幾度となく水没し、水が抜けるのに２～３日かかった。それを受け、第３次・第４次調査では、バイパス路線内の山側調査区外に小型重機で水路を設け、調査区への流水を防ぐとともに、調査区の壁面全周にわたり人力でトレンチを掘削した。その結果、山側からの流水はほぼ改善され、雨後の排水時間も短縮された。

② 第１次調査以外の調査では、遺構・遺物の位置情報の基準となる地区杭を設定した。設定方法は、調査区全体を中勢道路のセンター杭を基準として100ｍ四方の方眼で区切り大地区とし、その中を４ｍ四方の小地区（グリッド）に細分した。大地区は、北西からＡ～Ｃ地区とし、小地区は東西方向にローマ字（Ａ～Ｙ）、南北方向に算用数字（１～25）を当て、それらの組み合わせにより、個別のグリッド名称（例：ＡＥ16など）とした。なお、中勢道路のセンター

杭は、南北方向である11グリッドと12グリッドで挟むようにしている。そのため、地区杭は世界測地系を基準とする座標には基づいていない。

また、調査区が分断されている第３次・第４次調査区については、第３次調査区をⅠ地区・Ⅱ地区、第４次調査区をⅠ地区・Ⅱ地区に分けて調査を行った。

③ 包含層掘削および遺構検出を人力で行ない、検出された遺構についての重複状況・埋土の色調などをグリッド毎のカード（遺構カード：縮尺1/40）に記録した。そして、それをもとに略測図（縮尺1/100）を作成し、調査区全体の状況の把握に努めた。

④ 遺構を人力掘削し、遺物を取り上げた。溝・土坑などの遺構には、調査次別に通し番号を付与した。調査次別の遺構番号は、第２次調査001～、第３次調査301～、第４次調査601～とした。なお、第２次調査以外は全ての土坑に遺構番号を付与している。

⑤ 調査区壁面・遺構断面の土層図、遺物出土状況図などを作成し、写真撮影を行った。図面の縮尺は1/20または1/10、写真は４×５inch判、ブローニー（６×９㎝判）・35㎜判で、モノクロネガとカラーリバーサルのフィルムを使用した。

⑥ ⑤に加えて、調査後状況については委託による空中写真撮影を実施し、ブローニー（第２次：６×７㎝判、第３・４次：６×６㎝判）にて撮影した。

⑦ 調査後の遺構平面図・等高線図等の作成は空中写真測量を委託した。なお、第３次調査Ⅰ地区と第４次調査Ⅱ地区は手描き実測を行った。

⑧ 発掘調査終了後、調査区内の主要な部分に重機でトレンチを掘り、下層確認を行い記録を取るとともに、数か所から土壌サンプルを採取した。

5　整理・保管の方法

整理作業は、以下の手順で進めた。

遺物

① 調査現場で取り上げ後、速やかに整理所で洗浄・乾燥・接合を行った。

② 報告書に掲載する遺物を選別し、実測図作成・写真撮影（４×５inch判、ブローニー（６×９㎝判））を行なった。

③ 木製品は調査現場で取り上げた後、乾燥を防ぐ処置をし、速やかに整理所で洗浄し、実測が可能なものは実測および４×５inch判または６×９㎝判での写真撮影を行った。その後、必要に応じた自然科学分析・保存処理作業を進めた。

④ 報告書掲載遺物は報告書番号順に並べ、遺物実測を行わなかったものは、出土遺構・グリッド毎にコンテナケースに収納し、台帳を作成して保管した。

図面・写真類

現場で作成した図面（平面図・土層断面図・航測図面など）、遺構カード、調査日誌、写真類などと、整理段階で作成した遺物実測図、遺物写真は、適切な順序に並べ所定の番号を付け、台帳を作成して保管した。また、自然科学分析結果についても、同様の記録類として保管した。

6　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法などにかかる諸通知は、以下のとおりである。

・文化財保護法第99条第１項にかかる発掘調査報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）

第２次調査：平成21年５月15日付教埋第68号

第３次調査：平成22年７月29日付教埋第100号

第４次調査：平成23年５月23日付教埋第58号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（津南警察署長宛県教育長通知）

第２次調査：

平成21年12月25日付教委第12-4415号

第３次調査：

平成23年３月31日付教委第12-4423号

第４次調査：

平成23年12月26日付教委第12-4408号

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

相川西方遺跡[1]（1）は、行政上は三重県津市久居相川町・垂水に所在する。津市は三重県中部に位置し、西に布引山地・高見山地・紀伊山地が連なり、東には伊勢湾が広がる。西の山地に源を発して、北から志登茂川・安濃川・岩田川・雲出川などの河川が東流して伊勢湾に注いでいる。

遺跡は北側の半田丘陵と南側の久居台地の間に挟まれ、相川によって形成された浅い谷底平野に位置している。標高は13～16mである。

相川は延長約6.5kmの二級河川で、津市久居明神町南部の水田地帯に源を発し、久居台地の北縁に沿って東流、下流で天神川と合流し伊勢湾に注ぐ。河川名は旧安濃郡と一志郡との郡界となる川という意味を持つとされる[2]。

遺跡周辺の土地基盤は、布引山地から続く第三紀層が榊原町から羽野町の西部にまでのびている。その東部から第四紀層が伊勢湾方面へのびており、戸木から新家にかけての久居台地を形成している。また半田丘陵は地質学上でいう東海層群（約36万年前）が分布している地域である。東海層群とは鮮新世から第四紀の更新世前期に広く東海地方に形成された東海湖の岩石や地層を覆って堆積した地層である。この東海層群の上に相川による沖積土が堆積して当遺跡の基本的な地層を形成している。

遺跡内を縦断する県道久居停車場津線は古くは青谷街道とよばれ、元禄・宝永年間頃に相川の集落を経由して津藩と久居藩を結ぶ主要な街道であった。明治末になると、この街道に沿って軽便鉄道が開通し、相川駅も設置された。その後、この鉄道は津市内の岩田橋を起点に久居を経由し、雲出川に沿って省線（現JR名松線）伊勢川口駅へ短絡する20.7kmの中勢鉄道となり、昭和18年に廃止されるまで中勢地方の基幹交通機関として活躍した。そして現在、津中心市街地と旧久居市街を結ぶ交通量の多い県道となっている。

2　歴史的環境

相川西方遺跡が位置するのは、安濃川と雲出川に挟まれ、多くの生産遺跡が展開する半田丘陵～久居台地の中央付近である。ここでは、安濃川流域～雲出川流域の、今回の調査成果でみられた縄文時代～古代の遺跡の動向をみていく。

（1）旧石器・縄文時代

久居台地の東に連なる高茶屋台地南縁には、旧石器時代に属する四ツ野Ｂ遺跡（2）があり、ナイフ形石器等多くの石器が採集されている[3]。この地域における旧石器時代遺跡が更に展開する可能性が考えられる遺跡である。

縄文時代では、雲出川左岸沖積地において井手ノ上遺跡[4]（3）で後期の竪穴住居３棟が、木造赤坂遺跡[5]（4）において晩期の竪穴住居６棟が確認されている。また、遺構は伴わないが草創期の尖頭器２点が出土した。その他、四ツ野Ｂ遺跡[6]では３基、雲出島貫遺跡[7]（5）では晩期の土器棺墓２基が検出されるなど、雲出川左岸沖積地においては当該時期の活動がわずかにうかがえる。久居台地上へ目を移すと、大口北遺跡[8]（6）において時期不明ながら竪穴住居が、本宮遺跡[9]（7）において草創期の尖頭器が出土している。また相川流域右岸、高茶屋台地北側に位置する垂水Ａ遺跡[10]（8）では遺構は確認されていないが、早期前葉の押型文土器や中期後葉～後期初頭の土器や石器が出土している。

安濃川流域では、津市松ノ木遺跡において晩期の竪穴住居１棟等[11]が、替田遺跡[12]（9）では石器類と晩期の土器が、納所遺跡[13]（10）においても晩期の土器が、にんごう遺跡[14]（11）においてサヌカイト製石鏃と陥し穴状土坑が確認されており、特に後期以降の活動の痕跡がみられる。

（2）弥生時代から古墳時代初頭

近畿から伊勢地域に到来した弥生文化は、雲出川右岸松阪市中ノ庄遺跡[15]にその端緒を見る。そこから漸次周囲へと広がり、伊勢平野の主要河川沿いに拠点集落を形成している。

弥生時代の拠点集落には安濃川流域の納所遺跡がある。弥生時代前期から後期まで盛衰はありながらも継続して集落が営まれ続けたと考えられており、中期中葉以降には墓域も見られる。また、前期に属する大溝から出土した大量の木製品は、当遺跡における農耕活動などの生産活動の一端もうかがえ、中でも未成品の存在は、自家生産をも示すものである。

納所遺跡の南、半田丘陵では上村遺跡[16]（12）が現れる。遺構はないものの、前期から後期にかけての土器が出土している。高茶屋大垣内遺跡[17]（13）では、遺構は確認できないが前期と思われる土器片が出土している。

中期には替田遺跡・弐ノ坪遺跡[18]（14）で竪穴住居や土坑で構成される集落が営まれ、その西に位置する惣作遺跡[19]（15）では方形周溝墓群が展開する。また、蔵田遺跡[20]（16）では方形周溝墓や水田跡が見られる。半田丘陵の高松Ｃ遺跡[21]（17）では弥生中後期の竪穴住居群が確認されている。

雲出川流域では、向山遺跡[22]（18）において亜流遠賀川式土器が出土する土坑１基が調査されている。中ノ庄遺跡と同様、雲出川流域への弥生文化のいち早い流入が伺える例である。この向山遺跡では前期の柵を伴う掘立柱建物群がみられる。また四ツ野Ｂ遺跡では同じく前期の土坑１基が検出されている。その他、長持元屋敷遺跡[23]（19）でも前期の遺構が確認されている。

中期には井手ノ上遺跡・木造赤坂遺跡において竪穴住居群が検出されている。また、雲出島貫遺跡においても竪穴住居と周溝墓が確認されているが、更に環濠が伴う可能性が指摘されている[24]。

後期になると、向山遺跡では竪穴住居１棟と掘立柱建物６棟、柵２列で形成される集落が展開する。また、四ツ野Ｂ遺跡において約30棟の竪穴住居が検出されている。四ツ野Ｂ遺跡では、続く弥生時代末から古墳時代初頭にかけて更に30棟を超える竪穴住居が建てられ、隣接して銅鐸２個体が出土しており[25]、当該時期における拠点集落といえるかもしれない。四ツ野Ｂ遺跡ほど隣接してはいないものの集落と銅鐸との関係は、安濃川流域の半田丘陵に所在する上村遺跡・宮前遺跡（20、同じく後期）と隣接する神戸銅鐸[26]（21）がある。そしてやや離れるが、高松弥生墳墓[27]（22）において後期前半の墳墓が調査されている。

また、江戸時代に津市野田から出土したとされる野田銅鐸（23）が津市専修寺に所蔵されている[28]。この野田集落にも５棟の竪穴住居の柳谷遺跡[29]（24、後期）、大ヶ瀬遺跡[30]（25、後期・壇場遺構）、大ケ瀬弥生墳墓[31]（26、後期）、竪穴住居３棟の平栄遺跡[32]（27、後期）など同時期の集落・墓域が広がる。

その他、雲出川流域右岸では舞出北遺跡[33]（28）において後期の方形周溝墓群が確認されている。

弥生時代末から古墳時代初頭になると、前述の四ツ野Ｂ遺跡の他、雲出島貫遺跡で集落が展開する。木造赤坂遺跡においても後期～古墳時代初頭の土器が出土する溝を検出している。また、舞出北遺跡では水田遺構が確認されている。

安濃川流域では位田遺跡[34]（29）でも方形周溝墓群が確認されている。

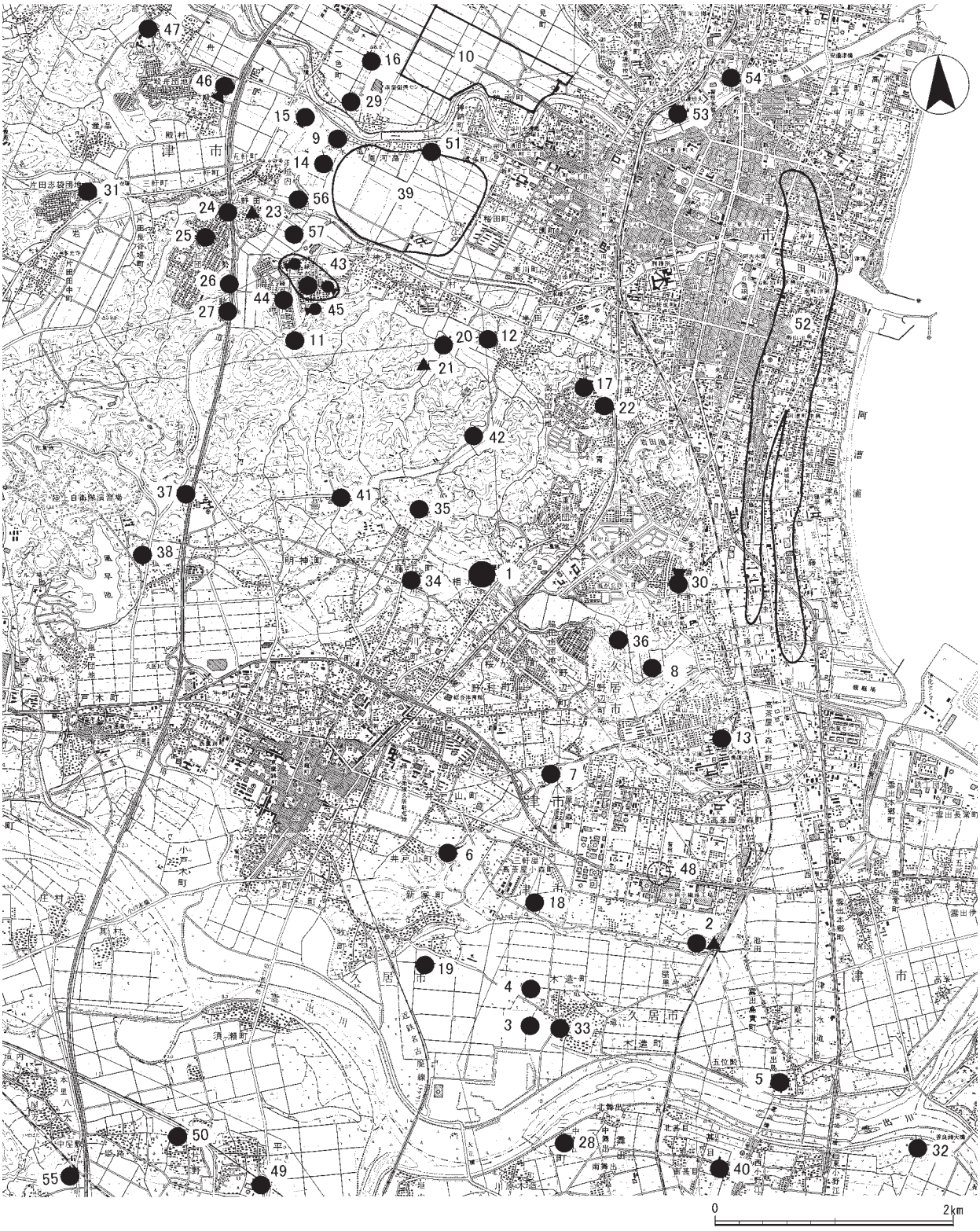
（３）古墳時代

半田丘陵東端部に位置する全長約87ｍの前方後円墳である池ノ谷古墳[35]（30）は、５世紀初めに築造されたこの地域最大の古墳である。相川を挟んだ南には池ノ谷古墳よりやや遡る、４世紀代の塀で区画される大型掘立柱建物と円形に配置される竪穴住居で構成される特殊な集落の高茶屋大垣内遺跡がある。そこから西へ約３㎞離れた本宮遺跡でも竪穴住居１棟と掘立柱建物４棟が調査されている。

安濃川の南を流れる岩田川中流域左岸丘陵上では坂本山古墳群[36]（31）で前期の古墳が見られる。弥生時代後期の墳墓群である大ヶ瀬弥生墳墓と比較的近く、継続した墳墓形成がうかがえる地域である。安濃川と岩田川にはさまれた沖積地では、替田遺跡において前期の集落跡が見つかっている。

雲出川流域に目を向けると、右岸の前田町屋遺跡[37]（32）において前期の古墳が調査されている。また、左岸には大塚山古墳[38]（33）があり、石製合子の出土が知られる。

中後期になると、雲出島貫遺跡において集落が存在し、水田域と墓域の存在が想定されている。また、木造赤坂遺跡・井手ノ上遺跡においても竪穴住居を中心とした集落が展開し、陶質土器・韓式系土器が出土している。



1 相川西方遺跡　2 四ツ野 B 遺跡・高茶屋銅鐸出土地・四ツ野古墳　3 井手ノ上遺跡　4 木造赤坂遺跡　5 雲出島貫遺跡　6 大口北遺跡　7 本宮遺跡　8 垂水 A 遺跡　9 替田遺跡　10 納所遺跡　11 にんごう遺跡・にんごう古墳群　12 上村遺跡　13 高茶屋大垣内遺跡　14 弐ノ坪遺跡　15 惣作遺跡　16 蔵田遺跡　17 高松 C 遺跡　18 向山遺跡　19 長持元屋敷遺跡　20 宮前遺跡　21 神戸銅鐸出土地　22 高松弥生墳墓　23 野田銅鐸出土地（出土地不詳）　24 柳谷遺跡　25 大ヶ瀬遺跡　26 大ヶ瀬弥生墳墓　27 平栄遺跡　28 舞出北遺跡　29 位田遺跡　30 池ノ谷古墳　31 坂本山古墳群　32 前田町屋遺跡　33 大塚山古墳　34 久居窯跡群　35 藤谷窯跡群　36 法ヶ広窯跡　37 北池原窯跡　38 狐塚窯跡　39 神戸遺跡　40 小野江甚目古墳群　41 大釜池古墳　42 元井池古墳　43 鎌切古墳群　44 稲葉古墳群　45 おこし古墳　46 殿村 1 号墳　47 メクサ古墳群　48 高茶屋大塚古墳　49 平生遺跡　50 片野遺跡　51 立花堂遺跡　52 安濃津遺跡群　53 鳥居古墳　54 四天王寺瓦窯跡　55 鳥居本遺跡　56 里前遺跡　57 梁瀬遺跡

第４図　周辺遺跡位置図（１：50,000）（国土地理院１：25,000『津西部』『津東部』『松阪港』『大仰』から）

高茶屋台地に上がると、高茶屋大垣内遺跡において土師器焼成坑を伴う大集落が展開する。この他に古墳時代の生産遺跡は、５世紀後半の須恵器を生産した久居窯跡群[39]（34、須恵器・埴輪併焼窯）がある。４基の窯が確認され、県内でも最も古い須恵器窯の一つとされる。その北方約１㎞には藤谷窯跡群[40]（35、須恵器・埴輪併焼窯）、東方約3.5㎞には法ヶ広窯跡[41]（36、埴輪窯）があり、いずれも５世紀末から６世紀初頭操業とみられる。これらの窯跡はいずれも相川左岸に位置し、良質な原料・豊富な燃料の所在がうかがえる[42]。

中期の遺跡である安濃川左岸の蔵田遺跡は、掘立柱建物10棟等で構成される集落である。それに続く後期の遺跡は右岸になるが神戸遺跡[43]（39）があり、掘立柱建物が検出されている。

後期古墳は、丘陵縁に四ツ野古墳[44]（２）、舞出北遺跡・小野江甚目古墳群[45]（40）では埴輪を持つ埋没古墳、半田丘陵では南側に大釜池古墳[46]（41）、その北東に元井池古墳[47]（42）、小型の前方後円墳を含む鎌切古墳群（43）・稲葉古墳群[48]（44）など群集墳がある[49]。また、中～後期にわたり造営が続くが、方墳と円墳で構成されるにんごう古墳群[50]（11）がある。その他、高茶屋台地の南部分でも多くの古墳が存在したとされ、その中の一つから出土した透かし彫り馬具の存在が近年明らかになった[51]（48）。これは県内白眉の資料であり、古代直前にあってもこの地域が重要な位置を占めることを表す事例であるといえる。

（４）古代

相川西方遺跡周辺は、相川と雲出川に挟まれた海岸域が一志郡嶋抜郷に比定され、北の岩田川下流域、津市野田・北河路町付近から下流の海岸地域までが安濃郡石田郷とされている[52]。半田丘陵を含めた相川西方遺跡周辺は空白地帯とも言えるが、相川が郡境であるとすれば遺跡周辺は安濃郡石田郷に含まれるのであろうか[53]。

この地域では、古代になると官道の存在が遺跡を考える上で特に重要となる。東海道から現在の亀山市関町で分岐して伊勢神宮、志摩へと繋がる「古代伊勢道」[54]は、神戸丘陵の西部を縦断し、久居台地から久居小戸木町―久居須ヶ瀬町を通過、松阪市へと繋がると想定される。

この想定ルートに近い平生遺跡[55]（49）・片野遺跡[56]（50）付近では都城の土器である暗文土師器が多く出土する。

また、前述の一志郡嶋抜郷の遺称地に含まれる雲出島貫遺跡では、大型掘立柱建物が確認され暗文土師器が多く出土する。右岸に位置する舞出北遺跡からも７世紀代の掘立柱建物群や円面硯、陶質土馬が調査されている。また下流域の前田町屋遺跡においても掘立柱建物や墨書土器を確認している。高茶屋台地に目を向けると、高茶屋大垣内遺跡では「美濃」刻印須恵器が出土している。これは、県内では天皇の皇女である斎王の居処・役所である斎宮跡から出ているのみであり、この資料の持つ重要性は大きい。

半田丘陵の北に目を向けると、安濃川の右岸、替田遺跡において７～８世紀代の掘立柱建物が、惣作遺跡においてもほぼ同時期の掘立柱建物が調査されている。いずれも、その後にこの地域の地割に影響を与える条里方向とは異なる主軸方向の建物である。平安時代に入ると、弐ノ坪遺跡では条里方向N28°Eに沿ったと思われる平安前期の掘立柱建物群と溝が、安濃川の両岸に分かれる神戸遺跡や位田遺跡ではそれに続く平安中期以降の、替田遺跡や立花堂遺跡[57]（51）では平安後期の、蔵田遺跡では平安末期以降のそれぞれ掘立柱建物群が見つかっている。これらの遺跡の展開は、陸上交通である古代伊勢道とそれに伴う市村駅家[58]や、安濃津遺跡群[59]（52）を核とした河川を含む水上交通の動きと密接な繋がりがあるものと考えられる。

【註釈】

① 相川西方遺跡は、相川や相川の集落からみて北、または北東に位置するにもかかわらず、「西方」という方角が遺跡名称についている。これは、当遺跡の存在をはじめて指摘した鈴木敏雄氏が、「相川ニ於ケル弥生式土器片」の出土地を「久居ノ北ナル相川橋ノ西ニシテ中勢鉄道鉄橋ノ東ニテ」と記し、遺跡の位置は現在の相川集落を貫く県道を基準に西方と表現したことがもととなってつけられたと考える。
② 「本村」『三重県の地名』平凡社　1983年　483ページ
③ 岡田登「津市高茶屋四ツ野Ｂ遺跡採集の旧石器・縄文時代遺物について」『皇學館大学文学部紀要』第41輯　皇學館大学　2002年、岡田登「３　四ツ野Ｂ遺跡」『三重県史　資料編　考古１』三重県　2005年
④ 『木造赤坂遺跡・池新田遺跡・井手ノ上遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2012年
⑤ 前掲註④文献参照
⑥ 『四ツ野Ｂ遺跡（第１次）発掘調査報告』津市教育委員会　2005年（『津市埋蔵文化財センター年報９　平成15年度』津市埋蔵文化財センター　2005年　に所収）、『四ツ野Ｂ遺跡（第２次）・四ツ野古墳発掘調査報告』津市教育委員会　2001年
⑦ 『嶋抜　第１次調査』三重県埋蔵文化財センター　1998年

⑧ 「第一節　縄文弥生式文化　四　大口遺跡」『久居市史』久居市史編纂委員会　1972年
⑨ 『本宮遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2013年
⑩ 『垂水Ａ遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　2000年
⑪ 『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993年
⑫ 『替田遺跡（第５～第８次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2007年、『替田遺跡（第１・２次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2008年
⑬ 『納所遺跡Ⅰ－遺構・土器・木製品編－』三重県埋蔵文化財センター　2012年
⑭ 『にんごう遺跡・にんごう古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2014年
⑮ 『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1972年
⑯ 『上村遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　1972年
⑰ 『高茶屋大垣内遺跡（第３・４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2000年
⑱ 『弐ノ坪遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2005年
⑲ 『惣作遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2002年、『惣作遺跡（第２次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2002年
⑳ 『三重産業振興センター埋蔵文化財発掘調査概報　蔵田遺跡　平田遺跡　位田東遺跡』津市教育委員会　1993年、『蔵田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999年、『蔵田遺跡（第４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2008年
㉑ 『高松Ｃ遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　1999年（『津市埋蔵文化財センター年報３　平成９年度』　津市埋蔵文化財センター　1999年　に所収）
㉒ 『向山遺跡発掘調査報告』津市埋蔵文化財センター　2003年
㉓ 『長持元屋敷遺跡発掘調査報告』久居市教育委員会　1980年
㉔ 『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター　2001年
㉕ 中村光司「高茶屋銅鐸観察ノート」『津市埋蔵文化財センター年報４　平成10年度』津市埋蔵文化財センター　2000年。銅鐸２点は近畿式と、三遠式の影響を受けた近畿式で、破片の検討から更に２個体があったとされる。
㉖ 新田剛「銅鐸」『三重県史　資料編　考古１』三重県　2005年
㉗ 『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市文化財保護協会　1970年
㉘ 県内唯一の三遠式である。前掲註㉖文献参照。
㉙ 「３．柳谷遺跡」『野田遺跡群発掘調査報告』津市教育委員会　1974年
㉚ 「２.大ヶ瀬Ａ遺跡」・「３.大ヶ瀬Ｂ遺跡」『野田遺跡群発掘調査報告』津市教育委員会　1974年
㉛ 「Ⅳ　大ケ瀬遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅰ』三重県教育委員会　1973年
㉜ 「Ⅴ　平栄遺跡」『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅰ』三重県教育委員会　1973年
㉝ 『舞出北遺跡発掘調査報告２』三重県埋蔵文化財センター　2010年
㉞ 『位田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999年
㉟ 藤田充子「池の谷古墳出土の円筒埴輪」『埋文センターニュース』９　津市埋蔵文化財センター　1999年、中村光司「57　池の谷古墳」『三重県史　資料編　考古１』三重県　2005年
㊱ 『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』津市教育委員会　1970年
㊲ 『前田町屋遺跡（第１次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1997年、『前田町屋遺跡（第２次調査）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999年
㊳ 「五　木造の古墳　大塚山古墳」『久居市史』久居市史編纂委員会　1972年、伊勢野久好「旧一志郡内の首長墓」『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会　1991年
㊴ 『久居古窯址群発掘調査報告－２号窯、４号窯－』久居古窯址群発掘調査団　1968年
㊵ 『藤谷窯跡群発掘調査報告』津市教育委員会　2000年（『津市埋蔵文化財センター年報４　平成10年度』　津市埋蔵文化財センター　2000年　に所収）
㊶ 岡田登「三重県津市垂水発見の埴輪窯について－藤形の贄土師部との関連をめぐって－」『皇學館論叢』第15巻第２号　1982年
㊷ この他にも、北池原窯跡（37）・狐塚窯跡（38）などがある。『津市文化財年報４　平成20年度』津市教育委員会　2010年
㊸ 『神戸遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999年、『神戸遺跡（第２次）・替田遺跡（第３次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2001年
㊹ 『四ツ野Ｂ遺跡（第２次）・四ツ野古墳発掘調査報告』津市教育委員会　2001年
㊺ 『小野江甚目遺跡・小野江甚目古墳群発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター　1999年
㊻ 「八　大釜池古墳」『久居市史』久居市史編纂委員会　1972年
㊼ 『元井池古墳発掘調査報告』津市教育委員会　1969年
㊽ 『稲葉古墳群・鎌切古墳群発掘調査報告』津市教育委員会　2005年
㊾ その他に殿村１号墳（45）【『殿村１号墳・殿村遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　2005年】、メクサ古墳群（47）【『メクサ３号墳発掘調査報告』津市教育委員会　1991年】など埴輪を持つ古墳がある。
㊿ 前掲註⑭文献参照。
(51) 高茶屋大塚古墳と仮称される。菅谷文則・川崎志乃・東影悠・持田大輔「三重県津市高茶屋大塚古墳出土馬具の研究」『橿原考古学研究所紀要　考古學論攷』第36冊　奈良県立橿原考古学研究所　2013年
(52) 『三重県の地名』　平凡社　1983年　49～51ページ
(53) 相川が安濃郡と一志郡の境となるが、本来なら安濃郡と認識される津市藤方の地が、『皇太神宮儀式帳』においては「壱志藤方片樋宮」とあり、『太神宮諸雑事記』には「伊勢安濃郡藤方宮」と記される。これは、藤方という地名が現在は相川左岸の狭い地域に限られているが、古代にあっては高茶屋台地の下の低地全体が潟湖を形成し、その潟湖全体が「藤方(潟)」と称されたことを示すのであろう。
(54) 足利健亮「平安京から伊勢神宮への古代の道」上田正昭編『探訪古代の道』第２巻　株式会社法藏館　1988年
(55) 『平生遺跡発掘調査報告』平生遺跡発掘調査団　1976年、『平生遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1994年
(56) 『片野遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1985年、『片野遺跡発掘調査報告』一志町教育委員会（以下同）1986年・『片野遺跡第三次発掘調査報告』1989年、『片野遺跡Ⅳ』2002年・『片野遺跡Ⅴ』2004年
(57) 『立花堂遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2008年。安濃川右岸流域の遺跡の状況は、当文献内の柴山圭子「Ⅵ　結語　２　周辺遺跡を含めた遺構の変遷」を主に参考とした。
(58) 岡田登「伊勢国市村駅所在地考」『皇學館論叢』第13巻第６号　皇學館大学人文学会　1980年
(59) 『安濃津』三重県埋蔵文化財センター　1997年

Ⅲ　基本層序

現況地表面は北東から南西へと傾斜し、第２次調査区北東隅付近で標高16.0m、第４次調査区Ⅱ地区南西隅付近で標高13.4mである。

基本層序は、第２次調査において設定されており、第３次調査においてもほぼ踏襲された。しかし、第４次調査では土層の違いが著しいため新たに設定しており、それらは各年度の概報にて明示されている。

本報告においては、第２次調査の基本層序を基準として、それぞれの土層の特徴から全調査の層序を統一した（第２表）。特に第４次調査の層序を変更しており、当該調査の概報の記述とは異なることをお断りしておく。

第Ⅰ層は表土である。第Ⅱ・Ⅲ層は旧表土あるいは包含層の一部と思われる。

第Ⅳ層は第２次調査においては中央から東にのみ、第３次調査区Ⅱ地区の一部、第４次調査区南部で見られる層である。一部でしか確認できない層であるので、本来は基本層序として捉えるべきではないのかもしれない。

第Ⅴ層は古墳時代以降に堆積した層であると考えられる。

第Ⅵ層は本来遺構が切り込む層、すなわち生活面と考えられるが、第Ⅵ層と遺構埋土が類似するため、遺構精査は第Ⅶ層で行っている。第Ⅵ層上面は生活面であったため、その面に近い部分は土壌化しており、本来確認できるはずの遺構が切り込むラインがわかりにくくなっている。例えば、第７図における「７　黒褐色粘土（マンガン多含）」はその土壌化層であり、その下の「８　黒褐色粘質土」は非土壌化層である。遺構は、多くが８層上面から切り込んだように表現されているが、本来は７層上面からの掘込みと考えられることから、本報告書では７・８層を合わせて第Ⅵ層とする。よって、土層図においても生活面として第Ⅵ層上面を太線で表現している。これは、他の図においても同様である。

第Ⅶ層は後述するように、土坑群を考える上で鍵となる層である。つまりこの粘土層は、採掘対象の可能性が考えられるのである。また、今回の調査での検出面でもある。この第Ⅶ層は南西へ行くほど見られなくなり、第２次調査区の南西部では第Ⅱ層下は砂質土となり（第８図）、その部分では土坑もない。また、第４次調査区Ⅱ地区でもほぼ確認できず、第Ⅲ層下はシルトあるいは砂層が広がる。

第Ⅷ層は、第２次調査区において採取したサンプルの分析から、姶良Tn火山灰由来による火山ガラスが含まれ、その降下年代2.6～2.9万年前頃に第Ⅷ層が堆積したことを示す。この第Ⅷ層は第２次調査区、第３次調査区のK-Uトレンチ、W-Uトレンチにおいてもわずかに確認できるが、これは上下の層序関係や色調・土性の特徴から対応させたもので、第２次調査区におけるテフラを含む緑灰色シルトと同一とは報告書作成段階では判断できなかった。第Ⅶ層はこの前後の層の鍵となる層であるが、前述のように第２次調査区においても東側には見られないなど、厚みは薄く、確認できる地点は少ない。

第Ⅸ層以下は、下層確認トレンチにおいて確認したものである。

第６～10図の調査区土層図は、各調査区が連続して見られるように土層の方向毎（南北方向、東西方向）に可能な限りまとめた図版としている。土層名は、調査次数が異なっていても隣接する土層の場合、その連続性を考える上で統一あるいは対応できるほうがよいのだが、残念ながら現地調査時において土層を既調査に対応されなかった。報告作成時に、隣接土層の土層名を、辻褄を合わせて無理に変更することは調査結果の捻じ曲げとなると判断し、ここでは調査時の記録を尊重させ、各土層一覧表に調査時のままの土層を記し、報告書作成者が判断した基本層序の対応を明示した。

現地表面と生活面（第Ⅵ層上面）の比高差は、第２次調査区北西隅付近で約80㎝、第４次調査区Ⅱ地区南隅において約60㎝となる。また現地表面と検出面（第Ⅶ層上面）との比高差は第２次調査区北西隅付近で約１m、第４次調査区Ⅱ地区南隅において約80㎝である。

遺構外からの遺物は、第４次調査区Ⅰ地区におい

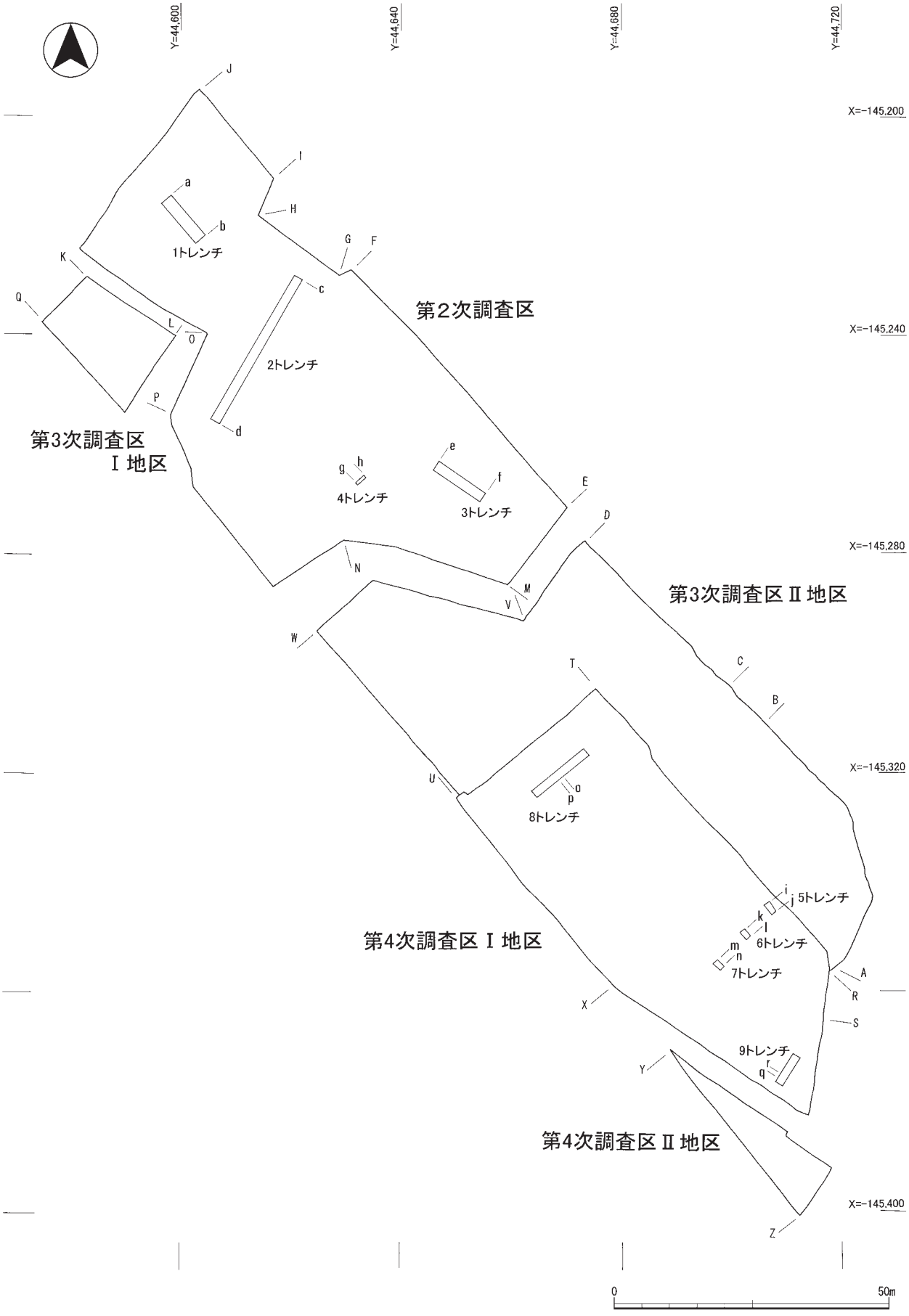
第２表　基本層序一覧

	調査次数	土色等	特徴	備考
第Ⅰ層	2	暗褐色土	表土	
	3	暗褐色土	表土	
	4	暗褐色土	表土	
第Ⅱ層	2	黒褐色土		東端から南側は、黄灰色～暗黄灰色粘質土
	3	黒褐色土		東端から南側は、黄灰色～暗黄灰色粘質土
	4	黄灰色～黄褐色土 （灰オリーブ色土）		
第Ⅲ層	2	黒褐色～褐灰色粘質土		中央から東は、にぶい黄褐色土
	3	黒褐色～褐灰色粘質土		中央から東は、にぶい黄褐色土
	4	黒褐色粘質土		
第Ⅳ層	2	黄灰色粘土		中央から東にのみ見られる
	3	黄灰色粘土		中央から東にのみ見られる
	4	黒色粘質土		
第Ⅴ層	2	黒色～褐灰色粘土		
	3	黒色～褐灰色粘土		
	4	－		
第Ⅵ層	2	黒褐色粘土	本来、遺構が切り込む面	土壌化した層（Ⅵ層）と非土壌化層（Ⅵ’層）に分かれる
	3	黒褐色粘土	本来、遺構が切り込む面	土壌化した層（Ⅵ層）と非土壌化層（Ⅵ’層）に分かれる
	4	－		
第Ⅶ層	2	褐灰色粘土	調査検出面	
	3	褐灰色粘土	調査検出面	
	4	褐灰色粘土～黒色粘土	本来、遺構が切り込む面～調査検出面	大部分が黒色粘土 褐灰色粘土は調査区北西端、第４次調査区隣接付近にあり 部分的に褐灰色シルト確認 調査区南東端ではこの層は確認できない
第Ⅷ層	2	明オリーブ灰色土～緑灰色シルト		東側にはない ＡＴテフラ、2.6～2.9万年前
	3	明オリーブ灰色土～緑灰色シルト		東側にはない ＡＴテフラ、2.6～2.9万年前
	4	褐灰色シルト～砂礫		
第Ⅸ層	2	黒色粘土		24,540年前
	3	黒色粘土		24,540年前
	4	－		

て土師器長胴甕が数個体出土した以外は少なく、良好な遺物包含層はなかったものと思われる。

第３次調査の第Ⅶ層直上では砂礫層の堆積が一部確認できる。また、第４次調査での第Ⅳ層直下では同様に砂礫層が確認され、第３次調査までの第Ⅴ・Ⅵ層が確認できないことから、相川西方遺跡南部の第Ⅶ層は別段階の堆積物である可能性がある。

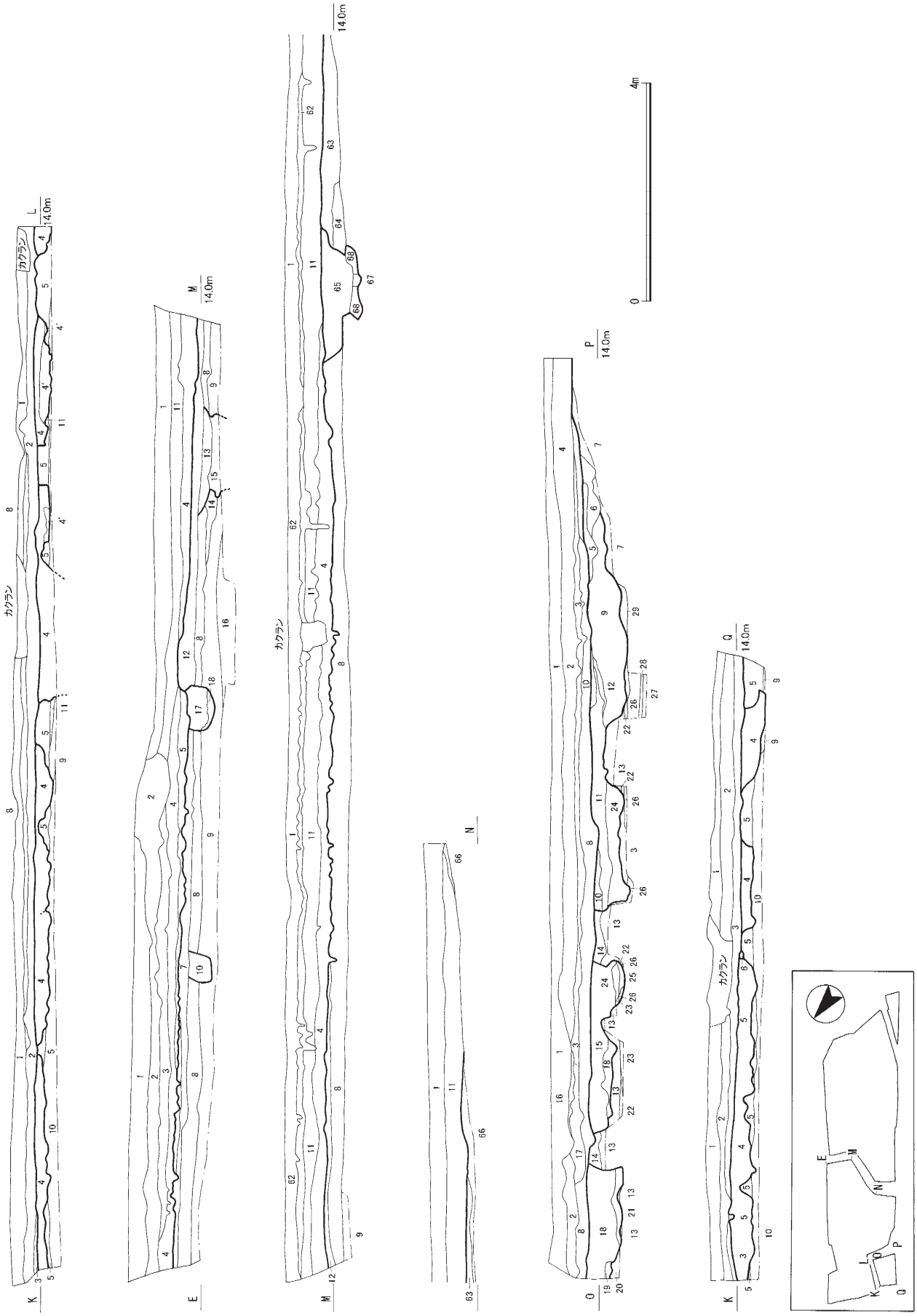
これらの土地形成過程については、第Ⅶ章の松田氏の論考をご覧いただきたい。



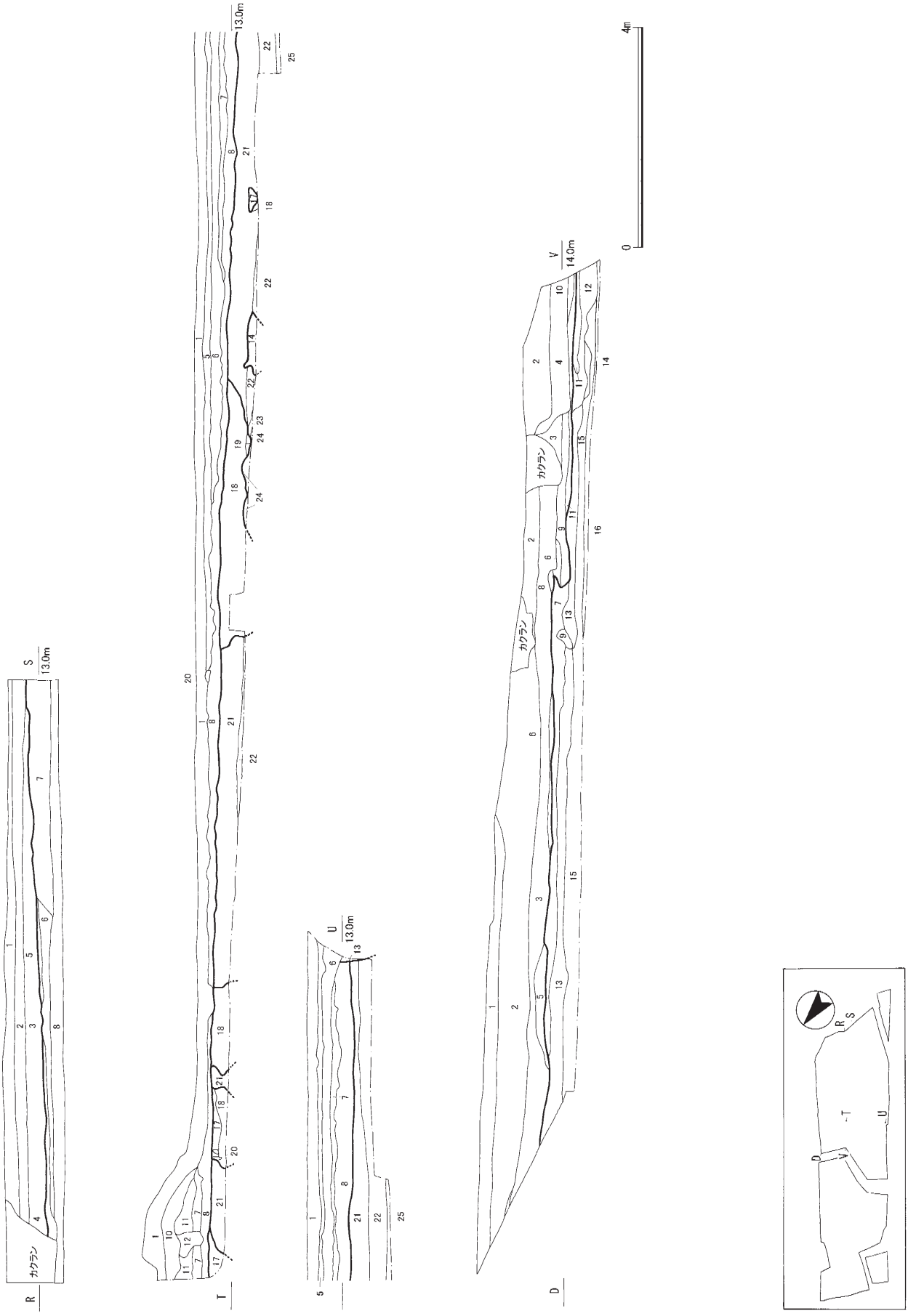
第５図　調査区名と土層断面位置図（１：1,000）

第６図　第３次調査区Ⅰ地区北壁土層断面図（１：100）

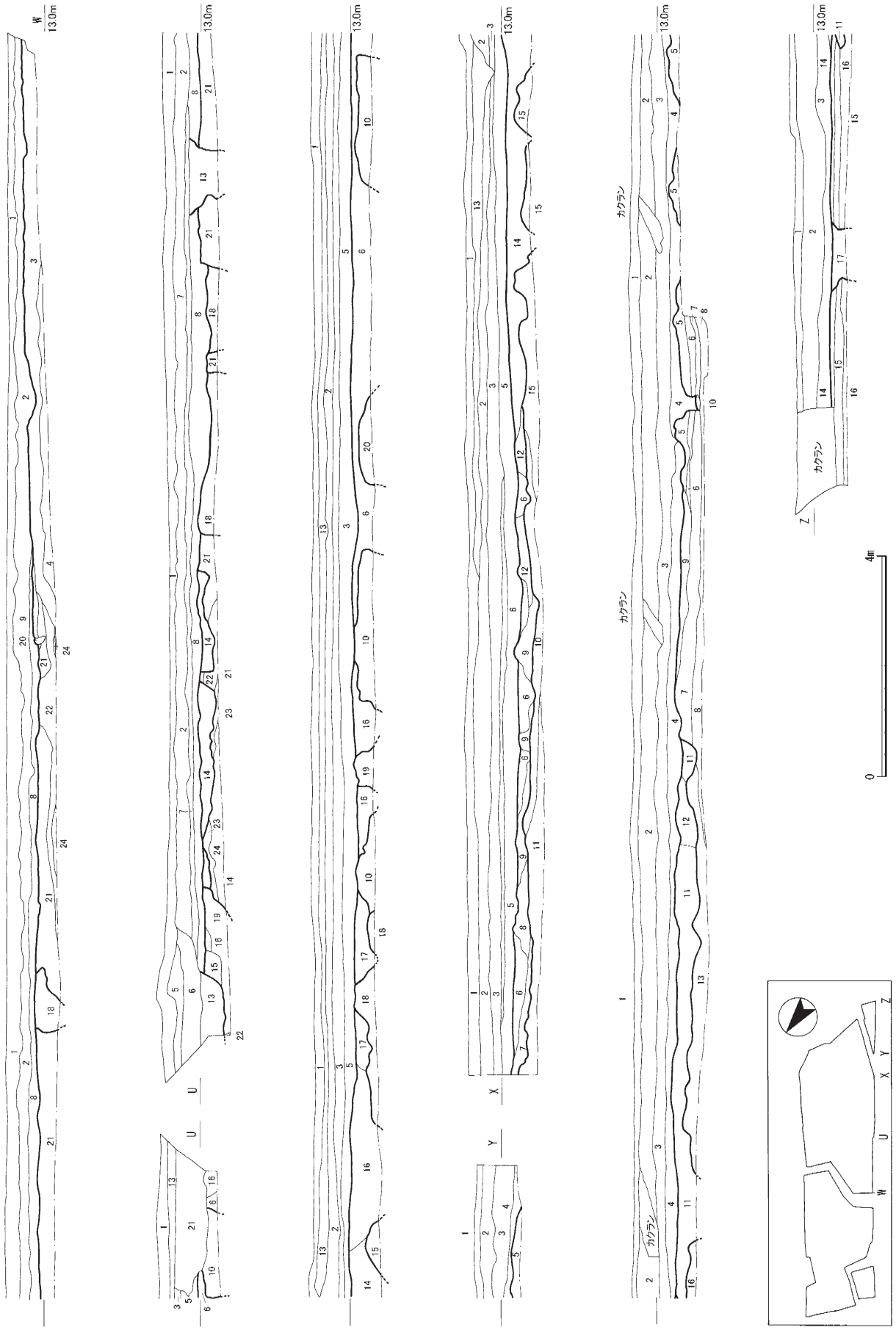
第７図　第２次調査区北壁土層断面図（１：100）



第８図　第３次調査区Ⅰ地区南北方向、第２次調査区・第３次調査区Ⅰ地区東西方向土層断面図（１：100）



第９図　第３次調査区Ⅱ地区、第４次調査区Ⅰ地区東西方向土層断面図（１：100）



第10図　第３次調査区Ⅱ地区、第４次調査区Ⅰ・Ⅱ地区南壁土層断面図（１：100）

第３表　第６図第３次調査区Ⅰ地区北壁土層断面注記

No.	土　色	基本層序	備　考
1	2.5Y5/4黄褐色土	Ⅰ	表土
2	2.5Y5/3黄褐色土	Ⅰ	
3	2.5Y4/6オリーブ褐色土	Ⅱ	
4	2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　粒状の鉄分混		
5	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土　粒状の鉄分混		
6	10YR4/3にぶい黄褐色粘質土　粒状の鉄分混	Ⅲ	
7	10YR5/3にぶい黄褐色粘質土　粒状の鉄分混	Ⅲ	
8	2.5Y7/4浅黄色粘質土　粒状の鉄分混	Ⅲ	
9	８に7.5YR5/6明褐色土混　砂粒混		
10	撹乱		１次調査トレンチ
11	2.5Y5/6黄褐色シルト		
12	2.5Y5/4黄褐色粘質土		
13	３に７のブロック混（撹乱）		
14	３に１のブロック混（撹乱）		
15	７に３のブロック混（撹乱）		
16	7.5YR5/6明褐色土に７の微小ブロック混		
17	2.5Y6/6明黄褐色粘土	Ⅲ	
18	2.5Y4/2暗灰黄色粘土　粒状の鉄分混	Ⅳ	
19	2.5Y4/1黄灰色粘土に10YR4/6褐色鉄分が粒状に混じる	Ⅳ	
20	10YR4/1褐灰色粘土	Ⅴ	
21	2.5YR4/2暗灰黄色粘土に砂粒混		
22	2.5Y5/3黄褐色粘土		
23	2.5Y6/3にぶい黄色粘土　粒状鉄分混	Ⅴ	
24	10YR2/1黒色粘土	Ⅵ’	
25	2.5Y4/1黄灰色粘土	Ⅶ	
26	2.5Y2/1黒色粘土		遺構埋土
27	2.5Y5/1黄灰色粘土、ややシルト質	Ⅶ	
28	10YR3/1黒褐色粘土	Ⅵ’	
28’	10YR3/1黒褐色粘土、ややシルト質	Ⅵ	
29	10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック、10GY6/1緑灰色粘土ブロック、10YR5/6黄褐色粘土ブロック混		遺構埋土か
30	10YR2/1黒色粘土		
31	29に2.5Y3/1黒褐色シルト混		
32	10YR2/1黒色粘土に2.5Y5/1黄灰色粘土ややシルト質（５）のブロック混		
33	2.5Y2/1黒色粘土に2.5Y5/1黄灰色粘土ややシルト質（５）のブロック混		
34	2.5Y4/3オリーブ褐色粘土に7.5YR6/8橙色微小ブロック（鉄分）混		
35	2.5Y4/2暗灰黄色粘土に7.5YR5/6明褐色微小ブロック（鉄分）混		
36	10YR2/2黒褐色粘土に7.5YR6/8橙色微小ブロック（鉄分）混		
37	10YR2/1黒色粘土に2.5Y5/1黄灰色粘土ブロック混		遺構埋土か
38	10YR2/1黒色粘土に2.5Y5/1黄灰色粘土ブロックと10YR4/2灰黄褐色粘土ブロック混		遺構埋土か
39	2.5Y4/6オリーブ褐色粘土		
40	10YR2/1黒色粘土	Ⅸ	
41	7.5YR4/1褐灰色粘土	Ⅶ	
42	2.5Y2/1黒色粘土	Ⅸ	

第４表　第７図第２次調査区北壁土層断面注記

No.	土　色	基本層序	備　考
1	10YR3/3暗褐色土層	Ⅰ	表土
2	2.5Y4/2暗灰黄色粘質土	Ⅱ	
3	10YR4/3にぶい黄褐色土	Ⅲ	
4	2.5Y5/1黄灰色粘土（マンガン多含）	Ⅳ	
5	2.5Y5/1黄灰色粘土に2.5Y6/4にぶい黄色土ブロック含、しまり強	Ⅳ	
6	10YR3/2黒褐色粘土（マンガン多含、しまり強）	Ⅵ	
7	7.5YR3/1黒褐色粘土（マンガン多含）	Ⅵ	
8	7.5YR3/1黒褐色粘質土	Ⅵ’	
9	10YR5/1褐灰色粘土（2.5Y6/6明黄褐色粘土ブロック含）粘性非常に強い	Ⅶ	
10	10YR4/1褐灰色粘質土に10YR7/6明黄褐色粘土、10YR3/1褐色粘土ブロック含、しまり強		遺構埋土
11	2.5Y4/1黄灰色粘土（マンガン多含）	Ⅱ	
12	7.5YR3/1黒褐色粘質土（マンガン多含）	Ⅵ	
13	10YR2/1黒色粘土（しまり強）		
14	10YR4/1褐灰色粘土（マンガン多含）	Ⅶ	
15	10YR4/1褐灰色粘土に10YR3/1黒褐色粘土と7.5GY4/1暗緑灰色粘土ブロック混		遺構埋土か
16	10Y5/1灰色シルト		遺構埋土
17	10YR2/1黒色粘土		遺構埋土
18	５Y4/1灰色粘土に10YR6/6明黄褐色粘土含		遺構埋土
19	7.5YR2/1黒色粘土		
20	10YR3/1黒褐色粘土		遺構埋土
21	10YR4/1褐灰色粘土（マンガン多含）	Ⅴ	
22	10YR3/2黒褐色砂質土		遺構埋土か
23	7.5YR3/1黒褐色粘土		遺構埋土か
24	7.5YR4/1褐灰色粘土		遺構埋土か
25	10YR2/1黒色粘土		遺構埋土か
26	5Y2/1黒色粘土		遺構埋土
27	7.5YR5/1褐灰色粘土にN2/0黒色粘土混		遺構埋土
28	2.5Y5/2暗灰黄色粘質土に7.5YR3/1黒褐色粘質土混	Ⅱ	
29	5YR3/1黒褐色粘質土	Ⅲ	
30	10YR1.7/1黒色土（マンガン多含）		
31	N2/0黒色粘質土		遺構埋土か
32	10YR3/1黒褐色粘土(マンガン多含)		遺構埋土か
33	N2/0粘土と7.5YR3/1黒褐色に7.5YR7/1明褐色土を含む層の互層		遺構埋土か
34	7.5YR4/1褐灰色土、砂混（マンガン多含）	Ⅴ	
35	7.5YR3/2黒褐色土（鉄分？含）	Ⅱ	
36	7.5YR3/1黒褐色土	Ⅱ	
37	7.5YR4/1褐灰色土（鉄分？多含）	Ⅲ	
38	7.5YR3/2黒褐色土に10YR3/3暗褐色土含		
39	10YR4/1褐灰色土		
40	５G6/1緑灰色シルト	Ⅷ	テフラ層
41	10YR4/2灰黄褐色土に7.5YR4/1褐灰色土混		
42	10YR3/3暗褐色砂質土		
43	7.5YR3/1黒褐色粘質土（鉄分？含）	Ⅲ	
44	10YR3/1黒褐色粘土(鉄分？含)		
45	10YR3/1黒褐色砂質土		
46	10YR2/1黒色粘質土	Ⅴ	
47	10YR3/1黒褐色粘土	Ⅵ’	８層と対応
48	7.5YR2/1黒色粘質土（鉄分？含）		
49	7.5YR2/1黒色粘質土に7.5YR6/2褐灰色粘土混		
50	7.5YR3/2黒褐色砂質土に10YR3/3暗褐色土混	Ⅱ	
51	7.5YR4/1褐灰色粘質土（鉄分？含）	Ⅲ	
52	10YR4/2灰黄褐色砂質土に10YR7/6明黄褐色土多混		
53	10YR3/2黒褐色粘質土		
54	10YR4/2灰黄褐色土に7.5YR3/1黒褐色土混		
55	10YR4/2灰黄褐色砂質土		表土
56	10YR3/2黒褐色砂質土	Ⅱ	
57	7.5YR3/1黒褐色砂質土	Ⅲ	
58	N2/0黒色粘土	Ⅸ	黒地山
59	10YR5/2灰黄褐色粘土	Ⅹ	地山
60	10YR2/1黒色粘土に有機物（木片？）多混	Ⅺ	
61	5Y6/1灰色粘土　有機物混	Ⅻ	

第５表　第８図第３次調査区Ⅰ地区南北方向、第２次調査区・第３次調査区Ⅰ地区東西方向土層断面注記

（第２次西壁＜Ｏ－Ｐ＞）

№.	土　色	基本層序	備　考
1	10YR3/3暗褐色土層	Ⅰ	表土
2	10YR3/3暗褐色砂質土	Ⅱ	
3	10YR3/2黒褐色土	Ⅲ	
4	7.5YR2/1黒色粘質土		
5	10YR3/2黒褐色シルト		
6	10YR6/2灰黄褐色シルトに10YR3/2黒褐色シルト多含		
7	10YR7/3にぶい黄橙色砂質土		地山
8	7.5YR2/1黒色粘土	Ⅴ	
9	10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色土ブロックと10YR6/2灰黄褐色土ブロック含		遺構埋土
10	10YR3/1黒褐色粘質土	Ⅵ'	
11	10YR1.7/1黒色粘質土	Ⅵ'	
12	10YR4/1灰褐色粘土（ラミナあり）		遺構埋土
13	10YR5/1褐灰色粘土　鉄分？多含	Ⅶ	地山
14	7.5YR2/1黒色粘土	Ⅵ'	他の８層と対応
15	10YR2/1黒色粘土		遺構埋土
16	10YR3/3暗褐色土に10YR3/2黒褐色土混		
17	7.5YR2/1黒色粘土に10YR3/3暗褐色土と10YR2/3黒褐色土混		
18	10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混		遺構埋土
19	7.5YR2/1黒褐色粘土に2.5Y5/3黄褐色粘土ブロック混		遺構埋土
20	10YR4/1灰褐色粘質土		地山
21	10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混		遺構埋土
22	10YR7/2にぶい黄橙色粘土		地山
23	10YR5/2灰黄褐色シルト		地山
24	10YR3/1黒褐色粘土にN2/0黒色粘土ブロック少混		遺構埋土
25	10YR5/1褐灰色粘土にN2/0黒色粘土ブロックと10YR6/1褐灰色粘土ブロック混		遺構埋土
26	N2/0黒色粘土	Ⅸ	黒地山
27	10YR5/2灰黄褐色粘質土	Ⅹ	地山
28	7.5YR4/1褐灰色粘質土		地山
29	10YR4/1灰褐色シルト		地山

（第３次Ⅰ地区　西壁＜Ｋ－Ｑ＞・北壁＜Ｋ－Ｌ＞）

1	表土	Ⅰ	
2	7.5YR3/1黒褐色土に砂粒多含、7.5YR4/6褐色土小粒まばらに混じる	Ⅱ	
3	2.5Y2/1黒色粘質土、7.5YR4/6褐色土粒多混		
4	2.5Y2/1黒色粘質土10cm大のブロック少混		遺構埋土
4'	2.5Y2/1黒色粘質土に黒色の１cm大のブロック多混		遺構埋土
5	10YR4/1褐灰色粘質土に10YR3/1黒褐色粘質土グラデーションして混じる	Ⅶ	地山
6	7.5YR4/1褐灰色粘質土		遺構埋土
7	カクラン		
8	2.5Y3/2黒褐色土（床土？）、7.5YR4/6褐色土粒まばらに混じる、砂粒多混	Ⅰ	
9	5Y2/1黒色粘土→東壁では黒味が強い		
10	7.5GY5/1緑灰色砂質土（シルト）最下層　10YR4/1褐灰色砂質土、7.5YR4/6褐色土粒、10YR5/6黄褐色粘質土まばらに混じる	Ⅷ	地山 テフラ層
11	10GY6/1緑灰色粘土（西へ行くほど淡色になる）		

（第２次東壁＜Ｅ－Ｍ＞・南壁＜Ｍ－Ｎ＞・北壁）土色№.19～61は北壁にのみあり

1	10YR3/3暗褐色土層	Ⅰ	表土
2	2.5Y4/2暗灰黄色粘質土	Ⅱ	
3	10YR4/3にぶい黄褐色土	Ⅲ	
4	2.5Y5/1黄灰色粘土（マンガン多含）	Ⅳ	
5	2.5Y5/1黄灰色粘土に2.5Y6/4にぶい黄色土ブロック含、しまり強	Ⅳ	
6	10YR3/2黒褐色粘土（マンガン多含、しまり強）	Ⅵ	
7	7.5YR3/1黒褐色粘土（マンガン多含）	Ⅵ	
8	7.5YR3/1黒褐色粘質土	Ⅵ'	
9	10YR5/1褐灰色粘土（2.5Y6/6明黄褐色粘土ブロック含）粘性非常に強い	Ⅶ	
10	10YR4/1褐灰色粘質土に10YR7/6明黄褐色粘土、10YR3/1褐色粘土ブロック含、しまり強		遺構埋土
11	2.5Y4/1黄灰色粘土（マンガン多含）	Ⅱ	
12	7.5YR3/1黒褐色粘質土（マンガン多含）	Ⅵ	
13	10YR2/1黒色粘土（しまり強）		遺構埋土か
14	10YR4/1褐灰色粘土（マンガン多含）	Ⅶ	
15	10YR4/1褐灰色粘土に10YR3/1黒褐色粘土と７.5GY4/1暗緑灰色粘土ブロック混		遺構埋土か
16	10Y5/1灰色シルト		遺構埋土
17	10YR2/1黒色粘土		遺構埋土
18	5Y4/1灰色粘土に10YR6/6明黄褐色粘土含		遺構埋土
19	7.5YR2/1黒色粘土		
20	10YR3/1黒褐色粘土		遺構埋土
21	10YR4/1褐灰色粘土（マンガン多含）	Ⅴ	
22	10YR3/2黒褐色砂質土		遺構埋土か
23	7.5YR3/1黒褐色粘土		遺構埋土か
24	7.5YR4/1褐灰色粘土		遺構埋土か
25	10YR2/1黒色粘土		遺構埋土か
26	5Y2/1黒色粘土		遺構埋土
27	7.5YR5/1褐灰色粘土にN2/0黒色粘土混		遺構埋土
28	2.5Y5/2暗灰黄色粘質土に7.5YR3/1黒褐色粘質土混	Ⅱ	
29	5YR3/1黒褐色粘質土	Ⅲ	
30	10YR1.7/1黒色土（マンガン多含）		
31	N2/0黒色粘質土		遺構埋土か
32	10YR3/1黒褐色粘土(マンガン多含)		遺構埋土か
33	N2/0粘土と7.5YR3/1黒褐色に7.5YR7/1明褐色土を含む層の互層		遺構埋土か
34	7.5YR4/1褐灰色土、砂混（マンガン多含）	Ⅴ	
35	7.5YR3/2黒褐色土（鉄分？含）	Ⅱ	
36	7.5YR3/1黒褐色土	Ⅲ	
37	7.5YR4/1褐灰色土（鉄分？多含）		
38	7.5YR3/2黒褐色土に10YR3/3暗褐色土含		
39	10YR4/1褐灰色土		
40	5G6/1緑灰色シルト	Ⅶ	テフラ層
41	10YR4/2灰黄褐色土に7.5YR4/1褐灰色土混		
42	10YR3/3暗褐色砂質土		
43	7.5YR3/1黒褐色粘質土（鉄分？含）	Ⅲ	
44	10YR3/1黒褐色粘土(鉄分？含)		
45	10YR3/1黒褐色砂質土		
46	10YR2/1黒色粘質土	Ⅴ	
47	10YR3/1黒褐色粘土	Ⅵ'	８層と対応
48	7.5YR2/1黒色粘質土（鉄分？含）		
49	7.5YR2/1黒色粘質土に7.5YR6/2褐灰色粘土混		
50	7.5YR3/2黒褐色砂質土に10YR3/3暗褐色土混	Ⅱ	
51	7.5YR4/1褐灰色粘質土（鉄分？含）	Ⅲ	
52	10YR4/2灰黄褐色砂質土に10YR7/6明黄褐色土多混		
53	10YR3/2黒褐色粘質土		
54	10YR4/2灰黄褐色土に7.5YR3/1黒褐色土混		
55	10YR4/2灰黄褐色砂質土		表土
56	10YR3/2黒褐色砂質土	Ⅱ	
57	7.5YR3/1黒褐色砂質土	Ⅲ	
58	N2/0黒色粘土	Ⅸ	黒地山
59	10YR5/2灰黄褐色粘土	Ⅹ	地山
60	10YR2/1黒色粘土に有機物（木片？）多混	Ⅺ	
61	5Y6/1灰色粘土　有機物混	Ⅻ	
62	2.5Y6/1黄灰色粘質土に10YR6/6明黄褐色土ブロック含	Ⅱ	
63	10YR4/3にぶい黄褐色粘質土（マンガン多含）		
64	10YR5/1褐灰色粘土（マンガン？鉄分？多含）	Ⅷ	
65	10YR2/1黒色粘質土（マンガン？鉄分？含）		遺構埋土
66	10YR6/4にぶい黄橙色砂質土（マンガン？鉄分？多含）		
67	10YR2/1黒色粘土に7.5GY6/1緑灰色粘土ブロック混）		遺構埋土
68	10YR5/1褐灰色粘土に7.5GY6/1緑灰色粘土ブロック多混）		遺構埋土

第６表　第９図第３次調査区Ⅱ地区、第４次調査区Ⅰ地区東西方向土層断面注記

（第４次Ⅰ地区東壁＜Ｒ－Ｓ＞）

1	表土	Ⅰ	
2	2.5Y4/1黄灰色土（鉄分多く固く締まる）	Ⅱ	
3	2.5Y2/1黒色粘土（石混入）	Ⅴ	
4	10YR4/1褐灰色粘質土に３が混入（小ブロック状に入る）	Ⅶ	
5	３に10YR4/1褐灰色粘質土が混入（小ブロック状に入る）		
6	2.5Y3/1黒褐色砂（礫含）		
7	5Y4/1灰色土と2.5GY5/1オリーブ灰色砂の混合（礫多含）		
8	2.5Y2/1黒色粘土（砂少含）	Ⅸ	

（第３次Ⅱ地区西壁＜Ｄ－Ｖ＞）

1	2.5Y5/4黄褐色土	Ⅰ	表土
2	2.5Y4/6オリーブ褐色粘質土	Ⅱ	
3	2.5Y7/4浅黄色粘土　粒状の鉄分混（5YR5/8明赤褐色）	Ⅲ	
4	記載なし		
5	5YR4/1褐灰色粘土　粒状の鉄分混（7.5YR5/8明褐色）	Ⅴ	
6	5YR4/1褐灰色粘土に３のブロック、鉄分混（7.5YR5/8明褐色）	Ⅴ	
7	5YR3/1黒褐色粘土　粒状の鉄分混（５よりは疎らで大粒7.5YR5/8明褐色）	Ⅵ	
8	10YR5/4にぶい黄褐色粘土に5YR4/1褐灰色粘土ブロック混、鉄分混	Ⅲ	
9	10YR5/1褐灰色粘土に３のブロック、鉄分粒混（5YR5/8明赤褐色）	Ⅴ	
10	10YR5/1褐灰色粘土に３のブロック、鉄分粒混		
11	7.5YR4/1褐灰色粘土、ややシルト質の部分あり、鉄分粒混	Ⅵ'	
12	10YR2/1黒色粘土に鉄分（5YR5/8明赤褐色）混		
13	10YR4/1褐灰色粘土に鉄分（5YR5/8明赤褐色）マンガン粒（7.5YR3/2黒褐色）混	Ⅵ'	
14	7.5YR4/1褐灰色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック、10YR3/1黒褐色粘土ブロック混	Ⅵ'	
15	10YR5/2灰黄色褐色粘土	Ⅶ?	
16	10YR5/2灰黄色褐色粘土（15よりやや粗い）	Ⅶ?	

第７表　第10図第３次調査区Ⅱ地区・第４次調査区Ⅰ・Ⅱ地区南壁土層断面注記

（第３次Ⅱ地区南壁・東壁＜Ｔ－Ｕ【第９図】＞）

No.	土　色	基本層序	備　考
1	表土	Ⅰ	
2	10YR4/1褐灰色粘質土　砂利クサリ礫混		
3	10YR7/1灰白色シルト　鉄分混		
4	10GY7/1明緑灰色シルト	Ⅷ	テフラ層
5	2.5Y4/2暗灰黄色粘質土	Ⅱ	
6	10YR4/1褐灰色粘質土	Ⅲ	
7	7.5YR4/1褐灰色粘質土（ややピンク掛かる）	Ⅲ	
8	7.5YR2/1黒色粘土　粒状の鉄分混	Ⅴ	
9	7.5YR3/1黒褐色粘土　粒状の鉄分混		
10	10YR6/8明黄褐色粘質土　鉄分混		
11	2.5Y6/4にぶい黄色粘質土　マンガン混		
12	2.5Y6/4にぶい黄色粘質土に7.5YR4/1褐灰色粘質土ブロック混		
13	5Y2/1黒色粘土		古代以降の埋土
14	2.5Y2/1黒色粘土(茶色掛かる)		古代（奈良）の埋土
15	N1.5/0黒色粘土		弥生～古墳の埋土
16	7.5YR2/1黒色粘土		遺構埋土
17	10YR2/1黒色粘土		遺構埋土
18	10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混		遺構埋土
19	10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと10GY7/1明緑灰色シルトブロック混		遺構埋土
20	2.5Y5/3黄褐色粘土　鉄分浸みる（植物の根）		
21	10YR5/1褐灰色粘土（西方はより明るい）東壁では上部が10YR4/1褐灰色粘土（ピンク掛かる）に漸移	Ⅶ	地山
22	2.5Y2/1黒～2.5Y4/1黄灰色粘土		
23	10YR5/1褐灰色粘土　ややシルト質		
24	10YR5/1褐灰色シルト（４に相当）	Ⅷ	テフラ層
25	10YR3/1黒褐色シルト		

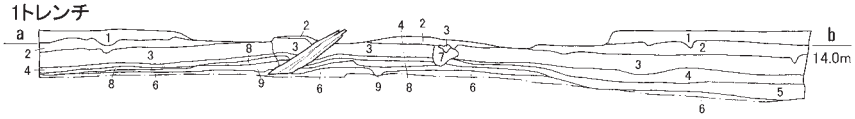
（第４次調査区Ⅰ地区南壁＜Ｕ－Ｘ＞）

1	表土	Ⅰ	
2	2.5Y4/1黄灰色土（鉄分多含）	Ⅱ	
3	5YR3/1黒褐色粘質土（鉄分含）	Ⅲ	
4	2.5Y2/1黒色粘質土（５よりも黒い鉄分含）	Ⅳ	
5	2.5Y2/1黒色粘質土（鉄分含）	Ⅳ	
6	2.5Y2/1黒色粘土		遺構埋土
7	６に10YR4/1褐灰シルト混入		遺構埋土
8	10YR4/1褐灰色粘土に６が混入（一部に砂を少し含む）		遺構埋土
9	６と10YR4/1褐灰色粘土との混入土（同率）		遺構埋土
10	5Y4/1褐（灰色？）粘土	Ⅶ	
11	10YR5/1褐灰色砂		
12	10YR4/1褐灰色粘土に少し６が混入		遺構埋土
13	5Y4/2灰オリーブ色土（鉄分多含）		
14	６に部分的にブロック状の15が混入		遺構埋土
15	10YR5/1褐灰色シルト		
16	10YR1.7/1黒色粘土（粘性特に強い、植物質多い）		遺構埋土
17	６に10YR4/1褐灰色シルトが混入		遺構埋土
18	2.5Y5/1黄灰色シルト（下方に行くに従い砂多混）		
19	10YR5/1褐灰色粘土	Ⅶ	
20	2.5Y6/1黄灰色シルト		
21	2.5Y4/1黄灰色粘質土		

（第４次調査区Ⅱ地区南壁＜Ｙ－Ｚ＞）

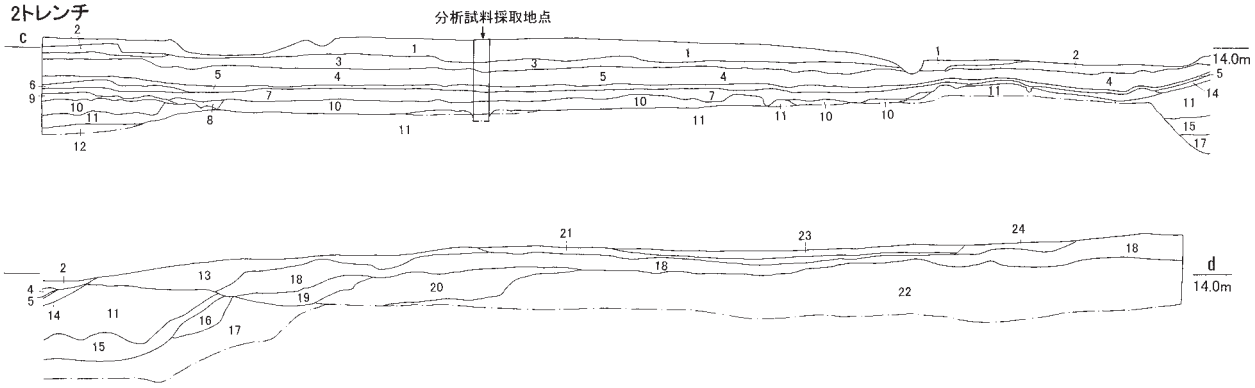
1	表土	Ⅰ	
2	10YR4/3にぶい黄褐色土（鉄分含）	Ⅱ	
3	10YR2/1黒色粘質土（鉄分砂含）ザラザラ感あり	Ⅳ	
4	10YR2/1黒色粘土	Ⅴ	
5	N3/灰色粘土		
6	N1.5/黒色粘土		
7	10YR4/1褐灰色シルト		
8	10YR4/1褐灰色砂		
9	2.5Y3/1黒褐色粘土（４と比べれば灰色に見える）	Ⅵ'	
10	７に４混ざる		
11	N1.5/黒色粘土に７が混ざる		遺構埋土
12	７にN1.5/黒色粘土混		遺構埋土
13	10YR4/1褐灰色シルト　７よりもより粗いシルト		
14	10YR3/1黒褐色粘質土（少しザラつき感はある、下のシルトの影響か）		
15	10YR5/1褐灰色シルト（７よりもずっと明るい）		
16	10BG5/1青灰色シルト（粘性あり）		
17	5Y2/1黒色粘土（鉄分少含）		遺構埋土
18	カクラン		

1トレンチ



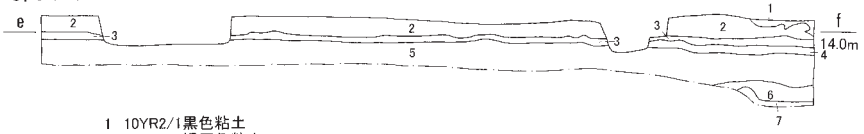
1 10YR5/1褐灰色粘土【北壁土層40層に相当】
2 5GY7/1明オリーブ灰色土【北壁土層58層に相当】
3 N2/0黒色粘土【北壁土層59層に相当】
4 10YR5/2灰黄褐色粘土(有機質多く含む)【北壁土層60層に相当】
5 10YR2/1黒色土層(有機質多く含む)【北壁土層61層に相当】
6 5Y6/2灰オリーブ色シルト
7 N2/0黒色粘土と10YR4/1褐灰色粘土がラミナを形成
8 10YR2/1黒色土層
9 10YR4/1褐灰色シルト

2トレンチ



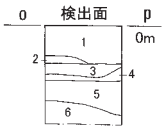
1 10YR5/1褐灰色粘土
2 10YR5/2灰黄褐色土
3 5GY7/1明オリーブ灰色土
4 N2/0黒色粘土
5 10YR5/2灰黄褐色粘土
6 10YR4/2灰黄褐色粘土(有機質混)
7 10YR2/1黒色土層(有機質多く含む)
8 10YR3/2黒褐色粘土に5Y6/2灰オリーブ色粘土ブロック混、有機質(木片)多混
9 10YR3/2黒褐色土(有機質多含)
10 5YR3/2黒褐色土と5Y6/2灰オリーブ色粘土の混
11 5Y6/2灰オリーブ色シルト
12 5Y6/2灰オリーブ色シルト(礫と有機質多混)
13 10GY6/1緑灰色土に鉄分多混
14 10YR3/1黒褐色粘質土
15 7.5GY7/1明緑灰色砂層と2.5Y5/1黄灰色砂の互層 ラミナ礫混
16 10GY7/1明緑灰色粘質シルト
17 10GY6/1緑灰色極細砂の地盤、しまり強 泥岩なりかけ
18 2.5GY7/1明オリーブ灰色土に鉄分多混じる
19 18層よりしまりが弱い
20 2.5GY7/1明オリーブ灰色土に2.5Y6/4にぶい黄色のクサリ礫を多く含む
21 7.5YR6/1褐灰色砂礫層
22 2.5GY5/1オリーブ灰色の岩(泥岩)盤
23 2.5Y7/2灰黄色砂質土
24 2.5Y7/1灰白色砂質土

3トレンチ



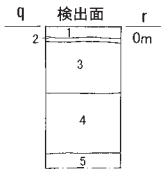
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR5/1褐灰色粘土
3 2.5Y4/1黄灰色粘土
4 N6/0灰色粘土
5 7.5GY6/1緑灰色粘質シルト
6 10GY6/1緑灰色砂質シルト
7 10GY5/1緑灰色砂層(礫多含)

8トレンチ(柱状図)



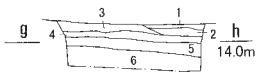
1 褐灰色粘土
2 砂礫
3 黒色粘土
4 砂礫
5 シルト
6 東海層群

9トレンチ(柱状図)



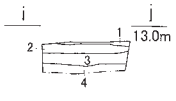
1 明黒色粘土
2 黒色粘土
3 砂礫
4 シルト
5 礫(大)

4トレンチ

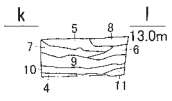


1 10YR4/1褐灰色粘土
2 10YR5/1褐灰色粘土に10YR6/6明黄褐色土多含
3 10YR5/1褐灰色粘土に10YR4/6褐色土多含、マンガン?含
4 10YR5/1褐灰色粘土に10YR6/6明黄褐色土少含
5 2.5Y3/1黒褐色粘土
6 5GY7/1明オリーブ灰色粘土

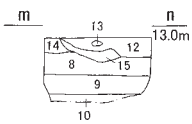
5トレンチ



6トレンチ



7トレンチ



1 10YR1.7/1黒色粘質土と10YR5/1褐灰色シルト(粘性あり)の混合
2 2.5Y5/1黄灰色シルト(少し粘性あり)
3 10YR4/1褐灰色シルト
4 10GY6/1緑灰色粘質土(砂、礫多含)
5 2.5Y2/1黒色粘土
6 10YR5/1褐灰色シルト(粘性あり)
7 5に6が混入
8 6に5が混入
9 10YR4/1褐灰色砂
10 10YR5/1褐灰色砂
11 5Y3/1オリーブ黒色シルト(砂含、少し粘性あり)
12 10YR1.7/1黒色粘土
13 10YR5/1褐灰色粘土
14 10YR6/1褐灰色シルト(粘性あり)
15 12に8が混入

0 4m

第11図　第２次、第４次調査区深掘トレンチ土層断面図・柱状図（１：100）

Ⅳ　調査の成果－遺構－

４か年にわたる本発掘調査において、土坑702基、溝４条を検出した。竪穴住居や掘立柱建物などは一切なく、ピットさえ１か所検出した程度であった。これらの土坑は、断面形状や土層の状況などから粘土採掘坑の可能性が高いと考え、調査を進めた。土坑全てに番号を与えておらず、また、番号を与えた全ての土坑に対し土層断面図あるいは写真撮影を行ってはいないが、特徴的な土層を持つ土坑、遺物が出土した土坑については記録を取っている。

報告書では、土坑は遺物が出土したもの、土層断面図など記録図面を作成したものについて遺構図を作成し掲載した。番号を付与した遺構の詳細については第８～17表を参照いただきたい。

遺構掘削時には床面・壁面を認知・判断することが難しく、大半の遺構が深く掘り抜いて土層断面を確認することにより本来の床面あるいは壁面を認識することとなった。また、土坑の壁がオーバーハング状を呈するものが多く、検出時の平面よりも掘削完了時には大きくなっているものが多い。調査区平面図は掘削完了後に作成したため、検出時の形状を表していない。また、個別遺構図の平面図は遺構本来の形状を示しているとはいえず、確認のため掘り抜いた最終掘削形態を表している場合が多い。遺構平面図と合わせて土層断面図を確認いただきたい。

出土遺物から、大半が弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構であると思われるため、調査次の順に、その中から特徴のあるものについて記述する。

１　第２次調査区

第２次調査では、検出した全ての土坑に番号を与えていない。土坑は不整形を呈するものが大半で、その規模も長径1.0ｍほどのものから4.0ｍを超えるものまでさまざまである。また、オーバーハングの見られるものが多い。

ＳＫ３（第16図）　底より正位で土師器台付甕（２）が出土した。最下層は自然堆積と思われ、土坑が３分の１程の深さまで埋まった段階でブロック土が流入している。

ＳＫ６（第16図）　西側が別土坑に切られる。ＳＫ６の下層埋土はブロック状を呈する。その下層埋土と、その上に堆積した層（おそらく自然堆積）を切って西側土坑が掘削されたことから、ＳＫ６と西側土坑との掘削にはやや時間差があることがわかる。なお、西側土坑の下層埋土もブロック状の埋土である。また、西側土坑は西壁がややオーバーハング気味となる。いずれも、土坑底面は褐灰色粘土層である。出土遺物はない。

ＳＫ17（第17図、写真図版６）　オーバーハング状を呈する。また第２層は埋土であるが、その上下に第１層が入り込み、不自然な堆積状況である。このような埋土を持つ他の土坑の状況から、第２層はオーバーハング上部（天井部）の地山の崩落土と考えられる。

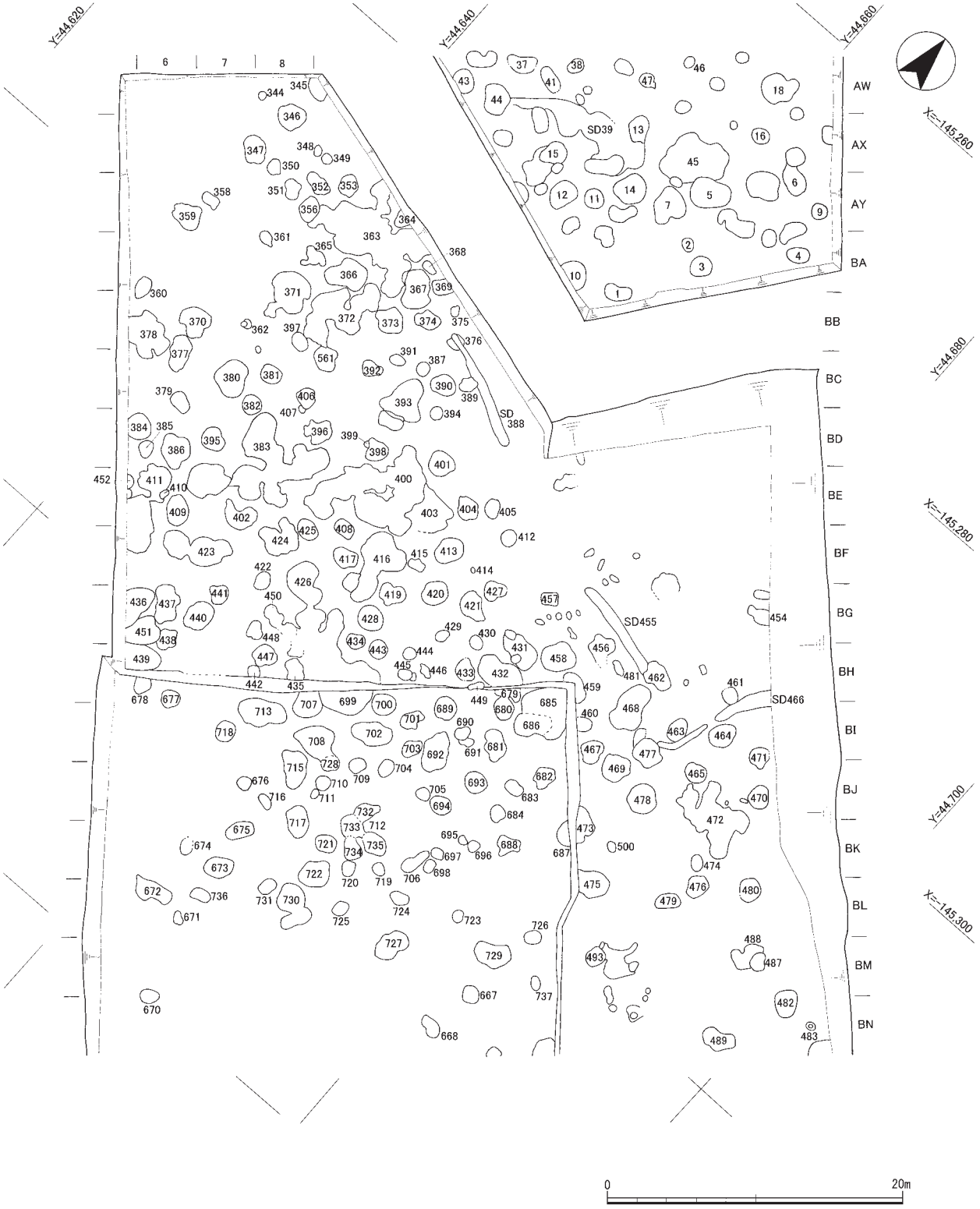
ＳＫ19（第17図、写真図版６）　西側がややオーバーハング気味である。埋土は２層で、いずれもブロック土を含む。

ＳＫ28（第20図、写真図版８）　底面は２段を成す。壁面は北東部がわずかにオーバーハング状を呈する。床面から約25㎝浮いた位置で手焙形土器（14）が正位で、約35㎝浮いた位置で籠製品（13）が横を向いた状態で出土した。手焙形土器内部の土を洗浄・選別を行ったが混入物は見られなかった。また、土器底内面には植物状のものが巻いた状態で付着していたことから自然科学分析を実施したが、後世に混入した植物痕であった。

ＳＫ35（第21図）　平面検出ではＳＫ35の東側に同じ黒色土を埋土に持つ土坑が瓢箪のようにつき、その中央くびれ部分上に、ブロック状埋土の楕円形土坑が切るように検出された。しかし、土層観察ではブロック状埋土の土坑はＳＫ35東側土坑の第２層埋土であり、３つの土坑が重複しているのではなく、ＳＫ35を別土坑が切る、２つの土坑の切り合いであることがわかった。この別土坑はＳＫ35を掘削後、ＳＫ35が自然堆積により埋没した後に掘削し、その後ブロック土が流入している。

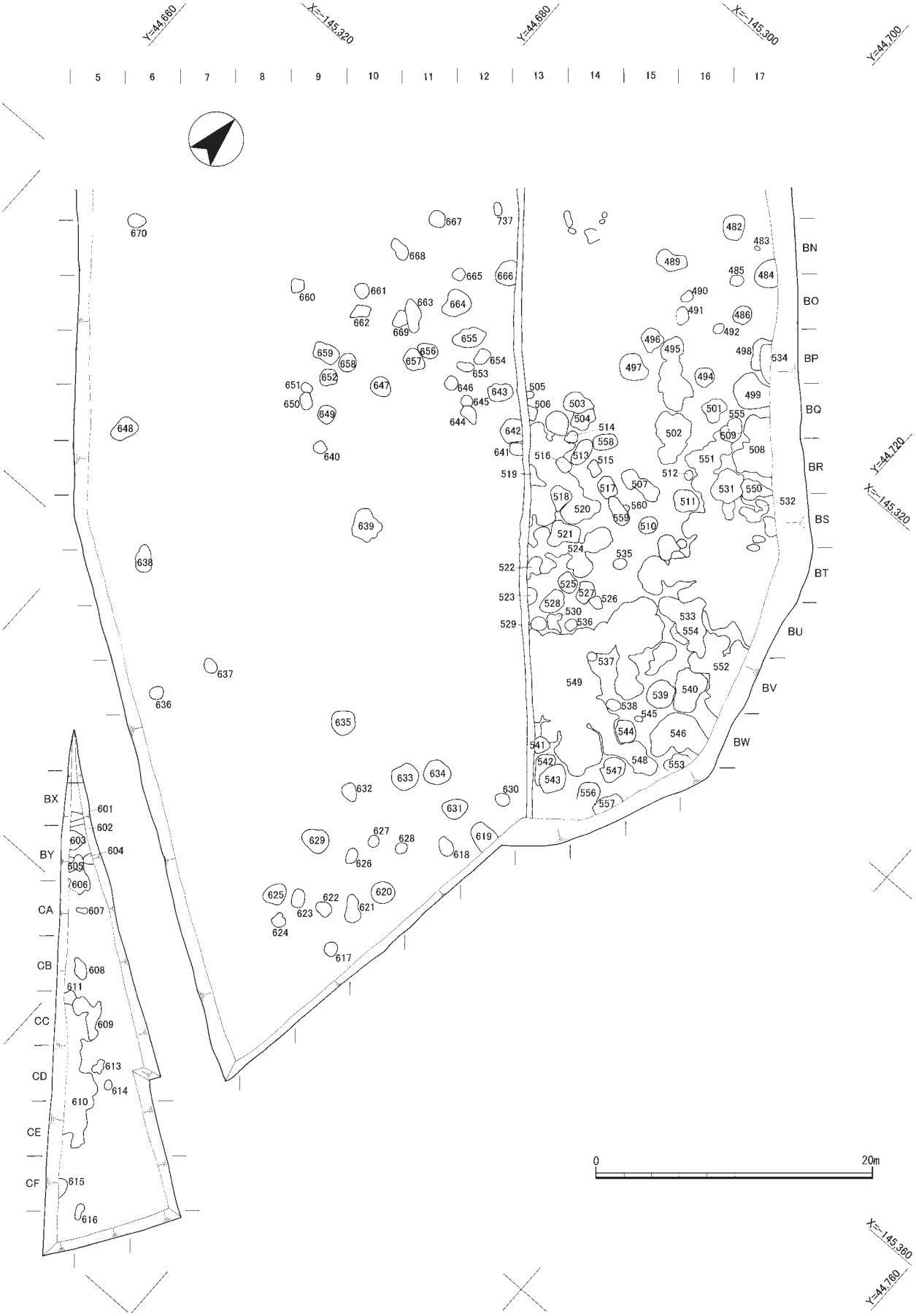
ＳＫ37（第20図）　底面は、平面では表現できてい

第12図　遺構平面略図１（１：400）



第13図　遺構平面略図２（１：400）

第14図　遺構全体図１（１：300）



第15図　遺構平面略図３（１：400）

ないが中央が高く、西側と東側が深く落ち込む形状となる。埋土の状況から、土坑掘削と第２層以下の埋没時期が東西土坑では異なる可能性がある。第１層の埋没は同時である。東・西ともオーバーハング状を呈するが、特に東側のオーバーハングは横方向に深くみられる。これは、オーバーハング部が上からの土圧により押し潰されたことを示すものと思われる。

ＳＫ38（第20図） 北側がオーバーハングを呈する。埋土は１層で自然堆積である。

ＳＫ45（第21図） 底面はかなりの凹凸があり、埋土はブロック状を呈する層ほぼ１層である。底面を平坦にするなど整えることを目的とせずに掘削し、すぐに埋め戻したのであろう。

ＳＫ47（第23図、写真図版９） 土坑の北辺付近を除きほぼ全体が、基本層序第Ⅷ層・明オリーブ灰色粘土層でオーバーハングを呈する。埋土は底から３分の１程はブロック土が堆積し、それから上部は自然堆積である。底面からやや浮いた状態で籠製品（17）と不明木製品（18）が出土したが、ブロック土の堆積途中に入り込んだものと思われる。

ＳＫ54（第24図） 土層図の西側がややオーバーハング状を呈する。埋土下層はブロック状を呈する。また、土層図の東側にみられる第１層は、オーバーハング気味に掘削した部分の上部の壁が第２層埋没後に崩落したことによりこのような堆積状況を示していると考える。よって、この部分についても本来はオーバーハング状を呈していたといえる。

ＳＫ56（第24図） ブロック状を呈する第４層のすぐ上の第３層にはラミナが見られることから、この土坑は第４層土の堆積後はしばらく開いた状態であり、水が入り込むなどして自然に堆積していったと考えられる。また、第２層は前述のＳＫ54と同様、オーバーハング部分の上部の壁の崩落土と考えられる。よって、この土坑についてもオーバーハング気味に掘削されたといえる。図化できないが、弥生時代末～古墳時代初頭頃の煤が付着した土師器甕破片が出土している。

ＳＫ61（第26図、写真図版９） ややオーバーハング状を呈する。最下層にはブロック土が25㎝程堆積する（第４層）。その後、第３層にはラミナが見られることから、第４層堆積後は自然に堆積していったことがわかる。また、第１層はその第３層を切っているかのように堆積して見られることから、一度少なくとも検出面のレベルまで堆積した後、再度土坑中央付近をブロック土層上面まで掘削したと考えられる。

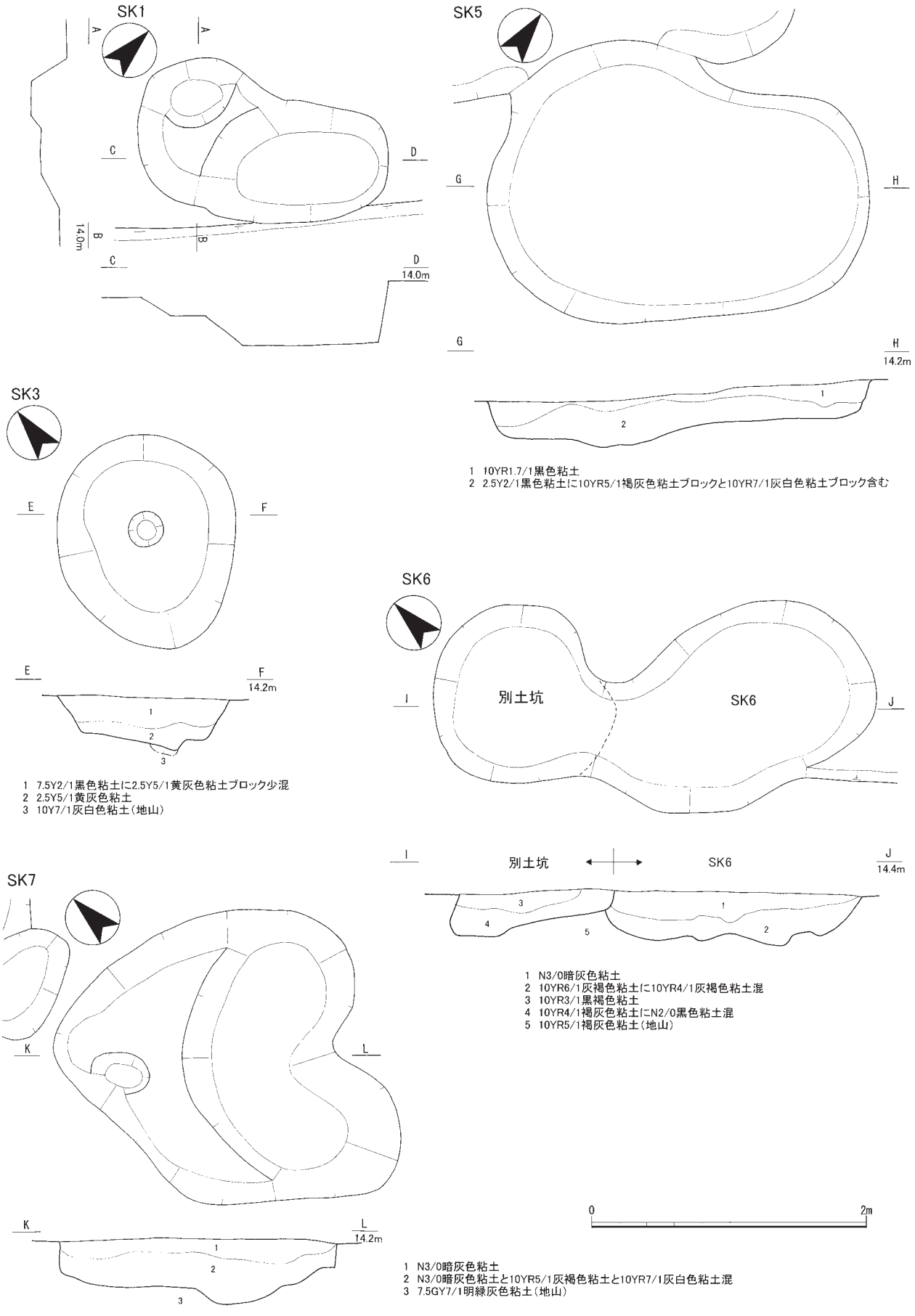
ＳＫ71（第29図） 土層断面では東・西壁ともオーバーハング状を呈する。ブロックを含む層が床面から検出面まで見られる。また、第１・２層はオーバーハング上面の壁面の崩落土であろう。

ＳＫ83（第32図、写真図版10） 東・西壁付近でオーバーハング状を呈する。底から約10㎝の高さまでブロック土が堆積するが、その層上面の東側がやや高くなることから、東側の壁をオーバーハング気味に掘削した後、西側の壁も横方向に掘削して粘土を採掘し、その際に出た排土を東側に寄せた状況を示す可能性もある。低くなった西側最下層埋土の上にはラミナの見られる層があり、しばらく土坑は開いた状態であったと考えられる。その第２層上面で土師器台付甕（12）が横位で出土したことから、土坑の掘削時期とこの土器が入った時期には差があり、土坑の掘削は廻間Ⅰ式より古い時期といえる。

ＳＫ94（第34図、写真図版10） 床面から約８㎝浮いて弥生土器（土師器）甕（16）が横位で出土した。埋土の状況が不明のため、土坑の時期は土器の時期である山中Ⅱ式～廻間Ⅰ式と同時期か、より古いと考えられる。

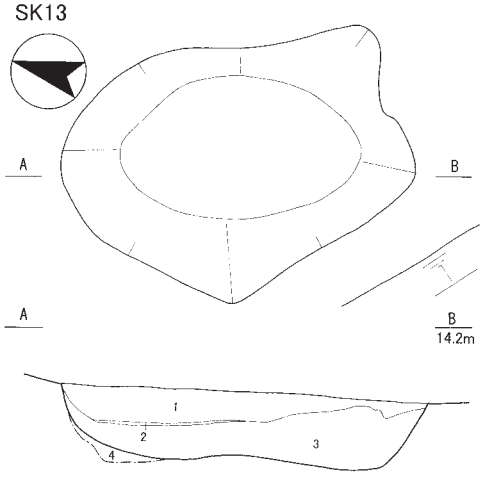
ＳＫ127（第38図） 円形を志向した比較的整った平面形を呈するが、断面を見ると床面は凹凸が著しく、何かを埋設するために掘削したのではなく、掘削という行為自体を目的として行われたといえる。埋土は床面直上の第２層がブロック状を呈する。

ＳＤ39（第40図） 溝として調査したが、他の土坑と同様の不整形土坑に約３ｍの溝がつながるものと考えられる。その溝の部分の土層断面図は作成しておらず、溝の状況は不明である。土坑部分は床面直上にブロック状の埋土が見られるが、付属する溝との関係は不明である。



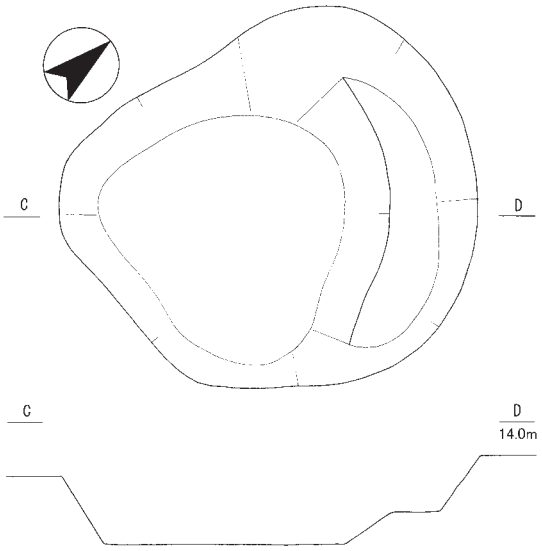
第16図　ＳＫ１・３・５・６・７遺構図（１：40）

SK13

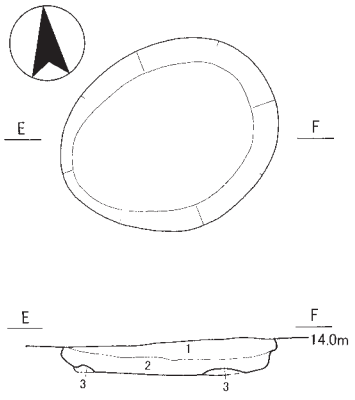


1 2.5GY黒色粘土
2 10YR4/1褐色粘土（ごく薄い層）
3 N5/0灰色粘土に2.5GY7/1明オリーブ灰色粘土と2GY黒色粘土混
4 7.5GY7/1明緑灰色粘土（地山）

SK14

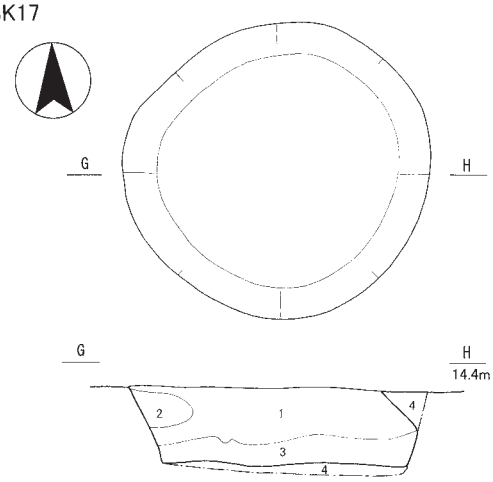


SK16



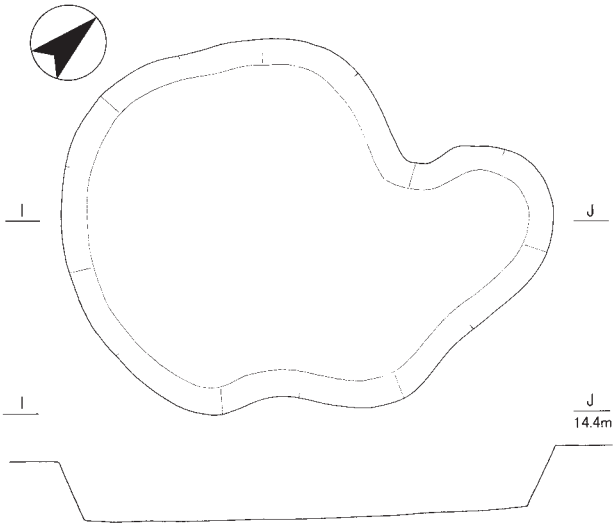
1 2.5Y2/1黒色粘土
2 10YR5/1褐灰色粘土に10YR3/1黒褐色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土（地山）

SK17

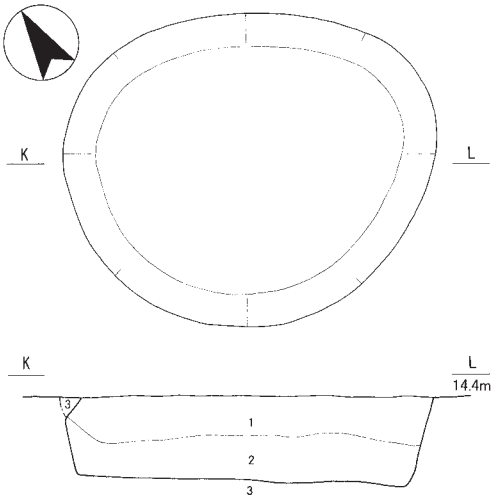


1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR3/1黒褐色粘土
3 10YR5/1褐灰色粘土
4 2.5GY7/1明オリーブ灰色粘土（地山）

SK18

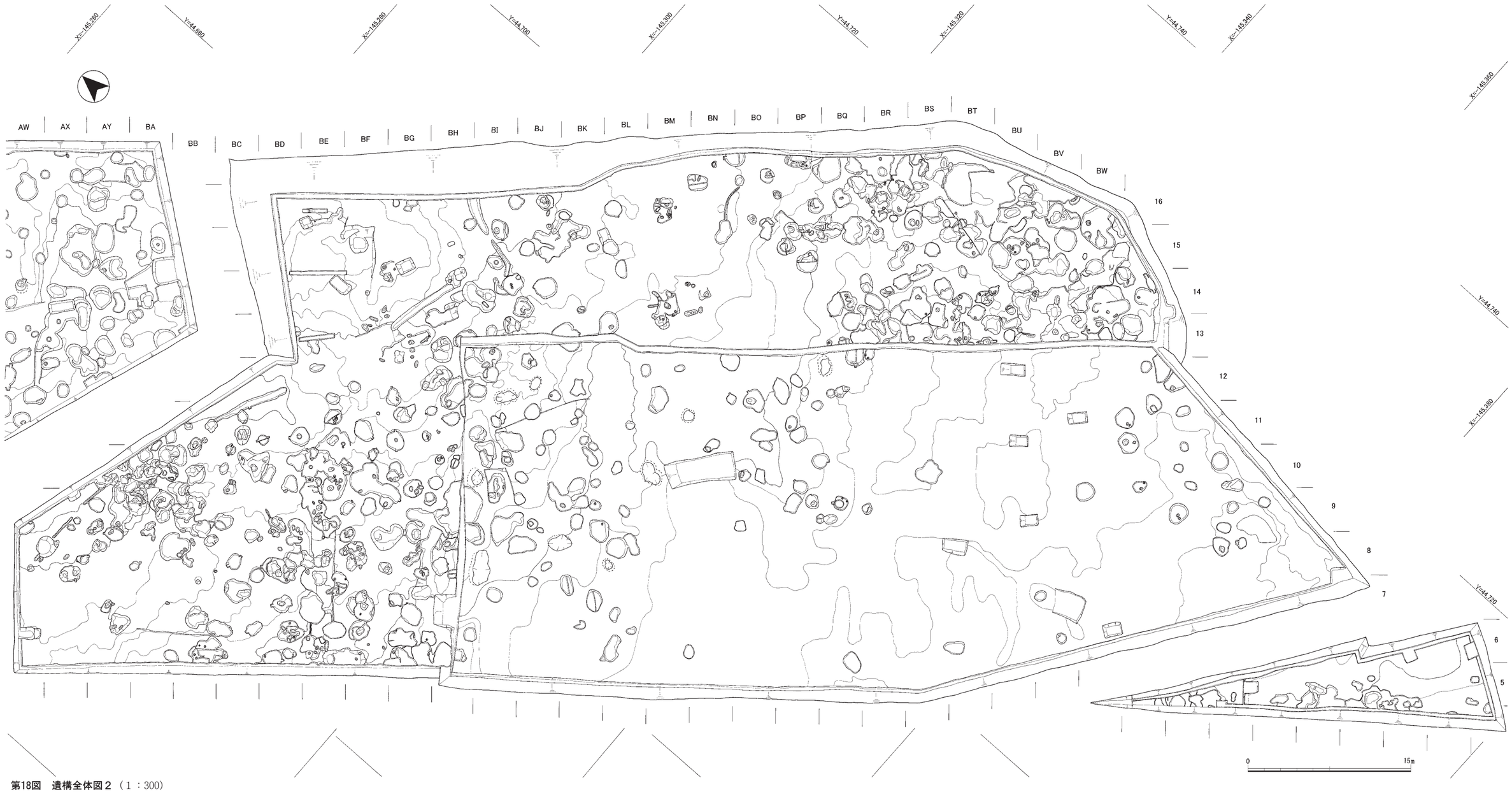


SK19

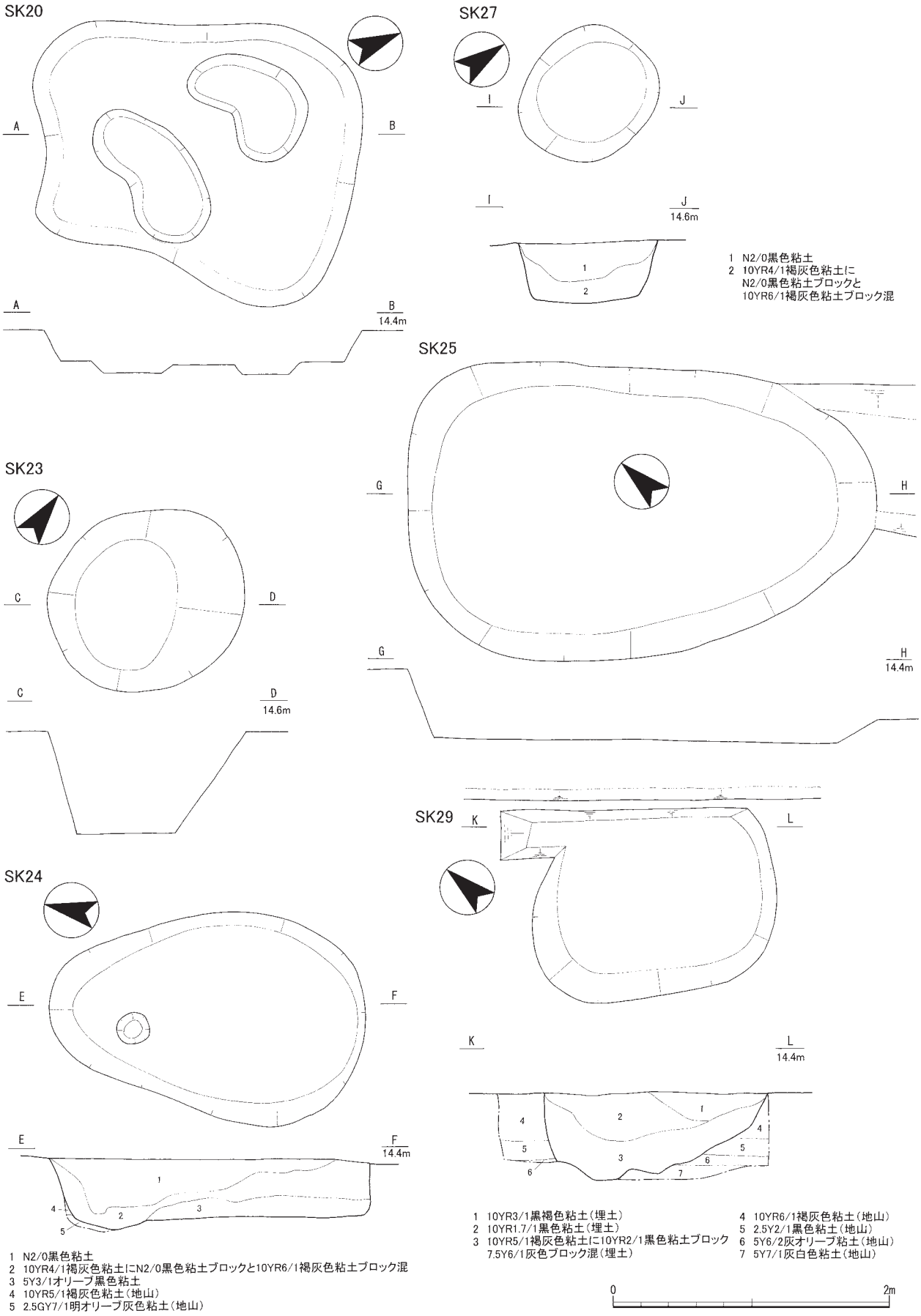


1 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック
2 10YR5/1褐灰色粘土に2.5Y2/1黒色粘土ブロック混
3 2.5GY7/1明オリーブ灰色粘土（地山）

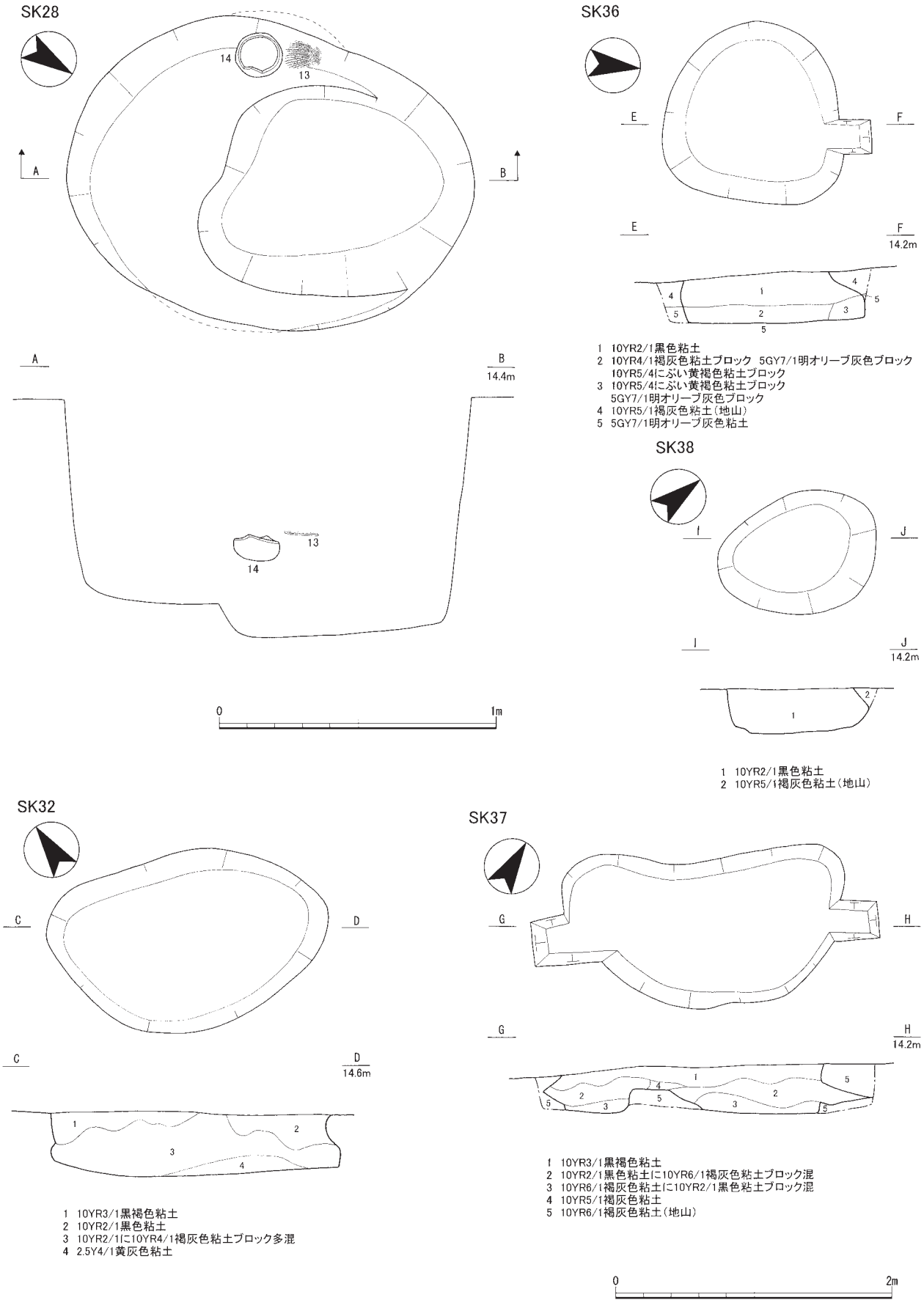
第17図　ＳＫ13・14・16～19遺構図（１：40）



第18図　遺構全体図２（１：300）

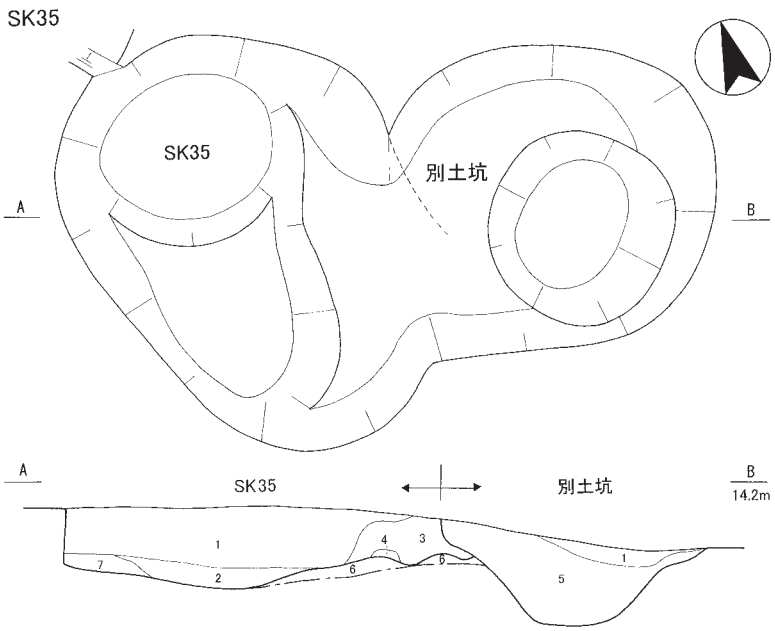


第19図　ＳＫ20・23～25・27・29遺構図（１：40）



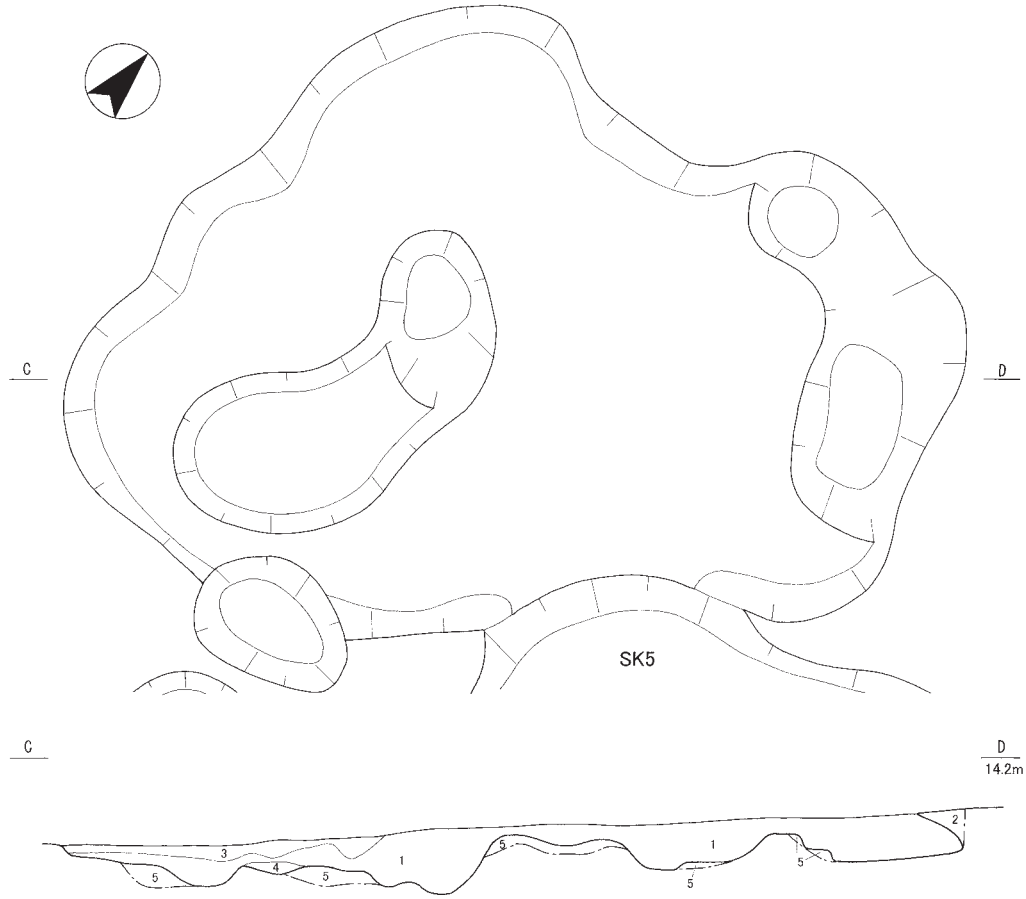
第20図　ＳＫ28・32・36～38遺構図（ＳＫ28は１：20、それ以外は１：40）

SK35



1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR3/1黒褐色粘土に5GY7/1明オリーブ灰色粘土ブロック混
3 10YR5/1灰褐色粘土
4 5GY7/1明オリーブ灰白色粘土に2.5Y2/1黒色粘土ブロック混
5 2.5Y2/1黒色粘土ブロック 5GY7/1明オリーブ灰色粘土ブロック
10YR4/1褐灰色粘土ブロック 10YR5/3褐灰色粘土ブロック
6 5GY7/1明オリーブ灰色粘土(地山)
7 10YR5/1褐灰色粘土に10YR7/6明黄褐色粘土含

SK45

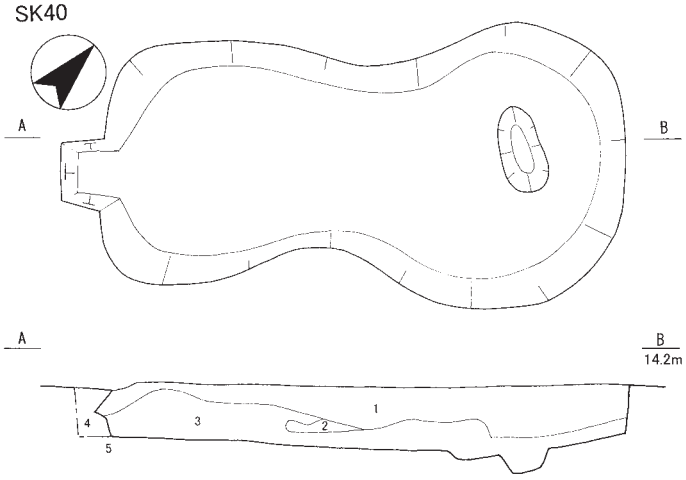


1 10YR2/1黒色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロックと
5GY7/1明オリーブ灰色粘土ブロック混
2 10YR5/1褐灰色粘土
3 10YR2/1黒色粘土
4 5GY7/1明オリーブ灰色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロック混
5 5GY7/1明オリーブ灰色粘土

0 2m

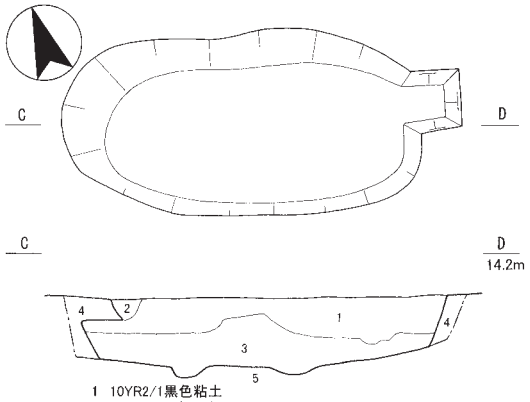
第21図　ＳＫ35・45遺構図（１：40）

SK40



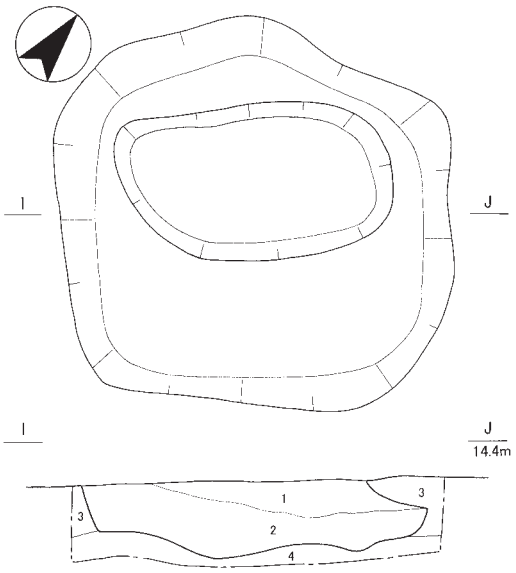
1 10YR2/1黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土
3 10YR4/1褐灰色粘土に5GY7/1明オリーブ灰色粘土ブロックと
10YR7/1灰白色粘土ブロック混
4 10YR6/1褐灰色粘土（地山）
5 5GY7/1明オリーブ灰色粘土（地山）

SK41



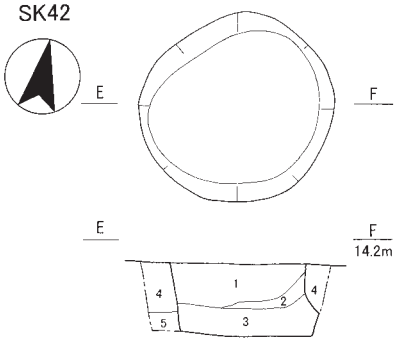
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR3/1黒褐色粘土
3 10YR5/1褐灰色粘土に5GY7/1明オリーブ灰白粘土ブロック10YR6/1
褐灰色粘土ブロック多量2.5Y2/1黒色粘土ブロック混
4 10YR6/1褐灰色粘土（地山）
5 5GY7/1明オリーブ灰色粘土（地山）

SK48



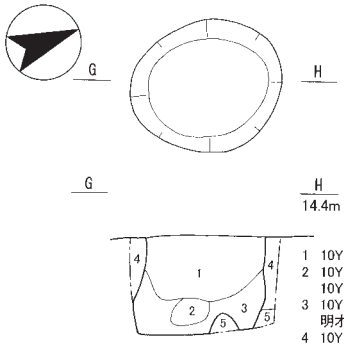
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
4 5GY7/1明オリーブ灰色粘土（地山）

SK42



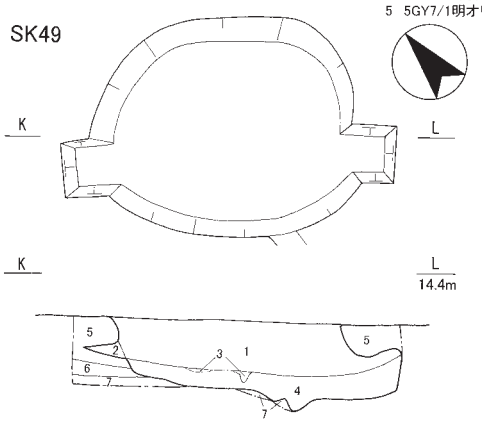
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR4/1黒褐色粘土に5GY7/1明オリーブ灰色粘土ブロックと
10YR2/1黒色粘土ブロック混
3 10YR2/1黒色粘土と2.5Y2/1黒色粘土の互層（ラミナ）下に
10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混じる部分あり
4 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
5 5GY7/1明オリーブ灰色粘土（地山）

SK46



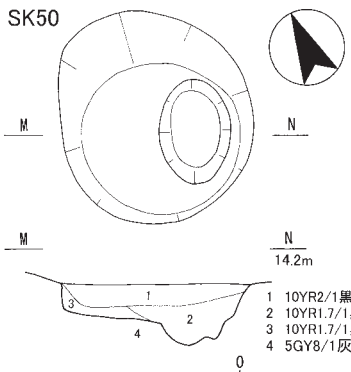
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR4/1褐灰色粘土に
10YR2/1黒色粘土ブロック多混
3 10YR4/1褐灰色粘土に5GY7/1
明オリーブ灰色粘土ブロック少混
4 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
5 5GY7/1明オリーブ灰色粘土（地山）

SK49

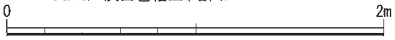


1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR6/6明黄褐色粘土
4 10YR4/1褐灰色粘土に10YR2/1黒色粘土ブロックと
5GY7/1明オリーブ灰色粘土ブロック含
5 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
6 2.5GY2/1黒色粘土（地山）
7 5GY7/1明オリーブ灰色粘土（地山）

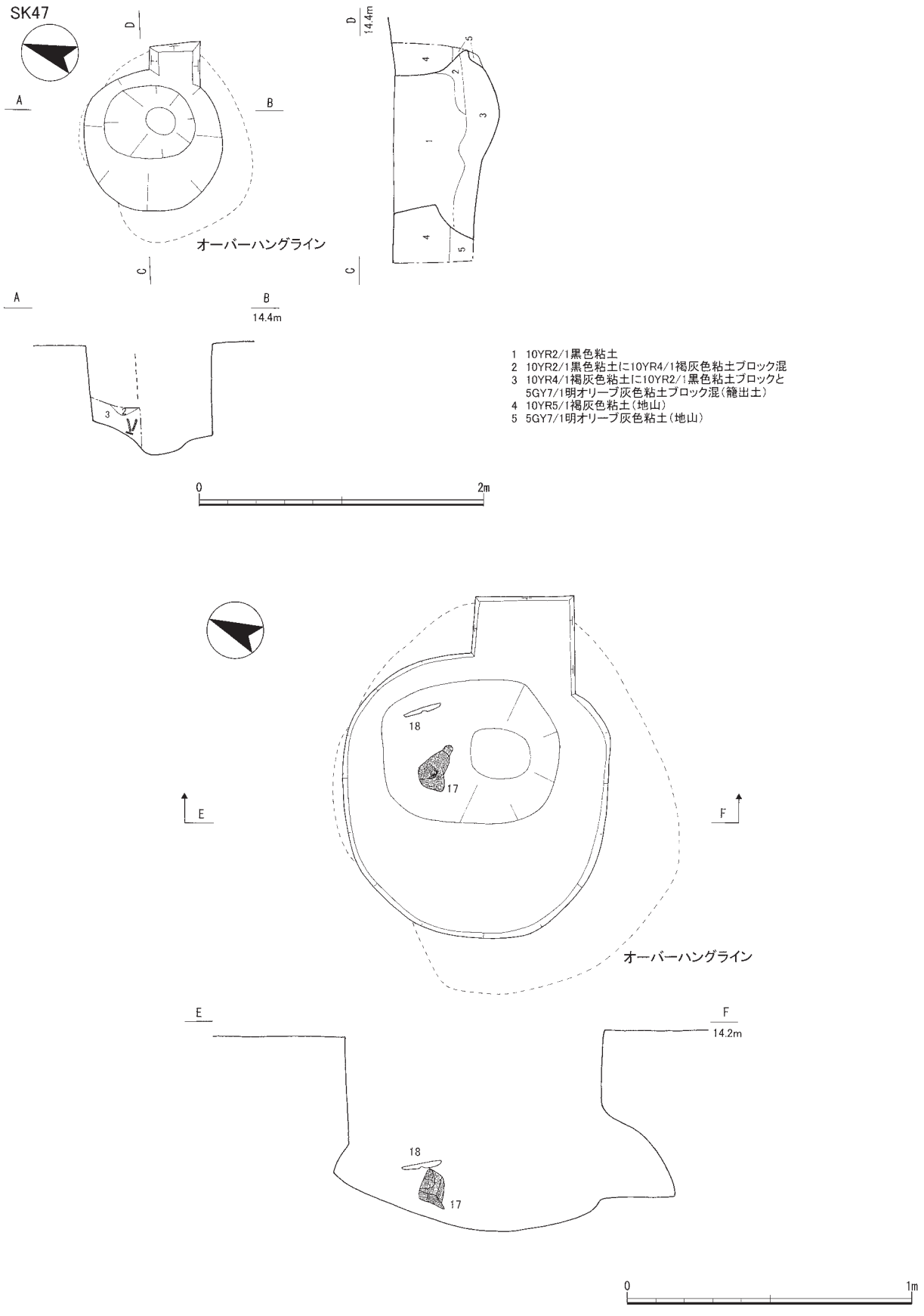
SK50



1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR1.7/1黒色粘土に10YR7/1灰白色粘土ブロック混
3 10YR1.7/1黒色粘土に5GY8/1灰白色粘土ブロック混
4 5GY8/1灰白色粘土（地山）

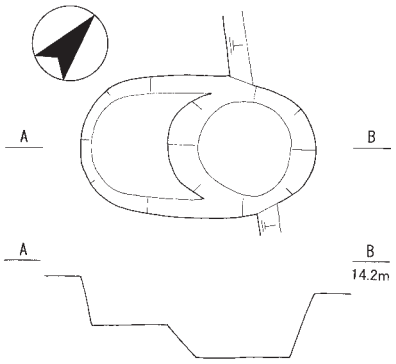


第22図　ＳＫ40～42・46・48～50遺構図（１：40）

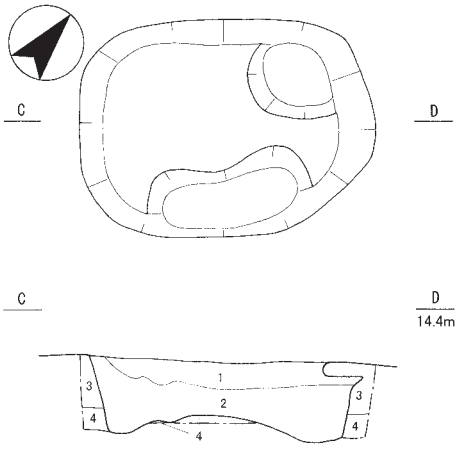


第23図　ＳＫ47遺構図（土層図は１：40、出土状況図は１：20）

SK51

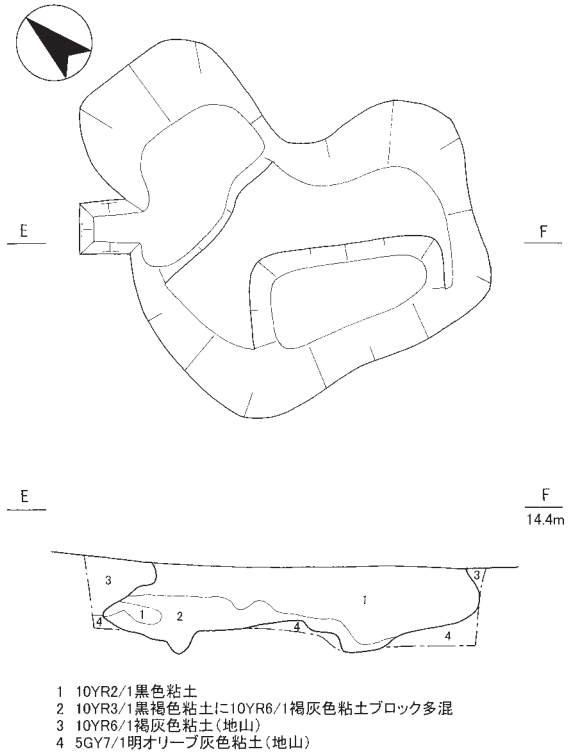


SK52



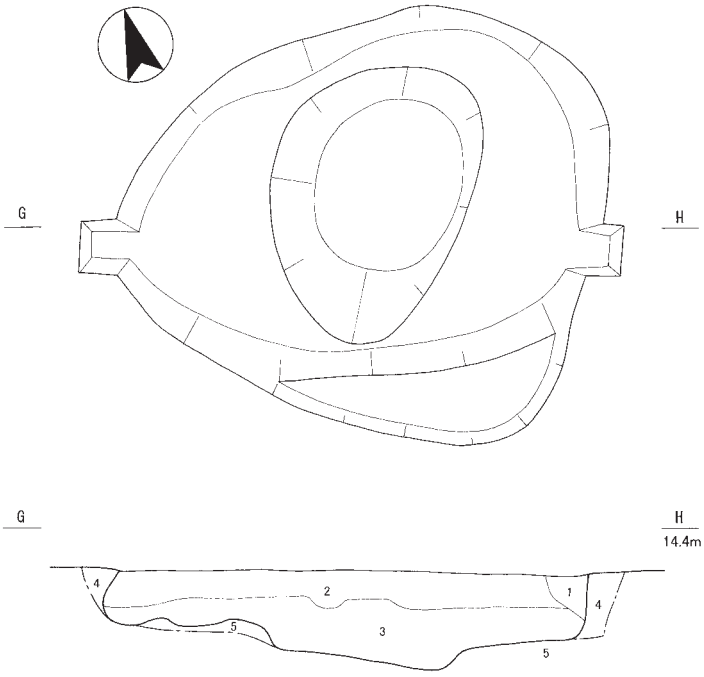
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR4/1褐灰色粘土に10YR2/1黒色粘土ブロックと
5GY7/1明オリーブ灰色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
4 5GY7/1明オリーブ灰色粘土(地山)

SK53



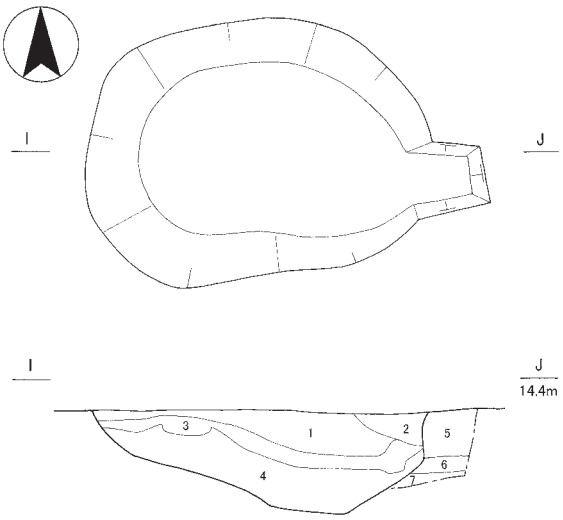
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR3/1黒褐色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロック多混
3 10YR6/1褐灰色粘土(地山)
4 5GY7/1明オリーブ灰色粘土(地山)

SK54



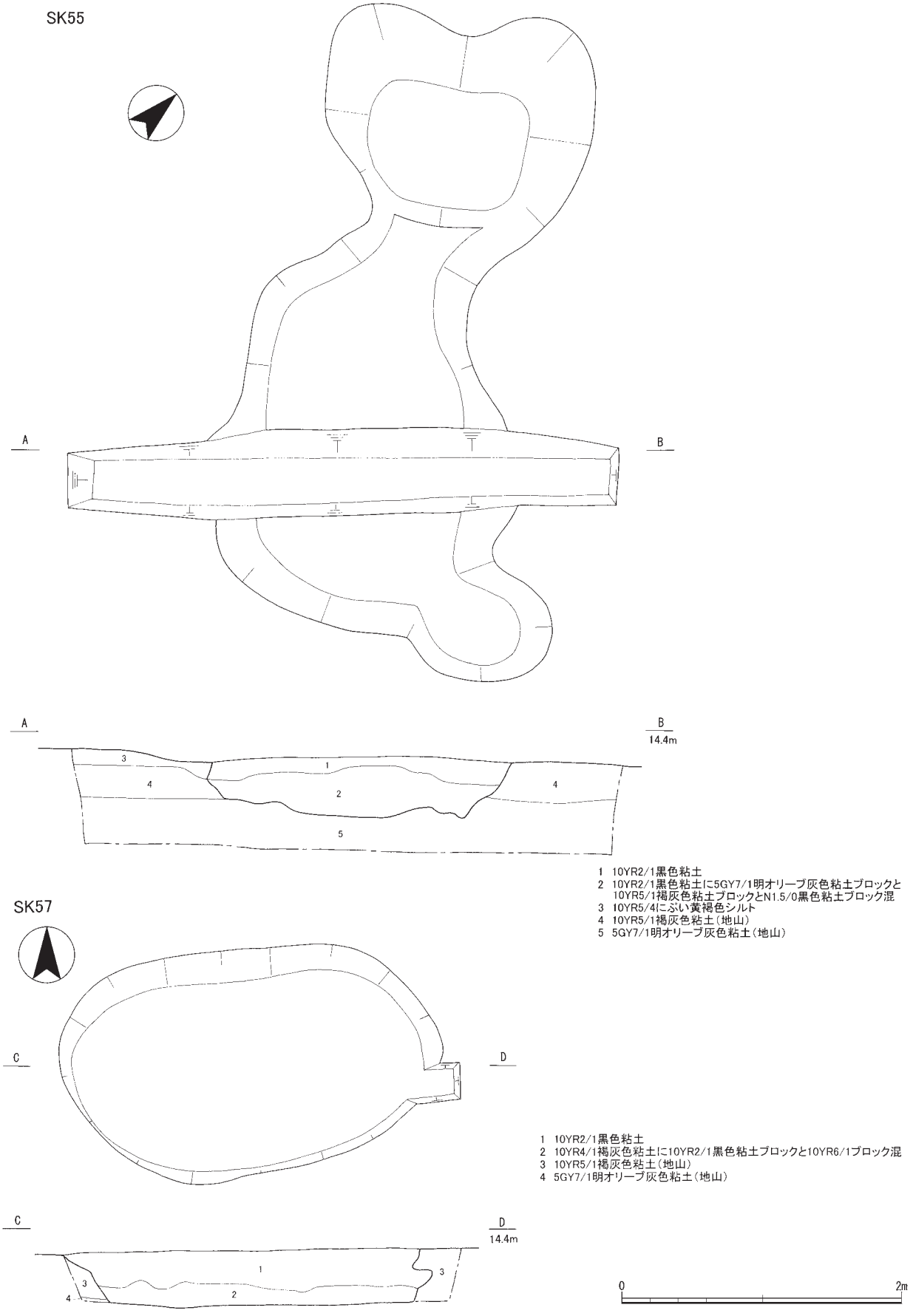
1 10YR3/1黒褐色粘土
2 10YR2/1黒褐色粘土
3 10YR2/1黒褐色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
5 7.5GY7/1明緑灰色粘土(地山)

SK56



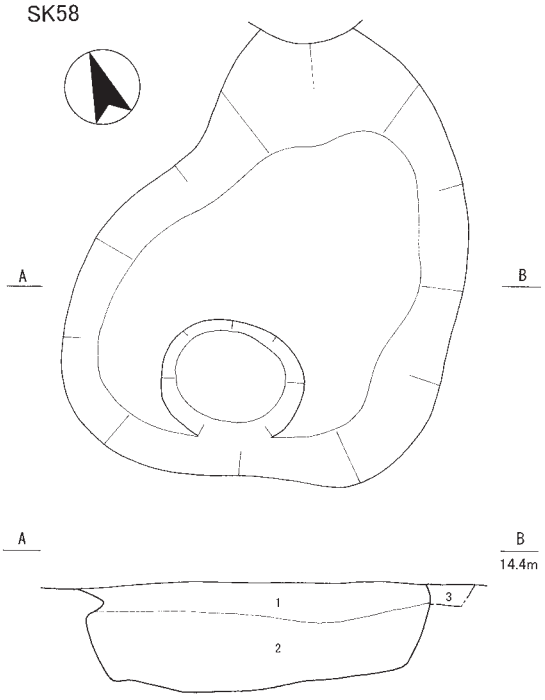
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR3/1黒褐色粘土
3 7.5YR3/1黒褐色粘土と10YR5/1褐灰色粘土の互層
4 10YR2/1黒色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロックと
5GY7/1明オリーブ灰色粘土ブロック混
5 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
6 N3/1暗灰色粘土(地山)
7 5GY7/1明オリーブ灰色粘土(地山)

第24図　ＳＫ51～54・56遺構図（１：40）



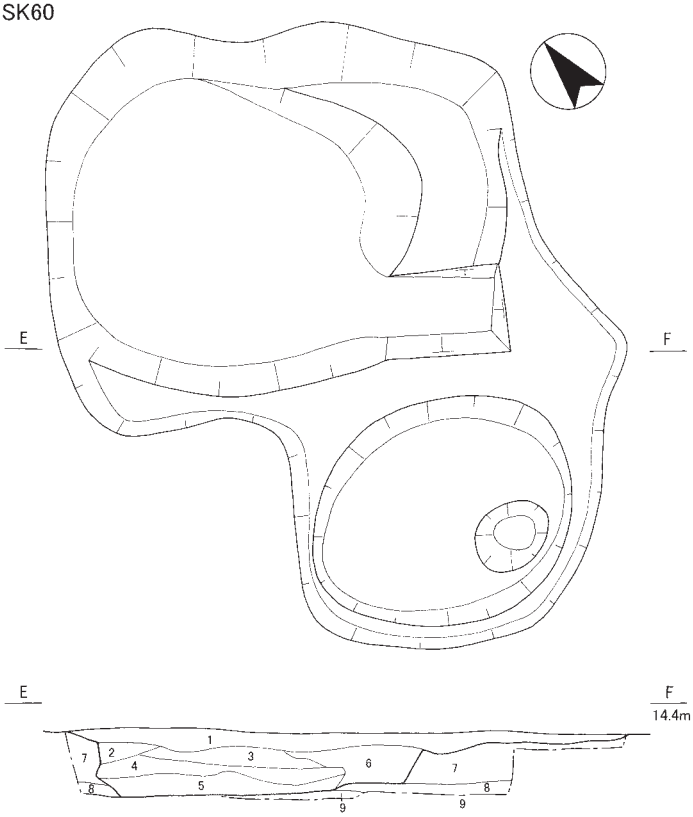
第25図　ＳＫ55・57遺構図（１：40）

SK58



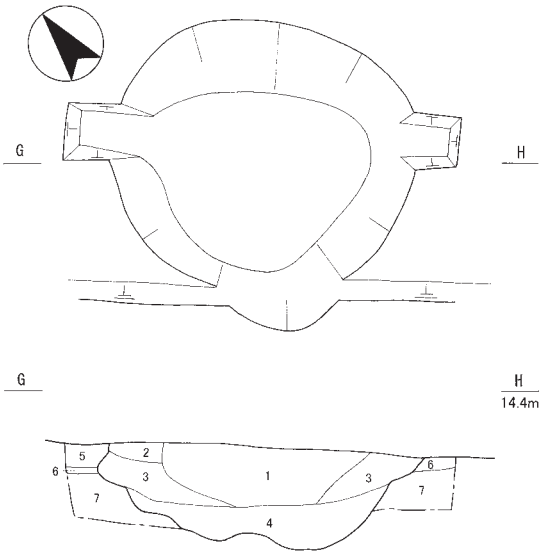
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR3/1黒褐色粘土に10YR2/1黒色粘土ブロックと
5GY7/1明オリーブ灰色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土

SK60



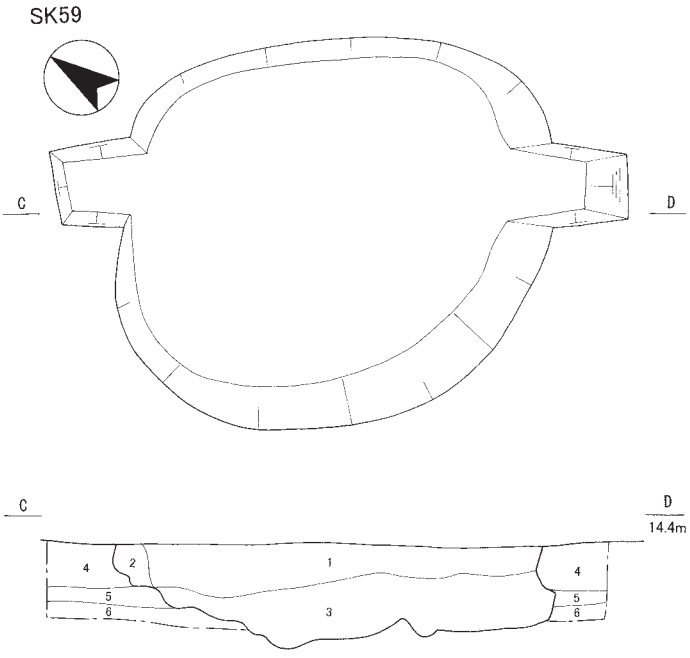
1 10YR3/1黒褐色粘土
2 10YR4/1褐灰色粘土
3 10YR2/1黒色粘土
4 10YR3/1黒褐色粘土と10YR2/1黒色粘土の互層
5 10YR3/1黒褐色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロックと10YR2/1黒色粘土ブロック混
6 2と同一
7 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
8 2.5Y5/1黄灰色粘土(地山)
9 5GY7/1明オリーブ灰色粘土(地山)

SK61



1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR3/1黒褐色粘土
3 10YR2/1黒色粘土と10YR5/1褐灰色粘土の互層
4 10YR4/1褐灰色粘土に10YR2/1黒色粘土ブロックと
5GY7/1明オリーブ灰色粘土ブロック混
5 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
6 2.5Y5/1黄灰色粘土(地山)
7 5GY7/1明オリーブに灰色粘土(地山)

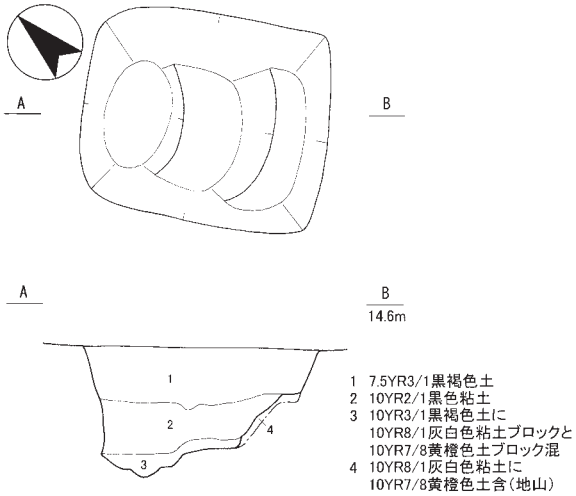
SK59



1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR4/1褐灰色粘土
3 10YR4/1褐灰色粘土に10YR2/1黒色粘土ブロックと
5GY7/1明オリーブ灰色粘土ブロック混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
5 2.5Y4/1黄灰色粘土(地山)
6 5GY7/1明オリーブ灰色粘土(地山)

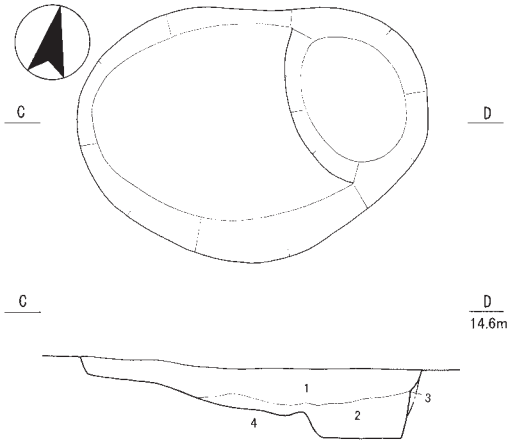
第26図　ＳＫ58～61遺構図（１：40）

SK62



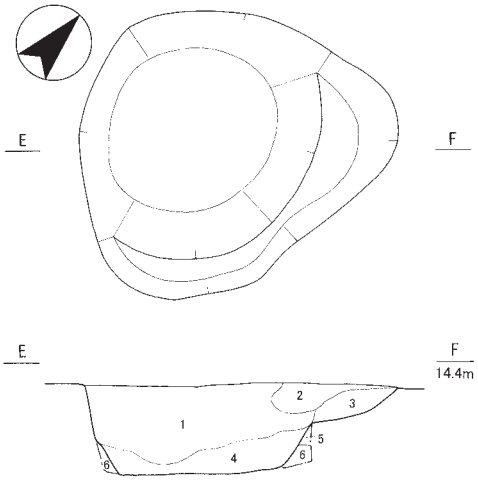
1 7.5YR3/1黒褐色土
2 10YR2/1黒色粘土
3 10YR3/1黒褐色土に
10YR8/1灰白色粘土ブロックと
10YR7/8黄橙色土ブロック混
4 10YR8/1灰白色粘土に
10YR7/8黄橙色土含(地山)

SK63



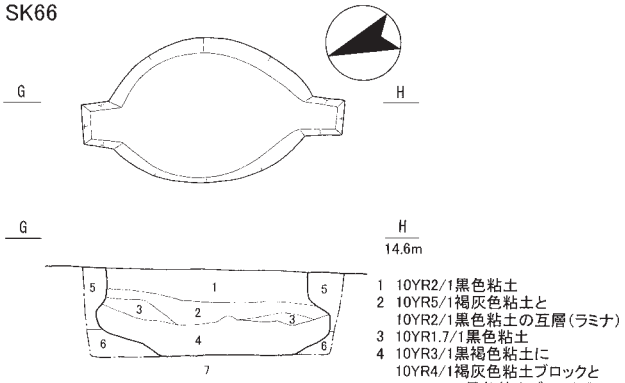
1 7.5YR3/1黒褐色粘質土
2 10YR3/1黒褐色粘土に10YR8/1灰白色粘土ブロックと
10YR7/8黄橙色土ブロック多含
3 10YR6/4にぶい黄橙色土にマンガン？多含(地山)
4 10YR8/1灰白色粘土に
10YR7/8黄橙色土含む(地山)

SK65



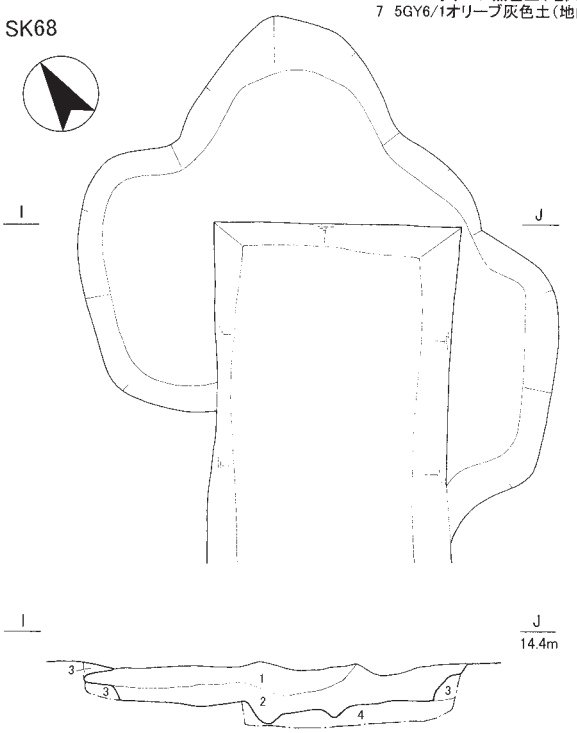
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR3/1黒褐色粘土
3 10YR4/1褐灰色粘土
4 10YR3/1黒褐色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
5 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
6 2.5Y3/1黒褐色粘土(地山)

SK66



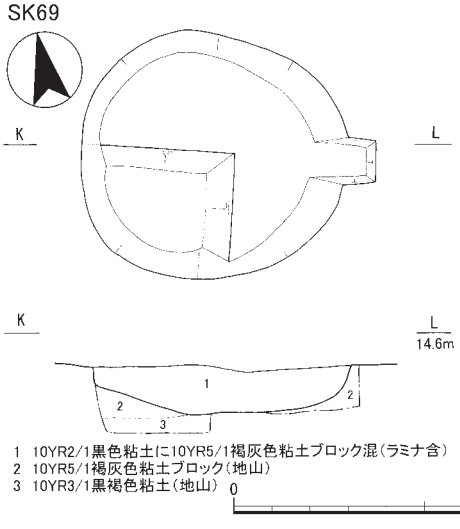
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR5/1褐灰色粘土と
10YR2/1黒色粘土の互層(ラミナ)
3 10YR1.7/1黒色粘土
4 10YR3/1黒褐色粘土に
10YR4/1褐灰色粘土ブロックと
10YR1.7/1黒色粘土ブロック混
5 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
6 5Y2/2オリーブ黒色土(地山)
7 5GY6/1オリーブ灰色土(地山)

SK68



1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
4 10YR3/1黒褐色粘土(地山)

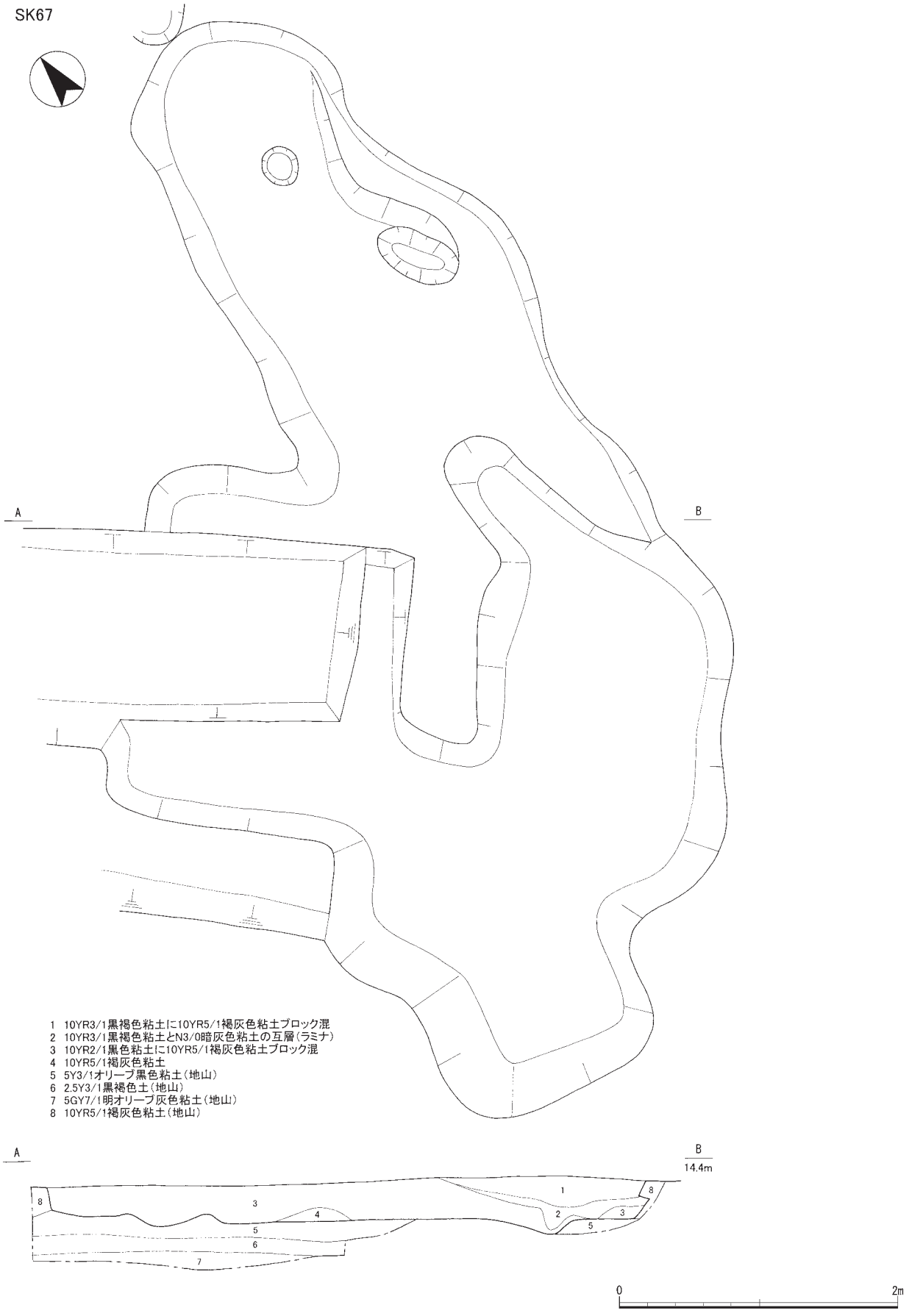
SK69



1 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混(ラミナ含)
2 10YR5/1褐灰色粘土ブロック(地山)
3 10YR3/1黒褐色粘土(地山)

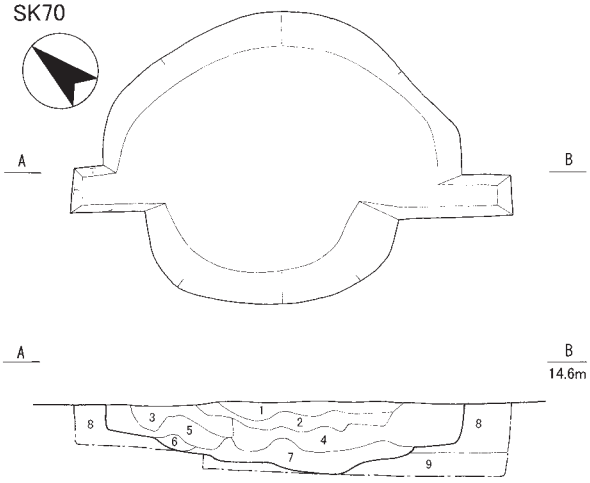
0 2m

第27図　ＳＫ62・63・65・66・68・69遺構図（１：40）



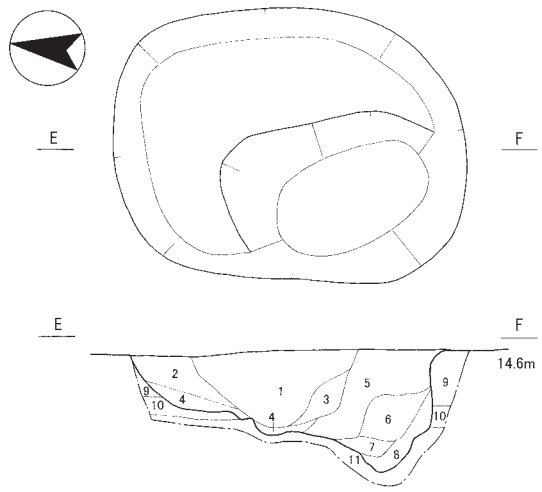
第28図　ＳＫ67遺構図（１：40）

SK70



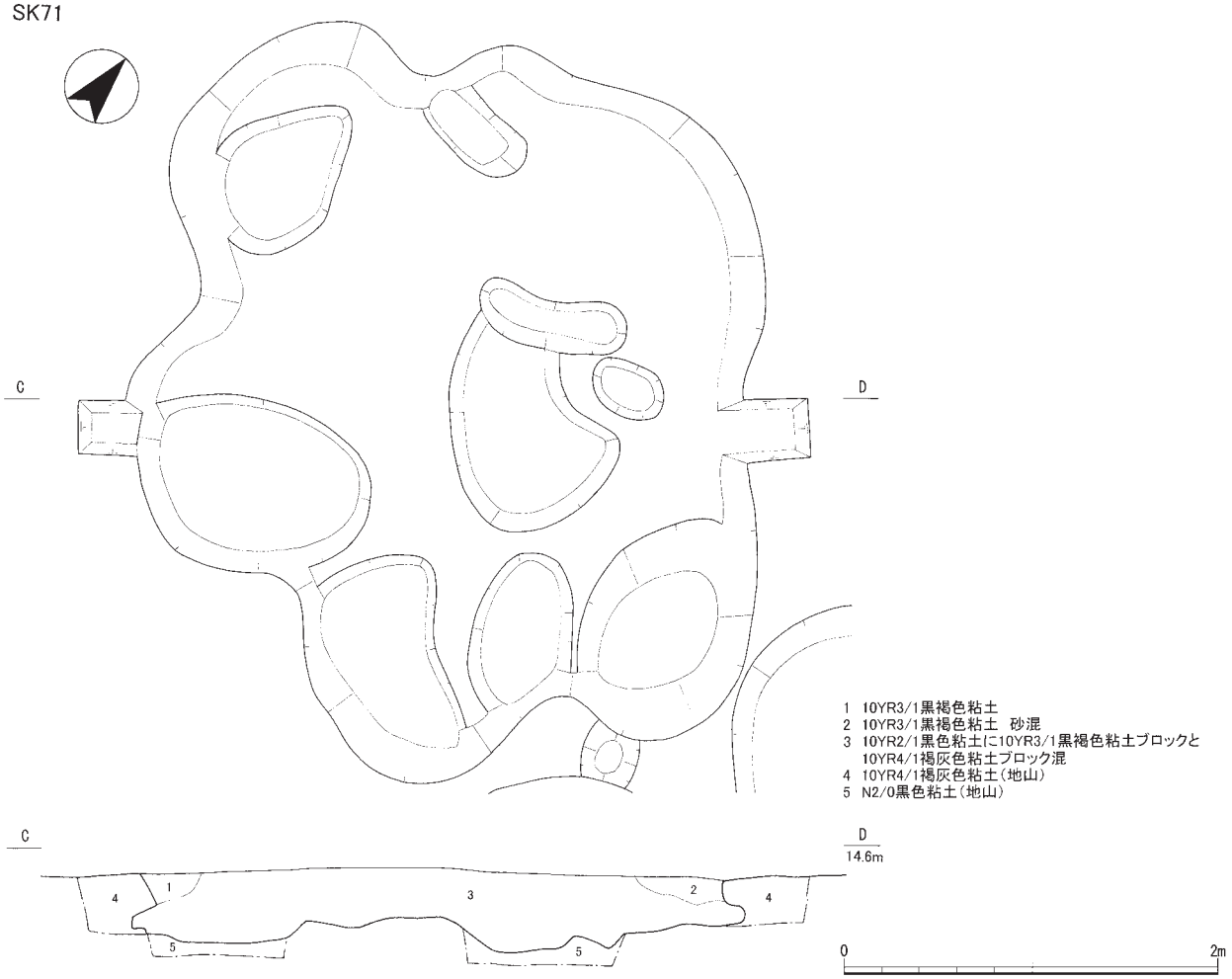
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR3/1黒褐色土 砂混
4 10YR3/1黒褐色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック少混
5 10YR3/1黒褐色粘土に10YR2/1黒色粘土と10YR5/1褐灰色粘土混
6 10YR4/1褐灰色土
7 10YR3/1黒褐色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
8 10YR5/1褐灰色粘土
9 2.5Y2/1黒色粘土

SK73



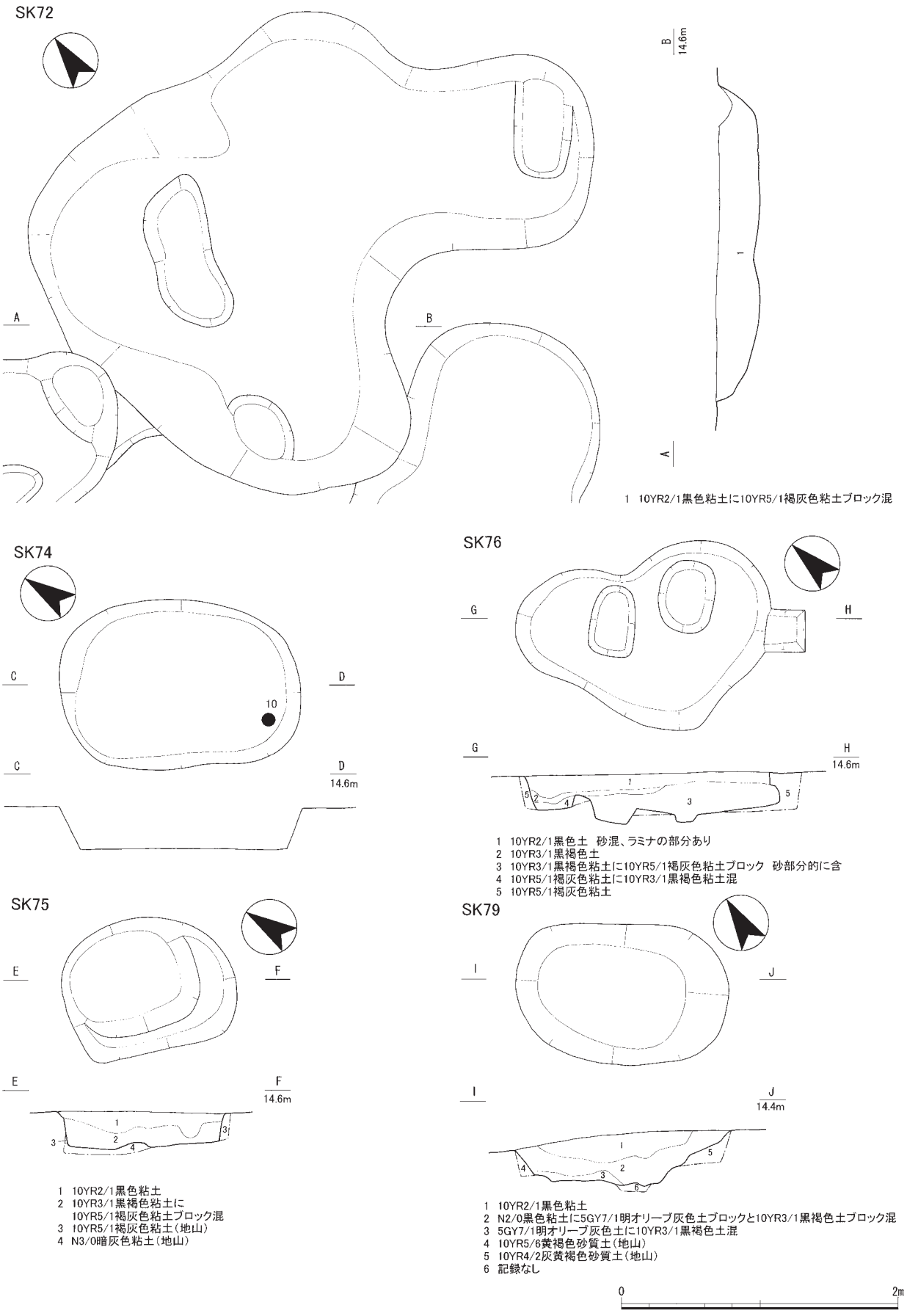
1 N2/0黒色粘土 砂、灰混
2 10YR3/1黒褐色粘土 砂混
3 10YR2/1黒色粘土
4 10YR5/1褐灰色粘土に10YR7/1灰白色粘土 灰混
5 10YR3/1黒褐色土 砂混
6 10YR3/1黒褐色粘土 砂少混
7 10YR1.7/1黒色粘土
8 10YR4/1褐灰色粘土に10YR5/1褐灰色粘土混
9 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
10 10YR3/1黒褐色粘土(地山)
11 5GY7/1明オリーブ灰色粘土(地山)

SK71

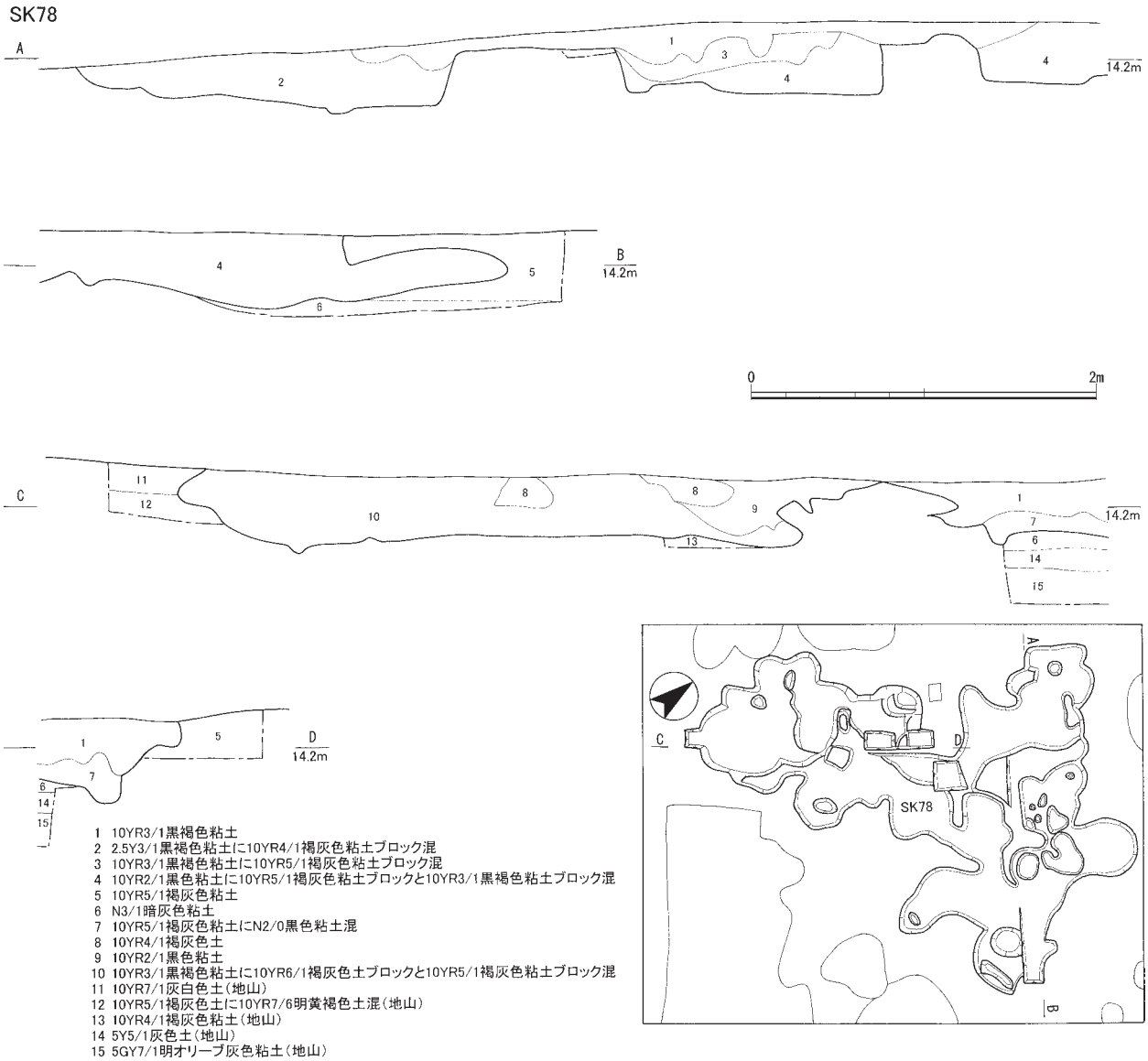


1 10YR3/1黒褐色粘土
2 10YR3/1黒褐色粘土 砂混
3 10YR2/1黒色粘土に10YR3/1黒褐色粘土ブロックと
10YR4/1褐灰色粘土ブロック混
4 10YR4/1褐灰色粘土(地山)
5 N2/0黒色粘土(地山)

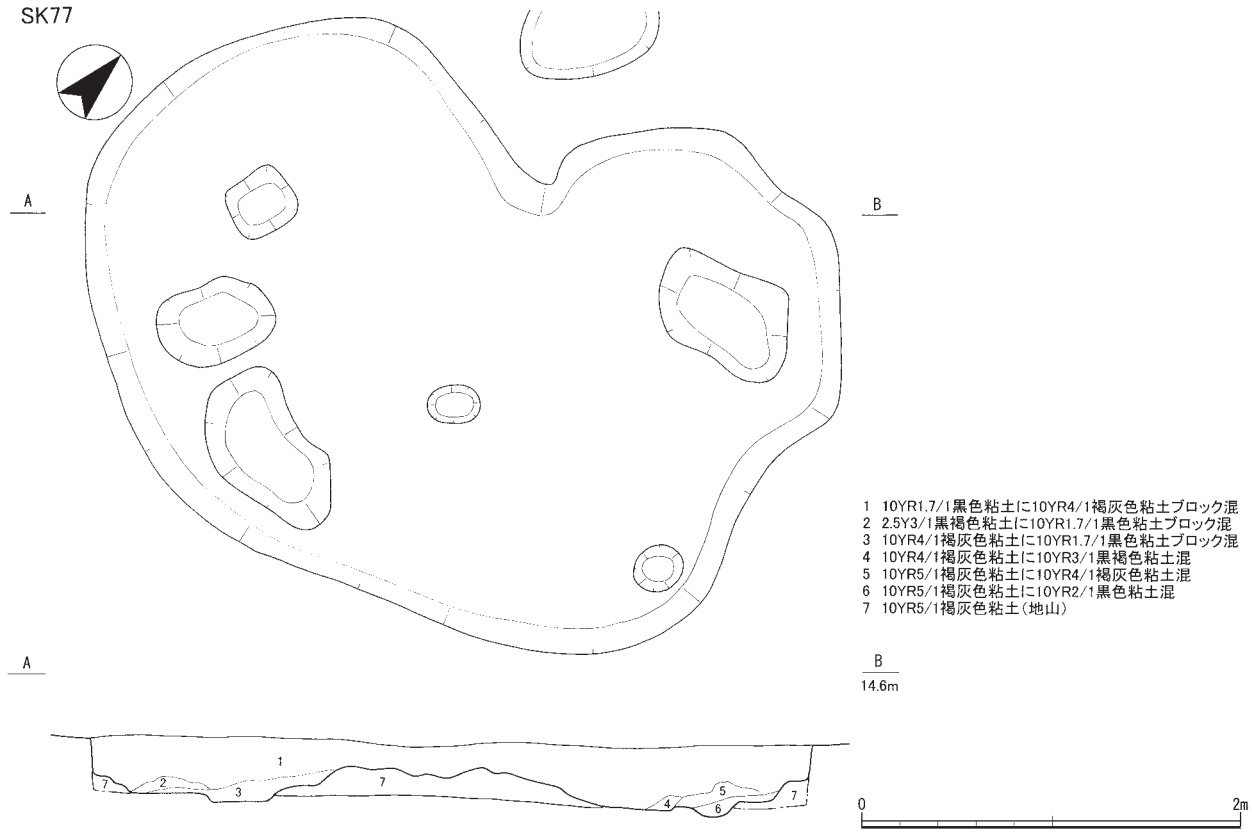
第29図　ＳＫ70・71・73遺構図（１：40）



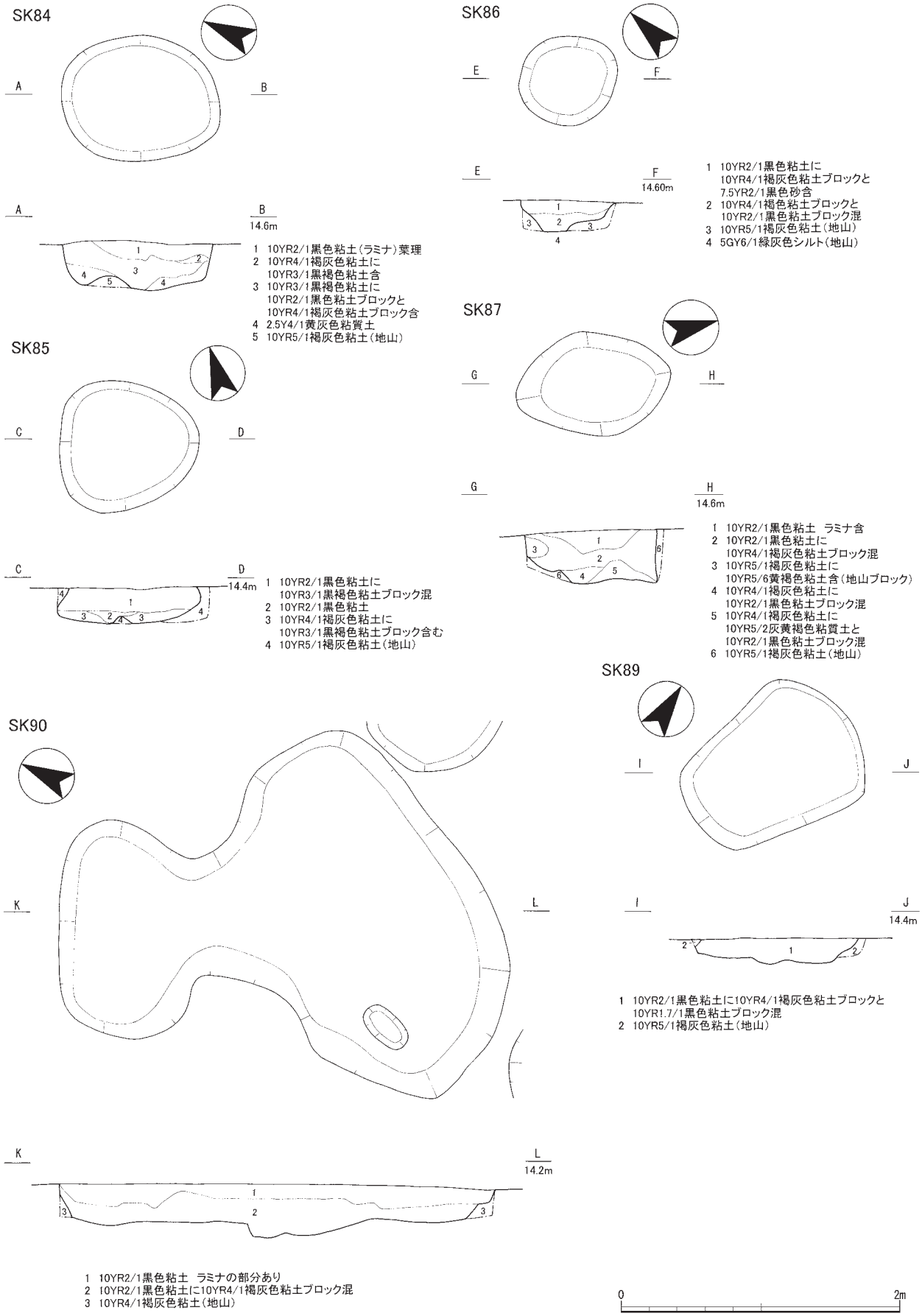
第30図　ＳＫ72・74～76・79遺構図（１：40）



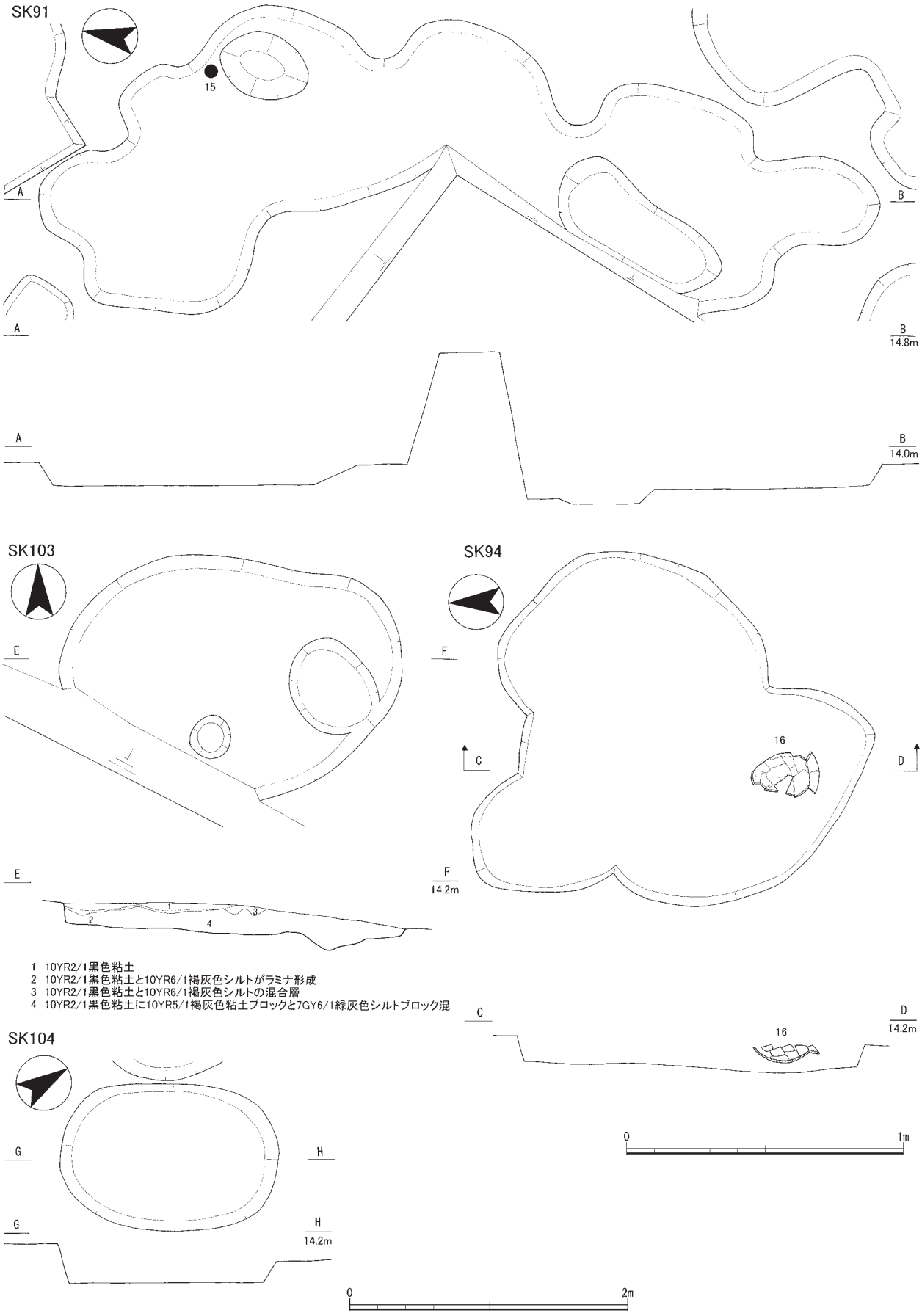
第31図　ＳＫ78土層断面図（１：40）



第32図　ＳＫ77・83遺構図（ＳＫ77は１：40、ＳＫ83は１：20）

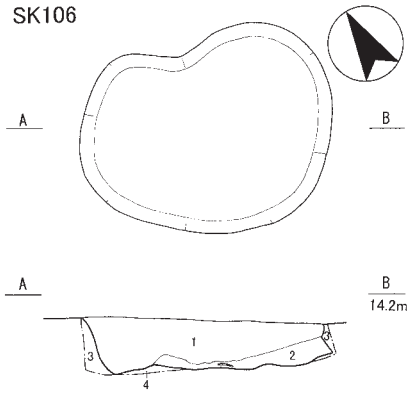


第33図　ＳＫ84～87・89・90遺構図（１：40）



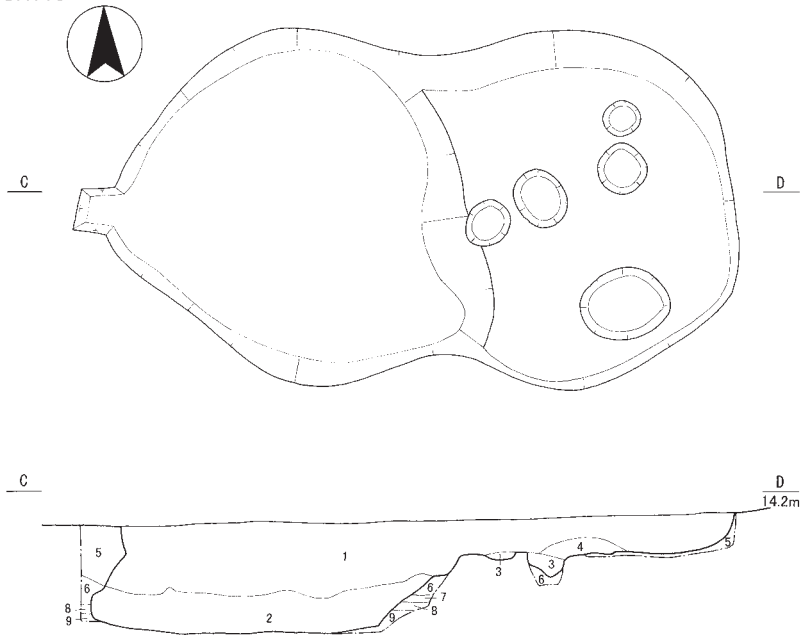
第34図　ＳＫ91・94・103・104遺構図（ＳＫ94は１：20、それ以外は１：40）

SK106



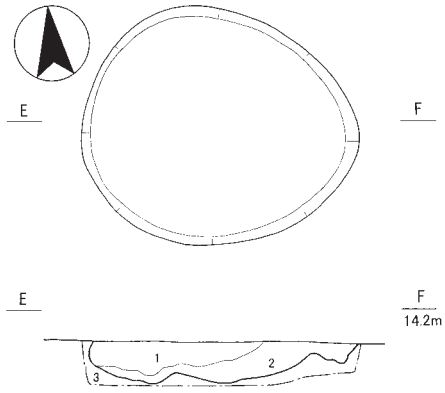
1 10YR2/1黒色粘土に10YR1.7/1黒色粘土ブロックと
10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
2 10YR5/1褐灰色粘土に10YR1.7/1黒色粘土、
10YR2/1黒色粘土、7.5GY4/1暗緑灰色粘土混
3 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
4 7.5GY4/1暗緑灰色粘土（地山）

SK110



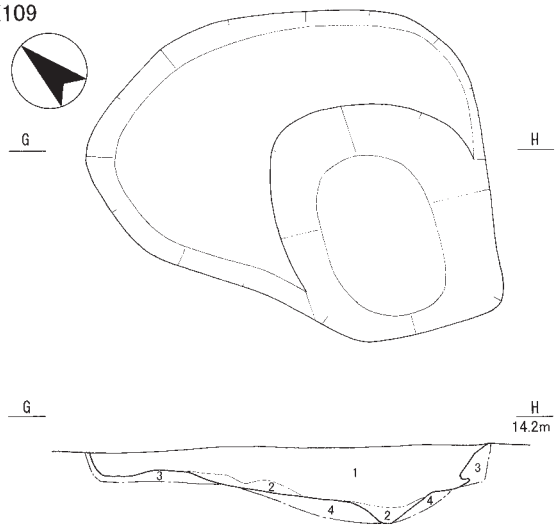
1 10YR1.7/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック少混
2 10YR1.7/1黒色粘土ブロック10YR5/1褐灰色粘土ブロック7GY6/1緑灰色粘土ブロック
3 10YR5/1褐灰色粘土に10YR1.7/1黒色粘土7GY6/1緑灰色粘土混
4 10YR5/1褐灰色粘土に10YR1.7/1黒色粘土混
5 10YR5/1褐灰色粘土
6 N3/0暗灰色粘土
7 7GY6/1緑灰色粘土に7GY6/3にぶい黄色粘土混
8 2.5Y3/1黒褐色粘土
9 5Y6/2灰オリーブ色シルト

SK111



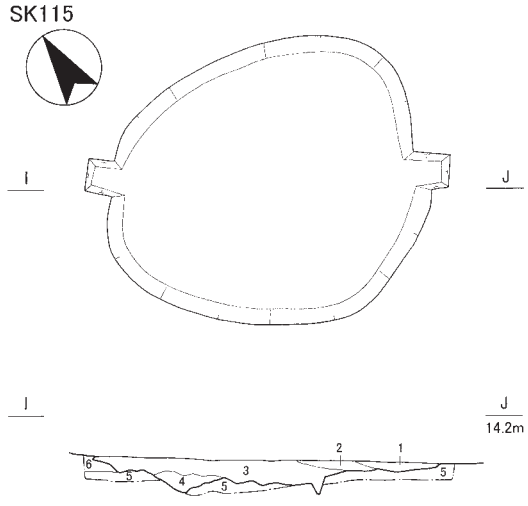
1 10YR1.7/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土（地山）

SK109



1 10YR1.7/1黒色粘土
2 10YR1.7/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土混
3 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
4 N3/0暗灰色粘土（地山）

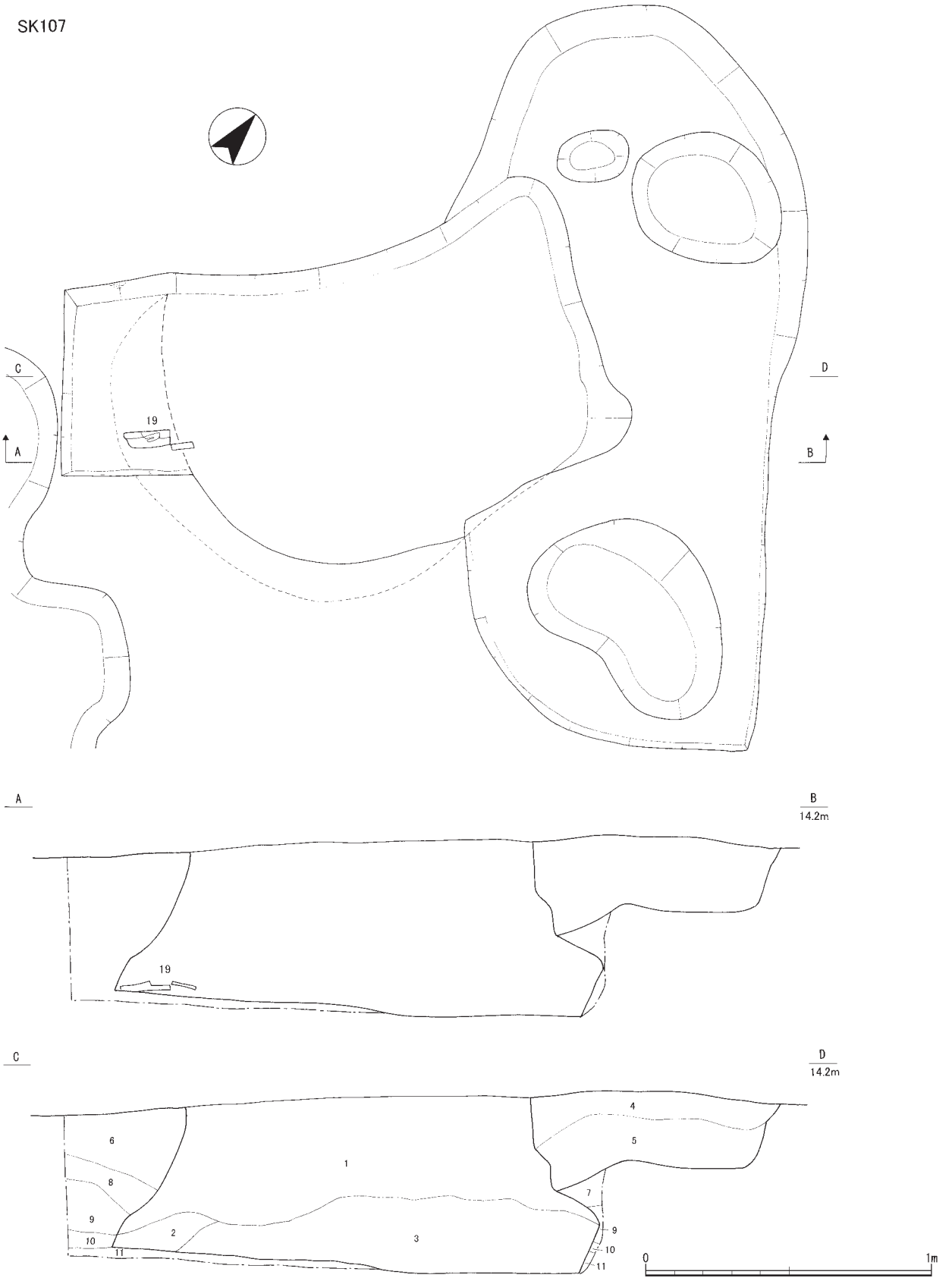
SK115



1 10YR2/1黒色粘土ラミナあり
2 10YR2/1黒色粘土ラミナあり
3 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色シルトブロック混
4 10YR3/1黒褐色粘土に10YR1.7/1黒色粘土、10YR4/1褐灰色シルトブロック、
2.5Y5/2暗灰黄色シルトブロック多混
5 10YR4/1褐灰色（地山）
6 記載なし

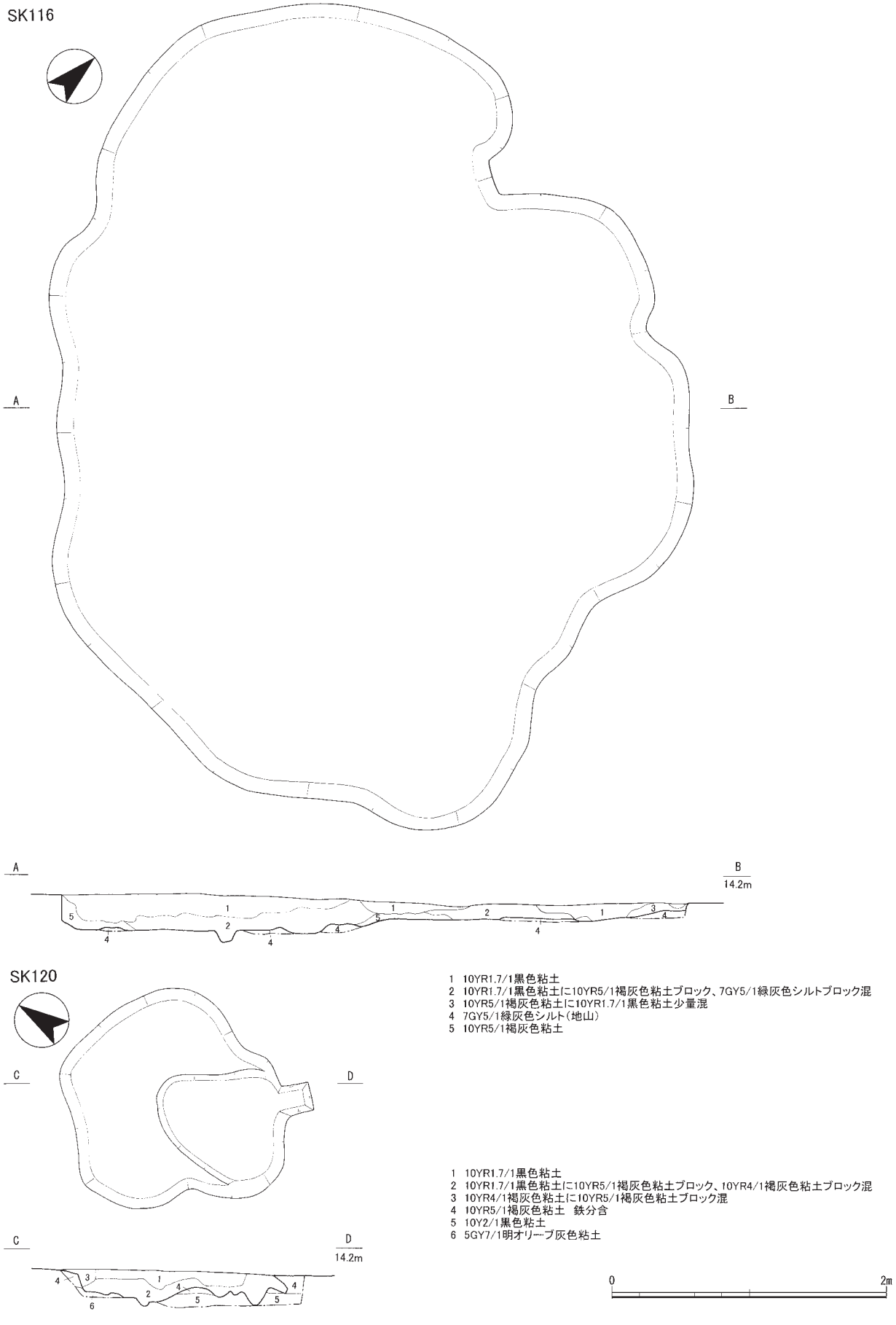
第35図　ＳＫ106・109～111・115遺構図（１：40）

SK107



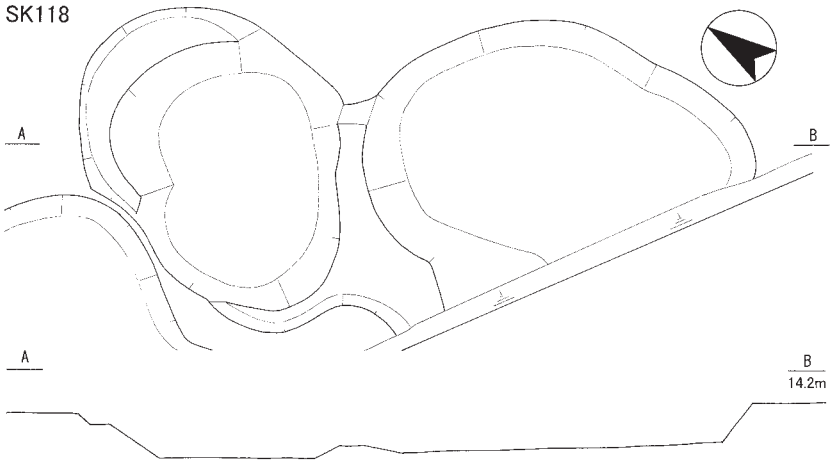
1 10YR1.7/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土少混
2 10YR1.7/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
3 10YR1.7/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと10GY6/1緑灰色シルトブロック混
4 10YR2/1黒色土と10YR7/1灰白色シルトがラミナ形成
5 10YR2/1黒色土
6 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
7 7.5GY6/1緑灰色シルトに10YR5/1褐灰色粘土混(地山)
8 5GY5/1オリーブ灰色シルト
9 N3/0暗灰色粘土
10 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土
11 2.5Y2/1黒色粘土と2.5Y6/2灰黄色シルトがラミナ形成

第36図　ＳＫ107遺構図（１：20）

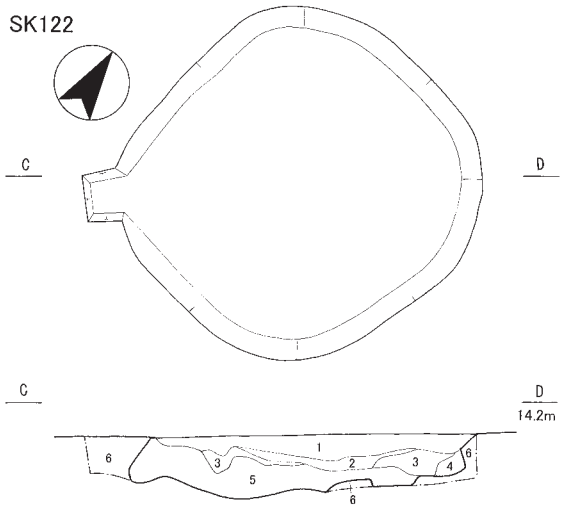


第37図　ＳＫ116・120遺構図（１：40）

SK118

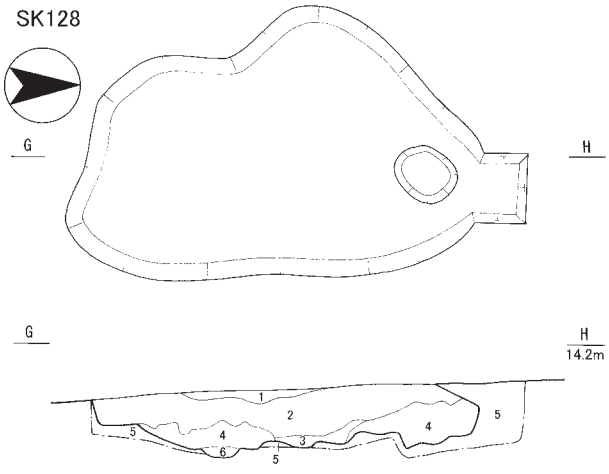


SK122



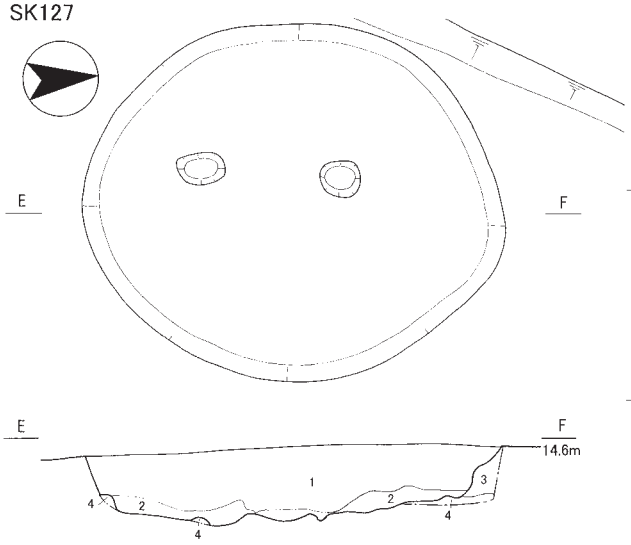
1 N2/0黒色粘土
2 N2/0黒色粘土と10YR7/1灰白色シルトがラミナ形成
3 10YR2/0黒褐色粘土
4 10YR3/1黒褐色粘土
5 N2/0黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
6 10YR5/1褐灰色粘土

SK128



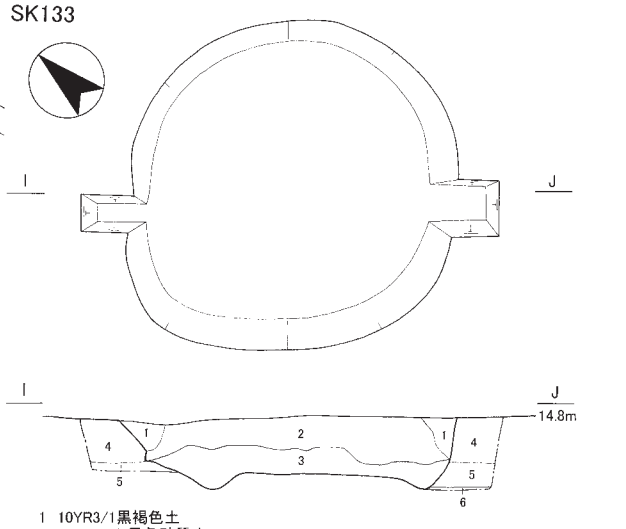
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR3/1黒褐色粘土
4 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロック多混、10YR4/2灰黄褐色シルトブロック混
5 10YR5/1褐灰色粘土　鉄分含（地山）
6 10YR1.7/1黒色粘土

SK127



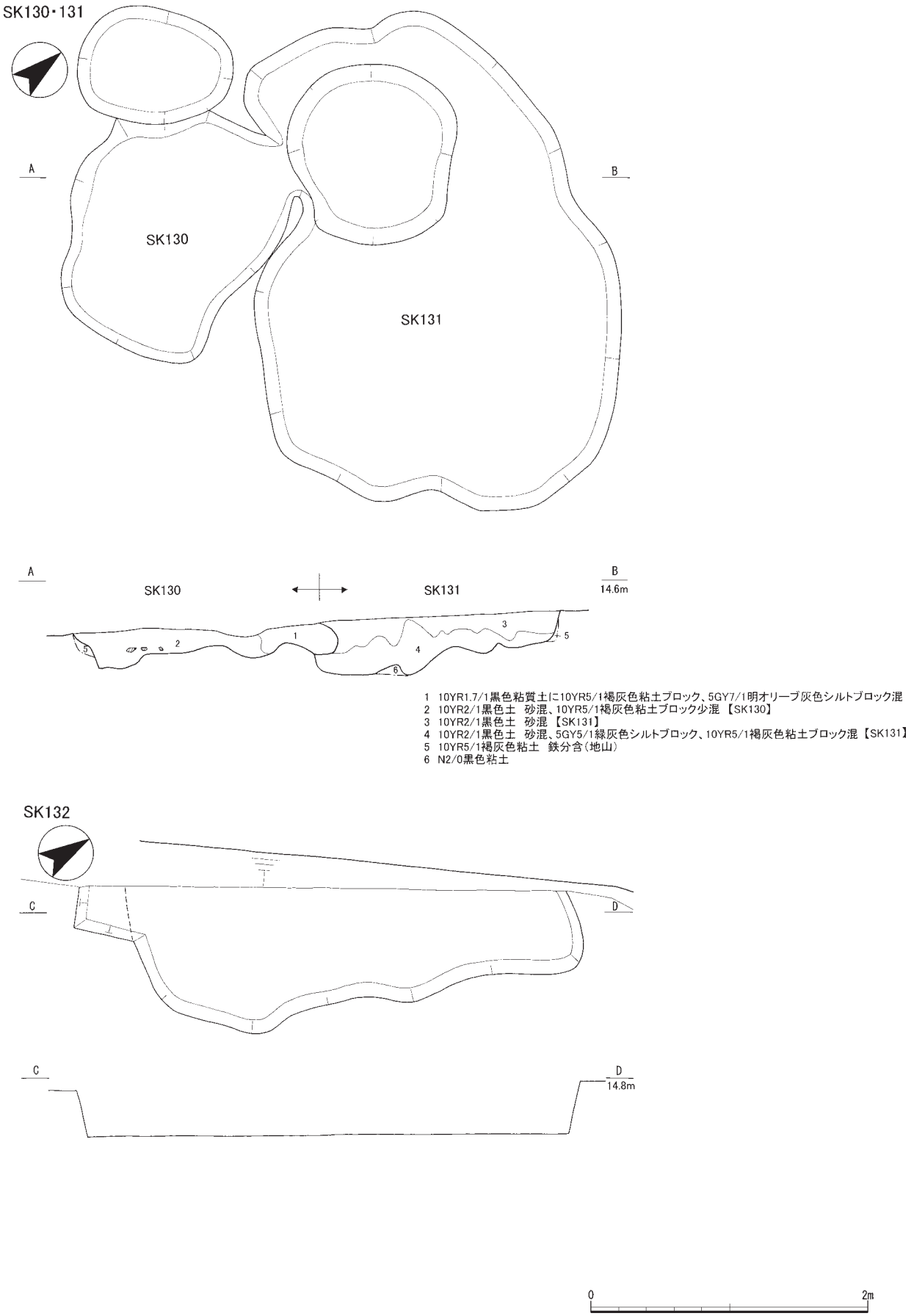
1 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土混
2 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロックと5GY5/1オリーブ灰色砂ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土　鉄分含（地山）
4 5GY4/1暗オリーブ灰色砂質シルト（地山）

SK133

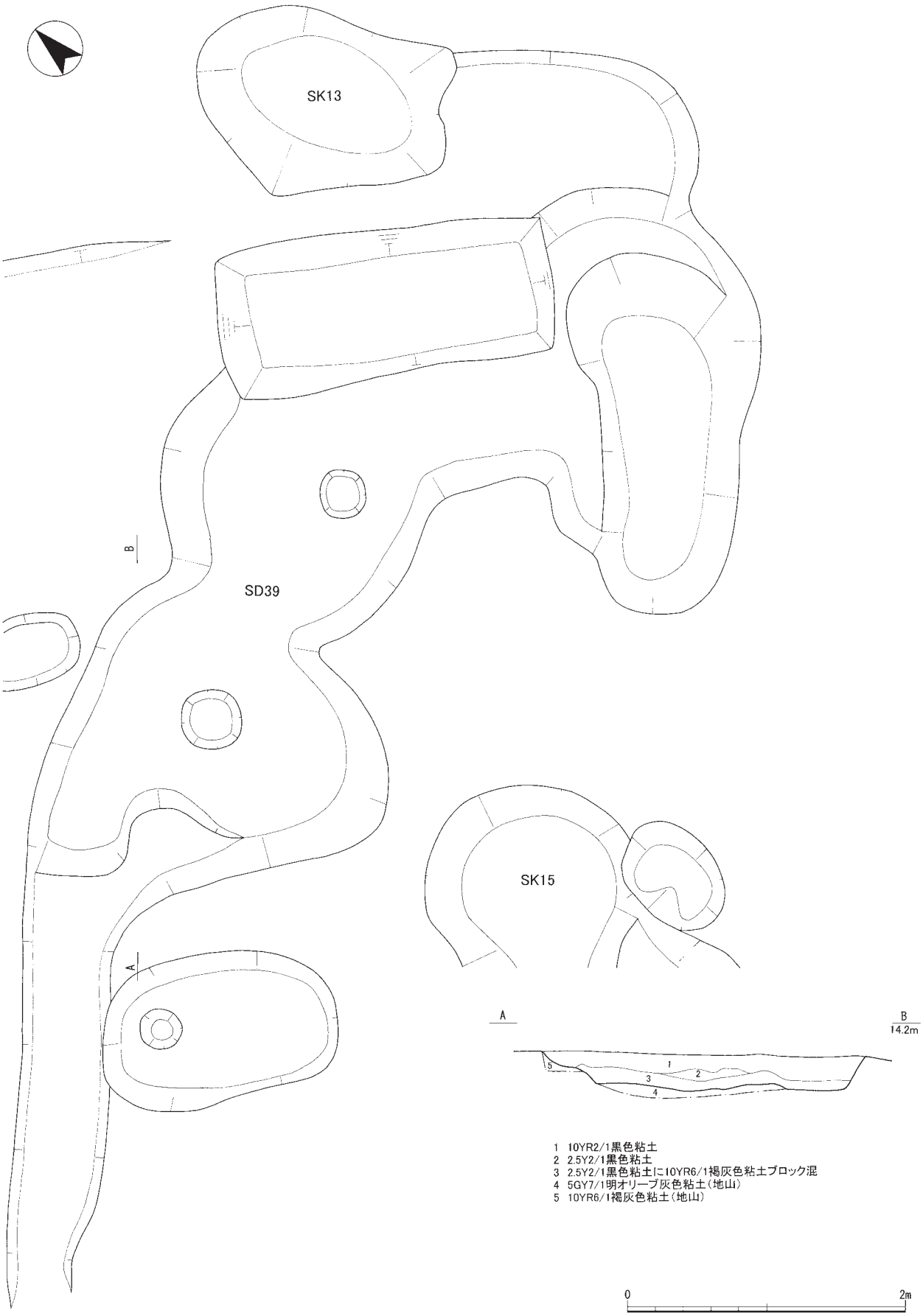


1 10YR3/1黒褐色土
2 10YR1.7/1黒色砂質土
3 10YR2/1黒色粘土にN4/0灰色粘土ブロック、10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
4 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
5 N4/0灰色粘土（地山）
6 N5/0灰色粘土（地山）

第38図　ＳＫ118・122・127・128・133遺構図（１：40）



第39図　ＳＫ130～132遺構図（１：40）



第40図　ＳＤ39遺構図（１：40）

2　第３次調査区

第３次調査では第２次調査と異なり、検出した遺構全てに遺構番号を与えている。

（１）Ⅰ地区の遺構

ＳＫ310（第42図） 比較的浅い土坑である。土層断面図は作成していないため埋土の状況は不明であるが、床面直上から土師器台付甕台部（25）が正位で出土した。

ＳＫ322（第42図、写真図版12） 調査区西壁際で検出したため、全容は不明である。床面は中央がくぼむ。土坑の南東隅がややオーバーハング状となり、その部分から弥生土器壺底部（28）が出土した。

（２）Ⅱ地区の遺構

ＳＫ344（第44図、写真図版15） 断面はすり鉢状を呈し、床面から礫７個と土師器片が出土した。土師器は非常に薄く細片で、時期が特定できない。埋土は他の土坑のようなブロック土は見られず、他とは異なる用途、時期の土坑である可能性がある。

ＳＫ374（第45図） 東壁側がオーバーハングを呈し、床面についても小穴をいくつか掘削したように凹凸が著しい。埋土はほぼ上面までブロック土を含む層である。

ＳＫ377（第47図） 土層断面図から、東・西壁ともオーバーハング状を呈するものと思われる。また、西壁側の第１・２層はオーバーハング天井部の崩落土と考えられる。底から中位までブロック土が堆積している。土坑上面、床面から17.0～23.0㎝浮いた状態で弥生土器高杯脚部（32）が、図化はできなかったが土師器壺体～底部片・平底の土師器受口状甕の破片が出土した。出土した高さから、ブロック土の堆積後に土坑に入り込んだものと言え、土坑の掘削は土器の年代である山中Ⅰ～Ⅱ式とほぼ同時期かそれより古くなるものと思われる。

ＳＫ384（第48図、写真図版15） 一部が調査区外へ伸びるため全容が不明である。第１・２層はオーバーハング部天井部の崩落土とも考えられる。ブロック土は床面にわずかに見られる。弥生土器高杯杯部（35）が床面からやや浮いた位置で出土したが、このブロック土上に乗っていたのではないか。

ＳＫ401（第51図） 東側ではオーバーハングが確認できるが、西側の第２層が天井部の崩落土だとしたら西側にもオーバーハング部分があったと考えられる。底にブロック土が確認できる。そのブロック土上面から土師器台付甕（38）が出土した。

ＳＫ405（第51図） 平面図は土層確認のために掘り下げた状況を示しているため本来の形状を示しておらず、床面は凹凸が著しい。オーバーハング状を呈し、側面の状況は鋭角となっているが、これは土圧による後世の変形であろう。

ＳＫ409（第52図） オーバーハングは見られず、床面は凹凸を呈する。ブロック土の第３層中から弥生土器高杯杯部（39）、甕口縁部（40）が出土した。

ＳＫ423（第55図） 西側に別土坑が接するが、検出時においても切り合いは判断できなかった。土層断面を見ると、ＳＫ423にブロック土の第２層と自然堆積土と思われる第1’層が堆積した後に西側土坑の同じく第２層と第1’層が堆積、西側土坑ではまたその上にブロック土である第２層が堆積し両土坑とも第１層が堆積している。以上から埋没過程を復元すると、ＳＫ423掘削後にブロック土が流入した後しばらく開いたままとなり、第1’層が堆積する。そして西側土坑を掘削し西側土坑に同じ第２層ブロック土が流入、またしばらく放置して第1’層が堆積した頃に西側土坑にブロック土が入る。これらの状況を想像をたくましくして考えると、近くで第２層を供給する別遺構を掘削し、それで出た土（第２層）が開いたＳＫ423に入る。しばらくして、場所を西側土坑に近いところに少し移動し、また別遺構を掘削して出た第２層が、開いた西側土坑に流入するという状況であったのか。ＳＫ423からは山中Ⅰ式併行期の弥生土器高杯（30、ＳＫ370出土の高杯と接合する）が出土するが、その出土位置は不明であり、土坑掘削直後に入ったものか、もしくは自然堆積する中で入ったものなのかは不明である。もし、床面直上もしくはブロック土から出土したものであれば、ＳＫ423掘削と土器の年代が近しいと言える。近くで掘削した別遺構の候補としてＳＫ409やＳＫ402があるが、ＳＫ409のブロック土からは山中Ⅱ式の弥生土器高杯（39）が出土している。土器の年代からＳＫ409よりＳＫ423が古いとすると、上記の仮説が成り立つといえないか。

ＳＫ436（第58・59図、写真図版17） 西側が調査区外へと広がるが、オーバーハング部分があり、土坑中位までブロック土が堆積する。土坑内から土師器長胴甕（101）が出土しており、当遺跡では数少ない古代の遺構であるが、形状や埋土の状況は弥生後期～古墳初頭の土坑と変わらない。後述するＳＫ437と合わせて検討を要する。

ＳＫ437（第58図） ＳＫ436のすぐ東に位置する。オーバーハング部分が見られる。土層断面図では、最下層である第２層が土坑の南東部で高く堆積し、最上層である第１層は、その第２層がさほど堆積していない北西部側に深く堆積する。第１層土中、おそらく第２層上面から長胴甕体部片が出土した。これは図化していないが、外側は上半が粗いタテハケ、下半が細かいタテハケで、内面はヨコハケとなり、ＳＫ436の長胴甕とほぼ同時期のものであろう。

ＳＫ465（第62図、巻頭図版３） 土層でみると西・東壁側ともオーバーハング部分が見られる。最下層はブロック土であるが、ラミナがあると記録されている。それがブロック土の下であるのか上面であるのかは不明であり、もし上面であるのならば、土坑にブロック土が堆積した後しばらく放置されたといえる。しかし、ブロック土の下であれば、土坑掘削後しばらく土坑が開いた状況で、その後ブロックの混じる土が堆積したといえる。

ＳＫ476（第65図） 土坑の西・北壁でオーバーハング部分が見られる。北壁のオーバーハング部分の窪みから弥生土器高杯杯部（49）が出土した。土坑中位までブロック土が堆積しているが、このブロック土は土坑中央で高く、土坑壁際では浅い堆積状況を示す。このことから、土器はブロック土上に置かれたのではないだろうか。

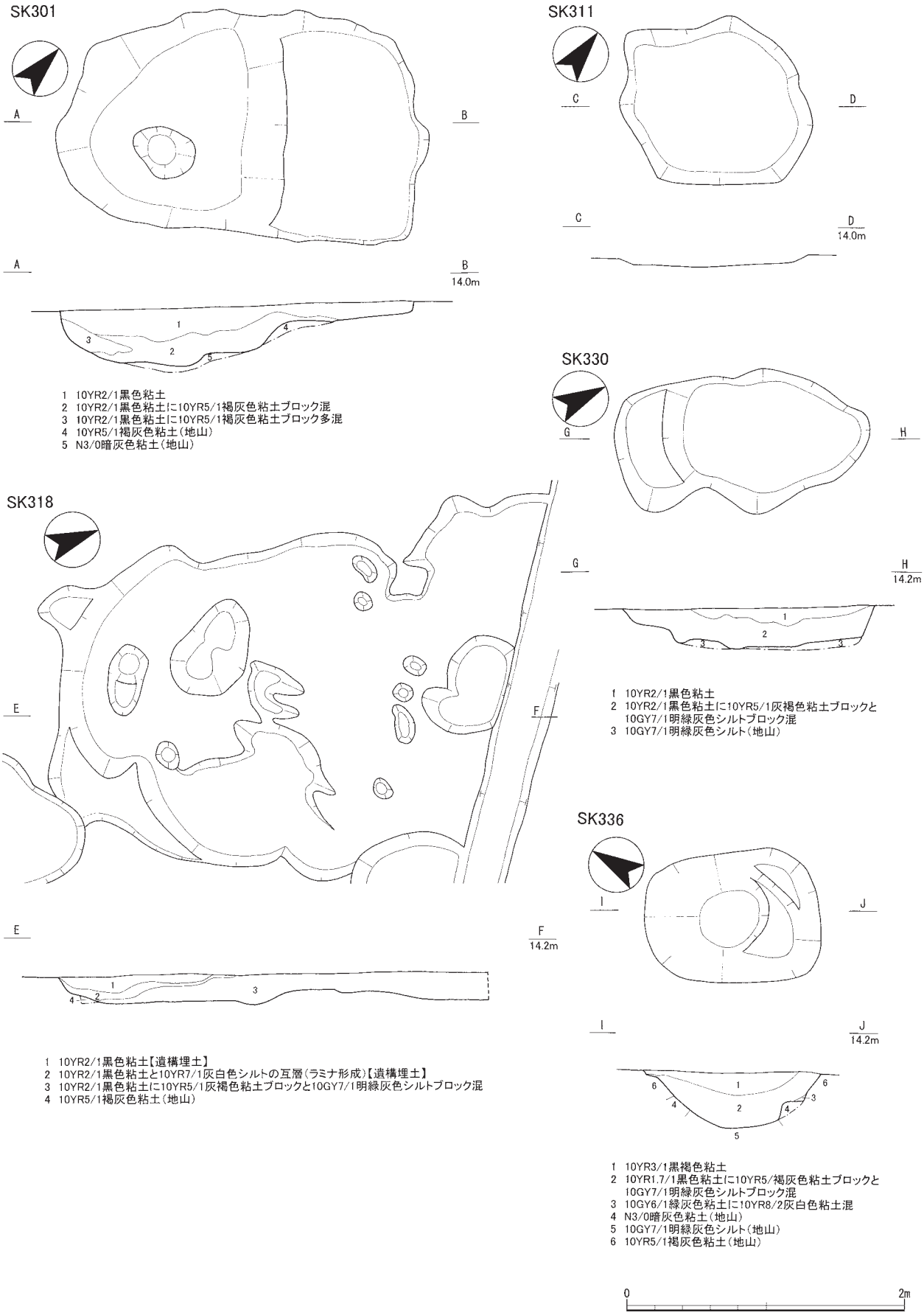
ＳＫ482（第66図） 断面形を見ると、西・東壁ともにオーバーハング状を呈し、そのオーバーハング形状も上下２段に確認できる。このオーバーハングは鋭角となっているが、おそらく後世の土圧により変形したものであろう。また、底面も凹凸が著しい。オーバーハング上面に堆積する第５・６層はオーバーハング天井部の崩落土の可能性がある。床面中央付近にブロック土が堆積し、その上にラミナを持つ層が堆積する。また、土師器甕（50）が出土しているがこれは第１層からの出土であり、ＳＫ482掘削段階とはかなり時期差を持つであろう。

ＳＫ486（第66図、巻頭写真４） 断面形は、西・東壁ともにオーバーハング状を呈し、ＳＫ482と同様上下２段にオーバーハング部分が確認できる。上のオーバーハングは褐灰色粘土層、下のものは暗灰黄色粘土層に位置する。底にブロック土が堆積するが、その上面から土師器甕（51）が出土した。最上層である第１層の形状から、ここだけ再度掘り直しがされた可能性がある。

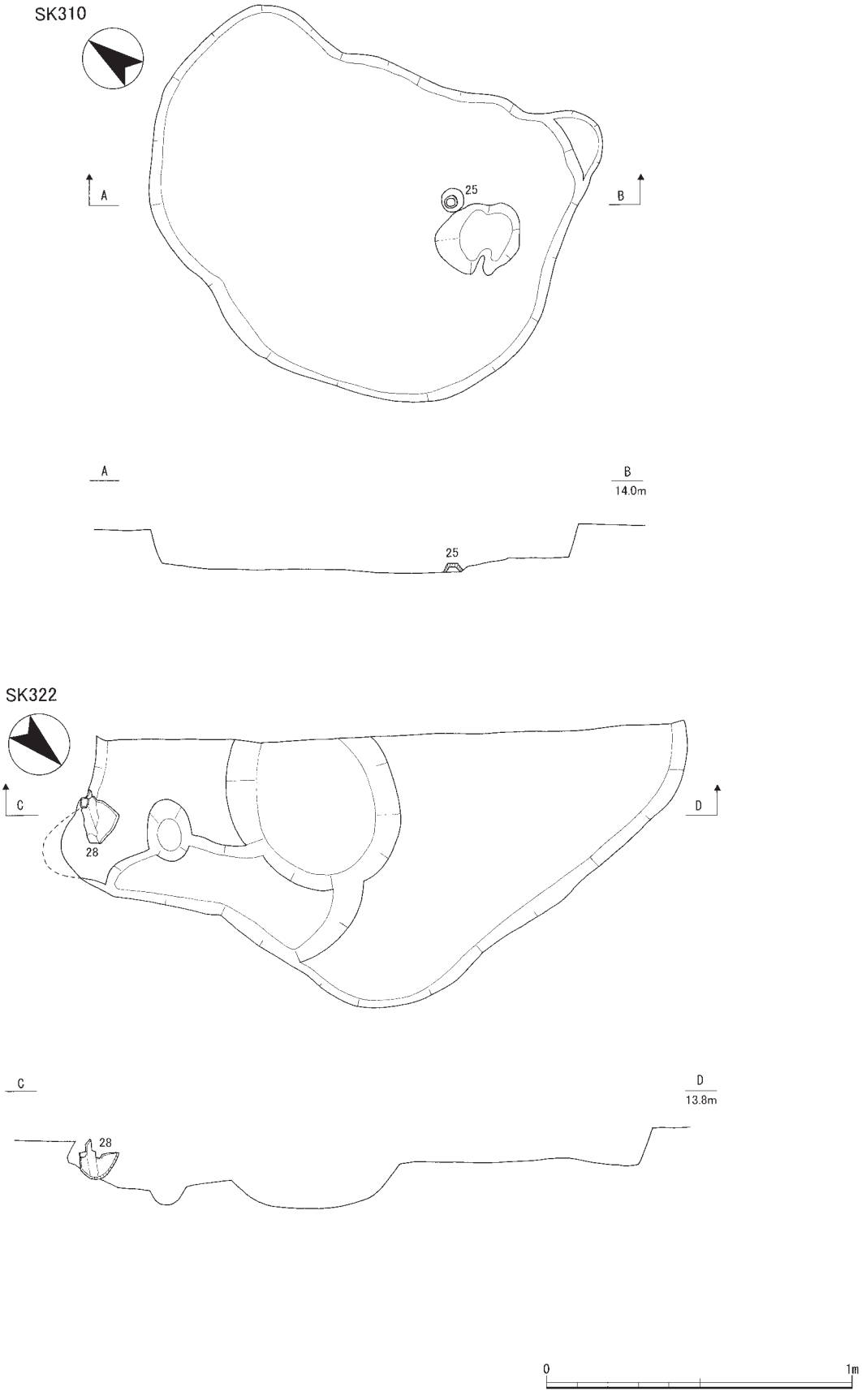
ＳＫ505（第70図、写真図版20） 土坑南部がわずかに調査区外へと広がるが、他の土坑に比べると小規模の土坑である。東側はオーバーハング状を呈するが、埋土にはブロック土はない。底に堆積する第２層中から、図化していないが土師器長胴甕体部片（平城Ⅰ～Ⅱ期のもの）が出土している。

ＳＫ520（第72・73図、写真図版21） ３ないしは４つの土坑が連結したような形状を呈するが、それぞれの連結部分の切り合いなどは確認できない。また、第72図の範囲外となるが、ＳＫ520上にはＳＫ514・518・519が乗る。ＳＫ520内のＳＫ518東側から、弥生土器高杯杯部２点（62・63）、壺（65）が出土した。壺は逆位で約10㎝、高杯２点は約15㎝床から浮いて出土した。土坑埋土はその上面に高低差はあるがほぼ上までブロック土が堆積し、これらの土器はこのブロック土内もしくはブロック土上面に入り込んだものと思われる。

ＳＫ529（第75図、写真図版21） 土坑の西部分が調査区外へと広がる。東壁ではオーバーハング部が確認できる。床面直上より木片が出土する。また、弥生土器壺（60）が出土している。埋土は、まず底～土坑中位まで植物片を含むブロック土が堆積し、その上に自然堆積と思われる層が乗り、その上にまたブロック土が堆積する。底のブロック土と上層のブロック土には若干の時期差があるが、壺がどの位置から出土したかは残念ながら不明である。



第41図　ＳＫ301・311・318・330・336遺構図（１：40）



第42図　ＳＫ310・322遺構図（１：20）

3　第４次調査区

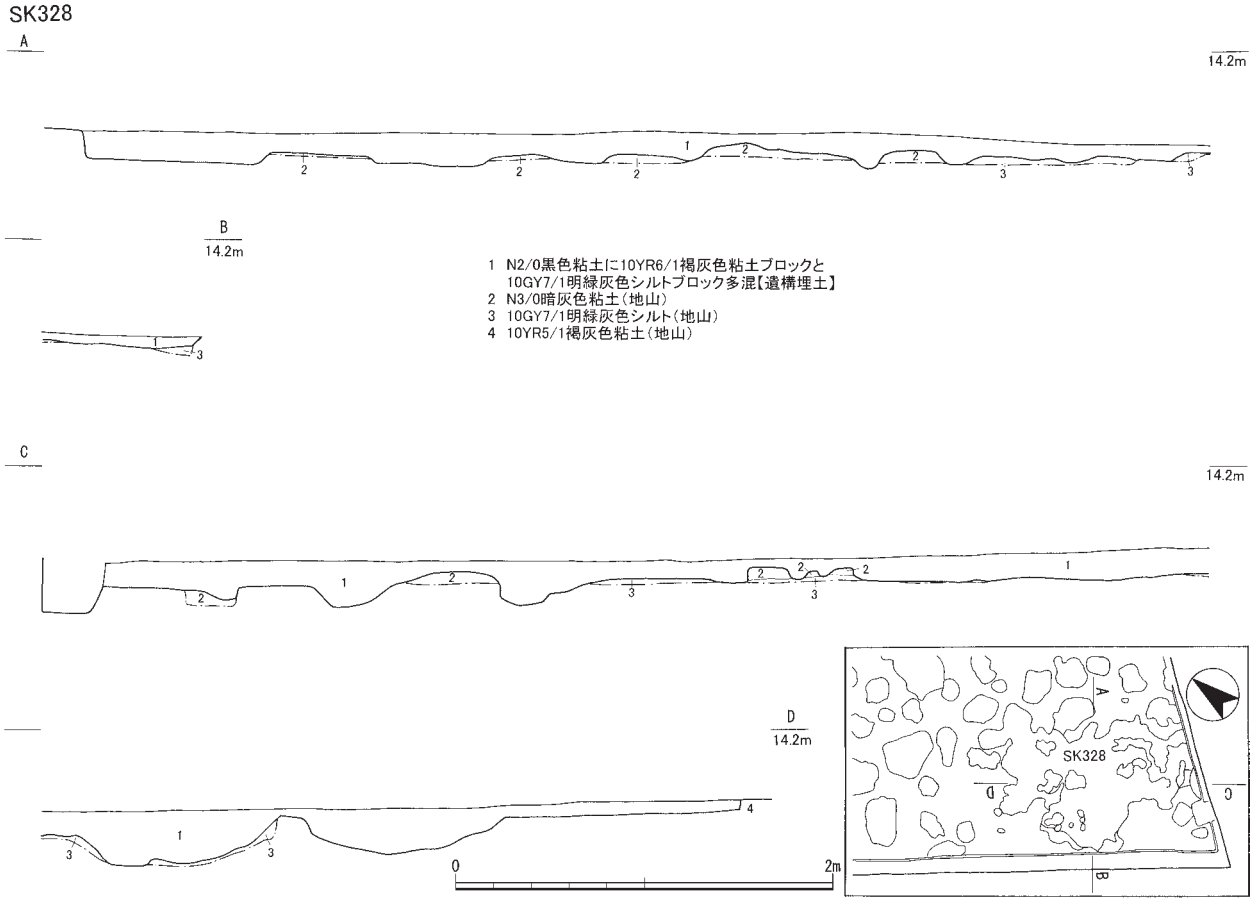
第Ⅰ章でも見たように、第３次調査区Ⅱ地区の南に接したⅠ地区と、その南に位置するⅡ地区の２地区に分けて調査を行った。第３次調査と同じく、掘削した遺構全てに遺構番号を与えている。

遺構の把握は、隣接する第３次調査区Ⅱ地区と第４次調査区Ⅰ地区では若干異なる。つまり、第４次調査区Ⅰ地区南東部、グリッドＢＲ～ＣＤ付近の検出面の色調の違いは、この部分が湿地状を呈することに由来するものと判断し、明確な遺構のみを掘削した。しかしそれに連なる第３次調査区Ⅱ地区南東部分、グリッドＢＲ～ＢＸ付近では検出面の色調の違いを遺構と判断して掘削しており、遺構の配置が不自然となっている。

第４次調査では、オーバーハング形状が見られる土坑について数基をピックアップして、オーバーハングの範囲を土層断面図だけではなく平面図としても記録した。これで、土層断面図で一部しかオーバーハング形状が確認できない土坑についても、その範囲が大きく広がる可能性が指摘できるようになった。

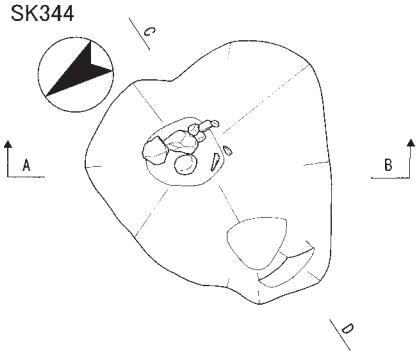
ＳＫ630（第82図）　オーバーハングは見られない。底面はやや凹凸を呈する。埋土の状況は最下層はブロック土であり、その上面は起伏に富む。出土遺物には土師器壺（79）の他に手づくね成形による口縁細片と通有のものよりも小さい台付甕の台部細片がある。土師器壺はＳＫ633出土の破片と接合する。

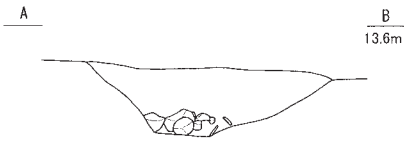
ＳＫ652（第83図、写真図版26上）　土層断面図から北・南壁がややオーバーハング状を呈する。第２層はその中でも下層付近でラミナ状の堆積が見られることから、掘削後、土坑は開いた状態であったと考えられる。出土遺物には弥生土器（土師器）高杯杯部（82・83）・弥生土器甕（84）、奈良時代の土師器甕（104・105）図化していないが甕体部片がある。土層断面から高杯が第２層の上部で出土しているようであるが、他の土器の出土層位は不明である。土器はおおよそ山中Ⅱ式と平城Ⅰ～Ⅴ期と２時期に

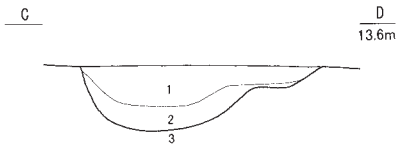


第43図　ＳＫ328土層断面図（１：40）

SK344

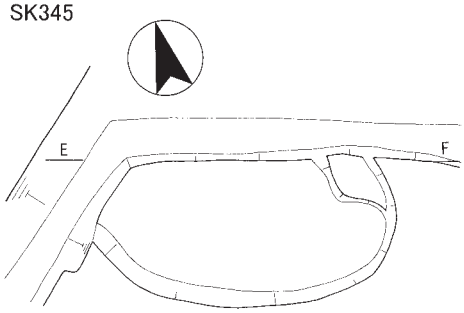


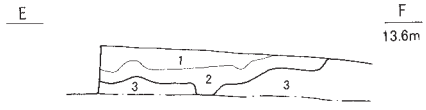




1 10YR3/2黒褐色土に10YR4/6褐色粒(鉄分)混
2 10YR5/6黄褐色粘土に10YR3/1黒褐色粘土少混
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)

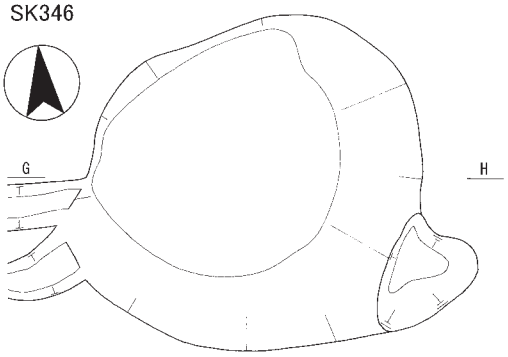
SK345

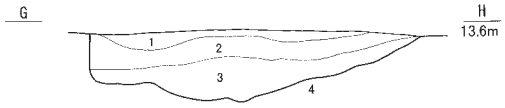




1 N1.5/0黒色粘土
2 N1.5/0黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含

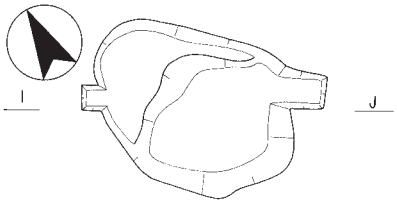
SK346

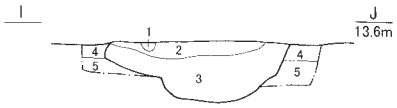




1 N4/灰色粘質土
2 10YR2/1黒色粘土に粒状の鉄分混
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)

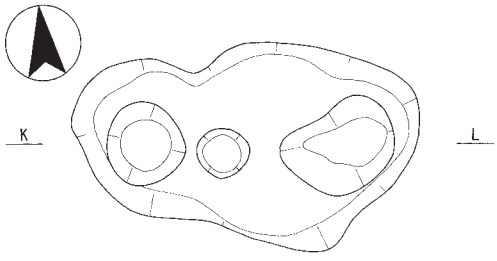
SK350

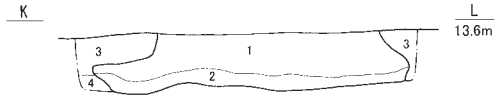




1 10YR2/2黒褐色粘土に鉄分混(カクラン)
2 10YR1.7/1黒色粘土に鉄分混
3 10YR1.7/1黒色粘土に10YR7/1灰白色シルトブロックと10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
5 10YR7/1灰白色シルト(地山)

SK352

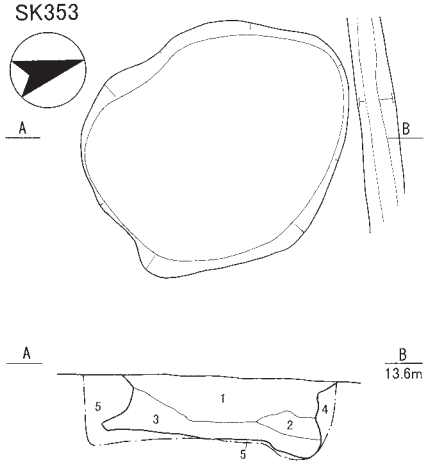




1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR1.7/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと10GY7/1明緑灰色シルトブロック、N1.5/0黒色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
4 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)

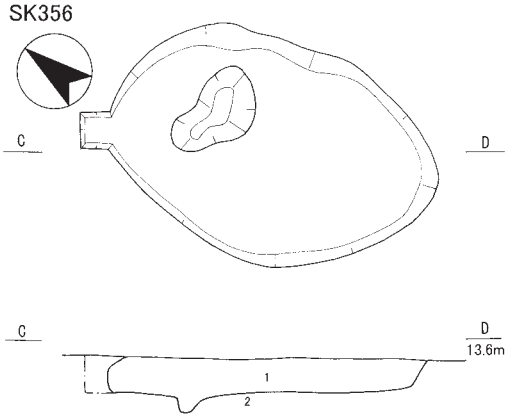
第44図　ＳＫ344～346・350・352遺構図（１：40）

SK353



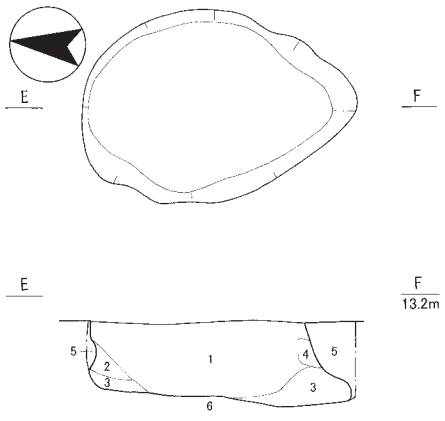
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR5/1褐灰色粘土に10YR2/1黒色粘土ブロック少混
3 10YR1.7/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと10GY8/1明緑灰色シルトブロック多混
4 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
5 10GY8/1明緑灰色シルト（地山）

SK356



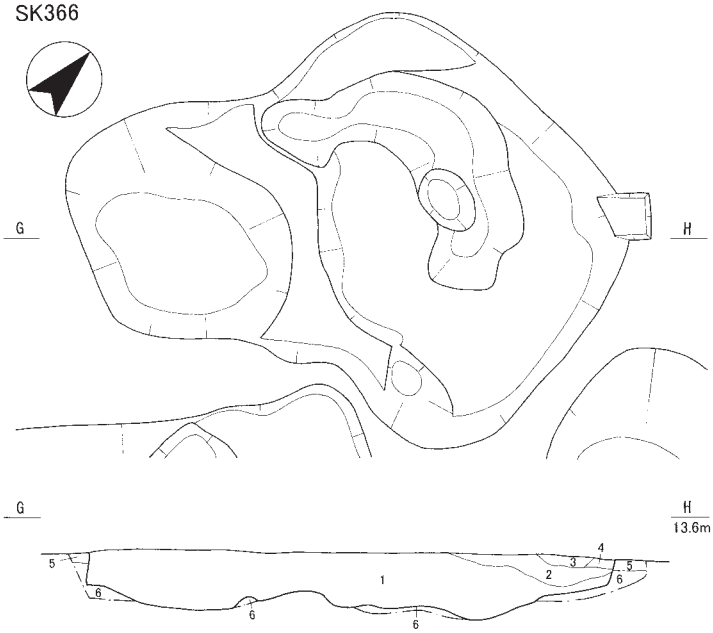
1 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
2 10GY8/1明緑灰色シルト（地山）

SK360



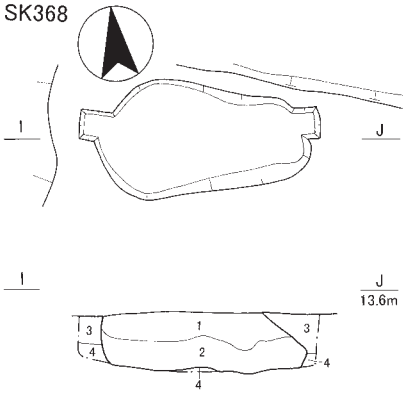
1 N2/0黒色粘土
2 N2/0黒色粘土に非常に小さい10YR5/1褐灰色粘土ブロック含
3 N2/0黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
4 10YR5/1褐灰色粘土
5 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
6 10YR5/1褐灰色シルト（地山）

SK366



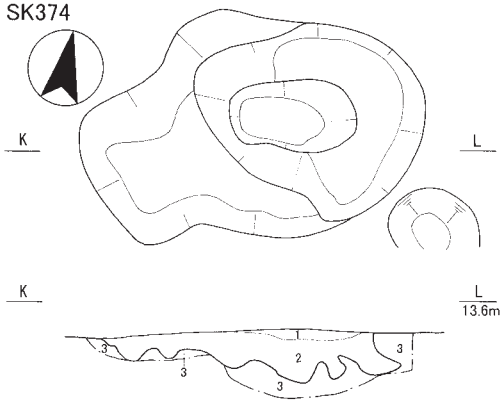
1 10Y2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
2 10Y2/1黒色粘土（ラミナあり）
3 10YR4/1褐灰色粘土
4 10YR5/1褐灰色粘土
5 10YR5/1褐灰色粘土（地山）鉄分含
6 10GY7/1明緑灰色シルト（地山）

SK368



1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土（地山）鉄分含
4 10GY7/1明緑灰色シルト（地山）鉄分含

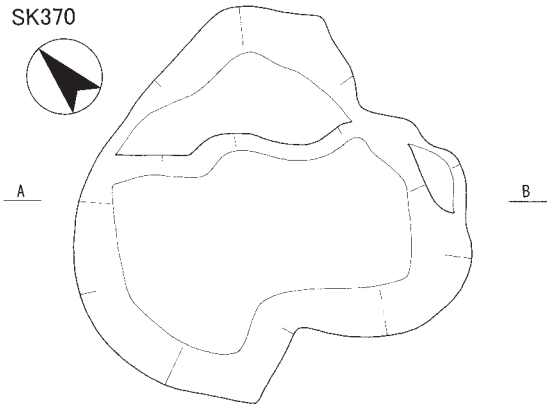
SK374

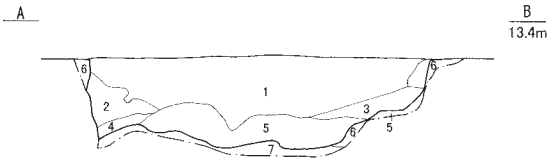


1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと10YR4/6褐色粘土混
3 10YR5/1褐灰色粘土に鉄分混

第45図　ＳＫ353・356・360・366・368・374遺構図（１：40）

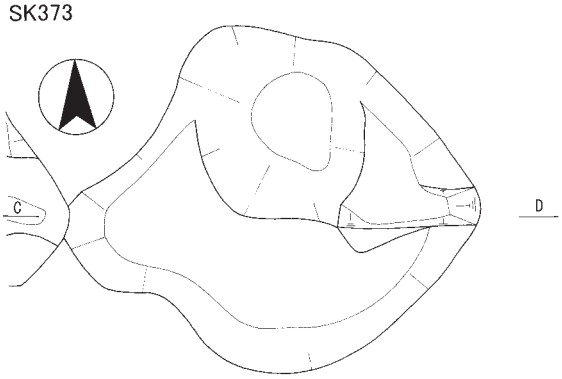
SK370

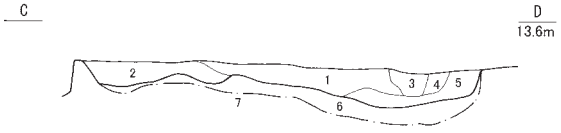




1 N2/0黒色粘土
2 N5/0灰色粘土
3 N1.5/0黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
4 N1.5/0黒色粘土
5 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
6 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
7 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)

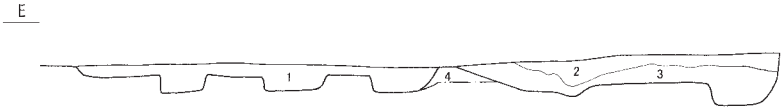
SK373

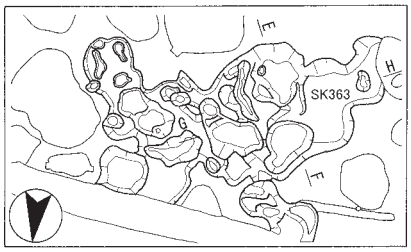


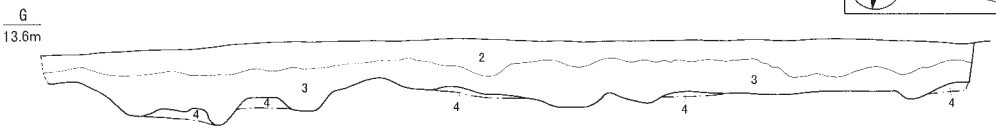


1 2.5Y2/1黒色粘土(ラミナあり)
2 2.5Y2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土まばらに混じる
3 10YR4/3にぶい黄褐色細砂
4 2.5Y4/1黄灰色粘土に10YR4/4褐色粘土混
5 7.5YR4/1褐灰色粘土
6 10YR5/1褐灰色粘土　鉄分含
7 10YR5/1褐灰色粘土(地山)

SK363

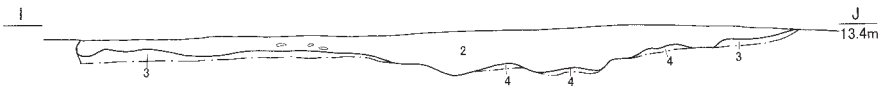


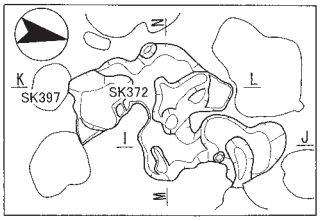


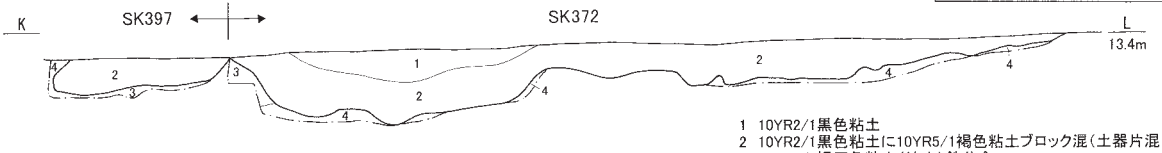


1 2.5Y4/1黄灰色粘土
2 10YR2/1黒色粘土
3 10YR2/1黒色粘土に10GY7/1明緑灰色シルトブロックと10YR5/1褐灰色粘土混
4 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)鉄分含

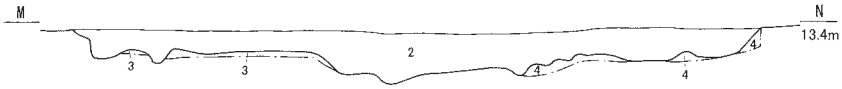
SK372・397



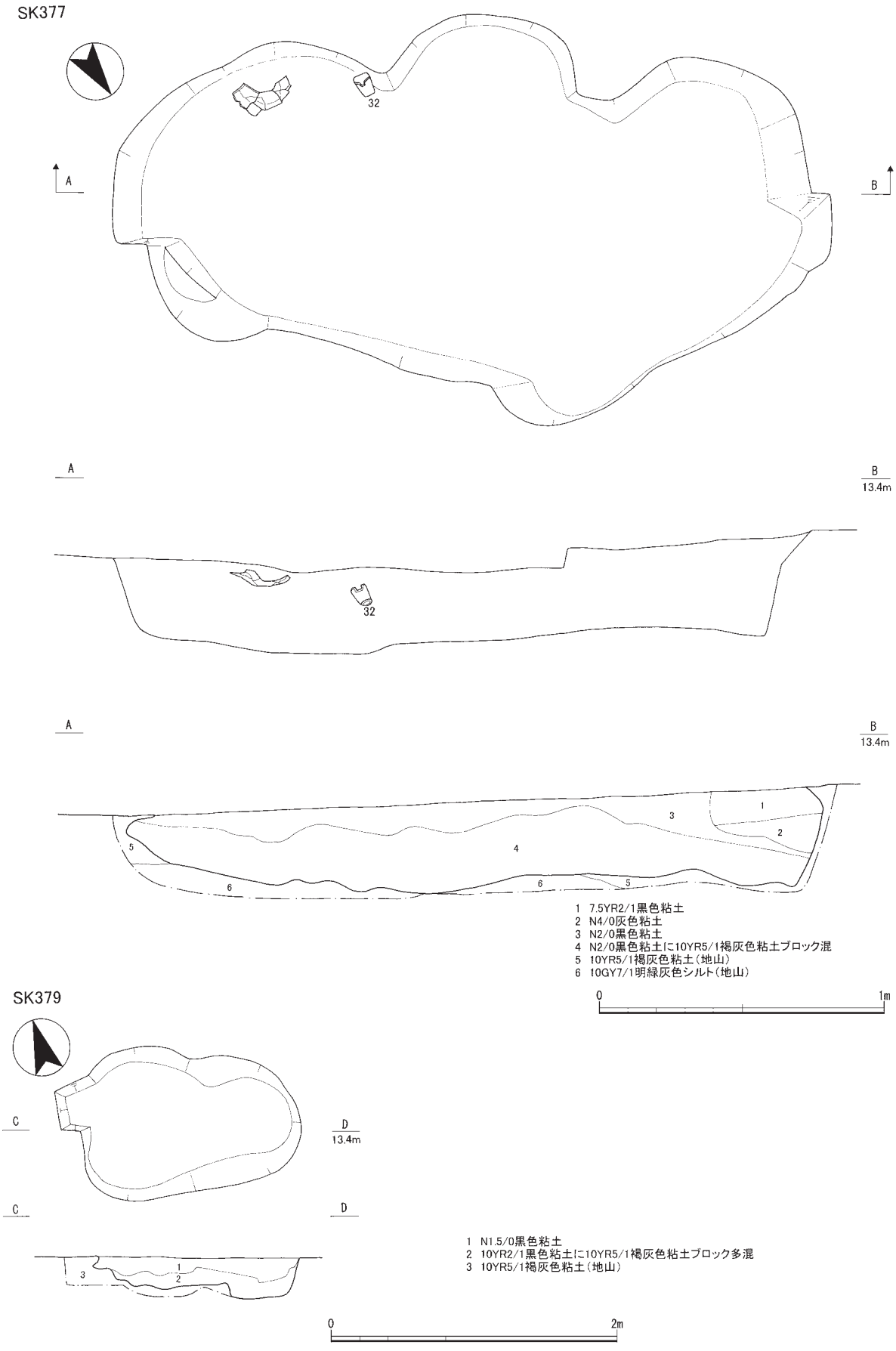




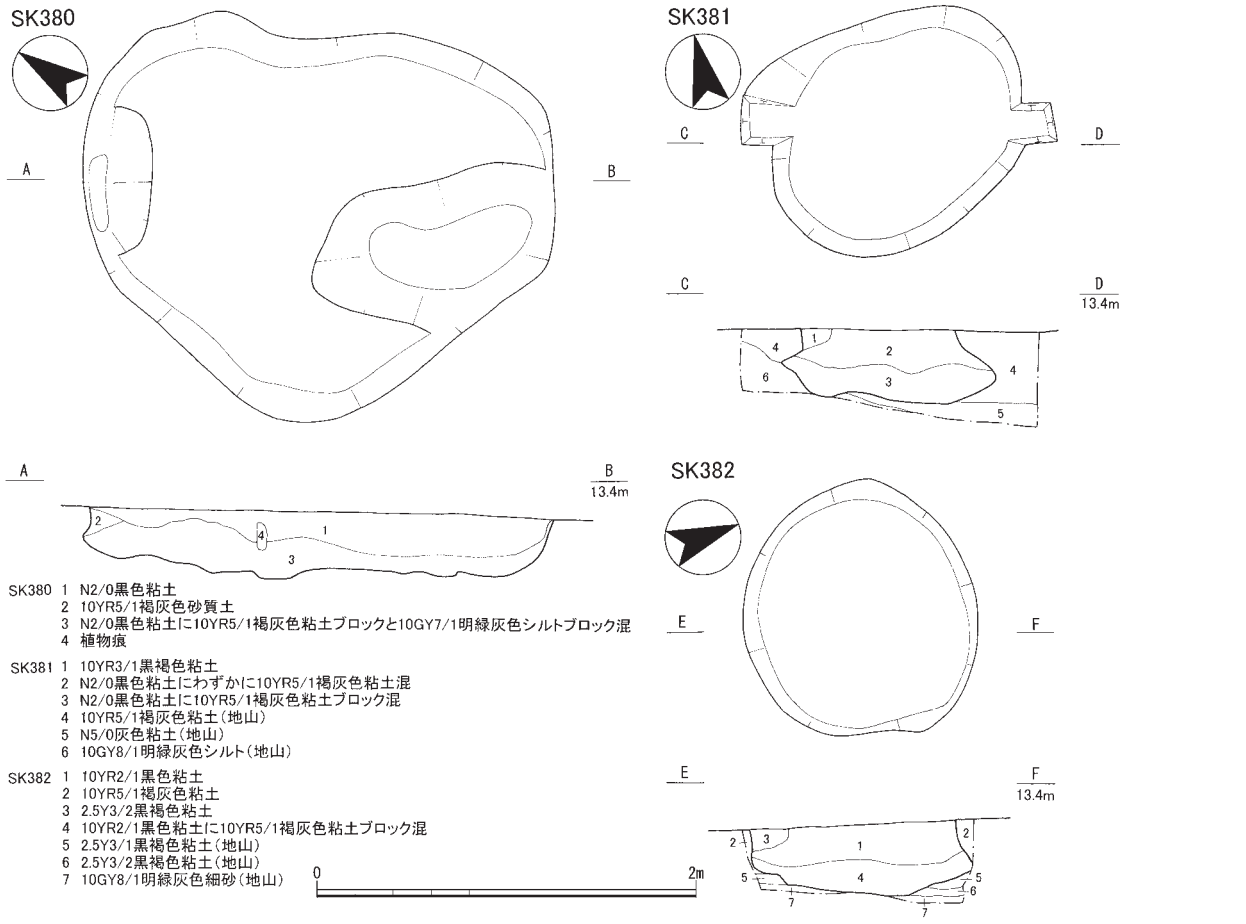
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐色粘土ブロック混(土器片混・鉄分含)
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
4 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)鉄分含

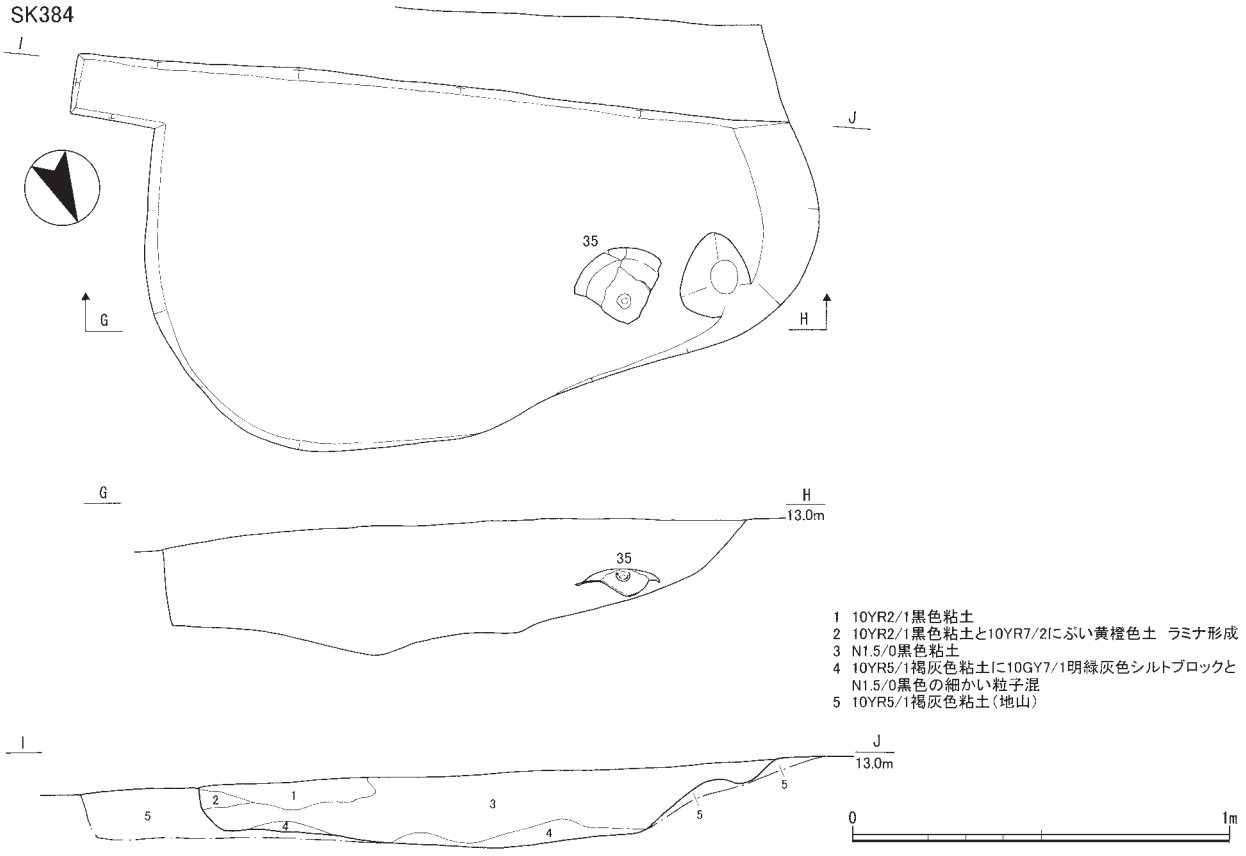


第46図　ＳＫ370・373遺構図、ＳＫ363・372・397土層断面図（１：40）

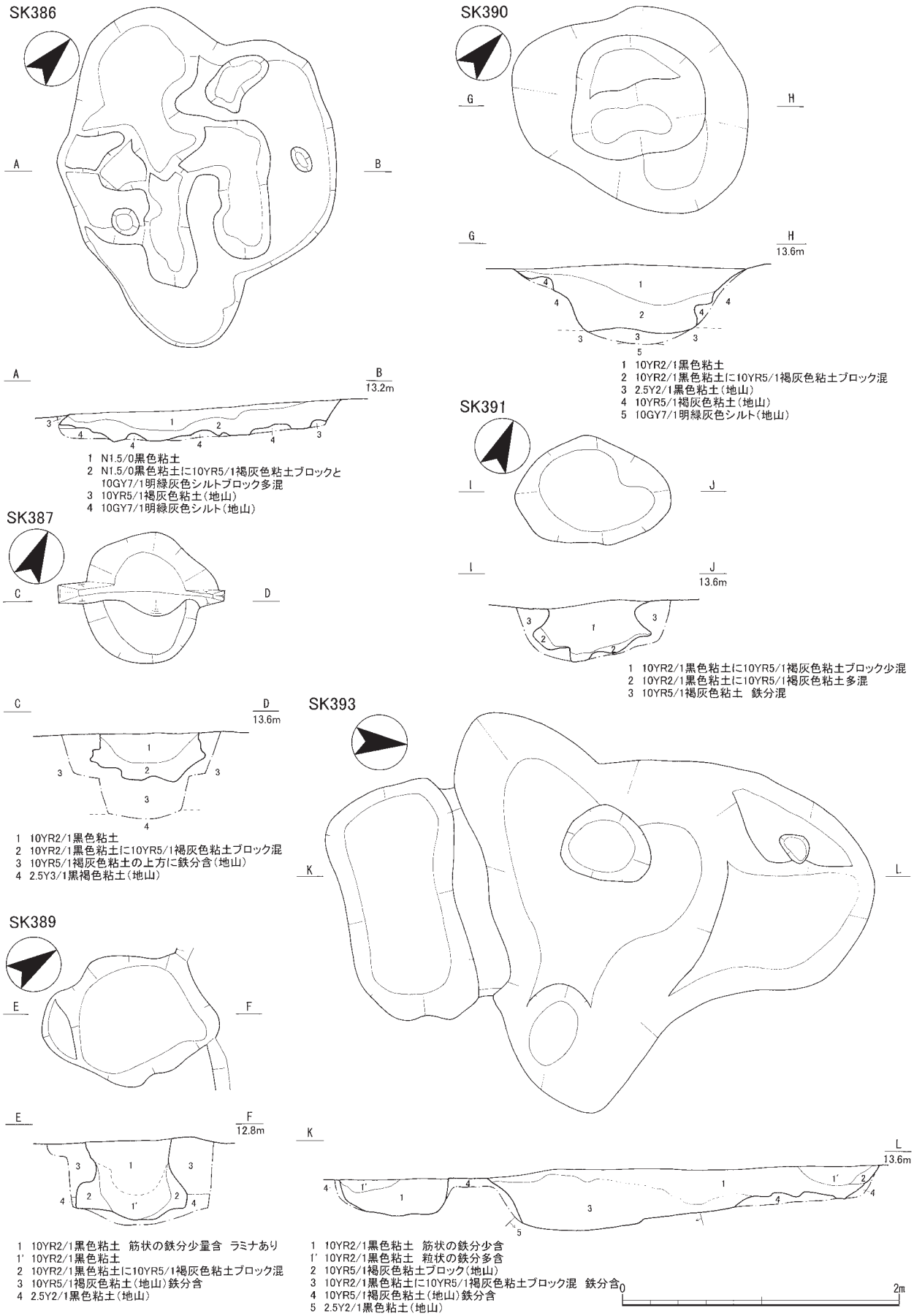


第47図　ＳＫ377・379遺構図（ＳＫ377は１：20、ＳＫ379は１：40）



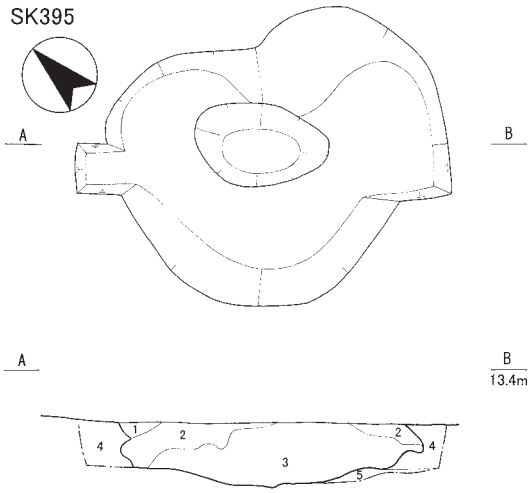


第48図　ＳＫ380～382・384遺構図（ＳＫ384のみ１：20、それ以外は１：40）



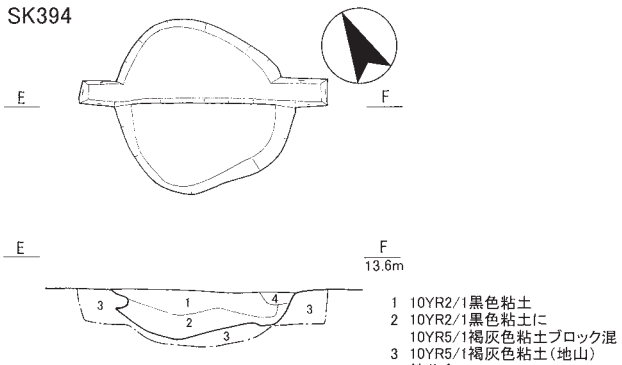
第49図　ＳＫ386・387・389～391・393遺構図（１：40）

SK395



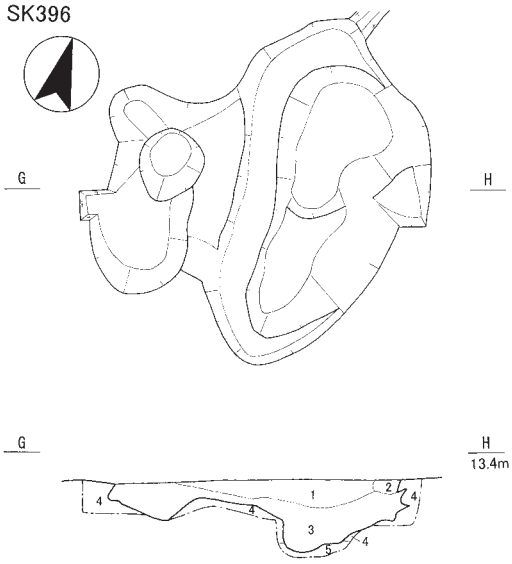
1 10YR3/1黒褐色粘土
2 N1.5/0黒色粘土
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックとN4/0灰色粘土ブロック混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
5 N4/0灰色粘土(地山)

SK394



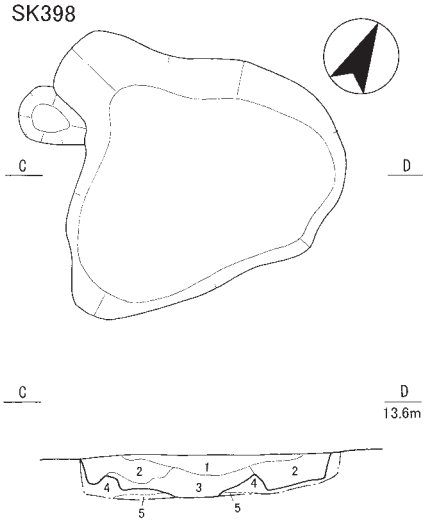
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に
10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
鉄分含
4 記載なし

SK396



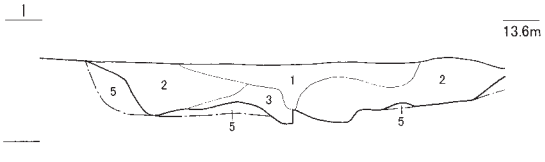
1 10YR2/1黒色粘土 縦筋状の鉄分混
2 10YR5/1褐灰色粘土ブロック(地山)崩落
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混(鉄分含)
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
5 10GY7/1明緑灰色シルト

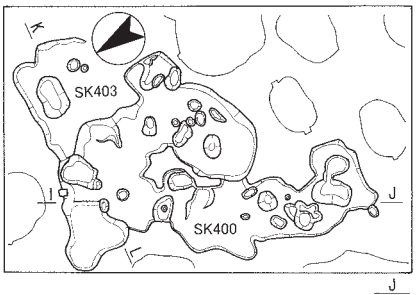
SK398

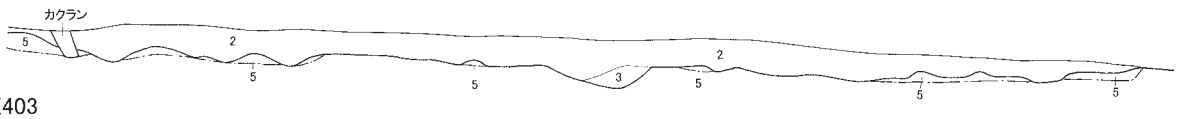


1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混 粒状の鉄分多混
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
5 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)鉄分含

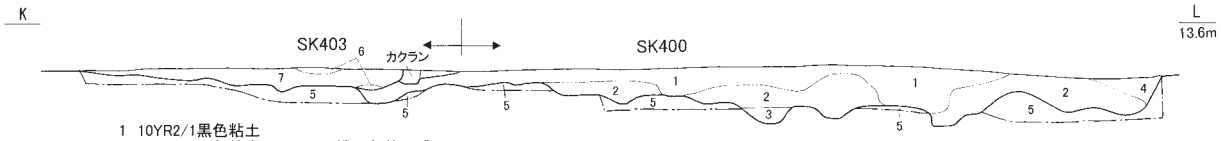
SK400





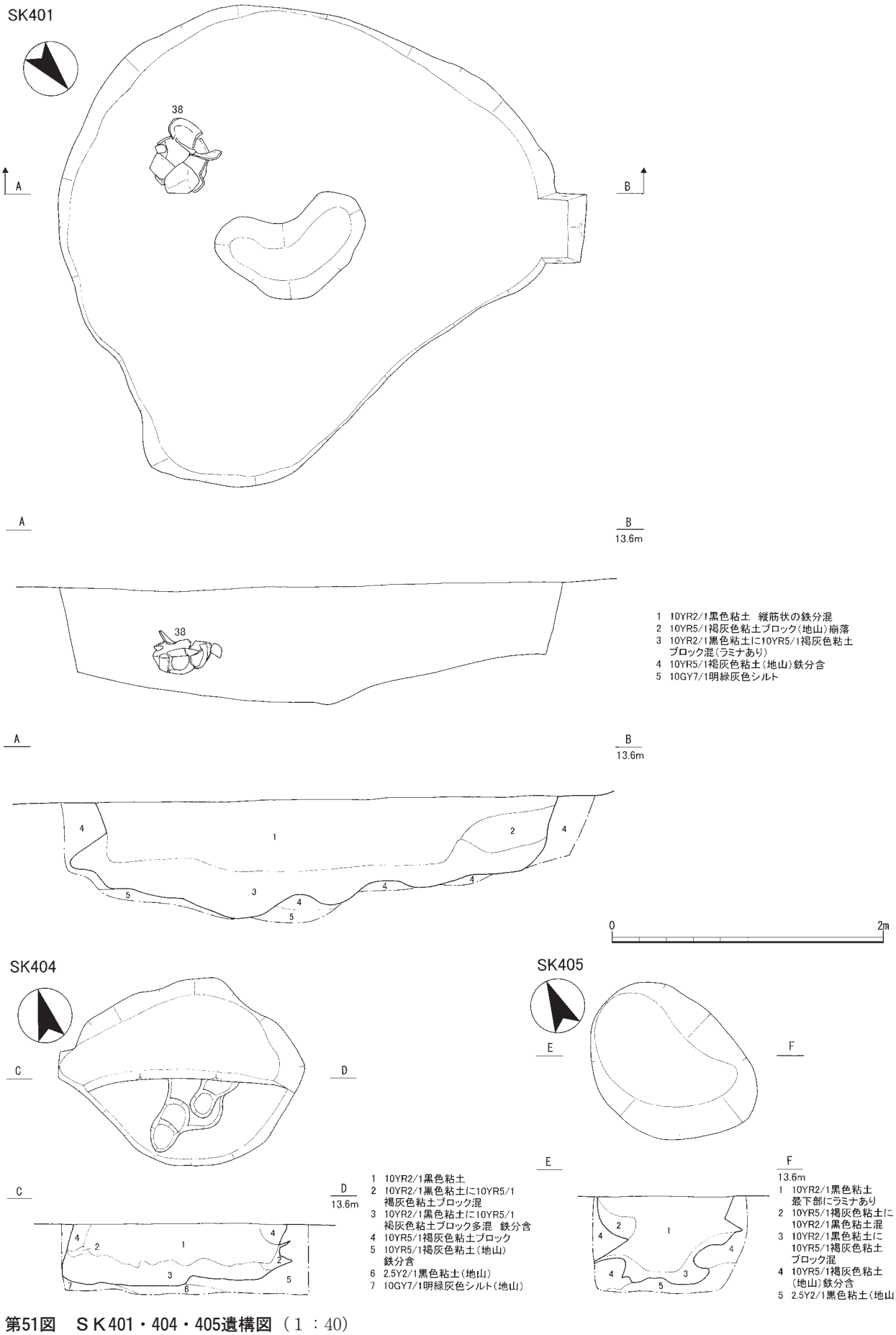


SK403

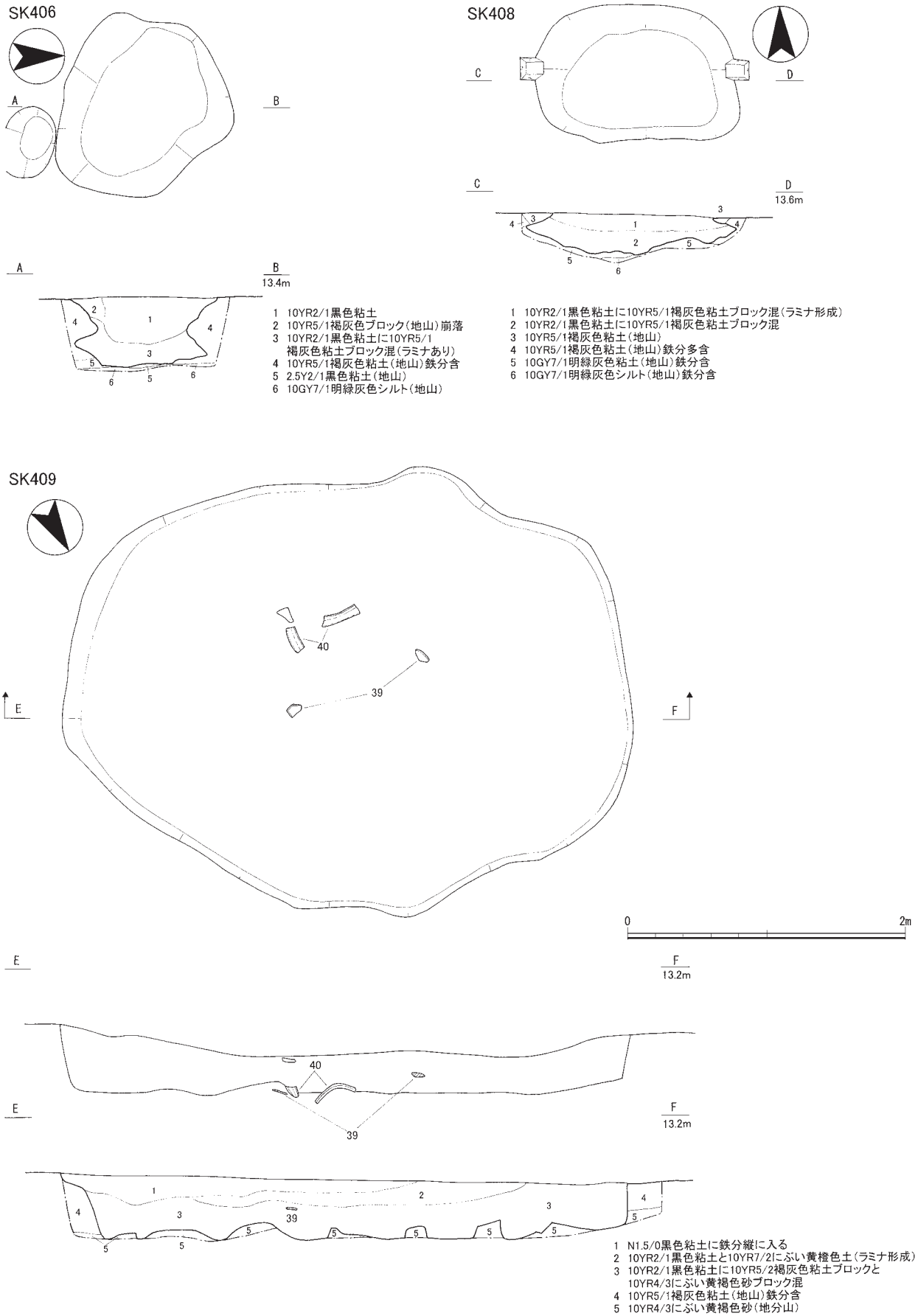


1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR2/1黒色粘土に10GY7/1明緑灰色シルトブロック混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)ブロック
5 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)
6 N1.5/0黒色土(炭化物層) ┐
7 10YR3/1黒褐色土 ┘ SK403埋土

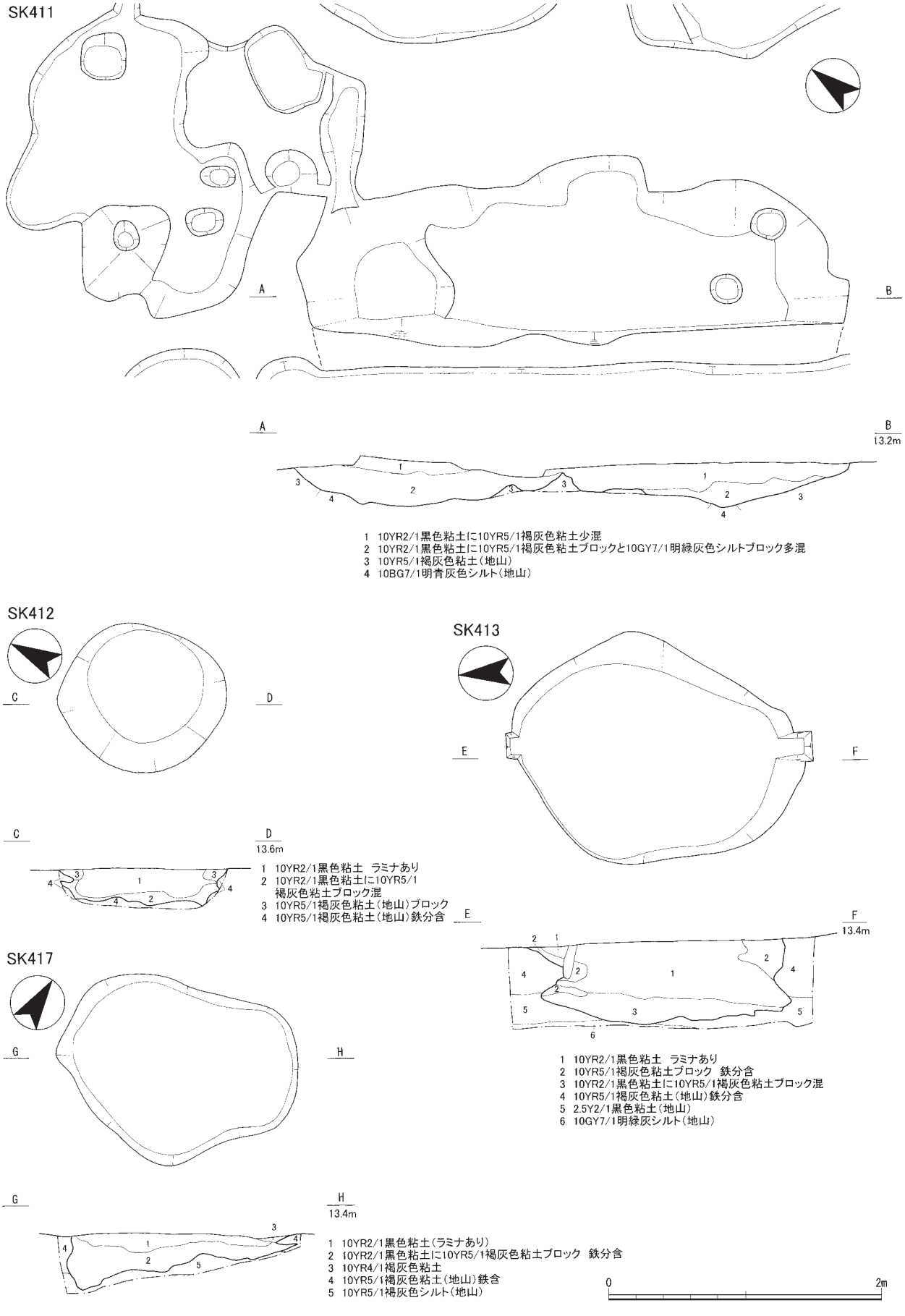
第50図　ＳＫ394～396・398・400・403遺構図（１：40）



第51図　ＳＫ401・404・405遺構図（１：40）

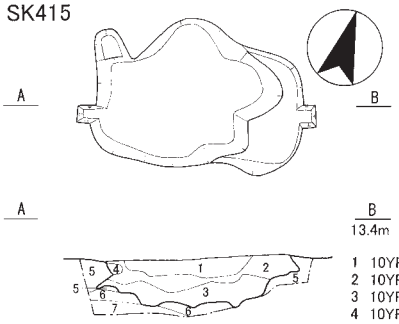


第52図　ＳＫ406・408・409遺構図（１：40）



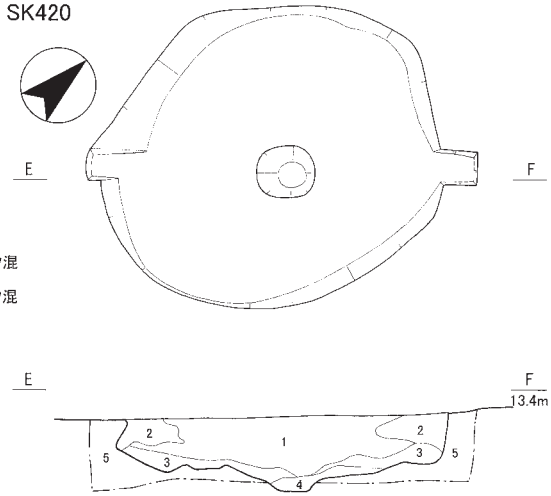
第53図　ＳＫ411～413・417遺構図（１：40）

SK415



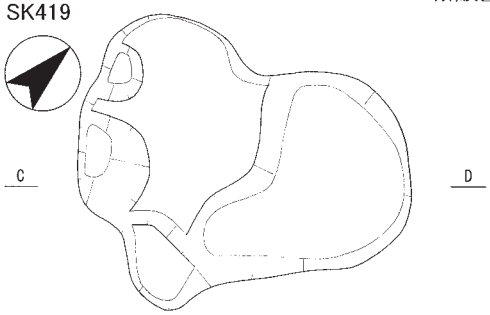
1 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロック混
2 10YR2/1黒色粘土
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
4 10YR2/1黒色粘土ブロック
5 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
6 2.5Y2/1黒色粘土(地山)
7 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)

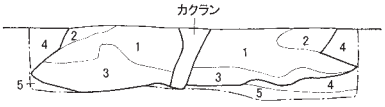
SK420



1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR5/1褐灰色粘土(地山)ブロック 鉄分含
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック
4 10YR5/1褐灰色粘土に10YR2/1黒色粘土混 鉄分含
5 10YR5/1褐灰色粘土(地山)

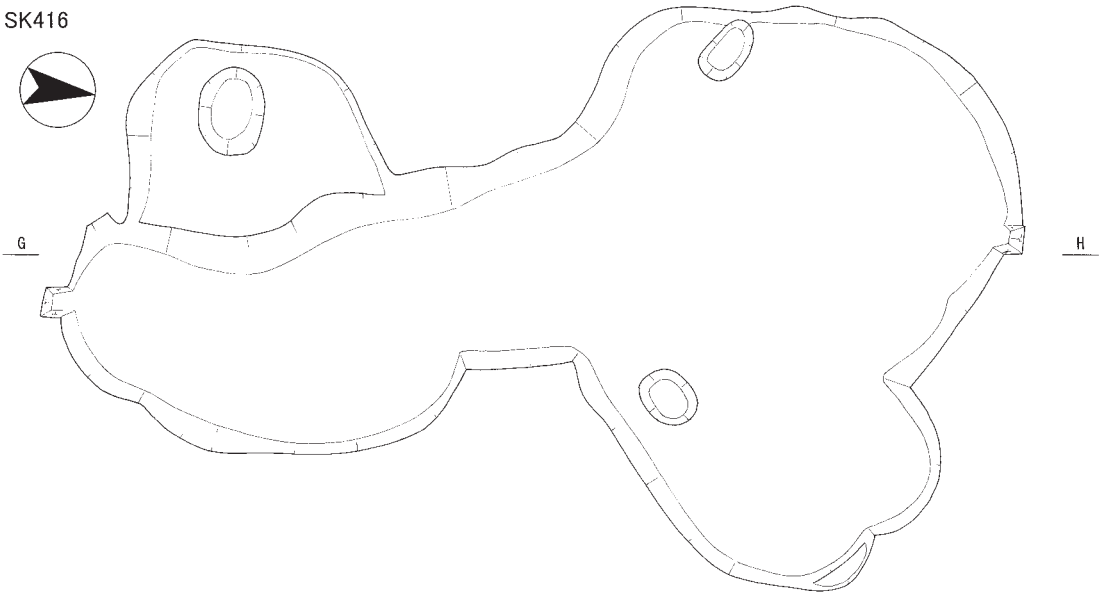
SK419





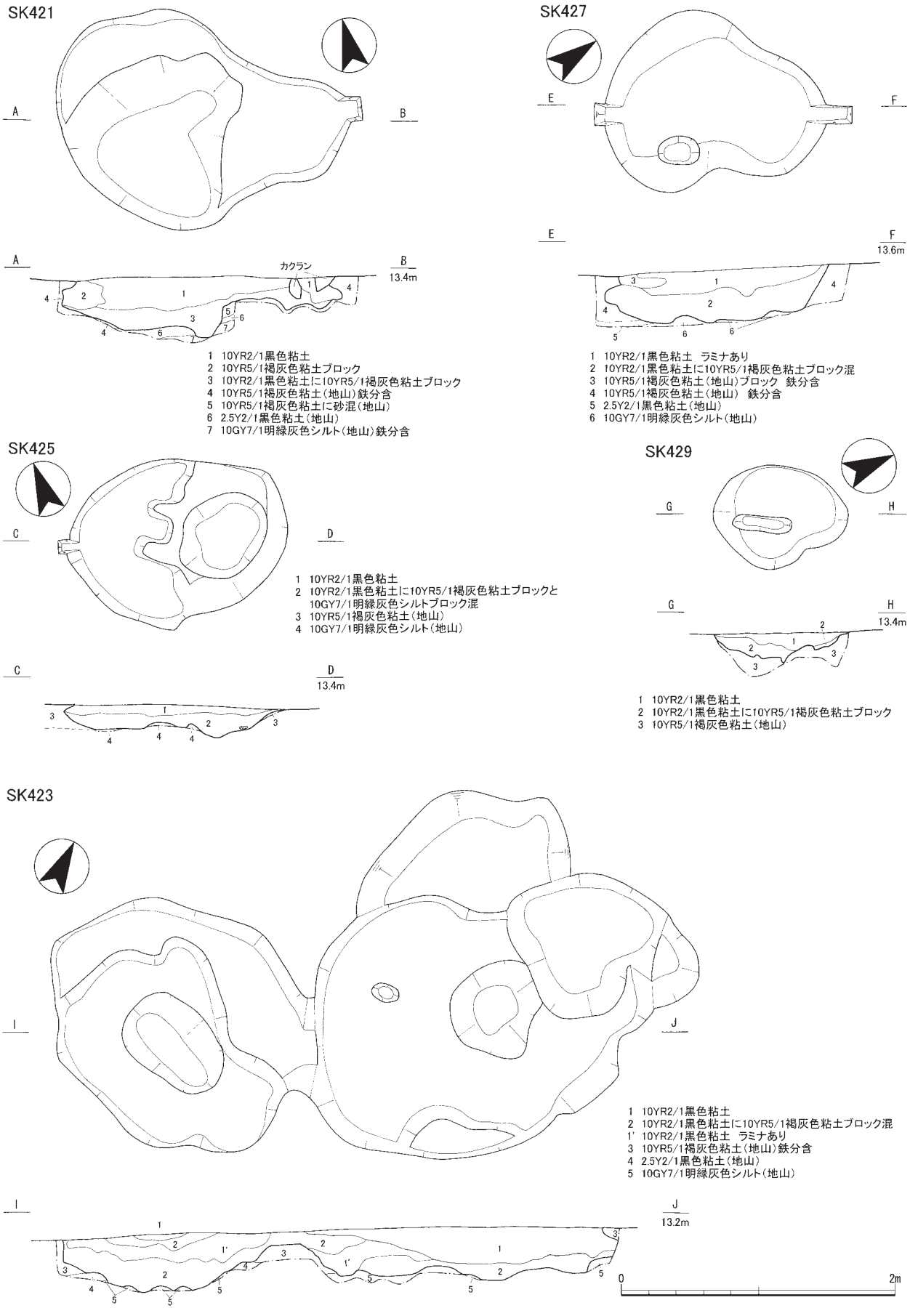
1 10YR2/1黒色粘土(ラミナあり)
2 10YR4/1褐灰色粘土
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
5 10YR5/1褐灰色シルト(地山)

SK416



1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
4 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)

第54図　ＳＫ415・416・419・420遺構図（１：40）

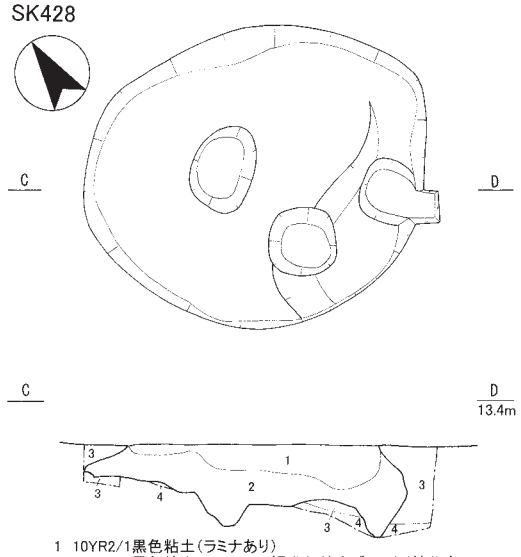


第55図　ＳＫ421・423・425・427・429遺構図（１：40）

SK426

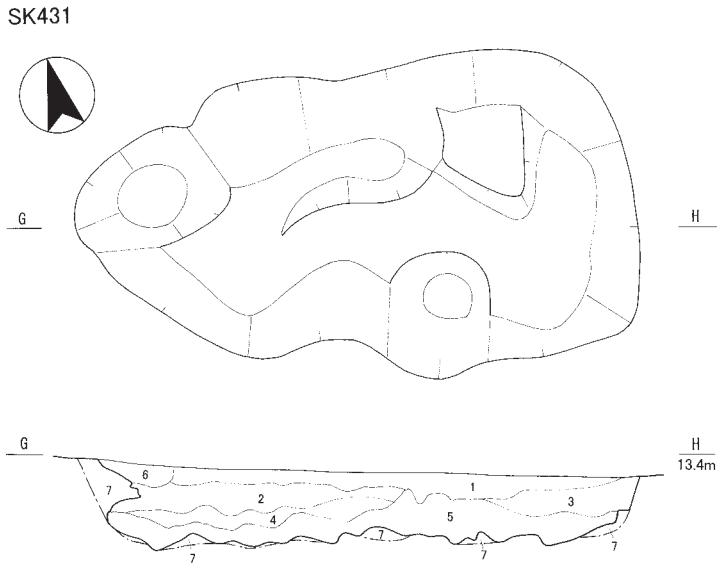
1 10YR2/1黒色粘土（ラミナあり）
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック 鉄分含
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色シルト混
4 10YR5/1褐灰色シルト（地山）鉄分含
5 2.5Y2/1黒色粘土（地山）

SK428



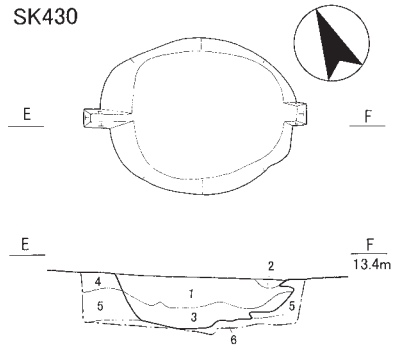
1 10YR2/1黒色粘土（ラミナあり）
2 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロック（鉄分含）
3 10YR5/1褐灰色粘土（地山）鉄分含
4 10YR5/1褐灰色シルト（地山）鉄分含

SK431



1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土・砂ブロック混
3 10YR2/1黒色粘土（ラミナあり）
4 N1.5/0黒色粘土
5 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土、10GY7/1明緑灰色粘土ブロック混
6 10YR4/1褐灰色粘土
7 10GY7/1明緑灰色粘土（地山）

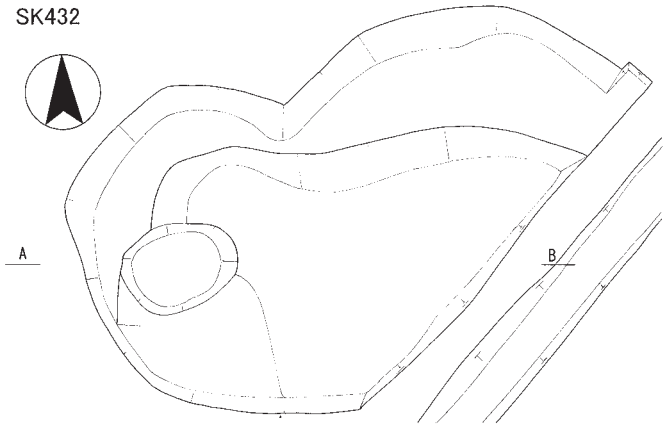
SK430

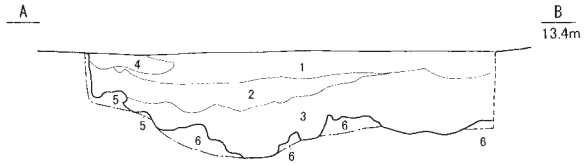


1 10YR2/1黒色粘土 ラミナあり
2 10YR5/1褐灰色粘土ブロック 鉄分含
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
4 10YR5/1褐灰色粘土に砂多混（地山）
5 10YR5/1褐灰色粘土（地山）鉄分含
6 10GY7/1明緑灰シルト（地山）

第56図　ＳＫ426・428・430・431遺構図（１：40）

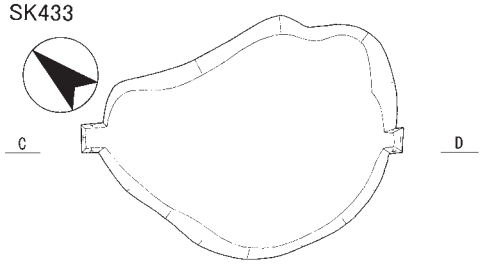
SK432





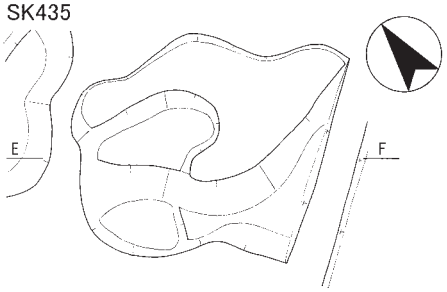
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土(ラミナあり)に10YR5/1褐灰色粘土ブロック少混
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック
4 10YR4/1褐灰色粘土
5 10GY7/1明緑灰色粘土(地山)
6 10YR5/1褐灰色シルト(地山)

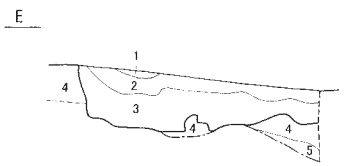
SK433



1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR5/1褐灰色粘土(地山)ブロック
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと
10GY7/1明緑灰色シルトブロック混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
5 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)

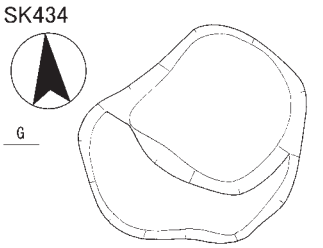
SK435

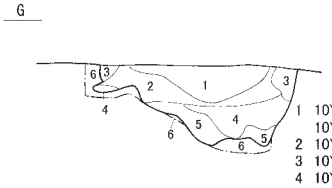




1 2.5Y4/1黄灰色砂質土
2 10YR2/1黒色粘土
3 10YR2/1黒色粘土に
10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
5 2.5Y2/1黒色粘土(地山)

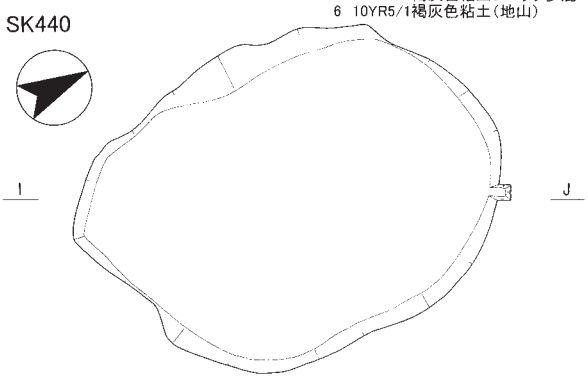
SK434

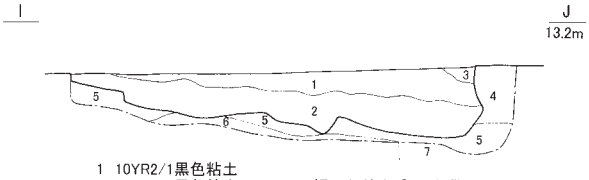




1 10YR2/1黒色粘土に
10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
2 10YR2/1黒色粘土 ラミナあり
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)ブロック
4 10YR2/1黒色粘土に
10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
5 10YR2/1黒色粘土に
10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
6 10YR5/1褐灰色粘土(地山)

SK440

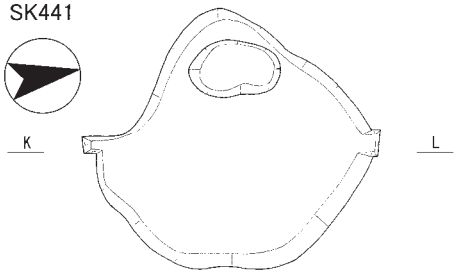


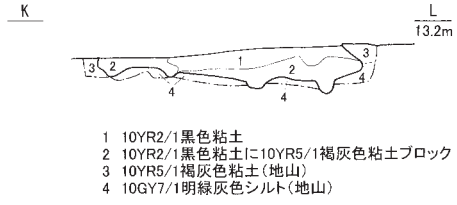


1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR4/1褐灰色粘土
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分多含
5 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
6 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)
7 5Y5/1灰色砂、1～5cm大の礫多含(地山)

0 2m

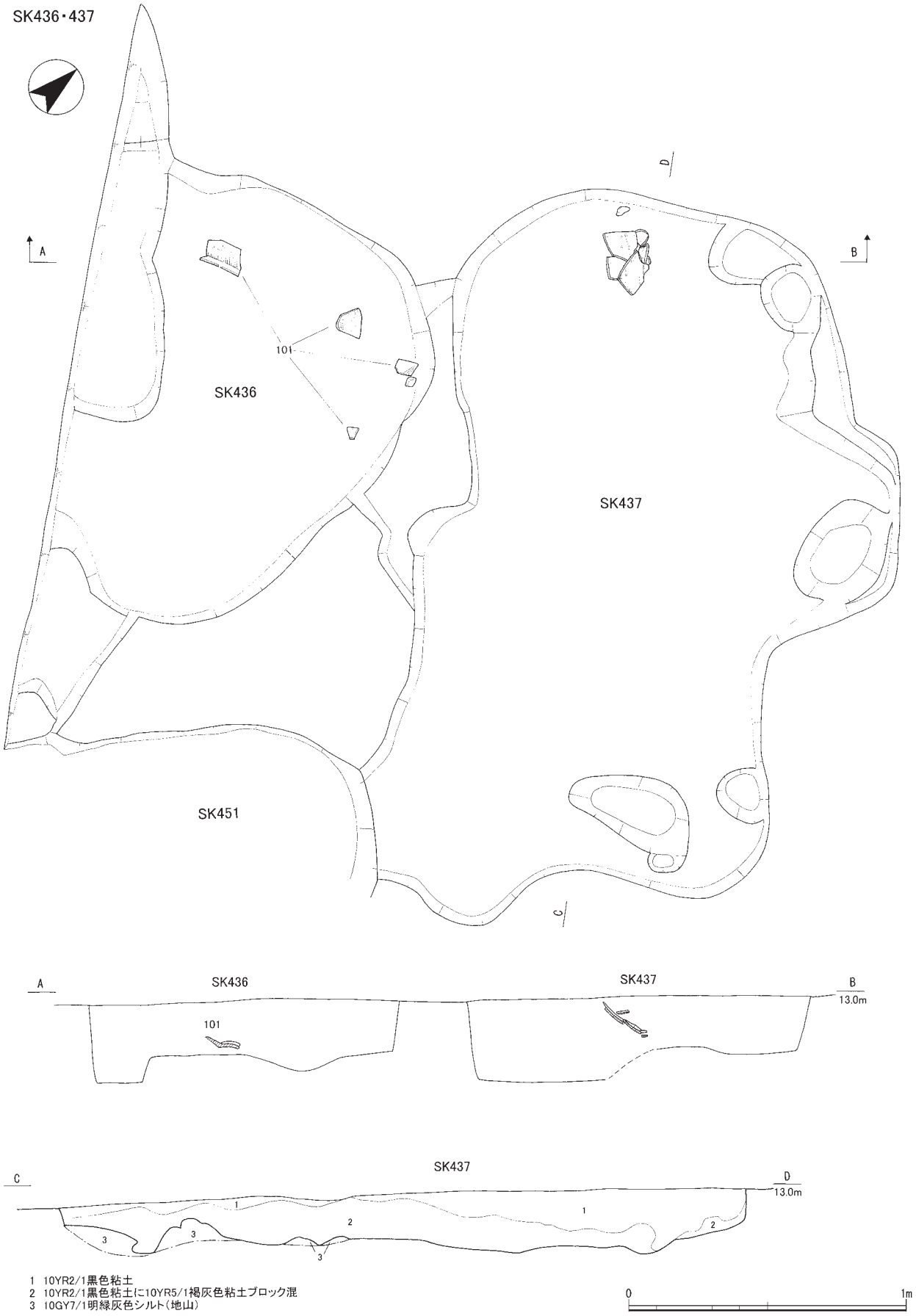
SK441



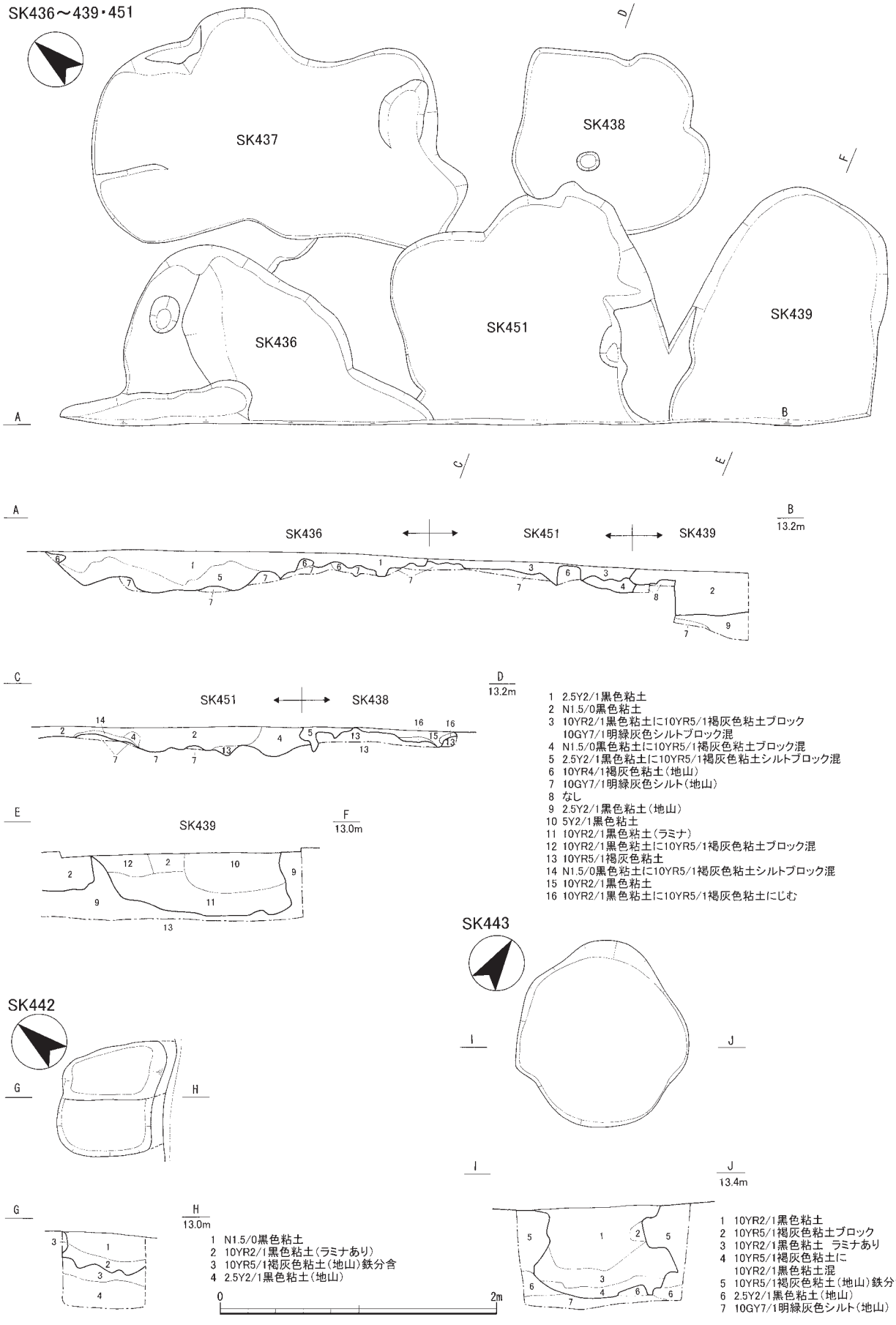


1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
4 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)

第57図　ＳＫ432～435・440・441遺構図（１：40）

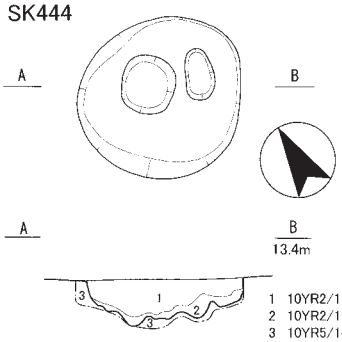


第58図　ＳＫ436・437遺構図（１：20）

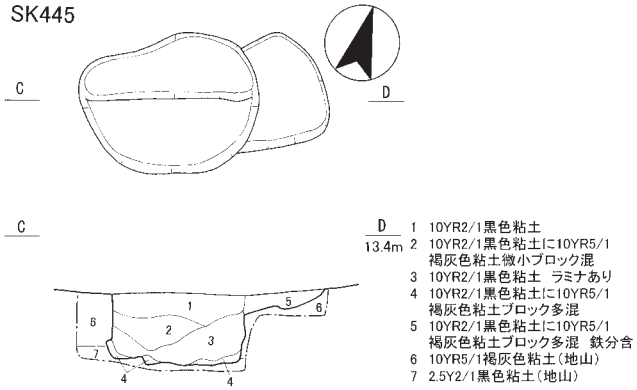


第59図　ＳＫ436～439・442・443・451遺構図（１：40）

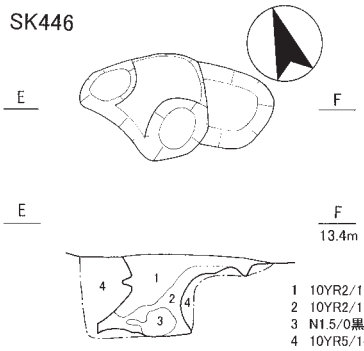
SK444



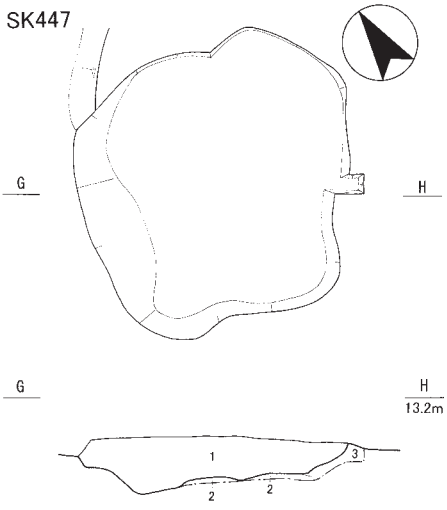
SK445



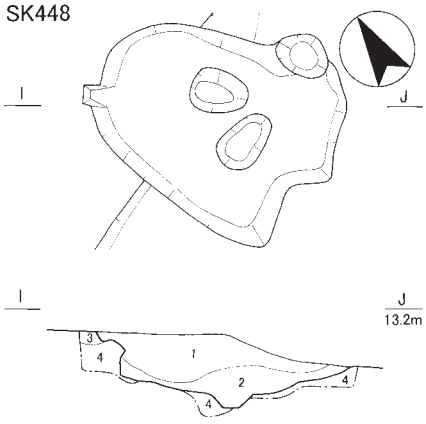
SK446



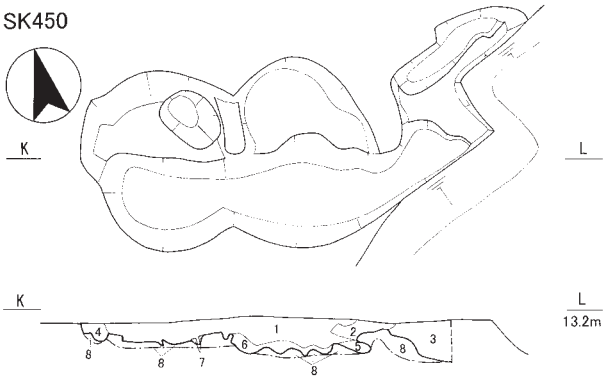
SK447



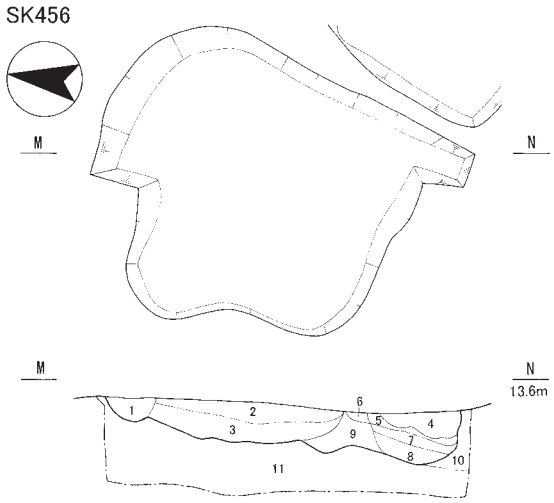
SK448



SK450



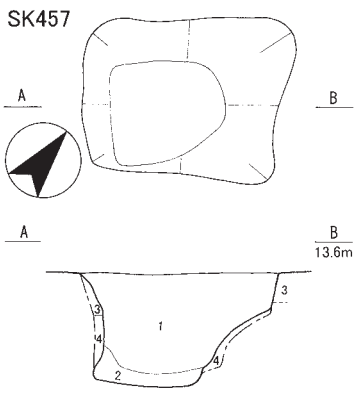
SK456



0 2m

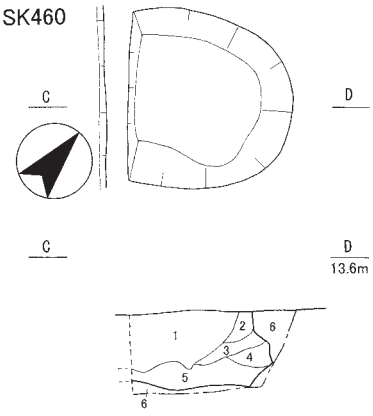
第60図　ＳＫ444～448・450・456遺構図（１：40）

SK457



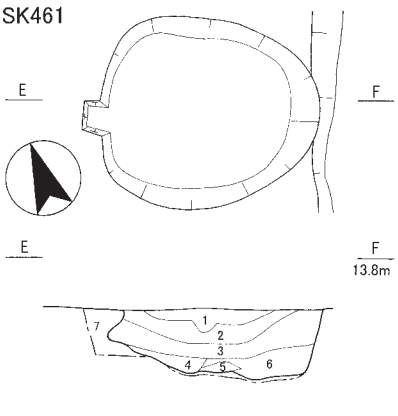
1 N1.5/0黒色粘土 上部は筋状に鉄分が入る
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色シルト(地山)
4 10GY7/1明緑灰色シルトに砂礫混(地山)

SK460



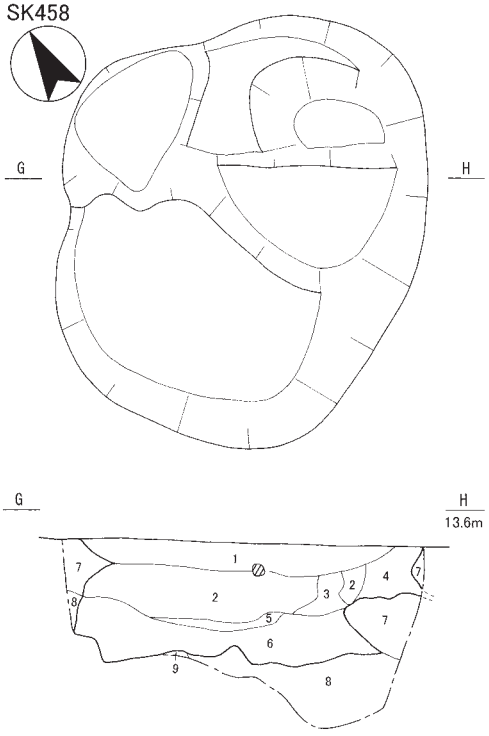
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR3/1黒色粘土 筋状に鉄分が入る
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック混(ラミナあり)
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
5 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混 鉄分含
6 10YR5/1褐灰色粘土(地山)

SK461



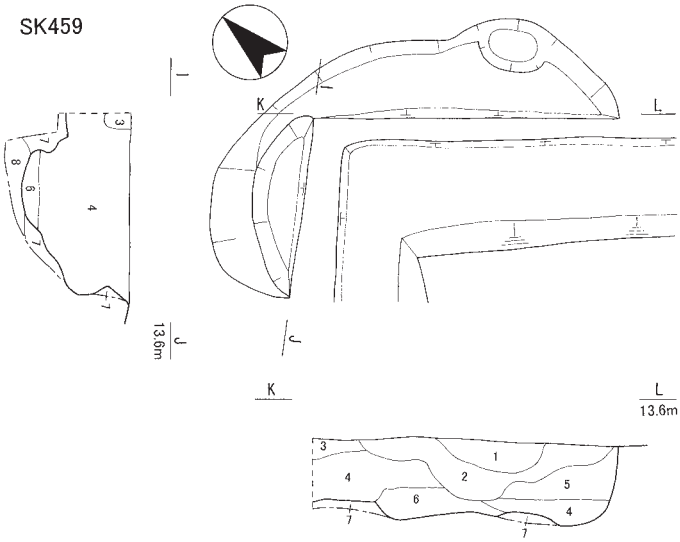
1 N1.5/0黒色粘土 筋状に鉄分が入る
2 10YR2/1黒色粘土
3 N1.5/0黒色粘土
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
5 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
6 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土の微小ブロック多混
7 10YR5/1褐灰色粘土 鉄分含

SK458



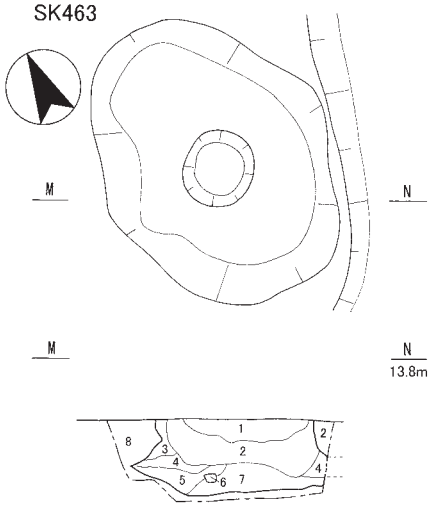
1 10YR2/1黒色粘土 砂粒少混 筋状に鉄分が入る
2 10YR1.7/1黒色粘土
3 10YR3/1黒褐色粘質土に10YR4/1褐灰色粘土ブロックと砂粒混
4 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロック混 筋状に鉄分が入る
5 10YR3/1黒褐色粘土
6 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロックと
10GY7/1明緑灰色シルトブロック混
7 10YR4/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
8 2.5Y2/1黒色粘土(地山)
9 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)

SK459



1 10YR2/1黒色粘土 筋状に鉄分が入る
2 10YR1.7/1黒色粘土
3 10YR4/1褐灰色粘質土
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
5 10YR4/2灰黄褐色粘質土
6 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
7 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含

SK463

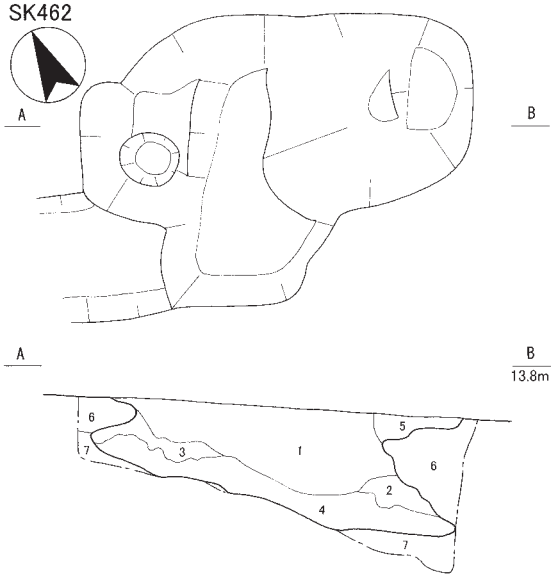


1 7.5YR2/1黒色粘土
微粒状に鉄分が入る
2 10YR2/1黒色粘土
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1
褐灰色粘土ブロック混
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1
褐灰色粘土微小ブロック混(ラミナあり)
5 10YR5/1褐灰色粘土に10YR2/1
黒色粘土 鉄分含
6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土
7 10YR5/1褐灰色粘土に10YR2/1
黒色粘土微小ブロック少混
8 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含

0 2m

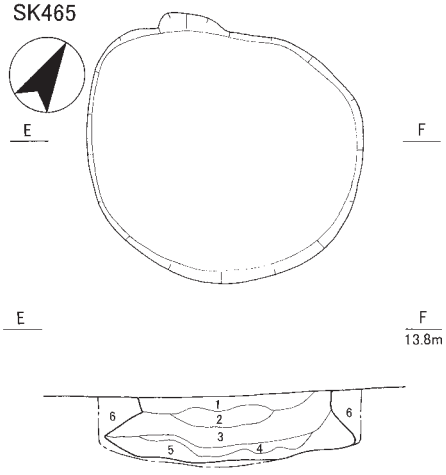
第61図　ＳＫ457～461・463遺構図（１：40）

SK462



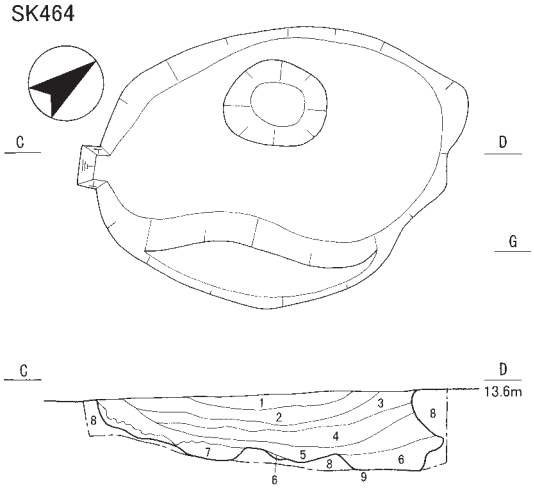
1 10YR2/1黒色粘土に10YR6/8明黄褐色土ブロック少混 筋状に鉄分が入る
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック混 ラミナあり
3 10YR3/2黒褐色土 鉄分含
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
5 10YR4/1褐灰色粘質土
6 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
7 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)

SK465



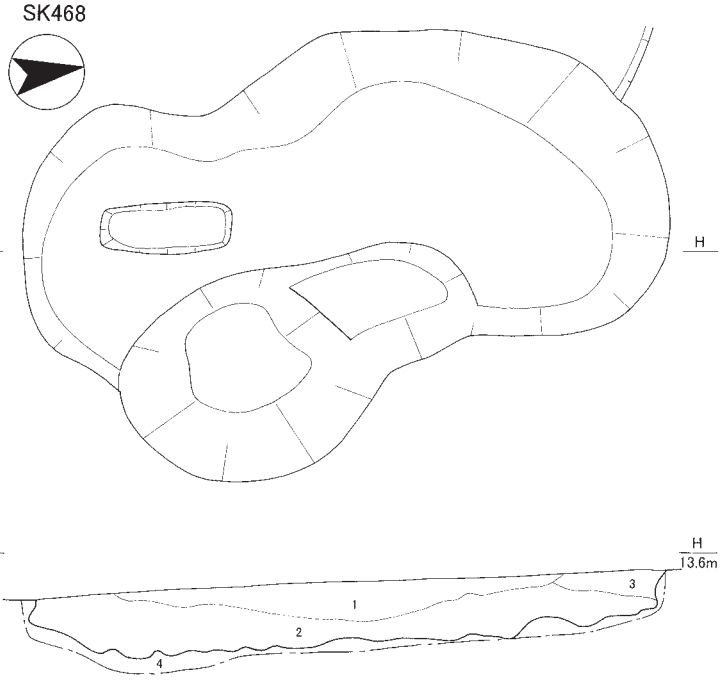
1 10YR2/1黒色粘土
2 N1.5/0黒色粘土
3 7.5YR2/1黒色粘土
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
5 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混 ラミナあり
6 10YR5/1褐灰色粘土(地山)

SK464



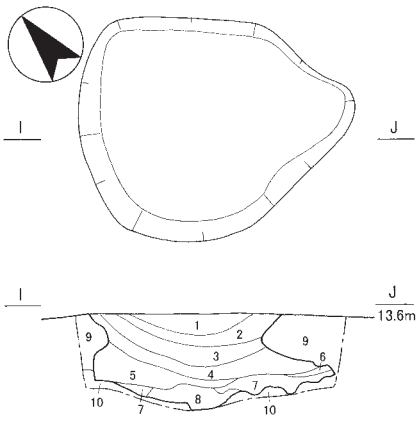
1 10YR2/1黒色粘土 筋状に鉄分が入る
2 7.5YR2/1黒色粘土 筋状に鉄分が入る
3 10YR2/1黒色粘土
4 10YR3/1黒褐色粘土
5 10YR2/1黒色粘土
6 10YR2/1黒色粘土に10YR5/2灰黄褐色粘土ブロック混
7 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
8 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
9 10YR5/1褐灰色粘土(地山)砂粒混

SK468



1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR4/1褐灰色粘質土 砂粒混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)

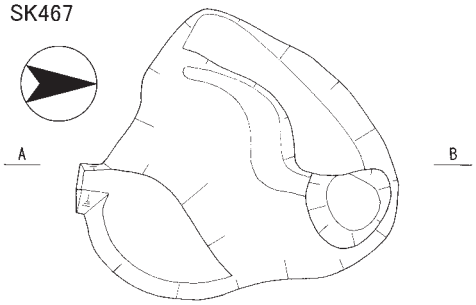
SK471

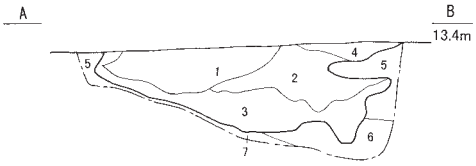


1 10YR2/1黒色粘土 微粒状に鉄分が入る
2 10YR1.7/1黒色粘土
3 10YR2/1黒色粘土
4 10YR1.7/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロック混
5 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色微小ブロック多混、
10YR1.7/1黒色粘土ブロック混(ラミナあり)
6 10YR5/1褐灰色粘土
7 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
8 10YR1.7/1黒色粘土
9 10YR5/1褐灰色粘土 鉄分含
10 10YR5/1褐灰色粘土 砂粒混

第62図　ＳＫ462・464・465・468・471遺構図（１：40）

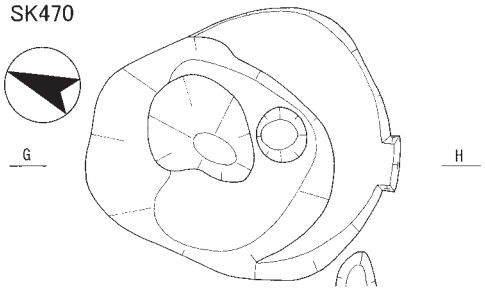
SK467

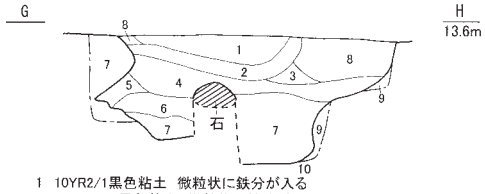




1 10YR2/1黒色粘土 筋状に鉄分が入る
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック混 ラミナあり
3 10YR2/1黒色粘土ブロックと10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混 鉄分含
4 10YR4/1褐灰色粘質土 砂粒混
5 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
6 2.5Y2/1黒色粘土(地山)
7 10YR5/1褐灰色シルト(地山)鉄分含

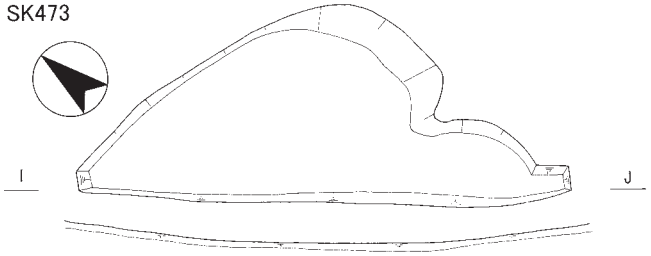
SK470

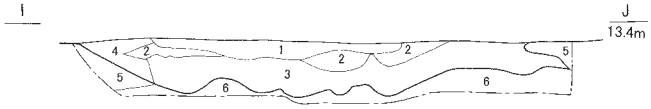




1 10YR2/1黒色粘土 微粒状に鉄分が入る
2 10YR1.7/1黒色粘土 微粒状に鉄分が入る
3 10YR1.7/1黒色粘土
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック少混
5 10YR2/1黒色粘土微小ブロックと10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック、砂粒混
6 10YR1.7/1黒色粘土
7 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
8 2.5YR3/1黒褐色粘質土 砂粒混
9 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
10 2.5Y4/1黄灰色粘土(地山)

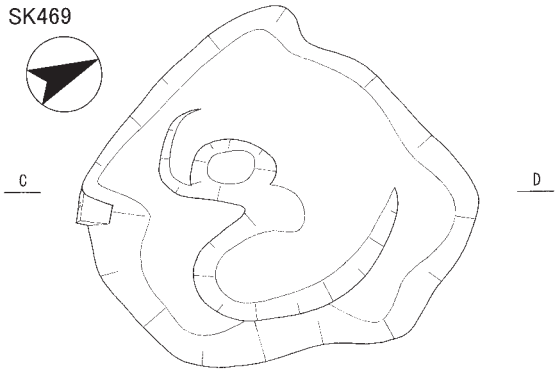
SK473

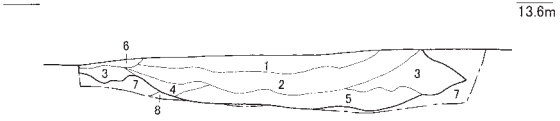




1 10YR2/1黒色粘土 微粒状に鉄分が入る
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック混 ラミナあり
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
4 10YR5/1褐灰色粘土に10YR2/1黒色粘土少混
5 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
6 10YR5/1褐灰色シルト 鉄分含

SK469

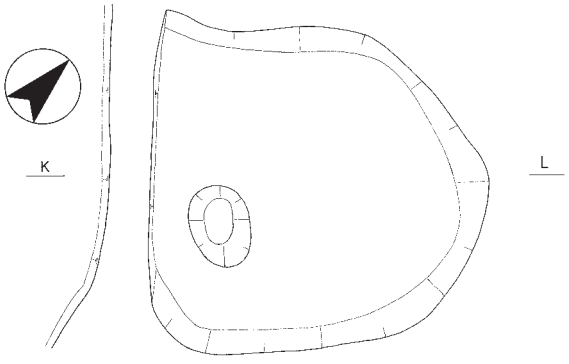


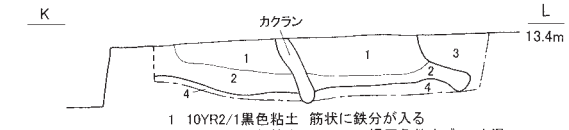


1 10YR1.7/1黒色粘土 筋状に鉄分が入る
2 10YR2/1黒色粘土
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック多混 ラミナあり
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
5 10YR5/1褐灰色粘土に10YR2/1黒色粘土の微小ブロック多混
6 10YR5/1褐灰色粘土ブロック
7 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
8 10YR5/1褐灰色シルト(地山)鉄分含

0 2m

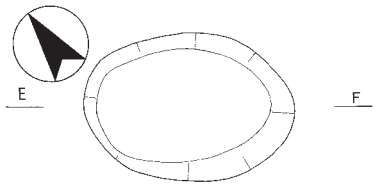
SK475

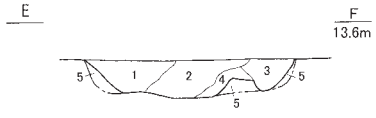




1 10YR2/1黒色粘土 筋状に鉄分が入る
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
4 10YR5/1褐灰色シルト(地山)鉄分含

SK474

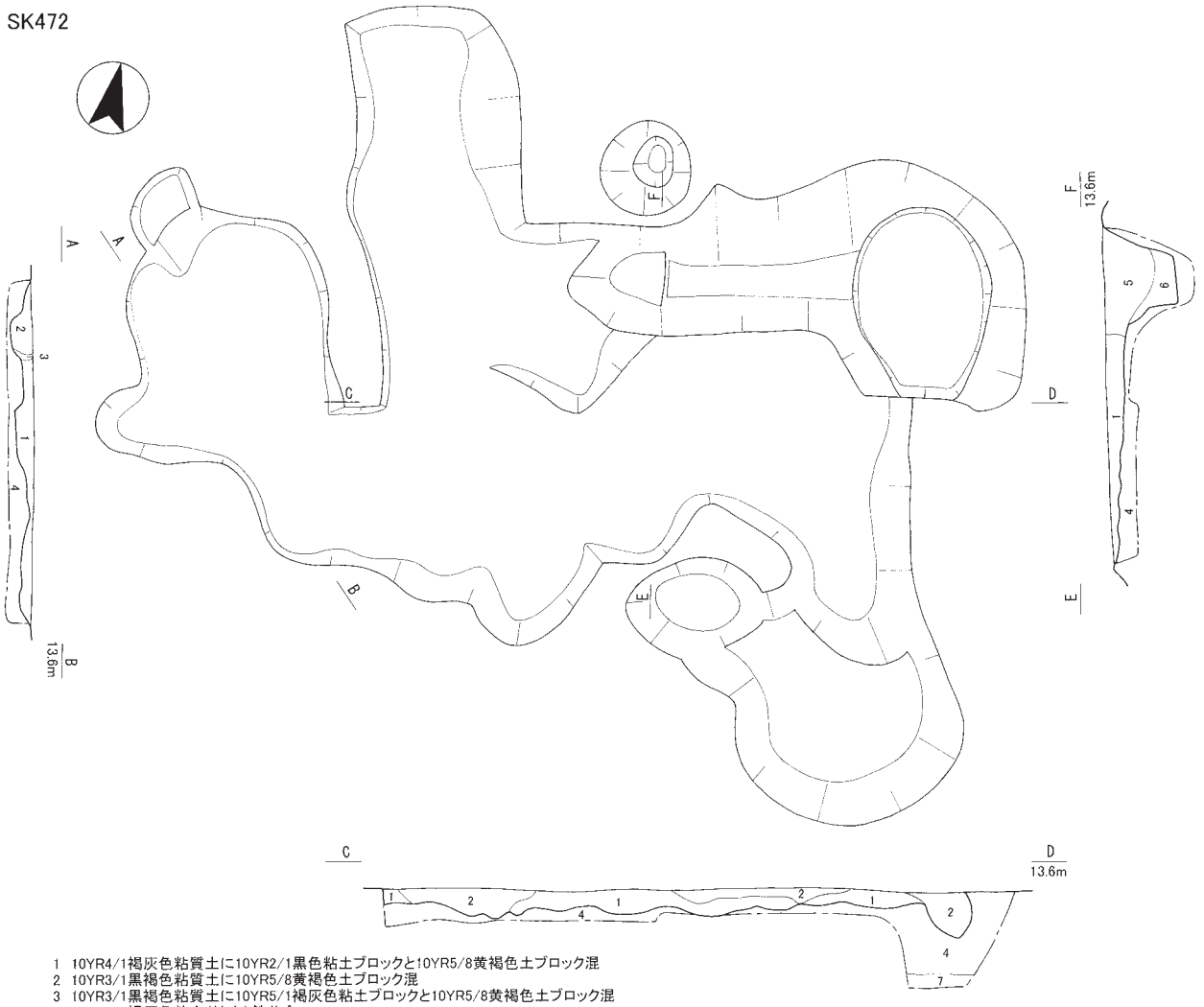




1 5Y3/2オリーブ黒色粘土に
10YR3/1黒褐色粘土ブロック混
2 10YR3/1黒褐色粘土に
2.5Y5/6黄褐色粘土ブロック混
3 10YR3/2黒褐色粘質土に
N5/0灰色粘土ブロック混 鉄分含
4 10YR5/1褐灰色粘土に
10YR3/2黒褐色粘質土ブロック混
5 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含

第63図　ＳＫ467・469・470・473～475遺構図（１：40）

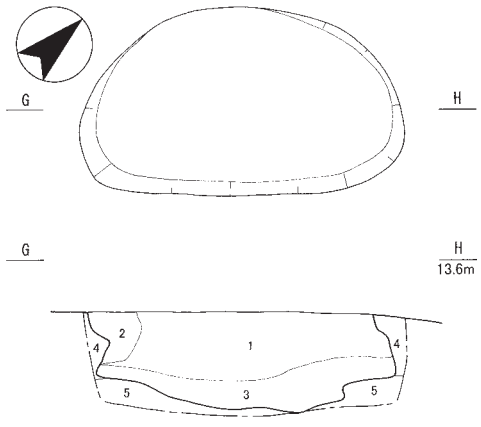
SK472



1 10YR4/1褐灰色粘質土に10YR2/1黒色粘土ブロックと10YR5/8黄褐色土ブロック混
2 10YR3/1黒褐色粘質土に10YR5/8黄褐色土ブロック混
3 10YR3/1黒褐色粘質土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと10YR5/8黄褐色土ブロック混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
5 10YR2/1黒色粘土
6 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混 ラミナあり
7 2.5Y2/1黒色粘土(地山)

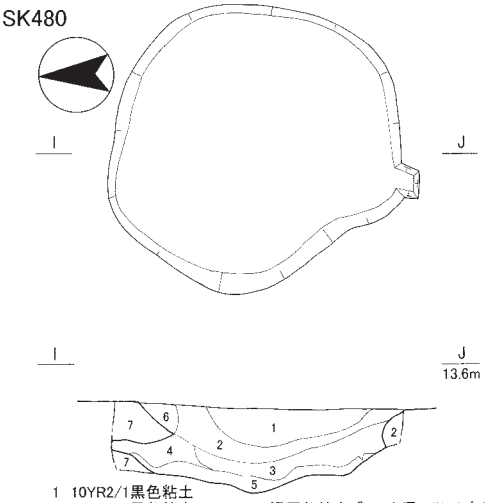
0 2m

SK479



1 10YR2/1黒色粘土 筋状に鉄分が入る
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混 鉄分含
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと
10YR5/1褐灰色シルトブロック混 鉄分含
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
5 10YR5/1褐灰色シルト(地山)鉄分含

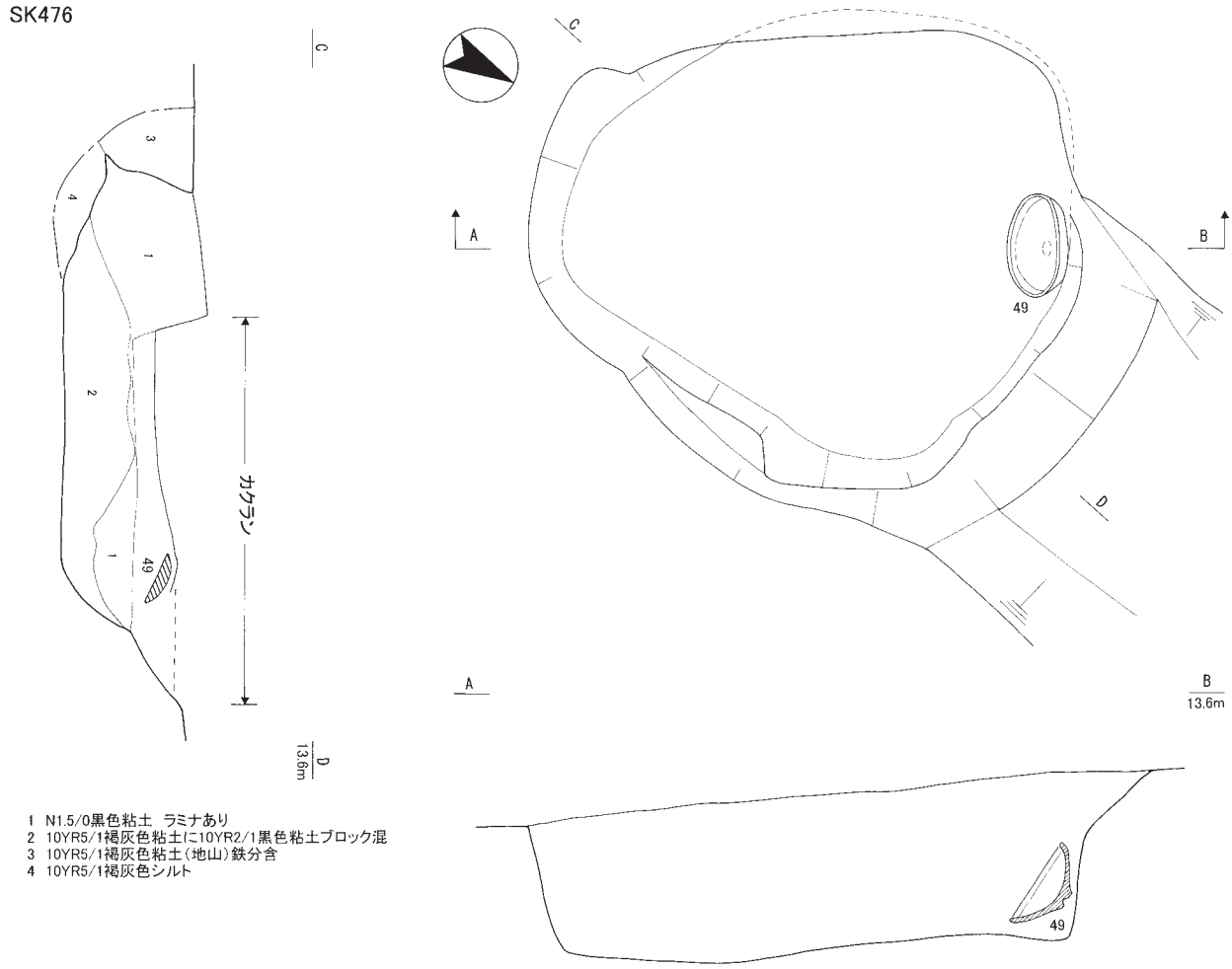
SK480



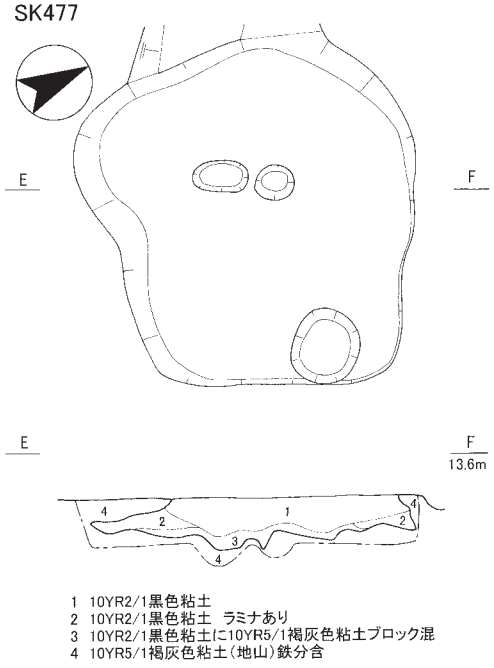
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混 ラミナあり
3 10YR3/1黒褐色粘土
4 10YR3/1黒褐色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混 ラミナあり
5 10YR5/1褐灰色粘土に10YR3/1黒褐色粘土ブロック混
6 10YR4/1褐灰色粘質土 粒状に鉄分が入る
7 10YR5/1褐灰色粘土(地山)

第64図　ＳＫ472・479・480遺構図（１：40）

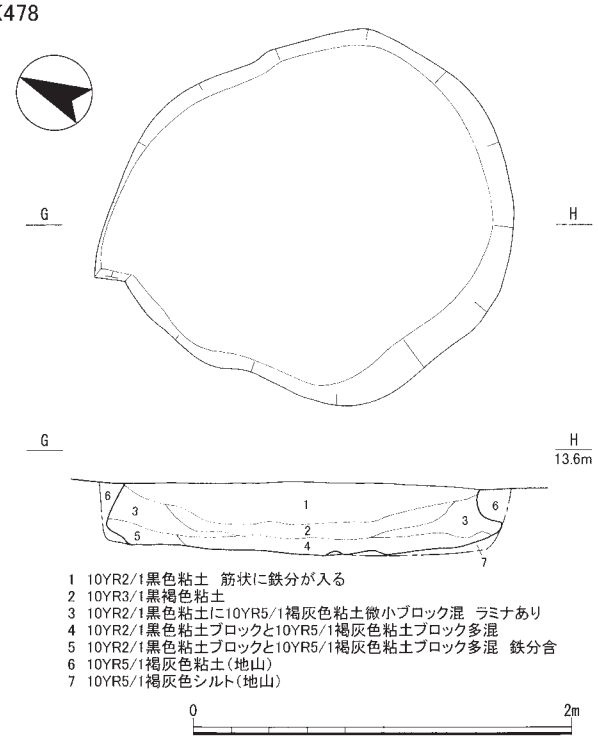
SK476



SK477

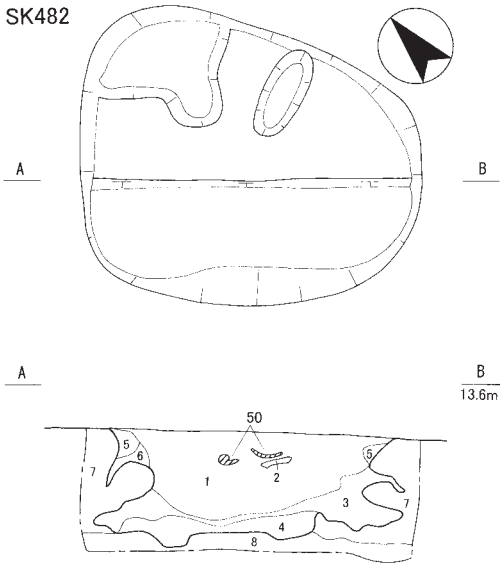


SK478



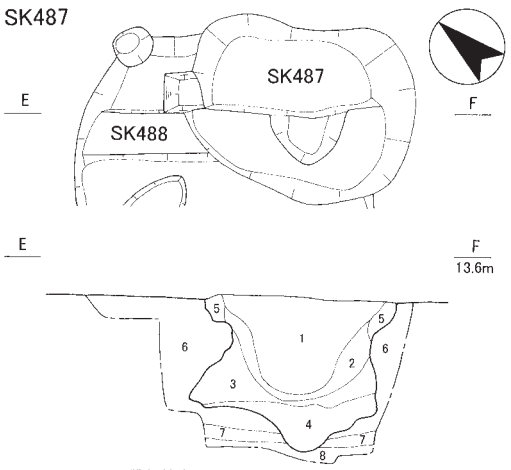
第65図　ＳＫ476～478遺構図（ＳＫ476のみ１：20、それ以外は１：40）

SK482



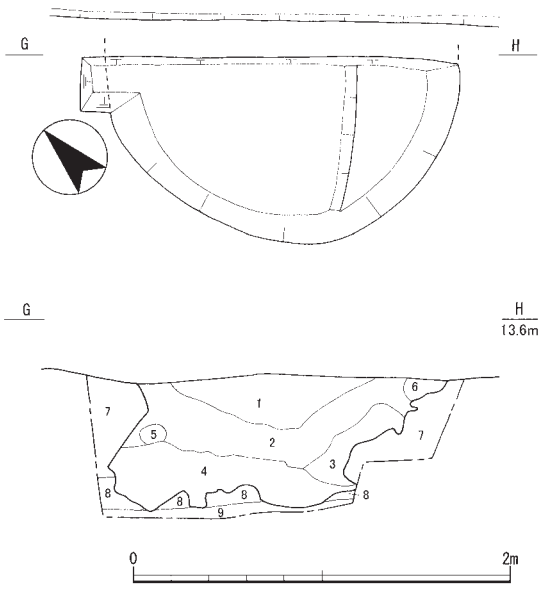
1 10YR2/1黒色粘土　下部にラミナあり
2 10YR5/1褐灰色粘土ブロック
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック混　ラミナあり
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
5 10YR4/1褐灰色粘質土　鉄分含
6 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
7 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
8 2.5Y2/1黒色粘土(地山)

SK487



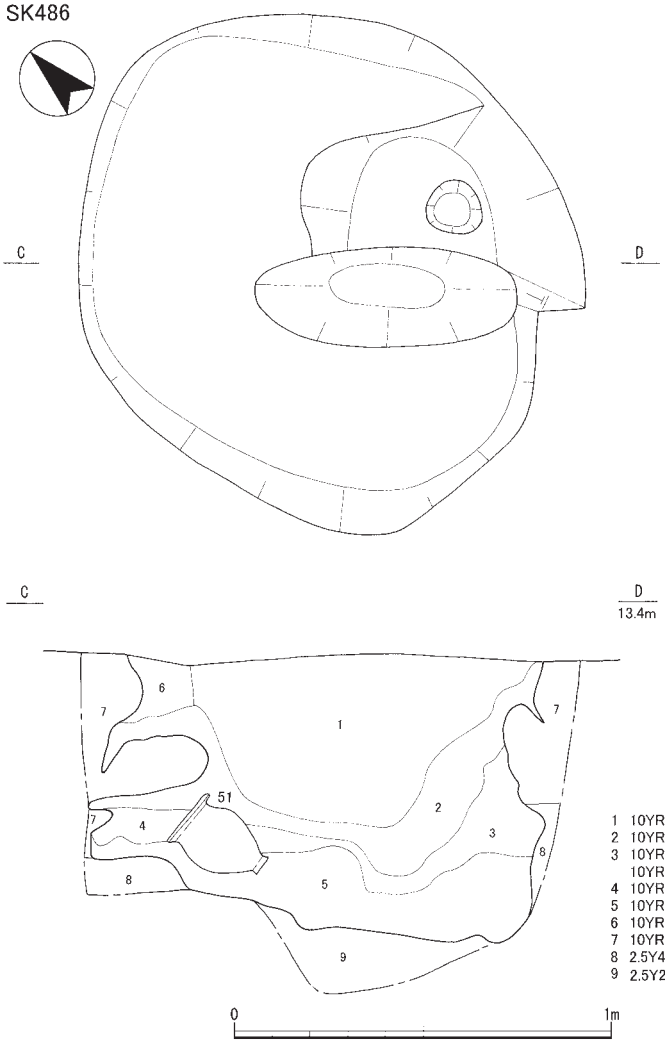
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック多混
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロックが混じる層と
10YR4/1褐灰色粘土の互層
4 10YR4/1褐灰色粘質土に10YR2/1黒色粘土ブロック少混
5 10YR4/1褐灰色粘質土　鉄分含
6 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
7 2.5Y2/1黒色粘土(地山)
8 10YR3/1黒褐色シルト(地山)

SK484



1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR3/1黒褐色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック混　ラミナあり(土器あり)
3 10YR4/1褐灰色粘質土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
5 10YR5/1褐灰色粘土ブロック
6 10YR4/1褐灰色粘質土
7 10YR6/1褐灰色粘土(地山)
8 2.5Y3/1黒褐色粘土(地山)
9 2.5Y5/1黄灰色シルト(地山)

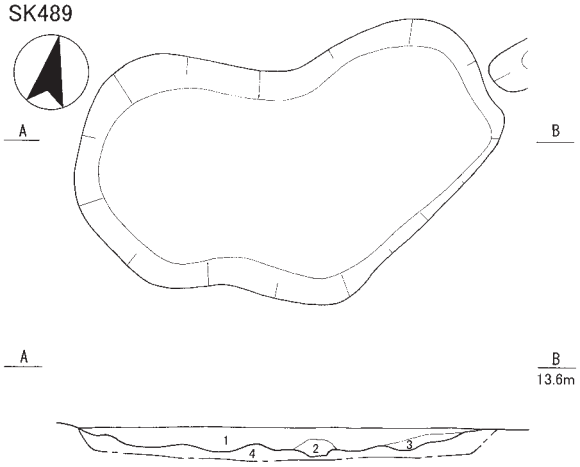
SK486



1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック多混　ラミナあり
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロックが混じる層と
10YR4/1褐灰色粘土の互層
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
5 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
6 10YR4/1褐灰色粘土　鉄分含
7 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
8 2.5Y4/2暗灰黄色粘土　鉄分含
9 2.5Y2/1黒色粘土

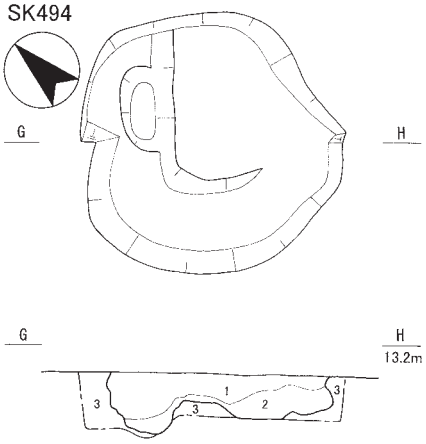
第66図　ＳＫ482・484・486・487遺構図（ＳＫ486のみ１：20、それ以外は１：40）

SK489



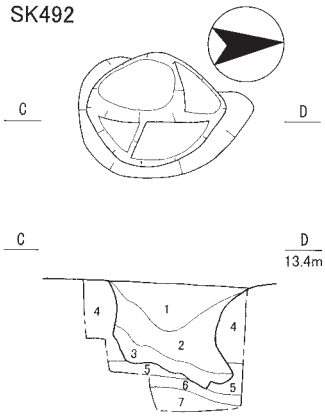
1 10YR2/1黒色粘質土に微粒状に鉄分混
2 10YR5/1褐灰色粘土に10YR2/1黒色粘質土ブロック混 鉄分含
3 10YR4/2灰黄褐粘質土 粒状の鉄分含
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含

SK494



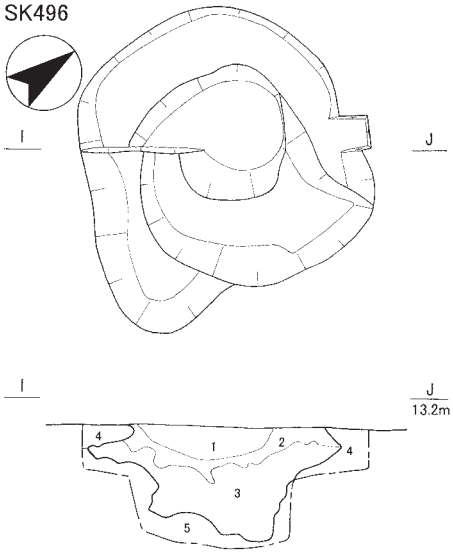
1 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロック混
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含

SK492



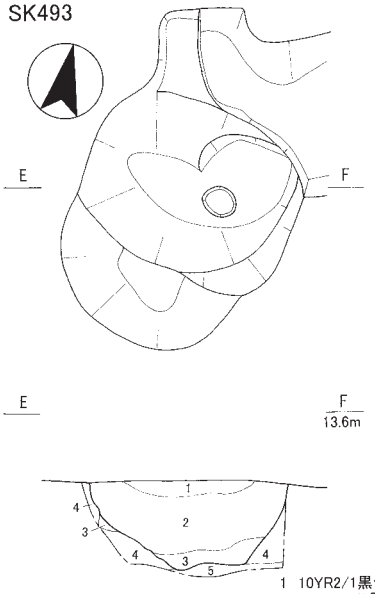
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1
褐灰色粘土ブロック混 ラミナあり
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1
褐灰色粘土ブロック多混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
鉄分含
5 10YR4/1褐灰色粘質土(地山)
鉄分含
6 2.5Y2/1黒色粘土(地山)
7 10YR5/1褐灰色シルト(地山)

SK496



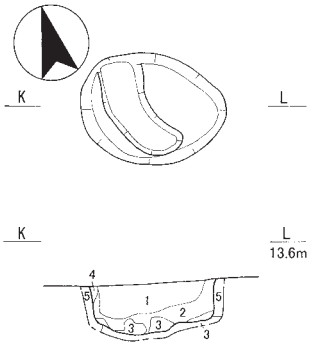
1 10YR2/1黒色粘土 筋状に鉄分が入る
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック混 ラミナあり
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと10YR4/1褐灰色粘土ブロック混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
5 2.5Y2/1黒色粘土(地山)

SK493



1 10YR2/1黒色粘土 微粒状の鉄分含
2 10YR1.7/1黒色粘土
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
5 2.5Y3/1黒褐色粘土(地山)

SK500

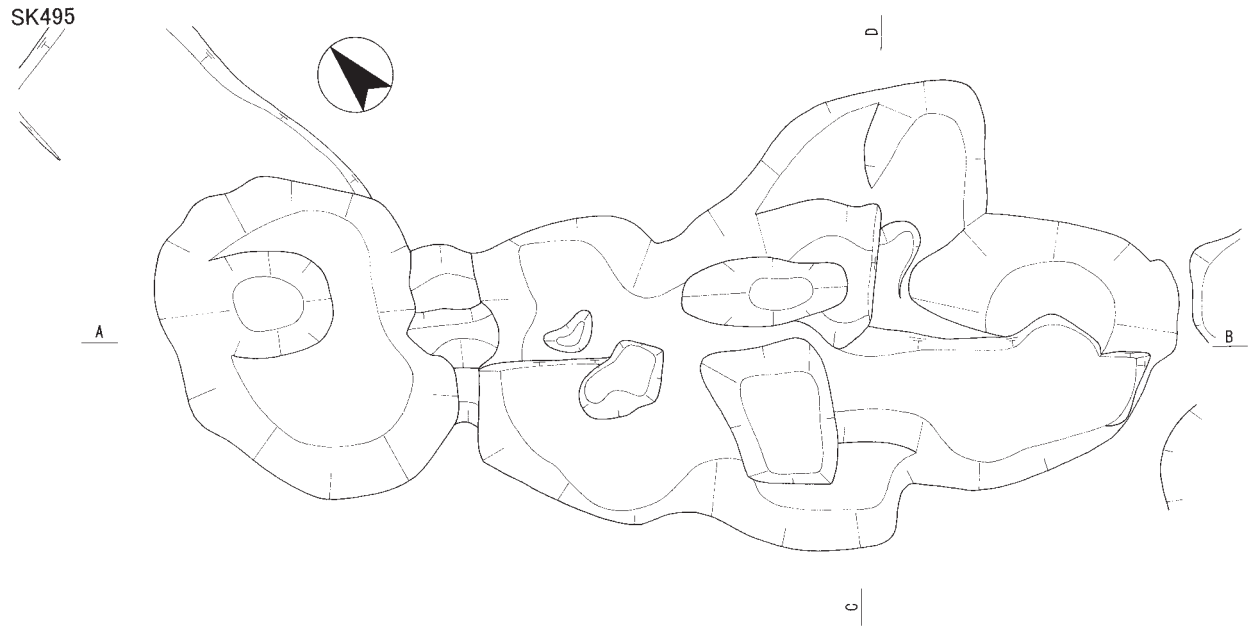


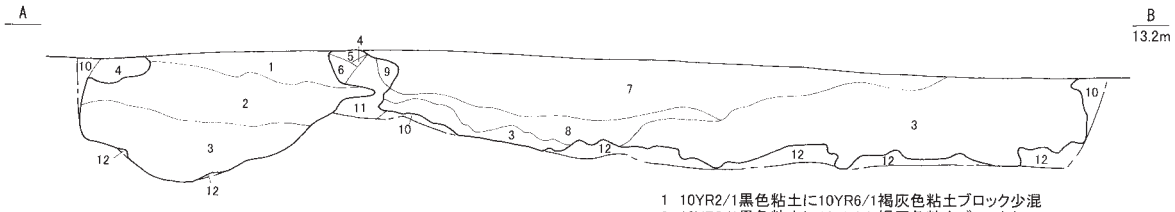
1 10YR2/1黒色粘土
筋状に鉄分が入る
2 10YR2/1黒色粘土に
10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR2/1黒色粘土に
10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混
4 10YR4/1褐灰色粘質土
鉄分含
5 10YR5/1褐灰色粘土
(地山)鉄分含

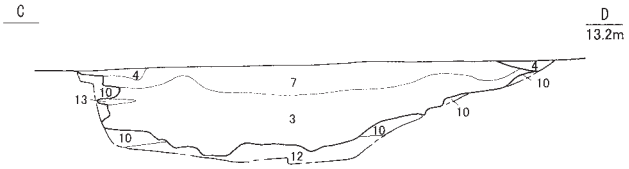
0 2m

第67図　ＳＫ489・492～494・496・500遺構図（１：40）

SK495



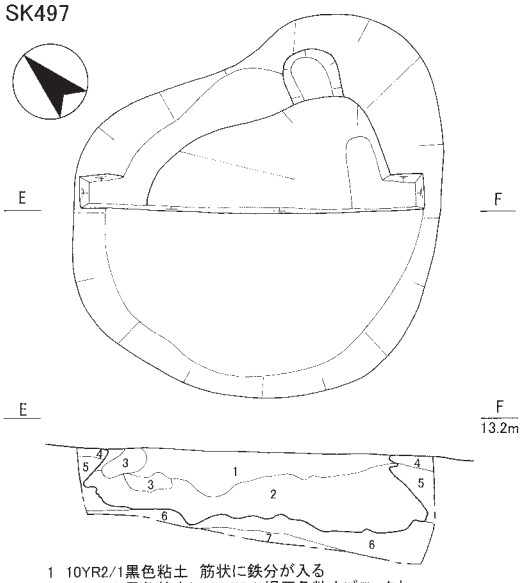




1 10YR2/1黒色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロック少混
2 10YR2/1黒色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロックと
10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR6/1褐灰色粘土ブロック、10YR5/1褐灰色粘土ブロック、
10YR2/1黒色粘土微小ブロック混
4 10YR4/1褐灰色粘質土(地山)
5 10YR2/1黒色粘土(地山)
6 2.5Y2/1黒色粘土 筋状に鉄分入る(地山)
7 10YR2/1黒色粘土 ラミナあり
8 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック混
9 10YR5/1褐灰色粘土ブロック 筋状に鉄分入る(地山)
10 10YR6/1褐灰色粘土(地山)
11 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
12 2.5Y3/1黒色粘土(地山)
13 10YR2/1黒色粘土と10YR6/1褐灰色粘土の互層

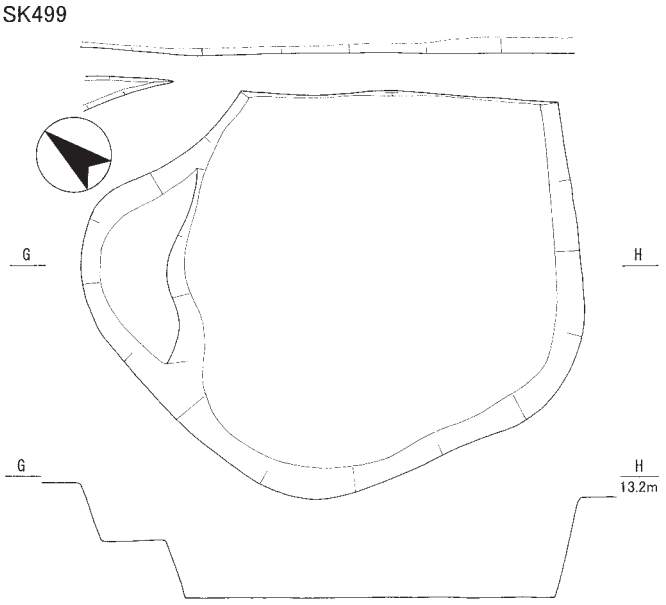
0 2m

SK497

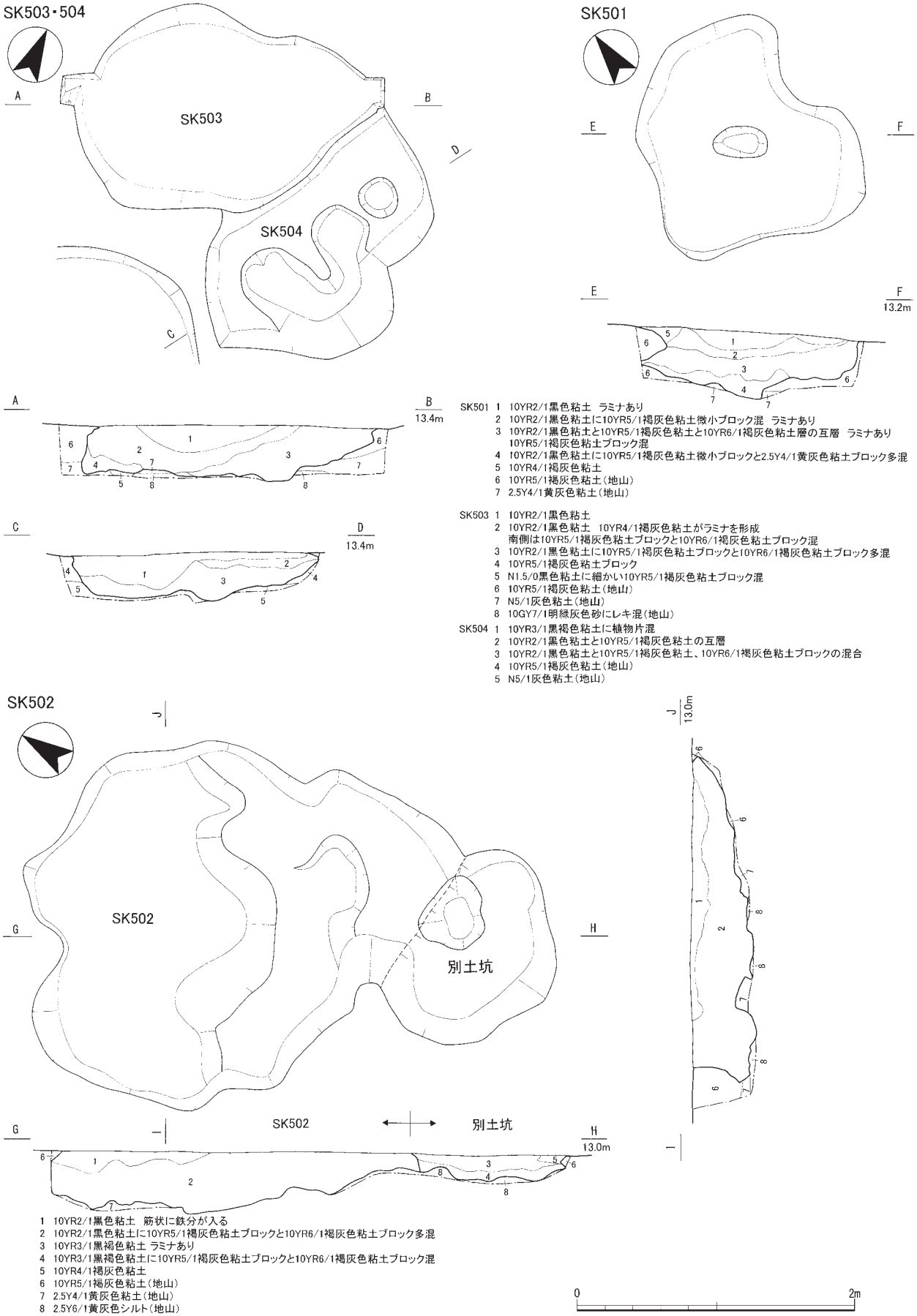


1 10YR2/1黒色粘土 筋状に鉄分が入る
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと
10YR4/1褐灰色粘土ブロック混 ラミナあり
3 7.5YR4/1褐灰色粘土ブロック 筋状に鉄分入る
4 7.5YR4/1褐灰色粘土(地山)筋状に鉄分入る
5 10YR5/1褐灰色粘土(地山)鉄分含
6 2.5Y3/1黒褐色土(地山)
7 2.5Y3/1黒褐色シルト(地山)

SK499



第68図　ＳＫ495・497・499遺構図（１：40）



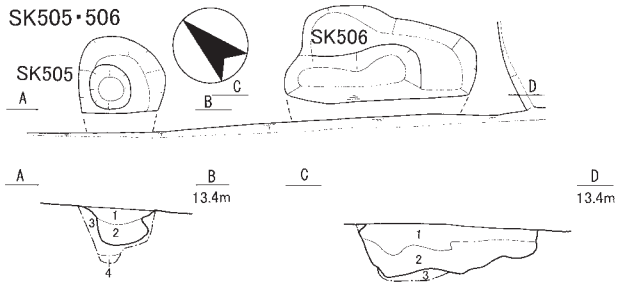
SK501 1 10YR2/1黒色粘土 ラミナあり
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック混 ラミナあり
3 10YR2/1黒色粘土と10YR5/1褐灰色粘土と10YR6/1褐灰色粘土層の互層 ラミナあり
10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロックと2.5Y4/1黄灰色粘土ブロック多混
5 10YR4/1褐灰色粘土
6 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
7 2.5Y4/1黄灰色粘土（地山）

SK503 1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土 10YR4/1褐灰色粘土がラミナを形成
南側は10YR5/1褐灰色粘土ブロックと10YR6/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと10YR6/1褐灰色粘土ブロック多混
4 10YR5/1褐灰色粘土ブロック
5 N1.5/0黒色粘土に細かい10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
6 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
7 N5/1灰色粘土（地山）
8 10GY7/1明緑灰色砂にレキ混（地山）

SK504 1 10YR3/1黒褐色粘土に植物片混
2 10YR2/1黒色粘土と10YR5/1褐灰色粘土の互層
3 10YR2/1黒色粘土と10YR5/1褐灰色粘土、10YR6/1褐灰色粘土ブロックの混合
4 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
5 N5/1灰色粘土（地山）

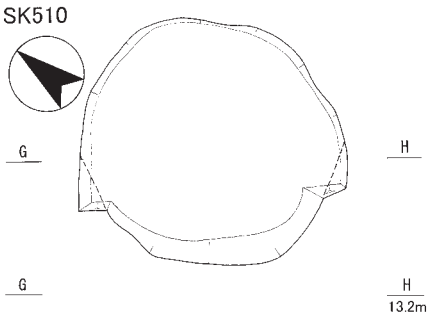
1 10YR2/1黒色粘土 筋状に鉄分が入る
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと10YR6/1褐灰色粘土ブロック多混
3 10YR3/1黒褐色粘土 ラミナあり
4 10YR3/1黒褐色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと10YR6/1褐灰色粘土ブロック混
5 10YR4/1褐灰色粘土
6 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
7 2.5Y4/1黄灰色粘土（地山）
8 2.5Y6/1黄灰色シルト（地山）

第69図　ＳＫ501～504遺構図（１：40）

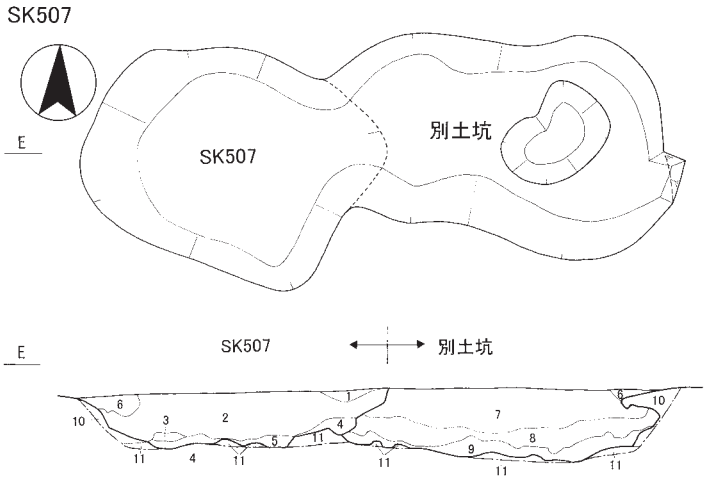


SK505 1 10YR3/1黒褐色粘土 鉄分含
2 10YR4/1褐灰色粘土
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
4 N4/1灰色粘土(地山)

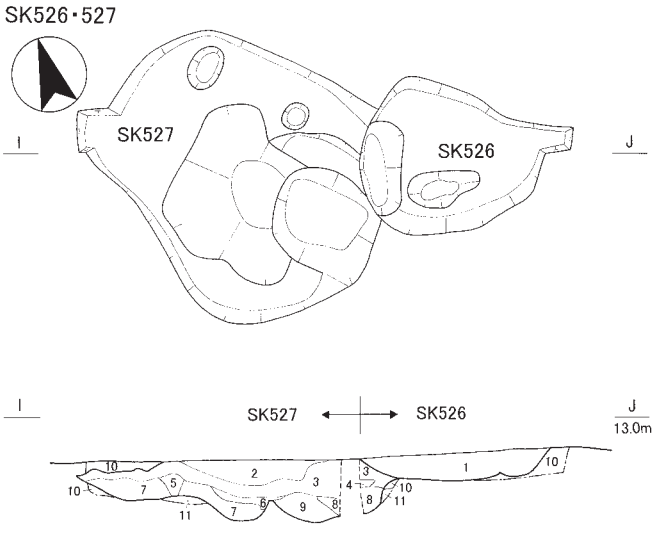
SK506 1 N2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土ブロックと10YR5/1褐灰色粘土ブロックの混合
3 N4/1灰色粘土(地山)



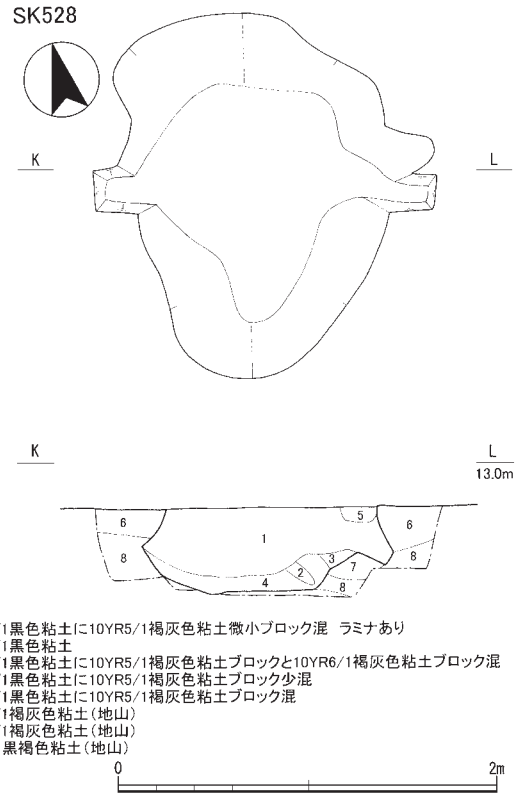
1 10YR3/1黒褐色粘土
2 10YR3/1黒褐色粘土と10YR5/1褐灰色粘土の互層 ラミナあり
3 10YR2/1黒色粘土
4 10YR2/1黒色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロック混 ラミナあり
5 10YR2/1黒色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロックと
10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
6 10YR4/1褐灰色粘土
7 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
8 2.5Y5/1黄灰色シルト(地山)



1 10YR2/1黒色粘土 筋状に鉄分が入る
2 10YR2/2黒褐色粘土 筋状に鉄分が入る
3 2.5Y3/1黒褐色粘土
4 10YR2/2黒褐色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
5 10YR2/2黒褐色粘土に2.5Y4/1黄灰色シルトブロック混
6 10YR4/1褐灰色粘土
7 10YR2/1黒色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロック混
8 10YR4/1褐灰色粘土に10YR2/1黒色粘土ブロック混 ラミナあり
9 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと
10YR6/1褐灰色粘土ブロック多混
10 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
11 2.5Y4/1黄灰色粘土(地山)



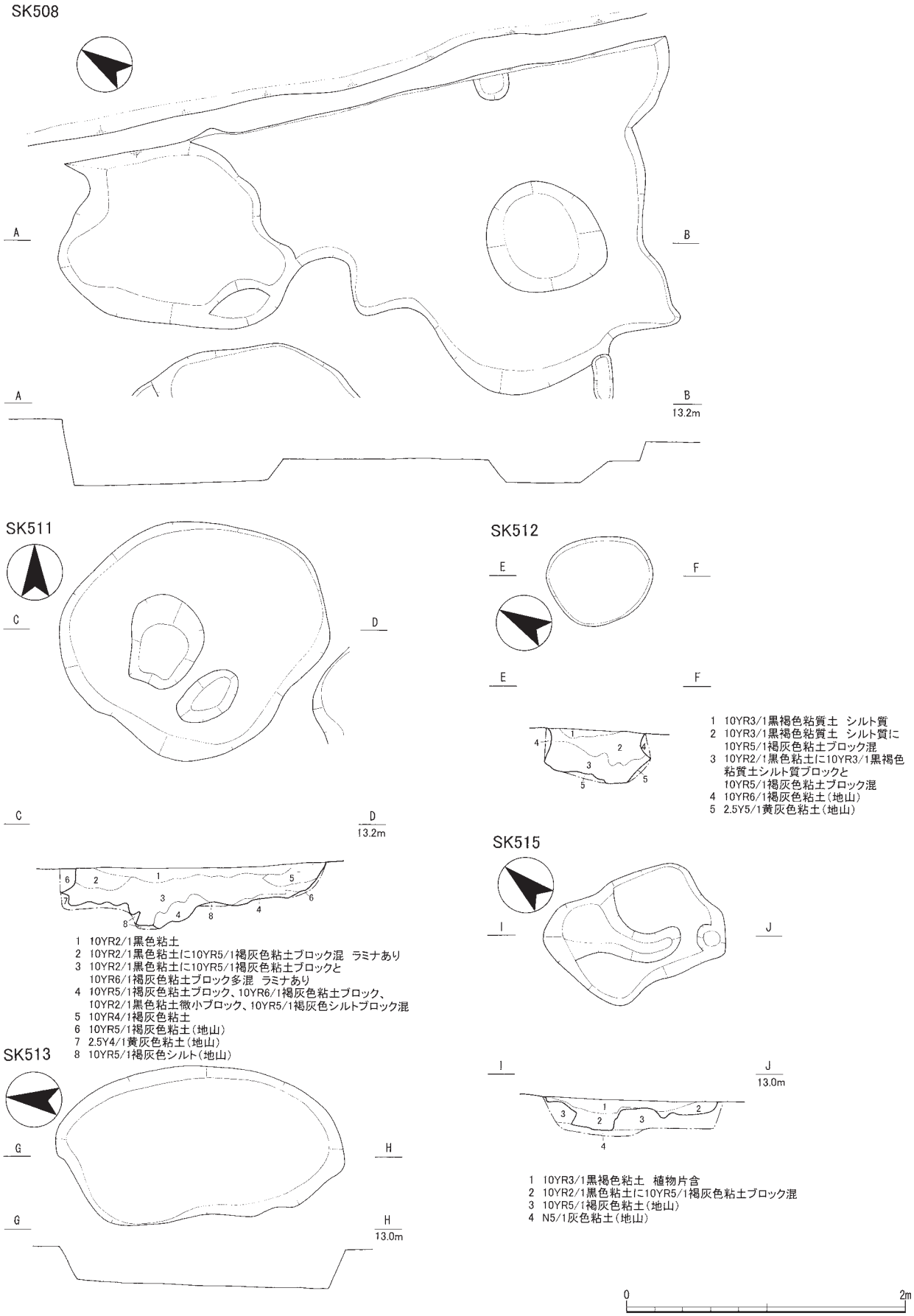
1 10YR3/1黒褐色粘土に植物片混
2 10YR2/1黒色粘土
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/2灰黄褐色粘土(植物片含)が層状に入る
4 10YR6/1褐灰色粘土ブロック
5 10YR3/1黒褐色粘土
6 10YR4/1褐灰色粘土
7 10YR2/1黒色粘土ブロック、10YR5/1褐灰色粘土ブロック、
10YR6/1褐灰色粘土ブロック混合層
8 10YR2/1黒色粘土に植物片含
9 10YR6/1褐灰色粘土ブロック
10 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
11 N5/1灰色粘土(地山)



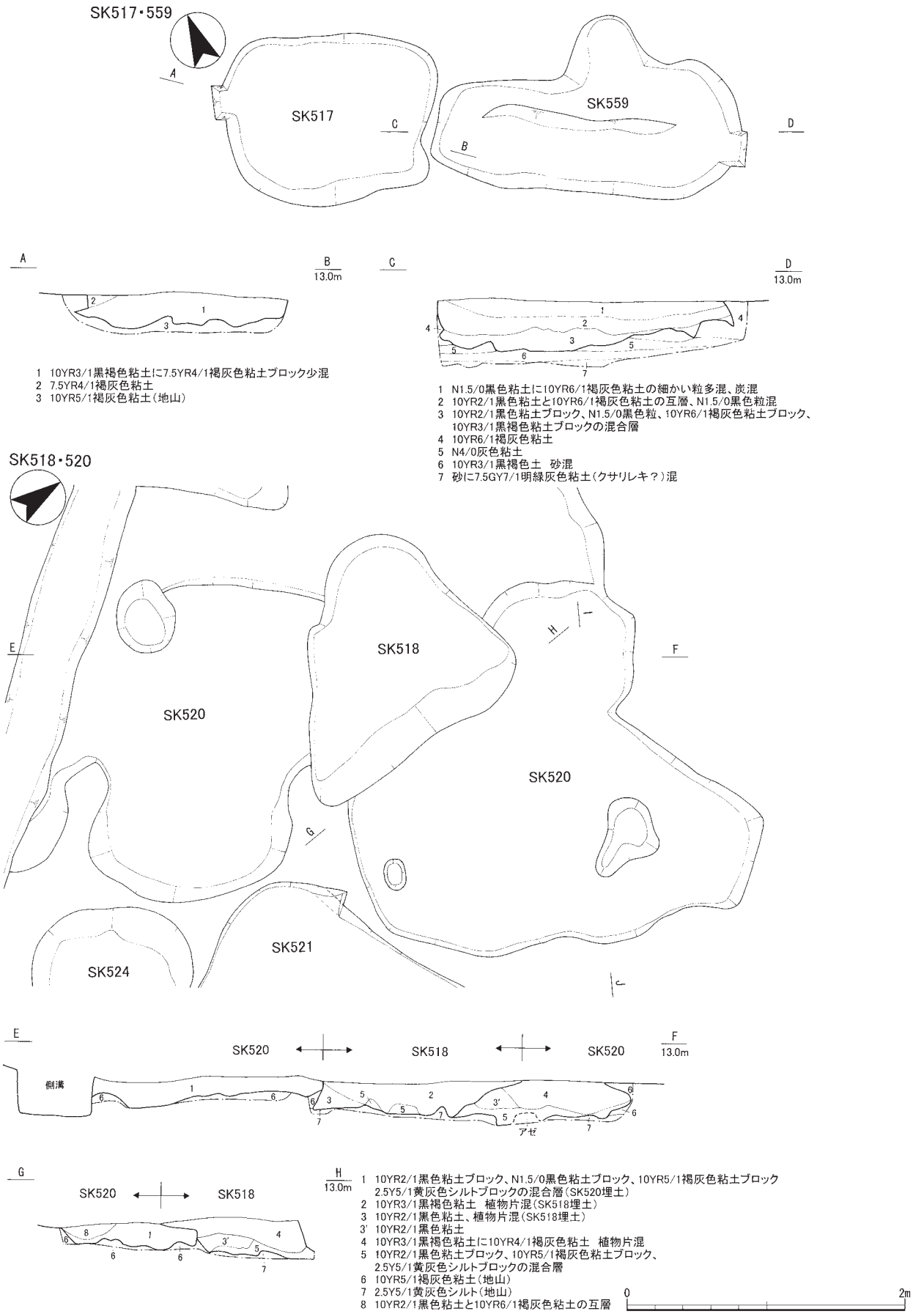
1 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック混 ラミナあり
2 10YR2/1黒色粘土
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと10YR6/1褐灰色粘土ブロック混
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック少混
5 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
6 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
7 10YR6/1褐灰色粘土(地山)
8 2.5Y3/1黒褐色粘土(地山)

0 2m

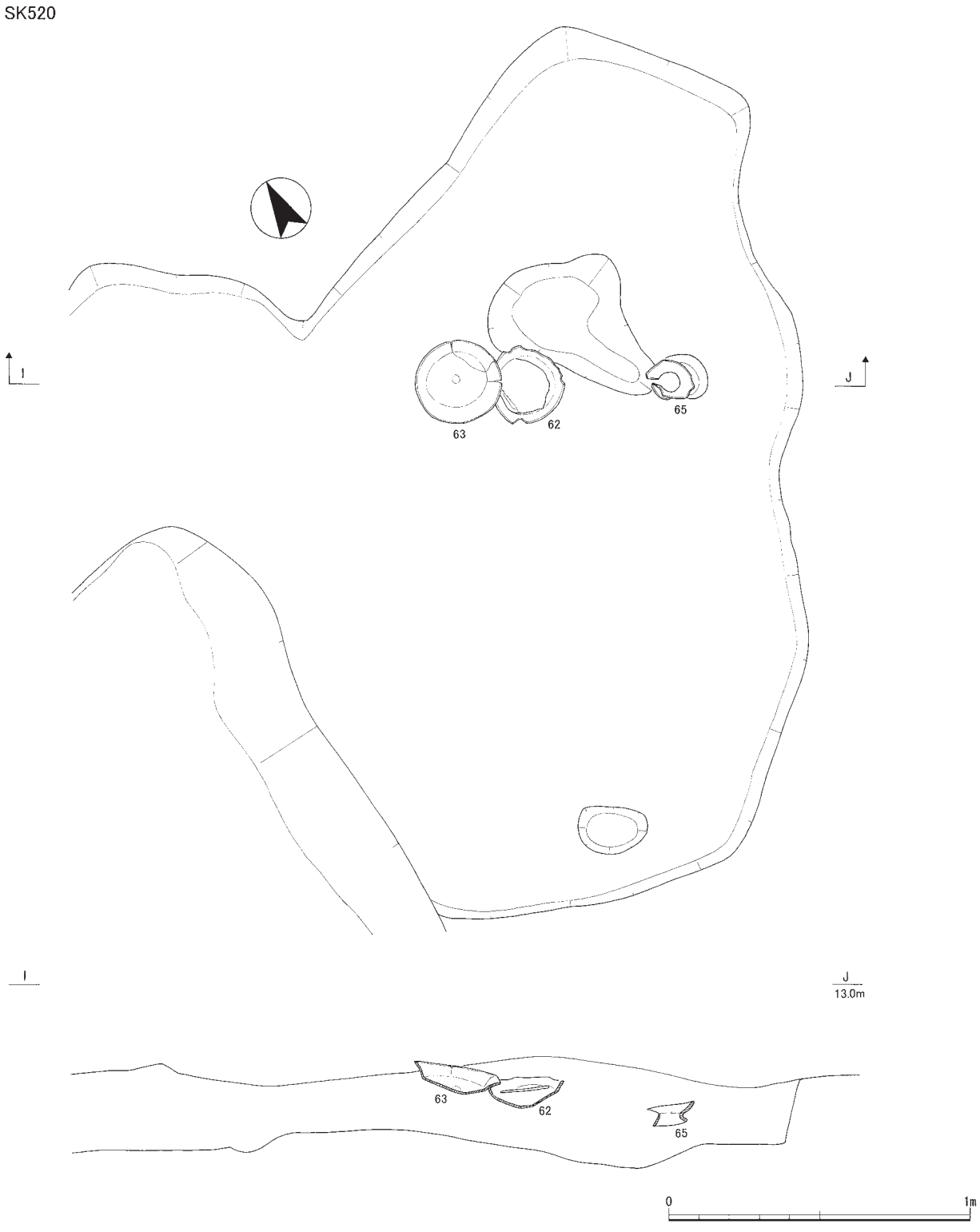
第70図　ＳＫ505～507・510・526～528遺構図（１：40）



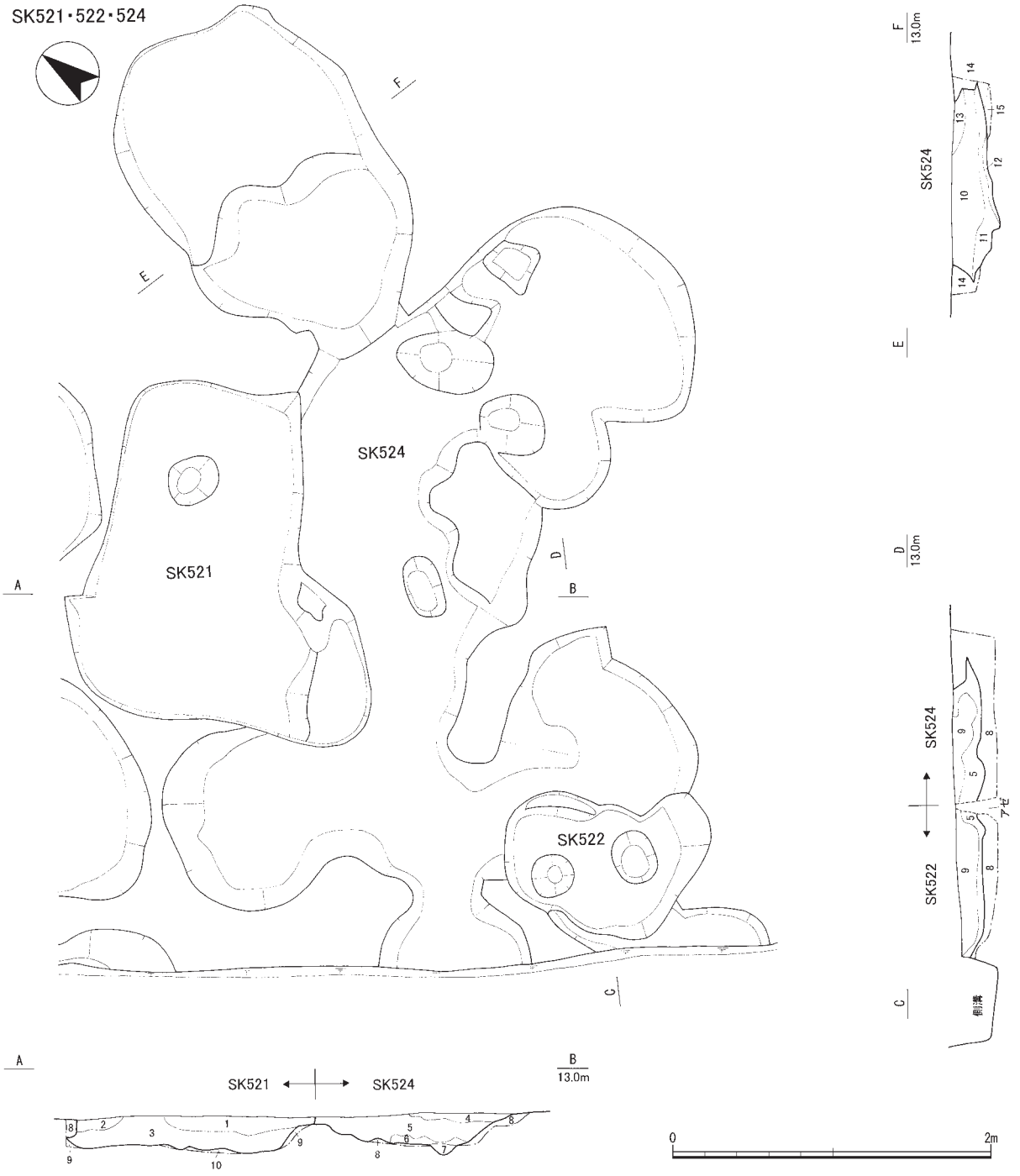
第71図　ＳＫ508・511～513・515遺構図（１：40）



第72図　ＳＫ517・518・520・559遺構図（１：40）



第73図　ＳＫ520遺構図（１：20）

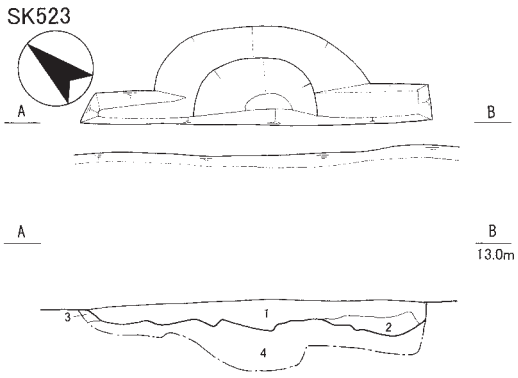


1 10YR2/2黒褐色粘土に10YR3/3暗褐色粘土ブロック少混
2 10YR2/2黒褐色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR2/2黒褐色粘土
4 10YR2/1黒色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロック混
5 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
6 10YR6/1褐灰色粘土ブロック、10YR5/1褐灰色粘土ブロック、10YR2/1黒色粘土微小ブロック混
7 10YR6/1褐灰色粘土（地山）
8 2.5Y4/1黄灰色粘土　ややシルト質
9 10YR2/2黒褐色粘土
10 10YR2/1黒色粘土　ラミナ多い
11 10YR3/1黒褐色粘土　10YR6/1褐灰色粘土ブロック少混 10YR2/1黒色粘土微小ブロック混
12 10YR5/1褐灰色粘土　ややシルト質
13 10YR4/1褐灰色粘土
14 10YR6/1褐灰色粘土（地山）
15 2.5Y3/1黒褐色粘土

SK521埋土
SK524埋土
SK522・524埋土
SK524埋土

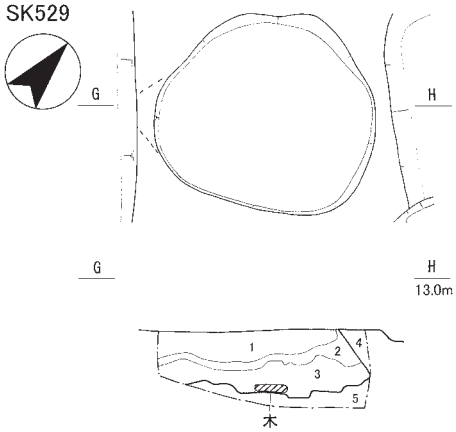
第74図　ＳＫ521・522・524遺構図（１：40）

SK523



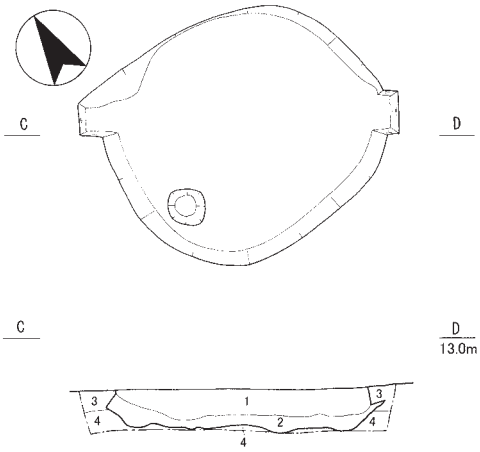
1 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロックと
10YR5/1褐灰色粘土微小ブロック混 ラミナあり
2 10YR2/1黒色粘土と10YR5/1褐灰色粘土層の互層 ラミナあり
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
4 2.5Y4/1黄灰色粘土(地山)

SK529



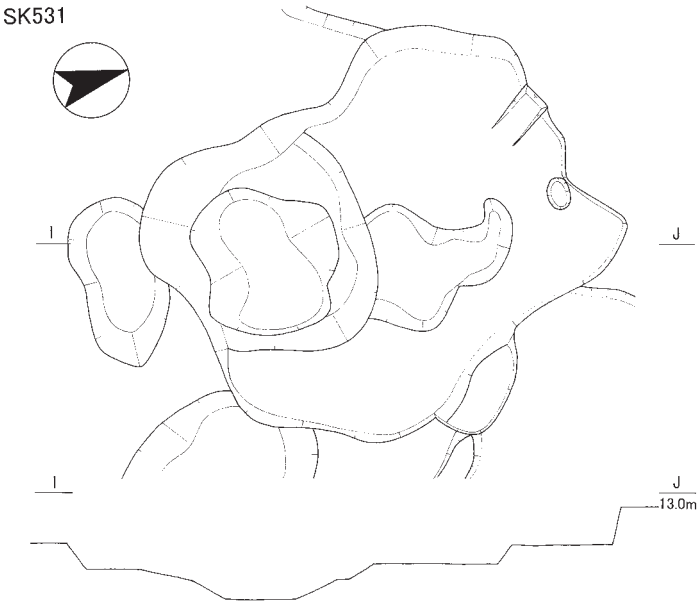
1 10YR2/1黒色粘土ブロック、10YR5/1褐灰色粘土ブロック、
10YR6/2灰黄褐色シルトブロックの混合層
2 10YR4/1褐灰色粘土と10YR2/1黒色粘土の互層
3 10YR2/1黒色粘土ブロック、10YR4/1褐灰色粘土ブロック、植物片を含む混合層
4 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
5 N3/1暗灰色粘土(地山)

SK525

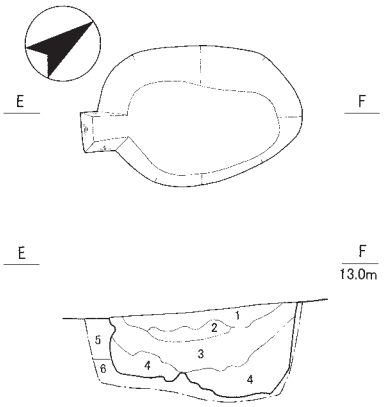


1 10YR3/1黒褐色粘土 植物片混
2 10YR3/1黒褐色粘土に10YR5/2灰黄褐色粘土(植物片含)が層状に入る
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
4 10YR4/1灰色粘土(地山)

SK531



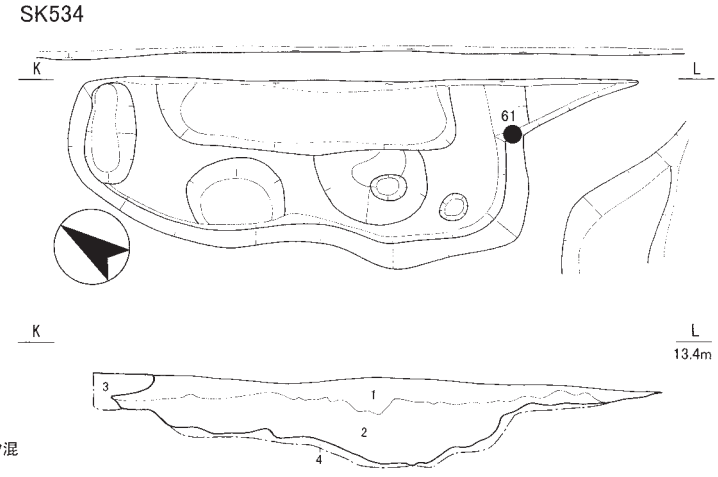
SK535



1 N1.5/0黒色粘土 植物片混
2 10YR5/1褐灰色粘土にN1.5/0黒色粘土少混
3 10YR2/1黒色粘土と10YR4/1褐灰色粘土の互層、N1.5/0黒色粘土ブロック混
4 10YR2/1黒色粘土ブロックと10YR4/1褐灰色粘土ブロック、
N4/0灰色粘土ブロック、N1.5/0黒色粘土ブロックの混合層
5 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
6 N4/0灰色粘土(地山)

0 2m

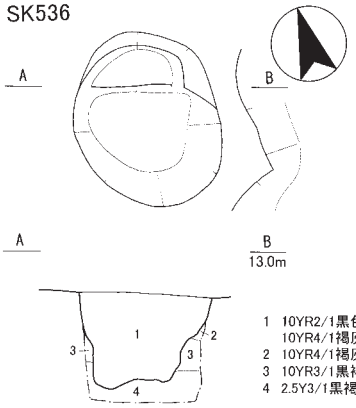
SK534



1 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロックと10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
筋状に鉄分入る
2 10YR2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロックと10GY7/1明緑灰色シルトブロック多混
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
4 10GY7/1明緑灰色シルト(地山)

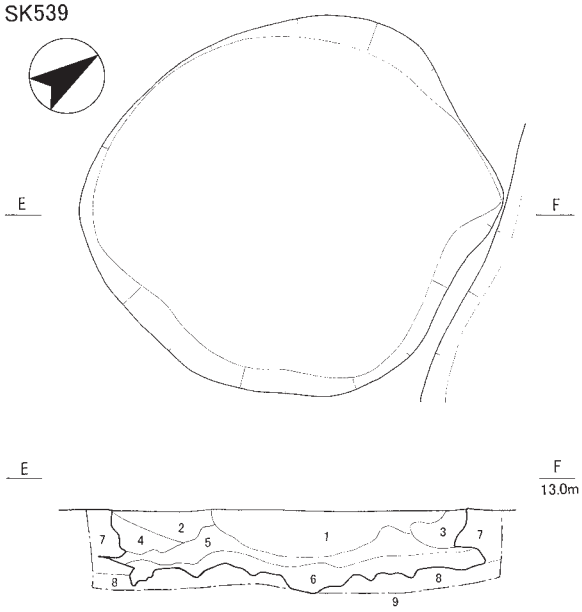
第75図　ＳＫ523・525・529・531・534・535遺構図（１：40）

SK536



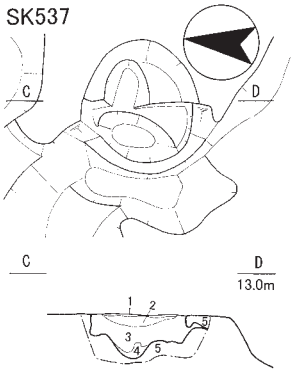
1 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと
10YR4/1褐灰色粘土ブロック混
2 10YR4/1褐灰色粘土（地山）
3 10YR3/1黒褐色粘土（地山）
4 2.5Y3/1黒褐色粘土（地山）

SK539



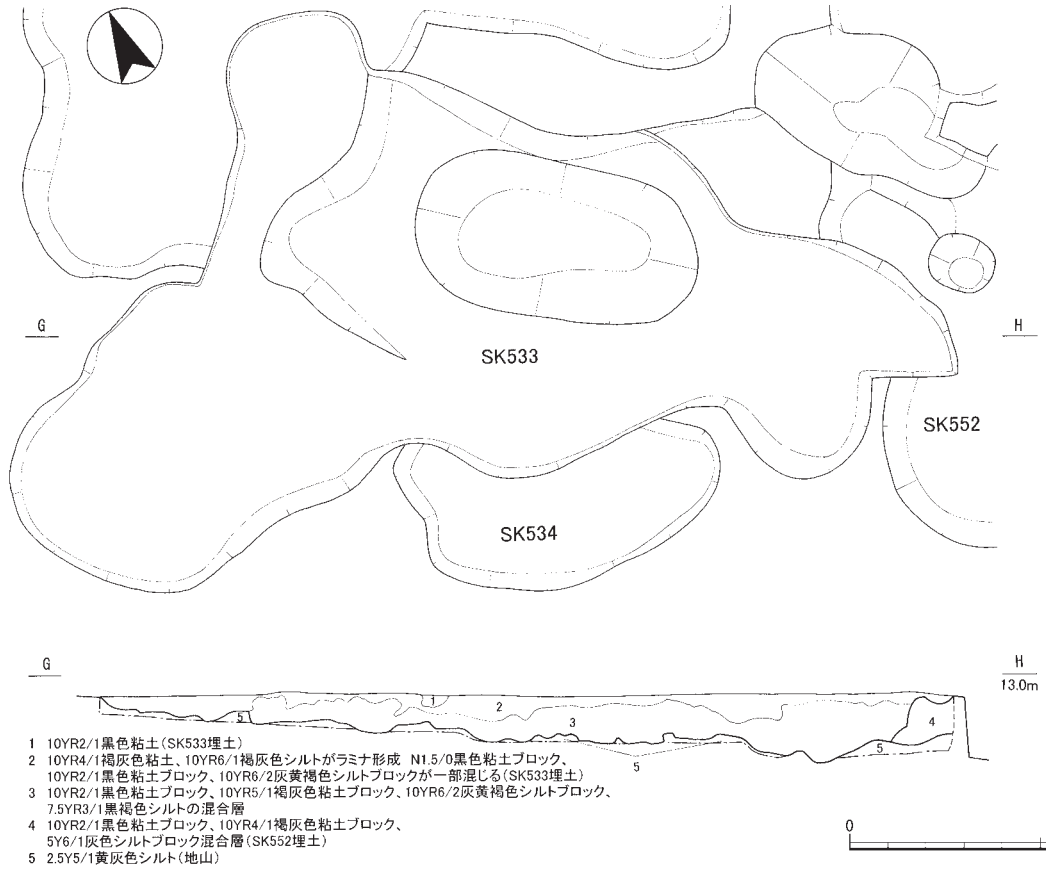
1 N1.5/0黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土
3 10YR4/1褐灰色粘土
4 10YR4/1褐灰色粘土に10YR2/1黒色粘土混
5 N1.5/0黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土 植物片混
6 N1.5/0黒色粘土ブロック、10YR5/1褐灰色粘土ブロック 植物片 混合層
7 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
8 N3/1暗灰色シルト（地山）
9 10YR5/1褐灰色シルト レキ混（地山）

SK537



1 N1.5/0黒色粘土
2 10YR3/1黒褐色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR2/1黒色粘土
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
5 10YR5/1褐灰色粘土（地山）

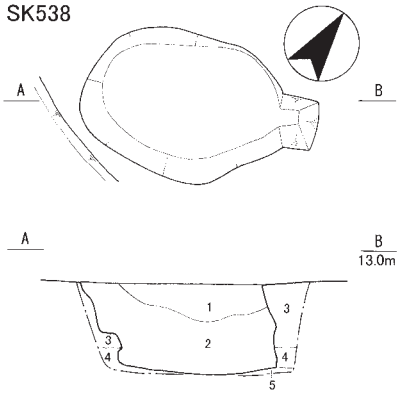
SK533



1 10YR2/1黒色粘土（SK533埋土）
2 10YR4/1褐灰色粘土、10YR6/1褐灰色シルトがラミナ形成 N1.5/0黒色粘土ブロック、
10YR2/1黒色粘土ブロック、10YR6/2灰黄褐色シルトブロックが一部混じる（SK533埋土）
3 10YR2/1黒色粘土ブロック、10YR5/1褐灰色粘土ブロック、10YR6/2灰黄褐色シルトブロック、
7.5YR3/1黒褐色シルトの混合層
4 10YR2/1黒色粘土ブロック、10YR4/1褐灰色粘土ブロック、
5Y6/1灰色シルトブロック混合層（SK552埋土）
5 2.5Y5/1黄灰色シルト（地山）

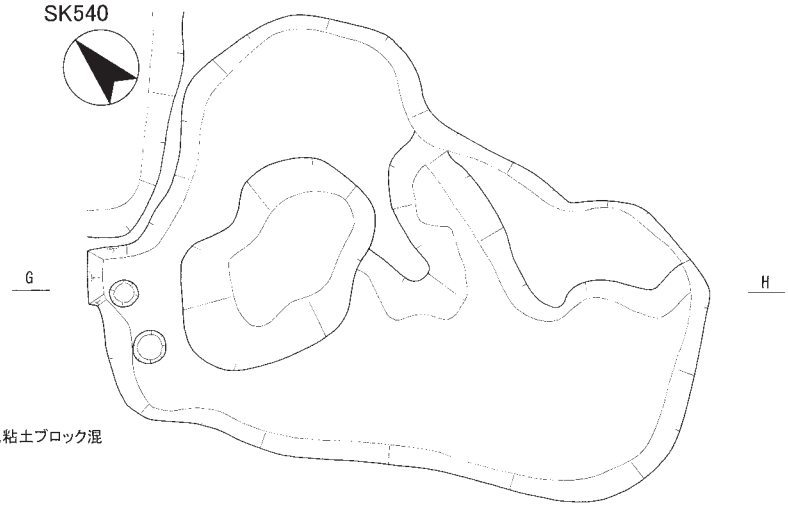
第76図　ＳＫ533・536・537・539遺構図（１：40）

SK538

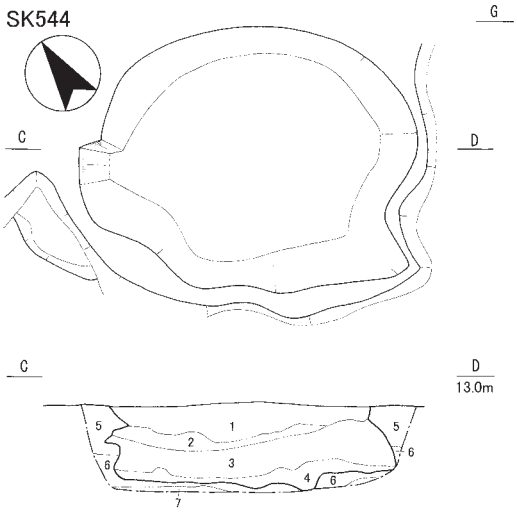


1 N1.5/0黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
2 N1.5/0黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック、10YR7/1灰白色粘土ブロック混
3 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
4 N4/1灰色粘土（地山）
5 10YR3/1黒褐色シルト　レキ混（地山）

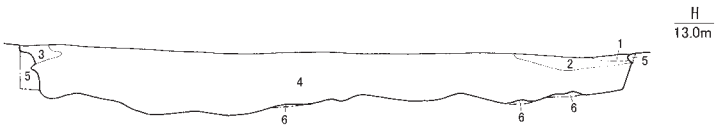
SK540



SK544

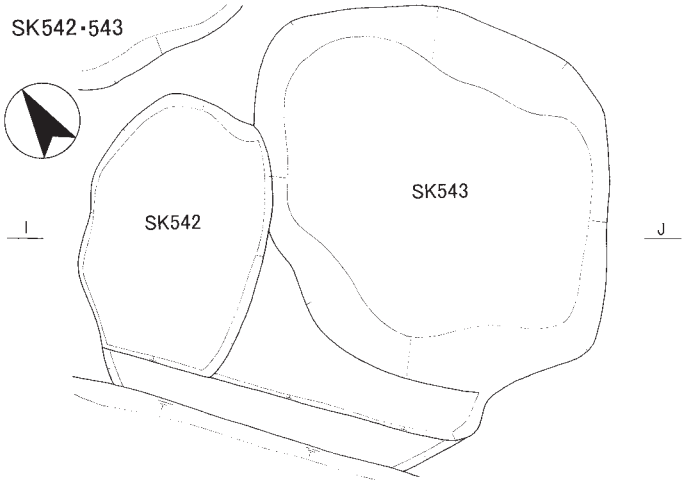


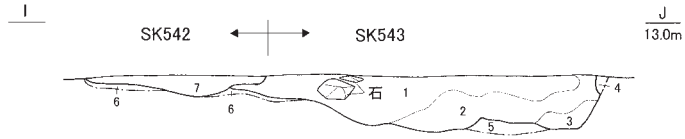
1 N1.5/0黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
2 10YR2/1黒色粘土、10YR5/1褐灰色粘土の互層　植物片含
3 2の層に10YR6/1褐灰色粘土ブロック、N1.5/0黒色粘土ブロックと粒混
4 N1.5/0黒色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロック混　植物片混
5 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
6 N4/1灰色粘土（地山）
7 2.5Y4/1黄灰色シルト　砂混（地山）



1 10YR5/1褐灰色粘土に10YR4/1褐灰色粘土混
2 10YR4/1褐灰色粘土
3 10YR6/1褐灰色粘土に10YR4/1褐灰色粘土混
4 10YR4/1褐灰色粘土ブロック、10YR4/2灰黄褐色シルトブロック、10YR6/1褐灰色粘土ブロック
10YR2/1黒色粘土ブロック、5Y5/1灰色シルトブロックの混合層　東端ラミナを形成
5 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
6 2.5Y4/1黄灰色シルト（地山）

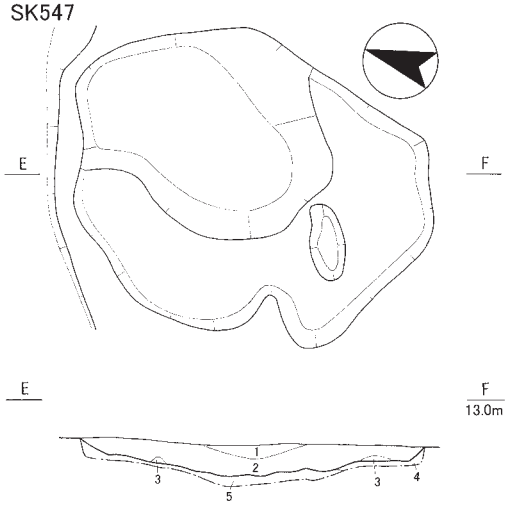
SK542・543





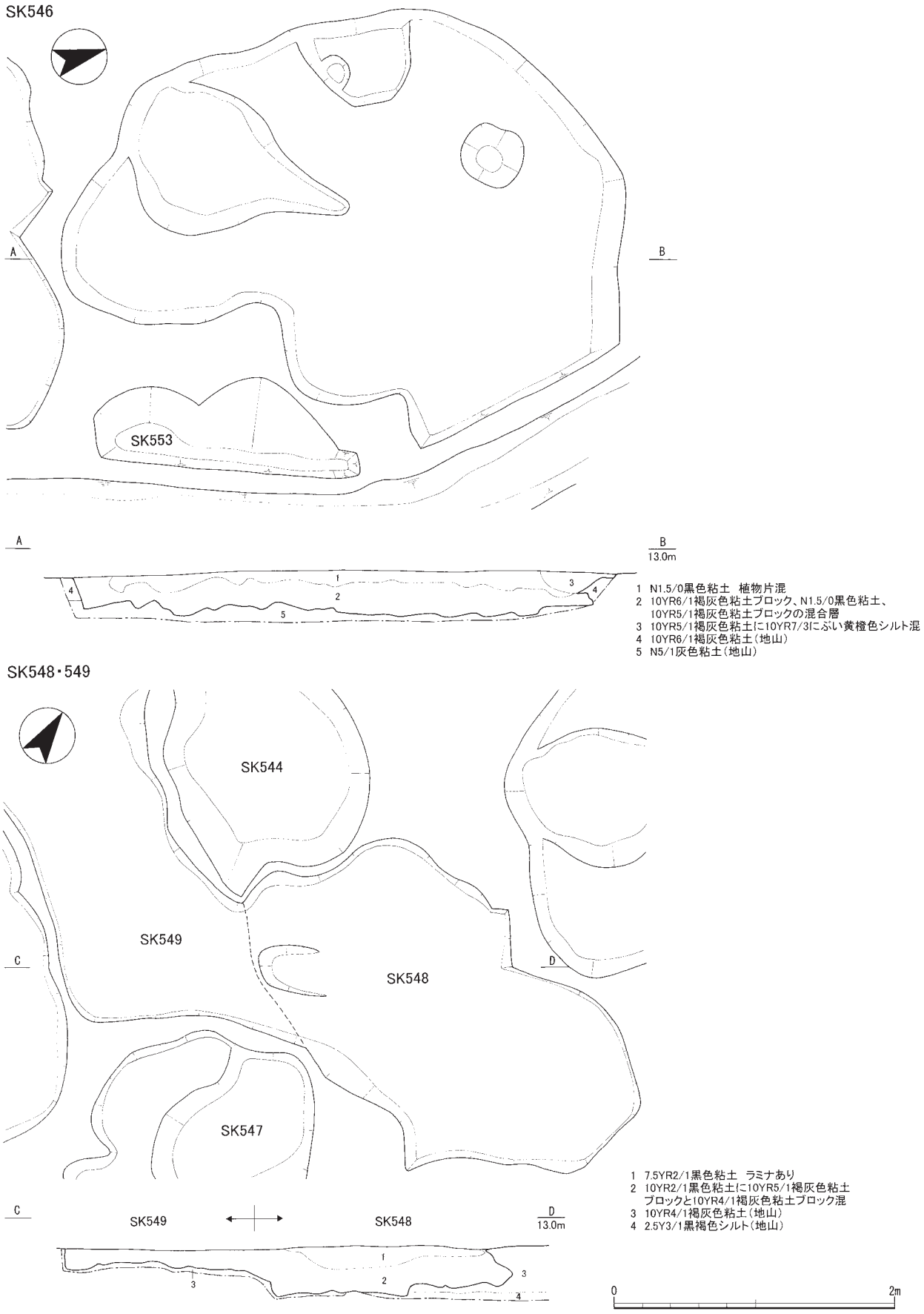
SK542　1 10YR2/1黒色粘土にN1.5/0黒色粘土ブロック、10YR5/1褐灰色粘土ブロック　植物片混
SK543　2 10YR1.7黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック、N1.5/0黒色粘土ブロック　植物片混
3 10YR4/1褐灰色粘土　植物片混
4 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
5 2.5Y4/1黄灰色シルト　レキ混（地山）
6 2.5Y4/1黄灰色シルト（地山）
7 10YR3/1黒褐色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混（SK542埋土）

SK547



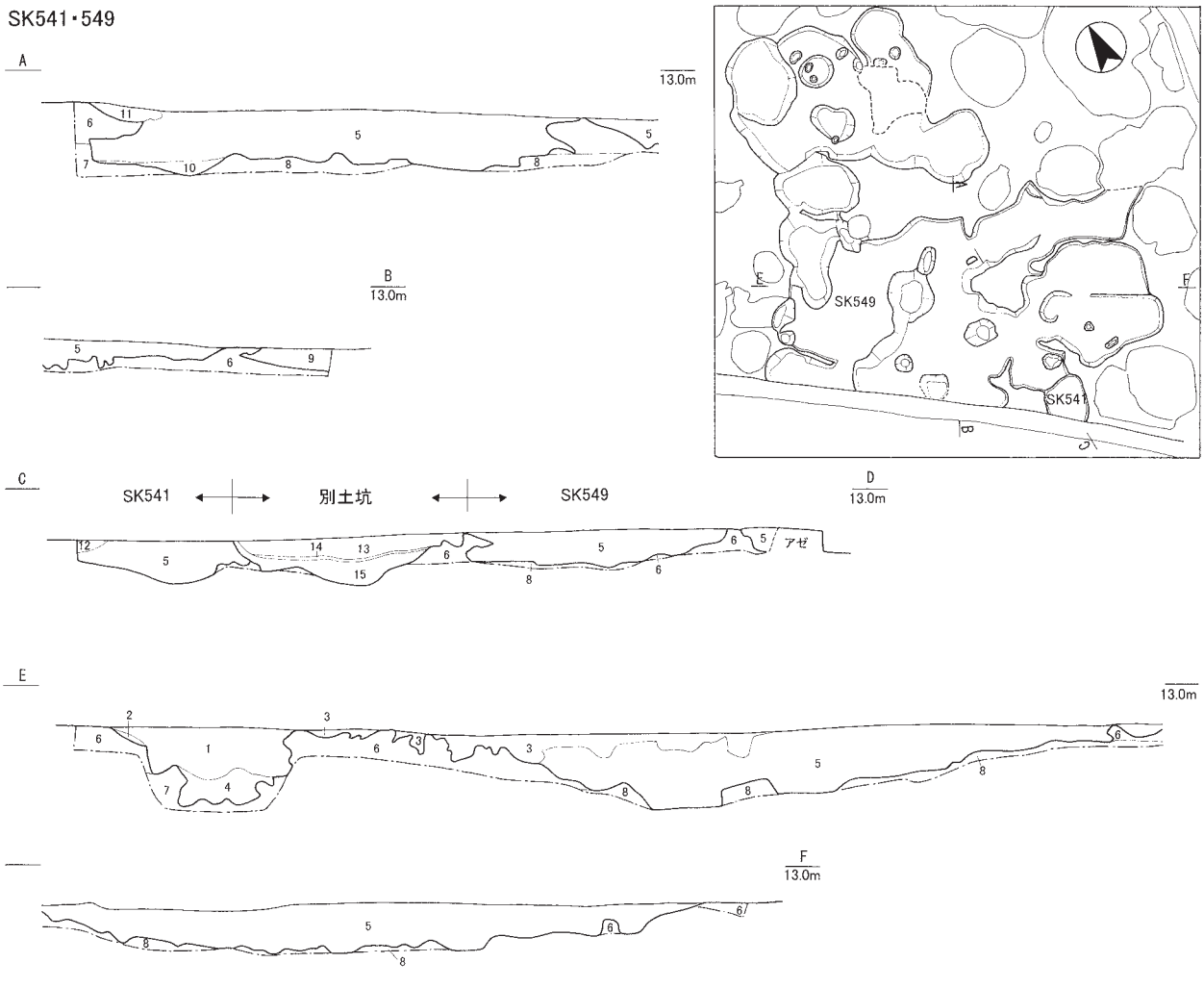
SK547　1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 10YR4/1褐灰色粘土に10YR4/1褐灰色シルト混
4 10YR4/1褐灰色粘土（地山）
5 10YR4/1褐灰色シルト（地山）

第77図　ＳＫ538・540・542～544・547遺構図（１：40）



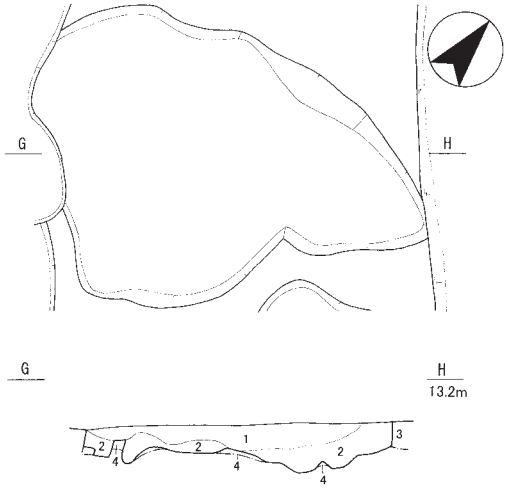
第78図　ＳＫ546・548・549遺構図（１：40）

SK541・549



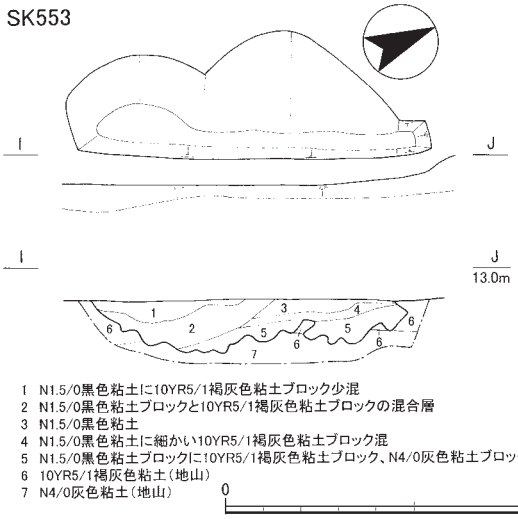
1 10YR2/1黒色粘土にN1.5/0黒色粘土ブロック、10YR5/1褐灰色粘土ブロック 2.5Y4/1黄灰色シルトブロック混
2 10YR2/1黒色粘土、10YR7/1灰白シルト ラミナ形成
3 10YR2/1黒色粘土と10YR5/1褐灰色粘土がマーブル状に混ざる(植物痕跡?)
4 N3/0暗灰色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック、N1.5/0黒色粘土ブロック混
5 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック、N1.5/0黒色粘土ブロック 2.5Y5/1黄灰色シルトブロック混
6 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
7 N3/0暗灰色粘土(地山)
8 2.5Y5/1黄灰色シルト(地山)
9 10YR2/1黒色粘土、10YR5/1褐灰色シルト ラミナ形成
10 10YR3/1黒褐色粘土
11 7.5YR4/1褐灰色粘土
12 N1.5/0黒色粘土
13 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック、N1.5/0黒色粘土ブロック混
14 10YR2/1黒色粘土、10YR5/1褐灰色シルト ラミナ形成
15 10YR3/1黒褐色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック、N1.5/0黒色粘土ブロック、2.5Y5/1黄灰色シルトブロック混

SK550



1 N1.5/0黒色粘土
2 N1.5/0黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土と7.5GY8/1明緑灰色シルトブロック混
3 2.5Y6/1黄灰色粘土(地山)
4 7.5GY8/1明緑灰色砂(地山)

SK553



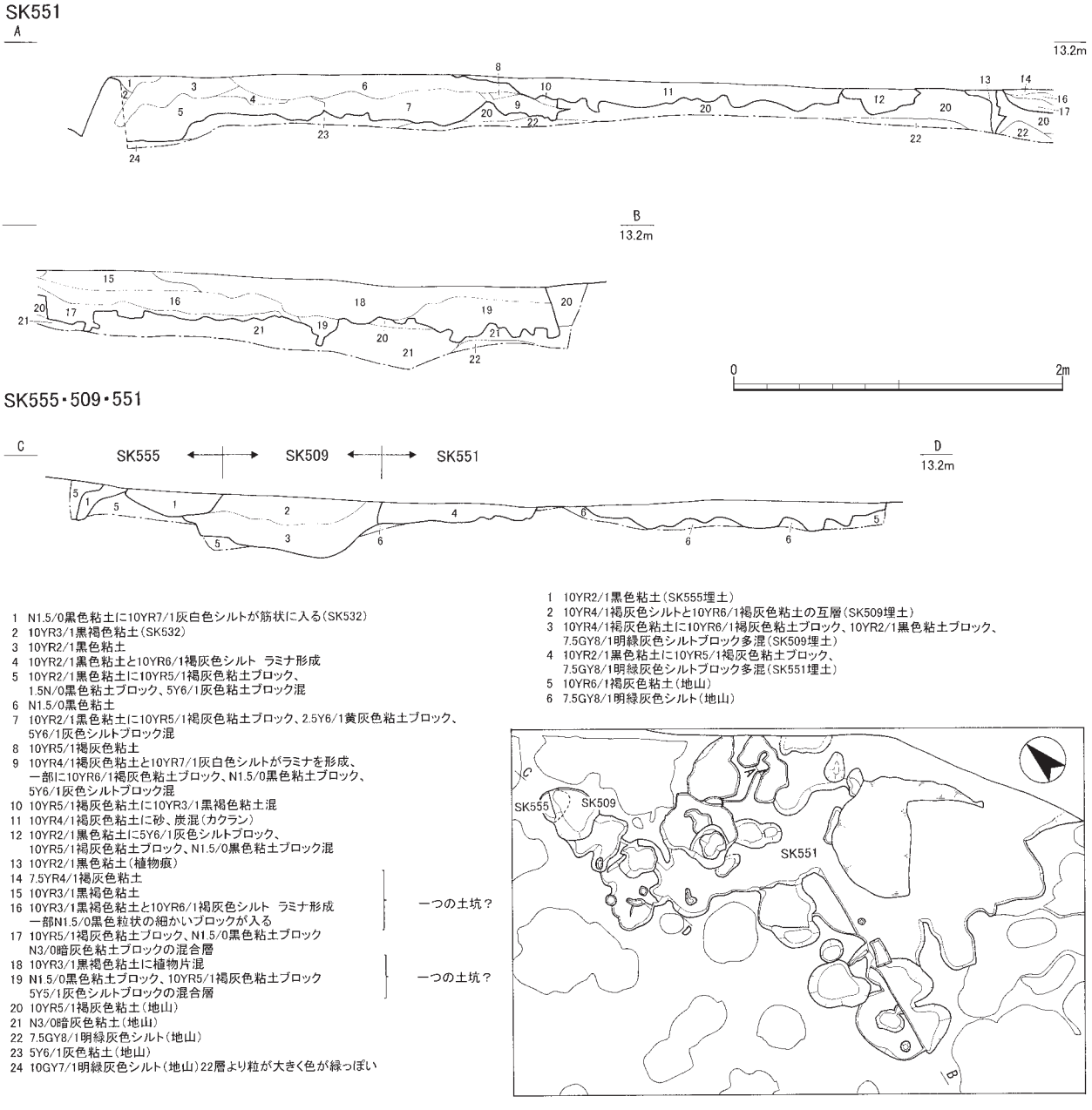
1 N1.5/0黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック少混
2 N1.5/0黒色粘土ブロックと10YR5/1褐灰色粘土ブロックの混合層
3 N1.5/0黒色粘土
4 N1.5/0黒色粘土に細かい10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
5 N1.5/0黒色粘土ブロックに10YR5/1褐灰色粘土ブロック、N4/0灰色粘土ブロックの混合層
6 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
7 N4/0灰色粘土(地山)

0 2m

第79図　ＳＫ541・549・550・553遺構図（１：40）

分かれることから、弥生後期に掘削した土坑を古代に掘り直しを行ったか、もしくは古代に掘削した土坑に古い土器が混入したかと考えられる。弥生土器甕（84）は、ＳＫ720出土の88と同一個体の可能性があり、その88は土坑最下層ブロック土からの出土である。ＳＫ370とＳＫ423、ＳＫ544とＳＫ546、そしてＳＫ630とＳＫ633のように隣接土坑出土の破片が接合する例があることから、ＳＫ652の弥生土器についても単なる混入ではなく、土坑掘削の近しい時期を示す資料と考えておきたい。

ＳＫ720（第86図、写真図版27下） 土層断面図では北・南壁がオーバーハング状を呈する。最下層である第５層はブロック土を呈し、その中から弥生土器甕（88）が出土している。このことから、ＳＫ720の掘削時期は、八王子古宮Ⅰ式に近しい時期と考えられる。



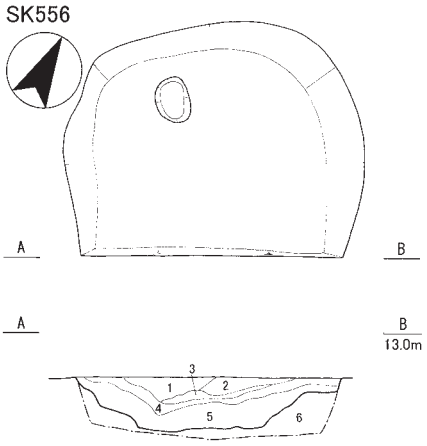
1 N1.5/0黒色粘土に10YR7/1灰白色シルトが筋状に入る（SK532）
2 10YR3/1黒褐色粘土（SK532）
3 10YR2/1黒色粘土
4 10YR2/1黒色粘土と10YR6/1褐灰色シルト ラミナ形成
5 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック、1.5N/0黒色粘土ブロック、5Y6/1灰色粘土ブロック混
6 N1.5/0黒色粘土
7 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック、2.5Y6/1黄灰色粘土ブロック、5Y6/1灰色シルトブロック混
8 10YR5/1褐灰色粘土
9 10YR4/1褐灰色粘土と10YR7/1灰白色シルトがラミナを形成、一部に10YR6/1褐灰色粘土ブロック、N1.5/0黒色粘土ブロック、5Y6/1灰色シルトブロック混
10 10YR5/1褐灰色粘土に10YR3/1黒褐色粘土混
11 10YR4/1褐灰色粘土に砂、炭混（カクラン）
12 10YR2/1黒色粘土に5Y6/1灰色シルトブロック、10YR5/1褐灰色粘土ブロック、N1.5/0黒色粘土ブロック混
13 10YR2/1黒色粘土（植物痕）
14 7.5YR4/1褐灰色粘土
15 10YR3/1黒褐色粘土
16 10YR3/1黒褐色粘土と10YR6/1褐灰色シルト ラミナ形成 一部N1.5/0黒色粒状の細かいブロックが入る
17 10YR5/1褐灰色粘土ブロック、N1.5/0黒色粘土ブロック N3/0暗灰色粘土ブロックの混合層
18 10YR3/1黒褐色粘土に植物片混
19 N1.5/0黒色粘土ブロック、10YR5/1褐灰色粘土ブロック 5Y5/1灰色シルトブロックの混合層
20 10YR5/1褐灰色粘土（地山）
21 N3/0暗灰色粘土（地山）
22 7.5GY8/1明緑灰色シルト（地山）
23 5Y6/1灰色粘土（地山）
24 10GY7/1明緑灰色シルト（地山）22層より粒が大きく色が緑っぽい

一つの土坑？
一つの土坑？

1 10YR2/1黒色粘土（SK555埋土）
2 10YR4/1褐灰色シルトと10YR6/1褐灰色粘土の互層（SK509埋土）
3 10YR4/1褐灰色粘土に10YR6/1褐灰色粘土ブロック、10YR2/1黒色粘土ブロック、7.5GY8/1明緑灰色シルトブロック多混（SK509埋土）
4 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック、7.5GY8/1明緑灰色シルトブロック多混（SK551埋土）
5 10YR6/1褐灰色粘土（地山）
6 7.5GY8/1明緑灰色シルト（地山）

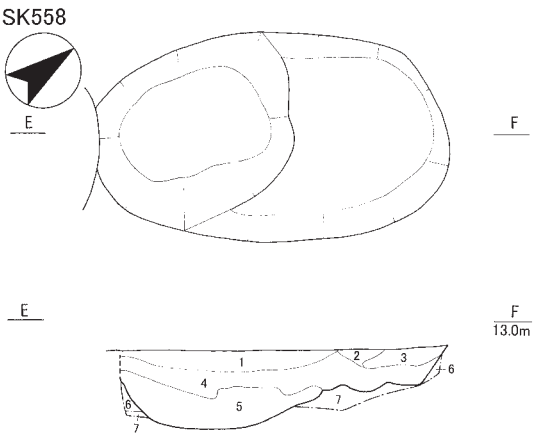
第80図　ＳＫ509・551・555土層断面図（１：40）

SK556



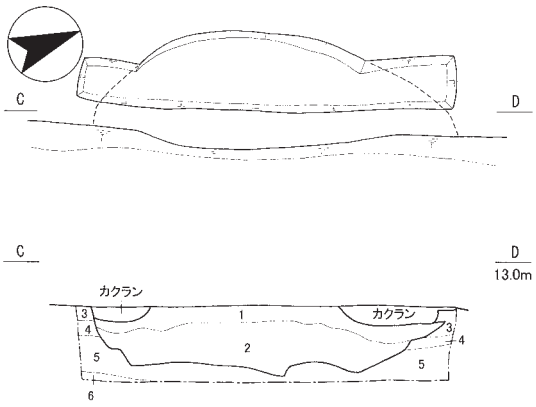
1 10YR2/1黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土
3 10YR2/1黒色粘土に10YR3/1黒褐色粘土ブロック混
4 10YR3/1黒褐色粘土 ラミナあり
5 10YR2/1黒色粘土に10YR3/1黒褐色粘土ブロックと10YR3/1黒褐色シルトブロック混
6 10YR3/1黒褐色シルト(地山)

SK558

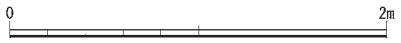


1 N1.5/0黒色粘土 植物片混
2 10YR3/1黒褐色粘土
3 7.5YR5/1褐灰色粘土
4 10YR2/1黒色粘土と10YR4/1褐灰色粘土の互層、N1.5/0黒色粒混
5 10YR2/1黒色粘土ブロック、10YR5/1褐灰色粘土ブロック、
7.5YR4/1褐灰色粘土ブロック、N1.5/0黒色粒の混合層
6 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
7 N4/1灰色粘土(地山)

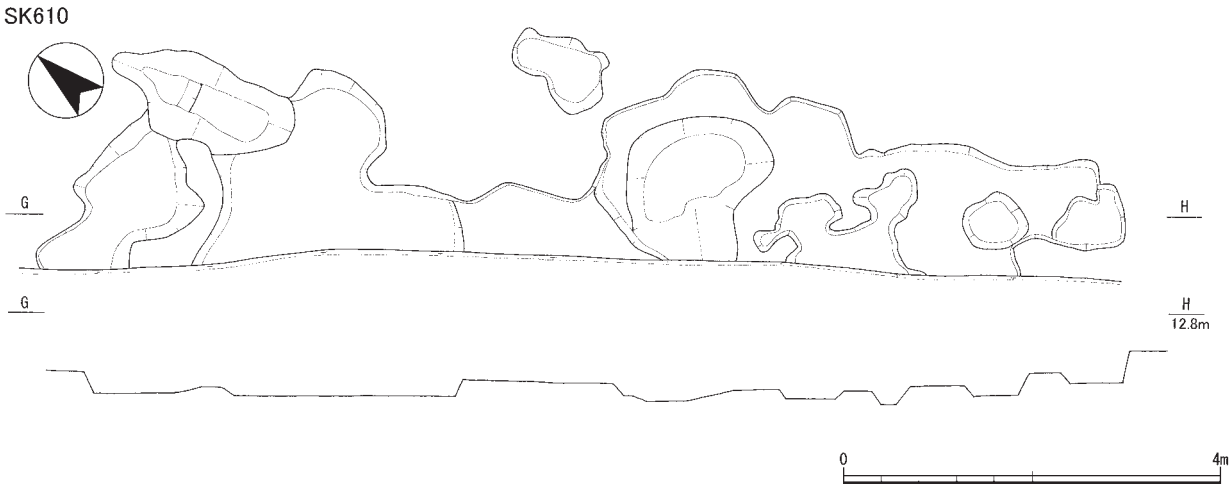
SK557



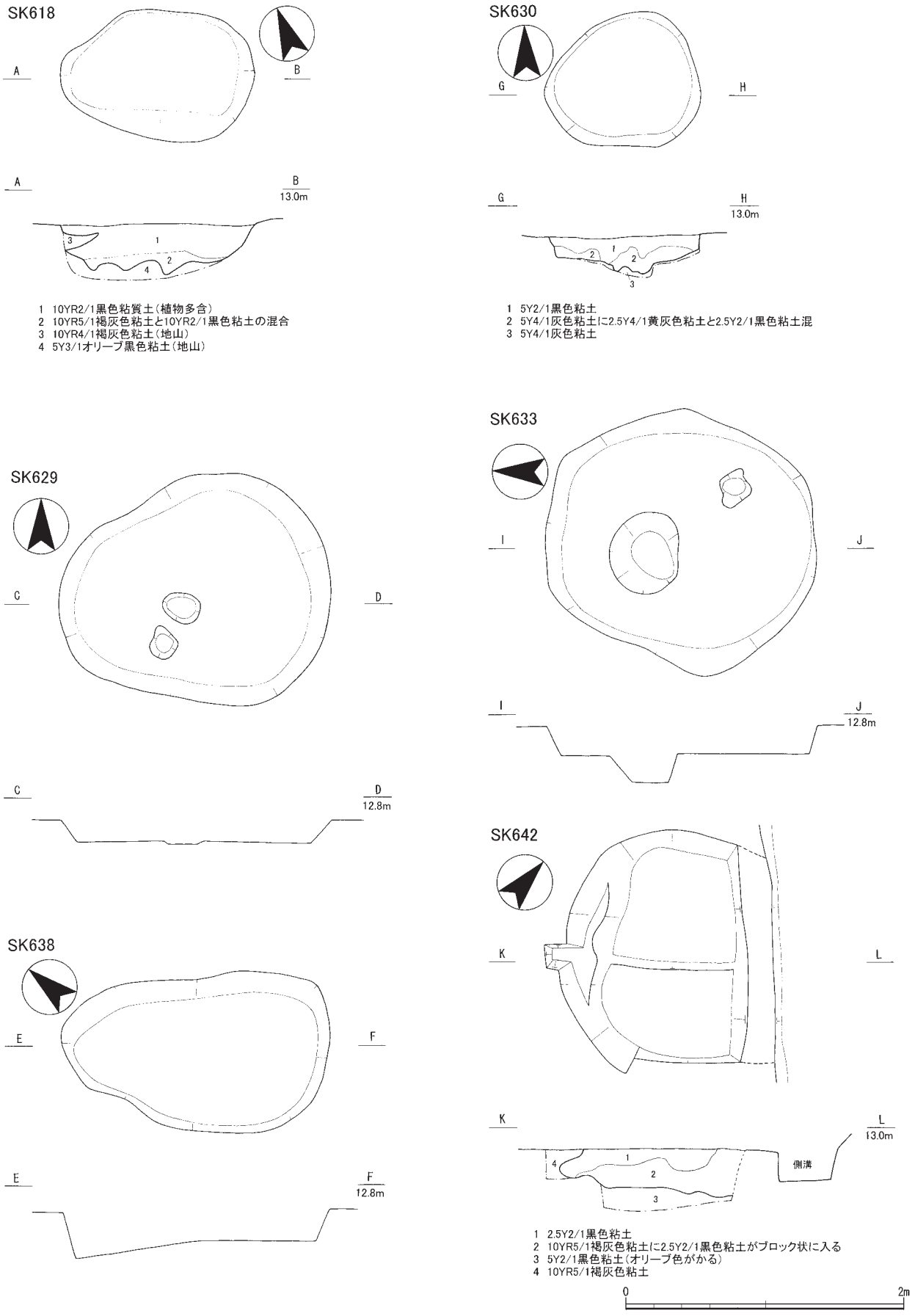
1 N1.5/0黒色粘土に植物片混
2 N1.5/0黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック 植物片 レキ混
3 10YR5/1褐灰色粘土(地山)
4 N4/0灰色粘土(地山)
5 10YR4/1褐灰色粘土 植物片含(地山)
6 10YR4/1褐灰色シルト 砂



SK610

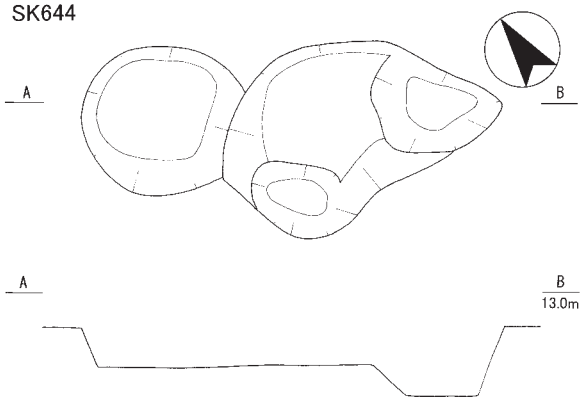


第81図　ＳＫ556～558・610遺構図（ＳＫ610は１：80、それ以外は１：40）

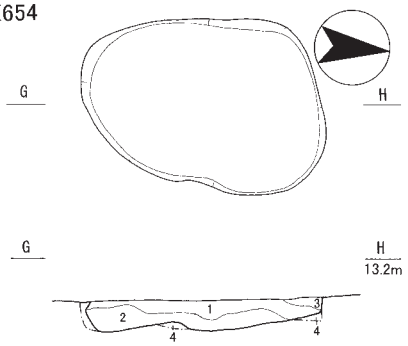


第82図　ＳＫ618・629・630・633・638・642遺構図（１：40）

SK644

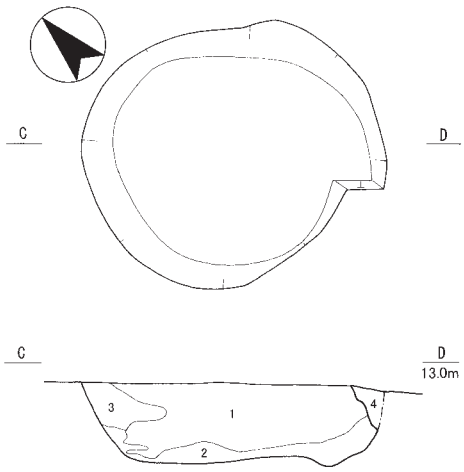


SK654



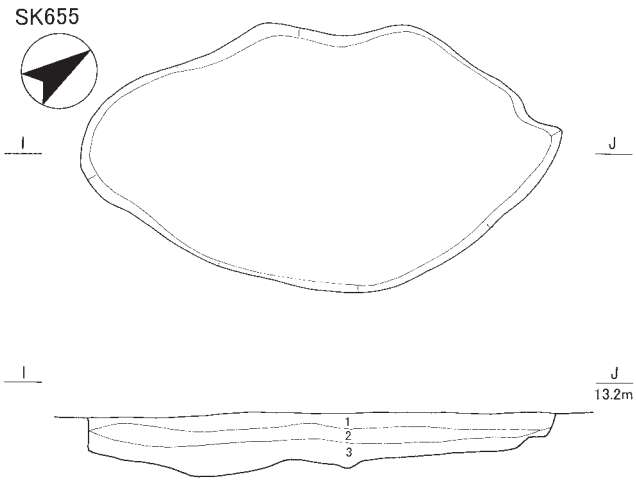
1 10YR1.7/1黒色粘土（鉄分少含、少し赤みを帯びる）
2 10YR4/1褐灰色粘土と2.5Y5/1黄灰色シルトの混合
3 10YR5/1褐灰色シルト
4 2.5Y6/1黄灰色シルトと粘土

SK647



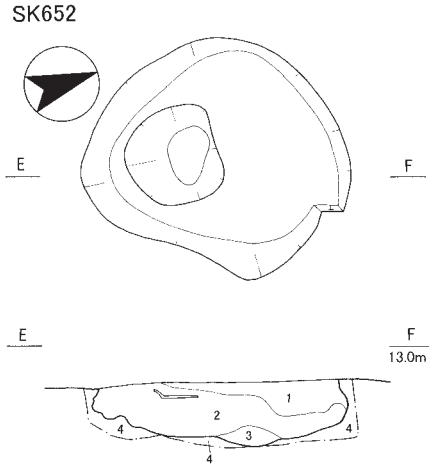
1 N1.5/黒色粘土
2 10YR6/1褐灰色粘土と2.5Y2/1黒色粘土の混合土
3 2.5Y4/1黄灰色粘土
4 10YR5/1褐灰色粘土

SK655



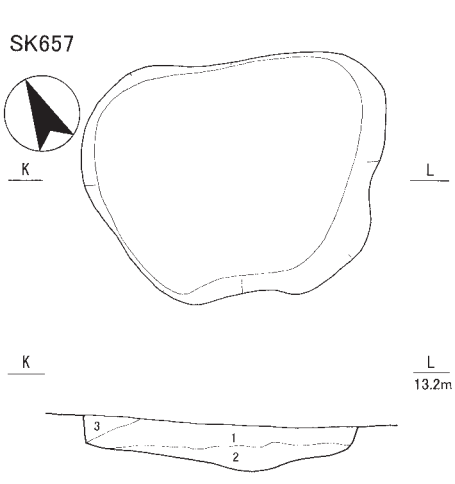
1 10YR2/2黒褐色粘土と2.5YR2/1黒色粘土と10YR6/1褐灰色シルトの混合土
2 2.5Y2/1黒色粘土
3 5Y3/1オリーブ黒色粘土と2.5Y5/1黄灰色粘土と5Y5/1灰色砂の混合土

SK652



1 2.5Y2/1黒色粘土に2.5Y4/1黄灰色粘土一部混
2 2.5Y2/1黒色粘土（粘性強く粒子が一部粗い）
3 10YR4/1褐灰色粘土
4 10YR5/1褐灰色粘土

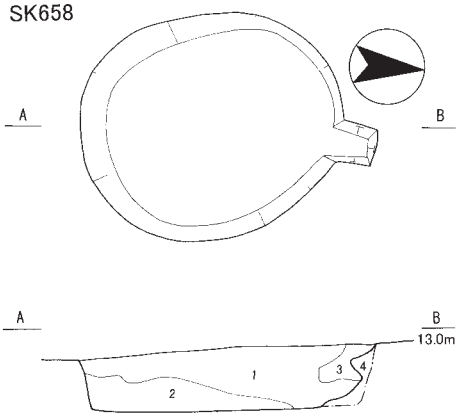
SK657



1 2.5Y2/1黒色粘土
2 2.5Y4/1黄灰色粘土に2.5Y5/1黄灰色シルト混
3 10YR4/1褐灰色粘土

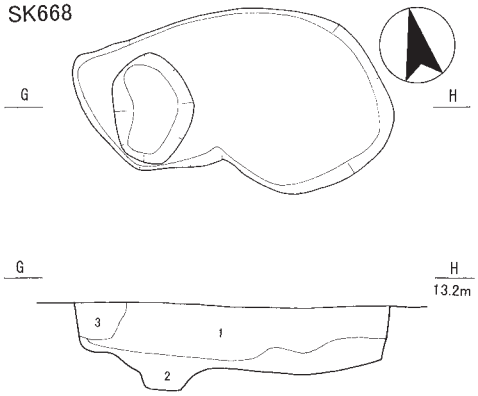
第83図　ＳＫ644・647・652・654・655・657遺構図（１：40）

SK658



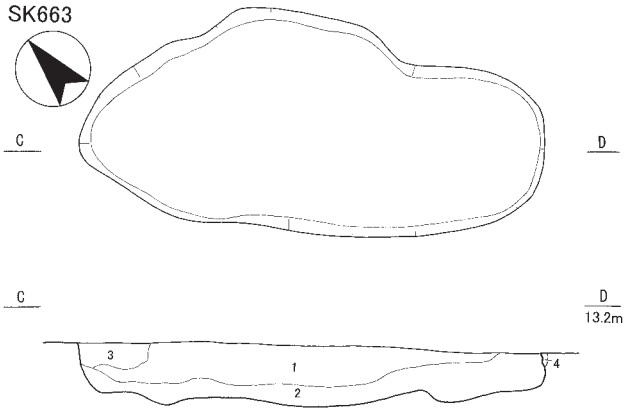
1 2.5Y2/1黒色粘土
2 10YR5/1褐灰色粘土に2.5Y2/1黒色粘土混
3 10YR4/1褐灰色粘土
4 10YR6/1褐灰色粘土

SK668



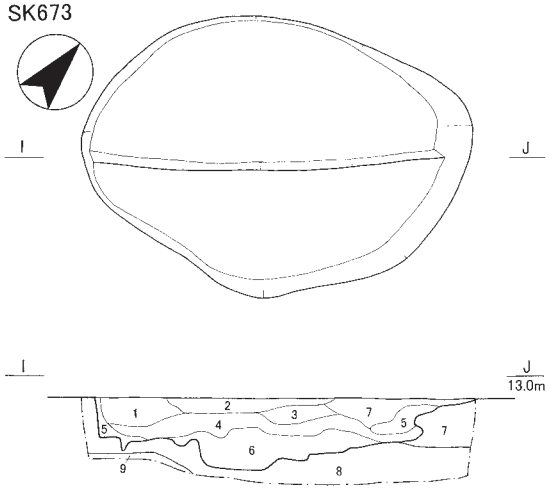
1 5Y2/1黒色粘土
2 10YR5/1褐灰色粘土に5Y2/1黒色粘土が混入
3 2.5Y5/1黄灰色粘土

SK663



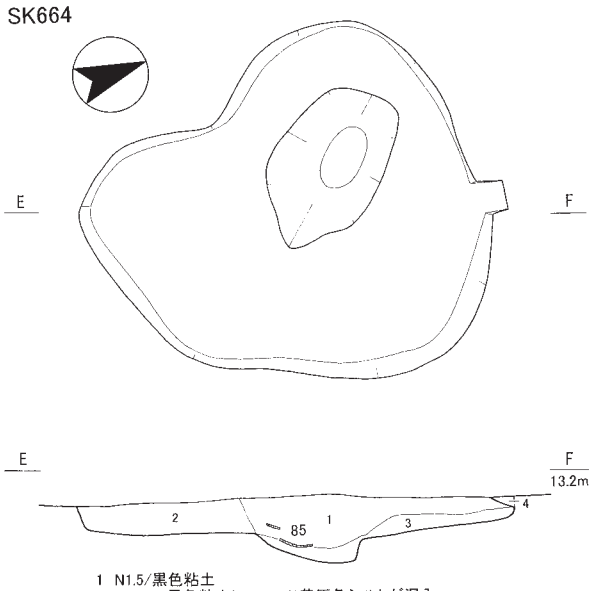
1 2.5Y2/1黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土と5Y5/1灰色シルト(粘性あり)の混合土
3 2.5Y4/1黄灰色粘土
4 土色記載なし(地山)

SK673



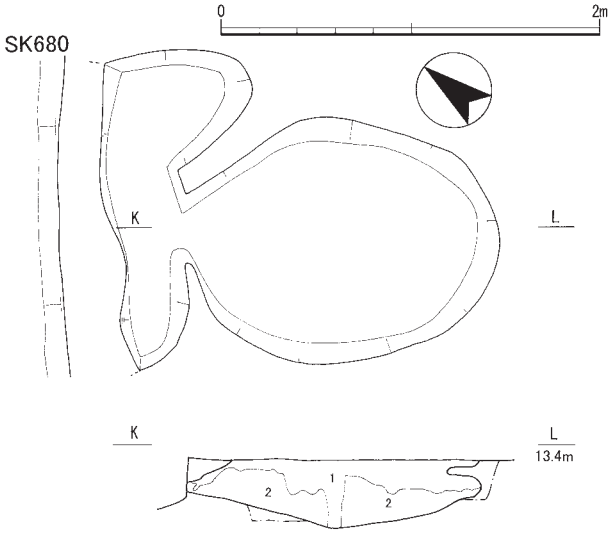
1 10YR2/1黒色粘土
2 10YR1.7/1黒色粘土
3 10YR1.7/1黒色粘土に10YR6/1褐灰色粘土が粒状に混入
4 10YR1.7/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土が混入しラミナ形成
5 10YR4/1褐灰色粘土
6 10YR1.7/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混入
7 10YR5/1褐灰色粘土
8 2.5Y3/1黒褐色粘土と2.5Y5/1黄灰色粘土の混合土
9 2.5Y5/1黄灰色シルト(粘性あり)

SK664



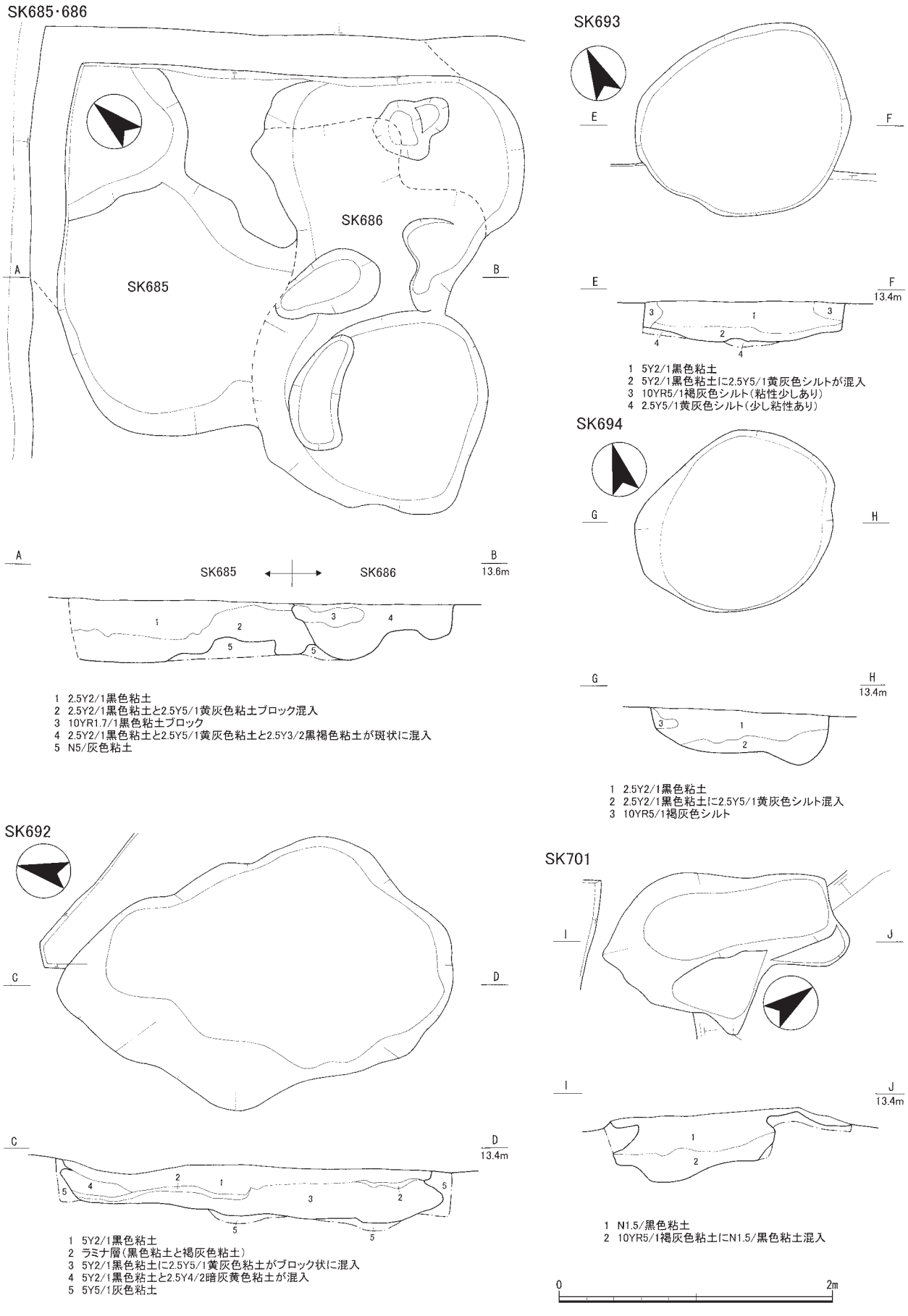
1 N1.5/黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土に2.5Y5/1黄灰色シルトが混入
3 2.5Y5/1黄灰色シルトに2.5Y2/1黒色粘土が混入
4 10YR5/1褐灰色シルト

SK680



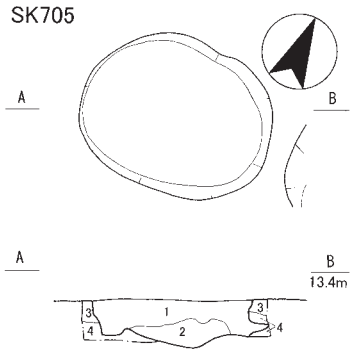
1 N1.5/黒色粘土に10YR4/1褐灰色粘土小ブロック混
2 N1.5/黒色粘土、10YR4/1褐灰色粘土、2.5Y4/1黄灰色粘土の混合土

第84図　ＳＫ658・663・664・668・673・680遺構図（１：40）



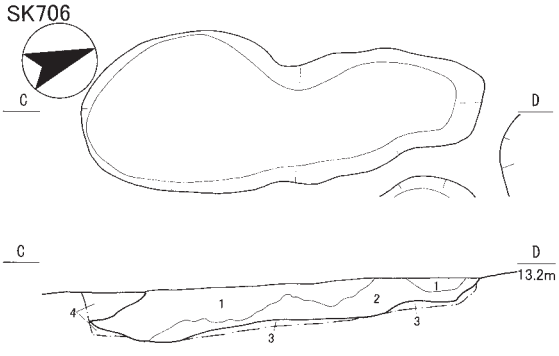
第85図　ＳＫ685・686・692～694・701遺構図（１：40）

SK705



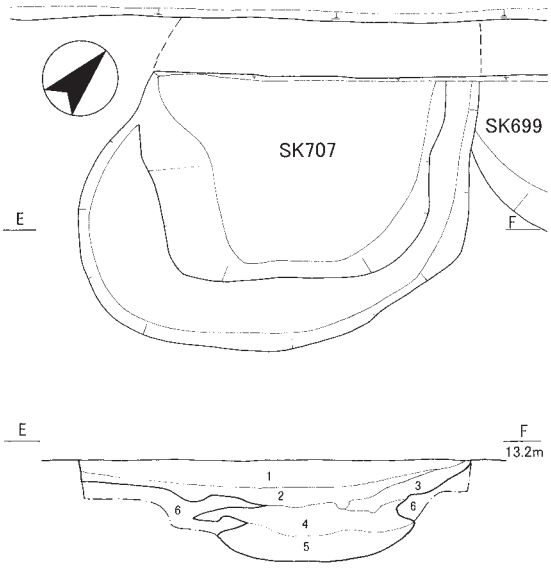
1 2.5Y2/1黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土と2.5Y5/1黄灰色シルトの混合土
3 2.5Y3/2黒褐色粘土（鉄分含）
4 2.5Y5/1黄灰色シルト

SK706



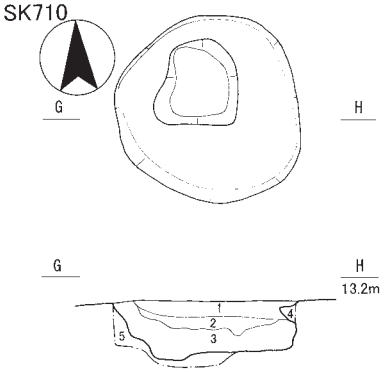
1 2.5Y2/1黒色粘土（一部に10YR5/1褐灰色シルトブロック混）
2 10YR4/1褐灰色粘土と10YR6/1褐灰色シルトと2.5Y2/1黒色粘土の混合土
3 2.5Y5/1黄灰色シルト
4 5Y5/1灰色粘土

SK707



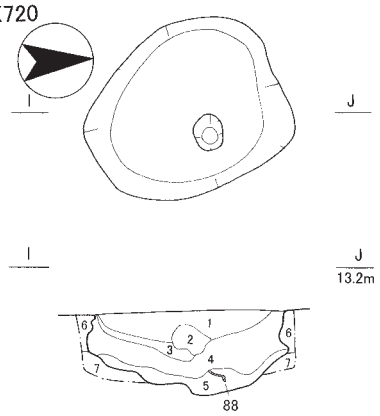
1 10YR1.7/1黒色粘土（少し赤みを帯びる）
2 2.5Y3/1黒褐色粘土
3 2.5Y4/1黄灰色粘土
4 2.5Y2/1黒色粘土
5 2.5Y2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
6 10YR5/1褐灰色粘土

SK710



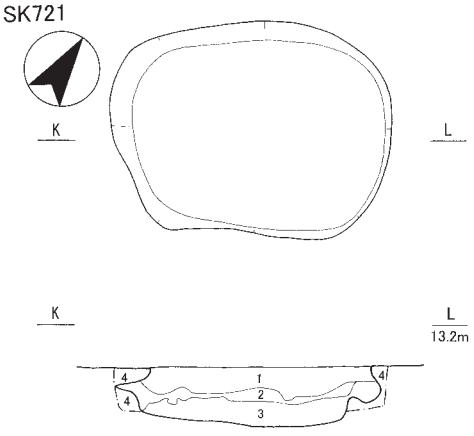
1 2.5Y2/1黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土粒混
3 2.5Y2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック多混（一部ラミナ形成）
4 10YR4/1褐灰色粘土
5 N6/灰色粘土に2.5Y5/6黄褐色粘土混

SK720

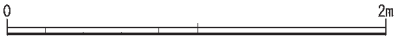


1 2.5Y2/1黒色粘土
2 10YR5/1褐灰色粘土
3 10YR2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土が混入
4 5Y2/1黒色粘土に一部10YR6/1褐灰色粘土が混入
5 10YR5/1褐灰色粘土に5Y2/1黒色粘土が混入
6 2.5Y5/1黄灰色粘土
7 N4/灰色粘土

SK721

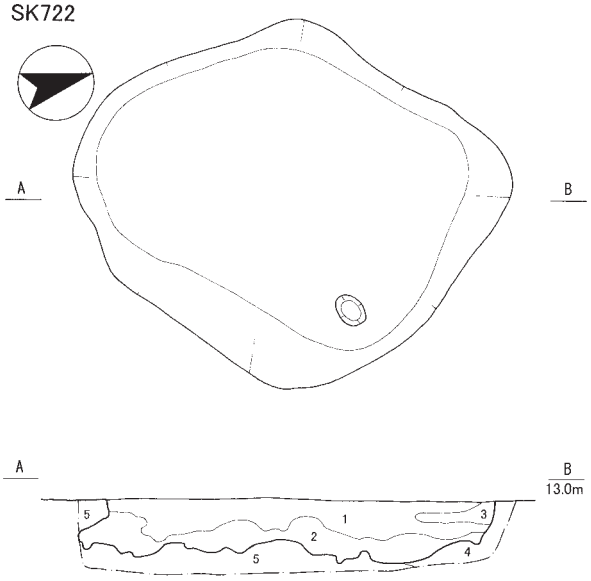


1 2.5Y2/1黒色粘土
2 10YR1.7/1黒色粘土
3 10YR5/1褐灰色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロック混
4 2.5Y4/1黄灰色土



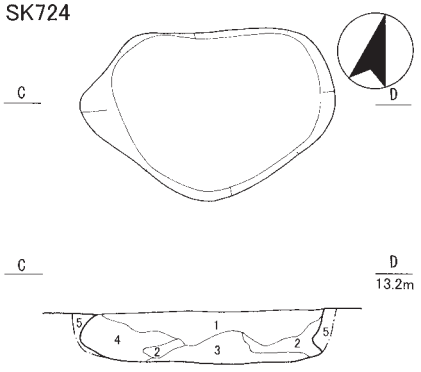
第86図　ＳＫ705～707・710・720・721遺構図（１：40）

SK722



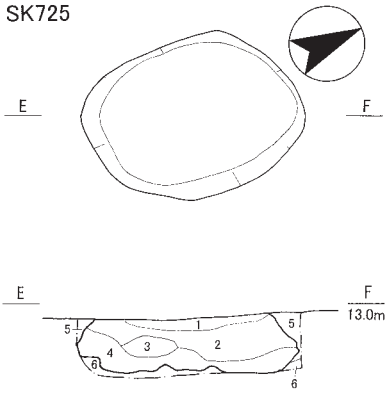
1 2.5Y2/1黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土と10YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 N3/暗灰粘土
4 2.5Y5/1黄灰色粘土
5 2.5Y4/1黄灰色粘土（4より暗い）

SK724



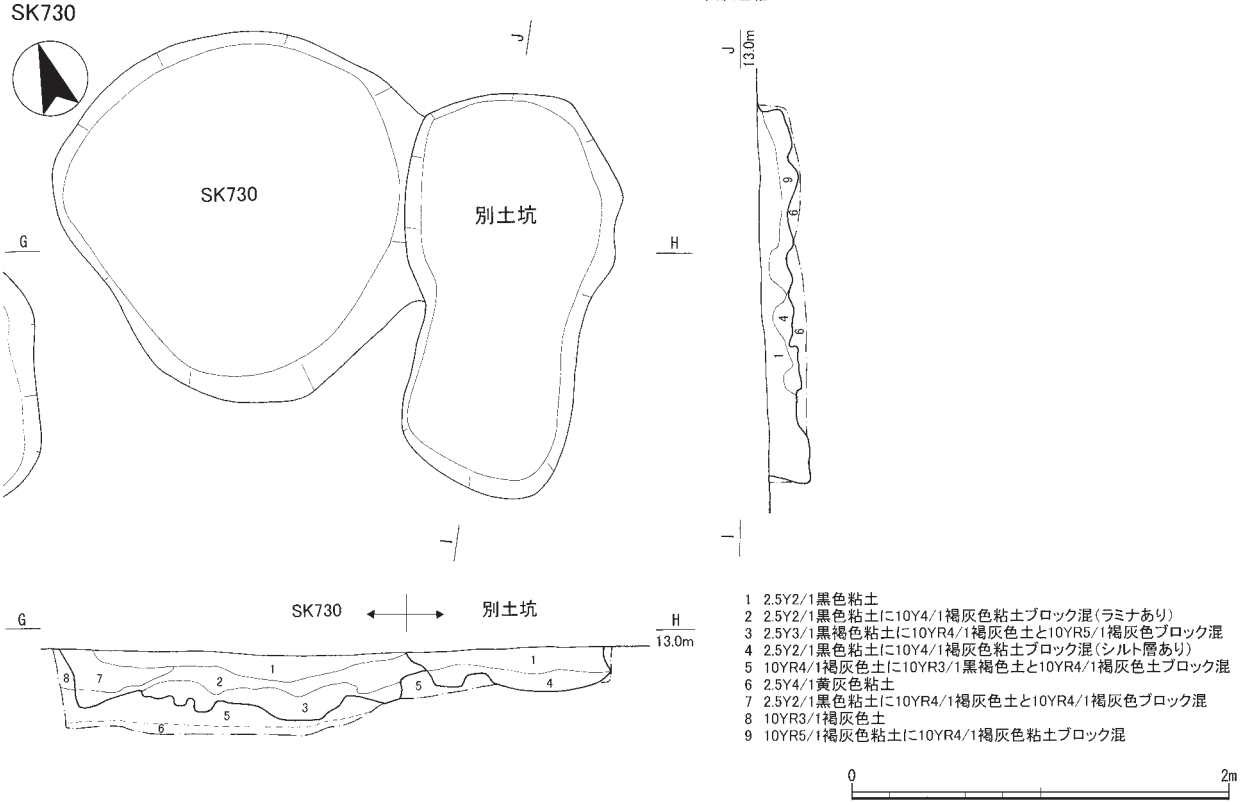
1 2.5Y2/1黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土が混入
3 10YR5/1褐灰色粘土（2.5Y2/1黒色粘土小ブロック少混）
4 10YR4/1褐灰色粘土
5 2.5Y5/1黄灰色粘土

SK725



1 2.5Y2/1黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロック少混
3 10YR4/1褐灰色粘土に10YR5/1褐灰色シルトブロック混
4 2.5Y2/1黒褐色粘土と10YR4/1褐灰色粘土ブロック混（ラミナあり）
5 10YR5/1褐灰色土
6 2.5Y4/1黄灰色粘土

SK730

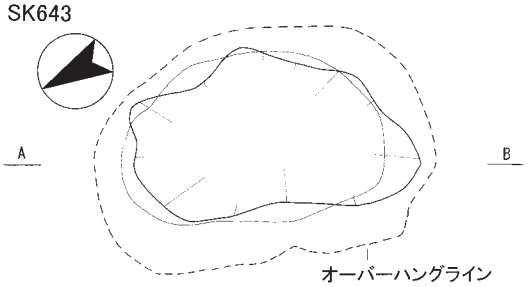


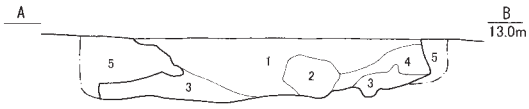
1 2.5Y2/1黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土に10Y4/1褐灰色粘土ブロック混（ラミナあり）
3 2.5Y3/1黒褐色粘土に10YR4/1褐灰色土と10YR5/1褐灰色ブロック混
4 2.5Y2/1黒色粘土に10Y4/1褐灰色粘土ブロック混（シルト層あり）
5 10YR4/1褐灰色土に10YR3/1黒褐色土と10YR4/1褐灰色土ブロック混
6 2.5Y4/1黄灰色粘土
7 2.5Y2/1黒色粘土に10YR4/1褐灰色土と10YR4/1褐灰色ブロック混
8 10YR3/1褐灰色土
9 10YR5/1褐灰色粘土に10YR4/1褐灰色粘土ブロック混

0 2m

第87図　ＳＫ722・724・725・730遺構図（１：40）

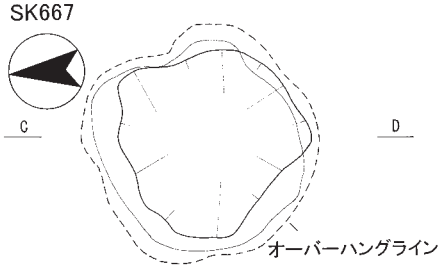
SK643

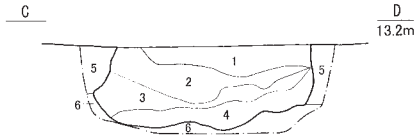




1 N1.5/黒色粘土
2 2.5Y4/1黄灰色粘土
3 5Y2/1黒色粘土（下部にラミナあり）
4 10YR4/1褐灰色粘土にN1.5/黒色粘土混
5 10YR5/1褐灰色粘土

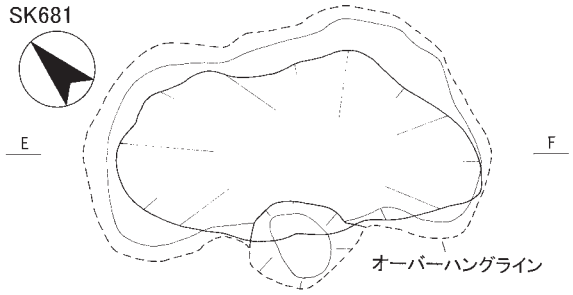
SK667

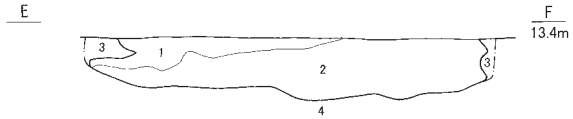




1 2.5Y2/1黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと2.5Y4/1黄灰色粘土ブロック混
3 10YR1.7/1黒色粘土に10YR4/1褐灰粘土少混
4 10YR6/1褐灰色粘土に10YR1.7/1黒色粘土が粒状に混ざる
5 N6/灰色粘土に2.5Y5/6黄褐色粘土混（地山）
6 N4/灰色粘土（地山）

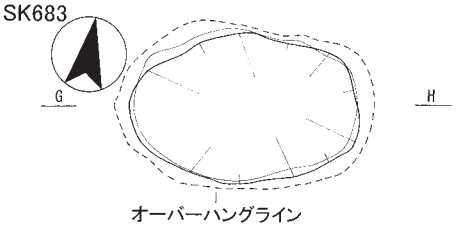
SK681





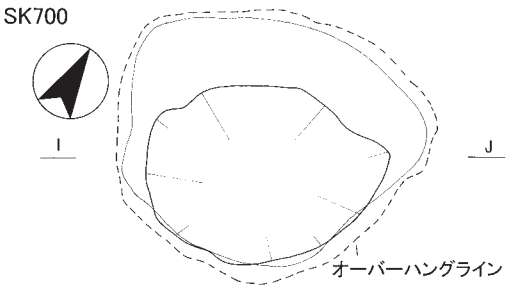
1 2.5Y2/1黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土にN5/1灰色粘土ブロックと2.5Y5/1黄灰色粘土ブロック混
3 2.5Y4/1黄灰色粘土
4 N5/1灰色粘土

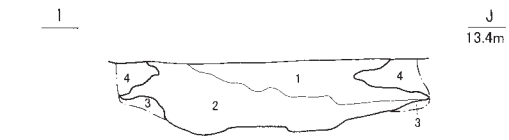
SK683



1 5Y2/1黒色粘土
2 10YR5/1褐灰色粘土に5Y2/1黒色粘土が混入
3 N6/1灰色シルト（粘性あり）
4 2.5Y6/1黄灰色粘土

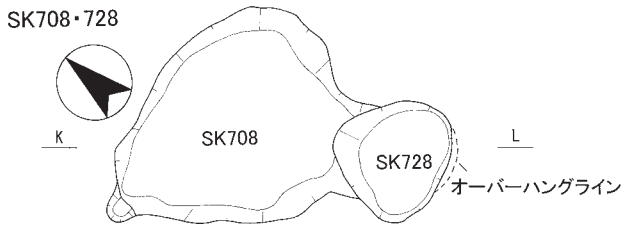
SK700

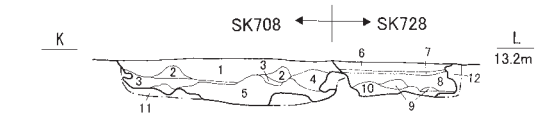




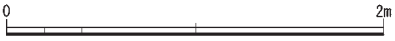
1 5Y2/1黒色粘土
2 5Y2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土・シルトブロック混
3 2.5Y5/1黄灰色粘土（地山）
4 10YR4/1褐灰色粘土に、10YR5/6黄褐色土混入（地山）

SK708・728



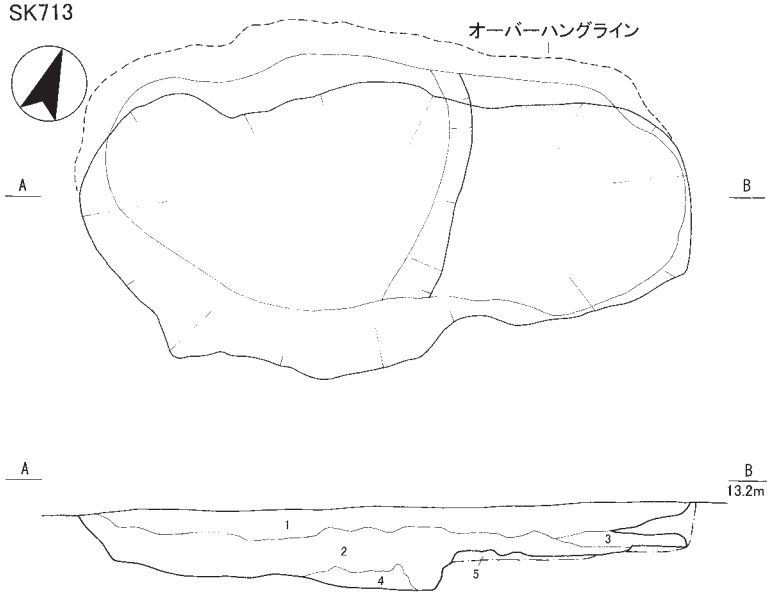


1 10YR1.7/1黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土（粒状の褐灰色粘土含）
3 2.5Y2/1黒色粘土（下部にラミナ形成）
4 10YR2/1黒色粘土
5 2.5Y2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土が混入
6 2.5Y2/1黒色粘土と10YR5/1褐灰色粘土の混合土（一部ラミナ形成）
7 2.5Y2/1黒色粘土
8 2.5Y2/1黒色粘土と2.5Y5/1黄灰色粘土がラミナ形成
9 10YR1.7/1黒色粘土（粘性強い）
10 10YR5/1褐灰色粘土に2.5Y2/1が混入
11 10YR5/1褐灰色粘土
12 2.5Y5/1黄灰色粘土



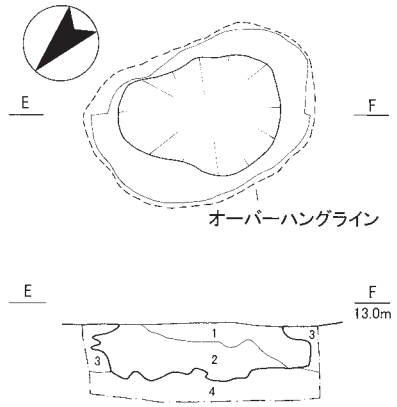
第88図　オーバーハング詳細図１（ＳＫ643・667・681・683・700・708・728　１：40）

SK713



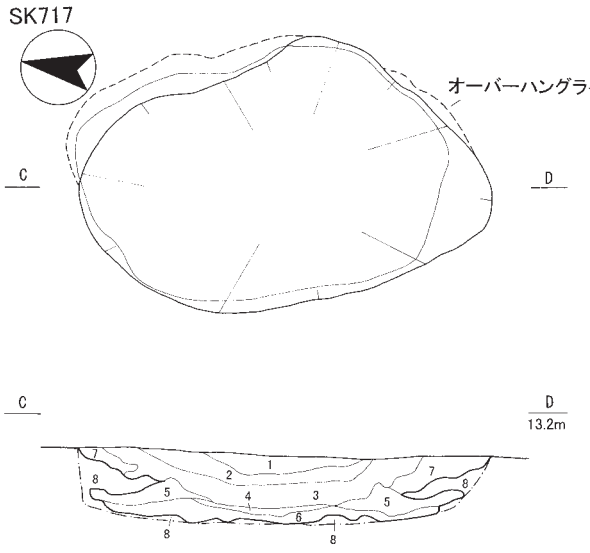
1 5Y2/1黒色粘土（鉄分含）
2 2.5Y2/1黒色粘土に7.5YR5/1褐灰色粘土ブロック混
3 2.5Y2/1黒色粘土（ラミナあり）
4 2.5Y4/1黄灰色粘土に2.5Y2/1黒色粘土、7.5YR5/1褐灰色粘土混
5 2.5Y4/1黄灰色粘土（地山）

SK731



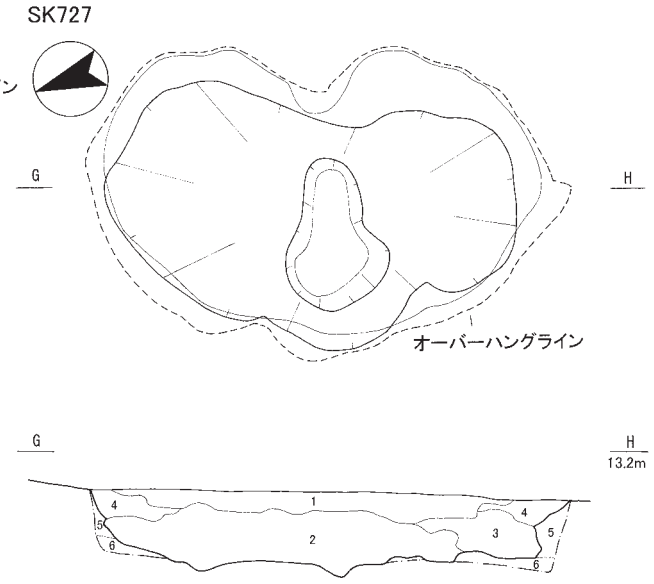
1 2.5Y2/1黒色粘土
2 2.5Y2/1黒色粘土に10YR5/1褐灰色粘土ブロックと10YR4/1褐灰色粘土ブロック混
3 2.5Y4/1黄灰色粘土
4 10YR4/1褐灰色土

SK717



1 2.5Y2/1黒色粘土
2 10YR1.7/1黒色粘土
3 5Y2/1黒色粘土
4 5Y2/1黒色粘土（シルト含）
5 5Y2/1黒色粘土に5Y5/1灰色粘土粒状に混入（一部にラミナ形成）
6 5Y5/1灰色シルト（粘性強い）に5Y2/1黒色粘土が混入
7 7.5YR5/1褐灰色粘土
8 2.5Y5/1黄灰色粘土

SK727



1 2.5Y2/1黒色粘土
2 2.5Y3/1黒褐色粘土、10YR5/1褐灰色粘土ブロック混（ラミナあり）
3 2.5Y3/1黒褐色粘土
4 10YR4/1褐灰色粘土（地山）
5 10YR5/1褐灰色土（地山）
6 2.5Y4/1黄灰色粘土（地山）

第89図　オーバーハング詳細図２（ＳＫ713・717・727・731　１：40）

第８表　遺構一覧表１

遺構番号	調査地区	グリッド	規模（cm）		出土遺物	時期	備考	土坑特記事項			
			長辺（径）×短辺（径）	深さ				オーバーハング	ブロック土	オーバーハング部の側壁土層	底土層（オーバーハングがない場合は壁～底土層）
SK１	２次	BB14・BA14	190×90	45	土師器壺（１）	廻間Ⅰ-2段階 島貫Ⅱ期新相					
SK２	２次	BA15	90×80	16	土師器片（体部）突帯付＋口縁付近の破片、手焙り？						
SK３	２次	BA15	130×160	38	土師器台付甕（２）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相		×	○ 上のみ	－	灰白色粘土 10Y7/1
SK４	２次	BA17	150×100	30	土師器受口状口縁甕？頸部	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相		○ 写真			
SK５	２次	AY15	280×180	51				×	○ 底～中層	－	記載なし
SK６	２次	AX・Y17	200×130	40				○	○ 底～中層	記載なし	褐灰色粘土 10YR5/1
SK７	２次	AY14・15	260×220	46				×	○ 底～中層	－	明緑灰色粘土 7.5GY7/1
欠番	－	－	－	－			攪乱				
SK９	２次	AY17	110×110	45			底に植物繊維あり				
SK10	２次	BA13	210×130	53			植物繊維の下に灰色砂あり				
SK11	２次	AY13	140×120	45	土師器壺片（頸～体部）	廻間Ⅰ-3段階 島貫Ⅱ期新相					
SK12	２次	AY13	210×150	44	土師器壺？片（体部）	弥生末～古墳初頭か					
SK13	２次	AX14	190×110	54				×	○ 底～中層	－	明緑灰色粘土 7.5GY7/1
SK14	２次	AY14	220×210	48	弥生土器壺（３）	山中Ⅰ-1段階					
SK15	２次	AX12・13	200×150	59	土師器壺？片（体部）	弥生末～古墳初頭か					
SK16	２次	AX16	110×100	23				○	○ 底～中層	記載なし	褐灰色粘土 10YR5/1
SK17	２次	AV16	160×160	48				○	×	明オリーブ灰色粘土 2.5GY7/1	明オリーブ灰色粘土 2.5GY7/1
SK18	２次	AW16・17	260×190	43	土師器壺（４）	廻間Ⅰ-2段階 島貫Ⅱ期新相	土器はオーバーハング部より出土	○ 写真			
SK19	２次	AU16	200×170	46				○	○ 上	明オリーブ灰色粘土 2.5GY7/1	明オリーブ灰色粘土 2.5GY7/1
SK20	２次	AT16	220×180	28	土師器壺（５）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相					
SK21	２次	AU16	110×80	32	土師器小片	弥生末～古墳初頭か					
SK22	２次	AS15	220×140	44	土師器広口加飾壺頸部片（貼付突帯有）	山中Ⅱ式か		○ 写真			
SK23	２次	AS16	140×130	76	土師器高杯（６） 土師器壺片（頸～肩部）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相					
SK24	２次	AT16	230×150	50				×	○ 底～中層	－	明オリーブ灰色粘土 2.5GY7/1
SK25	２次	AT17	340×220	53	土師器壺（７）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相					
SK26	２次	AR15	150×110	45	土師器壺片（体部）	弥生末～古墳初頭か					
SK27	２次	AS15, 16 AT15, 16	100×100	55				×	○ 底～中層	－	記載なし
SK28	２次	AS, AT15	140×110	86	籠製品（13）・土師器手焙形土器（14） 土師器甕もしくは壺体部片	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相		○			
SK29	２次	AU, AV17	190×150	47				×	○ 底～中層	－	灰オリーブ色粘土5Y6/2～ 灰白色粘土5Y7/1
SK30	２次	AR15	100×80	59							
SK31	２次	AP15	420×240	41	土師器小型壺？片	弥生末～古墳初頭か					
SK32	２次	AR15	200×130	58				○	○ 底～ほぼ上	記載なし	記載なし
SK33	２次	AP10	90×70	29	土師器壺片（口縁部）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ式か 島貫Ⅰ～Ⅱ期					
欠番	－	－	－	－							
SK35	２次	AV13	230×180	54	土師器壺片（体部）	廻間Ⅰ式か 島貫Ⅱ期	東側の別土坑、ほぼ上まで埋戻しか	×	○ 底	－	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1
SK36	２次	AV11	130×120	46				○	○ 底	明オリーブ灰色粘土 5GY	明オリーブ灰色粘土 5GY
SK37	２次	AW12	200×110	32				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR6/1	褐灰色粘土 10YR6/1
SK38	２次	AW13	110×90	33			単層	○	×	褐灰色粘土 10YR5/1	記載なし
SD39	２次	AW13	970×190	33					○ 底	－	褐灰色粘土10YR6/1～ 明オリーブ灰色粘土5GY7/1
SK40	２次	AV12	270×150	41				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR6/1	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1
SK41	２次	AW12・13	190×100	40				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR6/1	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1
SK42	２次	AV12	100×100	42			最下層ブロック土上半部にラミナ有	○	○ 底、ラミナ層挟んで上	褐灰色粘土 10YR5/1	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1
SK43	２次	AW11	160×130	38	土師器甕片（体部）	山中式か		○ 写真	○写真 底～中層		
SK44	２次	AW11・12	210×170	29	土師器甕？片（体部）	弥生末～古墳初頭か					
SK45	２次	AX, AY15	470×330	51				○	○ ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1
SK46	２次	AW15	80×70	61				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1
SK47	２次	AW14	100×90	80	籠製品（17）　不明木製品（18）		最下層ブロック土から籠出土	○	○ 底	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1	記載なし
SK48	２次	AU14	200×200	58				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1
SK49	２次	AV15	140×110	41				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1
SK50	２次	AV10	110×100	35				×	○ 底～中層	－	灰白色粘土 5GY8/1
SK51	２次	AT12	120×80	42	弥生土器（土師器）壺（８）	山中Ⅰ～廻間Ⅰ-0段階					
SK52	２次	AV14	150×120	49				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1
SK53	２次	AU11	240×190	54				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR6/1	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1
SK54	２次	AU11・12	250×220	55				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色粘土 7.5GY7/1
SK55	２次	AT12	440×190	60				×	○ 底～中層	－	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1
SK56	２次	AT14	180×130	57	土師器甕片（体部）	廻間Ⅰ式か 島貫Ⅱ期	ブロック土層直上層は互層	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	記載なし
SK57	２次	AU15	270×160	43				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1

第９表　遺構一覧表２

遺構番号	調査地区	グリッド	規模（cm）		出土遺物	時期	備考	土坑特記事項			
			長辺（径）×短辺（径）	深さ				オーバーハング	ブロック土	オーバーハング部の側壁土層	底土層（オーバーハングがない場合は壁～底土層）
SK58	２次	AT14, 15 AU14, 15	230×210	59				○	○ 底～中層	記載なし	記載なし
SK59	２次	AS14	230×210	52				○	○ 底～中層	黄灰色粘土2. 5Y4/1～ 明オリーブ灰色粘土 5GY7/1	記載なし
SK60	２次	AS13・14	320×300	40			ブロック土層直上層は互層	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1
SK61	２次	AS12・13 AT12・13	160×150	50				○	○ 底～中層	褐灰色粘土10YR5/1～ 黄灰色粘土2. 5Y5/1～ 明オリーブ灰色粘土 5GY7/1	記載なし
SK62	２次	AT10	130×110	71				×	○ 底	－	記載なし
SK63	２次	AS10・11	190×130	40				×	○ 底	－	にぶい黄橙色10YR6/4～ 灰白色粘土10YR8/1に黄橙色土 10YR7/8含
SK64	２次	AS11	130×110	37					○写真 底		
SK65	２次	ARS12	170×150	49				×	○ 底	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 黒褐色粘土2. 5Y3/ 1
SK66	２次	AR15	110×80	47				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	オリーブ灰色粘土 5GY6/1
SK67	２次	AP12, AQ12, AP13	850×450	31				○	○ 上	褐灰色粘土 10YR5/1	オリーブ黒色粘土 5Y3/1
SK68	２次	AP, AQ14	270×220	34				○	○ ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	黒褐色粘土 10YR3/1
SK69	２次	AO16	140×130	26			ブロック土層内にラミナ有	×	○ 上	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 黒褐色粘土10YR3/1
SK70	２次	AN15	180×150	34	弥生土器（土師器）甕（９）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	数回に分けて埋戻しか	×	○ ほぼ上	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 黒色粘土2. 5Y2/1
SK71	２次	AO, AP16	400×330	49				○	○ 上	褐灰色粘土 10YR4/1	黒色粘土 N2/0
SK72	２次	AO13	410×300	36				×	○ 上	－	黒褐色粘土 10YR3/1
SK73	２次	AM16	190×140	55				○	×	黒褐色粘土 10YR3/1	明オリーブ灰色粘土 5GY7/1
SK74	２次	AL15, AM15	170×120	34	土師器甕（10）	廻間Ⅰ-0～4段階 島貫Ⅱ期古相			○写真 底～ほぼ上		
SK75	２次	AM16	120×110	45				×	○ 底～中層	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 暗灰色粘土N3/0
SK76	２次	AM16	180×140	32			ラミナ	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK77	２次	AL14, 15 AM14, 15	410×290	43	土師器高杯（11）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	木	×	○ 上	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 緑灰色シルト5G6/1
SK78	２次	AM14	1300×1000	41	高杯片（脚部との接合付近杯部）	山中Ⅱ式か	東西に二つの土坑に分かれる	○	西○底 東○底～ほぼ上	西土坑： 褐灰色粘土10YR5/1 東土坑： 灰白色土10YR7/1	褐灰色粘土10YR4/1～ 暗灰色粘土N3/1
SK79	２次	AK10, 11 AL10, 11	150×100	39	土師器受口状口縁甕片（口縁部、櫛描刺突文有）	廻間Ⅰ-4段階 島貫Ⅱ期新相		×	○ 底～ほぼ上	－	黄褐色砂質土10YR5/6～ 灰黄褐色砂質土10YR4/2
SK80	２次	AK8, 9	340×190	29	土師器壺片（肩部）	弥生末～古墳初頭か					
SK81	２次	AL10	110×100	44			石				
SK82	２次	AJ10	800×700	36	土師器大型壺片（体部）、甕片（体部、煤付着）	弥生末～古墳初頭か					
SK83	２次	AK13	110×110	32	土師器台付甕（12）	廻間Ⅰ-0段階、島貫Ⅱ期古相より古い	ブロック土直上層ラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR4/1	記載なし
SK84	２次	AK14, 15	110×90	36			第１層ラミナ有	×	○ 底～中層	－	褐灰色粘土 10YR5/1
SK85	２次	AK14	100×90	26				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK86	２次	AK16	70×70	17				×	○ 底～中層	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 緑灰色シルト5G6/1
SK87	２次	AL13	110×70	35			第１層ラミナ有	○	○ 底～ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK88	２次	AL12	750×320	33			単層	×	○ 上	－	灰白色砂質土10YR7/1～ 褐灰色粘土10YR4/1～ 黒褐色砂質土N3/1
SK89	２次	AK14	130×110	31			単層	○	○ 上	褐灰色粘土 10YR5/1	記載なし
SK90	２次	AI, AJ12	310×240	35	土師器壺片（底～体部）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ式か 島貫Ⅰ～Ⅱ期	第１層ラミナ有	×	○ 底～中層	－	褐灰色粘土 10YR4/1
SK91	２次	AI11	600×200	26	土師器壺（15）	廻間Ⅰ-3・4段階 島貫Ⅱ期新相					
SK92	２次	AJ11	180×150	33	土師器台付？甕片（体部、煤付着）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	土器は土坑中央付近、ほぼ床面から出土か				
欠番	－	－	－	－			調査時にSK90と同一と判明				
SK94	２次	AH15	130×120	21	弥生土器（土師器）甕（16）・ 土師器甕片（体部外面ハケ）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ-0段階、島貫Ⅰ～Ⅱ期古相　より古い	木片	×			
SK95	２次	AG15	220×80	15							
SK96	２次	AI15	200×170	19	土師器大型広口壺片（体部）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相					
欠番	－	－	－	－							
SK98	２次	AJ15	340×220	20							
SK99	２次	AF, AG14	270×190	22	土師器壺片（体部）	廻間Ⅰ-4段階～ 島貫Ⅱ期新相～	SK100の土器と同一個体				
SK100	２次	AF15, AG15	250×190	25	土師器壺片（体部）	廻間Ⅰ-4段階～ 島貫Ⅱ期新相～	SK99の土器と同一個体				
SK101	２次	AH11	110×100	17					○写真 底～ほぼ上		
SK102	２次	AG13	120×100	15	土師器台付甕片（体部・台部）	廻間Ⅰ-4段階 島貫Ⅱ期新相					
SK103	２次	AH10, 11	250×170	17			ブロック土直上層にラミナ有	×	○ ほぼ上	－	記載なし
SK104	２次	AG13	160×110	29	土師器壺（20） 土師器台付甕台部	廻間Ⅰ-0段階か					
SK105	２次	AG11, 12	120×110	23					○写真 底		
SK106	２次	AG11	130×110	25			最下層に土器有	○	○ 上	褐灰色粘土 10YR5/1	暗緑灰色粘土 7. 5GY4/1
SK107	２次	AI11, 12	270×120	22	へら状木製品（19）		木 第２層埋土にラミナ有	○	○ 底	暗灰色粘土N3/0～ オリーブ褐色粘土 2. 5Y4/3	黒色粘土2. 5Y2/1と灰黄色シルト2. 5Y6/2ラミナ形成 ～灰オリーブ色シルト5Y6/2
SK108	２次	AG12	220×160	31					○写真 ほぼ上		

第10表　遺構一覧表３

遺構番号	調査地区	グリッド	規模（cm）		出土遺物	時期	備考	土坑特記事項			
			長辺（径）×短辺（径）	深さ				オーバーハング	ブロック土	オーバーハング部の側壁土層	底土層（オーバーハングがない場合は壁～底土層）
SK109	２次	AG10, 11 AH10, 11	210×170	45				○	○ 底僅かに	褐灰色粘土 10YR5/1	暗灰色粘土 N3/0
SK110	２次	AH11	330×130	59				○	○ 底	褐灰色粘土10YR5/1 ～暗灰色粘土N3/0	灰オリーブ色シルト？ 5Y6/2
SK111	２次	AF12	150×130	25				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK112	２次	AF10	310×160	25					○写真 底～ほぼ上		
SK113	２次	AE9, 10	330×160	23					○写真 底～ほぼ上		
SK114	２次	AE10	260×140	26					○写真 底～ほぼ上		
SK115	２次	AD, AE10	170×150	19			第１・２層ラミナ有	×	○ 底～ほぼ上	－	褐灰色土 10YR4/1
SK116	２次	AF12, 13	610×480	32				×	○ 底～中層	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 緑灰色シルト7GY5/1
SK117	２次	AD11	200×190	39	土師器受口状口縁甕片（口縁部）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相		○写真	○写真 底～中層		
SK118	２次	AF10	360×160	35	弥生土器（土師器）高杯（21）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相					
SK119	２次	AC10	160×150	16							
SK120	２次	AD11	160×150	28				○	○ 底～ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土10Y2/1～ 明オリーブ灰色粘土5GY7/1
SK121	２次	AD, AE10	210×120	19					○写真 底		
SK122	２次	AC11	190×190	34			第２層ラミナ有	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	記載なし
SK123	２次	AC12	150×150	27				○写真	○写真 底～中層		
SK124	２次	AC, AD10	560×310	32				○写真	○写真 底～中層		
SK125	２次	AC9	220×120	22					○写真 底～中層		
SK126	２次	AC11, 12	200×160	34					○写真 底		
SK127	２次	AB11, 12	230×180	35				×	○ 底	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 暗オリーブ灰色砂質シルト 5GY4/1
SK128	２次	AC10, 11	210×140	30			第２層ブロック+ラミナ有	○	○ 底～ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK129	２次	AD14	150×130	17					○写真 底		
SK130	２次	AE13, 14	260×160	22	土師器壺？片（体部）	弥生末～古墳初頭か	SK131と繋がる	○	○ 上	SK131埋土	褐灰色粘土10YR5/1～ 底は記載なし
SK131	２次	AE14	370×270	34			SK130と繋がる	×	○ 底～中層	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 底は記載なし
SK132	２次	AA17	320×90	38	土師器台付甕（22） 土師器甕？壺片（平底部）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	土器はブロック土層から出土	○写真	○写真 底～中層		
SK133	２次	AB17	170×170	46				×	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	灰色粘土N4/0～5/0
SK134	２次	AD13	260×190	30					○写真 底～中層		
SK135	２次	AD13, 14 AE13, 14	230×100	24			木				
SK136	２次	AB14	150×110	34	土師器壺片（口縁部・体部）、受口状口縁甕片（口縁部・体部）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ式 島貫Ⅰ～Ⅱ期			○写真 底～中層		
SK137	２次	AC13	240×220	35					○写真 底		
SK138	２次	AB12	60×60	10	土師器小片	弥生末～古墳初頭か					
SK301	３次Ⅰ	AE6	250×150	40				×	○ 底～中層	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 暗灰色粘土N3/0
SK302	３次Ⅰ	AD6	120×60	20							
SK303	３次Ⅰ	AD, AE6	120×100	18							
SK304	３次Ⅰ	AD6, 7 AE6, 7	360×210	12					○写真 底僅かに		
SK305	３次Ⅰ	AD7	140×90	14							
SK306	３次Ⅰ	AD7, 8	270×200	14							
SK307	３次Ⅰ	AD8	200×90	13							
SK308	３次Ⅰ	AD8	130×40	11							
SK309	３次Ⅰ	AD, AE8	140×120	9							
SK310	３次Ⅰ	AE7	130×110	12	土師器台付甕（25）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相					
SK311	３次Ⅰ	AE8	150×120	12	土師器壺（26）	廻間Ⅰ-0段階か 島貫Ⅱ期古相			○写真 上		
SK312	３次Ⅰ	AE7	80×70	6					○写真 底～中層		
SK313	３次Ⅰ	AE, AF7	250×220	24	土師器甕もしくは壺片（体部）	弥生末～古墳初頭か					
SK314	３次Ⅰ	AF6, 7	110×80	10							
SK315	３次Ⅰ	AE, AF6	150×80	15	土師器小片	弥生末～古墳初頭か					
SK316	３次Ⅰ	AE7, 8	130×90	16					○写真 底～中層		
SK317	３次Ⅰ	AE8	140×40	7							
SK318	３次Ⅰ	AE, AF8	310×250	27			第２層ラミナ有	－	○ 底～ほぼ上	－	褐灰色粘土 10YR5/1
SK319	３次Ⅰ	AF8, 9	290×160	29	弥生土器（土師器）高杯（27）	山中Ⅱ-1段階～廻間Ⅰ式か 島貫Ⅰ～Ⅱ期					
SK320	３次Ⅰ	AF8	110×80	27	土師器受口状口縁甕もしくは鉢（口縁部）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相					
SK321	３次Ⅰ	AF7	200×110	16					○写真 底		
SK322	３次Ⅰ	AF6	190×90	25	弥生土器壺（28）	八王子古宮Ⅰ式か	土器はオーバーハング部より出土	○			
SK323	３次Ⅰ	AF6	110×90	20					○写真 底		
SK324	３次Ⅰ	AG6	30×20	15							
SK325	３次Ⅰ	AF, AG6	50×40	12							
SK326	３次Ⅰ	AF, AG7	170×100	8							
SK327	３次Ⅰ	AF7, 8	200×140	20	土師器高杯片（杯部）	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期			○写真 底～ほぼ上		

第11表　遺構一覧表４

遺構番号	調査地区	グリッド	規模（cm）		出土遺物	時期	備考	土坑特記事項			
			長辺（径）×短辺（径）	深さ				オーバーハング	ブロック土	オーバーハング部の側壁土層	底土層（オーバーハングがない場合は壁～底土層）
SK328	3次Ⅰ	AF7, AG6・7 AH6・7, A16・7	1160×770	23	弥生土器高杯（29）・土師器甕片（頸～体部）・ﾐﾆﾁｭｱ？？高杯片（杯部）	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	石	－	○ 上	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 暗灰色粘土N3/0～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK329	3次Ⅰ	AG8	170×130	35			石				
SK330	3次Ⅰ	AF8	180×100	30				×	○ 底～ほぼ上	－	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK331	3次Ⅰ	A16	80×50	34					○写真 底～中層		
SK332	3次Ⅰ	A16	110×100	21					○写真 上		
SK333	3次Ⅰ	A17, 8	180×130	24							
SK334	3次Ⅰ	AH8	30×20	9							
SK335	3次Ⅰ	AH8	170×120	20					○写真 底～中層		
SK336	3次Ⅰ	AH8	120×90	43				×	○ 底～ほぼ上	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 暗灰色粘土N3/0～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK337	3次Ⅰ	AG8, 9 AH8, 9	600×500	35							
SK338	3次Ⅰ	AH9	130×50	20							
SK339	3次Ⅰ	AH9	90×80	22					○写真 底		
SK340	3次Ⅰ	AF, AG8	80×60	28							
SK341	3次Ⅰ	AG7, 8	150×130	25					○写真 底～ほぼ上		
SK342	3次Ⅰ	AF9、AG8, 9	160×130	22	土師器甕片（体部、煤付着）	弥生末～古墳初頭か					
SK343	3次Ⅰ	AG9	150×40	20							
SK344	3次Ⅱ	AW8	60×50	20	土師器小片（薄い器壁）	時期不明	石	×	×	－	褐灰色粘土 10YR5/1
SK345	3次Ⅱ	AW8, 9	160×80	30				－	○ 底～ほぼ上	－	褐灰色粘土 10YR5/1
SK346	3次Ⅱ	AW, AX8	180×170	36				×	○ 底～中層	－	褐灰色粘土 10YR5/1
SK347	3次Ⅱ	AX7, 8	200×150	19							
SK348	3次Ⅱ	AX9	80×60	12				×写真	×写真		
SK349	3次Ⅱ	AX9	60×60	33				○写真	○写真 底～中層		
SK350	3次Ⅱ	AX8	100×80	30				○	○ 底～ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	灰白色シルト 10YR7/1
SK351	3次Ⅱ	AY8	140×110	20					○写真 底～ほぼ上		
SK352	3次Ⅱ	AY8, 9	170×110	42				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK353	3次Ⅱ	AY9	130×130	44				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY8/1
SK354	3次Ⅰ	A18	120×40	31							
SK355	3次Ⅰ	AH9	80×30	12							
SK356	3次Ⅱ	AY8, 9	170×120	23			単層	○	○ 上	明緑灰色シルト 10GY8/1	明緑灰色シルト 10GY8/1
SK357	3次Ⅰ	AH9	130×70	10							
SK358	3次Ⅱ	AY7	120×70	11							
SK359	3次Ⅱ	AY6, 7	210×170	23							
SK360	3次Ⅱ	BA, BB6	140×100	41				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色シルト 10YR5/1
SK361	3次Ⅱ	BA8	90×80	9							
SK362	3次Ⅱ	BB7	40×40	22							
SK363	3次Ⅱ	AY8, 9, 10 BA9, 10, BB10	780×530	43	土師器壺片（底～体部）	弥生末～古墳初頭か		×	○ 底～中層	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK364	3次Ⅱ	AY10	100×70	20							
SK365	3次Ⅱ	BA8, 9	160×160	18							
SK366	3次Ⅱ	BA9	290×230	40				○	○ ほぼ上	明緑灰色シルト 10GY7/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK367	3次Ⅱ	BA, BB10	270×170	30			単層				
SK368	3次Ⅱ	BA10, 11	110×60	32				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK369	3次Ⅱ	BA, BB11	110×100	39							
SK370	3次Ⅱ	BB6, 7	210×200	56	弥生土器高杯（30）	山中Ⅰ式	30はSK423と接合	×	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK371	3次Ⅱ	BA, BB8	280×270	29			単層		○写真 上		
SK372	3次Ⅱ	BA9, 10 BB8, 9, 10	590×340	35	土師器甕（31） 土師器壺片（体部・口縁部）	廻間Ⅰ-4段階 島貫Ⅱ期新相	ブロック土層に土器片	×	○ 上	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土10YR5/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK373	3次Ⅱ	BB10	210×180	46			第１層ラミナ有	×	○ 底の一部	－	褐灰色粘土 10YR5/1
SK374	3次Ⅱ	BB10, 11	170×110	35				○	○ ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK375	3次Ⅱ	BB11	90×60	18			ブロック土直上層にラミナ有	○写真	○写真 底～中層		
SK376	3次Ⅱ	BB11	100×90	20			単層		○写真 上		
SK377	3次Ⅱ	BB6, BC6	250×130	41	弥生土器高杯（32）・土師器壺片・平底受口状口縁甕片（体部・底部）	山中Ⅰ～Ⅱ式		○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK378	3次Ⅱ	BB6, BC6	360×230	35	土師器甕片（体部・口縁部、煤付着）・高杯片（杯屈曲部）2種	弥生末～古墳初頭か	単層		○写真 底～中層		
SK379	3次Ⅱ	BC6, BD6	150×90	24				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK380	3次Ⅱ	BC7	240×200	52	土師器小片、壺か？	弥生末～古墳初頭か		○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK381	3次Ⅱ	BC8	130×120	53	土師器甕もしくは壺片（体部）	弥生末～古墳初頭か		○	○ ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	灰色粘土 N5/0
SK382	3次Ⅱ	BC7, 8 BD7, 8	130×120	44	土師器甕（33）・石器剥片（34）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相		○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	黒褐色粘土2. 5Y3/1～ 黒褐色粘土2. 5Y3/2～ 明緑灰色細砂10GY8/1
SK383	3次Ⅱ	BD7, 8, 9 BE6, 7, 8, 9	980×650	47	土師器受口状口縁甕片（体部、煤付着）・タタキ甕片（体部）	弥生末～古墳初頭か		×	○ 上	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1

第12表　遺構一覧表５

遺構番号	調査地区	グリッド	規模（cm）		出土遺物	時期	備考	土坑特記事項			
			長辺（径）×短辺（径）	深さ				オーバーハング	ブロック土	オーバーハング部の側壁土層	底土層（オーバーハングがない場合は壁～底土層）
SK384	3次Ⅱ	BD6	180×100	37	弥生土器高杯（35）	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	第２層にわずかにラミナ有	△	○ 底	－	褐灰色粘土 10YR5/1
SK385	3次Ⅱ	BD6	120×90	17					○写真 上		
SK386	3次Ⅱ	BD6	240×200	27				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土10YR5/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK387	3次Ⅱ	BC10	100×90	61				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	黒褐色粘土 2.5Y3/1
SD388	3次Ⅱ	BC11, 12 BD11, 12	740×60	7							
SK389	3次Ⅱ	BC11	120×90	62			第１層ラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土10YR5/1～ 黒色粘土2.5Y2/1	黒色粘土 2.5Y2/1
SK390	3次Ⅱ	BC11	170×150	58	土師器甕もしくは壺片（体部、煤付着）	弥生末～古墳初頭か	第１層（自然堆積土）に土器片	×	○ 底～中層	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK391	3次Ⅱ	BC10	110×80	47				○	○上	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK392	3次Ⅱ	BC9, 10	130×110	39			石		○写真 底		
SK393	3次Ⅱ	BC, BD10	390×250	58	土師器受口状口縁甕片（体部）、他不明片	弥生末～古墳初頭か		×	○ 底～中層	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 黒色粘土2.5Y2/1
SK394	3次Ⅱ	BD11	90×90	27				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK395	3次Ⅱ	BD7	180×150	38	土師器受口状口縁甕片（体部）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相		○	○ 底～ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	灰色粘土 N4/0
SK396	3次Ⅱ	BD8, 9	180×170	35				○	○ 底～ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土10YR5/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK397	3次Ⅱ	BB8	130×90	21	土師器鉢（36）・土師器壺片（体部）	廻間Ⅰ式か 島貫Ⅱ期		○	○ 上	明緑灰色シルト 10GY7/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK398	3次Ⅱ	BD9, 10	190×130	25				×	○ ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK399	3次Ⅱ	BD9	40×30	8							
SK400	3次Ⅱ	BD10, BE8, 9, 10 BF10	820×450	29	土師器高杯（37）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相		×	○ ほぼ上	－	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK401	3次Ⅱ	BD, BE11	180×170	45	土師器台付甕（38） 土師器壺もしくは甕片（体部）	廻間Ⅰ-4段階	ブロック土層にラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土10YR5/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK402	3次Ⅱ	BE7, 8	240×180	46					○写真 底～ほぼ上		
SK403	3次Ⅱ	BE, BF, 10, 11	240×200	18				×	×	－	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK404	3次Ⅱ	BE11	180×130	48				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土2.5Y2/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK405	3次Ⅱ	BE11, 12	120×110	71			第１層底にラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土 2.5Y2/1
SK406	3次Ⅱ	BC8	130×120	62			ブロック土層にラミナ有	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土2.5Y2/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK407	3次Ⅱ	BD9	50×40	19							
SK408	3次Ⅱ	BE, BF9	140×90	33			第１層ラミナ有	○	○ 上	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色シルト 10YR5/1
SK409	3次Ⅱ	BE6	210×160	31	弥生土器高杯（39）、 弥生土器（土師器）甕（40）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	第２層にラミナ有	×	○ 底～中層	－	褐灰色粘土10YR5/1～ にぶい黄褐色砂10YR4/3
SK410	3次Ⅱ	BE6	60×40	10			ブロック土直上層にラミナ有		○写真 底		
SK411	3次Ⅱ	BE6, BF6	610×210	28	弥生土器壺（41） 弥生土器高杯（42）	山中Ⅰ～Ⅱ式		×	○ 底	－	褐灰色粘土 10YR5/1～ 明緑灰色シルト 10GY7/1
SK412	3次Ⅱ	BF12	120×110	30			第１層ラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK413	3次Ⅱ	BF11	200×170	66			第１層ラミナ有	○	○ 底	上半部：褐灰色粘土 10YR5/1 下半部：黒色粘土 2.5Y2/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK414	3次Ⅱ	BF11	30×20	12							
SK415	3次Ⅱ	BF10	110×80	27				○	○ 底と第１層	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土2.5Y2/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK416	3次Ⅱ	BF, BG, 9, 10	490×310	35				○	○ ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK417	3次Ⅱ	BF9	190×180	33			第１層ラミナ有	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色シルト 10YR5/1
欠番	－	－	－	－							
SK419	3次Ⅱ	BG10	180×150	49	土師器受口状口縁甕片（体部、煤付着）	廻間Ⅰ式～	第１層ラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色シルト 10YR5/1
SK420	3次Ⅱ	BG10, 11	180×160	42				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK421	3次Ⅱ	BG11	210×160	51				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土2.5Y2/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK422	3次Ⅱ	BF, BG8	130×100	36				○写真	○写真 底～中層		
SK423	3次Ⅱ	BF6, 7	420×190	35	弥生土器高杯（30）・別個体高杯片（杯部）	山中Ⅰ式	30はSK370と接合 底より第２層でラミナ有	○	○底、 ラミナ層 挟んで上	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK424	3次Ⅱ	BE, BF8	280×260	13			単層				
SK425	3次Ⅱ	BE8 BF8, 9	160×120	25	土師器直口壺？片（口縁部か）	弥生末～古墳初頭か		○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK426	3次Ⅱ	BF8, 9 BG8, 9 BH8, 9	820×350	45	土師器受口状口縁甕片（台部）・高杯杯部片	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相		○	○ 底～ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色シルト10YR5/1～ 黒色粘土2.5Y2/1
SK427	3次Ⅱ	BG11, 12	160×130	44			第１層ラミナ有	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土2.5Y2/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK428	3次Ⅱ	BG9, 10	180×160	32			木 第１層ラミナ有	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色シルト 10YR5/1
SK429	3次Ⅱ	BG11	90×70	26				×	○ 底～中層	－	褐灰色粘土 10YR5/1
SK430	3次Ⅱ	BG, BH11	100×90	30			第１層ラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK431	3次Ⅱ	BG, BH12	290×170	56				○	○ 底	明緑灰色粘土 10GY7/1	明緑灰色粘土 10GY7/1
SK432	3次Ⅱ	BH11, 12	240×200	64	土師器小片	弥生末～古墳初頭か	SK679と繋がるか 第２層にラミナ有	－	○ 底～中層	明緑灰色粘土 10GY7/1	褐灰色シルト 10YR5/1
SK433	3次Ⅱ	BH11	150×130	30				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK434	3次Ⅱ	BG, BH9	110×110	44			底から数えて第２層ラミナ	○	○底、 ラミナ層 挟んで上	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土10YR5/1～
SK435	3次Ⅱ	BH8	130×100	39	土師器高杯（43）	廻間Ⅰ-2段階 島貫Ⅱ期古相		－	○ 底～中層	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 褐灰色シルト10YR5/1
SK436	3次Ⅱ	BG6	250×120	32	土師器長胴甕（101）	平城Ⅱ～Ⅲ期 斎宮第Ⅰ期第２～３段階		○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK437	3次Ⅱ	BG6	250×150	30	土師器長胴甕（体部）	古代		○	○ 底～中層	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK438	3次Ⅱ	BG, BH6	140×100	19				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1

第13表　遺構一覧表６

遺構番号	調査地区	グリッド	規模（cm）		出土遺物	時期	備考	土坑特記事項			
			長辺（径）×短辺（径）	深さ				オーバーハング	ブロック土	オーバーハング部の側壁土層	底土層（オーバーハングがない場合は壁～底土層）
SK439	3次Ⅱ	BH6	180×170	56	土師器甕？片（体部、煤付着）	弥生末～古墳初頭か	最下層にラミナ有	○	○ 上層僅かに	黒色粘土2.5Y2/1	黒色粘土2.5Y2/1
SK440	3次Ⅱ	BG6,7	220×180	43				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土10YR5/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK441	3次Ⅱ	BG7	140×130	27				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK442	3次Ⅱ	BH7,8	80×70	47			最下層にラミナ有	○	×	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土2.5Y2/1
SK443	3次Ⅱ	BG10,BH9,10	130×130	74			底から数えて第２層ラミナ	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土2.5Y2/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK444	3次Ⅱ	BH10	80×80	21				×	○ 底	—	褐灰色粘土 10YR5/1
SK445	3次Ⅱ	BH10	90×70	52				○	○ 底僅かに	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土2.5Y2/1
SK446	3次Ⅱ	BH10	100×50	52				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK447	3次Ⅱ	BH8	150×140	15	土師器甕もしくは壺片（体部）	弥生末～古墳初頭か		×	○ 上	—	褐灰色粘土10YR5/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK448	3次Ⅱ	BG7,8	130×110	13				○	○ 底	明緑灰色シルト 10GY7/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK449	3次Ⅱ	BH11	110×50	37	土師器台付甕（44）	廻間Ⅰ式 島貫Ⅱ期					
SK450	3次Ⅱ	BG8	200×100	21				—	○ 底	—	褐灰色シルト 10YR5/1
SK451	3次Ⅱ	BG6	180×160	22				—	○ 底～ほぼ上	—	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK452	3次Ⅱ	BE5	80×30	—							
欠番	—	—	—	—	—						
SK454	3次Ⅱ	BG16	100×70	32					○写真 底～中層		
SD455	3次Ⅱ	BG13,14 BH14	700×60	27							
SK456	3次Ⅱ	BG13,BH13,14	200×150	58	土師器甕片（体部）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ-0段階か 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相		○	○ 南土坑のみ	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト10GY7/1砂礫混、褐灰色粘土10YR5/1ブロック混
SK457	3次Ⅱ	BG12,13	100×80	67	土師器小片（器種等不明）	古墳以前		○	○ 底	明緑灰色シルト 10GY7/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK458	3次Ⅱ	BH12,13	220×190	101	弥生土器（土師器）甕（45）・ 弥生土器（土師器）甕（46）・ 弥生土器（土師器）壺（47）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	甕（縦に半分に割れている）	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土2.5Y2/1～ 明緑灰色シルト10GY7/1
SK459	3次Ⅱ	BH,BI13	180×100	62				○	○ 底～一部上	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土 2.5Y2/1
SK460	3次Ⅱ	BI13	100×80	47			第１層は掘り直し？ 上から３層目にラミナ	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK461	3次Ⅱ	BH15,16 BI16	110×100	43				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK462	3次Ⅱ	BH14,15	210×150	88			第１層も埋戻し土か 第２層ラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK463	3次Ⅱ	BI15	140×120	50			上から４層目にラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK464	3次Ⅱ	BI15,16	180×140	44				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK465	3次Ⅱ	BJ15	140×130	37			最下層ブロック土にラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SD466	3次Ⅱ	BH16,BI14～16	750×100	14					○写真 底		
SK467	3次Ⅱ	BI,BJ13	160×150	62			上から２層目にラミナ有	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土2.5Y2/1～ 褐灰色シルト10YR5/1
SK468	3次Ⅱ	BH,BI14	340×200	92				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK469	3次Ⅱ	BI13,14 BJ13,14	210×190	35			下から３層目のブロック土層にラミナ有	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色シルト 10YR5/1
SK470	3次Ⅱ	BJ16	160×140	83			石	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	黄灰色粘土2.5Y4/1
SK471	3次Ⅱ	BI,BJ16	130×120	49	弥生土器高杯（48）	八王子古宮Ⅱ式か	ブロック土層にラミナ有	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1砂粒混
SK472	3次Ⅱ	BJ15,16 BK15,16	480×360	25				×	○ 上	—	褐灰色粘土 10YR5/1
SK473	3次Ⅱ	BJ,BK13	240×110	34			SK687と繋がるか	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色シルト 10YR5/1
SK474	3次Ⅱ	BK15	110×80	22				×	○ 上	—	褐灰色粘土 10YR5/1
SK475	3次Ⅱ	BK,BL13	180×170	35				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色シルト 10YR5/1
SK476	3次Ⅱ	BL15	160×140	45	弥生土器高杯（49）	中期末～後期前半	第１層ラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色シルト 10YR5/1
SK477	3次Ⅱ	BI,BJ14	190×180	31			第２層にラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK478	3次Ⅱ	BJ14	210×200	36			壁部崩落土？にラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色シルト 10YR5/1
SK479	3次Ⅱ	BL14,15	160×100	59				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色シルト 10YR5/1
SK480	3次Ⅱ	BL16	150×150	54			下から２層目の壁崩落土？にラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK481	3次Ⅱ	BH14	110×50	28				○写真	○写真 底		
SK482	3次Ⅱ	BN16,17	180×150	60	土師器甕（50）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	第１層、下から２層目壁崩落土？にラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土 2.5Y2/1
SK483	3次Ⅱ	BN17	60×60	38							
SK484	3次Ⅱ	BN,BO17	180×100	80	土師器受口状口縁甕片（体部）	廻間Ⅰ式か 島貫Ⅱ期	土器はブロック土上の自然堆積土層からの出土	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	黒褐色粘土2.5Y3/1～ 黄灰色シルト10YR5/1
SK485	3次Ⅱ	BO16,17	100×80	52							
SK486	3次Ⅱ	BO17	130×120	84	土師器甕（51）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	ブロック土上に土器 第２層ラミナ、第３層ラミナ状堆積か	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	暗灰黄色粘土2.5Y4/2～ 黒色粘土2.5Y2/1
SK487	3次Ⅱ	BM16	110×90	84			下から２層目ラミナ状堆積か	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土2.5Y2/1～ 黒褐色シルト10YR3/1
SK488	3次Ⅱ	BM16	220×140	15							
SK489	3次Ⅱ	BN15,16	220×120	19				×	○ 底わずか	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK490	3次Ⅱ	BO16	90×70	41							
SK491	3次Ⅱ	BO15,16	130×90	82	土師器甕片（体部、煤付着）	弥生末～古墳初頭か					
SK492	3次Ⅱ	BO,BP16	80×70	71			第２層にラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1～4/1	黒色粘土 2.5Y2/1
SK493	3次Ⅱ	BM13	180×110	46				×	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	黒褐色粘土 2.5Y3/1
SK494	3次Ⅱ	BP,BQ16	140×130	37				○	○ 上	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1

第14表　遺構一覧表７

遺構番号	調査地区	グリッド	規模（cm）		出土遺物	時期	備考	土坑特記事項			
			長辺（径）×短辺（径）	深さ				オーバーハング	ブロック土	オーバーハング部の側壁土層	底土層（オーバーハングがない場合は壁～底土層）
SK495	3次Ⅱ	BP15,16 BQ15,16	530×240	64	土師器甕（52）、 陶器椀片（体部、渥美産）	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	２つの土坑有、切り合い不明 土器は第３層ブロック土層上出土 東土坑第１層ラミナ有	○	西○上 東○底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1～6/1	黒褐色粘土 2.5Y3/1
SK496	3次Ⅱ	BP15	170×150	61			第２層微小ブロックにラミナ有	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土 2.5Y2/1
SK497	3次Ⅱ	BP14,15	200×190	49			ブロック土にラミナ有	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	黒褐色粘土 2.5Y3/1
SK498	3次Ⅱ	BP17	－	－			大部分をSK534に切られる				
SK499	3次Ⅱ	BP,BQ17	270×210	53	弥生土器壺（53）	山中Ⅱ式か 島貫Ⅰ期					
SK500	3次Ⅱ	BK14	80×50	35				×	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK501	3次Ⅱ	BQ16	170×160	49			第１層ラミナ有、第２層微小ブロックとラミナ、第３層互層にラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	黄灰色粘土 2.5Y4/1
SK502	3次Ⅱ	BQ15,16 BR15,16	360×260	44	弥生土器高杯（54）・ 弥生土器（土師器）壺（55）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ式か 島貫Ⅰ～Ⅱ期	木 ２つの土坑切合い	○	○ 底～ほぼ上	褐灰色粘土 10YR5/1	黄灰色粘土2.5Y4/1～ 黄灰色シルト2.5Y6/1
SK503	3次Ⅱ	BQ13,14	220×190	41				○	○ 底～中層	褐灰色粘土10YR5/1～ 灰色粘土N5/1	明緑灰色砂に礫混 10GY7/1
SK504	3次Ⅱ	BQ14	180×120	39			第２層互層堆積	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	灰色粘土 N5/1
SK505	3次Ⅱ	BQ13	40×40	32	土師器長胴甕大片（体部）	平城Ⅰ～Ⅱ期		○	×	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK506	3次Ⅱ	BQ13	100×50	32				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	灰色粘土 N4/1
SK507	3次Ⅱ	BR14,15 BS15	310×120	40			２つの土坑の切合い有　東側は底と上層がブロック土堆積、第２層は自然堆積	×	西○底 東○底、１層	褐灰色粘土 10YR5/1	黄灰色粘土 2.5Y4/1
SK508	3次Ⅱ	BQ,BR17	420×230	49	弥生土器高杯（56）・ 弥生土器（土師器）台付甕（57）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相					
SK509	3次Ⅱ	BQ16,17 BR16	160×140	36			SK555に切られる 第１層は互層堆積、ラミナ有	－	○ 底～ほぼ上	－	褐灰色粘土10YR6/1～ 明緑灰色シルト7.5GY8/1
SK510	3次Ⅱ	BS15	140×120	34			第４層ブロック土層にラミナ有 第２層ラミナ有・互層堆積	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	黄灰色シルト 2.5Y5/1
SK511	3次Ⅱ	BS15,16	190×170	45	木製槽（58）		第２・３層ブロック+ラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土10YR5/1～ 黄灰色粘土2.5Y4/1	褐灰色シルト 10YR5/1
SK512	3次Ⅱ	BR16	70×60	41				○	○ ほぼ上	褐灰色粘土 10YR6/1	黄灰色粘土 2.5Y5/1
SK513	3次Ⅱ	BR14	210×110	31	土師器長胴甕（102）	平城Ⅴ～Ⅵ期か 森宮第Ⅰ-4～Ⅱ-1段階	単層		○写真 ほぼ上		
SK514	3次Ⅱ	BQ13・14 BR13・14	100×90	25							
SK515	3次Ⅱ	BR14	130×130	27				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR6/1	灰色粘土 N5/1
SK516	3次Ⅱ	BR13,14	110×80	34							
SK517	3次Ⅱ	BR,BS14	150×130	28				○	○ 上	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK518	3次Ⅱ	BR13,　BS13,14	190×150	34				○	○ 底わずか	褐灰色粘土 10YR5/1	黄灰色シルト 2.5Y5/1
SK519	3次Ⅱ	BR13	180×110	23							
SK520	3次Ⅱ	BQ～S,13,14	840×510	41	弥生土器高杯（62）・（63）、弥生土器（土師器）甕（64）、弥生土器壺（65）	山中Ⅰ～Ⅱ式		－	○ 上	－	褐灰色粘土 10YR5/1
SK521	3次Ⅱ	BS13,14	250×160	26	土師器長胴甕片（体部）	古代	底は自然堆積	○	○ 上のみ	褐灰色粘土 10YR6/1	黄灰色粘土 2.5Y4/1
SK522	3次Ⅱ	BT13	130×100	23				－	○ 底	－	黄灰色粘土 2.5Y4/1
SK523	3次Ⅱ	BT13	130×50	37			第１層微小ブロック+ラミナ有 第２層互層、ラミナ有	×	×	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 黄灰色粘土2.5Y4/1
SK524	3次Ⅱ	BS13,14 BT13,14	630×230	38	弥生土器高杯（59）	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	第１層ラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR6/1	黒褐色粘土 2.5Y3/1
SK525	3次Ⅱ	BT13,14	140×140	28				○	×	褐灰色粘土 10YR5/1	灰色粘土 N4/1
SK526	3次Ⅱ	BT,BU14	90×80	43			単層	×	×	－	褐灰色粘土 10YR5/1
SK527	3次Ⅱ	BT14	150×120	40				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	灰色粘土 N5/1
SK528	3次Ⅱ	BT,BU13	190×150	48			第１層微小ブロック+ラミナ	○	○ 底	黒褐色粘土 2.5Y3/1	黒褐色粘土 2.5Y3/1
SK529	3次Ⅱ	BU13	110×100	49	弥生土器（土師器）壺（60）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	床面に木 ２回に分けて埋戻しか	○	○ 底～中層、 第１層	褐灰色粘土 10YR5/1	暗灰色粘土 N3/1
SK530	3次Ⅱ	BU13	160×120	12							
SK531	3次Ⅱ	BR16,17 BS16,17	250×210	50	弥生土器（土師器）壺（66）、 弥生土器台付壺（67）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	甕（縦半分に割れている） 土器はブロック土層直上から出土		○写真 底～ほぼ上		
SK532	3次Ⅱ	BS17	180×150	25							
SK533	3次Ⅱ	BT15,16 BU15,16	460×280	38	土師器壺片（体部）	弥生末～古墳初頭か	ブロック土に木、土器片 第１層ラミナ有	×	○ 底～中層	－	黄灰色シルト 2.5Y5/1
SK534	3次Ⅱ	BP17	270×80	47	弥生土器高杯（61）	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期		○	○ 上	褐灰色粘土 10YR5/1	明緑灰色シルト 10GY7/1
SK535	3次Ⅱ	BT14,15	100×70	48			底からのブロック土層上にラミナ有、 その上にまたブロック土層 ２回に分けて埋戻しか	○	○ 底～中層	褐灰色粘土10YR5/1～ 灰色粘土N4/0	灰色粘土 N4/0
SK536	3次Ⅱ	BU13,14	90×70	62			単層	×	○ 上	－	褐灰色粘土10YR4/1～ 黒褐色粘土10YR3/1～ 2.5Y3/1
SK537	3次Ⅱ	BU14	70×70	49			２段階に分けて埋戻しか	○	○ 底と第２層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK538	3次Ⅱ	BV14	110×80	53				○	○ 上	褐灰色粘土10YR5/1～ 灰色粘土N4/1	黒褐色シルト　礫混 10YR3/1
SK539	3次Ⅱ	BV15	220×200	48	土師器甕片（体部、煤付着）	弥生末～古墳初頭か	石 木	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	暗灰色シルトN3/1
SK540	3次Ⅱ	BV15,16	310×230	35	石錘（68）		わずかにラミナ有、しかしどの位置か不明	○	○ 上	褐灰色粘土 10YR5/1	黄灰色シルト 2.5Y4/1
SK541	3次Ⅱ	BW13	130×100	20				－	○ 上	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK542	3次Ⅱ	BW,BX13	150×100	11			単層	×	○ 上	－	黄灰色シルト 2.5Y4/1
SK543	3次Ⅱ	BW,BX13	200×180	36			石	○	○ 上	褐灰色粘土 10YR5/1	黄灰色シルト　礫混 2.5Y4/1
SK544	3次Ⅱ	BW14,15	170×130	42	弥生土器壺（69）	八王子古宮Ⅰ式	69はSK546と接合 底のブロック土層上にラミナ有、その直上第１層はブロック土、２回の埋戻しか	○	○ 底～中層、 上	褐灰色粘土10YR5/1～ 灰色粘土N4/1	灰色粘土N4/1
SK545	3次Ⅱ	BW15	60×40	13							
SK546	3次Ⅱ	BW15,16	390×310	35	弥生土器壺（69）	八王子古宮Ⅰ式	69はSK544と接合 木	○	○ 底～中層	褐灰色粘土10YR6/1～ 灰色粘土N5/1	灰色粘土N5/1
SK547	3次Ⅱ	BW14,15 BX14,15	180×160	22	弥生土器高杯（70）・土師器甕もしくは壺片（体部）	山中Ⅰ式	土師器甕もしくは壺は内面が二次焼成を受けるか	×	○ ほぼ上	－	褐灰色粘土10YR4/1～ 褐灰色シルト10YR4/1

第15表　遺構一覧表８

遺構番号	調査地区	グリッド	規模（cm）		出土遺物	時期	備考	土坑特記事項			
			長辺（径）×短辺（径）	深さ				オーバーハング	ブロック土	オーバーハング部の側壁土層	底土層（オーバーハングがない場合は壁～底土層）
SK548	３次Ⅱ	BW, BX15	310×170	43	土師器壺片（体部）	弥生末～古墳初頭か	第１層ラミナ有	○	○ ほぼ上	褐灰色粘土 10YR4/1	黒褐色シルト 2.5Y3/1
SK549	３次Ⅱ	BU13～15 BV13～15 BW13～15 BT15, BX14	1200×920	47	土師器壺（71）・弥生土器（土師器）台付甕（72）・弥生土器（土師器）甕（73）・土師器大型壺片（体部）・器種不明片（体部）	山中Ⅱ～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	ブロック土に土器	○	○ 上	褐灰色粘土10YR5/1～ 暗灰色粘土N3/0	黄灰色シルト 2.5Y5/1
SK550	３次Ⅱ	BR, BS17	150×150	19				－	○ 底～中層	－	黄灰色粘土2.5Y6/1～ 明緑灰色砂7.5GY8/1
SK551	３次Ⅱ	BQ・BR16 BS16・17 BT15～17 BU16・17	1450×920	52	弥生土器（土師器）壺（74）・土師器大型壺片（体部）・土師器高杯片（杯部）	山中Ⅱ式か	単層	－	○ 上	－	褐灰色粘土10YR6/1～ 明緑灰色シルト7.5GY8/1
SK552	３次Ⅱ	BU16, 17　BV16	550×310	33	土師器甕もしくは壺片（体部）	弥生末～古墳初頭か			○写真 上		
SK553	３次Ⅱ	BW15, 16	170×70	32				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	灰色粘土N4/0
SK554	３次Ⅱ	BU15, 16	160×50	23							
SK555	３次Ⅱ	BQ16, 17	90×50	18			SK509を切る 単層	○	×	褐灰色粘土 10YR6/1	褐灰色粘土 10YR6/1
SK556	３次Ⅱ	BX14	170×160	35			下から２層目ラミナ有、下から３層目ブロック土、２回目の埋戻しか	×	○ 底～中層	－	黒褐色シルト 10YR3/1
SK557	３次Ⅱ	BX14	130×40	40				○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土10YR4/1 植物混
SK558	３次Ⅱ	BQ, BR14	170×110	47			底からのブロック土層上にラミナ有	×	○ 底	－	褐灰色粘土10YR5/1～ 灰色粘土N4/1
SK559	３次Ⅱ	BS14	220×80	33	土師器壺？片（体部）	弥生末～古墳前か	底のブロック土層上にラミナ有 ３段階に分けて埋戻しか	○	○ 上	褐灰色粘土 10YR6/1	灰色粘土N4/0～砂に 明緑灰色粘土7.5GY混
SK560	３次Ⅱ	BS14, 15	60×50	36							
SK561	３次Ⅱ	BC9	180×150	26							
SK601	４次Ⅱ	BX5	80×70	11							
SK602	４次Ⅱ	BY5	80×70	6							
SK603	４次Ⅱ	BY5	140×110	13							
SK604	４次Ⅱ	BY5	60×40	11							
SK605	４次Ⅱ	BY5	150×100	22							
SK606	４次Ⅱ	BY, CA5	290×160	20	土師器高杯片	山中Ⅱ式か					
SK607	４次Ⅱ	CA5	80×40	13							
SK608	４次Ⅱ	CB5	170×80	12							
SK609	４次Ⅱ	CC5	200×90	41							
SK610	４次Ⅱ	CC5～CE5	1050×200	25	土師器壺（76）・アカ取り状木製品（77）・土師器大型壺片（体部多数）・土師器壺片（頸部）・土師器台付甕（台部との接合部）	廻間Ⅰ式 島貫Ⅱ期					
SK611	４次Ⅱ	CC5	180×120	23							
欠番	－	－	－	－							
SK613	４次Ⅱ	CD5	110×70	14							
SK614	４次Ⅱ	CD5	70×50	19							
SK615	４次Ⅱ	CF4	100×30	19							
SK616	４次Ⅱ	CF, CG5	110×60	12							
SK617	４次Ⅰ	CB9	110×90	22			単層		○写真 上		
SK618	４次Ⅰ	BY11	140×90	34				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR4/1	オリーブ黒色粘土 5Y3/1
SK619	４次Ⅰ	BY12	150×130	37			単層　植物跡多い				
SK620	４次Ⅰ	CA10	170×160	35			単層　植物跡非常に多い				
SK621	４次Ⅰ	CA9, 10	200×120	39			単層	○写真	○写真 上		
SK622	４次Ⅰ	CA9	120×90	29			単層				
SK623	４次Ⅰ	CA8, 9	130×100	23			単層				
SK624	４次Ⅰ	CA8	110×70	21			単層				
SK625	４次Ⅰ	CA8	180×140	22			単層　植物跡				
SK626	４次Ⅰ	BY9, 10	110×80	23			単層				
SK627	４次Ⅰ	BY10	70×70	22			単層				
SK628	４次Ⅰ	BY10, 11	80×80	24			単層				
SK629	４次Ⅰ	BY9	200×170	17	木製槽（78）		単層		○ 上		
SK630	４次Ⅰ	BX12	110×100	22	土師器壺（79）・土師器手づくね片（口縁部？）・土師器ﾐﾆﾁｭｱ？台付甕片（台部）	廻間Ⅰ-1～3段階 島貫Ⅱ期	79はSK633と接合	×	○ 底～中層	－	灰色粘土 5Y4/1
SK631	４次Ⅰ	BX11, 12	170×150	30			単層				
SK632	４次Ⅰ	BX9, 10	130×110	18			単層　植物跡				
SK633	４次Ⅰ	BW10, 11 BX10, 11	200×190	25	土師器壺（79）	廻間Ⅰ-1～3段階 島貫Ⅱ期	79はSK630と接合				
SK634	４次Ⅰ	BW, BX11	190×170	29	土師器大型壺片（体部）・土師器甕片（体部、煤付着）	弥生末～古墳初頭か	土器は検出面から		○写真 ほぼ上		
SK635	４次Ⅰ	BW9, 10	180×170	28			単層		○写真 上		
SK636	４次Ⅰ	BV6	100×90	13			単層				
SK637	４次Ⅰ	BV7	120×90	27			単層				
SK638	４次Ⅰ	BS, BT6	190×110	34	弥生土器高杯（80）	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	石		○写真 ほぼ上		
SK639	４次Ⅰ	BS10	240×220	22	土師器くの字状口縁甕片	廻間Ⅰ式 島貫Ⅱ期					
SK640	４次Ⅰ	BR9	100×90	36							

第16表　遺構一覧表９

遺構番号	調査地区	グリッド	規模（cm）		出土遺物	時期	備考	土坑特記事項			
			長辺（径）×短辺（径）	深さ				オーバーハング	ブロック土	オーバーハング部の側壁土層	底土層（オーバーハングがない場合は壁～底土層）
SK641	4次Ⅰ	BR12, 13	100×90	26					○写真上		
SK642	4次Ⅰ	BQ12, 13	170×140	46	弥生土器高杯（81）	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期		○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR5/1	黒色粘土 5Y2/1
SK643	4次Ⅰ	BQ12	180×170	43			最下層にラミナ有	○	○ 中層一部	褐灰色粘土 10YR5/1	記載なし
SK644	4次Ⅰ	BQ12	150×100	21	土師器長胴甕（103）	平城Ⅳ～Ⅵ期 斎宮第Ⅰ期第３段階～第Ⅱ期第１段階	SK645より新				
SK645	4次Ⅰ	BQ12	80×80	24			SK644より古				
SK646	4次Ⅰ	BP, BQ11	100×100	17				○写真	○写真 底		
SK647	4次Ⅰ	BP, BQ10	160×140	36	土師器壺？片（体部）	弥生末～古墳初頭か		○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	記載なし
SK648	4次Ⅰ	BQ5, 6	200×140	23	土師器高杯？片	弥生末～古墳初頭か					
SK649	4次Ⅰ	BQ9	120×120	63	土師器大型壺片（体部）	弥生末～古墳初頭か			○写真 底		
SK650	4次Ⅰ	BQ9	120×90	30							
SK651	4次Ⅰ	BP, BQ9	90×60	28							
SK652	4次Ⅰ	BP9	140×120	42	弥生土器高杯（82）、土師器高杯（83）、弥生土器甕（84）、土師器甕（104）・（105）、土師器甕片（体部）	山中Ⅱ式（島貫Ⅰ期）から平城Ⅳ～Ⅴ期（斎宮第Ⅰ期第３～４段階）の間に大半が埋まる	出土土器は２時期に分かれる 第２層ラミナ有	○	×	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK653	4次Ⅰ	BP12	130×80	22					○写真 上		
SK654	4次Ⅰ	BP12	120×90	21				○	○ 底	褐灰色シルト 10YR5/1	黄灰色シルトと粘土 2.5Y6/1
SK655	4次Ⅰ	BO12 BP11, 12	250×130	34	土師器甕もしくは壺片（体部、煤付着）	弥生末～古墳初頭か	２回に分けて埋戻しか	×	○ 底と上	－	記載なし
SK656	4次Ⅰ	BP11	150×110	24							
SK657	4次Ⅰ	BP11	150×120	23				○	○ 底	褐灰色粘土 10YR4/1	記載なし
SK658	4次Ⅰ	BP9, 10	140×120	30			第１層ラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR6/1	記載なし
SK659	4次Ⅰ	BP9	190×120	20							
SK660	4次Ⅰ	BO9	90×90	11							
SK661	4次Ⅰ	BO10	110×100	43							
SK662	4次Ⅰ	BO10	110×100	9							
SK663	4次Ⅰ	BO11	240×110	37	土師器壺？片（体部）	弥生末～古墳初頭か	SK669より新	○	○ 底～中層	記載なし	記載なし
SK664	4次Ⅰ	BO11, 12	220×190	34	土師器壺（85）	廻間Ⅰ-0段階か 島貫Ⅱ期古相	土器はブロック土上面と自然堆積土内出土	○	○ 底～中層	褐灰色シルト 10YR5/1	記載なし
SK665	4次Ⅰ	BN11, 12 BO11, 12	90×90	35				○写真	○写真 底		
SK666	4次Ⅰ	BN, BO12	190×180	9					○写真 ほぼ上		
SK667	4次Ⅰ	BM, BN11	130×120	47				○	○ 底～中層	灰色粘土N6/0に黄褐色粘土2.5Y5/6混	灰色粘土 N4/0
SK668	4次Ⅰ	BN10, 11	170×90	42			第１層ラミナ有	×	○ 底	－	記載なし
SK669	4次Ⅰ	BO10	130×70	29			SK663より古				
SK670	4次Ⅰ	BM, BN6	120×100	29					○写真 底～中層		
SK671	4次Ⅰ	BL6	100×60	28				○写真			
SK672	4次Ⅰ	BL6	250×130	38							
SK673	4次Ⅰ	BK7	200×140	37			ブロック土直上層にラミナ有	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	黒褐色粘土2.5Y3/1と黄灰色粘土2.5Y5/1混合
SK674	4次Ⅰ	BK6	110×80	48					○写真 底～中層		
SK675	4次Ⅰ	BK7	190×110	35					○写真 底～中層		
SK676	4次Ⅰ	BJ7	100×90	30							
SK677	4次Ⅰ	BH, BI6	120×110	42							
SK678	4次Ⅰ	BH5, 6	110×100	53							
SK679	4次Ⅰ	BH12	170×80	27			SK432と繋がるか				
SK680	4次Ⅰ	BH, BI12	160×130	45				○	○ 底～中層	記載なし	記載なし
SK681	4次Ⅰ	BI11, 12	210×150	36	土師器甕2種片（体部）・土師器壺片（体部）	弥生末～古墳初頭か		○	○ 底～ほぼ上	黄灰色粘土 2.5Y4/1	灰色粘土 N5/1
SK682	4次Ⅰ	BJ12, 13	160×120	12	土師器甕片（体部）	弥生末～古墳初頭か					
SK683	4次Ⅰ	BJ12	140×90	20				○	○ 底～中層	黄灰色粘土 2.5Y6/1	灰色シルト N6/1
SK684	4次Ⅰ	BJ, BK12	110×100	22				○写真	○写真 底～中層		
SK685	4次Ⅰ	BH12, 13 BI12, 13	340×270	58				○	○ 底～中層	記載なし	灰色粘土 N5/0
SK686	4次Ⅰ	BI12	210×160	42				○	○ 上	SK685埋土	記載なし
SK687	4次Ⅰ	BK13	170×60	13			SK473と繋がるか				
SK688	4次Ⅰ	BK12	160×120	14	土師器壺？片（体部）	弥生末～古墳初頭か					
SK689	4次Ⅰ	BH, BI11	160×150	40	土師器甕もしくは壺片（体部）	弥生末～古墳初頭か			○写真 ほぼ上		
SK690	4次Ⅰ	BI12	110×90	38			ラミナ有	○写真	×写真		
SK691	4次Ⅰ	BI12	100×50	6							
SK692	4次Ⅰ	BI10, 11 BJ10, 11	290×180	49			ブロック土層の上ラミナ有	○	○ 底～中層	灰色粘土 5Y5/1	記載なし
SK693	4次Ⅰ	BJ11	150×140	27				×	○ 底	－	黄灰色シルト 2.5Y5/1
SK694	4次Ⅰ	BJ10, 11	150×130	41				×	○ 底	－	記載なし
SK695	4次Ⅰ	BK11	70×50	5							
SK696	4次Ⅰ	BK11	80×80	12							

第17表　遺構一覧表10

遺構番号	調査地区	グリッド	規模（cm）		出土遺物	時期	備考	土坑特記事項			
			長辺（径）×短辺（径）	深さ				オーバーハング	ブロック土	オーバーハング部の側壁土層	底土層（オーバーハングがない場合は壁～底土層）
SK697	4次Ⅰ	BK10, 11	100×80	17					○写真 ほぼ上		
SK698	4次Ⅰ	BK10, 11	100×60	28					○写真 上		
SK699	4次Ⅰ	BH, BI9	320×130	43					○写真 上		
SK700	4次Ⅰ	BH, BI10	160×140	35			最下層ブロック土にラミナ有	○	○ 底～中層	褐灰色粘土10YR4/1に黄褐色土10YR5/6混	黄灰色粘土 2.5Y5/1
SK701	4次Ⅰ	BI10	180×110	44	土師器甕（86）	廻間Ⅰ-0段階か 島貫Ⅱ期古相		○	○ 底～中層	記載なし	記載なし
SK702	4次Ⅰ	BI9, 10	280×160	33	土師器器種不明片（体部？）・土師器高杯片（杯部）	廻間Ⅰ式か 島貫Ⅱ期					
SK703	4次Ⅰ	BI10	150×100	30							
SK704	4次Ⅰ	BI, BJ10	130×90	24					○写真 底～中層		
SK705	4次Ⅰ	BJ10	100×80	25				○	○ 底	黄灰色シルト 2.5Y5/1	黄灰色シルト 2.5Y5/1
SK706	4次Ⅰ	BK10	200×80	33	土師器壺（87）	廻間Ⅰ-0段階か 島貫Ⅱ期古相	土器は底面直上出土	○	○ 上	灰色粘土 5Y5/1	黄灰色シルト 2.5Y5/1
SK707	4次Ⅰ	BH8, 9 BI8, 9	200×140	69			SK699に切られる	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	記載なし
SK708	4次Ⅰ	BI8, 9	220×210	53			SK728と切り合い　SK728より古	○	○ 底	褐灰色粘土 10YR5/1	褐灰色粘土 10YR5/1
SK709	4次Ⅰ	BI, BJ9	110×100	43				○写真	○写真 底		
SK710	4次Ⅰ	BJ9	90×90	38			底面直上にラミナ有　土坑掘削後時間を空けて埋戻しか	○	○ 底～中層	褐灰色粘土 10YR4/1	灰色粘土N6/0に黄褐色粘土 2.5Y5/6混
SK711	4次Ⅰ	BJ8, 9	70×50	12					○写真 底～中層		
SK712	4次Ⅰ	BJ9, 10 BK9, 10	－	－			下層にSK732～735あり		○写真 底		
SK713	4次Ⅰ	BI7, 8	330×180	45				○	○ 底～中層	黄灰色粘土か？ 2.5Y4/1	黄灰色粘土 2.5Y4/1
欠番	－	－	－	－							
SK715	4次Ⅰ	BI, BJ8	250×150	35					○写真 底～ほぼ上		
SK716	4次Ⅰ	BJ8	120×60	30					○写真 底		
SK717	4次Ⅰ	BJ, BK8	210×150	34	土師器大型品片（体部、内外に煤付着）	～古墳前期	最下層ブロック土直上層にラミナ有	○	○ 底	黄灰色粘土 2.5Y5/1	黄灰色粘土 2.5Y5/1
SK718	4次Ⅰ	BI7	140×120	19					○写真 底		
SK719	4次Ⅰ	BK10	100×80	39							
SK720	4次Ⅰ	BK9	110×100	40	弥生土器甕（88）	八王子古宮Ⅰ式か	土器は最下層ブロック土から出土	○	○ 底～中層	黄灰色粘土 2.5Y5/1	灰色粘土 N4/0
SK721	4次Ⅰ	BK9	150×110	30				○	○ 底	黄灰色土 2.5Y4/1	記載なし
SK722	4次Ⅰ	BK8, 9 BL8, 9	230×190	43	弥生土器（土師器）壺（89）	山中Ⅱ期～廻間Ⅰ-0段階か 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相		○	○ 底	黄灰色粘土 2.5Y5/1～4/1	黄灰色粘土 2.5Y4/1
SK723	4次Ⅰ	BL11	80×70	13					○写真 上		
SK724	4次Ⅰ	BL10	130×90	26				○	○ 底	黄灰色粘土 2.5Y5/1	記載なし
SK725	4次Ⅰ	BL9	120×90	34			底面直上にラミナ有　土坑掘削後時間を空けて埋戻しか	○	○ 底～中層	褐灰色土 10YR5/1	黄灰色粘土 2.5Y4/1
SK726	4次Ⅰ	BL, BM12	120×90	28					○写真 底～ほぼ上		
SK727	4次Ⅰ	BL, BM10	250×150	43	土師器甕？片（体部）	～古墳前期	最下層ブロック土にラミナ有	○	○ 底～中層	褐灰色土 10YR5/1	黄灰色粘土 2.5Y4/1
SK728	4次Ⅰ	BI, BJ9	160×130	45	土師器壺？片（体部）	～古墳前期	SK708を切る　ブロック土直上層と第1層にラミナ有	○	○ 底	黄灰色粘土 2.5Y5/1	記載なし
SK729	4次Ⅰ	BM11, 12	260×150	23					○写真 上		
SK730	4次Ⅰ	BL8	300×210	42	土師器甕？片（体部）	～古墳前期	ブロック土直上層にブロック+ラミナ有	○	○ 底	黄灰色粘土 2.5Y4/1	褐灰色土10YR4/1に黒褐色土10YR3/1及び褐灰色土10YR4/1がブロック状に混
SK731	4次Ⅰ	BL8	120×90	25				○	○ 底～中層	黄灰色粘土 2.5Y4/1	褐灰色土 10YR4/1
SK732	4次Ⅰ	BJ9, 10	180×100	49			SK712の下層に土坑4つ分かれる				
SK733	4次Ⅰ	BJ, BK9	150×150	48	土師器器種不明片	～古墳	SK712の下層に土坑4つ分かれる				
SK734	4次Ⅰ	BK9	140×120	34			SK712の下層に土坑4つ分かれる				
SK735	4次Ⅰ	BK9, 10	200×140	36			SK712の下層に土坑4つ分かれる				
SK736	4次Ⅰ	BL6, 7	130×80	43	土師器壺片（体部）	弥生末～古墳初頭か			○写真 底		
SK737	4次Ⅰ	BM12	100×60	28					○写真 底		

【凡例】

・「規模」は、遺構を十字に切った長辺と短辺で計測。土層断面図がある場合は極力、その線を利用して計測した。

・「時期」は、土器が出土する場合でその出土状況から土坑の掘削時期を判断できる場合、土坑の掘削時期を記入するように努めた。しかし、多くは出土状況が不明であるので土器の年代となっている。

・オーバーハングの有無は、平面図等で明示されているものはそれにより判断した。それ以外のものは、土層図面もしくは土層写真において、1か所でもオーバーハングが確認できた場合に「○」とした(写真で確認した場合は「○写真」とした)。別遺構が重複もしくは調査区外に広がる場合、その部分がオーバーハングとなる可能性があるので、それについては「－」と記入した。「×」は、土層図面もしくは写真においてオーバーハングが確認できない場合に記入したが、これは図面として記録していない部分にオーバーハングが存在する可能性を有しており、完全にオーバーハングがないとは言えないものである。また、図面・写真の記録がなく、その有無を確認できない場合は空欄としている。

・ブロック土の有無は、土層図面もしくは写真で判断した。(写真で確認した場合「○写真」とした)。その場合、そのブロック土がほぼ調査検出面まで見られる場合は「○上」、底部のみで上まで達していない場合は「○底」、土坑の中位までブロック土が見られる場合は「○中層」と表現した。空欄は土層の状況が確認できないものである。

Ⅴ　調査の成果－出土遺物－

相川西方遺跡の出土遺物は、土坑から出土する弥生時代後期～古墳時代初頭の土器等が主体となる。しかし重機による掘削時、あるいは包含層から土師器長胴甕、平安～鎌倉時代にかけての陶器椀・皿（いわゆる山茶椀・山皿）、鎌倉～室町時代にかけての土師器鍋片などが出土している。その中で、平安時代以降の遺物は表土直下の土層から出土しており、当該時期の遺構が上面にあった可能性も考えられるが、今回の調査では確認できていない。もしくは、調査地周辺に当該時期の遺跡の存在が考えられる。

遺構からの出土、ここでは土坑に限られるが、土坑１基から土器１点が出土するという例が大半で、複数個体が出土する例はわずかである。また、破片のみの出土は少なく、ある程度まで図化復元できる状態での出土が多い。全体としてコンテナケース42箱分が出土した。

遺物図は、地区毎・遺構毎にレイアウトしている。以下、大まかに古墳時代初頭を区切りとして、それ以前と以後で記述するが、詳細は遺物観察表（第18～20表）を参照いただきたい。

各土器の所属時期は、その特徴から判断しているが、壺など底部のみが出土する場合、土器の特徴が大変掴みにくい。前述のように、大半が遺構から単独の出土であり、共伴する土器の組み合わせで判断することが不可能となっている。このような状況での判断であることをまずお断りしておきたい。

１　縄文時代、弥生時代後期～古墳時代初頭

（１）第２次調査区出土遺物（第90～92図）

１はＳＫ１から出土した壺である。図化した部分までほぼ全周して破片が存在し、上部は粘土接合部で破損している。頸部から口縁部にかけての破片は見られないことから、上部を欠いた状態で土坑に持ち込まれたものと思われる。

２は尖り気味の底部に台が取り付く台付甕である。台部は欠損している。体部の最大部はやや低く、体部中央にくる。その形状から山中Ⅱ式に遡る可能性があるが、廻間Ⅰ式併行期としてよいか。外面には煤が付着し、内面は黒変する。破片の状況などから故意の破損はないようである。

３の壺は、図化した部分よりもう少し立ち上がる体部の破片が存在するが、歪みが著しく図上復元できなかった。底部は体部下半より厚みを増し底面は平坦となる。体部最大部径は、おそらく体部中央より下になるものと思われる。このような特徴から、山中Ⅰ式併行期のものと判断した。

４は壺底部である。破片はほぼ図化した部分のみ存在する。体部の形状から、やや小型の廻間Ⅰ式併行期の壺と考える。

５は壺である。底部はほぼ完存するが、体部は図化した部分の縦半分が出土した。体部の形状から廻間Ⅰ式併行期に属すると考えられる。全体に風化が著しく調整が不明瞭である。

６の高杯は、全体に風化が著しく調整が不明瞭であるが、杯部がやや椀状を呈する点や、脚部がやや広がる点などから廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期古相併行期のものと思われる。類例としては、松阪市草山遺跡[①]ＳＸ114出土の高杯がある。脚部円形透かしは図化した部分では１か所しか見られず、もう少し下方に開くものと思われる。残存状況は、杯部は図化した部分の縦約半分、脚部はほぼ完存している。

７の壺は、ごく細片であり形状からその所属時期をうかがうことは困難であるが、頸部から体部への傾斜がやや緩やかでふくらみをあまり持たないことや、口縁部の立ち上がりがやや直立することなどから廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期古相併行期と思われる。

８は加飾の壺体部片である。５条の櫛描直線文が図化した部分で２単位、４～５条の櫛描波状文が２単位施される。下の波状文下の直線文は、接合しない破片に５条であり、その下半はナデ・オサエ調整が施される。時期は、山中Ⅰ式～廻間Ⅰ式併行期の範疇に収まるものと思われる。

９はいわゆるタタキ甕である。体部外面最大部径付近に煤が付着する。平行タタキは頸部から体部最大部径付近まで施し、それより下半には見られない。時期は山中Ⅱ式～廻間Ⅰ式、島貫Ⅰ～Ⅱ期古相併行

期と思われる。

10は甕である。残存は図化した部分のほぼ縦半分である。体部全体にハケを施し、頸部付近から櫛先列点文２段、２条の櫛描波状文、少しあいて４条の櫛描波状文、貼付突帯に刻みを施す。煤が口縁部と、体部上部の波状文から底部までのともに外面に付着する。形状・調整の特徴や、自然科学分析による胎土分析から搬入品と考えられる。近江湖南地域が故地であろうか。

12は台付甕である。台部端部と口縁端部が若干欠損するがほぼ全容が復元できる。口縁部と、体部の櫛描直線文直下から脚部までの外面に煤が付着するが、特に体部最大部付近に厚く付着する。残存は出土時から縦半分の状態であった。廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期古相の段階に属する。

13の籠製品は樹種同定の結果、縦材横材ともタケであることが判明している。編み方は底部・側面で４通り確認され、口縁部は残存していない、底部は網代編みで、２本を１単位とした２本超２本潜１本送[②]の形態である。側面下段はとびござ目編みで、２本超２本潜１本送、側面中段はござ目編みで、１本超１本潜１本送、側面上段は縦材を半分に裂いたうえでもじり編みをしている。遺物の観察からはもじっている横材が１本なのか複数本であるのかは確認できない。また、もじりやすいようにヨコ添えしている可能性も考えられる[③]。

14は手焙形土器である。接合しないが覆部の破片がある。口縁部は残存しないが、頸部の状況から受口状を呈すると思われる。内面に煤が付着することから、通有の手焙形土器と同様、内面で火を焚いたことがわかる。底部外面は擦れのためか平滑であり、置いた状況での比較的長期の使用も考えられる。

16はタタキ甕である。体部全面に平行タタキを施す。体部の最大部径が中央付近にくる砲弾形で、口径よりやや大きい。内面は丁寧なナデを施す。口縁部から底部付近まで煤が付着し、内面も底部付近に煤が付着することから、煮炊具として使用していたことがわかる。図化した部分の縦半分が残存する。

17は籠製品である。口縁端部は残存せず、体部から底部がある。編み手法は４種類が取られ、底部は網代編みで２本を１単位とした２本超２本潜１本送り、側面下段はとびござ目編みで、２本超２本潜１本送、側面中段はござ目編みで、１本超１本潜１本送の形態である。側面上段は縦材を半分に裂いたうえでもじり編みをしている。13とほぼ同じ手法が取られる。一部、直角に曲がる隅が確認でき、方形の籠製品と考えられる。素材はタケである。

18は不明木製品である。片面に工具によるハツリ痕が見られ、籠製品17と同じ土坑からの出土であることから、籠製品の材料となるヘギ材の可能性が指摘された[④]。18はウツギ属、17はタケ材であリ、異素材で籠製品を作ったのであろうか。

19も18と類似するが、19は両面に工具によるハツリが施される。樹種同定は実施しておらず材種は不明である。図の下面木口に刃物による加工がある。

21は高杯杯部である。杯部は浅めで、有稜高杯の外反形態の一種と考えられるが、屈曲部に稜を持ちながらも脚部に向けてやや内彎する。これらの特徴から、杯部が外反から直線的に伸びる形態となる過渡期、山中Ⅱ～廻間Ⅰ式、島貫Ⅰ～Ⅱ期古相併行期のものと考える。

23はチャート製の有舌尖頭器である。刃部の一部を欠損する。茎部は未発達で、返しが不明瞭である。

（２）第３次調査区出土遺物（第93～95図）

27は高杯杯部である[⑤]。内外面に細いミガキを施す。杯部下面が脚部の欠損により剥離している。基本的な形状は椀形であろうかと思うが、体部より口縁部にかけてほぼ直立し、口縁端部に向かってやや開く。松阪市村竹コノ遺跡における石井氏の分類「高杯Ｂ２類」もしくは「高杯Ｃ２類」[⑥]に類似する。類例が少ないが、山中Ⅱ～廻間Ⅰ式、島貫Ⅰ～Ⅱ期古相併行期に収まるか。

28は壺である。体部最大径がかなり下に位置し、下膨れの形状をなす。形状は、弥生時代中期以前の細頸壺のようであるが、底部から体部への立ち上がりが横方向気味でなされることなどから若干異なる。八王子古宮Ⅰ式の範疇であろうか。

30は高杯である。形状から山中Ⅰ式併行期のものであろう。この高杯は、約13m離れたＳＫ370とＳＫ423から出土した破片が接合したものであり、両土坑の掘削あるいは埋没時期の近接を示す資料である。

32は高杯脚部である。全体に摩耗が著しく調整不

明瞭である。杯部との接合部分には上面からの粘土の充填が見られる。透かしは残存部では見られない。全体の形状から、山中Ⅰ～Ⅱ式の範疇に収まるであろう。

33は受口状口縁甕である。口縁部のみを図化したが、接合しない体部細片があり、外面にタテハケのみが確認できる。外面には煤が付着する。廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期古相併行期と思われる。

34はサヌカイト剥片で、いわゆるリタッチドフレークである。刃部に若干の欠損が見られる。

36は鉢である。口縁部は低く、やや受口状を呈する。体部最大部は中央より上にくる。底部は外面中央がややへこむ。全体に摩耗が著しく調整不明瞭である。その形状は類例に乏しいが、手焙形土器の鉢部と比較すると⑦、島貫Ⅱ期併行期の範疇に収まるか。ちなみに、出土する破片が少ないこともあり、他に手焙形土器を思わせるような破片はなく、内面に煤が付着する等の特徴も見られない。

37は高杯杯部である。屈曲部からの立ち上がりはなだらかで、やや丸みをもった椀状を呈する。しかし、島貫Ⅱ期新相段階のものに比べれば浅い。端部の面は内側につくる。調整不明瞭であるが内面にわずかに縦方向のミガキが確認できる。全体の形状から廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期古相併行期のものであろう。

38は甕である。底部が欠損するが台が付くであろうと思われる。体部は上半が縦方向のハケ、下半は平行タタキを施す⑧。廻間Ⅰ式併行期に属するか。

39は高杯杯部片である。屈曲部から口縁端部に向けて強く外反し、端部に明確な面は持たない。屈曲部内面に粘土を貼り付け、補強している状況が確認できる。そしてその粘土下に杯部に施したハケが残存しており、風化のため調整不明であるが、一部にハケが施されていたことがわかる。形状から山中Ⅱ式、島貫Ⅰ期併行期のものと思われる。

41・42はともにＳＫ411出土である。42の高杯は、杯部下半は脚部よりやや直線気味に伸び、口縁部の立ち上がりは直線気味で浅い。全体的に摩耗が著しく調整は不明であるが、脚部との接合部ではがれた個所を見ると脚部側には接合のためかハケが施されたようである。脚部内面天井部には粘土が充填されている。脚部と杯部の接合には外面からも粘土による補強がなされている。山中Ⅰ式併行期のものであろう。

43は椀形高杯である。杯部は明確な屈曲を持たず緩やかに立ち上がり、口縁端部は内側に面を作る。脚部はハの字に開く形状で、ミガキを施した後５条の櫛描直線文を少なくとも２単位持つ。しかし、その下部にも２条の直線文が確認でき、もう１単位の直線文はあったようである。透かしは残存部には確認できない。その形状から、廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期古相併行期に属するものと思われる。なお、杯部底外面、脚部接合部近くに煤が付着しており（写真図版34左下）、何らかの火を受ける作業に用いた可能性が考えられる。

45～47はＳＫ458出土遺物である。45は土坑最下層から出土している受口状口縁甕である。肩部～口縁部までしか残存していないが、肩部には櫛描直線文12条が見られ、口縁外面部には櫛先列点文がめぐる。口縁部形態から島貫Ⅰ期段階のものと思われる。46は口縁部を欠いたタタキ甕である。体部外面全体に平行タタキを施し、内面はオサエ・ナデにより整える。体部下半に粘土積み上げ静止痕が明瞭である。体部最大部やや下付近に煤が付着する。時期は、島貫Ⅰ期段階であろう。47は壺底部である。細片であり風化が著しく調整等不明瞭であるが、底部から体部への立ち上がりが段を持たずなめらかであり、やや上方に立ち上がることなどから、45・46と同様島貫Ⅰ期の範疇に収まるものと思われる。

48は高杯脚部である。脚部端部はややハの字状に開き、端部を丸く収める。外面は体部ともハケ後ミガキを施しているようで、杯部内面にもミガキが見られる。松阪市村竹コノ遺跡に類例があり（報1436）、ワイングラス形の杯部を持つ高杯に含まれるか。時期は山中Ⅱ～島貫Ⅱ期併行期と思われる。

49は椀形高杯杯部である。杯部に孔径3.0～4.0㎜程の焼成前穿孔が４か所見られる。外面に黒斑が、杯部外面の脚部に近い部分と、内面中位から口縁部にかけてベンガラによる赤彩が見られる。時期は、弥生時代中期末～後期前半で、当遺跡出土の弥生時代の遺物の中では古手のものである。

50は受口状口縁甕の体部片である。外面と頸部内面に煤が厚く付着しており、煮炊具として使用した

のだろう。廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期古相のものか。

51はくの字状口縁甕である。体部外面は全体に煤が厚く付着しているため一部調整が確認できないが、全面に縦方向のハケを施しているものと思われる。内面下半は炭化により黒変している。体部下半、底部近くで粘土積み上げ静止痕が見られる。廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期古相段階のものであろう。

52は甕底部である。外面には煤が厚く付着し、内面は炭化により黒変する。そのため調整は不明瞭であるが、外面は縦方向のハケをしているものと思われる。廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期古相段階のものであろう。

54・55はＳＫ502から出土している。55は壺底部である。内面が黒変し、外面には黒斑が見られる。形状や共伴する高杯（54）の年代等から山中Ⅱ～廻間Ⅰ式、島貫Ⅰ～Ⅱ期古相段階のものと思われる。

56・57はＳＫ508から出土している。56は高杯杯部である。杯部下半は脚部から丸みをもって広がり、わずかに稜を作り口縁端部へとなだらかに広がる。風化が著しく調整は不明瞭であるが、外面はハケ後にミガキを、内面もミガキの痕跡が見られる。形状から、山中Ⅱ式、島貫Ⅰ期段階のものと思われる。57は台付甕台部である。外面は煤が付着し、内面は炭化により黒変する。接合部は外側に粘土を貼り補強しているが、その粘土下にも体部から繋がるハケが見られる。時期は、山中Ⅱ～廻間Ⅰ式、島貫Ⅰ～Ⅱ期古相のものと思われる。

58は容器状木製品である。刳り物で、槽と思われるが長辺は約２分の１、短辺も約２分の１が欠損しており全体の法量は不明である。木取りは横木取り割材削り出しである。材はクスノキである。

60は壺である。球形の体部からくの字に立ち上がる口縁を持ち、端部は外側に面を作る。口縁部は風化が著しく調整が不明であるが、内面はわずかにヨコハケが見られる。全体の形状は山中Ⅱ式に遡ってもよいように思えるが、加飾の状況等には比較的新しい要素が見られる。このことから、山中Ⅱ～廻間Ⅰ式、島貫Ⅰ～Ⅱ期古相段階の範疇と考えたい。

62～65はＳＫ520から出土している。62・63の高杯はいずれも杯部のみで、脚部は破片も見られない。時期はいずれも山中Ⅱ式、島貫Ⅰ期併行期であろう。胎土はほぼ似るが、63の方が雲母の粒形が大きく量が多い。64は弥生土器甕の体部である。外側は煤が厚く付着する。廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期併行期のものと思われる。65は、体部付近は接合しないがほぼ全容が復元できる広口壺である。口縁部は頸部からやや開きながら立ち上がり、そして端部で大きく開き、外側に直立した面を作る。頸部に櫛描直線文が見られるが、体部には加飾は見られない。時期は廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期新相段階であろうか。

66・67はＳＫ531から出土している。66は壺体部である。口縁部・底部とも出土していないため時期は判断できないが、廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期古相のものであろうか。67は台付壺である。体部の擬口縁より上は欠損する。類例は少ないが、体部の形状・調整が山中Ⅱ式頃の長頸壺体部と類似することから、同様の時期のものと思われる。

68は、片岩製の打欠き石錘である。両側面に打ち欠きが見られる。土坑のブロック土上から出土しており、混入の可能性もある。時期は縄文時代早期以降と幅広い時期でしか言うことができない。

69は壺である。口縁は頸部より直立する。口縁端部が欠損しているため時期確定が難しいが、体部最大部が下半にくる下膨れ形状を呈することから、当遺跡の中では古手、八王子古宮Ⅰ式と考えられる。

70は高杯杯部である。杯部下半が残存し、屈曲部は明確な稜が作られるが口縁部は不明である。杯部下半の形状がやや直線気味に広がることから、山中Ⅰ式のものと思われる。

74は壺底部である。全体に風化が著しく調整が不明瞭であるが、外面はハケ後ミガキを施し、内面はハケを施す。底部は小さくそこから斜め上方に開き緩やかに膨らみをもって立ち上がる形状から、比較的古い時期、山中Ⅱ式の範疇に入るものと思われる。

75は第３次調査区の検出時に出土したサヌカイト製削器である。下辺は基本的に片面のみ打ち欠きを行う。縄文時代草創期のものである。

（３）第４次調査区出土遺物（第96～97図）

76・77はＳＫ610出土遺物である。76は壺体部で、上部は粘土接合部で欠損し、ここに口縁部が接合するものと思われる。その形状等から、内彎口縁壺、いわゆる瓢壺と考えられる。77は木製漁撈具のアカ取りと思われる。ヒノキ科アスナロ属の材を半截し

削り出して作る。把手部には直径5.0㎜の孔を開ける。全体に小型刃物による加工痕が明瞭である。

78は槽状木製品である。刳り物の槽か。本体の側面立ち上がり部と端部がわずかに残る。端部上面はやや平坦に作る。内面の加工痕が顕著である。

80～82は高杯杯部である。80は上半部外面に一部煤が付着する。いずれも脚部は破片も見られず、時期は山中Ⅱ式、島貫Ⅰ期併行期と思われる。

83は高杯杯部である。屈曲部からの上半部が残存する。82と同じ土坑出土であるが、時期は新しく廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期古相のものである。84は甕である。口縁端面外縁に刻みを持つ。肩部には櫛先列点文（一部押引き）をめぐらし、全体はハケにより調整する。弥生時代中期のくの字状口縁甕との関連が考えられるが、口縁部の屈曲が緩やかであることなどから、納所遺跡におけるくの字状口縁壺Ｂ・櫛描文系[9]とはやや異なる印象を受ける。全体の形状から、弥生時代後期、八王子古宮Ⅰ式のくの字状口縁甕が近いのではないだろうか。88と接合しないが同一個体の可能性がある。

85は大型壺の底部である。廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期古相段階か。

87は壺体部下半である。平底部からやや斜め上方に立ち上がり、算盤玉状の体部を持つ。廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期古相段階のものか。

88はくの字状口縁甕である。体部外面に煤が付着し、煮炊具として使用されたと考えられる。84と同一個体の可能性が高いが接合個所はない。

89は壺である。頸部から上を欠損する。外面は横方向のミガキ、内面は下半がヨコハケ、上半はオサエで調整する。底部から体部へと直立気味に立ち上がり、すぐに球状の体部を形成するように膨らみをもつ形状などから、山中Ⅱ式～廻間Ⅰ式、島貫Ⅰ～Ⅱ期古相併行期のものと思われる。

90～100は第４次調査区包含層他出土遺物である。90は縄文土器細片で、晩期の壺形土器と思われる。91は受口状口縁甕である。外面に煤が付着する。胎土は在地のものとさほど変わりはないが、近江湖南型平底甕に類似する形状を持つことから、八王子古宮Ⅰ式併行期のものと思われる。92はくの字状口縁甕のものと思われる台部である。台部は厚みを持ち、さほど角度を持たずに端部へと至る。体部は直線気味に開く。廻間Ⅰ式段階のものであろうか。95・96は高杯脚部である。95は直線気味に端部へと伸び、下半でハの字に開く形状である。杯部との接合部直下から櫛描直線文５条がおそらく３か所ある。透かしは、残存最下部でその可能性がある端面があるが、摩耗しており割れとの区別がつかない。上部に孔が貫く。山中Ⅱ～廻間Ⅰ式、島貫Ⅰ～Ⅱ期古相のものと思われる。96は二段にわたって円形透かしを施す。上段は５方、下段は４方である。全体に摩耗が著しく調整は不明である。類例に六大Ｂ遺跡ＳＫ３出土遺物（報302）がある。類例から、口縁部が杯屈曲部から直立気味に立ち上がる形状の高杯であり、八王子古宮Ⅱ式段階のものと思われる。98は全体に摩耗が著しく調整が不明瞭で、口縁部も屈曲部が緩くなっているが、受口状口縁壺と思われる。外面には煤が付着する。その形状から、廻間Ⅰ式、島貫Ⅱ期新相併行期のものであろう。

99は有舌尖頭器である。材は下呂石で縄文草創期のものと思われる。100はサヌカイト製削器である。これも縄文草創期のものと思われる。表面の一部に自然面を残す。

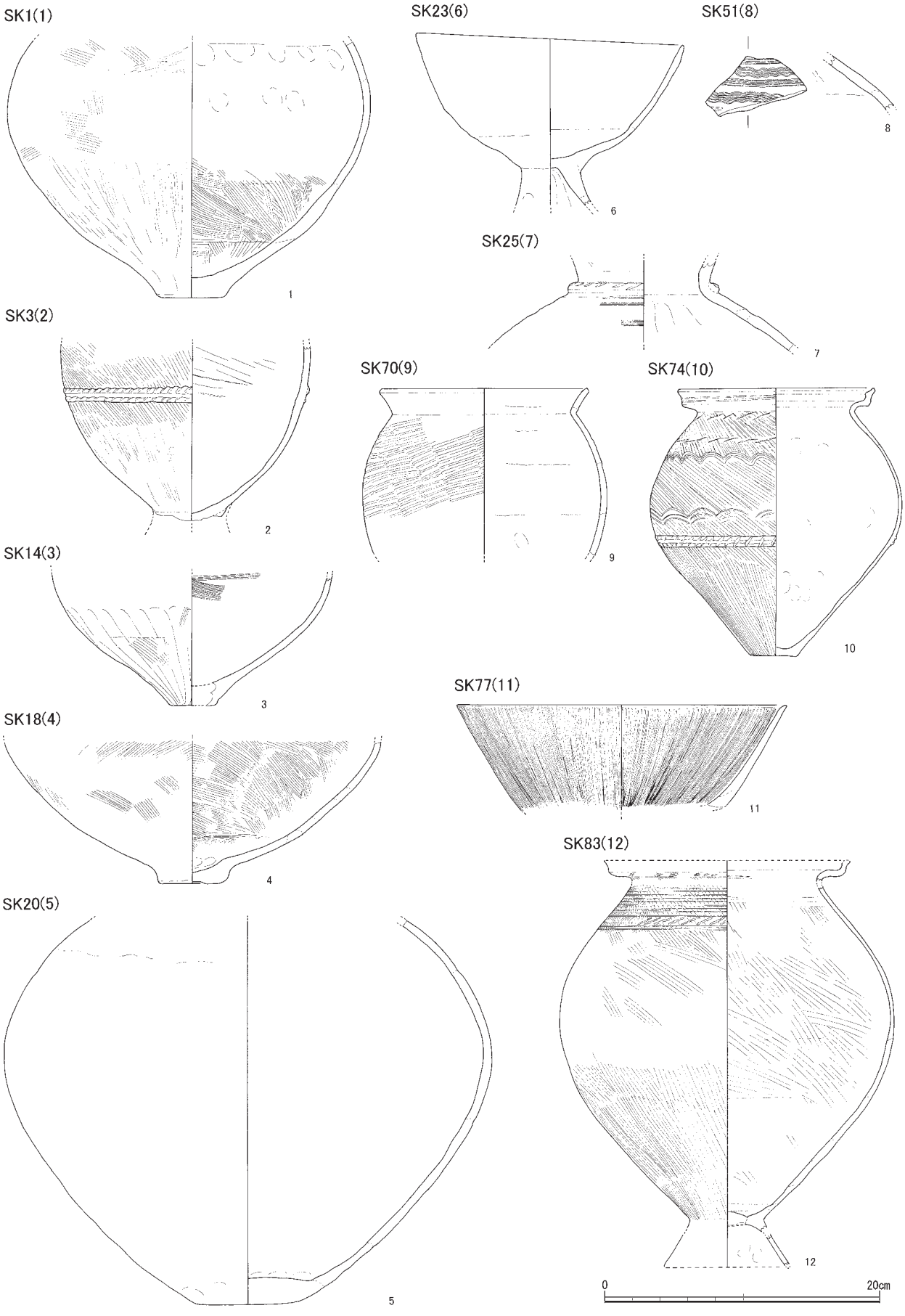
2　古墳時代後期以降（第98～99図）

この時期の遺物は少ないことから、全調査区を一括する。主体は８世紀代の土師器長胴甕であり、遺構出土もその時期に限られる。包含層遺物にはその他に古墳時代後期、平安時代後半のものがある。

（１）遺構出土遺物

102はＳＫ513出土の長胴甕である。体部下半から底部が出土した。内外面ともハケを施すが、ハケの単位が異なり使用した原体は異なる。底部表面が剥離しており、また剥離面には黒斑が見られる。これは焼成前に人為的に打ち欠いたことによると思わる。設置の利便性を意図したものであろうか。底部のみのため時期は絞りがたいが、平城Ⅴ～Ⅵ期、斎宮第Ⅰ期第４段階～第Ⅱ期第１段階であろうか。

103は平底状の底部を持つ長胴甕である。体部上半～口縁部を欠く。体部はさほど膨らみを持たず上半へと繋がる。体部から底部へは明確な屈曲を持ち、底部中央付近がやや丸みを帯びる。外面に煤の付着

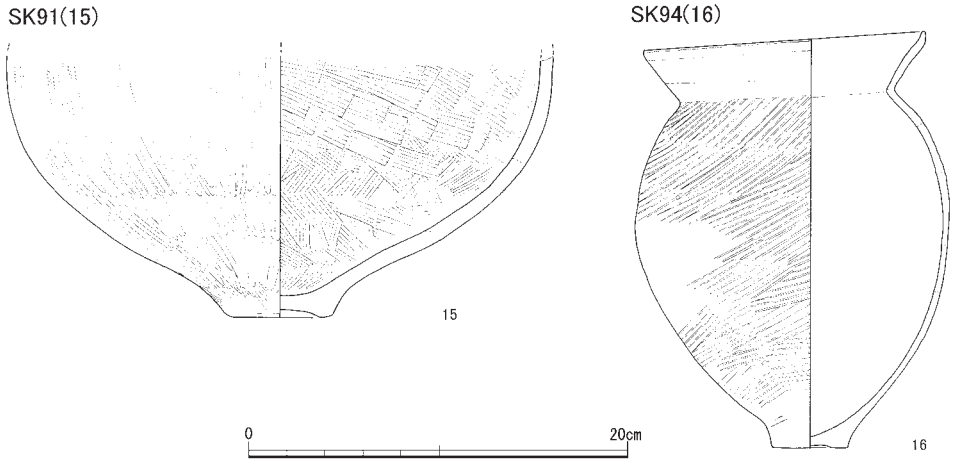


第90図　第２次調査区出土遺物実測図１（１：４）

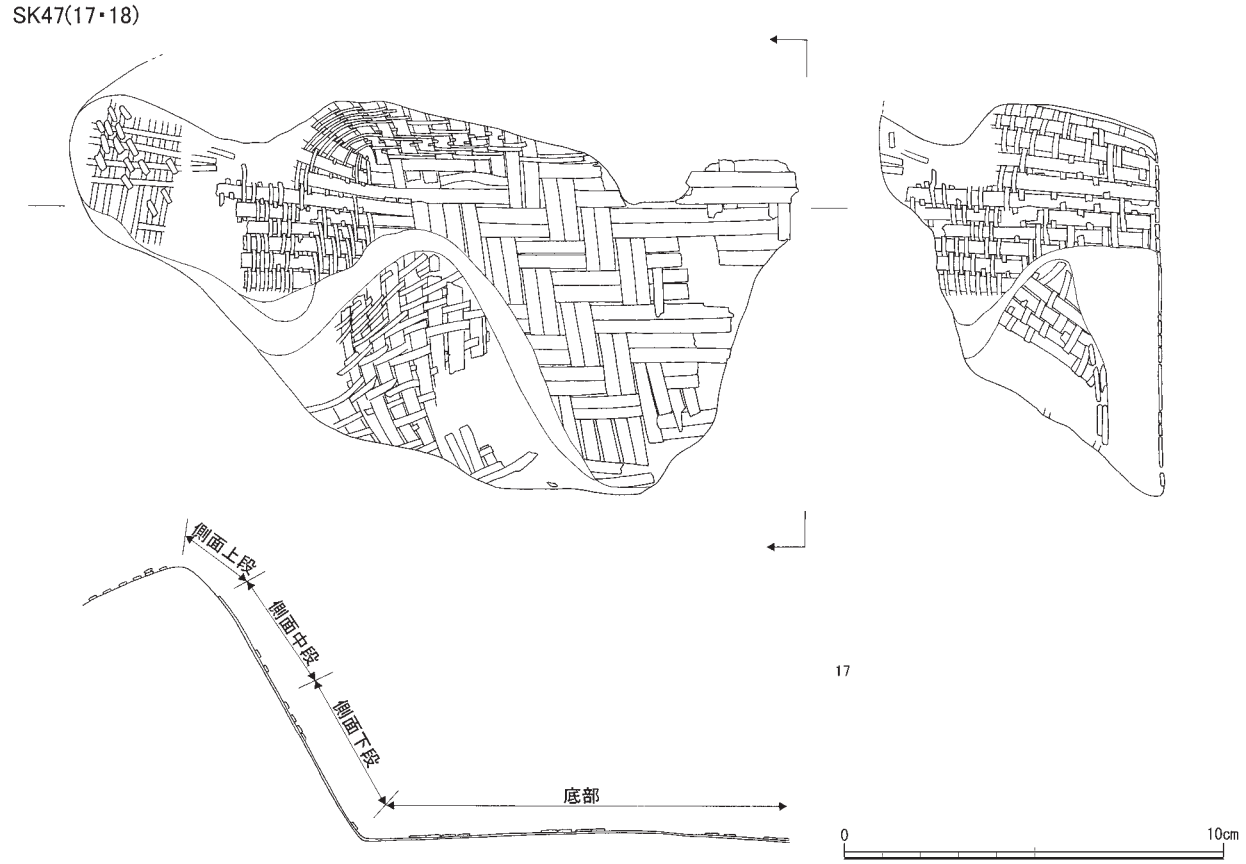
SK28(13・14)

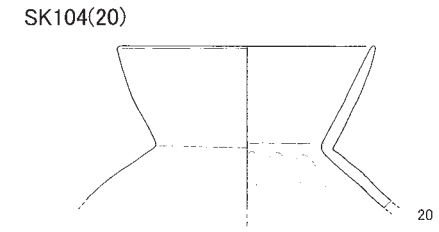
SK91(15)

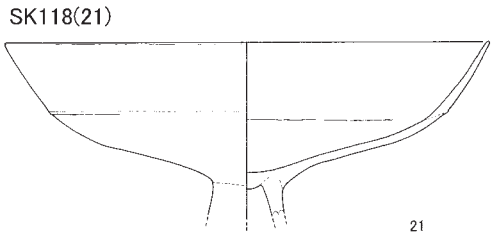
SK94(16)

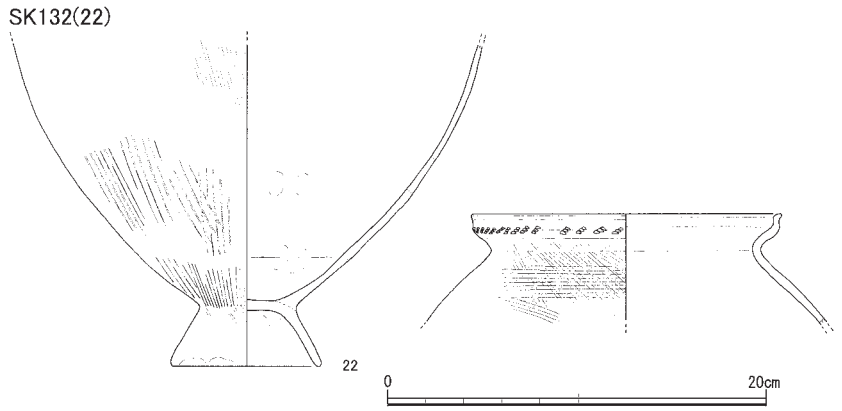


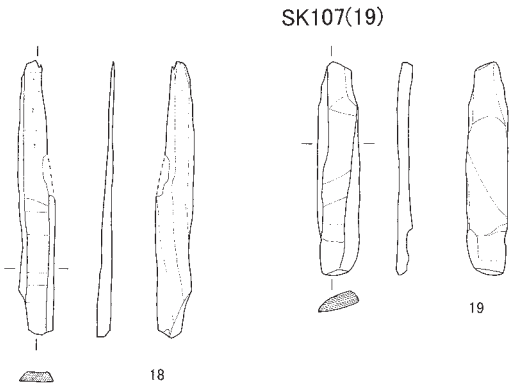
第91図　第２次調査区出土遺物実測図２（１：４、13は１：２）

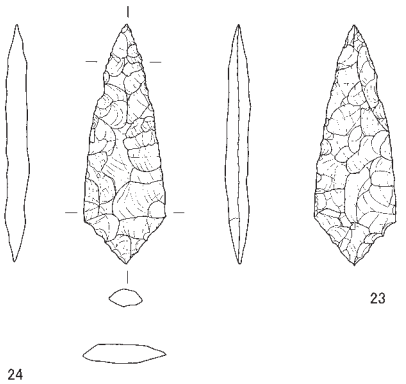




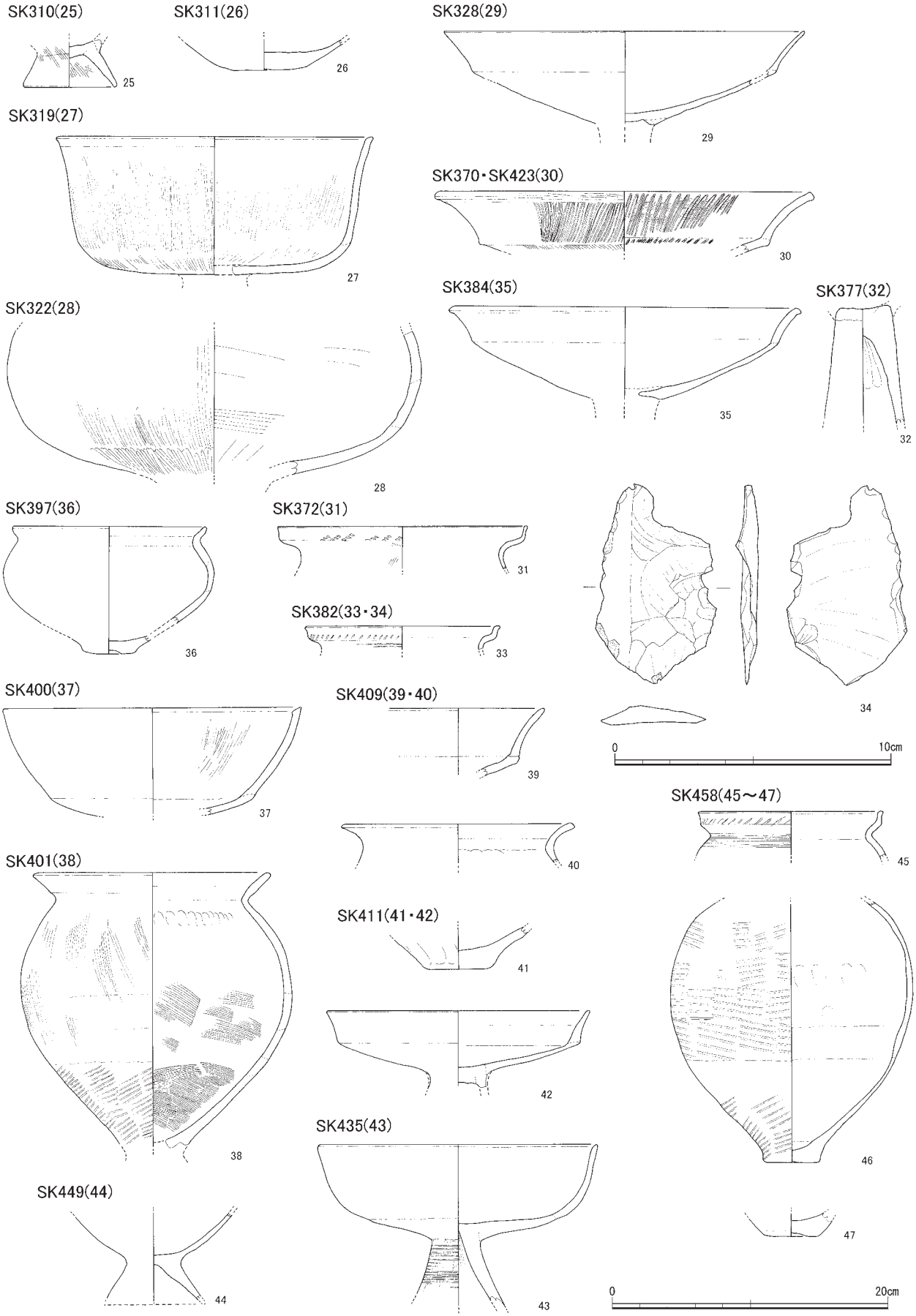




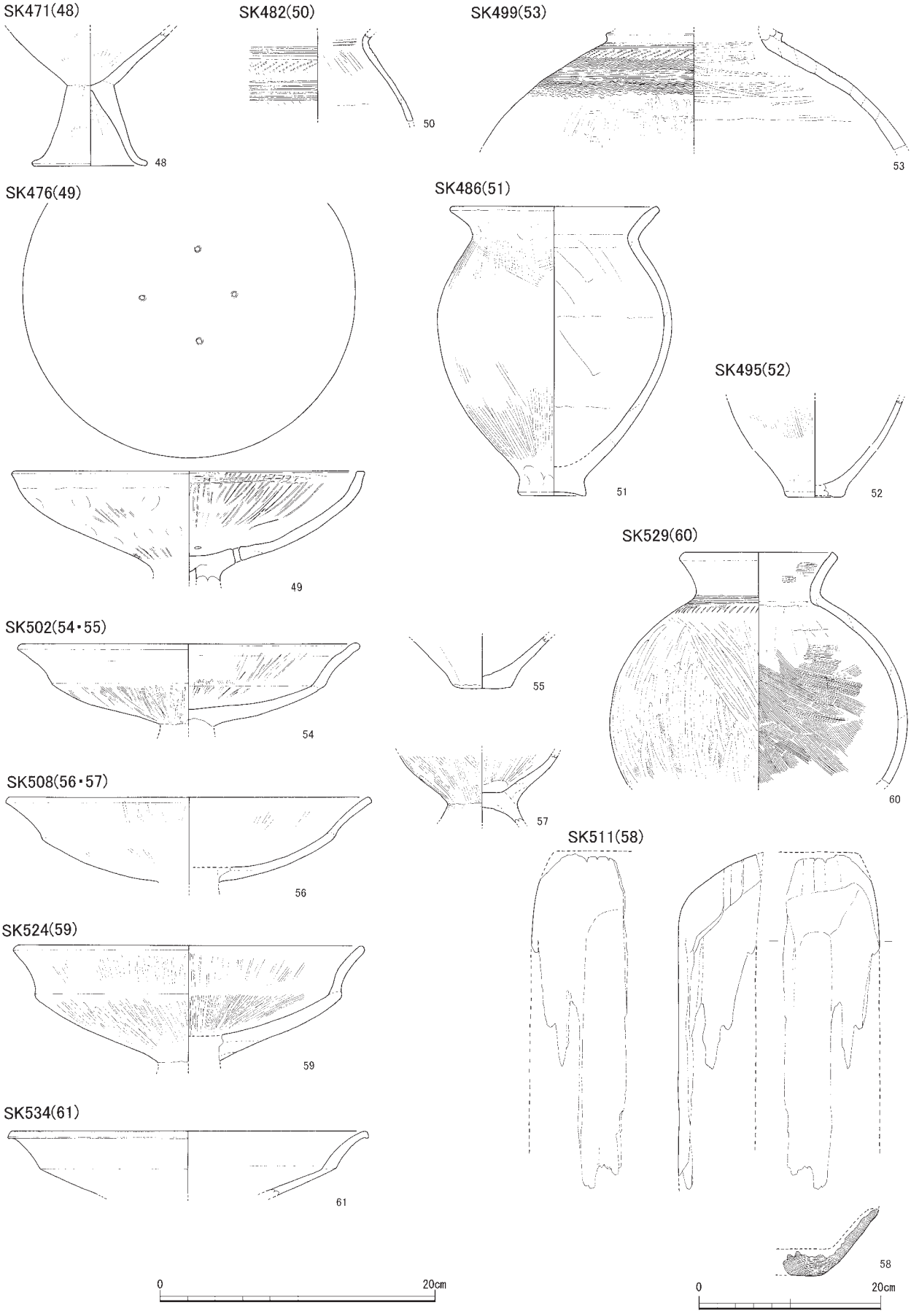




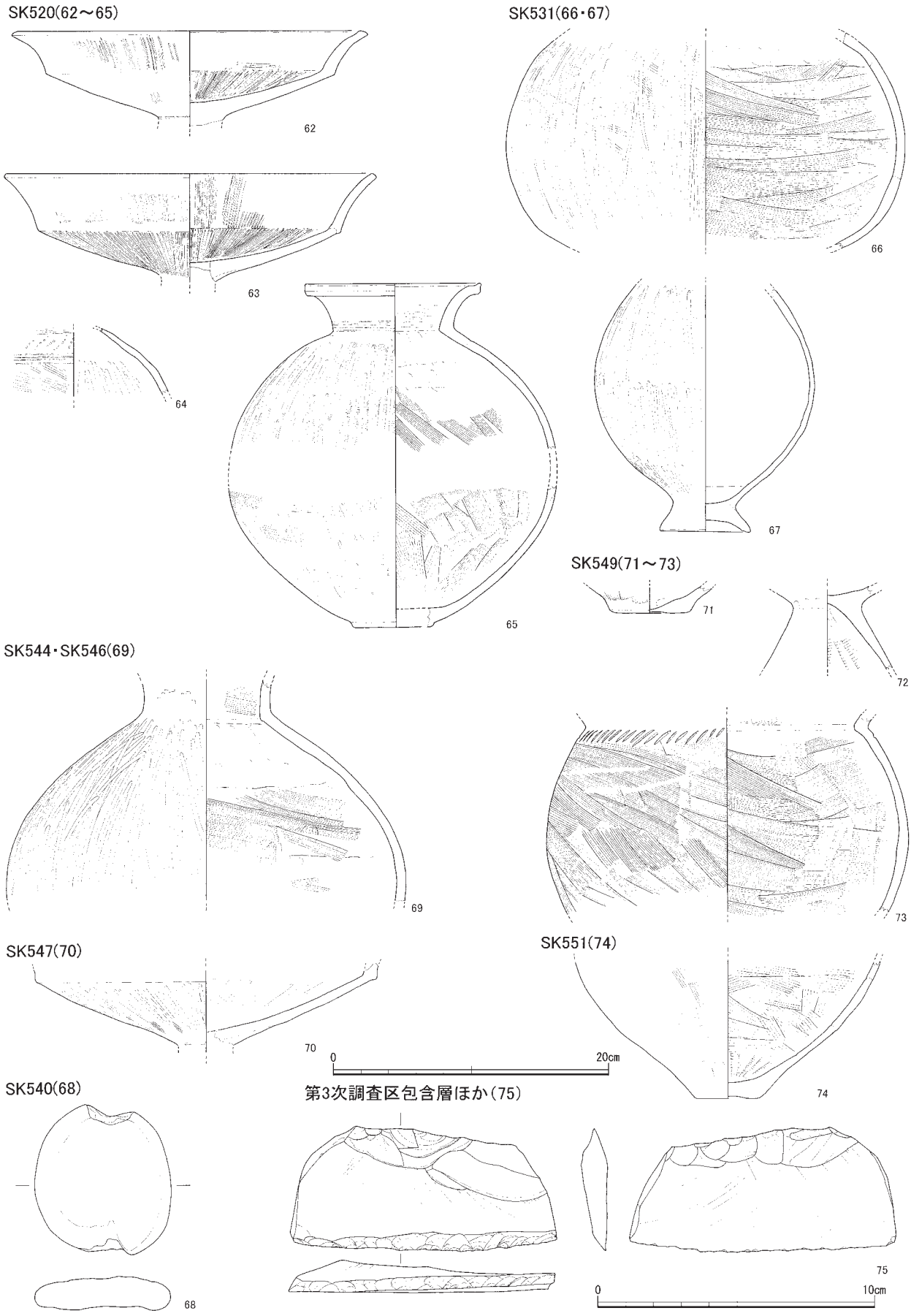
第92図　第１・２次調査区出土遺物実測図（１：４、17～19・23は１：２）



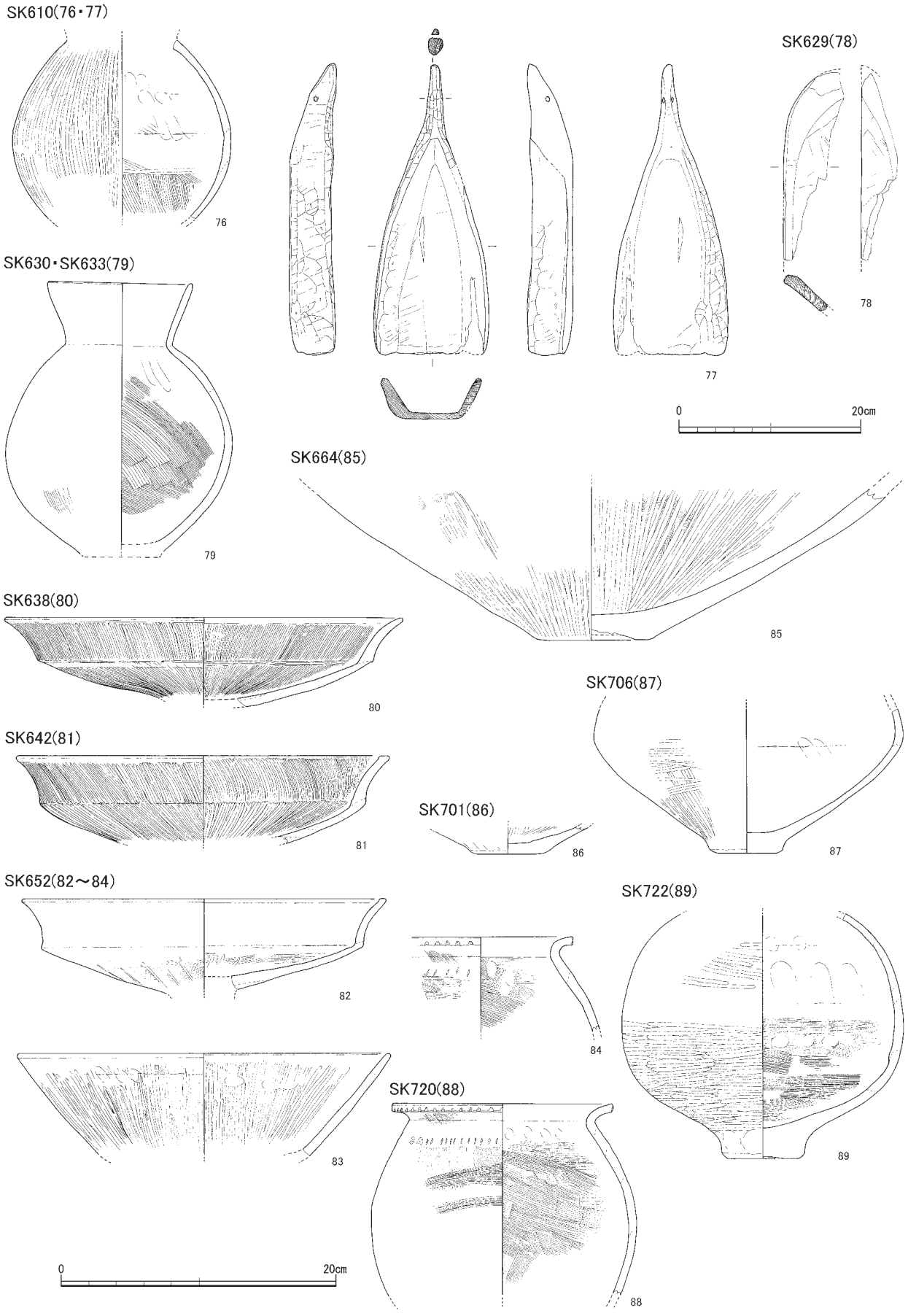
第93図　第３次調査区出土遺物実測図１（１：４、34は１：２）



第94図　第３次調査区出土遺物実測図２（１：４、58は１：６）



第95図　第３次調査区出土遺物実測図３（１：４、68・75は１：２）



第96図　第４次調査区出土遺物実測図１（１：４、77・78は１：６）

はさほど見られない。時期は、体部の輪郭などから平城Ⅳ～Ⅵ期、斎宮第Ⅰ期第３段階～第Ⅱ期第１段階と広く設定しておきたい。

104・105はＳＫ652出土遺物である。105の内外面はハケが見られず、オサエ・ナデのみで調整される。このようなハケを用いない甕は上村氏によると平安前Ⅱ期古、９世紀中頃からの出現が指摘されているが、口縁部から体部への形状を見ると、上村氏の甕Ａ２類の奈良時代後期、８世紀後半段階の亀山市地蔵僧遺跡出土の小型甕が類似する⑩。このことから平城Ⅳ～Ⅴ期、斎宮第Ⅰ期第３～４段階に属するか⑪。

（２）包含層等出土遺物

106は第１次調査（平成20年度）で出土した須恵器有蓋高杯脚部である。三角形透かしを四方に開ける。形状から、陶邑編年でいうＴＫ47型式併行期であろう。

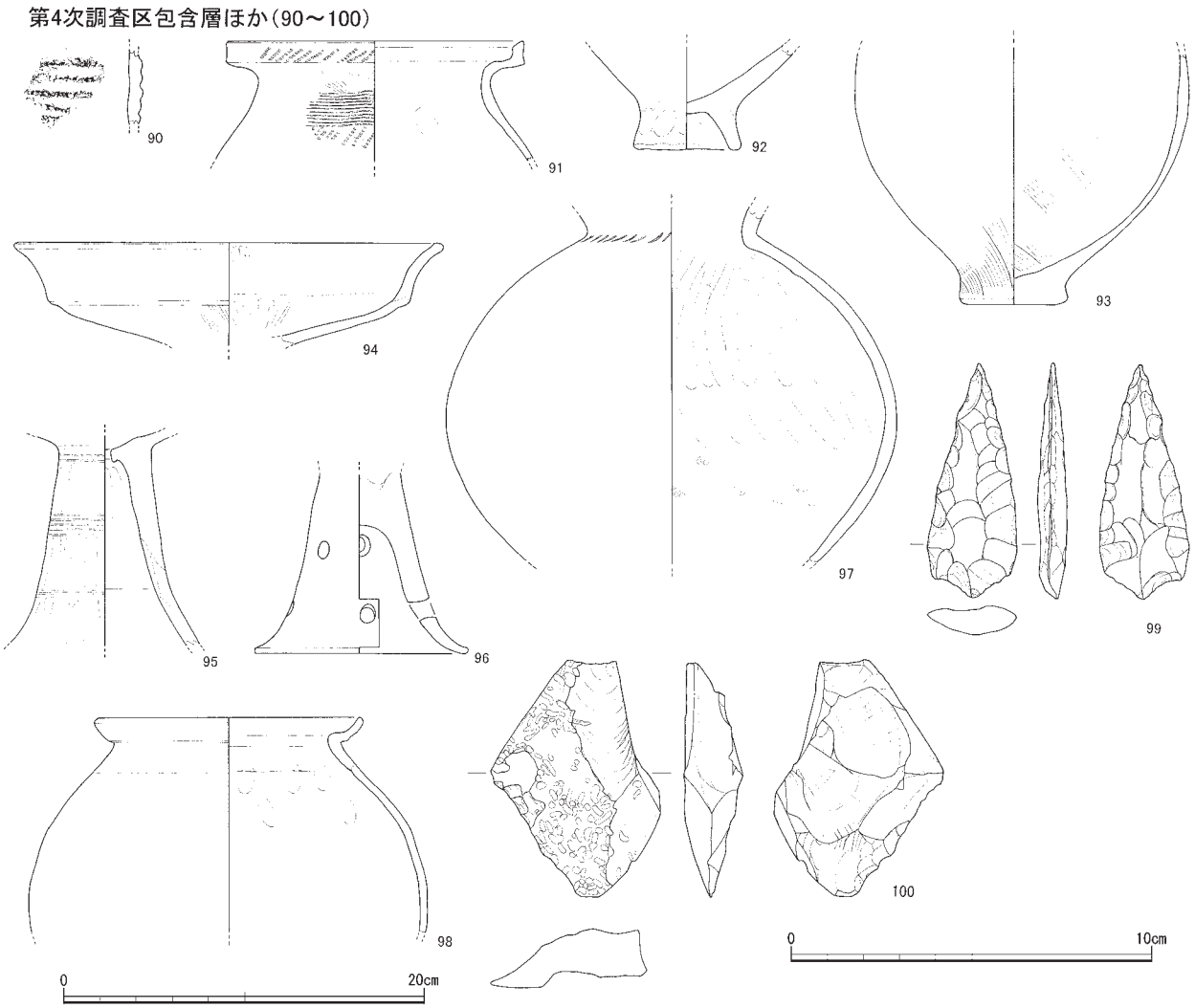
107は第２次調査区から出土したものである。家形埴輪の裾はばき部の破片である。

108は第３次調査区から出土した陶器椀である。南部系山茶椀の尾張型（知多窯）で第５型式前半、12世紀後半のものである。

109～116は第４次調査区からの出土である。109は須恵器短脚高杯脚部である。長方形透かしを三方に開ける。降灰の状況から天地逆で窯詰めしたと推定できる。また、脚部内面に漆状の有機質が付着する。時期はＴＫ47型式併行期である。

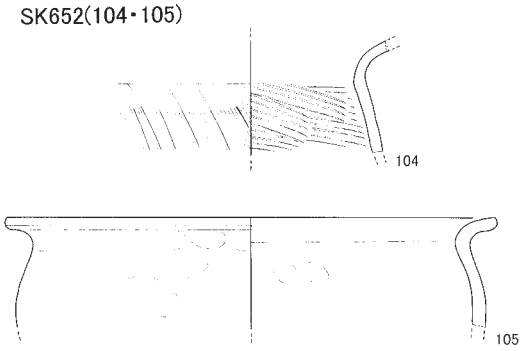
110は土師器小皿である。全体を手づくねで成形し、内外面一部に煤が付着する。13世紀後半のものか。類似する資料は図化でき得る残存状況ではないが数点出土している。

111は南部系山茶椀の渥美型である。内面底部が研磨により平滑で、煤が付着する。高台の設置面も平滑であり、置いての使用が考えられる。第６型式、13世紀前半代のものである。

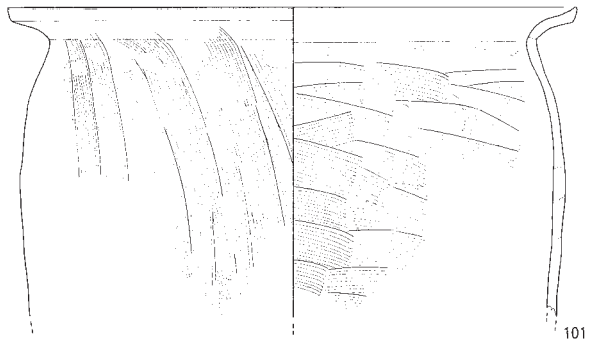


第97図　第４次調査区出土遺物実測図２（１：４、99・100は１：２）

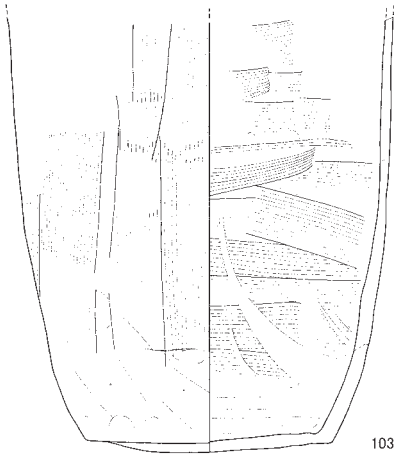
SK652(104・105)



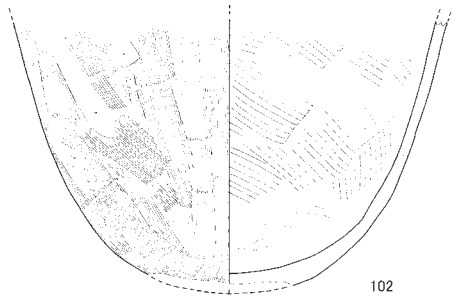
SK436(101)

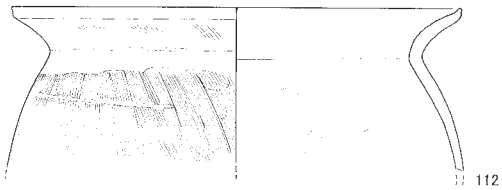


SK644(103)



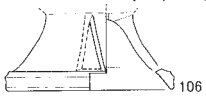
SK513(102)



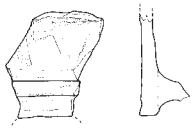


第1次調査（平成20年度）

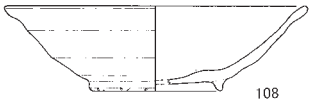
A区（106）



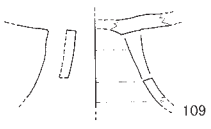
第2次調査区包含層ほか（107）

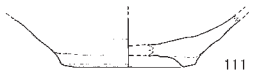


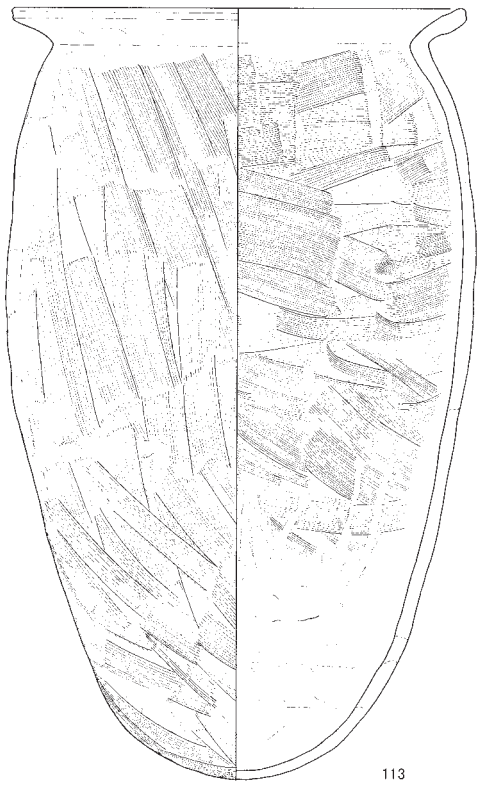
第3次調査区包含層ほか（108）



第4次調査区包含層ほか（109～113）

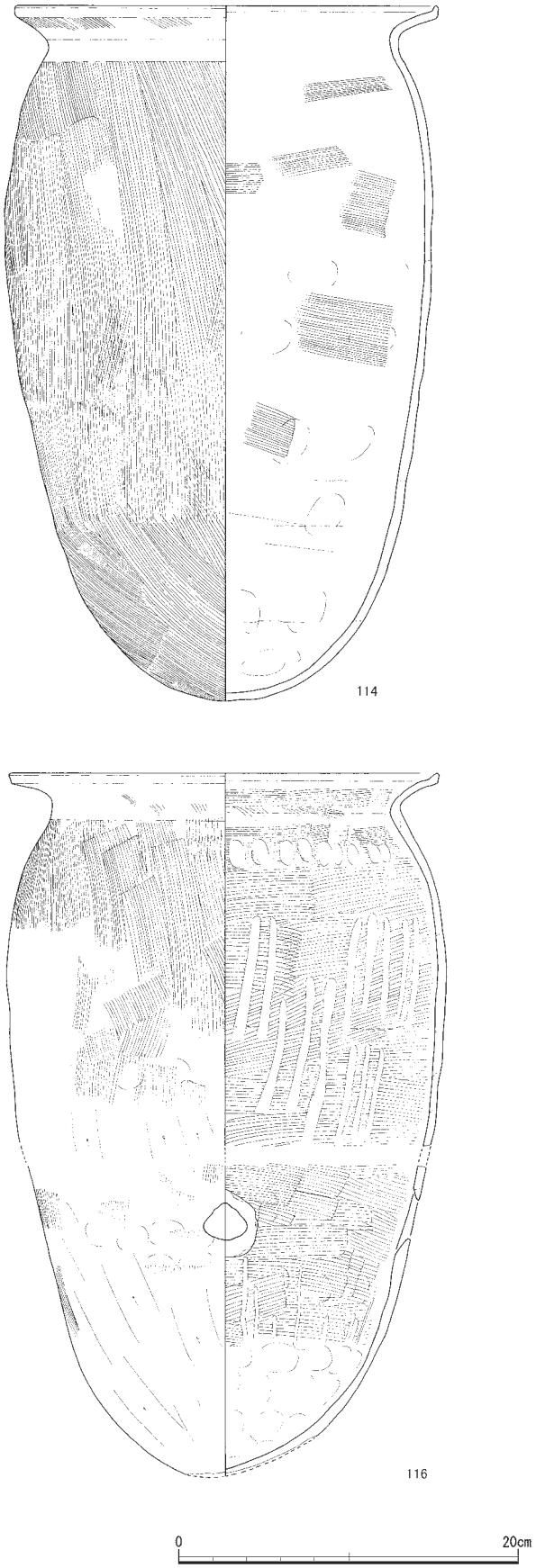






第98図　第１次（平成20・22年度）・２・３・４次調査区出土遺物実測図（１：４）

第4次調査区包含層ほか（114～116）



第99図　第４次調査区出土遺物実測図（１：４）

112は長胴甕である。体部上半から口縁部が残存する。編年の指標となる体部調整技法などが確認できないため時期は決めがたい。しかし、口縁部から体部への形状から、斎宮跡出土例を参考に斎宮第Ⅰ期第４～第Ⅱ期第Ⅰ段階、平城Ⅴ～Ⅵ期の範疇に収まるものと考える。

113～116は第４次調査区内の隣接するグリッドから集中して出土した長胴甕である。113は体部外面は大きく分けて３段単位のタテハケを施す。また、体部外面に黒斑があるが、煤等は付着していない。

114は体部外面は３段単位のタテハケ、内面はわずかにヨコハケが施されるがナデ・オサエ調整が主体を占める。体部外面に黒斑がある。頸部から口縁部の形状が113に比して丸みを帯び、口縁部の厚みも薄いが、時期は113と同時期に収まるであろう。

115の外面は３段単位のタテハケ、内面はヨコハケで下４分の１はヨコナデ、その後縦方向のユビナデを施す。頸部から口縁部の形状は114に類似する。

116の体部は単位が不明であるがタテハケ後、下半にヘラケズリを施す。内面はヨコハケ後に縦方向のユビナデで、下４分の１がオサエ調整である。口

第18表　遺物観察表１

報告番号	実測番号	種類	器種等	調査次 地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	法量（cm） 口径	器高	底径	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	特記事項	時期	概報No.
1	001 -01	土師器	壺	2次	BB14	SK1		(18.7)	5.0	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ後ﾊｹ(5本) 外:ﾊｹ後ﾀﾃﾐｶｷ	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	底部～体部4/12	風化著しい 黒斑有	廻間Ⅰ-2段階 島貫Ⅱ期新相	22-1
2	002 -01	土師器	台付甕	2次	BA15	SK3		(12.8)	4.8	内:ﾅﾃﾞ、ﾊｹ(3本) 外:ﾀﾃﾊｹ後ﾅﾅﾒﾊｹ(5本)、刻み付突帯	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	台部欠損 底部完存	風化著しい 外面煤付着	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	22-6
3	003 -01	弥生土器	壺	2次	AY14	SK14		(9.5)	3.0	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾊｹ(10本) 外:ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ後ﾊｹ(5本)	密	良	にぶい赤褐 5YR5/4	底部3/12	風化著しい 外面黒斑有	山中Ⅰ-1段階	22-2
4	004 -01	土師器	壺	2次	AW16	SK18		(10.4)	5.0	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ、ﾊｹ(6本) 外:ﾊｹ(7本)	やや粗	良	灰黄 2.5Y7/2	底部完存	風化著しい 外面黒斑有	廻間Ⅰ-2段階 島貫Ⅱ期新相	22-3
5	005 -01	土師器	壺	2次	AT16	SK20		(28.2)	7.0	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	やや粗	良	灰白 5Y7/1	底部完存 体部6/12	風化著しい 外面黒斑有	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	22-5
6	006 -01	土師器	高杯	2次	AS16	SK23	19.5	(11.8)		調整不明　透かし有	密	良	灰白 2.5Y8/2	口縁部2/12	風化著しい	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	22-8
7	007 -01	土師器	壺	2次	AT17	SK25	頸部径 9.5	(6.0)		内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:櫛描直線文3～6条、貼付突帯	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	頸部3/12	風化著しい	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	22-7
8	009 -01	弥生土器 (土師器)	壺	2次	AT12	SK51		(3.5)		内:ﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ後櫛描直線文、櫛描波状文5条	やや粗	良	灰黄 2.5Y7/2	体部小片		山中Ⅰ式～廻間Ⅰ-0段階	22-11
9	010 -02	弥生土器 (土師器)	甕	2次	AN15	SK70	14.9	(12.2)		内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ後平行ﾀﾀｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ	やや粗	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部3/12	外面煤付着	山中Ⅱ式～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	22-12
10	010 -01	土師器	甕	2次	AM15	SK74	15.3	19.6	3.1	内:ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ(6本)後櫛描波状文2条・4条、突帯貼付後凹線、刺突、櫛先列点文	やや粗	良	にぶい黄褐 2.5Y8/2	全体6/12	近江系か 外面煤付着	廻間Ⅰ-0～4段階 島貫Ⅱ期古相	22-13
11	010 -03	土師器	高杯	2次	AL15	SK77	24.0	(7.8)		内:ﾐｶｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾐｶｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	口縁部2/12		廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	22-9
12	011 -01	土師器	台付甕	2次	AK13・14	SK83	(18.0)	(29.8)		内:ﾊｹ(4本)後ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ(4本)後櫛描直線文、櫛先列点文、押引刺突、ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	良	褐灰 10YR4/1	全体4/12	Ｓ字甕Ｏ類 内外面煤付着	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	22-15
13	016 -01	木製品	籠	2次	AT15	SK28	長辺17.7	(5.4)	短辺14.2	網代編み、飛びござ目編み、ござ目編み、もじり編み					竹		22-22
14	008 -01	土師器	手焙形土器	2次	AT15	SK28		(9.4)	4.0	内:ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ後ﾐｶｷ、突帯貼付後ｷｻﾐ	密	良	にぶい黄 2.5YR6/3	底部完存	内面煤付着 覆部？破片有　底部外面平滑	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	22-10
15	012 -01	土師器	壺	2次	AI11	SK91		(13.8)	4.4	内:ﾊｹ(4本) 外:ﾊｹ(6本)後ﾐｶｷ	やや密	良	外:にぶい黄 2.5Y6/3 内:黒 2.5Y2/1	体下部完存		廻間Ⅰ期3・4段階 島貫Ⅱ期新相	22-4
16	011 -02	弥生土器 (土師器)	甕	2次	AH15	SK94	14.7	21.7	3.9	内:ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:平行ﾀﾀｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ	粗	良	にぶい橙 7.5YR6/4	全体4/12	外面全体煤付着	山中Ⅱ式～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	22-17
17	018 -01	木製品	籠	2次	AW14	SK47	長辺18.8	(7.2)	短辺10.2	網代編み、飛びござ目編み、ござ目編み、もじり編み					竹		
18	017 -01	木製品	不明品	2次	AW14	SK47	長さ14.8	最大幅 1.9	厚さ 0.5	片面加工(ﾊｼﾘ)痕あり					ウツギ属		22-20
19	017 -02	木製品	不明品	2次	AI11	SK107	長さ11.4	最大幅 2.2	厚さ 1.0	2面に加工(ﾊｼﾘ)痕、刃物痕あり					樹種同定未実施		
20	013 -02	土師器	壺	2次	AG13	SK104	13.5	(8.2)		内:ｵｻｴ 外:調整不明	密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部完存	風化著しい	廻間Ⅰ-0段階か	22-14
21	013 -03	弥生土器 (土師器)	高杯	2次	AF10	SK118	25.6	(9.0)		内:ﾅﾃﾞ、調整不明 外:ﾅﾃﾞ、調整不明	粗	やや良	黒褐 7.5Y3/1	杯部6/12	風化著しい	山中Ⅱ式～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	22-16
22	013 -01	土師器	台付甕	2次	AA17	SK132		(17.1)	7.8	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ(4本)	密	良	灰黄 2.5Y7/2	底部～体部4/12	風化著しい 煤内外付着	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	22-18
23	015 -01	石器	有舌尖頭器	2次	AW13	包含層	長さ6.40	最大幅 2.2	厚さ 0.58					ほぼ完存	チャート 重さ8.1g		22-21
24	019 -02	土師器	台付甕	1次 Ⅰ区		土坑	16.2	(5.7)		内:ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾀﾃﾊｹ(6本)後ﾖｺﾊｹ(4本)、押引刺突	やや粗	良	灰白 10YR8/2	口縁部3/12	Ｓ字甕Ａ類 外面煤付着	廻間Ⅰ式 島貫Ⅱ期	
25	020 -06	土師器	台付甕	3次 Ⅰ地区	AE7	SK310		(3.1)	6.5	内:ﾅﾃﾞ、ﾊｹ 外:ﾊｹ	粗	良	灰黄 2.5Y7/2	底部完存	風化著しい	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	
26	020 -07	土師器	壺	3次 Ⅰ地区	AE8	SK311		(1.9)	6.1	調整不明	粗	良	浅黄 2.5Y7/3	底部完存	風化著しい	廻間Ⅰ-0段階か 島貫Ⅱ期古相	
27	022 -01	弥生土器 (土師器)	高杯	3次 Ⅰ地区	AF9	SK319	22.6	(10.0)		内:ﾐｶｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾐｶｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	灰白 2.5Y8/2	全体3/12	風化著しい	山中Ⅱ-1段階～廻間Ⅰ式か 島貫Ⅰ～Ⅱ期	23-19
28	021 -03	弥生土器	壺	3次 Ⅰ地区	AE・F6	SK322	体部最大径 29.8	(10.4)		内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ、ｹｽﾘ 外:ﾐｶｷ	やや密	良	灰白 2.5Y8/2	体下部2/12	風化著しい 外面黒斑有	八王子古宮Ⅰ式か	
29	023 -02	弥生土器	高杯	3次 Ⅰ地区	AG6	SK328	25.9	(6.7)		調整不明	密	良	浅黄 2.5Y7/3	口縁部1/12	風化著しい	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	
30	021 -01	弥生土器	高杯	3次 Ⅱ地区	BB・F7	SK370 SK423	16.8	(4.4)		内:ﾊｹ後ﾐｶｷ 外:ﾊｹ(7本)後ﾐｶｷ	やや粗	良	灰黄 2.5Y7/2	口縁部2/12		山中Ⅰ式	23-11
31	020 -02	土師器	甕	3次 Ⅱ地区	BB9	SK372	18.0	(3.2)		内:調整不明 外:ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ、押引刺突	粗	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部6/12	風化著しい 外面煤付着	廻間Ⅰ-4段階 島貫Ⅱ期新相	23-7
32	025-02-01	弥生土器	高杯	3次 Ⅱ地区	BC7	SK377	脚上部径 4.1	(8.3)		内:ﾅﾃﾞ、ｵｻｴ 外:調整不明	密	良	灰黄 2.5Y7/2	脚部	風化著しい	山中Ⅰ～Ⅱ式	23-16
33	021 -02	土師器	甕	3次 Ⅱ地区	BD7	SK382	13.8	(1.6)		内:調整不明 外:ﾊｹ、押引刺突、ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	良	黒 10YR2/1	口縁部2/12	風化著しい 外面煤付着	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	23-8
34	020 -05	石器	剥片	3次 Ⅱ地区	BD7	SK382	長さ7.14	最大幅 4.31	厚さ 0.55						サヌカイト 重さ16.1ｇ		
35	024 -01	弥生土器	高杯	3次 Ⅱ地区	BD6	SK384	25.4	(6.6)		調整不明	粗	良	にぶい黄褐 10YR5/4	杯部8/12	風化著しい	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	23-12
36	021 -04	土師器	鉢	3次 Ⅱ地区	BB8	SK397	13.9	(9.2)	3.6	調整不明	粗	良	灰白 2.5Y8/2	底部完存	風化著しい	廻間Ⅰ式か 島貫Ⅱ期	23-18
37	047 -01	土師器	高杯	3次 Ⅱ地区	BE10	SK400	21.5	(7.7)		内:ﾀﾃﾐｶｷ 外:調整不明	やや密	良	橙 5YR6/6	杯部2/12	風化著しい	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	
38	022 -03	土師器	台付甕	3次 Ⅱ地区	BD・E11	SK401	16.6	(19.8)		内:ﾅﾃﾞ、ﾊｹ(8本)、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾊｹ(8本)、ﾀﾀｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	体部 ほぼ完存	外面煤付着	廻間Ⅰ-4段階	
39	047 -02	弥生土器	高杯	3次 Ⅱ地区	BE6	SK409 No.1,No.2		(4.9)		内:調整不明 外:杯部の口縁接合部にﾊｹ有、調整不明	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	杯部小片	風化著しい	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	
40	020 -04	弥生土器 (土師器)	甕	3次 Ⅱ地区	BE6	SK409	16.3	(2.7)		内:ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ｵｻｴ、ﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部6/12	風化著しい 外面煤付着	山中Ⅱ期～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	
41	047 -03	弥生土器	壺	3次 Ⅱ地区	BE6・BF6	SK411		(2.7)	4.8	内:調整不明 外:ﾕﾋﾞｵｻｴ、調整不明	密	良	浅黄 2.5Y7/3	底部完存	風化著しい	山中Ⅱ式か 島貫Ⅰ期	
42	022 -02	弥生土器	高杯	3次 Ⅱ地区	BE6	SK411	19.0	(5.5)		調整不明	やや密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	杯部6/12	風化著しい	山中Ⅰ式	
43	026 -01	土師器	高杯	3次 Ⅱ地区	BH8	SK435	20.1	(11.8)		内:<脚部>ﾅﾃﾞ　<杯部>調整不明 外:<脚部>ﾀﾃﾐｶｷ後櫛描直線文5条 <杯部>調整不明	やや密	良	赤褐 5YR4/6	口縁部1/12 脚部完存	風化著しい 杯部外面煤付着	廻間Ⅰ-2段階 島貫Ⅱ期古相	23-17
44	020 -03	土師器	台付甕	3次 Ⅱ地区	BH11	SK449	台上部径 3.9	(5.8)		内:工具痕あり、調整不明 外:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	粗	良	にぶい黄褐 10YR5/3	台部 ほぼ完存	風化著しい	廻間Ⅰ式 島貫Ⅱ期	
45	047 -04	弥生土器 (土師器)	甕	3次 Ⅱ地区	BG13	SK458 最下層	13.1	(3.2)		内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ 外:ﾅﾃﾞ、櫛描直線文、櫛先列点文、ﾖｺﾅﾃﾞ	やや密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/12		山中Ⅱ式 島貫Ⅰ	
46	023 -01	弥生土器 (土師器)	甕	3次 Ⅱ地区	BH13	SK458		(18.8)	3.7	内:ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ 外:平行ﾀﾀｷ	粗	良	にぶい黄褐 10YR5/3	底部完存	外面煤付着	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ	23-9

第19表　遺物観察表２

報告番号	実測番号	種類	器種等	調査次 地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	法量（cm） 口径	器高	底径	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	特記事項	時期	概報No.
47	047-05	弥生土器（土師器）	壺	3次Ⅱ地区	BH13	SK458		(1.3)	4.0	内:ナデ 外:オサエ、ナデ	やや密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部完存	風化著しい 外面黒斑有	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ	
48	021-05	弥生土器	高杯	3次Ⅱ地区	BI・J16	SK471		(9.5)	8.1	内:ミガキ、ナデ、ヨコナデ 外:ハケ後ミガキ?、ヨコナデ	やや粗	良	灰黄 2.5Y7/2	脚部8/12	風化著しい	山中Ⅱ式～島貫Ⅱ期	
49	027-01	弥生土器	高杯	3次Ⅱ地区	BL15	SK476	25.6	(7.9)		内:ミガキ、ヨコナデ 外:オサエ、ミガキ、焼成前穿孔４ヶ所	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	杯部ほぼ完存	風化著しい 内外面赤彩（ベンガラ） 外面黒斑有	弥生時代中期末～後期前半	23-13
50	047-06	土師器	甕	3次Ⅱ地区	BN16・BN17	SK482		(6.2)		内:工具ナデ、ハケ 外:ハケ(6本)後櫛描直線文、櫛先列点文	やや密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	体部小片	内外面煤厚く付着し調整不明瞭	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	
51	025-01-01	土師器	甕	3次Ⅱ地区	BO17	SK486	15.2	(21.0)	5.0	内:ナデ、工具ナデ、ヨコナデ 外:ハケ、ヨコナデ	やや密	良	灰黄 2.5Y6/2	全体10/12	外面煤付着で調整不明瞭 体部片接点なし	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	23-10
52	047-07	土師器	甕	3次Ⅱ地区	BP15	SK495		(7.0)	4.4	内:ナデ 外:ナデ、タテハケ	やや密	良	灰黄 2.5Y6/2	底部5/12	風化著しい 内外面煤付着	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	
53	030-02	弥生土器	壺	3次Ⅱ地区	BQ17	SK499	頸部径 12.6	(8.3)		内:ナデ、オサエ、横方向ミガキ 外:ハケ後ミガキ、貼付突帯、櫛描直線文、櫛先列点文、櫛描波状文	やや粗	良	灰黄褐 10YR6/2	体部4/12	風化著しい	山中Ⅱ式か 島貫Ⅰ期	
54	026-02	弥生土器	高杯	3次Ⅱ地区	BQ16	SK502	24.8	(6.0)		内:ハケ後ミガキ、ヨコナデ 外:ハケ後ミガキ、ヨコナデ	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	口縁部4/12	風化著しい 内外面黒斑有	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	23-14
55	048-01	弥生土器（土師器）	壺	3次Ⅱ地区	BQ16	SK502		(3.5)	4.0	内:調整不明、黒化 外:調整不明、ナデ?工具痕残る	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	底部完存	風化著しい 外面黒斑有	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	
56	048-03	弥生土器	高杯	3次Ⅱ地区	BQ17・BR17	SK508	25.8	(6.2)		内:タテミガキ、調整不明瞭 外:ハケ後ミガキ、調整不明瞭	やや粗	良	灰白 2.5Y8/2	杯部2/12	風化著しい	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	
57	048-02	弥生土器（土師器）	台付甕	3次Ⅱ地区	BQ17	SK508	台上部径 5.0	(4.8)		内:板ナデ、ナデ 外:タテハケ(8本)	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	底基部完存	内面炭化により黒変 外面煤付着	山中Ⅱ期～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	
58	033-01	木製品	槽	3次Ⅱ地区	BS16	SK511	長さ (36.9)	(9.0)	最大幅 (10.4)						槽内面腐食 木取り:割材削り出し クスノキ科クスノキ属クスノキ		
59	026-03	弥生土器	高杯	3次Ⅱ地区	BS14	SK524	24.8	(8.4)		内:ミガキ、ヨコナデ 外:ミガキ、ヨコナデ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	口縁部3/12	外面黒斑有	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	23-15
60	030-01	弥生土器（土師器）	壺	3次Ⅱ地区	BV13	SK529	11.4	(16.7)		内:オサエ、ナデ、ハケ 外:ハケ後ミガキ、櫛描直線文、櫛先列点文	密	良	灰黄 2.5Y7/2	口縁部1/12	風化著しい 外面黒斑有	山中Ⅱ期～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	23-4
61	031-01	弥生土器	高杯	3次Ⅱ地区	BP17	SK534	26.0	(4.6)		内:調整不明 外:調整不明、ミガキ?	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部6/12	風化著しい	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	
62	029-01	弥生土器	高杯	3次Ⅱ地区	BS14	SK520	25.8	(6.9)		内:ミガキ、ヨコナデ 外:ミガキ、ヨコナデ	密	良	浅黄 2.5Y7/3	杯部ほぼ完存	風化著しい 内面口縁部黒斑有	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	
63	029-02	弥生土器	高杯	3次Ⅱ地区	BS14	SK520	26.5	(7.8)		内:ミガキ、ヨコナデ 外:ミガキ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄褐 10YR7/3	杯部ほぼ完存	風化著しい 内面黒斑有	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	
64	048-04	土師器	甕	3次Ⅱ地区	BS13	SK520		(4.6)		内:ナデ、タテユビナデ 外:ハケ後櫛描直線文、櫛先列点文	やや密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	体部小片	外面煤厚く付着	廻間Ⅰ式 島貫Ⅱ期	
65	025-01-02	土師器	壺	3次Ⅱ地区	BS14	SK520	12.8	(24.9)	(5.9)	内:ハケ(5～6本)(10～12本)後ナデ、オサエ、ヨコナデ、ミガキ 外:ハケ後ミガキ、ヨコナデ、櫛描直線文	密	良	灰黄 2.5Y7/2	口縁部10/12	風化著しい 体部接点なし推定復元	廻間Ⅰ式 島貫Ⅱ期新相	23-3
66	032-02	弥生土器（土師器）	壺	3次Ⅱ地区	BR16	SK531	体部最大部径 28.8	(15.5)		内:オサエ、ナデ、ハケ(11～12本) 外:ハケ後ミガキ	密	良	灰白 2.5Y8/2	体部3/12	外面黒斑有	廻間Ⅰ式 島貫Ⅱ期古相	
67	023-03	弥生土器	台付壺	3次Ⅱ地区	BR16	SK531		(17.6)	6.4	内:ナデ 外:ミガキ	粗	良	にぶい黄 2.5Y6/3	体部3/12	風化著しい	山中Ⅱ式か 島貫Ⅰ期	23-5
68	027-02	石器	石錘	3次Ⅱ地区	BV16	SK540	長辺 5.4	短辺 4.9	厚さ 1.0					完存	重さ45.8ｇ	片岩製 縄文時代早期以降	23-2
69	049-03	弥生土器	壺	3次Ⅱ地区	BW14・BW15	SK544 SK546	頸部径 9.3	(15.7)		内:オサエ、ナデ、ハケ(8本・9本) 外:タテミガキ	やや密	良	灰白 2.5Y8/1	肩部3/12	内外口縁部付近に煤付着	八王子古宮Ⅰ式	
70	020-01	弥生土器	高杯	3次Ⅱ地区	BW・X14	SK547	杯部屈曲部径 24.7	(5.5)		内:ミガキ 外:ハケ後ミガキ	密	良	浅黄 2.5Y7/3	杯底部6/12		山中Ⅰ式	
71	049-02	土師器	壺	3次Ⅱ地区	BU13	SK549		(1.8)	5.8	内:ナデ、オサエ 外:タテハケ(6本)、調整不明瞭	密	良	にぶい黄橙 10YR7/2	底部9/12	外面風化著しい	廻間Ⅰ式 島貫Ⅱ期	
72	025-02-02	弥生土器（土師器）	台付甕	3次Ⅱ地区	BV15	SK549	台上部径 4.9	(5.4)		内:板ナデ、ナデ 外:ナデ?　調整不明	密	良	にぶい黄橙 10YR7/2	台部3/12	風化著しい	山中Ⅱ式～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	
73	032-03	弥生土器（土師器）	甕	3次Ⅱ地区	BW14	SK549	体部最大部径 26.0	(14.0)		内:オサエ、ハケ 外:ハケ後櫛描刺突文	やや密	良	灰黄褐 10YR6/2	体部3/12	外面煤付着	山中Ⅱ式～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	
74	032-01	弥生土器（土師器）	壺	3次Ⅱ地区	BT16	SK551		(10.0)	4.6	内:ハケ(5本) 外:オサエ、ナデ、ハケ後ミガキ	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	底部完存	風化著しい	山中Ⅱ式か	23-6
75	027-03	石器	削器	3次Ⅰ地区	AE6	検出面	長辺 9.6	短辺 4.5	厚さ 1.2					完存	重さ50.9ｇ	サヌカイト製 縄文草創期	23-1
76	039-03	土師器	壺	4次Ⅱ地区	CE5	SK610	体部最大径 15.8	(12.8)		内:オサエ、ナデ、ハケ(5～6本) 外:ハケ後ミガキ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/2	体部3/12	内彎口縁壺（ひさご壺）か	廻間Ⅰ式 島貫Ⅱ期	
77	051-01	木製品	漁労具 アカ取り？	4次Ⅱ地区	CD5	SK610	長さ (32.0)	高さ 5.0	最大幅 12.6	内:手斧痕、刃物当たり痕 外:手斧痕、刃物当たり痕				ほぼ完存	持ち手部分に孔 木取り:半截削り出し ヒノキ科アスナロ属		24-12
78	051-02	木製品	槽	4次Ⅰ地区	BY9	SK629	長さ (20.7)	高さ (3.9)	最大幅 (6.6)	内:手斧痕、刃物当たり痕 外:手斧痕、刃物当たり痕				小片	木取り：削り出し クスノキ科クスノキ属クスノキ		
79	034-01	土師器	壺	4次Ⅰ地区	BX10 BX12	SK633 SK630	10.3	19.8		内:ユビオサエ、ハケ(5～8本)、ヨコナデ? 外:ミガキ、ヨコナデ?	密	良	にぶい黄橙 10YR7/2	全体6/12	風化著しい 外面黒斑有	廻間Ⅰ-1～3段階 島貫Ⅱ期	24-10
80	035-01	弥生土器	高杯	4次Ⅰ地区	BT6	SK638	28.8	(6.3)		内:ミガキ、ヨコナデ 外:ミガキ、ヨコナデ	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	杯部完存	ひずみ有り 外面煤付着	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	24-6
81	035-03	弥生土器	高杯	4次Ⅰ地区	BQ13	SK642	27.0	(6.4)		内:ミガキ、ヨコナデ 外:ミガキ、ヨコナデ	やや粗	良	灰黄 2.5Y7/2	杯部3/12	外面黒斑有	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	
82	035-02	弥生土器	高杯	4次Ⅰ地区	BP9	SK652	26.2	(6.5)		内:ハケ(5本)後ミガキ 外:ハケ(5本)後ミガキ	やや粗	良	浅黄 2.5Y7/3	杯部完存	風化著しい ひずみ有り	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	24-7
83	038-02	土師器	高杯	4次Ⅰ地区	BP9	SK652	27.0	(7.4)		内:オサエ後ミガキ、ヨコナデ 外:オサエ後ミガキ、ヨコナデ	密	良	黒褐 10Y7R3/1	杯部3/12		廻間Ⅰ-0段階か 島貫Ⅱ期古相	
84	039-02	弥生土器	甕	4次Ⅰ地区	BP9	SK652		(6.6)		内:オサエ後ハケ(8～9本)、ヨコナデ 外:ナデ後タテハケ(8～9本)後ヨコハケ(7～8本)、櫛先列点文、ヨコナデ後口縁端部キザミ	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部小片	風化著しい 88と同一個体の可能性有	八王子古宮Ⅰ式か	
85	037-01	土師器	壺	4次Ⅰ地区	BO12	SK664		(10.5)	8.6	内:ハケ(14本)後ミガキ 外:ハケ後ミガキ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部6/12	風化著しい 内面黒変	廻間Ⅰ-0段階か 島貫Ⅱ期古相	24-8
86	049-01	土師器	壺	4次Ⅰ地区	BI10	SK701		(2.0)	5.1	内:ハケ(6本) 外:ナデ、オサエ、調整不明瞭	やや粗	良	灰白 5Y7/1	底部6/12	外面風化著しい	廻間Ⅰ-0段階か 島貫Ⅱ期古相	
87	038-01	土師器	壺	4次Ⅰ地区	BK10	SK706		(10.5)	4.2	内:オサエ、ナデ、工具痕有 外:ナデ後ミガキ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	底部6/12	風化著しい 外面黒斑有	廻間Ⅰ-0段階か 島貫Ⅱ期古相	24-11
88	039-01	弥生土器	甕	4次Ⅰ地区	BK9	SK720	16.0	(13.8)		内:オサエ、ナデ後ハケ(8～9本)、ヨコナデ 外:ナデ後タテハケ(9本)後ヨコハケ(9～10本)、櫛先列点文、ヨコナデ後口縁端部キザミ	粗	良	灰 10YR8/2	口縁部4/12	風化著しい 体部外面煤付着 84と同一個体の可能性有	八王子古宮Ⅰ式か	24-4
89	036-02	弥生土器（土師器）	壺	4次Ⅰ地区	BK8・9	SK722		(17.7)	6.0	内:オサエ、ナデ後ヨコハケ(12本) 外:オサエ後ミガキ	やや粗	良	浅黄 2.5Y7/3	全体8/12	外面煤付着	山中Ⅱ式～廻間Ⅰ-0段階か 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	24-9
90	046-01	縄文土器	壺形土器か	4次Ⅰ地区		表土				内:オサエ、ナデ 外:貼付突帯	やや粗	良	灰黄褐 10YR5/2	体部小片	外面煤付着	縄文晩期	24-3
91	046-02	弥生土器	甕	4次Ⅰ地区		表土	16.4	(6.5)		内:オサエ、ナデ、ヨコナデ 外:ナデ、ハケ後櫛描直線文、櫛先列点文、ヨコナデ	粗	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部1/12	外面煤付着	八王子古宮Ⅰ式	
92	050-02	土師器	台付甕	4次Ⅰ地区		表土掘削		(5.4)	5.7	内:工具ナデ?、オサエ、ナデ 外:ハケ、オサエ、ナデ	粗	良	灰黄 2.5Y7/2	台部完存	風化著しい	廻間Ⅰ-4段階	

第20表　遺物観察表３

報告番号	実測番号	種類	器種等	調査次 地区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	法量（cm） 口径	器高	底径	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	特記事項	時期	概報No.
93	045 −02	土師器	壺	４次 Ⅰ地区	B06	検出面		(13.8)	5.9	内：ハケ、調整不明 外：ハケ、ナデ、調整不明	やや密	良	浅黄 2.5Y7/3	底部完存	風化著しい	廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅱ期古相	
94	045 −03	弥生土器	高杯	４次 Ⅰ地区	BR12	検出面	23.7	(5.6)		内：ミガキ、ヨコナデ 外：ハケ後ミガキ、ヨコナデ	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	杯部4/12	風化著しい 内外面黒斑有	山中Ⅱ式 島貫Ⅰ期	
95	050 −01	弥生土器（土師器）	高杯	４次 Ⅰ地区		表土 掘削	脚部上部径 5.1	(11.3)		内：ユビナデ 外：タテミガキ後櫛描直線文5条3単位	やや密	良	にぶい黄橙 10YR7/2	脚上部完存	風化著しい 下部にスカシ有？ 杯見込部に孔	山中Ⅱ式～廻間Ⅰ-0段階 島貫Ⅰ～Ⅱ期古相	
96	046 −05	弥生土器	高杯	４次 Ⅰ地区		南壁		(10.0)	11.8	内：ナデ 外：調整不明	密	良	灰黄 2.5Y7/2	脚部完存	風化著しい 上段：5方透孔 下段：4方透孔	八王子古宮Ⅱ式	24-5
97	045 −01	土師器	壺	４次 Ⅰ地区	BS7	検出面	体部最大部径 24.8	(19.2)		内：ユビナデ、ハケ 外：ミガキ？、櫛先列点文	やや粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	体部4/12	風化著しい	廻間Ⅰ式 島貫Ⅱ期	
98	046 −04	土師器	壺	４次 Ⅰ地区	BP7	検出面	14.8	(11.9)		内：オサエ、ナデ、ヨコナデ 外：調整不明、ヨコナデ	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部3/12	風化著しい 外面煤付着	廻間Ⅰ-4段階 島貫Ⅱ期新相	
99	040 −01	石器	有舌尖頭器	４次 Ⅱ地区		表土	長さ 6.47	最大幅 2.53	厚さ 0.80					完存	下呂石 重さ10.8ｇ	縄文草創期	24-1
100	040 −02	石器	削器	４次 Ⅰ地区		表土	長さ 6.55	最大幅 4.57	厚さ 1.30					完存	サヌカイト 重さ37.5ｇ	縄文草創期	24-2
101	024 −02	土師器	長胴甕	３次 Ⅱ地区	BF･BG 5･6	SK436	29.9	(16.4)		内：オサエ、ハケ(6本)、ヨコナデ 外：オサエ、ハケ(6本)、ヨコナデ	やや粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部2/12		平城Ⅱ～Ⅲ期 斎宮第Ⅰ期第２～３段階	23-20
102	028 −01	土師器	長胴甕	３次 Ⅱ地区	BR14	SK513	体部残存部径 22.9	(14.0)		内：ハケ(4本)、ナデ 外：ハケ後ケズリ	やや密	良	灰黄 2.5Y6/2	底部 ほぼ完存	底部焼成後打ち欠き 外面黒斑有	平城Ⅴ～Ⅵ期か 斎宮第Ⅰ期第４段階～第Ⅱ期第１段階	23-21
103	036 −01	土師器	長胴甕	４次 Ⅰ地区	BQ12	SK644		(22.8)	12.8	内：オサエ、ナデ後ヨコハケ(7本)後ユビナデ 外：オサエ、ナデ後タテハケ(5本)後ケズリ	やや粗	良	浅黄 2.5Y7/3	底部完存	平底	平城Ⅳ～Ⅵ期 斎宮第Ⅰ期第３段階～第Ⅱ期第１段階	24-13
104	039 −04	土師器	甕	４次 Ⅰ地区	BP9	SK652		(5.5)		内：ハケ(5本)、ナデ 外：ハケ(6本)、ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	体部小片		平城Ⅰ～Ⅲ期か 斎宮第Ⅰ期第１～３段階	
105	038 −03	土師器	甕	４次 Ⅰ地区	BP9	SK652	25.6	(4.8)		内：オサエ、ナデ、ヨコナデ 外：オサエ、ナデ、ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部2/12	外面煤付着	平城Ⅳ～Ⅴ期か 斎宮第Ⅰ期第３～４段階	
106	019 −01	須恵器	高杯	１次 A区				(4.1)	8.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	やや密	良	灰白 10YR4/1	脚部2/12	有蓋高杯か、四方透孔	ＴＫ47型式	
107	014 −01	埴輪	家形埴輪	２次		表土		(5.2)		内：オサエ、ナデ 外：オサエ、ナデ、貼付ナデ	密	良	橙 7.5YR7/6	小片		５世紀末～６世紀前	22-19
108	050 −03	陶器	椀	３次 Ⅱ地区		北壁	15.8	4.5	6.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、貼付ナデ、糸切痕	やや密	良	灰白 5Y7/	底部6/12	知多 モミ殻痕	５型式前半	
109	046 −03	須恵器	高杯	４次 Ⅰ地区		表土		(3.7)		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラケズリ	密	良	灰 N6/	柱状部3/12	3方透孔 脚内面に漆状有機質付着 天地逆位で窯詰	ＴＫ47型式か	
110	050 −05	土師器	小皿	４次 Ⅰ地区		表土 掘削	7.0	(1.9)		内：ユビオサエ、ナデ 外：ユビオサエ、ナデ	密	良	褐灰 10YR6/1	3/12	内外に煤付着	13世紀後半	
111	050 −04	陶器	椀	４次 Ⅰ地区		表土 掘削		(2.4)	7.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、貼付ナデ	やや密	良	黄灰 2.5Y6/1	底部4/12	渥美 内面研磨により平滑、煤付着 高台端部平滑	６型式	
112	050 −06	土師器	長胴甕	４次 Ⅰ地区		表土 掘削	23.6	(8.5)		内：オサエ、ヨコナデ 外：タテハケ(7本)後ヨコナデ	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	口縁部3/12		平城Ⅴ～Ⅵ期か 斎宮第Ⅰ期第４段階～第Ⅱ期第１段階	
113	044 −01	土師器	長胴甕	４次 Ⅰ地区	BN8	検出面 表土	24.0	41.0		内：オサエ、ナデ、工具痕、ヨコハケ(10～11本)後タテ方向ナデ、ヨコナデ 外：オサエ後タテハケ(10～11本)、ヨコナデ	密	良	灰白 5Y7/1	全体9/12	外面黒斑有 口縁歪み有	平城Ⅰ～Ⅳ期 斎宮第Ⅰ期第２～３段階	
114	043 −01	土師器	長胴甕	４次 Ⅰ地区	BL7	検出面	24.8	41.0		内：オサエ、ナデ、ヨコハケ、ヨコナデ 外：タテハケ(7～8本)、ヨコナデ	やや粗	良	灰黄 2.5Y7/3	全体6/12	外面黒斑有	平城Ⅰ～Ⅳ期 斎宮第Ⅰ期第２～３段階	
115	041 −01	土師器	長胴甕	４次 Ⅰ地区	BL7 B08	検出面 表土	26.0	(43.2)		内：ヨコハケ(8本)後タテ方向ナデ、ヨコナデ 外：タテハケ(7本)、ヨコナデ	やや粗	良	灰黄 2.5Y7/2	全体11/12	外面黒斑有	平城Ⅰ～Ⅳ期 斎宮第Ⅰ期第２～３段階	24-14
116	042 −01	土師器	長胴甕	４次 Ⅰ地区	BP7	検出面 表土	25.2	(41.2)		内：オサエ後ヨコハケ(8本)後タテ方向ナデ、ヨコナデ 外：オサエ後タテハケ(7本)後ケズリ、ヨコナデ	やや密	良	灰黄 2.5Y7/2	全体5/12	内側から焼成後穿孔有 体部接点なく推定復元	平城Ⅰ～Ⅳ期 斎宮第Ⅰ期第２～３段階	24-15

縁部内面頸部際にもヨコハケを施す。口縁部の形状は114・115と類似し薄手で、頸部の屈曲がくの字を呈する。長胴甕における体部外面へのヘラケズリの採用は斎宮跡では第Ⅰ期第１段階後半、飛鳥Ⅳ～平城Ⅰ期の基準資料であるＳＫ1255出土例から８世紀前半であり⑫、所属時期に齟齬はないと考える。116は体部下半に内側からの焼成後穿孔が見られる。

全体の形状は113～116全てに共通し、体部最大部径は口径とほぼ同じでやや底すぼまりの形状である。この特徴から斎宮第Ⅰ期第２～３段階、平城Ⅰ～Ⅳ期のものであろう。

【註釈】

① 松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報２』1982年、同『同10』1985年

② 編み手法については以下の文献を参考にした。
野田真弓「第３章　青谷上寺地遺跡出土のかご」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告Ⅰ　木製容器・かご』鳥取県埋蔵文化財センター　2005年、佐々木由香「割裂き木部材・蔓・草の編み組み加工容器」『考古学ジャーナル』№542　ニューサイエンス社　2006年

③ 山田昌久氏のご教示による。

④ 山田昌久氏のご教示による。

⑤ 概報23では「鉢」として報告したが、杯部下部の欠損状況を観察すると、円形状に剥離した状況が確認できたため、これは脚部の欠損によるものと判断した。

⑥ 石井智大「１　弥生時代後期～古墳時代初頭の土器の分類」『村竹コノ遺跡』三重県埋蔵文化財センター　2009年

⑦ 阿形遺跡出土手焙形土器に類似する形状のものがある。
『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1992年

⑧ 石井氏からのご教示によると、類例に神戸中学校上箕田出土資料があるとのことである。

⑨ 石井智大「１　土器の器種分類（弥生時代中期）」『納所遺跡Ⅰ－遺構・土器・木製品編－』三重県埋蔵文化財センター　2012年

⑩ 上村安生「伊勢・伊賀における古代土師器煮炊具の様相」『第４回東海考古学フォーラム　鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会　1996年

⑪ 斎宮跡からは相川西方遺跡例とは口縁の形状が異なるが、第Ⅱ期第１段階の遺構であるＳＫ6030からユビオサエとナデのみで調整される報290が出土しており、ハケを用いない甕の出土がこの時期まで遡ることがわかる。

⑫ 北勢地域では７世紀前半にみられ、北勢山間部や伊賀地域でも８世紀初めころから見られ出すとある。また、斎宮跡は中勢地域や雲出川（中村川）流域と同じような変遷をたどることが指摘されている。上村氏前掲註⑩文献より。

Ⅵ　自然科学分析

1　自然科学分析の目的

第Ⅳ章で見たように、検出された遺構は700基以上の土坑と４条の溝のみで、竪穴住居など人の居住活動が見られない。また、遺物も土坑から完形もしくは半截した土器が単体で出土し、生活に使用した土器を大量廃棄したような状況はうかがえなかった。これらの土坑の性格は埋葬土坑・食物等の貯蔵土坑・粘土採掘土坑などが考えられることから、出土遺物・堆積土等に対して自然科学分析を実施した。

出土遺物である籠製品の製作技法を検討する基礎段階としてその材質を、また手焙形土器（14）内部に遺存していた植物状物質についても分析を行った。

土坑については、埋葬土坑の可能性を考えリン酸・カルシウム分析を、また、食物貯蔵穴の可能性を考え、採取土壌サンプル内の種実同定を行った。そして、粘土採掘土坑の可能性を考え、土坑が分布する土壌と出土土器の胎土分析を行った。出土土器の胎土分析にあたっては、石井智大氏による当該時期の集落動向の検討もあり、安濃川・雲出川・阪内川の代表的な遺跡出土土器も比較対象とした。

また、採掘の対象と推定される粘土層の形成過程、当該時期の環境復元を目的とした分析も行っている。

（山中）

【参考文献】
石井智大「弥生時代終末期における遺跡群の検討」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第17-１号　2008年

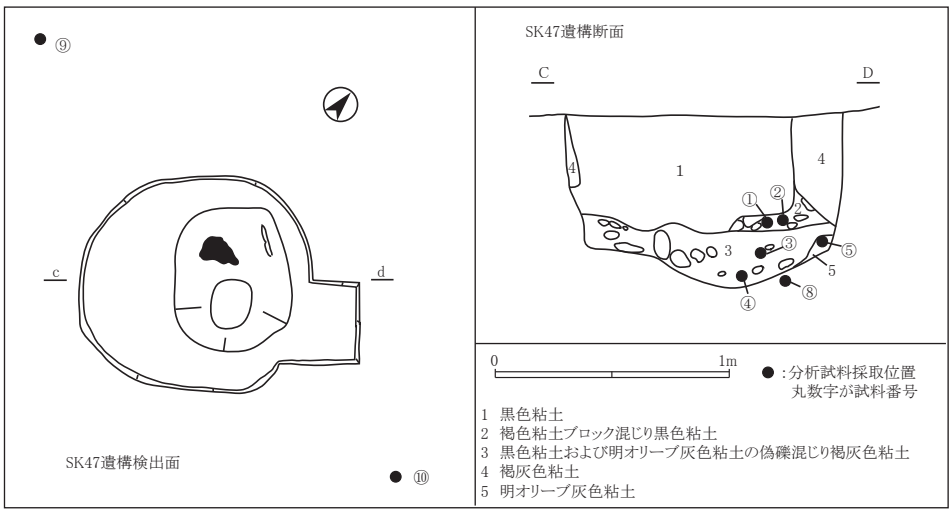
2　第２次調査区検出土坑に関する自然科学分析

（１）はじめに

相川西方遺跡は、相川によって形成された谷底の低地に立地する。第２次発掘調査の結果、250基の土坑が検出されており、その多くが粘土採掘坑と考えられているが、中にはＳＫ47のように土坑墓の可能性があるものも存在する。そこで、検出された土坑埋土を対象として、リン酸・カルシウム分析を行い、遺体埋納の可能性の検証を行う。一方、籠製品が出土したＳＫ28、ＳＫ47の籠製品周辺の土壌から、水洗選別によって種実遺体が得られたことから、これらの土坑が貯蔵穴である可能性も視野に入れて、当時の周辺植生や植物利用に関する情報を得る目的で、種実同定を行う。

（２）試料

籠製品と手焙形土器が出土した土坑ＳＫ28からは、種実分析用試料１点（試料番号11）が採取されており、これを分析試料とする。籠製品と木片が出土したＳＫ47は、リン酸・カルシウム分析用試料８点が採取されている（第100図）。２層（試料番号１・２）、３層（試料番号３・４）、５層（試料番号５）、土坑面直下（試料番号８）、対照試料として検出面から採取された試料（試料番号９・10）の８点を分析する。種実分析は、２層（試料番号12）、３層（試



第100図　ＳＫ47　リン酸・カルシウム分析試料採取位置

料番号13-15）から採取された土壌を水洗選別した試料５点を分析する。土坑２基の時期は、いずれも弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられている。

（３）分析方法

①　リン酸・カルシウム分析

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法で実施する（土壌養分測定法委員会，1981；土壌標準分析・測定法委員会，1986）。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5㎜φのふるいを全通させる（微粉砕試料）。

風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約５㎖を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10㎖を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100㎖に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

②　種実分析

試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等の図鑑との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。試料中に確認される木材・木の芽・昆虫・菌核は、抽出・プラス表示にとどめる。分析後は、種実遺体等を種類別に容器に入れ、70％程度のエタノール溶液で液浸し、保管する。

（４）結果

①　リン酸・カルシウム分析

結果を第21表に示す。リン酸含量はいずれも１mg/gに満たない状態であり、少ない。土坑内はいずれも0.2mg/g前後を示す一方、検出面から採取された対照試料は0.5mg/gを示す試料があり、若干高い傾向にある。カルシウム含量は、いずれも約３～４mg/gである。リン酸よりは値のばらつきが大きく、土坑内と対照試料間での有意差は認められない。

②　種実分析

結果を第22表、図版43に示す。ＳＫ28からは、同定可能な種実遺体は検出されず、炭化材、木材、木の芽、昆虫が確認された。ＳＫ47からは、草本のヒエ近似種、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、エノキグサ、イヌコウジュ属、シロネ属、キク科と不明種実が検出された他、多くの炭化材、木材、蘚苔類、昆虫が確認された。栽培種は、２層から炭化したヒエ近似種の果実が３個検出された。以下に、本分析で同定された種実の形態的特徴等を記す。

第21表　リン酸・カルシウム分析結果

番号	採取地点等	土性	土色		P_2O_5(mg/g)	CaO(mg/g)
1	SK47 2層	HC	10YR1.7/1	黒	0.20	3.43
2	SK47 2層	HC	7.5Y2/1	黒	0.22	4.01
3	SK47 3層	HC	7.5Y3/1	オリーブ黒	0.17	2.95
4	SK47 3層	HC	7.5Y4/1	灰	0.15	2.76
5	SK47 5層	HC	7.5Y5/1	灰	0.13	2.75
8	SK47 AW14	HC	10Y5/1	灰	0.14	3.07
9	検出面	HC	5Y3/2	オリーブ黒	0.50	2.57
10	検出面	LiC	5Y2/2	オリーブ黒	0.37	3.08

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
LiC…軽埴土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）
HC…重埴土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

第22表　種実分析結果

分類群	部位	状態		遺構・層位・試料番号・日付				
				SK28	SK47			
					2層	3層		
				11	12	13	14	15
				20090630	20090721	20090721	20090722	20090807
ヒエ近似種	果実	破片	炭化		3			
イネ科	果実	完形	非炭化		14		1	
		破片	非炭化		14			
ホタルイ属	果実	完形	非炭化					1
カヤツリグサ科	果実	完形	非炭化		11	1	1	
		破片	非炭化		6			2
キジムシロ類＊	核	完形	非炭化		1	1		
エノキグサ	種子	破片	非炭化		1			
イヌコウジュ属	果実	完形	非炭化		13	2	4	
		破片	非炭化		1		1	
シロネ属	果実	完形	非炭化			1		
キク科	果実	完形	非炭化				1	
不明種実							1	
炭化材			個数	23	166	31	126	1
			最大径	11.42㎜	15.67㎜	11.24㎜	17.43㎜	1.90㎜
木材				+	+	+	+	+
木の芽				+	+	+	+	
菌核					+		+	
昆虫				+	+	+	+	

注）試料中に確認される木材・木の芽・昆虫・菌核は、抽出・プラス表示にとどめる
注）＊キジムシロ類：キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属

・ヒエ近似種（*Echinochloa* cf. *utilis* Ohwi et Yabuno）
イネ科ヒエ属

果実の破片が検出された。炭化しており黒色。長さ２㎜、幅1.7㎜、厚さ1.4㎜程度の半狭卵体で、背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には縦方向に目立つ網目模様が縦列する。果実に１個入る胚乳は、長さ1.9㎜、幅1.2㎜、厚さ0.7㎜程度のやや偏平な倒卵体で、背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上に、胚乳の長さの2/3以上を占める縦長で馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面。

・イネ科（Gramineae）

果実が確認された。淡－灰褐色、長さ2-2.5㎜、径1.8㎜程度の半狭卵体で、背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面は平滑で微細な縦長の網目模様が縦列する。

・ホタルイ属（*Scirpus*） カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、長さ2.2㎜、径1.8㎜程度の片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。背面正中線上は鈍稜。縦方向に一周する稜に沿って半分に割れた個体がみられる。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実が検出された。ホタルイ属以外の形態上差異のある複数種を一括している。淡－黒褐色、レンズ状または三稜状倒卵体。径１-2.5㎜程度。頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。果皮表面は平滑－微細な網目模様がある。長さ２㎜、径1.3㎜程度の三稜状倒卵体で、頂部は伸びて湾曲し、表面には微細な網目模様がある、スゲ属（*Carex*）の一種と思われる個体などがみられる。

・キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属（*Potentilla－Duchesnea－Fragaria*） バラ科

核（内果皮）が検出された。淡灰褐色、長さ１㎜、幅0.7㎜、厚さ0.4㎜程度のやや偏平な腎体。内果皮は厚く硬く、表面は粗面または数個の海綿状隆条が斜上する。

・エノキグサ（*Acalypha australis* L.） トウダイグサ科エノキグサ属

種子の破片が検出された。黒灰褐色、長さ1.8㎜、径1.5㎜程度の倒卵体。基部はやや尖り、Ｙ字状の稜がある。種皮は薄く硬く、表面には細粒状凹点が密布する。

・イヌコウジュ属（*Mosla*） シソ科

果実が検出された。灰褐色、径１-1.3㎜程度の倒広卵体。基部には臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・シロネ属（*Lycopus*） シソ科

果実が検出された。灰褐色、長さ1.6㎜、径1.2㎜程度の三稜状広倒卵体。背面は平らで、両側に幅0.3㎜程度の淡褐色、海綿状の翼がある。腹面の正中線上は鈍稜をなし、基部は切形で長楕円形の臍がある。

・キク科（Compositae）

果実が検出された。淡灰褐色、長さ３㎜、幅1.5㎜程度のやや偏平な倒広皮針体。両端は切形で、頂部に円形の臍が突出する。果皮表面には微細な網目模様が縦列する。

（５）考察

リン酸は、哺乳動物の生命維持に必要な要素であり、特に、脳、内臓、骨などに多く含まれている。リン酸は土壌中にも普遍的に含まれるが、その量は動物に比べるとわずかである。また、リン酸は水に溶けにくく、土壌中での移動が少ないため、経年変化により動物遺体が消失した後も、遺体が存在した場所にとどまる可能性が高い。このため、動物が埋納された痕跡のある遺構では、リン酸値が高くなる傾向がある。ただし、火山灰土などリン酸を保持しやすい土壌や、腐植を多く含む土壌の場合も、リン酸値は高くなる傾向にあるため、土質等を考慮しながら検討する必要がある。当社がこれまで実施してきた各地の分析成果によると（田中・坂井,2007など）、沖積土における自然状態のリン酸値は１mg/g以下であることから、今回の値は自然状態の範囲内と考えられる。一方カルシウムも骨などに多く含まれる元素であるが、リン酸と比べて水に容易に溶けるため土壌中で溶脱しやすく、早い段階で拡散すると考えられる。また、土壌の母材となる地質の影響をうけやすいので、自然状態で存在する量は、地域によって大きく異なる。このため、自然状態の基準となる値を示しにくいが、対照試料との間で有意差が認められないことから、カルシウムにも自然状態の範囲内と思われる。このように、リン酸、カルシウムの値は共に自然状態の範囲内である。また遺体が埋納されるとリン酸が偏在するので、値のばらつきが大きくなるが、今回の場合値のばらつきが小さく、低い状態で安定している。以上のことから、今回の結果から動物遺体等の埋納を推定することは難しい。

検出された種実のうち、栽培種は、ＳＫ47の２層から検出されたヒエ近似種である。周辺地域での栽培、利用が推定される。微量であることから貯蔵対象として想定しがたく、炭化材も検出されていることから、火熱を受けた植物遺体が流入あるいは廃棄された可能性が考えられる。栽培種を除く種実遺体は、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、エノキグサ、イヌコウジュ属、シロネ属、キク科である。これらは、遺構付近に生育していた植物の種実に由来すると思われる。いずれも明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多いことから、周辺は開けた草地であった可能性が高い。また、ホタルイ属、シロネ属などの水湿地生植物を含むことから、周辺域に水湿地の存在が推定されるが、これは遺跡の立地環境とも調和的である。

（パリノ・サーヴェイ株式会社

田中義文・松元美由紀・斎藤紀行）

【引用文献】

土壌養分測定法委員会編,1981,土壌養分分析法.養賢堂,440p.
土壌標準分析・測定法委員会編,1986,土壌標準分析・測定法.博友社,354p.
石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.
ペドロジスト懇談会編,1984,土壌調査ハンドブック.博友社,156p.
田中義文・坂井良輔,2007,土壌理化学分析を用いた遺体埋納推定の手法と課題,徳永重元博士献呈論集,パリノ・サーヴェイ株式会社,417-428.

3　第２次調査出土籠製品および出土木材、手焙形土器底部の植物遺体について

（１）はじめに

相川西方遺跡は、相川北側の浅い谷部に位置し、古墳時代の粘土採掘坑と推定される土坑が多数検出されている。粘土採掘坑から出土する遺物は少ないが、ＳＫ28およびＳＫ47からは籠製品や手焙形土器が出土している。今回の分析調査では、ＳＫ28・47から出土した籠製品の素材、ＳＫ28の籠製品直上より出土した、手焙形土器内底部の植物遺体の種類について、薄片作成による組織観察を行い種類同定を実施する。また、手焙形土器は火を灯して使う儀式用の道具として使用の可能性があることから、底部に存在する植物遺体に油脂系の物質が残留状況を確認するために脂肪酸分析を実施する。

（２）籠製品の材質および出土木材の樹種について

①　試料

ＳＫ28およびＳＫ47から出土した籠製品各１資料である。籠製品は、それぞれ縦材と横材で大きさが異なるため、いずれの籠製品も縦材と横材について同定を実施する。この他、ＳＫ47から出土した籠製品の材料として利用された可能性がある木材片１点についても樹種同定を実施する。

②　方法

剃刀の刃を用いて、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

第23表　樹種同定結果

遺構名	遺物名	部位	種類名
SK28	籠製品	縦材	イネ科タケ亜科
		横材	イネ科タケ亜科
SK47	籠製品	縦材	イネ科タケ亜科
		横材	イネ科タケ亜科
	木材	―	ウツギ属

③　結果

同定結果を第23表、図版44に示す。ＳＫ28・ＳＫ47の籠製品の縦材・横材は、全てイネ科タケ亜科に同定された。ＳＫ47より出土した木片は、落葉広葉樹のウツギ属に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ウツギ属（*Deutzia*）　ユキノシタ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、１－４細胞幅、40－100細胞高以上のものまである。放射組織には鞘細胞が認められる。

・イネ科タケ亜科（Gramineae subfam. Bambusoideae）

原生木部の小径の道管の左右に１対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成するが、繊維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

④　考察

今回調査を行ったＳＫ28とＳＫ47出土の籠製品は、縦材と横材が１本ずつ交互に編まれており、隙間はほとんど無い状態である。ＳＫ28およびＳＫ47の籠製品は、縦材・横材ともに全てタケ亜科に同定されたことから、籠製品類の素材としてタケ・ササ類の稈が利用されていることが推定される。タケ・ササ類の稈は、繊維にそって軸方向に割りやすく、靭性や耐水性が比較的高い材質を有しており、籠製品の素材としては適材である。本地域では、こうした編組製品の素材に関する資料がほとんど無いため、木材利用・植物利用については、今後の資料蓄積が必要である。なお、ＳＫ47から籠製品と同じ層準より出土した木材はウツギ属に同定された。籠製品の材質とは異なるものであり、周囲に生育していたウツギ属の枝材が何らかの過程をへて、土坑内に取り込まれたものと思われる。

（３）手焙形土器底部の植物遺体について

①　試料

ＳＫ28より出土した手焙形土器内の底面には、草

本の茎や葉などに由来する植物遺体が丸まって貼り付いている。試料は、植物遺体同定用として、状態の良い場所からピンセットで植物遺体片を採取した。脂肪酸分析試料は、土器面に貼り付いている植物遺体裏面の中心部と縁辺部より、洗浄済のピンセットを使用して植物遺体を採取し、対照試料として土器を充填していた堆積物（遺構埋土）を１点採取した。

②　方法

１）植物遺体の同定

植物遺体を合成樹脂で包埋し、樹脂を固化させる。植物遺体の断面が出るようにダイヤモンドカッターで切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドグラスに接着し、反対側も切断と研磨を行ってプレパラートとする。生物顕微鏡で組織構造などを観察する。

２）脂肪酸分析

分析は、坂井ほか（1996）に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。試料が浸るに十分なクロロホルム：メタノール（２：１）を入れ、超音波をかけながら脂質を抽出する。ロータリーエバポレーターにより、溶媒を除去し、抽出物を塩酸－メタノールでメチル化を行う。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップパックシリカを使用して脂肪酸メチルエステル、ステロールを分離する。脂肪酸のメチルエステルの分離は、キャピラリーカラム（ULBON、HR-SS-10、内径0.25㎜、長さ30m）を装着したガスクロマトグラフィー（GC-14A、SHIMADZU）を使用した。注入口温度は250℃、検出器は水素炎イオン検出器を使用する。ステロールの分析は、キャピラリーカラム（J&W SCIENFIC、DB-1、内径0.36㎜、長さ30m）を装着する。注入口温度は320℃、カラム温度は270℃恒温で分析を行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

③　結果

１）植物遺体の種類

ＳＫ28の植物遺体については、組織が潰れており、種類の同定には至らなかった。

２）脂肪酸分析

結果を第24表に示す。脂肪酸はいずれの試料も未検出である。中心部の植物遺体ではステロールが検出され、エルゴステロールが73.8%、カンペステロールが11.0%、スティグマステロールが15.3%である。縁辺部と遺構（埋土）では、ステロールも未検出である。

④　考察

手焙形土器の底部に貼り付いていた植物遺体は、草本の茎が丸まっているように見えるが、本来の形状はあまり残っていない。薄片作製を行った植物遺体資料は、繊維細胞等が認められ、植物遺体であることは明らかであるが、組織が潰れており、種類の同定には至らなかった（図版44）。

一方、植物遺体の脂肪酸分析では、いずれの試料も脂肪酸が未検出であった。中心部の試料では、ステロールが検出されるが、縁辺部の試料ではステロールも未検出である。中心部に認められたステロールのうち、エルゴステロールは、菌類等に由来するステロール、カンペステロールとスティグマステロールは植物由来のステロールである。この結果は、試料が草本類の茎もしくは地下茎状と考えられる観察結果とも調和的であり、遺構埋土から検出されないことを考慮すれば、植物由来のステロールは植物遺体に由来すると推定される。また、最も割合が高かったエルゴステロールは、植物体の腐朽により繁殖した菌類に由来すると思われる。

（パリノ・サーヴェイ株式会社　高橋敦・田中義文）

【引用文献】

林昭三, 1991, 日本産木材　顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所. 66-176.
伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
坂井良輔・小林正史・藤田邦雄, 1996, 灯明皿の脂質分析.「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）　第二分冊」, 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第７集, 財団法人富山県文化振興財団, 24-37.
島地謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（編）, 1998, 広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩（日本語版監修）, 海青社, 122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

第24表　脂質分析結果

種類＼試料名	SK28 手焙形土器内植物遺体		対照試料
	中心部	縁辺部	遺構(埋土)
脂肪酸組成			
ミリスチン酸 (C14)	—	—	—
パルミチン酸 (C16)	—	—	—
パルミトレイン酸 (C16:1)	—	—	—
ステアリン酸 (C18)	—	—	—
エライジン酸 (C18:1trans)	—	—	—
オレイン酸 (C18:1cis)	—	—	—
リノール酸 (C18:2)	—	—	—
αリノレン酸 (C18:3)	—	—	—
アラキジン酸 (C20)	—	—	—
イコセン酸 (C20:1)	—	—	—
アラキドン酸 (C20:4)	—	—	—
ベヘン酸 (C22)	—	—	—
ドコセン酸 (C22:1trans)	—	—	—
エルカ酸 (C22:1cis)	—	—	—
イコサペンタエン酸 (C20:5)	—	—	—
リグノセリン酸 (C24)	—	—	—
テトラコセン酸 (C24:1)	—	—	—
ドコサヘキサエン酸 (C22:6)	—	—	—
ステロール組成			
コプロスタノール	—	—	—
コレステロール	—	—	—
エルゴステロール	73.8	—	—
カンペステロール	11.0	—	—
スティグマステロール	15.3	—	—
シトステロール	—	—	—
分析試料の重量(g)	.013g	.018g	2.48g

4　胎土分析および古環境復元について

（1）はじめに

相川西方遺跡は、伊勢平野南部を流れる雲出川中流域左岸に分布する久居台地と呼ばれる段丘内に位置する。調査区の南側には相川と呼ばれる小河川が流れており、流路沿いに狭小な沖積低地を形成している。調査区は段丘縁辺からその沖積低地にかけて広がっている。なお、吉田ほか（1995）による地質区分に従えば、調査区の位置する段丘は中位Ⅱ段丘に相当するが、その形成年代は明らかにされていない。

これまでの発掘調査により、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に掘削された粘土採掘坑と考えられる土坑が700基以上確認されている。本報告では、これらの粘土採掘坑において採取対象となった堆積物（粘土）が土器の原材料として使用された可能性を検討することを目的として、堆積物および土器の特性を、薄片作成観察にもとづく、岩石学的な手法による胎土分析により把握し、比較する。なお、土器は相川西方遺跡で出土したものを中心とするが、周辺の遺跡で出土したほぼ同時期とされる土器についても分析を行い、周辺地域を含めての土器の原材料に関わる資料を作成する。

また、本報告では、遺跡の層序と立地環境に関する基礎的情報を得ることを目的に、調査区内の堆積物について、放射性炭素年代測定、テフラ組成分析（重鉱物＋火山ガラス比）、火山ガラス屈折率測定を併せて実施する。これらの分析については、堆積物の層序・年代から土器の原材料を検討する側面もある。さらに、土器の原材料の可能性がある泥層については、古植生復元を目的に花粉分析を行う。

（2）試料

分析を実施する試料は、19点の胎土分析試料、３点の放射性炭素年代測定試料、７点のテフラ組成分析試料（重鉱物＋火山ガラス比）、３点の火山ガラス屈折率測定試料、２点の花粉分析試料である。このうち、火山ガラス屈折率測定試料は、テフラ組成分析結果をふまえ、有効な試料３点について選択し、測定を行う。第25表に分析試料の一覧を呈示する。第101図に堆積物試料の累重状況を示した層序模式柱状図と分析試料の採取位置について示す。

胎土分析試料は、相川西方遺跡の調査区内より採取された堆積物試料３点と同遺跡から出土した弥生時代後期～古墳時代初頭とされる土器の破片10点および伊勢平野に分布する高松Ｃ遺跡、四ツ野Ｂ遺跡、阿形遺跡の各遺跡から出土した土器の破片各２点ずつの合計16点の土器試料である。

堆積物試料は、第２次調査の調査区中央付近に設定された２トレンチ（以下２trとする）の深さ約１ｍの断面より柱状試料として採取されている。柱状試料は、断面の上半分と下半分に分割され、これらのうち、今回の分析では上半分から、試料が採取された。上半分では、褐灰色を呈するシルト質粘土の最上層（第Ⅶ層）、明オリーブ灰色を呈するシルト～シルト質砂層の第２層（第Ⅷ層）、黒色を呈する粘土質シルト層の第３層（第Ⅸ層）からなる。胎土分析試料としては、試料番号１が最上層（第Ⅶ層）、試料番号２が第２層（第Ⅷ層）、試料番号３が第３層（第Ⅸ層）より採取された。なお、最上層は、粘土採掘坑において採取対象となった粘土が累重する層位である。第２層はバブル型火山ガラスからなるテフラ降下堆積層と判断され、このテフラが粘土化と撹乱を受けた層位である。第３層は、テフラ層直下の土壌化した層位（古土壌）である。

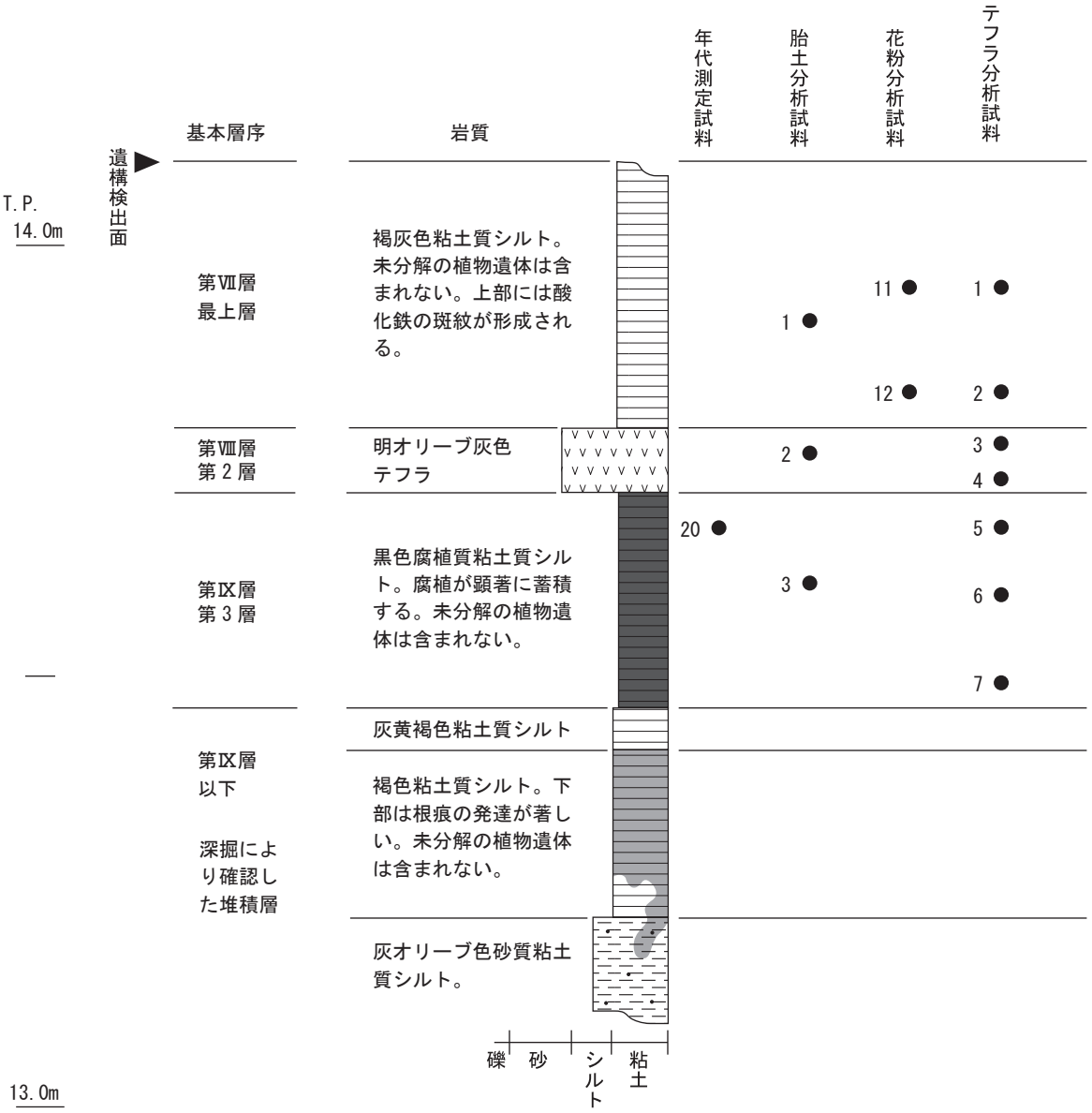
土器試料のうち、相川西方遺跡出土試料10点は、試料番号４～13が付されている。器種にはタタキ甕、台付甕、甕、壺、高坏が含まれている。高松Ｃ遺跡は、相川西方遺跡から北東方向へ約２㎞離れた岩田川流域に位置する遺跡であり、出土遺物は相川西方遺跡とほぼ同時期とされている。２点の試料は試料番号14、15とされ、それぞれ壺体部片と台付甕体・台接合部である。四ツ野Ｂ遺跡は相川西方遺跡から南東方向へ約3.5㎞離れた雲出川流域に位置し、出土遺物は弥生時代後期～古墳時代中期とされている。２点の試料は、試料番号16、17とされ、それぞれ壺体部片と甕体部片である。阿形遺跡は、相川西方遺跡から南へ約14.5㎞離れた阪内川流域に位置し、出土遺物は弥生時代後期後葉とされている。２点の試料は、試料番号18、19とされ、それぞれ壺と甕とされている。

放射性炭素年代測定試料３点は、試料番号20、21、22として、それぞれ、上述した試料番号３と同

第25表　分析試料一覧

試料番号	層名・遺跡名・器種等	地区・採取位置	遺構・層位	年月日	備考	胎土分類	分析
1	2trサンプル最上層	下層確認	2trサンプリング	20091127	柱状堆積物試料上半分 第Ⅶ層（概報報告層位）	－	胎土
2	2trサンプル第2層	下層確認	2trサンプリング	20091127	柱状堆積物試料上半分 第Ⅷ層（概報報告層位）	－	
3	2trサンプル第3層	下層確認	2trサンプリング	20091127	柱状堆積物試料上半分 第Ⅸ層（概報報告層位）	－	
4	相川西方遺跡　タタキ甕	AM15	SK94	20090626	011-02（報16）	A	
5	相川西方遺跡　台付甕	AK13・14	SK83	20090904	011-01（報12）	A	
6	相川西方遺跡　台付甕	AA17	SK132	20091001	013-01（報22）	B	
7	相川西方遺跡　壺体部	AW16	SK18	20090623	004-01（報４）	B	
8	相川西方遺跡　壺体部	AY14	SK14	20090619	003-01（報３）	B	
9	相川西方遺跡　壺頸部	AT17	SK25	20090626	007-01（報７）	BA	
10	相川西方遺跡　高坏	AS16	SK23	20090626	006-01（報６）	BA	
11	相川西方遺跡　甕	AM15	SK74	20090819	010-01（報10）　近江系	C	
12	相川西方遺跡　甕	BA15	SK3	20090616	002-01（報２）	B	
13	相川西方遺跡　高坏	AF7	SK327	20090910	実測せず	AB	
14	高松C遺跡　壺体部片		SH25(旧32号住居)		岩田川流域、相川西方遺跡から約2km、相川西方遺跡と同時期	AB	
15	高松C遺跡　台付甕体・台接合部		SH25(旧32号住居)			A	
16	四ツ野B遺跡　壺体部片		SH35　一括	920814	雲出川流域、相川西方遺跡から約3.5km、弥生時代後期から古墳時代中期	A	
17	四ツ野B遺跡　甕体部片		SH35　一括	920814		A	
18	阿形遺跡　壺（報106）	N3	SD103	911204	阪内川流域、相川西方遺跡から約14.5km、弥生時代後期後葉	A	
19	阿形遺跡　甕（報170）	N4	SD103　No.25	911202		A	
20	試料番号3と同一試料	下層確認	2trサンプリング	20091127	柱状堆積物試料上半分 第Ⅸ層（概報報告層位）	－	14C
22-1	9trサンプル（第4次調査）　木材	下層確認	9trサンプリング	20091127		－	
22-2	9trサンプル（第4次調査）　種実	下層確認	9trサンプリング	20091127		－	
1	2trサンプル最上層（下部）	下層確認	2trサンプリング	20091127	柱状堆積物試料上半分 第Ⅶ層（概報報告層位）	－	テフラ
2	2trサンプル最上層（最下部）	下層確認	2trサンプリング	20091127	柱状堆積物試料上半分 第Ⅶ層（概報報告層位）	－	
3	2trサンプル第2層（上部）	下層確認	2trサンプリング	20091127	柱状堆積物試料上半分 第Ⅷ層（概報報告層位）	－	
4	2trサンプル第2層（下部）	下層確認	2trサンプリング	20091127	柱状堆積物試料上半分 第Ⅷ層（概報報告層位）	－	
5	2trサンプル第3層（上部）	下層確認	2trサンプリング	20091127	柱状堆積物試料上半分 第Ⅸ層（概報報告層位）	－	
6	2trサンプル第3層（中部）	下層確認	2trサンプリング	20091127	柱状堆積物試料上半分 第Ⅸ層（概報報告層位）	－	
7	2trサンプル第3層（下部）	下層確認	2trサンプリング	20091127	柱状堆積物試料上半分 第Ⅸ層（概報報告層位）	－	
8	テフラ組成分析結果をふまえ、測定試料選択	下層確認	2trサンプリング	20091127	テフラ組成分析試料2測定	－	屈折率
9	テフラ組成分析結果をふまえ、測定試料選択	下層確認	2trサンプリング	20091127	テフラ組成分析試料3測定	－	
10	テフラ組成分析結果をふまえ、測定試料選択	下層確認	2trサンプリング	20091127	テフラ組成分析試料4測定	－	
11	2trサンプル最上層（下部）	下層確認	2trサンプリング	20091127	柱状堆積物試料上半分 第Ⅶ層（概報報告層位）	－	花粉
12	2trサンプル最上層（最下部）	下層確認	2trサンプリング	20091127	柱状堆積物試料上半分 第Ⅶ層（概報報告層位）	－	

註）
2trの最上層は、高さ51cm×幅26cm×奥行き23cm、重さ49.5gの柱状採取土の最上層、厚さ約31cm.
2trの第2層は、試料番号1の下層、厚さ約12cm.
2trの第3層は、試料番号2の下層、厚さ約8cm.



第101図　堆積物分析試料の層序と分析層序の採取位置

一の堆積物、２trで採取された下半分の試料の第３層、第４次調査の９トレンチ（９tr）で採取された堆積物中の炭化物が当初の分析試料であった。しかし、試料番号21については、事前の観察により、腐植含量が少なく測定には不適と判断されたために除外した。代わりに試料番号22の対象とされた堆積物より、木材片と種実を各１点ずつ採取し、これらを測定対象とした。便宜上これらを試料番号22-1、22-2とする。なお、木材片は組織観察から広葉樹材であり、種実はセンダンであることを確認した。

テフラ組成分析試料７点は、試料番号１、２、３、４、５、６、７として、上述した２tr採取試料であり、試料番号１、２が最上層の下部と最下部、試料番号３、４がテフラ降下堆積層の第２層の上部と下部、試料番号５、６、７が古土壌の第３層の上部、中部、下部である。

火山ガラス屈折率測定試料３点は、試料番号８、９、10として、テフラ組成分析試料の試料番号２、４、７について測定した。

花粉分析試料３点は、試料番号11、12として、上述した２tr採取試料の最上層の下部と最下部で実施し、テフラ組成分析試料の試料番号１、２の同層準である。

（３）分析方法

①　胎土分析

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉砕による重鉱物分析や切片による薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光Ｘ線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があり、その中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか（1999）の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5㎜間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5㎜以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

②　放射性炭素年代測定

土壌試料の放射性炭素年代測定では、HClによる酸処理の後にNaOHによるアルカリ処理を行い、腐植物質を構成する物質のうち腐植酸およびフルボ酸といったアルカリ可溶成分を除去し、抽出残渣であるヒューミンを測定の対象とすることが多い。しかし、このように抽出されたヒューミンには、現生の根等に由来する有機物も含まれてしまうことも多い。したがって、本分析では、HClによる酸処理のみを行い、腐植物質全体を測定対象とする。

木材および種実の試料については、土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

土壌および木材・種実試料は、上述した処理の後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。乾燥させた試料をバイコール管に入れ、１gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0

（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正は、CALIB6.0.0のマニュアルにしたがい、１年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68％の確率で存在する範囲、2σは真の値が95％の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表された値を記す。

③　テフラ分析

観察されたテフラは、細粒の火山ガラスの濃集している状況が認められたことから、テフラの本質物である斑晶鉱物も含有されている可能性があると考えられた。そこでテフラの特性として、テフラ層中に含まれる遊離結晶の重鉱物組成とテフラを構成する火山ガラスの量比とその形態組成（テフラ組成分析）およびその屈折率（火山ガラス屈折率測定）を求め、テフラの同定を行う。以下に処理手順を述べる。

試料40～60gに水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16㎜より小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径1/4㎜－1/8㎜の砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定し、重鉱物組成を算出する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

火山ガラス比分析は、重液分離により得られた軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の３つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

火山ガラスの屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

④　花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛,比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

（４）結果

①　胎土分析

薄片観察結果を第26～29表、第102～105図に示す。以下に、鉱物片および岩石片の種類構成、砂分全体の粒径組成、砕屑物・基質・孔隙における砕屑物の割合、焼成温度の順に述べる。

１）鉱物片および岩石片の種類構成

ａ）堆積物試料

２trサンプル上半分最上層の試料番号１では、石英の鉱物片が多く、次いで斜長石の鉱物片が比較的多く含まれ、少量の角閃石の鉱物片が含まれる。他に微量の火山ガラスと極めて微量の不透明鉱物や多結晶石英が含まれ、植物片や植物珪酸体なども微量

第26表　薄片観察結果１

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																												合計
			鉱物片									岩石片												その他							
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	白雲母	黒雲母	ザクロ石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	粘板岩	脈石英	変質岩	火山ガラス	酸化鉄結核	粘土塊	植物片	植物珪酸体	
1 2trサンプル （上半分） 最上層	砂	細礫																											0
		極粗粒砂																											0
		粗粒砂															1												1
		中粒砂	1		1		1															2							5
		細粒砂	13		7		2				1											2							25
		極細粒砂	14		8		4										1								1	1			29
		粗粒シルト	14		5		2																		1	6			28
		中粒シルト	1																										1
	基質																												1348
	孔隙																												320
	備考		基質は褐色粘土、セリサイト、炭質物などで埋められる。																										
2 2trサンプル （上半分） 第2層	砂	細礫																											0
		極粗粒砂																											0
		粗粒砂																				1			1				2
		中粒砂																				12			1				13
		細粒砂	1		2		1															51			2				57
		極細粒砂					1	1														76							78
		粗粒シルト			1																	49							50
		中粒シルト																											0
	基質																												742
	孔隙																												147
	備考		基質は褐色粘土鉱物、炭質物などで埋められる。火山ガラスはバブルウォール型。																										
3 2trサンプル （上半分） 第3層	砂	細礫																							1				1
		極粗粒砂																							5				5
		粗粒砂																							11				11
		中粒砂																							9				9
		細粒砂	3																						16				19
		極細粒砂	2																						3				5
		粗粒シルト	21		1																					1			23
		中粒シルト	1																										1
	基質																												1167
	孔隙																												477
	備考		基質は炭質物、褐色粘土鉱物、セリサイトなどによって埋められる。炭質物が多く、黒褐色を呈する。																										
4 相川西方 タタキ甕	砂	細礫																1											1
		極粗粒砂	2		1																								3
		粗粒砂	9	2	4												7	6											28
		中粒砂	11	8	8				1								1	3											32
		細粒砂	15	3	11		1	1																					31
		極細粒砂	13	3	2																	1							19
		粗粒シルト	3	1	3			1																					8
		中粒シルト																											0
	基質																												526
	孔隙																												17
	備考		基質は黒雲母質で褐色を示す。																										
5 相川西方 台付甕	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	3	1																									4
		粗粒砂	5		4												5	6		1									21
		中粒砂	11	4	7				1			1	1				4	3		1				1					34
		細粒砂	18	2	10							2	2																34
		極細粒砂	9	4	4	1						1										1							20
		粗粒シルト	2		2																					2			6
		中粒シルト																											0
	基質																												408
	孔隙																												8
	備考		基質は雲母鉱物質で淡褐色を示す。火山ガラスはバブルウォール型。																										

第27表　薄片観察結果２

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																										合計
			鉱物片										岩石片											その他					
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	白雲母	黒雲母	ザクロ石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	粘板岩	脈石英	変質岩	火山ガラス	酸化鉄結核	粘土塊	植物片	植物珪酸体	
6 相川西方 台付甕	砂	細礫																											0
		極粗粒砂															1												1
		粗粒砂	9	5	2					1							3	1											21
		中粒砂	31	3	2			1	1			5					4												47
		細粒砂	44		10		1		1			6					1	1											64
		極細粒砂	14		4						1	1					1												21
		粗粒シルト	9		1																								10
		中粒シルト																											0
	基質																												562
	孔隙																												14
	備考		基質は淡褐色粘土鉱物、セリサイトなどで埋められる。石英粒子の中には針状の珪線石を包有するものが認められる。																										
7 相川西方 壺体部	砂	細礫																											0
		極粗粒砂																											0
		粗粒砂	3														1						1						5
		中粒砂	11	1								1				2	1				1	1							18
		細粒砂	11	1	4				1			3					1					2							23
		極細粒砂	3	1	1			1																				1	7
		粗粒シルト	2	1	1																							4	8
		中粒シルト																											0
	基質																												333
	孔隙																												19
	備考		基質は雲母鉱物質で褐色を示す。火山ガラスはバブルウォール型。変質岩は凝灰岩？の風化岩。																										
8 相川西方 壺体部	砂	細礫																											0
		極粗粒砂																											0
		粗粒砂	4	1	1												2												8
		中粒砂	11	3	1				4			2	1	3			2			1									28
		細粒砂	27	2	2							10	1		1		3												46
		極細粒砂	23	2	4			1	2			6	2				1												41
		粗粒シルト	7		2																								9
		中粒シルト																											0
	基質																												506
	孔隙																												20
	備考		基質は雲母鉱物質で褐色を示す。凝灰岩は、新第三紀以降のもの。																										
9 相川西方 壺頸部	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	1	1	1													1							1				5
		粗粒砂	2		2				2									5											11
		中粒砂	3		1																								4
		細粒砂	27	2	2							1	2				1					2							37
		極細粒砂	37	3	14			1	1																				56
		粗粒シルト	15		2		1															1					2		21
		中粒シルト																											0
	基質																												440
	孔隙																												11
	備考		基質は黒雲母質で褐色を示す。火山ガラスはバブルウォール型。																										
10 相川西方 高坏	砂	細礫										1																	1
		極粗粒砂																											0
		粗粒砂	1														2												3
		中粒砂	7		2																								9
		細粒砂	19	1	3							1					1	1											26
		極細粒砂	32	1	4												1												38
		粗粒シルト	18		5																							1	24
		中粒シルト	1																										1
	基質																												393
	孔隙																												2
	備考		基質はシルト質で、褐色粘土や、石英、長石類、セリサイト等の鉱物片などで埋められる。針状珪線石を含有する石英、弱酸化した角閃石、バブルウォール型火山ガラスあり。																										

第28表　薄片観察結果３

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																										合計
			鉱物片									岩石片										その他							
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	白雲母	黒雲母	ザクロ石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	粘板岩	脈石英	変質岩	火山ガラス	酸化鉄結核	粘土塊	植物片	植物珪酸体	
11 相川西方 甕	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	3		1								1	1				2											8
		粗粒砂	3	5	4							3	2	2		1	2	5		1									28
		中粒砂	1	2														1	1										5
		細粒砂	1											1	1														3
		極細粒砂	3		1																								4
		粗粒シルト	3		2		1																					1	7
		中粒シルト	1																										1
	基質																												344
	孔隙																												5
	備考		基質は雲母鉱物質で、炭質物が多く、黒褐色を示す。流紋岩は結晶質なものと、低結晶性のものが二種存在する。																										
12 相川西方 甕	砂	細礫	1																										1
		極粗粒砂	5	1	2												1												9
		粗粒砂	4		1													2											7
		中粒砂	8	2	1				1			3	1			1	1												18
		細粒砂	21	5	5		1		1			5					2					1							41
		極細粒砂	15		3				1			2																	21
		粗粒シルト	9		1																								10
		中粒シルト																											0
	基質																												365
	孔隙																												19
	備考		基質は黒雲母質で褐色を示す。角閃石は弱酸化している。流紋岩は結晶質。																										
13 相川西方 高坏	砂	細礫																1											1
		極粗粒砂			1																								1
		粗粒砂			2				1									3											6
		中粒砂	6	1	3				1			2					1					1							15
		細粒砂	16	2	8		2					4					1					2							35
		極細粒砂	16		12		1					3										1					1		34
		粗粒シルト	10		6																						2		18
		中粒シルト																											0
	基質																												458
	孔隙																												11
	備考		基質は雲母鉱物質。火山ガラスはバブルウォール型。ザクロ石あり。																										
14 高松C 壺体部片	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	3		1							1					1												6
		粗粒砂	6	2	5												1	3											17
		中粒砂	19	4	6												3	4											36
		細粒砂	41	5	12			3				4	1		1														67
		極細粒砂	35	1	14		2					5	1									1							59
		粗粒シルト	7		6																						2		15
		中粒シルト																											0
	基質																												808
	孔隙																												24
	備考		基質は雲母鉱物質で褐色を示す。ザクロ石あり。針状の珪線石を含有する石英、花崗岩あり。																										
15 高松C 台付甕体・ 台接合部	砂	細礫		1																									1
		極粗粒砂	1	3														2											6
		粗粒砂	11	4	4												2	8			1								30
		中粒砂	7	2	3		1		1							1	1	5											21
		細粒砂	26	2	3				2				1					1											35
		極細粒砂	30	3	10						1																		44
		粗粒シルト	2		2																								4
		中粒シルト			1																								1
	基質																												488
	孔隙																												21
	備考		基質は雲母粘土鉱物や炭質物などから構成され、黒褐色を示す。針状珪線石を包有する石英あり。ザクロ石あり。花崗岩は黒雲母花崗岩が多く、白雲母、角閃石を含むものもある。流紋岩は結晶質。																										

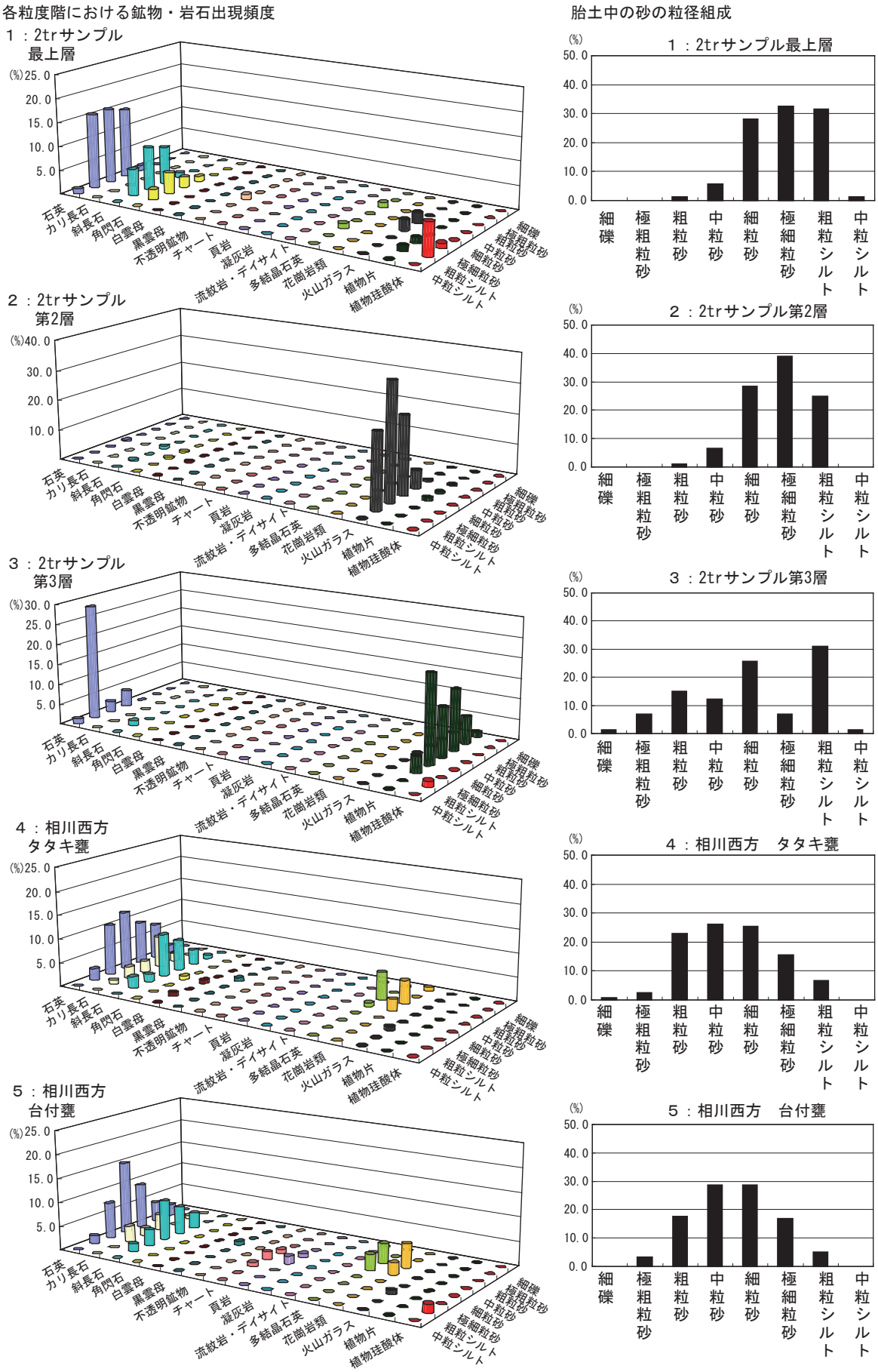
第29表　薄片観察結果４

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																										合計
			鉱物片									岩石片										その他							
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	白雲母	黒雲母	ザクロ石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	粘板岩	脈石英	変質岩	火山ガラス	酸化鉄結核	粘土塊	植物片	植物珪酸体	
16 四ツ野B 壺体部片	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	2	2	8				2								1	10											25
		粗粒砂	5	2	6												2	14											29
		中粒砂	7	1	4					1							1	3											17
		細粒砂	16	1	6				3		1						1					1							29
		極細粒砂	11	2	4				1																				18
		粗粒シルト	5		2																							1	8
		中粒シルト																											0
	基質		495																										
	孔隙		24																										
	備考		基質は雲母鉱物質で淡褐色を示す。火山ガラスはバブルウォール型。																										
17 四ツ野B 甕体部片	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	1		1							1						3											6
		粗粒砂	5	1	2												1	3											12
		中粒砂	10	2	8					1			1				2	1											25
		細粒砂	17	2	5		1	1									2	1											29
		極細粒砂	16		12						1	1																	30
		粗粒シルト	4		4																								8
		中粒シルト	2																										2
	基質		305																										
	孔隙		9																										
	備考		基質は黒雲母質で褐色を示す。角閃石は弱酸化している。																										
18 阿形 壺（報106）	砂	細礫																											0
		極粗粒砂																2											2
		粗粒砂	8	2	1												6	3											20
		中粒砂	13	7	10										1		2	1				1							35
		細粒砂	21	1	7		1		3			1										2							36
		極細粒砂	24	1	8		1															1							35
		粗粒シルト	8		2		1				1																	1	13
		中粒シルト	3																										3
	基質		591																										
	孔隙		16																										
	備考		基質はシルト質で、石英、長石類、雲母鉱物などで埋められる。火山ガラスはバブルウォール型。																										
19 阿形 甕（報170）	砂	細礫																											0
		極粗粒砂	2														1												3
		粗粒砂	10															1											11
		中粒砂	13	2	2																								17
		細粒砂	7								1																		8
		極細粒砂	13		1																								14
		粗粒シルト	6		2																							1	9
		中粒シルト	2																										2
	基質		548																										
	孔隙		6																										
	備考		基質は雲母鉱物質。緑簾石、ジルコン、未酸化の角閃石、バブルウォール型火山ガラスあり。																										

認められた。２trサンプル上半分第２層の試料番号２では、砂粒のほとんどは無色透明のバブル型火山ガラスからなり、他には極めて微量の石英、斜長石、角閃石、白雲母などの鉱物片が認められるのみであり、岩石片は認められない。２trサンプル上半分第３層の試料番号３では、多量の植物片が含まれており、砂粒は、少量の石英と極めて微量の斜長石のみであり、岩石片は認められない。

ｂ）土器試料

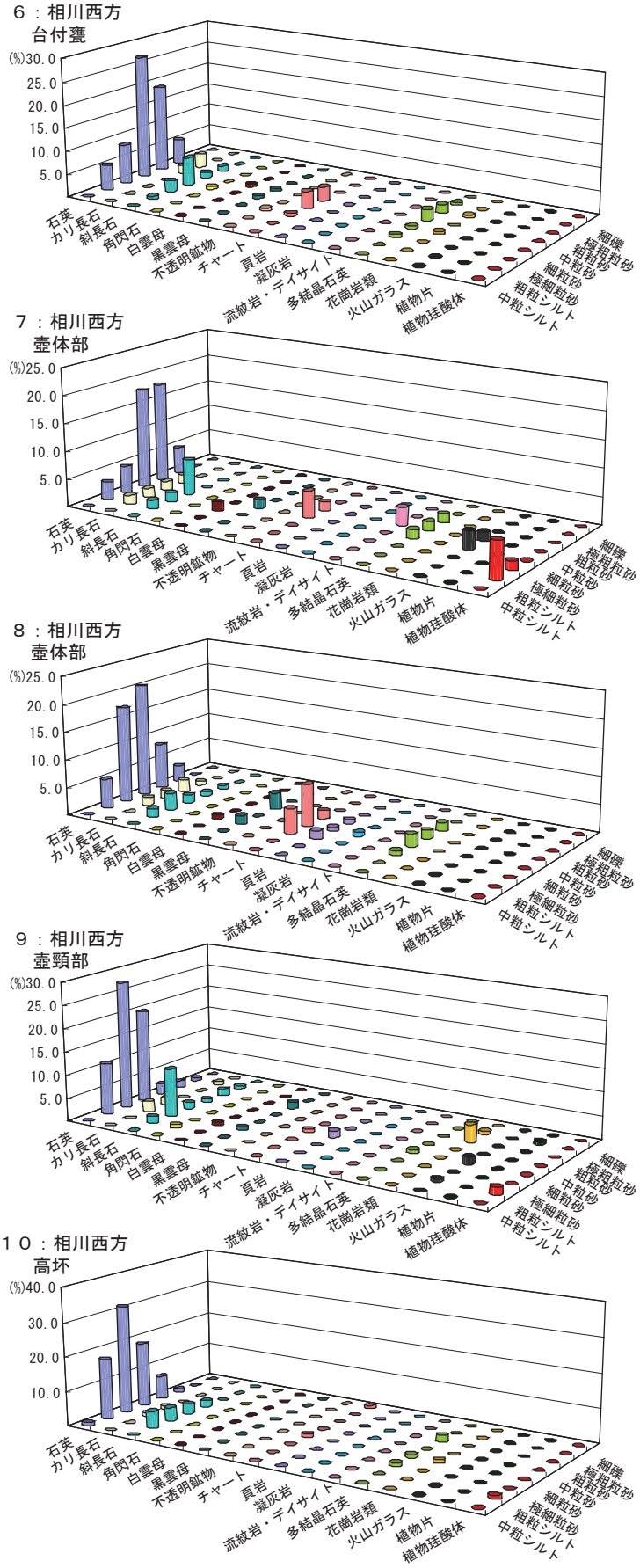
全試料において砂粒の主体を占めるのは石英の鉱物片であり、また石英以外の主要な鉱物片および岩石片の種類も全試料ほぼ共通する。すなわち、鉱物片ではカリ長石と斜長石が主体を占め、岩石片ではチャートあるいは多結晶石英と花崗岩類が主体とな

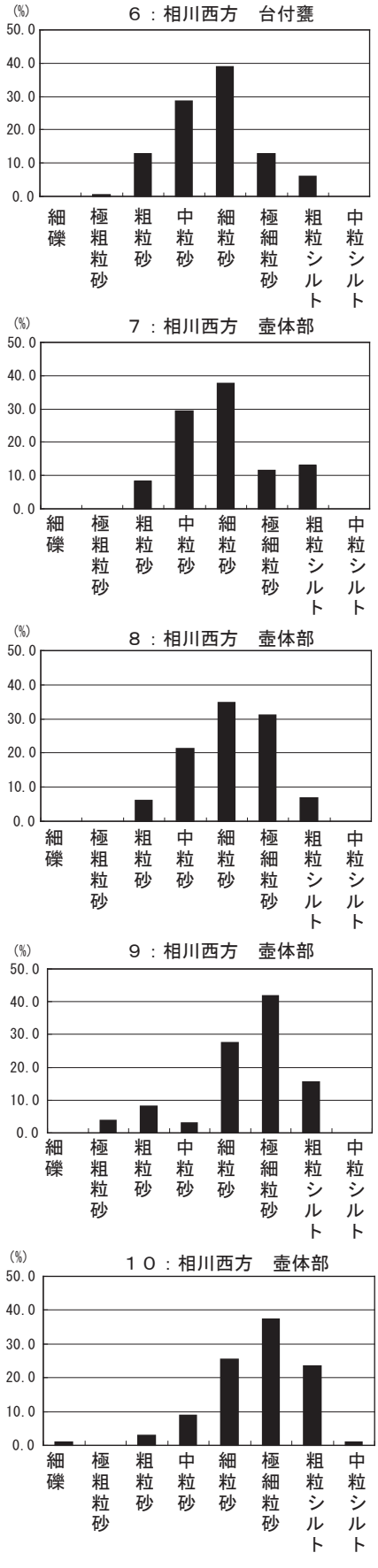


第102図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その１）

各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

胎土中の砂の粒径組成

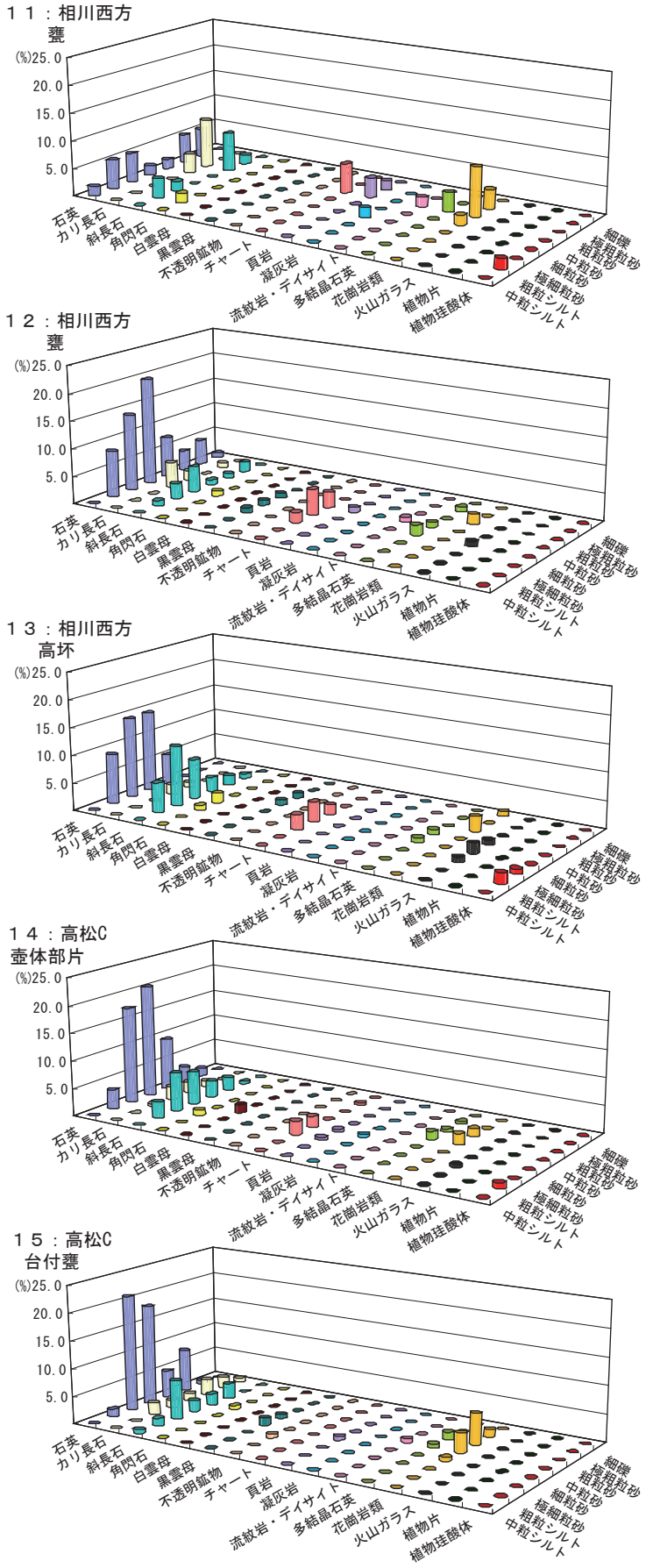


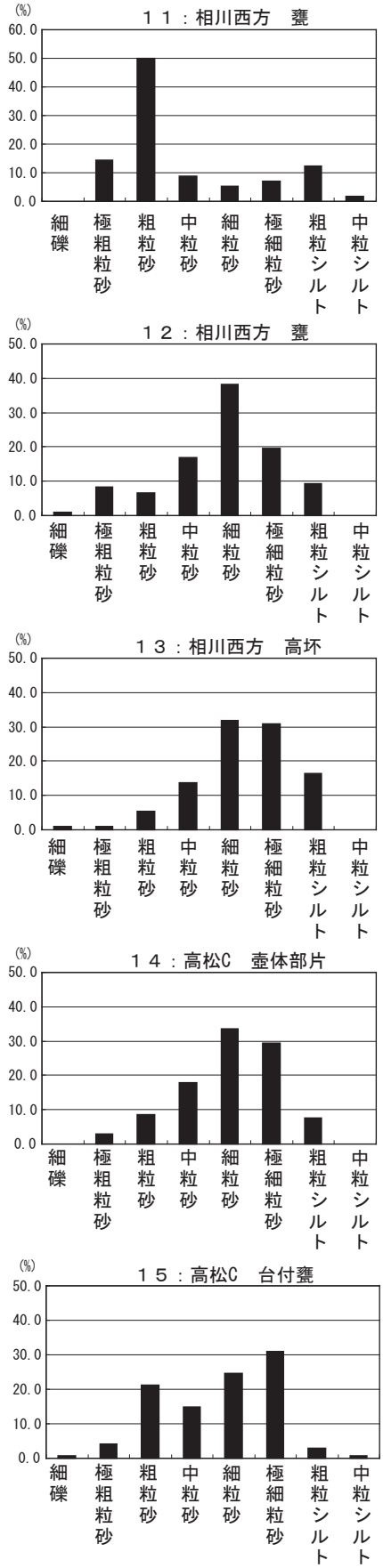


第103図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その２）

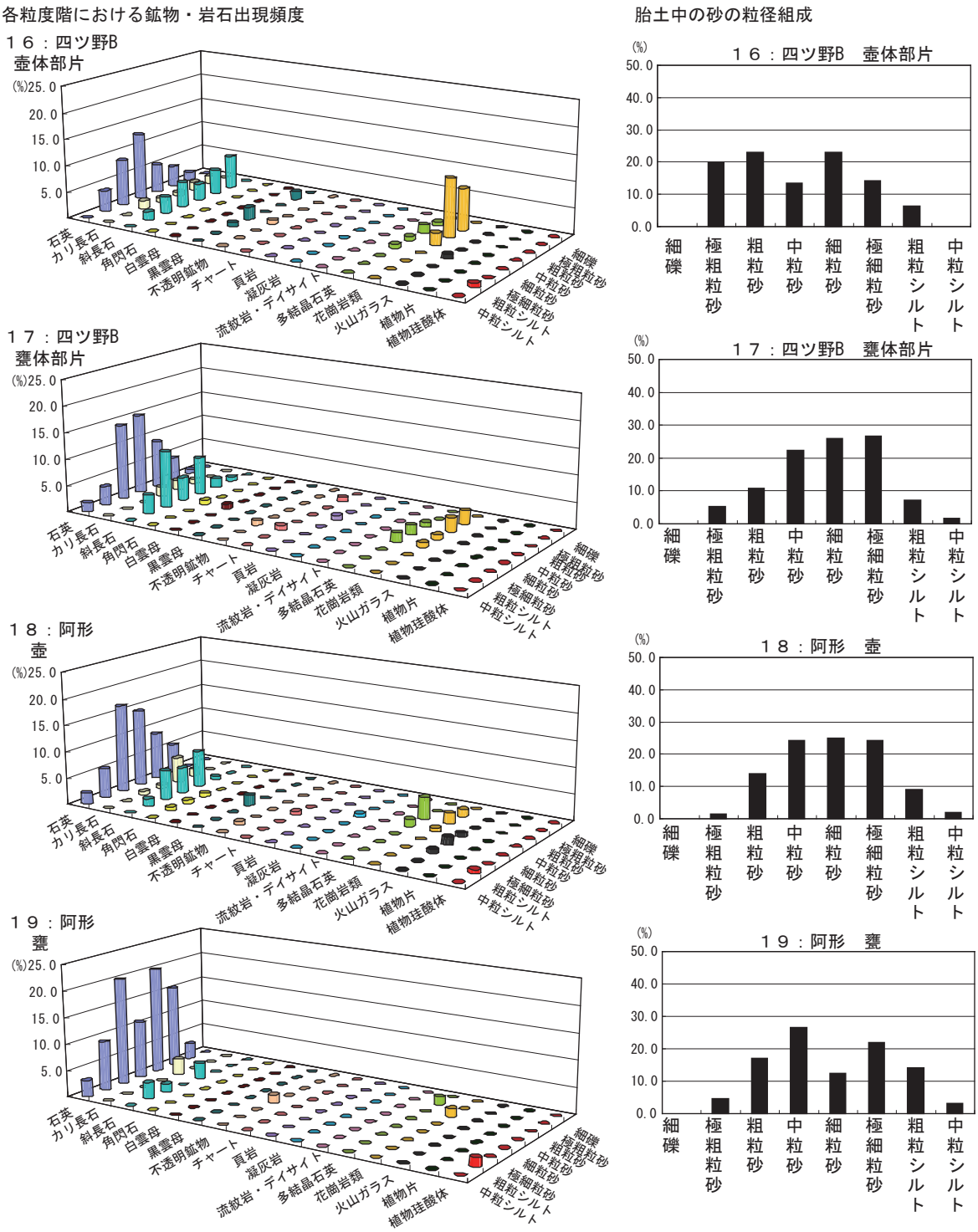
各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

胎土中の砂の粒径組成





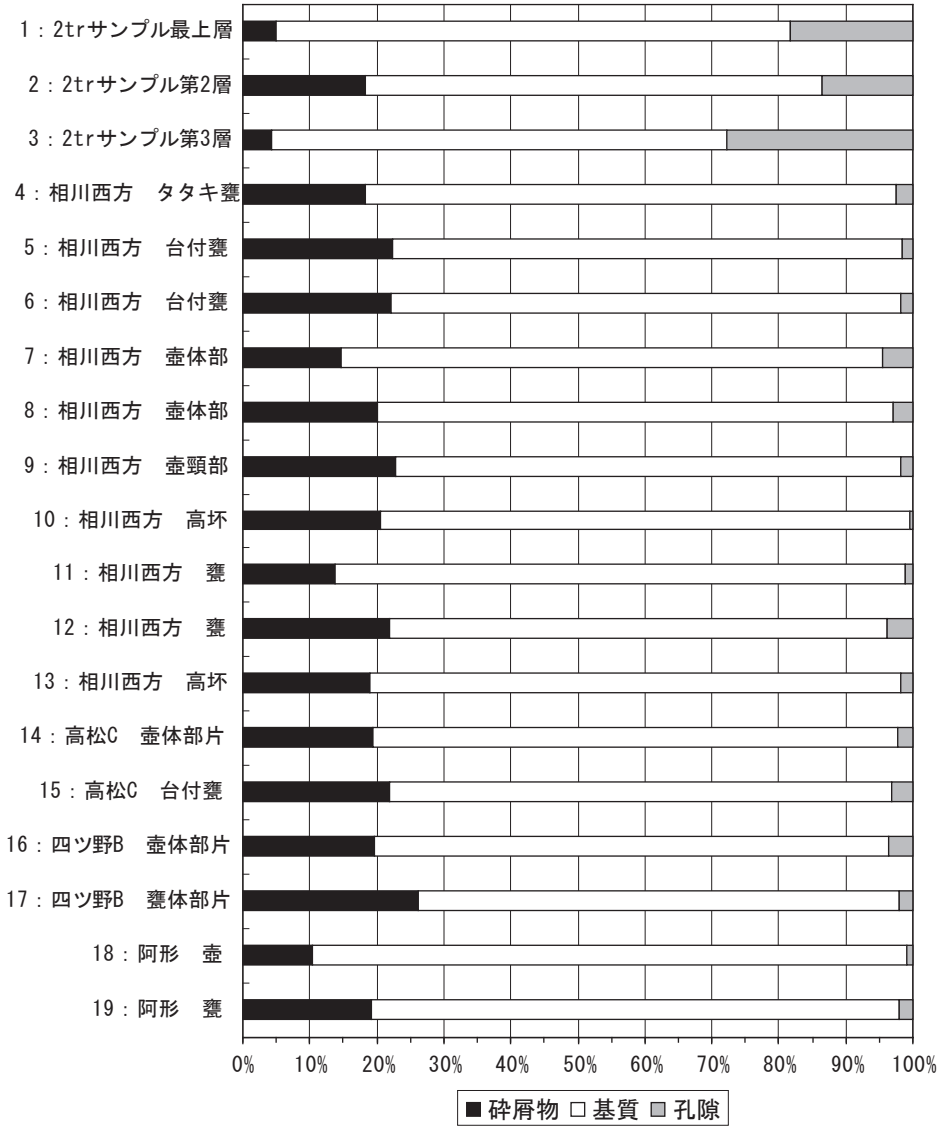
第104図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その３）



第105図　胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成（その４）

る。他に試料によっては、角閃石や白雲母、黒雲母などの鉱物片や頁岩、砂岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイトなどの鉱物片や岩石片が微量含まれ、火山ガラスも微量含まれる。このようにしてみると、今回の試料の中には、鉱物片や岩石片の種類構成が大きく異なるような胎土はなく、主体となる鉱物片および岩石片の各種類の各試料における量比の違いが、試料間の胎土の違いとして認識できる。今回の組成から以下の３分類を見出した。

Ａ類：鉱物片では石英に次いで斜長石が多く、その量比も比較的高い。斜長石に次いで多いカリ長石の量比も比較的高い。岩石片では、多結晶石英と花



第106図　砕屑物・基質・孔隙の割合

崗岩類が比較的多く、チャートなどの堆積岩類は少ない。今回の試料では、試料番号４、５、15～19の計７点が分類される。

Ｂ類：鉱物片では石英のみが多く、カリ長石も斜長石も少量である。岩石片ではチャートが多く、多結晶石英や花崗岩類は少ない。今回の試料では、試料番号６～８、12の計４点が分類される。

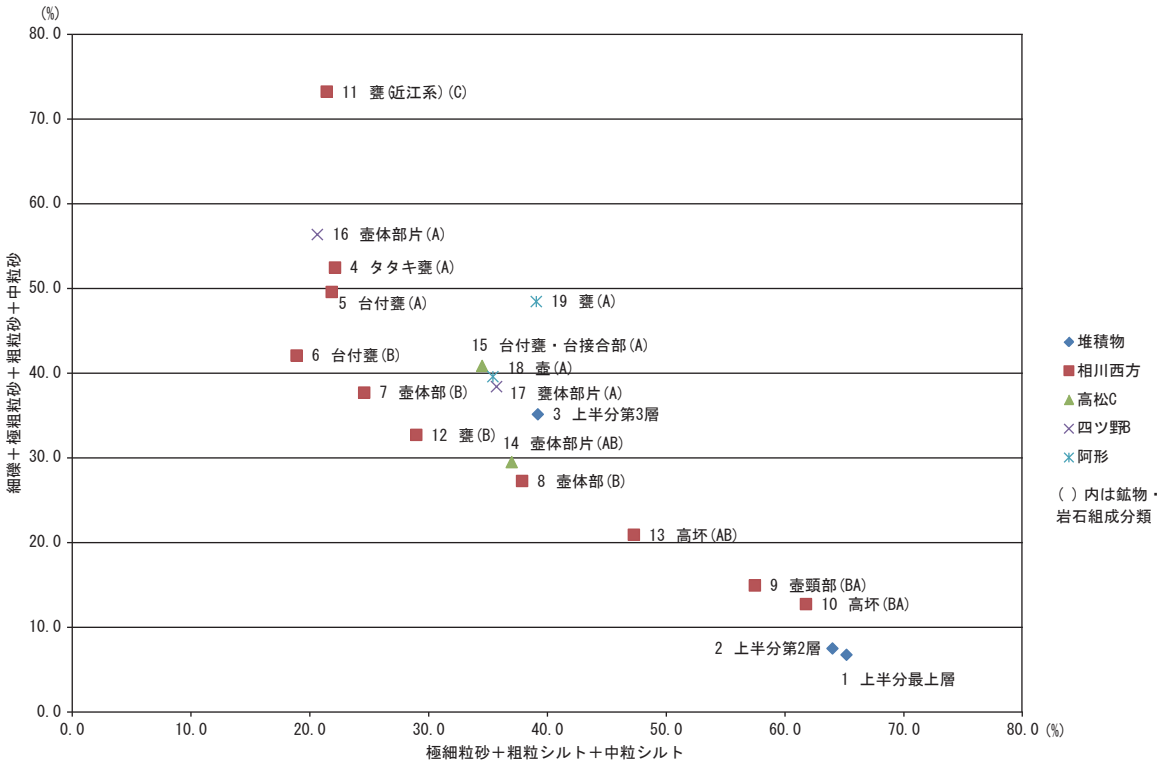
ＡＢ類：鉱物片の特徴はＡ類と同様であるが、岩石片の特徴がＡ類とＢ類の中間的な組成を示す。今回の試料では、試料番号13と14の２点が分類される。

ＢＡ類：鉱物片の特徴はＢ類と同様であるが、岩石片の特徴がＡ類とＢ類の中間的な組成を示す。今回の試料では、試料番号９と10の２点が分類される。

Ｃ類：鉱物片では、Ａ類やＢ類に比べると、カリ長石や斜長石に対する石英の量比がそれほど多くなく、また、カリ長石と斜長石の差も少ない。岩石片では、花崗岩類が多いことが特徴であるが、Ａ類に比べるとチャートや頁岩の量比も高い。今回の試料では試料番号11がこれに相当する。

２）砂分全体の粒径組成

今回の試料についてモードを示す粒径をみると、堆積物試料では極細粒砂または粗粒シルトであり、土器試料では、中粒砂、細粒砂、極細粒砂のいずれかである。ただし、土器試料の試料番号11は粗粒砂がモードとなっている。このような傾向をより明確に捉える目的で、細粒砂より粗粒側の粒径（細礫、極粗粒砂、粗粒砂、中粒砂）と細粒側の粒径（極細粒砂、粗粒シルト、中粒シルト）に分けて、それぞ



第107図　胎土中の砂の粒径組成散布図

れの割合を軸として散布図に示した（第107図）。

散布図では、右下の領域ほど細粒傾向が強く、左上の領域ほど粗粒傾向が強いことを示しているが、堆積物試料のうち試料番号１と２の２点は、いずれの土器試料よりも細粒傾向が強く、試料番号３は中程度となっている。土器試料では、相川西方遺跡出土試料は、細粒傾向の強い試料から粗粒傾向の強い試料まで広い範囲にわたって分布している。中でも、試料番号11は他の相川西方遺跡出土試料に比べて粗粒側に突出している。高松Ｃ遺跡と阿形遺跡の出土試料は中程度の領域に分布し、四ツ野Ｂ遺跡出土試料は、試料番号16は粗粒側に、試料番号17は中程度の領域にそれぞれ分布している。

３）砕屑物・基質・孔隙における砕屑物の割合

堆積物試料のうち、試料番号１と３では、砕屑物の量比が５％程度と比較的少なく、試料番号２では20％に近い値を示す。ただし、試料番号２の砕屑物のほとんどは火山ガラスである。また、堆積物試料では、土器に比べて孔隙の割合が非常に高いが、これらの多くは薄片作製時に生じたものであり、本来の構造などに関連するものではない。

土器試料では、ほとんどの試料は、砕屑物20％前後の値を示し、特にグループとしてまとめられるような傾向は見出せない。それらの中で、試料番号11と試料番号18は、砕屑物の割合が10数％とやや少ない値を示す。

４）焼成温度

五十嵐（2007）は、土器の胎土薄片下で観察される特定の鉱物の加熱変化の状況から、焼成温度の推定をしている。ただし、その推定温度の範囲は、角閃石が酸化角閃石に変化する800℃から上である。今回の土器試料では、試料番号10と試料番号17に弱酸化した角閃石が認められたのみであり、他の試料には加熱変化したと思われる鉱物は認められなかった。このような状況から、今回の土器試料は、いずれも800℃よりも低い温度で焼成されたことが推定される。

②　放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第30表に示す。２trサンプル上半分第３層の土壌試料からは、24,540±80BPという年代が得られた。一方、９trサンプルから抽出した試料のうち、木材は43,230±450BP、種実は54,070BPオーバーという年代であった。

２trサンプル上半分第３層の土壌試料および９tr

サンプル木材試料の較正暦年代を第31表に示す。測定誤差をσの年代でみると、前者は29,514-29,321calBP、後者は46,620-45,744calBPとなる。

③　テフラ分析

テフラ組成分析の結果を第32表、第108図に示す。テフラ降下堆積層と判断された試料番号３、４より上位の泥層上部の試料番号１の重鉱物組成は、「その他」とした粒が最も多いが、そのほとんどは酸化鉄塊であった。それを除くと、角閃石を主体とする重鉱物組成であり、少量の斜方輝石と不透明鉱物を伴い、微量のカミングトン閃石も含まれる。泥層下部の試料番号２の重鉱物組成は、90%以上を角閃石が占める組成である。

テフラ降下堆積層上部の試料番号３では、回収された細砂径の重鉱物粒が50粒にも満たなかったことから、グラフにはしていないが、角閃石の多い傾向は窺える。テフラ降下堆積層下部の試料番号４では、斜方輝石と角閃石が同量程度で主体を占め、少量の不透明鉱物を伴う重鉱物組成である。

テフラ降下堆積層下位の古土壌上部の試料番号５では、角閃石が主体を占める重鉱物組成であり、少量の斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物を伴っている。古土壌中部の試料番号６と古土壌下部の試料番号７では、試料番号３と同様に回収された重鉱物粒が少なかったため、グラフにはしていないが、斜方輝石と角閃石の多い傾向が窺える。

第30表　放射性炭素年代測定結果

試料番号	試料名	地区	遺構・層位	年月日	備考	種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
20	2trサンプル（上半分）第3層	下層確認	2trサンプリング	20091127	上半分	土壌	24,540± 80	-26.39±0.24	24,560± 80	IAAA-120966
22-1	9trサンプル（第4次調査）	下層確認	9trサンプリング	20111124		木材（広葉樹）	43,240±450	-28.07±0.44	43,290±450	IAAA-120967
22-2	9trサンプル（第4次調査）	下層確認	9trサンプリング	20111124		種実（センダン）	＞54,070	-28.00±0.34	＞54,070	IAAA-120968

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

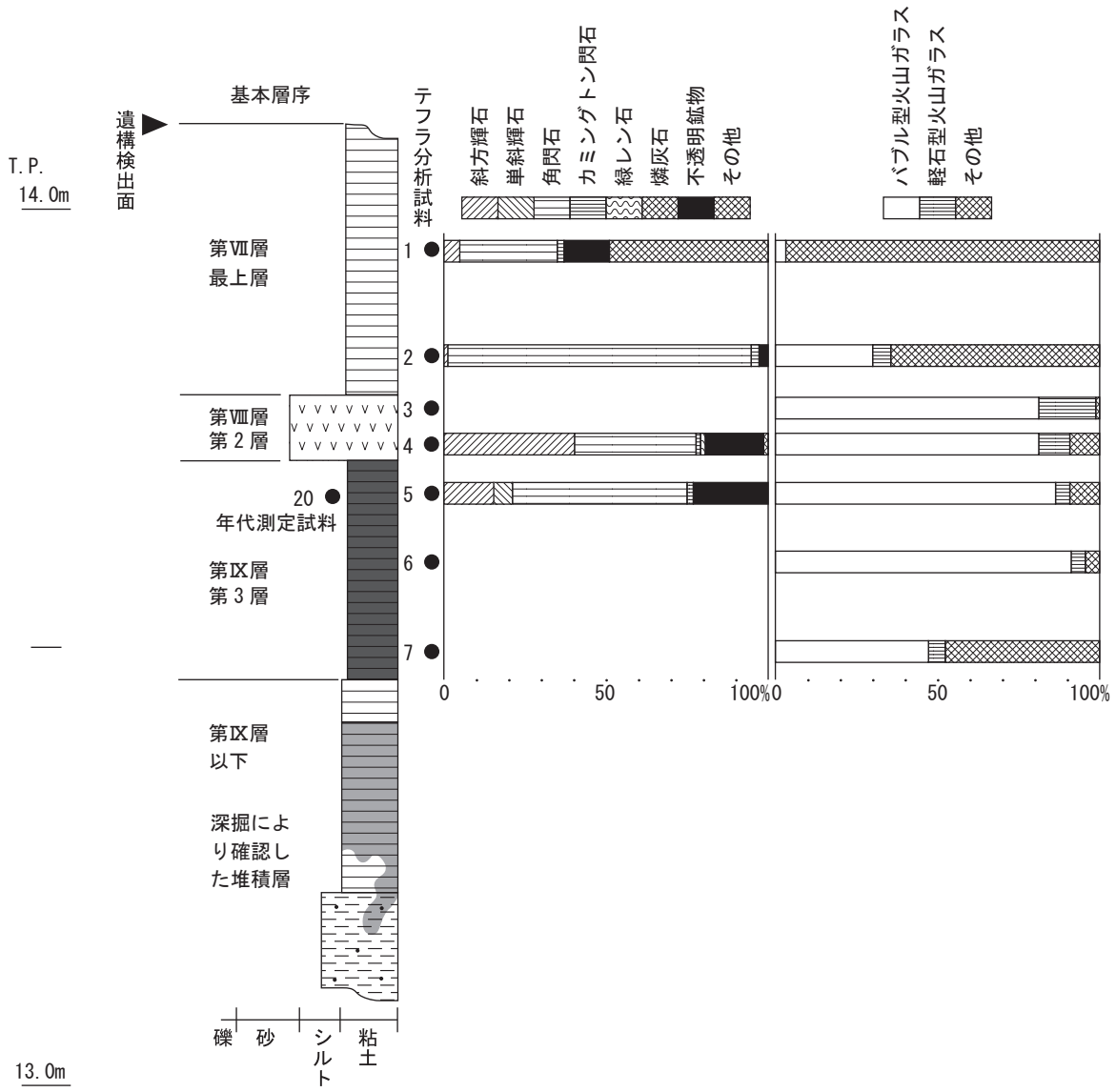
第31表　暦年較正結果

試料番号	試料名	補正年代 (BP)		暦年較正年代（cal）			相対比	Code No.
20	2trサンプル（上半分）第3層	24,540±79	σ	cal BC 27,564 - cal BC 27,371	29,514 - 29,321 cal BP		1.000	IAAA-120966
			2σ	cal BC 27,684 - cal BC 27,175	29,634 - 29,125 cal BP		1.000	
22-1	9trサンプル（第4次調査）木材	43,238±449	σ	cal BC 44,670 - cal BC 43,794	46,620 - 45,744 cal BP		1.000	IAAA-120967
			2σ	cal BC 45,365 - cal BC 43,419	47,315 - 45,369 cal BP		1.000	
22-2	9trサンプル（第4次調査）種実	＞54,065	較正不可					IAAA-120968

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4）統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
5）相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第32表　重鉱物・火山ガラス比分析結果

テフラ分析試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	カミングトン閃石	ザクロ石	緑レン石	燐灰石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	7	0	43	3	1	0	0	20	69	143	8	0	1	241	250
2	3	0	234	6	0	0	0	7	0	250	75	0	14	161	250
3	0	0	16	1	0	0	1	1	0	19	203	0	44	3	250
4	29	0	27	1	0	1	0	13	1	72	203	0	24	23	250
5	8	3	28	1	0	0	0	12	0	52	216	0	11	23	250
6	12	0	12	0	0	0	0	2	0	26	228	0	11	11	250
7	1	0	8	0	0	0	0	1	0	10	118	0	13	119	250



試料番号 20 の放射性炭素年代測定値は、24,540±80 yrs BP
暦年較正年代値（2σ）で 29,634-29,125 cal BP.

第108図　堆積物試料における重鉱物組成および火山ガラス比

テフラ組成分析では、テフラ降下堆積層とその下位の古土壌中部までバブル型火山ガラスの量比が非常に高い傾向が示されている。ただし、古土壌中部の試料では、回収された細砂自体が少ないために、その中で粒数の比を取ると、バブル型火山ガラスの量比が強調されてしまっており、含有量自体が高い訳ではない。テフラ層より上位の泥層では、下部の試料にはテフラ層と同様のバブル型火山ガラスが比較的多く含まれるが、上部の試料ではバブル型火山ガラスは微量しか含まれない。

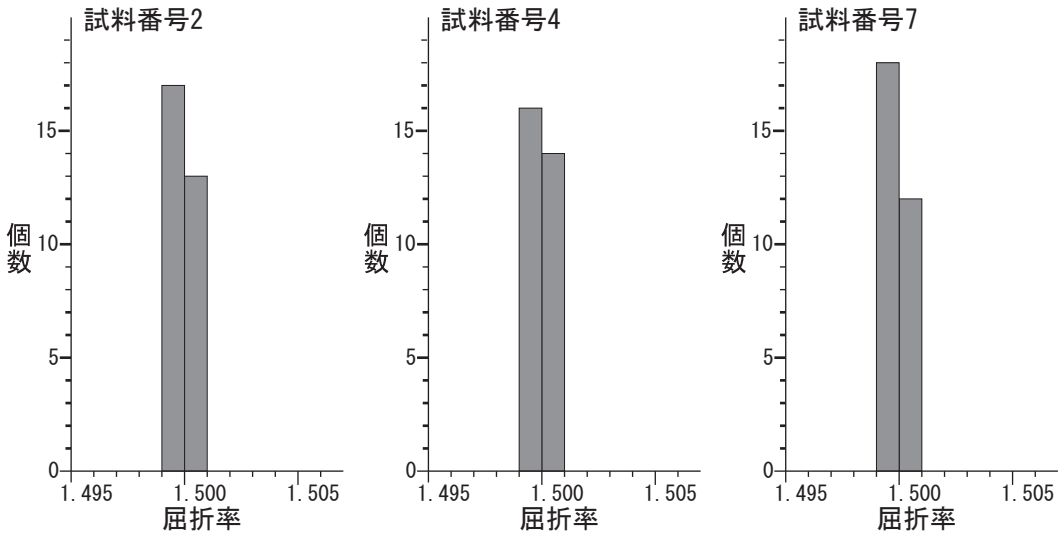
屈折率の測定は、上述した重鉱物組成および火山ガラス比の傾向から、試料番号２、４、７の３点を選択した。結果を第109図に示す。３点ともに、n1.499－1.500の狭いレンジに集中する傾向が明瞭である。

④　花粉分析

結果を第33表、第110図に示す。試料番号11および12からは、花粉化石が検出されるものの、産出状況は良好といえず、保存状態は非常に悪い。いずれの試料もシダ類胞子が多産する。

試料番号11をみると、木本花粉ではモミ属、ツガ属、ハンノキ属が多く産出し、マツ属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。草本花粉ではキク亜科が最も多く産出し、イネ科、ヨモギ属等を伴う。

試料番号12では、試料番号１と同様にツガ属、ハ



第109図　火山ガラスの屈折率

ンノキ属が多く認められるが、モミ属の割合がやや少ない。その他ではマツ属、ヤマモモ属、コナラ属コナラ亜属等を伴う。草本花粉ではイネ科、フウロソウ属、ヨモギ属、キク亜科などが認められる。

（５）考察

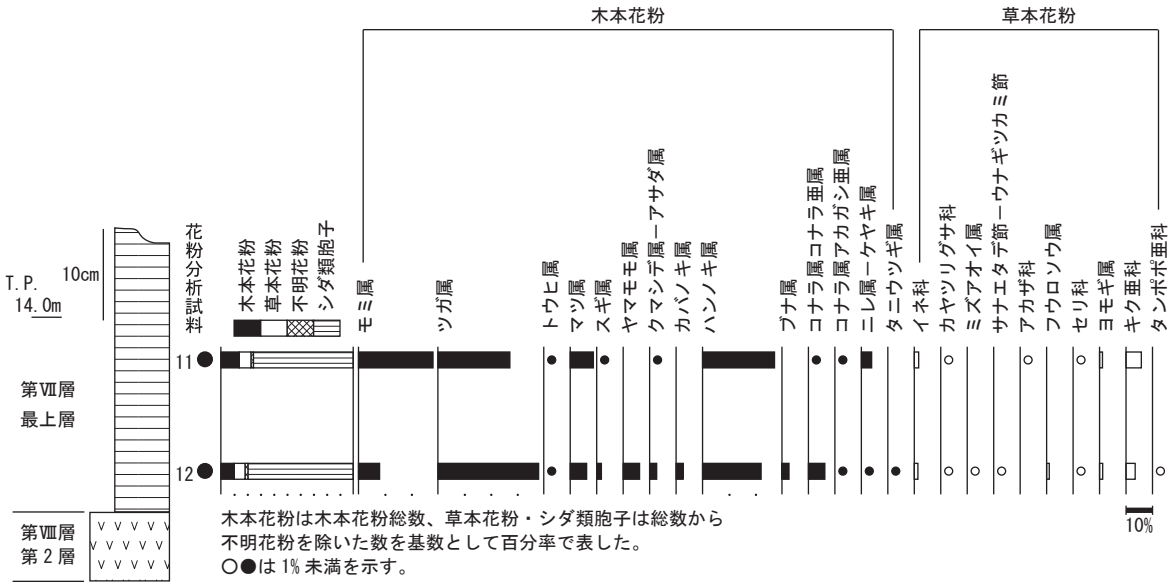
①　粘土採掘層準とその下位層について

採掘の対象と考えられた粘土（最上層：第Ⅶ層）は試料番号１であるが、含有される砂粒の種類構成や粒径組成および含有量のいずれも、今回の土器試料の中には近似した値を認めることはできない。この結果からは、採掘対象と考えられている粘土が土器の原材料となった可能性を示すことはできない。少なくとも、対象とされた粘土が、そのまま（砂や他の堆積物などを混ぜないで）土器の素地土になった可能性はないと判断される。ただし、後述するように今回の土器胎土から検出された砂粒は、調査区周辺の堆積物に由来する可能性が高いことを考慮すれば、採掘した粘土に、周辺で採取した砂をいわゆる混和材として混ぜることにより土器の素地土を調整したということは考えられる。すなわち、現時点では採掘の対象と考えられた粘土が土器の原材料となった可能性はあるが、使用されたとすれば、単体で使用されたものではないと考えられる。

試料番号２（第２層：第Ⅷ層）や試料番号３（第３層：第Ⅸ層）については、後述するようにそれぞれ多量の姶良Tn火山灰のガラスや多量の植物片を含むことが特徴となる。これらが土器の原材料の一

第33表　花粉分析結果

種　　類	花粉分析試料	
	11	12
木本花粉		
モミ属	29	9
ツガ属	28	43
トウヒ属	1	1
マツ属複維管束亜属	1	－
マツ属（不明）	8	7
スギ属	1	2
ヤマモモ属	－	7
クマシデ属－アサダ属	1	3
カバノキ属	－	3
ハンノキ属	28	25
ブナ属	－	3
コナラ属コナラ亜属	1	7
コナラ属アカガシ亜属	1	1
ニレ属－ケヤキ属	4	1
タニウツギ属	－	1
草本花粉		
イネ科	12	15
カヤツリグサ科	1	8
ミズアオイ属	－	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	－	4
アカザ科	1	－
フウロソウ属	－	11
セリ科	1	1
ヨモギ属	8	13
キク亜科	42	38
タンポポ亜科	－	1
不明花粉		
不明花粉	14	25
シダ類胞子		
シダ類胞子	558	895
合　計		
木本花粉	103	113
草本花粉	65	92
不明花粉	14	25
シダ類胞子	558	895
合計（不明を除く）	726	1100



第110図　堆積物分析試料における花粉化石群集

部に使用された場合には、その特徴は土器胎土の中にも見出せると考えられるが、今回の土器試料では、火山ガラスや植物片は認められないか、極めて微量しか含まれない。この状況からは、試料番号２や試料番号３の採取された堆積物が、土器の原材料として使用された可能性は低いことが示唆される。

試料番号３の採取された堆積物中の土壌腐植からは、約29,000年前の暦年代が得られている。この年代は、テフラ層の降下年代をほぼ示しているとされるテフラ層直下の土壌の腐植の年代（奥村ほか，1999）に相当する。したがって、テフラ層直上とされる試料番号１の採取された粘土層すなわち採掘の対象と考えられている粘土層の堆積年代は約29,000年前以降とされるが、堆積状況からテフラ層との間に特に顕著な不整合はあるように見えない。おそらく、粘土層の堆積も29,000年前以降ほどなくして開始されたと考えられ、土器の作られた弥生時代後期後半～古墳時代初頭の頃には、充分な厚さを持つ粘土層が形成されていたと考えられる。すなわち、粘土層の形成年代という側面からは、土器の原材料としての可能性に特に不都合はない。

本遺跡からは、縄文時代草創期の石器が僅かであるが検出されている。当該期の遺物が確認される要因としては、上記のように遺構検出面ないしその基盤層の堆積年代が、更新世後半もしくは完新世初頭に属する古い地層であることが関係している可能性がある。テフラ直下の試料番号３の腐植質粘土質シルト層は、層相から古土壌と考えられ、隣接する調査区でも広く確認される。この試料番号３より下位の層準については、側方への層相変化に富むシルト層から砂礫層の累重することが、一連の発掘調査での深掘断面調査により観察されている。この堆積状況から、試料番号３より下位の層準は、比較的活発な河川堆積作用の影響を受けて形成されたと考えられる。これらのことから、試料番号３は、調査区周辺の埋積が静穏化して、長期にわたって安定した地表環境が維持されるに伴って発達した土壌と判断される。

なお、第４次調査の９trで採取された木材と種実の放射性炭素年代からは、試料の採取された堆積層が最終氷期前半あるいはそれ以前の最終間氷期の堆積層であることを示唆している。吉田ほか（1995）によれば、伊勢平野に堆積する上部更新統は下部粘土層と下部砂礫層とに分けられ、下部粘土層は熱田海進期（最終間氷期に対比される）に堆積した海生貝化石を含む粘土を主とするとされている。ただし、同著に示されている地質断面図や上部更新統の層厚線図に従えば、調査区付近には下部粘土層は分布していないことが看取される。したがって、第４次調査９trで試料番号22が採取されたシルト層は、最終氷期前半頃の堆積層に対比される可能性がある。

②　土器胎土の地域性

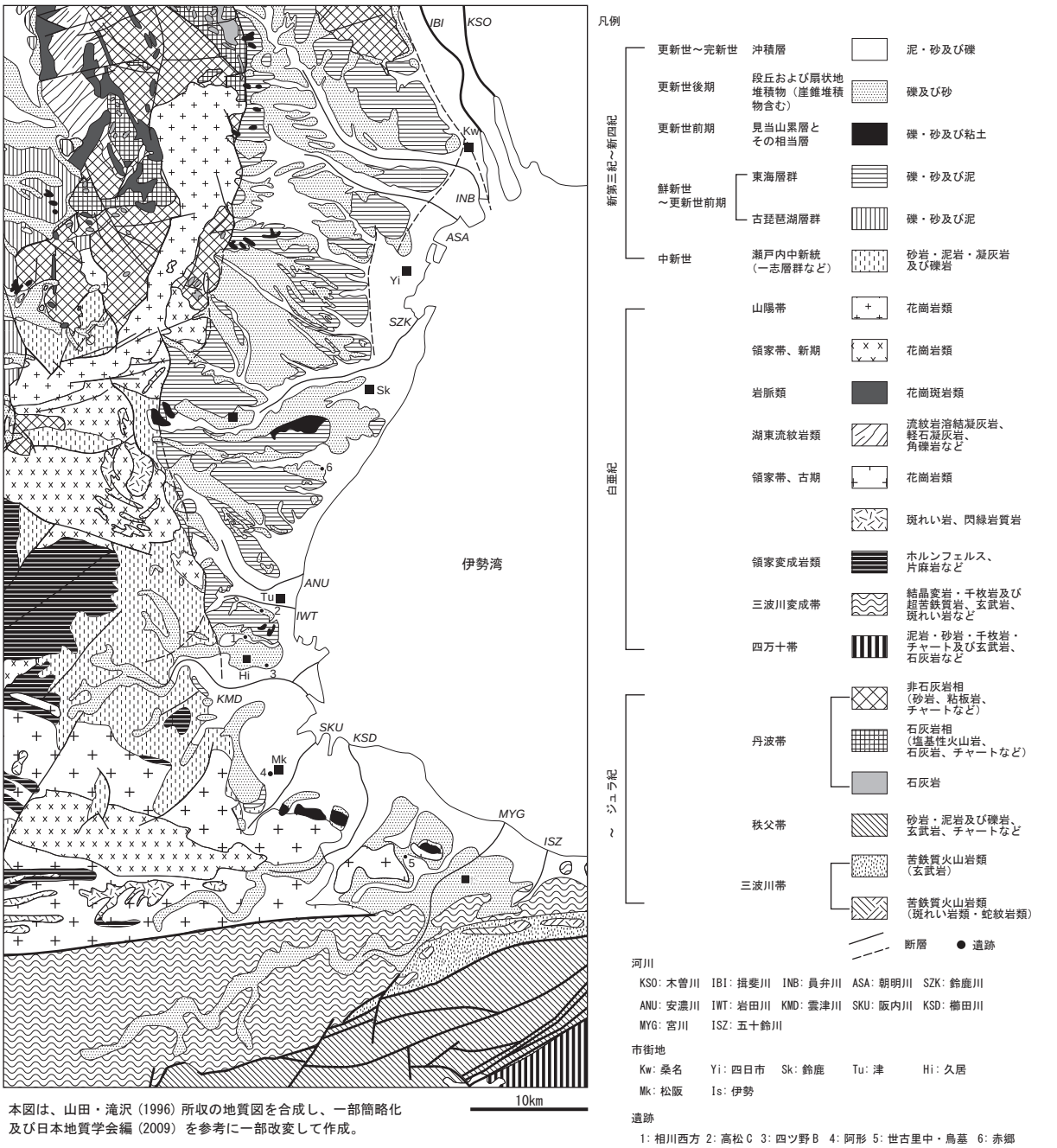
今回の分析では、鉱物・岩石組成から５種類の胎土を分類したが、含まれる鉱物や岩石の種類が異なるという違いではなく、種類は共通するもののそれらの量比が異なるということで分類している。鉱物や岩石の種類が共通することから、各試料の原材料となった堆積物の採取地は、共通する地質学的背景を有する地域内に分布すると考えられる。伊勢平野を取り巻く地質を概観すると（第111図参照）、平野北部の背後に分布する鈴鹿山脈を構成する主な地質は、鈴鹿花崗岩と呼ばれる白亜紀の山陽帯に区分されている花崗岩類と、丹波帯に区分されている中生代ジュラ紀以前のチャートや砂岩、頁岩などの堆積岩類であり、平野南部の背後に分布する布引山地を構成する主な地質は、領家帯に区分されている花崗岩類と領家変成岩と呼ばれているホルンフェルスや片麻岩類である。また鈴鹿山脈から平野に向かっては、新第三紀鮮新世の砂礫・泥からなる東海層群により構成されている丘陵が分布し、布引山地と平野との間には一志層群と呼ばれる新第三紀中新世の砂岩・泥岩・凝灰岩などからなる一志丘陵が分布する。

相川西方遺跡の位置する久居台地を構成する段丘礫層の砕屑物の供給源は一志丘陵および東海層群からなる高塚丘陵であり、さらにこれらの丘陵の砕屑物の供給源は鈴鹿山脈と布引山地である。したがって、段丘礫層の砕屑物には鈴鹿山脈と布引山地の両者の地質に由来する鉱物片や岩石片が混在していることになる。実際に、段丘礫層の礫種には、チャート、花崗岩類、片麻岩、ホルンフェルスが混在していることが吉田ほか（1995）には記載されている。一方、今回の相川西方遺跡出土土器胎土中で確認された岩石片では、チャートと花崗岩類を主体とする組成であった。チャートと花崗岩類が混在するという点では、上述の段丘礫層の礫種構成と共通するが、土器胎土中には片麻岩およびホルンフェルスの岩石片を認めることができなかった。これについては、２通りの可能性が考えられる。第一は、土器の材料採取地の堆積物中における片麻岩とホルンフェルスの量比が非常に少なかったということである。土器の素地土に調整される過程での淘汰があり、さらに分析時の薄片という非常に限定された範囲での観察という条件が重なり、元々少なかった片麻岩やホルンフェルスは、検出される範囲には至らなかったという事情が考えられる。第二は、片麻岩やホルンフェルスの含まれていない堆積物が材料に使用されていたという可能性である。すなわち、布引山地由来の砕屑物のほとんど含まれない伊勢平野中部以北の堆積物に由来するということである。当社では、鈴鹿市内に分布する遺跡から出土した弥生時代後期とされる土器の胎土分析例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社, 2011）。その分析例では、いずれの試料からもチャートと花崗岩類の岩石片の混在が認められ、一方で片麻岩やホルンフェルスは認められなかった。今回の分析の分類基準でみれば、多くはＡＢ類に分類され、Ｂ類とされる試料も認められる。これらの分析結果は、第二の可能性のあることも支持している。しかし、現時点では、第一と第二のどちらの可能性が高いかを判断する資料が不足している。検討材料の一つとしては、相川西方遺跡周辺の段丘礫層および河川の流路周辺に堆積した河川砂などの鉱物・岩石組成を確認することがあげられる。これらの検証を経た上で、今回の胎土における岩石組成を評価する必要があると考えられる。

以上の検討から、伊勢湾岸地域では、土器胎土に含まれる片麻岩やホルンフェルスの岩片の有無によって、鈴鹿山脈と布引山地の流域が分離される可能性が指摘された。しかし、今回の分析では、上記の指標が単純に土器胎土に反映されるのではなく、土器の材料となる砕屑物に含まれる岩片の元々の量比や、土器製作時での淘汰などの影響も考慮する課題点があることが明らかになった。この課題点の検証には、遺跡周辺の諸河川の鉱物・岩石組成の調査が上げられた。また、上記の流域の特徴をふまえ、さらに各遺跡での土器胎土に関する情報を得ていくことも必要と考えられる。

③　土器胎土と器種

上述したように、土器胎土の岩石組成のみからみれば、胎土の由来する地域すなわち製作地域の定まらない分析結果となるが、各試料に出土遺跡と粒径組成のデータおよび器種という情報を加えることによって、相川西方遺跡における土器の製作に関わる様相を見出すことができる。粒径組成を散布図にし



本図は、山田・滝沢（1996）所収の地質図を合成し、一部簡略化及び日本地質学会編（2009）を参考に一部改変して作成。

第111図　伊勢平野周辺の地質図

た第107図には各試料の出土遺跡と器種および鉱物・岩石組成分類を併記してある。

相川西方遺跡出土土器では、鉱物・岩石組成はB類が４点で最も多かったが、これら４点は散布図上の中央からやや粗粒側にかけて右下がりの直線上にほぼ載るような分布を示している。これら４点は、同じ由来（採取場所と採取層位が同じ）の砂を使用して、器種あるいは部位に合わせて粒径を調整したという可能性がある。試料番号４と５はともにA類であり、粒径は上記のB類の砂よりも粗粒傾向を示している。すなわち、上記のB類の土器４点とは異なる材料が使用されている可能性が高い。器種はタタキ甕と台付甕であることも考慮すると、上述したB類の土器とは異なる製作事情（例えば製作集団や製作地域が違うなど）を示唆している可能性もあると考えられる。

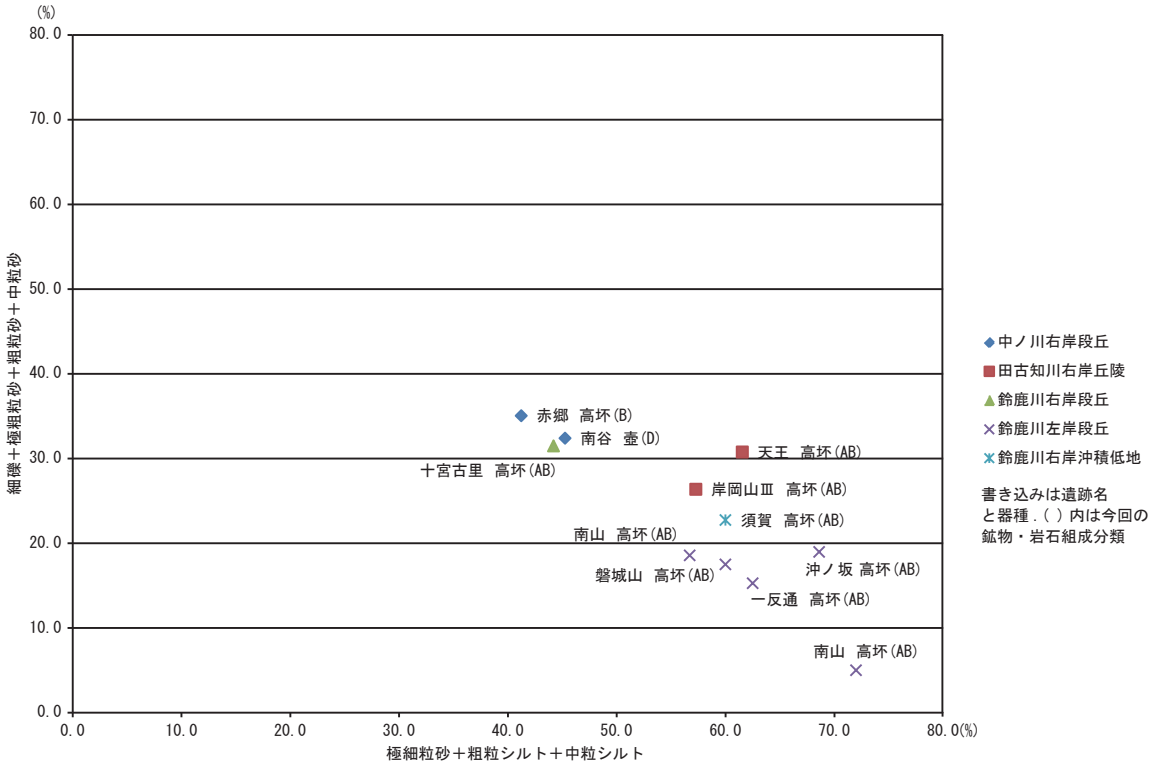
その傾向は、試料番号11で、より顕著に表れている。鉱物・岩石組成は今回の試料では唯一のC類であり、粒径組成も粗粒傾向が他の試料に比べて突出している。近江系という考古所見がされていること

も考慮すると、いわゆる搬入品である可能性のあることが窺える。なお、伊勢平野北部の朝明川流域に位置する辻子遺跡では、今回の試料とほぼ同時期の近江系とされている受口甕の胎土分析を行っている（矢作,2004）。分析方法は、本分析とは異なり、胎土中に含まれる重鉱物を抽出してその組成を胎土の特徴とする重鉱物分析であるため、本分析の試料番号11との胎土の特性を直接比較することはできないが、現時点では以下のことが考えられる。辻子遺跡出土の受口甕には２種類の重鉱物組成が認められ、１つは斜方輝石、角閃石、不透明鉱物の３者を主体とする組成、もう１つは不透明鉱物が非常に多く、微量の斜方輝石、ザクロ石、ジルコンを含むという組成であった。前者の組成の斜方輝石は東海層群中の火山灰に由来が求められることから、前者の組成の胎土中にはおそらく火山灰に由来する火山ガラスも比較的多く含まれていることが推定される。これに対して、本分析の試料番号11で認められている重鉱物は角閃石のみであり、斜方輝石も不透明鉱物もザクロ石、ジルコンも認められず、火山ガラスも認められない。したがって、試料番号11と辻子遺跡出土の受口甕との胎土の共通性は低いと考えられる。さらに、辻子遺跡の分析例では、比較対照試料として、本遺跡により近い志登茂川流域に位置する六大Ａ遺跡出土の受口甕も分析されているが、これらの重鉱物組成は角閃石とザクロ石を主要な組成とするものであった。この組成のザクロ石は、領家変成岩の片麻岩に由来すると考えられるから、おそらくその胎土中には片麻岩の岩石片も含まれていることが推定される。試料番号11にはザクロ石も片麻岩も認められなかったことから、六大Ａ遺跡出土の受口甕の胎土とも共通性は低いと言える。現時点では、近江系の甕という属性に対応するような胎土の特性は見出せないが、辻子遺跡においても、同時期の壺や鉢とは異なる重鉱物組成であった。したがって今後も注目すべき属性であると考えられる。

試料番号10と13は、ともに高坏であるが、粒径組成は壺や甕に比べて明らかに細粒傾向を示している。また、鉱物・岩石組成もＢ類やＡ類ではなく、ＢＡ類とＡＢ類である。これは高坏という器種による材質の違いを示している可能性がある。なお、試料番号９は壺頸部の試料であるが、高坏と類似した胎土の性質である。これについては、この壺自体の製作事情が異なるのか、あるいは頸部という部位による特殊事情があるかのいずれかであるが、現時点では検討する資料がないため判断はできない。

相川西方遺跡以外の遺跡から出土した試料については、点数が２点ということもあり、今後の検証が必要ではあるが、相川西方遺跡出土土器の胎土と比べると次のような様相を示す。高松Ｃ遺跡出土土器のうち、試料番号14は壺であり、粒径組成は相川西方遺跡の試料番号８の壺に近接しているが、鉱物・岩石組成はＢ類ではなくAB類である。試料番号15の台付甕はＡ類であり、相川西方遺跡の台付甕のＡ類と鉱物・岩石組成は共通するが、粒径組成において違いが比較的大きい。四ツ野Ｂ遺跡出土土器では、試料番号16は、鉱物・岩石組成と粒径組成が、ともに相川西方遺跡のタタキ甕と台付甕に近いが、その器種は壺である。試料番号17の甕は、粒径組成は相川西方遺跡のＢ類の甕や壺にやや近い位置にあるが、鉱物・岩石組成はＡ類である。阿形遺跡出土土器では、２点の試料は壺と甕であり、鉱物・岩石組成はともにＡ類であるが、相川西方遺跡出土土器のＡ類と比べると粒径組成は細粒側にあり、相川西方遺跡出土土器のＢ類の壺と甕４点が並ぶラインよりも粗粒側に位置している。以上の結果からは、いずれの遺跡においても、相川西方遺跡出土土器とは異なる材料事情（それは製作事情でもあるが）であったことは指摘できる。

なお、前述した鈴鹿市内遺跡出土土器の分析例から、今回と同様の散布図を作成して第112図に示す。この分析例では、試料11点のうち、10点までが高坏であり、また、遺跡の所在する地域も細かく分けられている。まず、第107図に比べると、試料全体の範囲が明らかに細粒側に偏っている。相川西方遺跡の試料でも高坏の胎土は細粒傾向を示すことを指摘したが、第112図によって、高坏という器種が他の器種に比べて細粒傾向を示すことが、より明瞭に表されていると見ることができる。さらに、第112図では、出土地によって高坏の粒径組成が異なっている傾向も看取される。このことは、すでに分析報告時に述べていることであるが、第112図により明瞭



パリノ・サーヴェイ株式会社（2011）より作成．

第112図　鈴鹿市内分布遺跡出土土器胎土中の砂の粒径組成散布図

に認識できた。

今回の分析結果および鈴鹿市内遺跡出土土器の分析事例から、伊勢平野における弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器製作において、比較的狭小な範囲ごとに製作事情の違いがあることが指摘できた。前述した自然堆積物の分析という課題も含めて、今後も同様の分析事例を蓄積することができれば、伊勢平野における同時期の土器の動きや集落間の関係などにも関わる有意な資料の作成が期待される。

④　テフラの同定結果

試料番号３、４（第２層：第Ⅷ層）は、採取された不撹乱柱状堆積物試料の層相観察時に、テフラの降下堆積層の可能性が極めて高いと判断された。なお、今回採取されたような不撹乱柱状堆積物試料は、発掘調査後にも詳細な層相観察を行うことが可能であり、分析試料の採取やその解釈を行うにあたって極めて有効な情報が得られることが指摘される。

試料番号３、４（第２層：第Ⅷ層）では、無色透明のバブル型火山ガラスが多量に確認され、その重鉱物組成では、試料番号１、２（最上層：第Ⅶ層）や試料番号４、５、６、７（第３層：第Ⅸ層）に比べて斜方輝石の量比が有意に多い傾向が示された。これらの特徴とレンジの狭い特異な火山ガラスの屈折率も合わせれば、試料番号３、４を構成するテフラは、鹿児島湾北部の姶良カルデラを給源とする広域テフラである姶良Tn火山灰（ＡＴ:町田・新井,1976）に同定される。

テフラ組成分析の傾向では、試料番号５、６、７（第３層：第Ⅸ層）までＡＴの火山ガラスが及んでいるが、断面における産状から、試料番号３、４（第２層：第Ⅷ層）は後世の撹乱を受けながらも降下堆積した層位は保存されていると考えられる。すなわち、試料番号３、４（第２層：第Ⅷ層）の基底である試料番号４（第３層：第Ⅸ層）の古土壌最上部付近は、ＡＴ降下時の地表面付近を示唆していると考えて良い。

ＡＴの噴出年代は、80年代後半から90年代にかけて行われた放射性炭素年代測定（例えば松本ほか（1987）、村山ほか（1993）、池田ほか（1995）など）や2000年代に行われた放射性炭素年代測定（宮入ほか（2001）、Miyairi et al（2004）など）から、放射性炭素年代ではおよそ2.5万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおけるＡＴの発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、

酸素同位体ステージ２と３との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は2.5～3.2万年前におよぶとされている（町田・新井,2003）。町田・新井（2003）は、ＡＴの放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、暦年ではおそらく2.6～2.9万年前頃になるであろうとしている。また、青木ほか（2008）も同様に、上述した村山ほか（1993）の放射性炭素年代と海底コアにおける酸素同位体ステージ上の層位とから、約2.86万年前という暦年代を提示している。

⑤　古植生

花粉分析を行った最上層（第Ⅶ層）の下部および最下部の試料番号12、11は、上記の分析結果にもとづくと、約３万年前より若干新しい年代の堆積物に相当し、その花粉化石の産状は、当時の植生を示唆していることになる。ただし、今回の分析結果では、花粉化石の保存状態は非常に悪く、ほとんどの花粉外膜が破損・溶解していた。花粉やシダ類胞子の腐蝕に対する抵抗性は種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など）。いずれの試料もシダ類胞子が多産しており、検出された花粉化石も分解に強い種類、分解の影響を受けても同定可能な種類、花粉生産量の多い種類などが認められる。以上のことから、得られた花粉化石群集は経年変化による分解・消失の影響を受けており、分解に強い花粉などが選択的に残されている可能性がある。このことを考慮した上で、古植生の検討を行う。

試料番号12およびその上位の試料番号11では、モミ属、ツガ属、マツ属等の針葉樹、ヤマモモ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属等の広葉樹が多く検出される。このうち、多産するハンノキ属は、河畔や低湿地などの適湿地に林分を形成する種群であり、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属等も同様である。本遺跡が浅い谷状地形に立地することから、谷沿いや相川や雲出川などの周辺河川沿いに生育していた可能性がある。また、周辺にはヤマモモ属、コナラ属アカガシ亜属などの常緑樹、モミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹が分布し、後背の丘陵・山地部にはブナ属などの落葉広葉樹も分布した可能性がある。

一方、草本類では、イネ科、ヨモギ属、キク亜科などが多く産出し、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、フウロソウ属などが確認された。これらはいずれも、開けた明るい草地や林縁などに生育する種類を多く含むことから、遺跡内や周囲の林縁の林床などに生育していたものに由来すると推測される。保存状態が不良であった本分析結果については、堆積後作用により分析結果が大きく歪曲されているとともに、上位や相対的に古い地層から再堆積した花粉のコンタミネーションの影響も大きく反映している可能性もある。このため、今回の分析結果については、伊勢湾岸の他地点においても姶良Tn火山灰直下の層準の花粉分析結果を得ていきながら、再評価していく必要がある。

（パリノ・サーヴェイ株式会社　矢作健二・石岡智武）

【引用文献】

青木かおり・入野智久・大場忠道,2008,鹿島沖海底コアMD01-2421の後期更新世テフラ層序.第四紀研究,47,391-407.
五十嵐俊雄,2007,土師器・須恵器等に関する焼成温度推定手法の開発.徳永重元博士献呈論集,パリノ・サーヴェイ株式会社,281-297.
池田晃子・奥野充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫,1995,南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代.第四紀研究,34,377-379.
町田洋・新井房夫,1976,広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－.科学,46,339-347.
町田洋・新井房夫,2003,新編　火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的によるー.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗,1987,姶良Tn火山灰の14C年代.第四紀研究,26,79-83.
宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎,2001,姶良Tn火山灰のC-14年代のクロスチェック(演旨).地球惑星科学関連学会合同大会予稿集（CD-ROM),2001,Qm-010.
Miyairi,Y.・Yoshida,K.・Miyazaki,Y.・Matsuzaki,H.・Kaneoka,I.,2004,Improved ^{14}C dating of a tephra layer(AT tephra,Japan) using AMS on selected organic fractions. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223-224,555-559.
三宅尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15-30.
村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村真・安田尚登・平朝彦,1993,四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代－.地質学雑誌,99,787-798.
中村純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
中村純,1980,日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第12,13集,91p.
日本地質学会編,2009,近畿地方（日本地方地質誌５),朝倉書店,472p.
奥野充・吉本充宏・荒井健一・中村俊夫・宇井忠英・和田恵治,1999,北海道駒ヶ岳火山,Ko-fテフラの加速器^{14}C年代.地質学雑誌,105,364-369.

パリノ・サーヴェイ株式会社, 2011, 赤郷遺跡および近隣遺跡出土土器の胎土分析. 赤郷遺跡発掘調査報告書, 鈴鹿市考古博物館, 13-20.
島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第５集, 60p.
徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.
山田直利・滝沢文教編, 1996, 近畿地方（日本地質図大系６）, 朝倉書店, 136p.
吉田史郎・高橋裕平・西岡芳晴, 1995, 津西部地域の地質. 地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）, 地質調査所, 136p.

5　出土木製品の樹種調査結果

（１）試料

試料は三重県相川西方遺跡（第３・４次）から出土した容器２点、用途不明品１点の合計３点である。

（２）観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

（３）結果

樹種同定結果（針葉樹１種、広葉樹１種）（第34表）と顕微鏡写真（図版45）を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

①　ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

②　クスノキ科クスノキ属クスノキ

（*Cinnamomum Camphora* Presl）

散孔材である。木口では中庸の道管（～200 μm）が単独または２ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に取り囲んでおり、その中に一見小さな道管と見間違えるほどの油細胞（樟脳油貯蔵細胞）がある。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はレンズ状の大型壁孔が階段状に並んでいる。板目では放射組織は１～３細胞列、高さ～800 μmからなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞に変化したものが多く見られる。クスノキは本州（関東以西）、四国、九州に分布する。

（株式会社吉田生物研究所）

第34表　出土木製品樹種同定表

No.	報告番号	品名	樹種
1	５８	槽	クスノキ科クスノキ属クスノキ
2	７７	アカ取り？	ヒノキ科アスナロ属
3	７８	槽	クスノキ科クスノキ属クスノキ

【参考文献】
林昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所　1991
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所　1999
島地謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版　1988
北村四郎・村田源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社　1979
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第27冊　木器集成図録　近畿古代篇」　1985
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第36冊　木器集成図録　近畿原始篇」　1993

【使用顕微鏡】
Nikon DS-Fi1

Ⅶ　相川西方遺跡の地質条件と地形発達

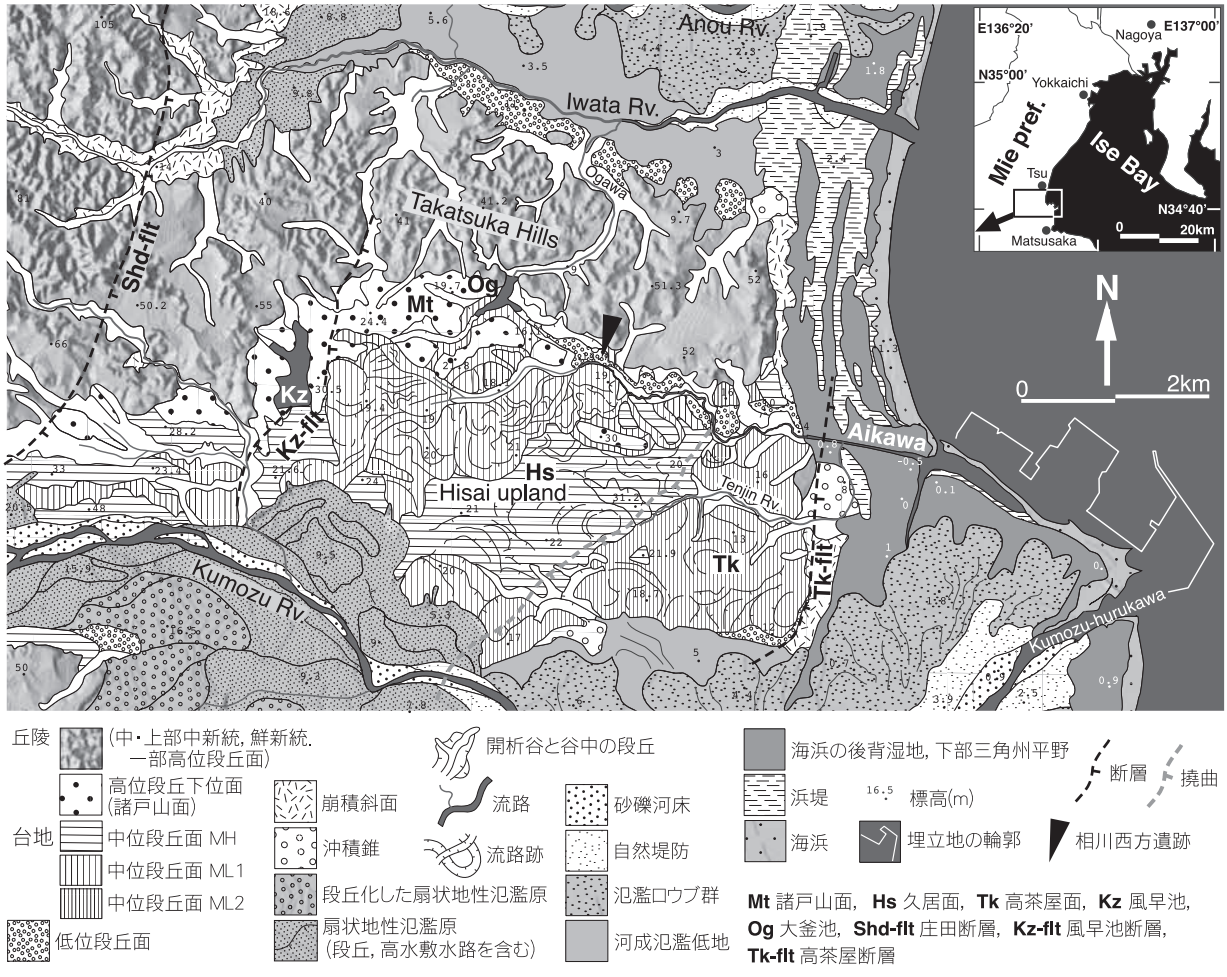
はじめに

三重県津市久居相川町の相川西方遺跡では、平成20年度からの４次にわたる発掘調査で、弥生時代末・古墳時代初頭に掘削された多数の粘土採掘土坑が検出された。筆者は平成23年10月に第４次調査区で行われた下層確認調査に立ち会い、２つのトレンチで遺構検出面以下の堆積物を観察する機会を得た。また後日には、第２次調査地の遺構面下で採取された柱状の不撹乱試料を観察できた。これらの結果をふまえ、本稿では調査地とそれをとりまくやや広域の地質条件と地形発達について検討する。

1　遺跡周辺の地質と地形

（1）山地と丘陵

津市を中心とする中勢地方では、西方の布引山地の東側に丘陵・台地が広がり、それらを流域とする安濃川、岩田川、雲出川などの中小河川が東方の伊勢湾に向かって流下する。これらの河川の流路と沖積扇状地をふくむ氾濫原、河口付近の三角州および伊勢湾の海浜が平野を構成する。第113図には、1947年米軍撮影の空中写真判読にもとづき、八木・寒川(1980)、吉田(1987)、目崎・岩田(1990)を参考に描いた丘陵地帯東縁部から海岸部にかけての地形分類図を示す。なお、断層系については、八木・寒川(前掲)、太田・寒川(1984)、活断層研究会(1991)、



第113図　久居台地、高塚丘陵とその周辺の地形分類図

鈴木ほか(2007)、地震調査研究推進本部、地震調査委員会(2009)を参照した。

図示していないが、布引山地は、笠取山、経ヶ峰、青山高原など標高700～800ｍの山頂をなし、山田(1990)によれば、おもに白亜系領家帯の花崗岩類、閃緑岩類、斑れい岩、片麻岩、ホルンフェルス、珪質片麻岩からなる。山地の東にひろがる美里・榊原・白山の各丘陵地帯は標高50～300ｍで、榊原丘陵の河谷を挟み、東には標高40～50ｍの頂部をなす高塚丘陵が海岸低地まで東西に伸びる。

丘陵構成層は風早池西方約２㎞をおよそ南北にはしる庄田断層(第113図のShd-flt)を境に、西側の高位の丘陵地帯を構成する固結岩体の新第三系中新統一志層群中・上部の泥岩、砂岩、凝灰岩と、東側の低位の丘陵地帯を構成する半固結の中新・鮮新統東海層群亀山累層の砂、シルト、粘土の互層に分かれる。高位の丘陵地帯の東縁の一部や、標高50ｍ前後の頂部をなす高塚丘陵東部には、礫を主とし、高位段丘を構成する見当山累層が離散的に分布する(吉田1990)。

相川に面した高塚丘陵東部はおもに亀山累層上部の湖沼性の片田粘土層からなり、その最上部には約460万年前の阿漕火山灰層が広く分布する。片田粘土層は調査地の北側に近接する露頭でも観察できた。

高塚丘陵の中央部は、標高40ｍ前後の頂部をなす。丘陵を刻む開析谷は、北側の岩田川低地から発達したものが卓越し、丘陵地帯南側の諸戸山面に谷頭をなす谷もみとめられる。相川側からの開析谷は総じて短かい。ただし相川中流部、運転免許センターで埋められた二重池谷(仮称、第114図)と東端部の開析谷は丘陵に深く侵入している。

（２）段丘

高塚丘陵の南側に接して高位段丘の最下位面とみなされ、おおむね砂礫層からなる諸戸山面(第113図のMt、名古屋グループ 1969)が分布し、後述する久居面(第113図のHs)より一段高い標高20～25ｍ前後の地形面をなす。風早池断層(Kz-flt)の変位により、同池の周囲の尾根は標高30ｍを越える。高塚丘陵と久居台地の間を相川が流下する。

久居台地は、標高10数ｍから25ｍ前後の、中位段丘に相当する平坦面で、ふつう久居面と高茶屋面に区分される。久居面は、久居市街が載る標高22ｍから、西方の庄田町付近(標高約25ｍ)までの領域を含み、一部に標高30ｍをこえる残丘状の高まりが点在する。南側の雲出川氾濫原との比高は10数ｍである。久居台地の構成層は、木村(1971)、竹原・木村(1962)によると、礫層、砂層をともなう層厚８ｍ以上の小野辺シルト部層、その上位の砂・シルトの薄層をともなう淘汰の良い、層厚２～５ｍの久居礫質部層からなる。下部の礫層は最終間氷期海進初期の谷埋め堆積物、中部のシルト層は高海水準期の堆積物、上部の礫質部層は海退期の河成堆積物で、久居面は堆積面と考えられている。ただし、Araki(1959)によるとシルト層からはマガキ*Ostrea*（*Crossostrea*）*gigas*、ウネナシトマヤ*Trapezium*（*Neotrapezium*）*liratum*の貝化石がみつかっており、最温暖期よりやや冷涼な時期の臨海低地の塩性湿地や干潟潮間帯堆積物が推測される。

高茶屋面(第113図のTk)は、久居台地の東部を占め、久居面よりわずかに低い標高16～18ｍの台地南東部の地形面を指す。この面に近接する久居面の東辺には、東落ちの撓曲が知られている。竹原・木村(前掲)によると、構成層の層厚約10ｍ、基底には高低差数ｍの起伏があり、基底の小礫から上方へ細粒化しさらに粗粒化する層相変化がみとめられ、海進・海退を示唆する。下・中部には細礫、斜交葉理をなす砂、シルト層が挟まれる。高茶屋面構成層の中部は久居面構成層の小野辺シルト部層に相当するらしい(荒木1953)。竹原・木村(前掲)は上述した貝化石には若干の問題を有するとしつつも、最終間氷期海成層の推測根拠とし、海退期に堆積した上部の河成砂礫層に埋没した「海成段丘」を想定しているが地形学的な用法としては不適切である。上部の砂礫層上面は侵食面と考えられている。

本稿では、上述の久居台地のもっとも高い標高約20ｍ以上の東南部を中位段丘高位面(MH)、風早池より東で、現在の相川が流下する周辺の標高20～16ｍの相対的に低い領域を中位段丘下位面１(ML1)とした。ML1面と雲出川沿いの羽野、庄田に分布するML1面についてはその付近の地形面との相対的な高度差によって対比したので、地形面の形成年代は異なるかもしれない。

ML1面とした領域でも20mをわずかにこえる部分がある。MH面とML1面の境目は漸移的とも見えるが、のちに述べる台地面に残る流路跡の輪郭に沿って区分した。高茶屋面はML1に比べて全般に低く標高18～13mで、相川沿いではML1と2も漸移的な印象を受けるが、発達ステージの異なる地形面とみなし中位段丘下位面２(ML2)と呼ぶことにした。これらは、MH面の侵食あるいはデグラデーションによって発達したと考えられる。吉田(1987)の地形面区分では、久居面北部とそれに隣接する諸戸山面にみられる帯状の開析谷と流路跡は高茶屋面に対比されている。同川の中・上流区間に沿って発達した幅100～400mの谷地形をここでは「相川谷」と呼ぶ。

沖積低地面との比高が数mで標高10～10数mの地形面は、最終氷期最寒冷期より前に堆積し、その後の基準面低下によって段丘化した低位段丘面に相当し、小森面・広田面と呼ばれている(八木・寒川1980，吉田　前掲)。第113図の範囲では久居台地南東隅と高塚丘陵北縁の岩田川左岸に分布する。また相川谷中でもその相当面(Ｌ面、LS面)が標高9～16mまで上流に向かって連続的にみとめられる。目崎・岩田(前掲)の地形分類図にも記載があるが、堆積・離水の年代指標となる火山灰を欠くため段丘面対比が難しい。構成層は砂基質の礫といわれる。雲出川・岩田川の扇状地性氾濫原と谷中の崩積斜面(第113図)、あるいはそれらに伏在して低位段丘に相当する地形が分布すると思われる。

（３）沖積平野

高塚丘陵の北には岩田川、久居台地の南には雲出川の流路と氾濫原がひろがり、沖積面(沖積平野)をなす。高塚丘陵と久居台地の東縁は、高茶屋断層の変位とともに、縄文海進高海水準期の海岸侵食によって急崖をなす。崖とその北方延長線より東側では、４列ほどの浜堤、浜堤間の低地、現在の海浜からなる海岸低地がひろがる。

岩田川上流域は高塚丘陵北部とより北西の美里丘陵、長谷山東面一帯とを流域とするが、中・下流域では安濃川右岸低地の排水流路としても機能している。河口付近の海岸低地への土砂流出や氾濫地形の発達も地表面ではほとんどみとめられない。同川低地の沖積層基底を山田(1990)の表層地質図およびボーリング柱状図で確かめると、海岸低地では約-25～-30m、高塚丘陵の北側では約-15mで、前述した低位段丘面の北側で比高５～10mの急な落ち込みがみとめられる。これらのことは、岩田川および安濃川の低地が、最終氷期の海水準低下にともない、比較的深く幅広に開析された河谷であったことを示唆し、高塚丘陵の北側から伸びた開析谷の発達にも影響したと思われる。

雲出川は、久居台地西端部、一志其倉付近の谷底より下流で低地の氾濫原を広げ、海岸低地では三角州を発達させている。河床は、丘陵・台地を通過した河谷区間の出口で標高約16m、より下流の久居台地が南に突出した須ケ瀬町のやや下流側では標高６mとなり、勾配は約1.5‰で、一般的な扇状地の勾配としては小さい。しかし、この区間の河床は礫が卓越し、より下流側の沖積低地区間でも１‰を下回らず、自然堤防の高度は比較的高い。空中写真の判読で同川左岸の低地には氾濫によると思われるロウブ群とそれらにともなう流路跡が不明瞭ながら確認できる。三角州の前縁には潟湖性の低地を介して海浜の砂州が発達し、北方の浜堤と海浜に連続する。海岸低地沖積層基底の深さは約-25～-35mである。

相川の海岸低地における沖積層基底の深度は、谷口(０m深)から現在の汀線まで1.3㎞の中間で-５m、河口付近で-10mの深度でＮ値が10～20から50に増加し、-15m等深線が沖側に突出する。基盤は砂礫と固結あるいは半固結泥で、段丘構成層あるいはそれ以前の堆積物であり、最終氷期においてもそれらを侵食するような大きな開析谷は発達しなかったようである。

（４）中位段丘面の流路跡

すでに吉田(1987)や北村(2013)が記載し指摘しているが、米軍空中写真を判読すると、久居台地のほぼ全域に流路跡がみとめられる。判読結果は粗略だが第113図に示した。

流路跡の幅は20～100mで、似た形で重なり合う所では、一見幅広く見える。いちじるしく蛇行・曲流した流路跡と、波長約600mまでで、蛇行振幅が300m以下の、緩やかに屈曲する流路跡がある。蛇行の袂状部のおよその幅は60mから300数10mまでさまざまである。頸状部があまり移動せず、袂状部に相

似的に弯曲した流路跡がコンタ状に並び、袂状部がしだいに膨らんでいったと考えられる所があるが、側方堆積作用が卓越する蛇行州の印象は薄い。曲流帯の伸び方向の長さに対する流路長の比(屈曲度)は、全般的に２をわずかに下回るものが多い。また、典型的な蛇行パターンばかりでなく、不規則な曲流パターンをなす流路跡もみとめられる。屈曲度の低い流路跡の多くは、すでに充填・放棄された流路の一部を切ったり重複して伸び、比較的連続性がよい。

久居台地北西部のML1面はおもにMH面を切る流路跡の縁辺で区分した。より北西側の諸戸山面もこの面の流路発達で円弧状に侵食されている。これらの流路跡のほとんどは相川谷に向かって流下したことが読み取れる。

台地縁辺では下方から侵入した開析谷が古い流路跡をたどって発達した場所が目立ち、天神川の谷もその一つである。ML2面では天神川をはさんで、相川谷側を流下した流路跡と雲出川側を流下したものとが区別できる。

試みに上述した河道が現在の雲出川の流量を受け蛇行パターンをなすかを考えた。一志町大仰観測所での雲出川流出特性(日本河川協会)を参照すると、豊水(年間95日はこれより多い)流量は5.64㎥/sec、過去最大流量は131.74㎥/secで、年間降雨日数を100日あまりとすると、降雨時の流量はおよそこれらの間で変動する。伏流や水面勾配などを考慮せず、仮に流量を20㎥/sec、流速0.5m/secとすると、40㎡の流路断面、上述した流路幅100mの流路では平均水深0.4mを要する。流出が河岸満水流量を越え、大規模に氾濫するとしても、自然の姿として了解できる。平水時にはより流量・流速ともに低い値が想定される。

河床・河岸と流路充填堆積物の層相は不詳だが、シルト・砂の薄層をともなう礫という、文献に示された久居面構成堆積物の累重上部の層相から、礫が卓越する現在の雲出川よりも流速や河床勾配は小さかったと想像される。久居台地各地形面の勾配を略測すると、MH面は0.6～１‰、ML1面は２～３‰流路跡の流下方向に傾き、全般に強い勾配をなす。山地・丘陵側でより活発な断層変位を伴う隆起の影響を受けていると考えられるが、仮にML1面のようなやや急勾配であっても、河岸・河床材料が流路帯で比較的細粒であれば蛇行流路が発達すると考えられる。Schumm and Kahn(1972)の砂を用いた水路実験値では、蛇行流路は0.2‰から1.5％の斜面勾配で生じる。Leopold and Wolman(1957)の実測値では溢流限界流量20㎥/sec前後では、流路勾配が２‰～２％の広い範囲で蛇行流路がみとめられている。Schumm and Kahn(前掲)の結果では、蛇行流路の川幅水深比は20～85の範囲であった。台地面の流路跡に、以上のような蛇行流路の特徴から外れるところはない。

結論的に、流量、流路パターンの点で、久居台地の主要な流路跡が古雲出川の主流路であった可能性に問題はない。河岸の沖積リッジをほとんど欠き、埋没流路が沖積リッジをなさないことは、流路は下刻ぎみで、氾濫原を含む流路帯は全般にデグラデーショナルであったといえる。しかし曲流の軸がほとんど固定された穿入－生育蛇行とは異なり、流路変更が頻繁で、氾濫原を下刻し主流路へ合流する排水流路をともなったであろう。河岸・河床材料の侵食抵抗性がかなり弱く、上流側(おそらく扇状地斜面)の流路変更、流出量の変動が大きかったことなどが影響したはずである。ML1面の屈曲度の低い流路跡は、比較的狭いが、相川谷への流入の末期に流量が減少し、河床勾配が増すとともに、川幅水深比が大きくなった網状パターンへの漸移的な流路であったと考えられる。現在の相川と重なる緩やかに屈曲した幅100m弱の浅い谷地形は、相川谷が放棄された後の、新しい時代に形成されたようである。

（５）相川谷の地形

相川はおもに風早池とその集水域を水源とし、高塚丘陵と久居台地に挟まれた谷を通り、海岸低地を東方に流下して伊勢湾に注ぐ。低地では、南のML2面から平野に出た天神川が合流し、河口部では低地の排水流路である川関川、月見川が合流する。流路延長約6.50km、流域面積約23.9㎢の二級河川である(三重県 2010)。ここでは河川特性によらず、便宜的に谷口を境に下流・中流区間を分け、谷の分岐点から久居台地上の流路をおよそ上流区間と呼ぶ。中・上流区間の相川は、谷に対して河道、河流はいちじるしく小規模で、過小不適合河川である。

相川谷の谷口より上流側主要区間とその周辺を、

国土地理院数値標高モデル５ｍメッシュにもとづいて作成した2.5D画像を第114図ａに示す。相川谷は、高塚丘陵の南縁と、おもに久居台地のML1面を開析し、調査地より上流側で、諸戸山面と高塚丘陵の境を大釜池方面に伸びる右支谷(上流に向かい右。第114図中の記号、R-Br)と、久居台地ML1面に伸びる左支谷(L-Br)に分岐する。

右支谷には、大釜池までの間に谷中分水界(dv、盛土に覆われている)があり、現在の相川支流の上流端をなす。左支谷はML1面を開析し屈曲して南西に伸び、現在の相川上流区間の流路に沿ってさらに分岐する。相川の人工的な主水路は南側の支谷を流下するが、谷の形状はほとんど失われ(tm1付近)、ML1面にみとめられる雲出川方面からの緩やかな曲流路跡と重なっている。

谷中のML面　現在の中流区間と右支谷の相川の流路は、谷の南縁をおおむね久居台地に沿って流下し、高塚丘陵側にML1面以下の段丘面が偏って分布する。これは台地構成層が侵食されやすいばかりでなく、丘陵側の隆起にも起因すると考えられる。

谷の縁辺には、ML1面とML2面、それらの中間的な高度を示す地形面が分布する。ML1面に残る流路跡が相川谷に向かっていることから、ML1面より新しく、ML2面が形成される前に、相川谷が古雲出川の河谷として発達したと推測される。

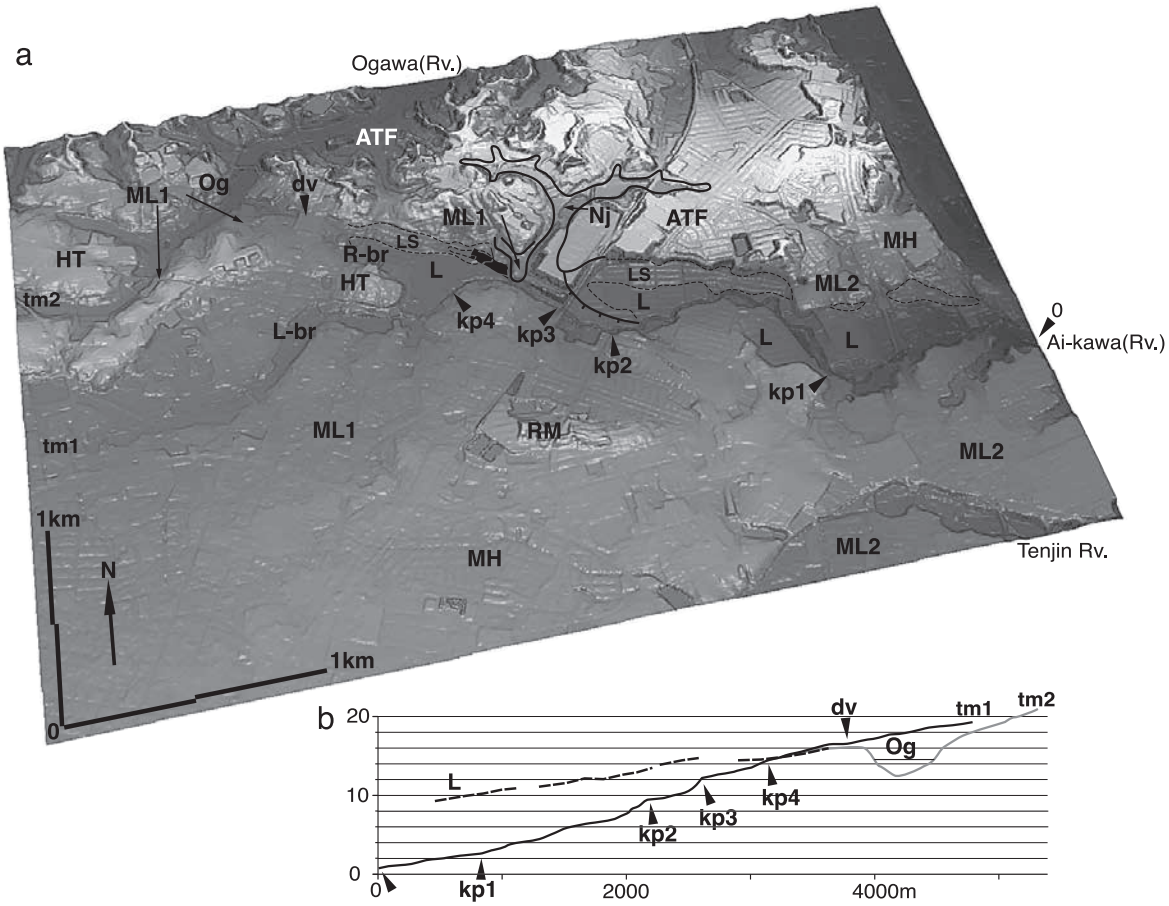
調査地の東隣には高塚丘陵側から、ML1面に相当する高まりが岬状に突出しており、相川谷をいちじるしく狭搾している。狭窄部の幅は、谷の上縁で60ｍあまり、谷底では30ｍ前後である。この地形が残るためには、その構成物質が強固であるか、その他の原因で低位段丘構成層の累重以前に流路が後に狭窄部となる位置に維持されるかのどちらかだと思われた。

ML1面構成堆積物の累重については、発掘調査地東側で、段丘崖の表土が除去された道路工事法面(ML1面の道路敷までの高さ７～８ｍ)で観察された。南東に約６～８°傾き平行層理(初生では水平)をなす砂礫がち(小型の中礫以細)の粘土質シルトが南の相川側に開析されて落ち込み、それをややシルト質で細礫以細の淘汰のわるい砂礫が充填した後、さらに砂礫がち粘土質シルトと下位の充填堆積物の上部を緩やかに南下がりに侵食して、基底部のシルト質砂礫層(小型の大礫以細の礫を含む)から上方細粒化してほぼ平行層理をなす砂質シルトが載る幅15ｍ以下、深さ数10㎝から１ｍあまりの浅いトラフ型層理(あるいはコセット)が数回にわたって累重し、法面上端まで約６ｍの垂直範囲に上方細粒化・薄層化するサクセションがみとめられた。礫の配向から南東への古流向が推定された。以上の堆積物のうち、下部の砂礫がち粘土質シルトは小野辺シルト部層、上部の充填堆積物とその上位の泥質砂礫層の累重は礫質部層に対比できる。

以上のことから狭窄部左岸のML1面構成層の侵食抵抗性はとくに高くないが、侵食・堆積がいくらか南に偏っていたことがわかる。それは高塚丘陵側の隆起を考慮すると谷全体にわたって生じるので、ここでは、むしろML1面の侵食期以来、後述する二重池谷の北側からの堆積作用が、主流路を相川谷の南辺に押しとどめ、側方侵食を逸れた狭窄部を残したと考えられる。

小川谷の河川争奪　現在、高塚丘陵の北側から大釜池(0g)を通過し、より上流に諸戸山面を開析した小川谷が伸びている(第114図のtm2)。相川谷右支谷へも開析がおよび、相川谷側から続くＬ面より深く下刻し、谷中分水界をなす。しかし池の周辺から上流でも相川谷から連続するML1面がみとめられる。いっぽう小川谷が通過する高塚丘陵の谷沿いには、ML1面やＬ面はみとめられない(第114図ａの現代の標高モデルには人工的な平坦地が分布する)。また新しい開析で不明瞭だが、大釜池南東岸の段丘縁辺の形状は、池より上流の谷が相川谷右支谷に屈曲していたことを伺わせる。しかし、相川谷右支谷のＬ面・LS面の構成層が大釜池より上流からの粗粒な流出堆積物を含まない可能性が高い。これらのことから、相川谷の右支谷はML1面堆積期には、より上流の諸戸山面の谷とつながっていたが、遅くともLS面(低位段丘)構成層堆積期より前に、小川谷に争奪されたと考えられる。岩田川右岸にあたる小川谷の谷口付近では、同谷がいわゆる低位段丘面を切っており、最終氷期の海水準低下にともない再下刻されたと思われる。

いわゆる低位段丘面　ML1・2面より４～６ｍ低く、現在の流路沿いの下刻で段丘化している比較的広い



a：相川を中心としたディジタル標高モデル(国土地理院, 基盤地図情報数値標高モデル5mメッシュによる).
R-br：上流に向かって右支谷，L-br：左支谷，Og：大釜池，Nj：二重池谷，HT：高位段丘面(諸戸山面),
RM：残丘(諸戸山面相当?)，MH：中位段丘上位面(久居面)，ML1：中位段丘下位面1(久居面～高茶屋面),
ML2：中位段丘下位面2(高茶屋面)，L：低位段丘面，LS：低位段丘面丘陵側の緩斜面, 低い段丘面,
ATF：人工改変地
kp：河床勾配の遷移点.
b：相川と支谷の河床縦断形．破線は低位段丘面.

第114図　相川の谷口より上流側主要区間とその周辺のデジタル標高モデル

地形面は、おおむね低位段丘面(Ｌ面)とみなせる。台地縁辺から調査地が位置するこの地形面は高塚丘陵側に緩やかな斜面あるいは低い２・３面の段丘の重なり(LS面)をともなう。北側の丘陵斜面からの崩積堆積物のようにも見えるが、中流区間と右支谷の伸び方向によく連続しており、その上端高度とＬ面との比高もほぼそろっている。そのような観点からＬ面を観察すると、中流区間では比較的明瞭な蛇行流路跡がみとめられ、LS面を側刻し段丘を生じさせた部分も多い。袂状部の幅は100～200m、流路幅は最大で約60m、蛇行帯の幅は谷幅に制限されている。流路帯(Ｌ面)の斜面勾配は約2.5‰である。米軍空中写真の調査地付近には、現相川の北側に流路跡を示す弯曲した低い段差がみとめられ、調査区内には、残丘状の高まり(竹林)やLS面に接して弯曲したり、丘陵開析谷から合流した帯状の凹地がみとめられる。これらは各調査区の遺構全景の空中写真にも暗色の帯として写っており、短波長の蛇行・曲流路跡である。またLS面は調査地付近から右支谷の分水界にかけて比較的幅広く分布し、それに対してＬ面の幅は狭い。この蛇行流路も台地側に遷移した形跡がある。右支谷では、小川谷の河川争奪によってほとんど河流が失われているが、下流側の基準面低下とともに谷底が削剥されＬ面が形成されたようである。以上のことから、また後述する調査地の層序からも、相川谷に分布するＬ面は元の低位段丘面から生じた侵食段丘面と判断される。

以上の中流区間Ｌ面の蛇行流路帯の発達は、最終氷期最寒冷期までの基準面低下にともなう河谷侵食であり、その後最寒冷期においてＬ面蛇行流路帯は、

河谷の南辺に沿って開析谷が発達し段丘化したと考えられる。この開析谷は、現在の相川沿いの谷地形に相当し、中流区間の谷幅は100m以下、上流に向かって狭まり、調査地付近では、数mの流路幅になる。左支谷ではより古い幅広で浅い曲流路跡に流路が重複し、わずかに下刻されたように見える。右支谷では開析谷の痕跡はみとめられない。

相川河床の遷移点と地質　第114図bに示す遷移点kp2と3付近とそれらの上流側100数10mの区間では、ほぼ水平層理をなすシルトないし砂質シルト層が、L面からの深さ3、4mの流路底と、側壁の下部、高さ数10cm～1.6mを構成している。側壁ではその上位に中粒砂～極粗粒砂が載る。シルト層は久居台地を構成する小野辺シルト部層の一部だが、その比較的新しい年代に反して、ハンマーのピックでたたいても容易に砕けず、塩類で固結度を増したと思われる。このようなシルト層が両遷移点でそれぞれ階段状に露出し、調査地付近では最終氷期から後氷期まで、緩勾配の地形面が残った。kp2より下流側kp1付近までは完新世の河床堆積物が更新統の基盤を薄く覆い、部分的に段丘化しているようである。kp1から下流側では、更新統の基盤は埋没し、すでに述べた海岸低地の沖積基底面に連続すると推測される。

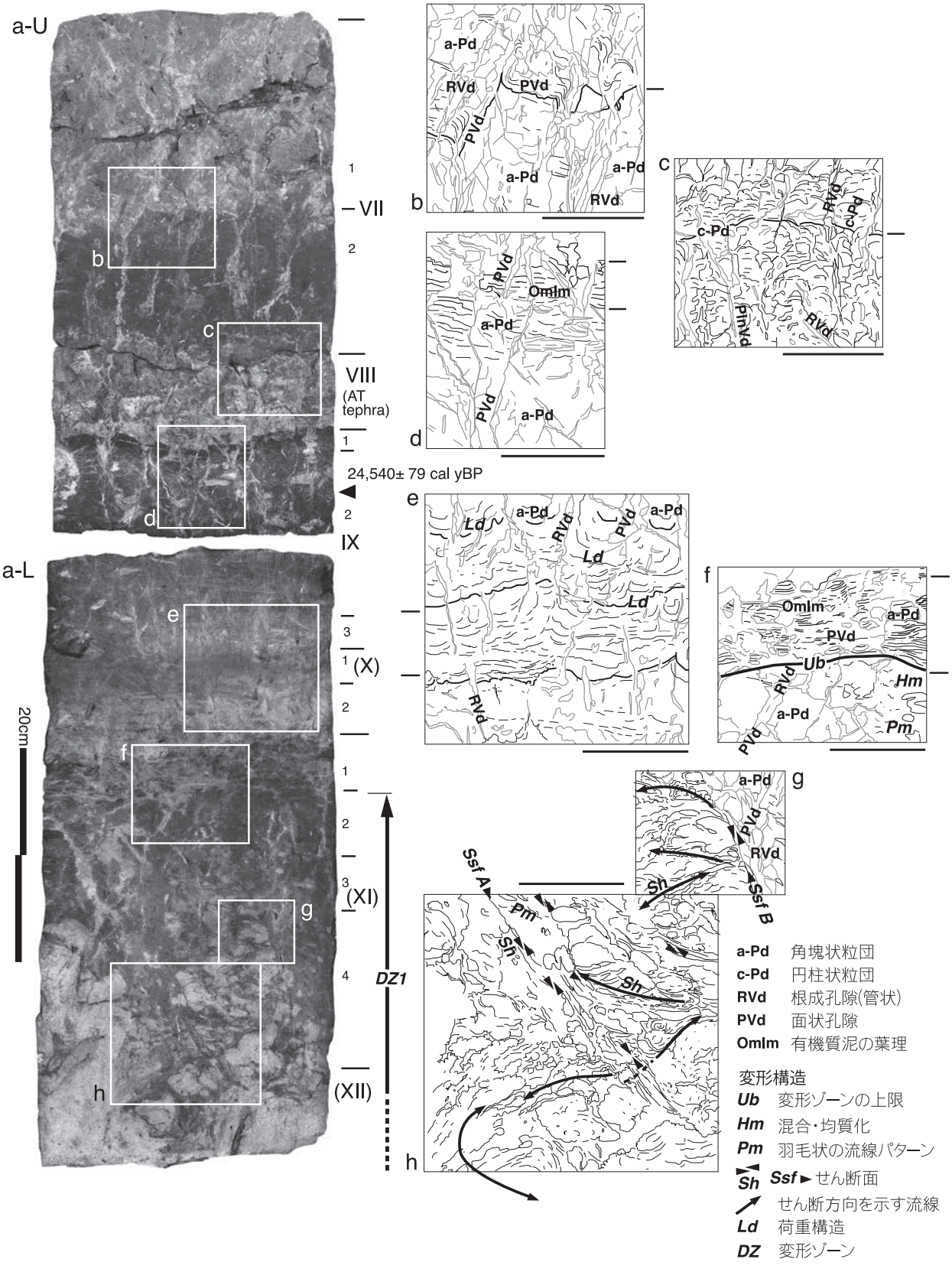
二重池谷の土砂流出　最終氷期最寒期に開析される以前のL面の勾配(第114図bのL)は全般に緩やかで、狭搾部の閉塞と上流側の堰止めは容易に起こりそうである。いっぽう、ML1面の突出部東側は二重池谷の出口で、同谷に側刻されている。空中写真で判読すると、同谷中から相川谷を横断するかたちで、流出土砂のロウブが広がり、その堆積面は下流側のLS面を切っているが、上流側ではより高い。第114図bのkp3におけるL面の高度は、二重池谷のロウブの高さを拾ったもので、この高度は狭窄部上流側のL面より高い。そのため最終氷期以後、後氷期の狭窄部の堰止め、調査地付近の水没に、二重池谷の土砂流出はかなり影響したと思われる。現在kp2・3間の相川左岸側壁の一部には、二重池谷から供給されたと考えられる、ほぼ塊状で淘汰がわるく、小型の巨礫以細の礫を含む砂礫がみとめられる。ただし多くの場所ではその再堆積物らしい。

2　第2次調査地で採取された不撹乱試料

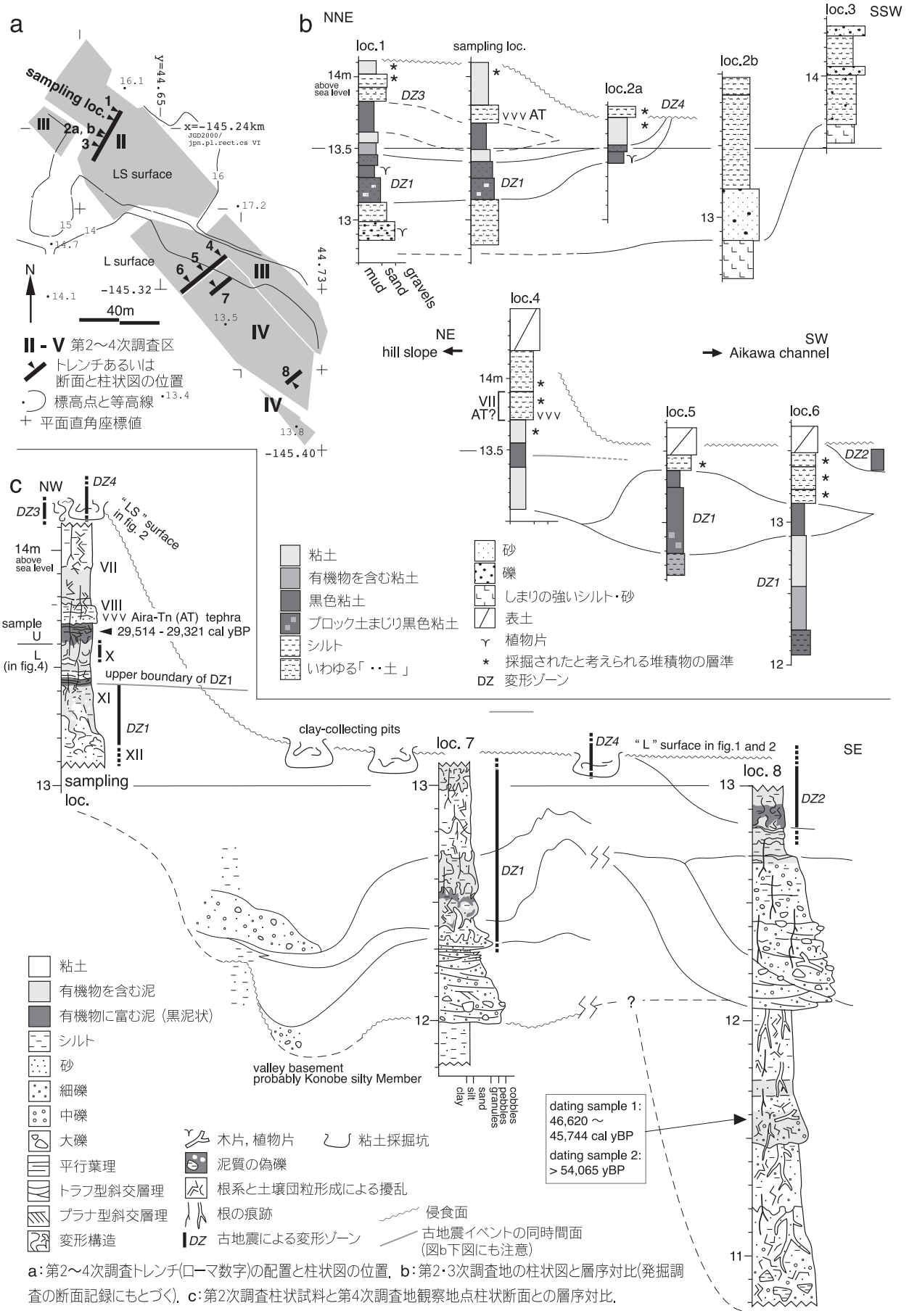
遺跡内の層序を確認し、遺跡堆積物の過去の堆積条件を推測するため、第2次調査地遺構検出面以下深さ約115cmまでの堆積物を2分割した不撹乱試料を観察した。第115図には、上下の2試料の写真(a-U, a-L)とその細部にみとめられた堆積構造と土壌構造のトレース図(b～h)を示す。試料採取地点を第116図aの調査地略図に、観察結果をふまえた柱状図を同図c左端に示した。試料中の堆積層は、他の報文で用いられた区分(ローマ数字)にしたがい、説明のため各層を細分した(上からアラビア数字で付番。以下[ ]内に表記)。付番とは逆だが、ここでは下位層準から記載する。

XII・XI層　両層は変形しているが、初生の成層構造を復元して記載すると、XII層は緑灰色の、わずかに粘土を含むシルト質砂で、砂は極細粒砂・細粒砂からなる。初生の構造はみとめられず塊状である。XI層の下部[4]は、XII層堆積物と有機質泥が混じった灰褐色の砂質シルト、その上位[3]では暗灰褐色で有機物を含む粘土質シルト、[2]はより暗色を呈し、砂は減少し細粒化する。[4]から[2]までの堆積物に含まれる有機物は上位ほど増え、より分解が進んだ印象を受ける。最上部[1]は下位の有機物に富む粘土質シルトと黒泥状の粘土が互層葉理をなす。以上のように、試料下端からXI層上端にかけて一連の上方細粒化の累重パターンがみとめられる。

XII層とXI層[2]までの垂直範囲に見られる変形構造の細部は第115図h～fに示した。全体的な印象としては、試料写真に見られるように、XII層とXI層下部の堆積物が、より上位の堆積物を巻き込んで、回転したり屈曲した流線に沿って散乱している。おそらくXI層上部の堆積物は水分が多くより流動的に挙動したのに対し、XII層とXI層下部の堆積物は応答の遅い粘性物質として挙動し、せん断速度が急増して多くの場所で断裂し偽礫化したと考えられる。また相対的に高密度なので、流動する低密度の有機質泥側に凸な団子状の形状をなす。それらの間隙を埋める有機質泥の流線はその両側の物質移動の速度差(速度勾配)によって生じたせん断面を示している。そのなかで比較的連続する部分に注目すると、試料



第115図　第２次調査地で採取された不撹乱試料とその堆積・土壌構造



a：第2〜4次調査トレンチ(ローマ数字)の配置と柱状図の位置，b：第2・3次調査地の柱状図と層序対比(発掘調査の断面記録にもとづく)，c：第2次調査柱状試料と第4次調査地観察地点柱状断面との層序対比．

第116図　粘土採掘坑検出面以下の層序を示す柱状断面図

最下部左寄りから左凸に弯曲して右上がりに伸び、詳細図ｈの右端付近で折り返して左上方向に伸びる流線、ｈの右上隅から右上がりに伸びる流線、ｇの下左寄りをやや上凸、左上がりに伸びる１、２本の流線などをたどれる。これらの特徴からXI層[4][3]中央部の堆積物はこの断面では左右の押し引きによって偽礫化し、散布したと考えられる。また、ｇの左上方にもいわゆる羽毛状パターンをなす流線が分布し、ｆの下半、XI層[2]では、ほとんどの堆積物は混合している。その上位の[1]は葉理を残しているで、変形の上端は[1]と[2]の境界と判断される(fのUB)。いっぽうｈ範囲の中央部を左上から右下に伸びる数列の直線的なせん断面(Ssf A)や、g範囲を通る試料右寄りをわずかに弯曲したせん断面(Ssf B)がともに高角度で伸びている。これらは試料表面に直交して数cm以上連続していることが試料を削り込んで整形する際に確かめられた。ｈ範囲で詳細に観察すると、Ssf Aは上述した折り返しの流線パターンを切っている部分と、左上がりの流線と共役的に連続する部分があり、偽礫が散在する右側堆積物の押し引きと同時に、試料前後方向のせん断による変位が生じたと考えられる。Ssf Bは、とくにｇ範囲ではその両側の流線は不連続なので断面に直交する方向で大きく変位したと考えられる。ただし、このせん断面をたどって後世の根成孔隙が伸び、粘土で充填されているので、より微細な特徴は不明である。

以上の変形構造は、塑性変形から流動、混合へと上方に垂直的変化を示す。これは上方ほど含水比が高く、圧密や沈定密度が小さい水底堆積物の物性を反映しており、このような堆積物にせん断応力が押し引きをともなってはたらき、複数の地層にまたがって同時に変形していることから、強い地震動によるものと考えられる(Matsuda 2000)。地震イベントはUB層準で発生したと考えられ、それ以下の変形がおよんだ垂直範囲をここでは変形ゾーン１(DZ1)と呼ぶ。次節で述べる第４次調査区の断面(第116図)でみとめられた変形ゾーンに対比できる。

X・IX層　これらは下部の鉱物質泥から有機物が増え黒泥に変化するひとまとまりの堆積単元とみなせる。X層[2]は植物遺体を挟む水平葉理をなし淡色の鉱物質粘土である。同層[1]では淡色の粘土と灰色の粘土の葉層が互層をなし、IX層[3]付近では淡色の葉層が増えるが、上方へより暗色の粘土[2]が載り、最上部の２cmは黒色粘土になる。第115図ｄ，ｅに示したように、全般に水平葉理をなすがIX[2,3]とX[1]の層準では幅数cmで縦か斜めにとおる面状の孔隙に区切られた下方に凸な円弧状の葉理に変形しており、ロード構造にも似るが形成機構についてはいまだ考えがおよばない。

VIII層(姶良Tn火山灰層)　本層は本報告書所収の分析報告で姶良Tn火山灰層と認定されている。角塊状および円柱状粒団構造にともなう面状孔隙と植物根系によっていちじるしく擾乱されている(第115図ｃ)が、厚さ10cmのなかに初生の降下堆積様式がみとめられる。まず最下部は厚さ１㎜以下で部分的にとぎれた、細粒シルト粒径、その上位数cmは中粒砂以細で粗粒なシルト粒径で級化成層をなし、最上部１cmあまりは細粒シルト粒径の火山灰から構成される。上位のVII層との境界直下では、降下後に堆積したVII層堆積物と同様の暗褐色のシルト質粘土中に散乱・混合した部分があるほか、水平方向に楔状に切りあったり、座屈したように上凸に撓んだ部分がみとめられ、地震動による変形の可能性があるが、断定には至らなかった。

VII層　本層は有機物に富み暗灰褐色を呈する下部[2]と、有機物が少なく比較的明るい褐灰色を呈する上部[1]に分かれる。両者ともにわずかにシルト質の粘土からなり境界は漸移的だが、中部に面状孔隙の分布密度と配向が急変する層準が重なり、明らかな層界のように見える。上下の明暗を分ける角ばったパターンは、試料断面と平行あるいは低角度に交差する面状孔隙に充填された白色粘土によるもので、上部では角塊状構造が細密で、下部は粗大である。IX層以上では、孔壁に酸化鉄が沈着した未充填の、相対的に新しい根成孔隙が分布し、上方に増加するが、本層上部ではとくに多数分布する。上部、下部ともに初生の堆積構造はほとんど目視できない。詳細図ｂ中の歪んだ短い葉理模様は面状孔隙を充填する白色粘土の葉理状の積層を示す。

以上のように最下部のシルト質砂より上には、AT火山灰を挟み細粒な泥が累重する。シルト質砂は丘陵から流下する小河川ですでに淘汰された細粒の砂

が、増水時に懸濁する泥とともに谷中の堰止め湖に流入し、その縁辺付近に堆積したと考えられる。それより上位の泥は、河川の粗粒堆積物の流入が途絶えるか、水域が拡大し、懸濁物質のみが堆積する場に変化したことを示す。暗褐色の程度は汀線付近で活発な生物活動、とくに植物遺体の分解物質の生産量を反映し、湖水体の縮小あるいは水位低下はその大きな変動要因と考えられる。したがって黒色を呈するXI層、IX層の[1]は異地性の堆積物だが、近傍湖岸の植生と土壌の発達を示唆する。

試料全体に白色ないし灰白色の粘土で充填された面状孔隙(亀裂)が分布する。その分布密度の不連続は、Ⅶ層中部にもあるが、上述した黒色泥とその直下で密度が高い。これらの孔隙には、面状孔隙を充填する泥とよく似た明色の泥で充填された管状の根成孔隙がともなう。このような孔隙の成因は、黒色泥上面での乾燥と、その埋没後に土壌層位(A)C層中の頻繁な地下水面変動による角塊状粒団の発達と考えられる。同様の孔隙は、一段低くL面を構成する第４次調査地loc.７の累重にもみとめられた。その付近では弥生・古墳時代に採掘されたやや青みを帯びた白色の粘土が面状孔隙や根成孔隙を充填していた。これらのことから、相対的にも年代は不確かだが、３、４万年以前に生じた水域に、粘土採掘面をつくる暗色の粘土が堆積する後氷期までに何度かの強い乾燥を被ったことがわかる。

３　発掘調査範囲の層序対比

以上の地質・地形の情報、不撹乱試料の観察結果に加え発掘調査における断面記載と第４次調査区の遺構検出面下の地層観察結果をふまえ、おもに第２・４次調査区(以下Ⅱ区、Ⅳ区と表記)の層序を対比した。第116図ｂ，ｃはその結果を示す柱状断面図である。紙数の都合でその要点のみを以下に記す。

（１）第116図に示すように、調査範囲はすでに述べた相川谷中のL面(おもにⅣ区)とLS面(おもにⅡ区)にまたがる。

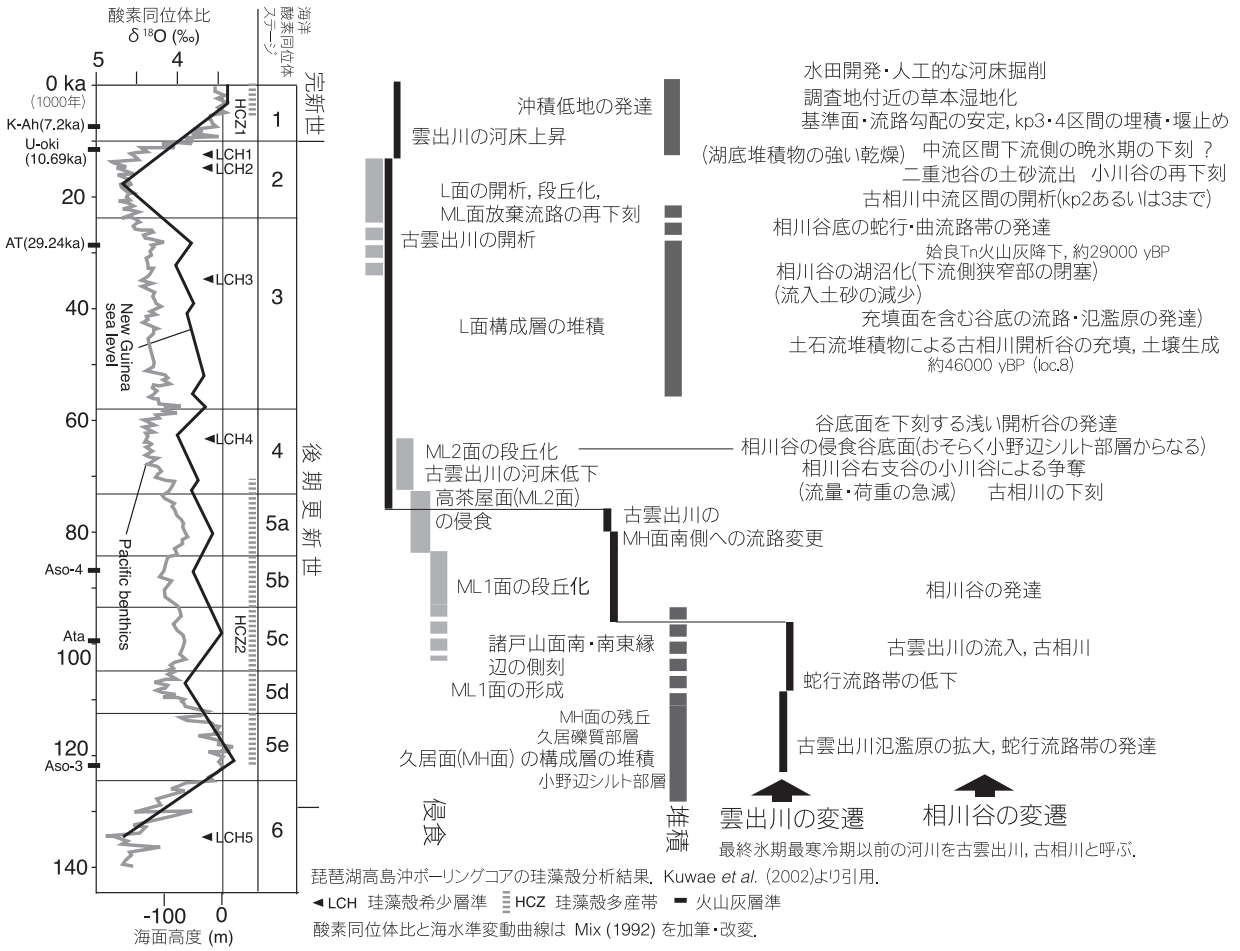
（２）調査範囲の中でもっとも下位を占める堆積物は、Ⅱ区locs.2b，3、Ⅳ区loc.7の柱状最下部(標高12～12.8m)の、しまりの強い砂質シルトで、久居台地を構成する小野部シルト部層に相当し、相川谷の基盤をなすと考えられる。上面はおもに浅い流路充填堆積物の砂礫層に侵食されている。Ⅱ区では南側の残丘に向かって上面高度を上げ、Ⅳ区では、Ⅲ区に沿って伸びる斜面の基盤をなす。

（３）Ⅳ区loc.8では、その高度からみて（２）の基盤をさらに開析した谷を充填したと考えられる厚さ1.2m以上の土石流堆積物の累重がみとめられた。古流向は東向き。掘削底付近には、大礫サイズの砂質泥の偽礫が多数含まれ、より下位の谷底に堆積した泥の再堆積物と考えられる。累重中部の材化石による放射性炭素年代は約45000 cal yBP～54000 yBP以前であった。累重を構成する堆積層の上面はそれぞれ侵食されているが、失なわれた堆積面からの土壌生成・植生発達の痕跡を残す。

（４）Ⅳ区のloc.8では標高12.7ｍまでに、比較的広範囲に側方移動する深さ60～80㎝の流路とそれを充填し上方細粒化する砂礫が堆積し、その下底は（３）の開析谷充填堆積物を侵食していた。流路の古流向は南東方向。Loc.7では、泥を侵食して伸びた深さ70㎝以下、幅10m前後の湖底の澪筋とも呼べる流路の基底に砂礫が載り、さらに泥が流路を充填した堆積ユニットが数ｍ～10数ｍ側方にずれて切り合い累重していた。流路の伸びは東西方向。

これらの累重には、標高12.3ｍから観察断面の上端13.1ｍをこえる変形ゾーンがみとめられ、不撹乱試料の下部で観察された地震動による変形ゾーンに対比できる。第116図ｂに示した発掘調査時の断面記録から推察される、全般に上方細粒化する岩相とも大きな不調和はない。このほかに、Ⅳ区南部を東西にひろく分布し、loc.8柱状の最上部にもみられる黒色泥とその上位層(DZ2)、Ⅲ区中央部で、loc.1と試料採取地点付近の粘土採掘土坑検出面をなすシルト質粘土層(DZ3)、土坑内の泥質充填堆積物(DZ4)に変形構造がみとめられる。これらのうちDZ2と3は火山灰層とともに侵食されており、同時間面をたどることができない。

（５）Ⅱ区の不撹乱試料の標高13.7m層準に挟まるAT火山灰について、現場の記録ではⅢ区loc.4にそれらしき記載がある。L面の領域では火山灰層も上述したDZ上端の層準もみとめられない。また、Ⅲ区からⅡ区への層理はごく低角度で高度を増し連続す



第117図　久居台地と相川谷の地形変遷

るので、不撹乱試料直上14.2mまでには、湖沼の泥が累重し、その後Ｌ面の領域が侵食されたと考えられる。したがって、弥生・古墳時代の粘土採掘坑は、よく似た粘土の採れる異なる堆積層に掘られたことになる。第116図ｂ，ｃでは最終氷期の同時間面として想定される侵食面を描いた。

（６）上述の侵食面の直下には下位の泥を基盤とし、有機物に富む暗灰色シルト質粘土で充填された、蛇行流路跡がⅣ区に分布する。この基底が侵食されたＬ面である可能性が高い。粘土採掘坑の掘削面は流路を充填する泥の上位に連続的に累重したように見える。粘土採掘坑はところによってこの暗色の充填堆積物にも掘り込まれていた。流路と採掘坑の充填堆積物にはともに地震動によると考えられる変形構造(DZ3)がみとめられた。すくなくとも採掘坑内の変形は、古墳時代初頭の巨大地震(たとえば松田 2012)によると考えられる。これらが異なるイベントによるものかどうかは、未検討である。遺構全景の空中写真で、同様の流路跡がⅡ区南西の張り出した区画にみとめられる。loc.2a～3のシルトや砂質シルトが流路の基盤と充填堆積物を構成するのであろう。なお、弥生時代末・古墳時代の粘土採掘は、乾燥期の大気下で掘削されたが、開口した土坑を充填する掘削時の褐灰色粘土偽礫と黒色泥は、ほとんどの場合水底で堆積したと考えられる。

まとめ

本稿では、相川西方遺跡とその周辺の地質条件、最終間氷期(約12万年前)から晩氷期(約１万年前)までの地形発達、発掘調査地の堆積物と層序について検討した。第117図には、最終間氷期以後の寒冷期・温暖期の変化を示す酸素同位体比・同位体ステージと琵琶湖底の珪藻殻産出量の変化、日本列島でも想定しうると思われる海水準変動に、火山灰層序

を加えた年代軸と、上述した地形の変化を並べて示した。

（１）最終間氷期最温暖期の後、久居面(MH面)が段丘化する過程で、古雲出川の蛇行流路帯が高塚丘陵南縁に移動し、その側刻・下刻によって相川谷が形成された。

（２）最終氷期最寒冷期より前(おそらく６、７万年前)に谷底の一部が浅く開析された。この開析谷は、土石流堆積物で約４万年前までに充填された。

（３）その後、遺跡周辺の谷底では、やや侵食的な流路が離散的に発達し砂礫が堆積したが、粗粒堆積物の流入は漸減し、湖沼的な環境下で泥質堆積物がAT火山灰降下の後までの累重した。水域は調査地のすぐ下流側の狭窄部の閉塞・堰止めによると考えられる。

（４）AT火山灰降下後、約２万年前までの間に海水準低下にともなうＬ面の開析・段丘化は始まり、その初期には蛇行流路帯が発達し、元のＬ面構成層を侵食して、LS面が段丘化した。さらに最寒冷期(約１万８千年前)には、狭窄部下流側の久居台地沿いに深い開析谷が発達し、Ｌ面が段丘化した。

（５）晩氷期以後に、狭窄部のすぐ下流側に二重池谷からの土砂流出があり、一時的に遺跡周辺の河流を堰き止めた。

（６）後氷期の本遺跡では草本植生をともなう湿地がひろがり、Ｌ面とLS面の一部をふくむ領域で水没・乾燥をくりかえした。

（７）相川谷中の地形発達には、高塚丘陵で相対的に隆起速度の大きいことが影響している。

地質・地形に関する情報をさらに加え、検討・改訂すべき点は多い。とくに、人間活動の痕跡が増す後氷期の遺跡とその周辺における景観復元を行うには、離散的で薄い堆積層と微地形のより詳細な調査を要する。

謝辞　本稿を作成するにあたり、大阪市文化財研究所の趙哲済氏からは最終間氷期の地質について御教示たまわり、同氏と関西大学文学部地理学教室の水田憲司氏には参考文献の入手にご援助頂いた。パリノ・サーヴェイ株式会社の辻康男氏とは地形調査で有益な意見交換ができた。以上の方々に心よりお礼申し上げます。

（松田順一郎）

【引用文献】

秋山雅彦(2008)　最終間氷期とその気候変動について．地球科学．62，5-15.
荒木慶雄(1953)　鈴鹿川下流域の新生界(要旨)．地質学雑誌．59，354.
太田陽子・寒川旭(1984)　鈴鹿山脈東麓地域の変位地形と第四紀地殻変動．地理学評論．57，237-262.
活断層研究会編(1991)「新編　日本の活断層」東京大学出版会，pp. 254-259.
北村治郎(2013)　第４章　第１節　自然条件．津市地域防災計画 震災対策編．pp. 11-16.
木村一朗(1971)　伊勢湾西岸地域の中位段丘．竹原平一教授記念論文集「中部地方の鮮新統及び最新統」．pp. 1-12.
地震調査研究推進本部、地震調査委員会(2009)「布引山地東縁断層帯の評価」．27p.
鈴木康弘・渡辺満久・廣内大助・杉戸信彦・三重県(2007)：「三重県内活断層図(その２：中南勢及び周辺地域)」，三重県・国立大学法人名古屋大学共同研究「活断層の位置情報の整備に関する調査研究」成果，三重県．図65-67，71-73，77-79.
竹原平一・木村一朗(1962)　伊勢湾西岸の段丘と第四系(予報)．第四紀研究．日本第四紀学会，2(4・5)，188-195.
長田敏明・中矢史朗(1990)　伊勢湾周辺の地形・地質 ― 特に後期新生界について．財団法人政策科学研究所．191p.
名古屋グループ(1969)　伊勢湾周辺の第四系．地団研専報 15「日本の第四系」．pp. 319-329.
日本河川協会　http://www. japanriver. or. jp/river_law/kasenzu/kasenzu_gaiyou/chubu_r/tyubu_gaiyou_kihon. htm
松田順一郎(2012)　第２章　鬼が塩屋遺跡の地形・堆積物の分析．山中章編著『伊勢湾岸地震履歴の総合的研究』，三重大学人文学部，pp. 45-50
三重県(2010)　二級河川相川水系河川整備基本方針．7p. http://www. pref. mie. lg. jp/KASEN/HP/kasen/seibi/aikawakihon. pdf
目崎茂和・岩田修二(1990)　地形分類．三重県地域振興部地域振興課編「土地分類基本調査　津西部・津東部」(５万分の１)簿冊　pp. 9-16および地形分類図.
八木浩二・寒川旭(1980)　津市西方における一志断層系の新期断層活動．東北地理．32，211-216.
山田純(1990)　表層地質調査．三重県地域振興部地域振興課編「土地分類基本調査　津西部・津東部」(５万分の１)簿冊，pp. 17-22および表層地質図.
山田純(1991)　表層地質調査．三重県地域振興部地域振興課編「土地分類基本調査　松阪」(５万分の１)簿冊，pp. 14-17および表層地質図.
吉田史郎(1987)　津東部地域の地質．地域地質研究報告(５万分の１図幅)．地質調査所，72p.
吉田史郎(1990)　東海層群３ ― 伊勢湾西岸地域．アーバンクボタ，29，16-29.
Araki, Y. (1959) A Pleistocene Marine Fauna from near the Cities of Tsu and Yokkaichi, Mie Prefecture, Southwest Japan. *Transactions and Proceedings of the Palaeontological Society of Japan, N.S.* 33, 19-22.
Kuwae, M., Yoshikawa, S. and Yoshio Inouchi, Y. (2002) A diatom record for the past 400 ka from Lake Biwa in Japan correlates with global paleoclimatic trends. *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology.* 183, 261-274.
Leopold, L.B. and Wolman, M.G. (1957) River channel patterns; braided, meandering and straight. *Geological Survey Professional Paper.* 282-B, pp.59-63.
Matsuda, J.-i. (2000) Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan. *Sedimentary Geology* 135, 99-116.
Mix, A.C. (1992) The marine oxygen isotope record: Constraints on timing and extent of ice-growth events (120-65 ka) *Geological Society of America Special Papers,* 1992, 270, p. 19-30.
Schumm, S.A. and Kahn, H.R. (1972) Experimaental study of cannel patterns. *Geological Society of America Bulletin.* 83, 1755-1770.

Ⅷ　調査のまとめ

相川西方遺跡では、700基以上の土坑が密集して検出された。この土坑の性格については、あらゆる可能性が考えられたが、調査段階で実施した自然科学分析や類例から粘土採掘土坑であると判断した。

県内では土器焼成土坑の調査は多く行われ、明和町北野遺跡では225基という古代の土師器焼成坑が確認されている。また、相川西方遺跡の近くでは、津市高茶屋大垣内遺跡において古墳時代後期から飛鳥時代にかけての焼成坑が確認されるが、その粘土を採掘した痕跡は見つかっていない。今回のような密集した土坑の調査は県内初であり、当時の社会を復元するうえで重要な成果が上げられたといってよい。以下、調査成果を深く検討するうえでの諸要素について若干の考察を加える。

1　密集土坑の類例

（1）密集する土坑についての研究

「密集する土坑」に関しての研究史をまず見ていく。このような土坑の事例については、福永伸哉[①]、京嶋覚[②]、及川良彦・山本孝司[③]らの検討がある。福永氏は密集する土壙群の多くを土壙墓と考え、その土壙の機能をいくらか反映している諸特徴について検討している。すなわち、埋土の特徴・土壙の分布状況・土壙群と流路の関係・土壙の形状・出土遺物の問題の５点である。これらについて検討した結果、土壙群を一般庶民層の共同墓地と考え、土壙の規模から埋葬形態（姿勢）にも言及している。また、弥生時代後期にこのような密集型土壙群が現れる背景として、弥生時代以来の階層分化が未熟な状態から、集団内における優劣関係が発生することにより墳墓間で差異が見られ、首長の個人墓は共同墓地を飛び出して共同墓地は解体するが、密集型土壙群はその結果取り残された階層下位の人々の共同墓地として登場したものであろうとする[④]。

これに対し京嶋氏は、大阪府長原遺跡群あるいはその周辺で検出された約400基の土壙群、報告書において土壙墓とされる遺跡を含めた密集する土壙群を持つ遺跡の事例を詳細に検討する中で土壙墓説を次のように批判する。福永氏や土壙墓とする報告書が指摘する「整った形状」の土壙の判断は主観的なもので、大半が不整形土壙である。また、土壙群の立地は地形や地質、つまり粘土層の分布に由来する。そして、これらの密集する土壙群を検出する遺跡は、土師器・須恵器・瓦陶業など窯業の盛んな地域にみられることが多い。これらの検討から、密集する土壙は土壙墓とは考え難く、粘土採掘坑と考えるべきであるとする。

これ以降は、粘土採掘坑についての認識が広まったためか、密集する土坑の調査時には埋土の状況、土坑の断面形状、出土遺物、土坑の検出される地質などに着目して調査・報告書に記述されるようになる。及川氏・山本氏は、縄文時代の粘土採掘坑が検出された東京都多摩ニュータウン遺跡[⑤]の事例から、粘土採掘坑の認定基準は、土坑の規模や形状ではなく、粘土層を狙った採掘が認められるかどうかを第一としている。具体的には①最低限粘土層を掘り抜き、粘土層の部分をその厚さだけ横掘りしていること、②粘土層以外の土を主に排土し、基本的に粘土層を排土しないなどを挙げている。その上で集落と粘土採掘坑の関係、調査結果から想定される粘土採掘量から周辺遺跡を含めた地域の状況を論じている。また、縄文時代の粘土採掘坑事例には、立地や採掘坑の規模・分布などにおいてはほぼ共通点があるとする[⑥]。しかし、採掘坑群の規模、同時期の集落との関係（近辺集落の有無）に着目すると、大きく３つに分類される。すなわち、大規模に採掘坑が展開し、集落に接さないグループ（多摩ニュータウン遺跡など）、中規模な粘土採掘が行われ、集落に接するグループ（青森県三内丸山遺跡[⑦]など）、小規模で集落と隣接するグループ（秋田県家ノ後遺跡[⑧]など）である。

（2）発掘調査事例

確認された土坑群が粘土採掘坑であるのか墳墓であるのか議論が分かれる事例もあるが、粘土採掘坑あるいはその可能性があるものを見ていく。

密集する土坑の例は、縄文時代中期から確認でき

る。青森県三内丸山遺跡、岩手県御所野遺跡、茨城県東大橋原遺跡・西中根遺跡、東京都多摩ニュータウン遺跡№248らがそうであり、縄文時代全体とすると15例[9]に上る。分布は調査事例に偏りがあろうが東日本に集中し、西日本では確認されていない。

弥生時代の事例[10]は４例で、鳥取県福岡遺跡[11]（前期、中期後葉、古墳時代前期）、大阪府長原遺跡[12]（中期～古墳時代前期）、大阪府西大井遺跡[13]・奈良県東安堵遺跡[14]（いずれも弥生時代後期末～古墳時代初頭）などである。弥生時代末～古墳時代初頭のものになると前述の事例も含まれるが京都府上中遺跡[15]・三宅遺跡[16]、富山県小杉流通業務団地内遺跡群№21遺跡[17]、兵庫県筒江浦石遺跡[18]などがある。古墳時代前期以降の事例は20例ほどで、これには鎌倉時代のものも含む。

これらの調査成果からの検討も進んでいる。縄文時代中期～後期の大規模な粘土採掘坑を確認した東京都多摩ニュータウン№248遺跡に隣接する№245遺跡では土器作りの様相がうかがえる。そしてこの２遺跡周辺半径500ｍ以内には縄文時代晩期と古墳時代後期の粘土採掘坑が検出された№947・949遺跡、平安時代の粘土採掘坑が検出された№146遺跡があり、一大原料採掘地といえる。また、古代の窯業跡も多く確認されている。

弥生時代末から古墳時代初頭の兵庫県筒江浦石遺跡では182基の粘土採掘坑が確認されている。この遺跡の土坑は、①粘土層の下底まで掘削されている、②底面は平坦となる、③垂直もしくはオーバーハング気味に掘削されている、④粘土層の部分を横に抉るような掘削が行われている、⑤ブロック状の埋土が認められることなどが挙げられ、これらの特徴から粘土採掘坑として認定している。

群馬県波志江中宿遺跡[19]では古墳時代の粘土採掘坑66基が確認され、土坑壁面の粘土層部分が抉り取られていること、埋土中に粘土がほとんど含まれないことから、土坑群を粘土採掘坑と断定する。

大阪府西大井遺跡[20]では弥生時代後期～庄内期の土坑群が3,500基程集中して検出されている。出土遺物はほとんどが甕で、遺構間接合が確認されている。大阪府大庭寺遺跡[21]では古墳時代後期～奈良時代の2,680基の土坑が確認され、残留脂肪酸分析により人の埋葬が想定されている[22]。同じく自然科学分析により土壙墓とされる例に京都府三宅遺跡がある。遺跡からは573基（弥生後期～古墳時代後期、主体は弥生時代終末期から古墳時代初頭）の土坑が検出され、一部残留脂肪酸分析によりコレステロールが確認されている[23]。奈良県東安堵遺跡では弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土坑228基が確認されている。遺跡は、奈良盆地では最低点にあたる標高約38ｍに立地し、大和川支流の合流点で人工的排水施設がなければ生産地としても居住域としても不向きな地域にある。土坑からは甕を主体とする土器の他、鋤形木製品なども出土している。報告書の中では土坑の機能については明言されてはいないが、焼けた痕跡のある木製品や赤彩木製高杯の存在などから祭祀的な性格がうかがえるとする。

長野県安源寺遺跡[24]では、いずれもトレンチによる確認のため重複はあろうが29基の土坑が確認されている。平成６年度の調査では遺構ではなく地形の落ち込みと判断し、重機によるトレンチ調査が行われた。その結果、落ち込みは粘土採掘坑３基の重複であり、土層の詳細な観察から採掘の作業工程・目的とする土層について、３次元の模式図を示しながら検討を加えている。また、平成14年度の調査では採掘作業単位の把握を主眼において行われ、基盤層（地山面）が階段状に掘りこまれていることに注目、この一段一段が粘土採掘の一作業単位と考えている。そして表土など掘削した際の排土を既掘削の土坑に廃棄し、また掘り進めるという工程のため、既掘削土坑には表土などが堆積し、しかもその上で作業をしたために踏み固められた堆積層となっている。トレンチ調査のため土器は弥生時代後期の細片が見られるのみであり、報告書では弥生時代後期の操業と判断している。

これらの調査事例から、粘土採掘坑として認定されている土坑の共通項は、粘土層まで掘り抜いていること、側面への掘り込みが認められることにあり、この特徴は縄文時代から古墳時代にかけてさほど違いがない。また、特に近畿地方においては弥生時代後期～古墳時代初頭に属する密集する土坑の調査事例が多く確認されており、これは、土器生産体制の変化などの問題を孕む可能性がある。

2　相川西方遺跡の事例について

相川西方遺跡で確認した土坑群について、いくつかの特徴を挙げてみていくこととする。

（１）形状（平面・断面）・規模

土坑の形状は、平面形に着目すると、例えば円形・方形・楕円形など明確に判断できるものはほぼなく、大半が不整形土坑と言えるものである。また、検出時に複数の土坑が重なって見えても、土層断面を見ると切り合いが確認できない土坑（ＳＫ40・45・71など）もあり、平面形に規格性があるとは言い難い。

断面形は、浅いレンズ状のものもあるが、特徴的なものは断面形状が袋（巾着）状にオーバーハングしている点である。各土坑のオーバーハングの有無については第８～17表を参照いただきたい[25]。また、断面形はオーバーハングを呈さないものであっても、土層断面の観察から、オーバーハングの天井部が崩落したと思われるものがある。よって、土層断面で確認できる形状は土坑が完全に埋まった最終形態であり、掘削完了直後の形状ではないと思われる。また、このオーバーハング部を見ると、その壁部分には褐灰色粘土が堆積しているものが多い。土坑は、褐灰色粘土層を掘り抜いているが、それより下層に下がるものは少ない。

床面は筒江浦石遺跡とは異なり凹凸であるものが多く、ＳＫ374のように極端な凹凸状床面の土坑もある（第45図）。

平面規模[26]は長辺で見ても小さなものは30㎝、大きなものは14.5ｍと幅広い。しかし、小型土坑は総じて検出面からの深さが20㎝以内と浅いこともあり、土層断面図などを作成していない場合が多く、他の大型土坑との差異は不明である。大型土坑は、いくつかの土坑が重複している可能性も含む。しかし土坑の多くは、1.0～3.0ｍ程の平面規模である。深さは、検出面から10㎝程度から深いもので１ｍであるが大半が40～60㎝程である。

（２）土坑の分布

既に見たように、土坑の配置・分布状況は、その土坑の性格を検討する上で重要である。つまり、福永氏の指摘するように空閑地がある場合、その空閑地は何らかの役割（道あるいは広場など）を担っていたのか、もしくは京嶋氏が指摘するように土坑の配置が堆積土に左右されるというものである。

相川西方遺跡の土坑の分布は、第３次調査区Ⅰ地区から第２次調査区の中央～東部分、第３次調査区Ⅱ地区の西部分、第４次調査区Ⅰ地区の北部へとやや弧を描くように分布する。これをオーバーハングの見られた褐灰色粘土層の広がりと合わせて見ると、褐灰色粘土層のない範囲には土坑はほとんど見られない（第120図）。つまり相川西方遺跡の土坑の分布は、空閑地が何らかの役割を担っていた可能性は否定はできないが、褐灰色粘土層と密接に関わっている蓋然性が高いのである。

次に、出土する土器から推定される土坑の時期による分布を見る。出土土器の年代は大まかに弥生時代後期～古墳時代初頭、古代に分けられるが、主体は弥生時代末～古墳時代初頭である。そこで、弥生時代後期、弥生時代末～古墳時代初頭、古代に分けて土坑の変遷を見る[27]（第118・119図）。出土遺物のある土坑は少ないため、土坑の変遷ははっきりとしないが、弥生時代後期、弥生時代末～古墳時代初頭いずれも土坑の位置は重なる。古代も、分布は南半部に偏るが、前代の土坑分布域の範囲内である。つまり、時期毎に全く場所が変わるということはなく、前段階と同じ場所に土坑が続けて掘られていることがわかる。

以上のことから、土坑の分布は、褐灰色粘土層の広がりとの関係が深いことが予想される。

（３）土坑埋土について

土坑の埋土を分類すると、概ね以下の３つとなる。

①　黒色～黒褐色粘土層の単一層（一部ラミナが見られる）。

②　黒色、黒褐色または褐灰色粘土に黒色～黒褐色粘土ブロック、褐灰色粘土ブロックなどが混じる単一層。

③　上記①・②が複数層を成しているもの。

各土坑におけるブロック土の状況は第８～17表にも欄を設け、その有無、ブロック土が見られる範囲を記した。底・中層・上までの判断は、その土坑の残存状況により変化する。例えば浅い土坑の場合、あるいは本来は深い土坑を削平により浅い状態で検出した場合、ブロック土が底のみに堆積していたと

しても上まで堆積していることとなってしまう。そのような危険性も踏まえて、堆積範囲を記した。

③の複数層の場合、ブロック土が床のごく浅い部分にのみ見られる土坑もいくつかあるが、中層まで見られるものの方がどちらかといえば多い。その堆積状況は例えば自然堆積のようにレンズ状あるいは平坦であるということは少なく、土坑壁のどちらかに偏りがあったり、ブロック土層上面に凹凸が見られるものが多い。この状況はつまり、土坑外から自然にブロック土が流入したというのではなく、何らか人為的に放り込まれ、しかも平らにならす作業がなされていないことを表している。

①は、その埋土が自然に堆積したことを表す。また③の土坑で、ブロック土の上にラミナを持つ堆積土が見られることもあり、これは人為的に土が放り込まれた後、しばらくその土坑は開いた状態で水などを伴って自然に土が堆積したことを示す。

土坑埋土を見ていくと、土坑の壁面で堆積していることが確認できる褐灰色粘土が、ほぼ含まれないという特徴がある。これは、褐灰色粘土が土坑に再度流入するような状況になかったことを示す。土坑の範囲に褐灰色粘土が堆積しているのにかかわらずその粘土が見られないということは、褐灰色粘土が別の場所に搬出されたことを示す。

土坑の形状のところでも見たが、当遺跡の土坑の埋土に特徴的なのが、土坑縁にみられる三角形状の堆積層である。ＳＫ467・480、396・401・406などで見られるもので、自然に流入したとは説明ができない堆積状況である。多摩ニュータウン遺跡例では粘土採掘坑の認定基準の中に「排土中に特徴的なかき出し状の土層と、地山の崩落土が互層に認められること」とあり、筒江浦石遺跡例でも袋状の上のベース土がブロック状に崩落した痕跡が見られたとある。つまり、当遺跡の三角形状の堆積層は、土圧によりオーバーハング部の天井部が崩落したことを示すと考えられ、この堆積土の存在は、現状の断面形状では確認できないが、本来はオーバーハングを呈していたことを示すといえる。

（４）他の遺構の状況について

相川西方遺跡の土坑以外の遺構は溝４条のみである。その溝の埋土の状況は、ＳＤ466では底にブロック土が堆積し、土坑の堆積状況とさほど変わりはない（図版19）。その他の溝は記録がないため不明であるが、いずれも遺物の出土はない。それ以外に竪穴住居はなく、ピットも僅かで掘立柱建物があったとは考えられない。

他遺跡の例で見ると、多摩ニュータウン遺跡№248遺跡では土坑のみであり、約300ｍ離れた№245遺跡で竪穴住居などが確認される。東安堵遺跡や筒江浦石遺跡、長原遺跡においても、土坑の他に溝が検出されているが住居跡はない。密集する土坑群では溝は伴うことがあってもその他の遺構は含まれないということが相川西方遺跡においてもいえることがわかる。ちなみに、東安堵遺跡は前述のように奈良盆地で一番低い地点にあり、灌漑施設がなければ水が常に滞水状態となり、人の居住に適さないと言われていることは前述のとおりである。相川西方遺跡についても、発掘調査時より降雨のたびに周囲から水が流入し、粘土質のため、なかなか排水できなかった[28]。おそらく当時も同じような条件であったと考えられる。

（５）遺物の状況

相川西方遺跡から出土する土器の主体は、弥生時代後期～古墳時代初頭、八王子古宮Ⅰ式～島貫Ⅱ期新相のものである。そこで、器種・土器出土土坑の比率・土器の出土状況に着目する。

①　種類

当報告書に掲載した当該時期の土器86点を甕・壺・高杯に分類し比較すると、それぞれの比率は15：13：14である[29]。さほど差があるとはいえず、高杯の比率が多い印象を受ける。筒江浦石遺跡の出土土器の特徴として出土土器中９割以上が甕であり、同様の状況は長原遺跡・三宅遺跡でも共通する。しかし池田遺跡では杯・高杯類が多く出土している[30]。

外来系の土器に注目すると、近江系（湖南型）の受口状口縁壺（10）がある。これは、胎土分析においても在地の土器とは異なる結果が出ている。その他にいわゆるタタキ甕の出土が目立つ。第Ⅴ章でも触れたように遺跡全体でも破片のみでの出土は少ないが、これはタタキ甕も同様で、図化・掲載した４点（９・16・38・46）が全てである。そのうち、38は台部がつくもので、近畿系であるタタキ甕と東海

系の特徴である台部という折衷のものであろうか。類似のものにいわゆる熊野型甕があるが、熊野型甕のように全体のフォルムが縦長ではなく球形に近いこと、体部上半はハケ調整であることから、熊野型と同じく折衷形式から独特の文化を持って発達した型式に属するものではないだろう[31]。

土器以外の出土品としては籠製品や槽・アカトリ状木製品、へら状木製品、図化はしておらず製品とは判断できないが木片が出土する土坑がいくつか見られる。遺構一覧表の備考欄に「木」もしくは「木片」と記しているが、これは枝等加工がさほどなされていない自然木片か、あるいは板状の木片であるのかは記録されていないので不明である。他の遺跡では、東安堵遺跡からは鋤状木製品などの掘削具、鳥取県福岡遺跡ではヘラ状握り棒、京都府温江遺跡第１次[32]では梯子が出土しており、相川西方遺跡出土の木片も、何らかの製品の部材であった可能性が考えられる。その他、鉄製品や装飾品類などは出土していない。

また、底から円礫の出土が見られる土坑が７つある。包含層や地山に礫はさほど含まれず埋土に礫が混入するような環境ではなかったため調査時より注意が払われ、該当する土坑には第８～17表の遺構一覧表の備考欄に記している。同様の例は多摩ニュータウンNo.248遺跡でも指摘されており、「10～20㎝大の自然礫もしくは破礫が採掘坑の底面におかれた状態で出土する。（中略）圧倒的に多いのは、使用痕の有無の判断がつけにくい礫である。意図的に持ち込まれ、坑底に置かれたことは明らかである。」とある[33]。相川西方遺跡についても同様で、出土する円礫には使用痕はほぼ見られず、多くのものは底面から出土する。意図を持って置かれたとは判断できないが、念のため触れておく。

②　遺物が出土する土坑

土坑から出土する土器は、１つの土坑から１個体というのが大半で、複数個体の出土はわずかである。今回は、ある程度時期が弥生時代後期～古墳時代初頭と判断できる土器が出土する土坑の比率をカウントした。すると、土坑総数702基に対し153基で、約22％となる。更にこの遺物が出土する土坑のうち、複数個体を持つものは32基で約21％となる。京都府三宅遺跡では遺物の出土する土坑は４割で、相川西方遺跡はそれより更に少ない。

③　土器の状況

当該時期の出土した土器の残存状況や、使用形態がわかる特徴について見ていく。

実測図掲載土器のうち、壺・甕は図上でほぼ完形に復元できるものは56点中７点、約13％である。しかし、実物を見ると特徴的なものが縦半分もしくは４分の１程度の残存状況で出土することである。その残りの部分は出土しておらず、接合しない破片があったとしても残りを復元できるような状況ではない。また、縦半分ではなくても、９の甕のように体部上半～口縁部の縦４分の１程が残存するものもある。

また高杯は、杯部がほぼ完存して出土するが、大半は脚部は破片さえ出土しない。反対に脚部があった場合、杯部は出土しない。しかし、６の高杯のように、杯部に接合する部分の脚部が残存し、そして杯部は縦半分のみ残存するなど、あたかも木製品のアカトリのような形状を呈するものもある。

このようにして、土器が破損しているといっても、例えば焼成後穿孔などはない[34]。

煮炊具である甕は、外面に煤が付着するものが多く、本来の煮炊具として機能していた段階を経ていることがわかる[35]。筒江浦石遺跡例では、甕ほぼ全てに煤の付着があり、完形のものはなく、半分や破片が多いと指摘される。

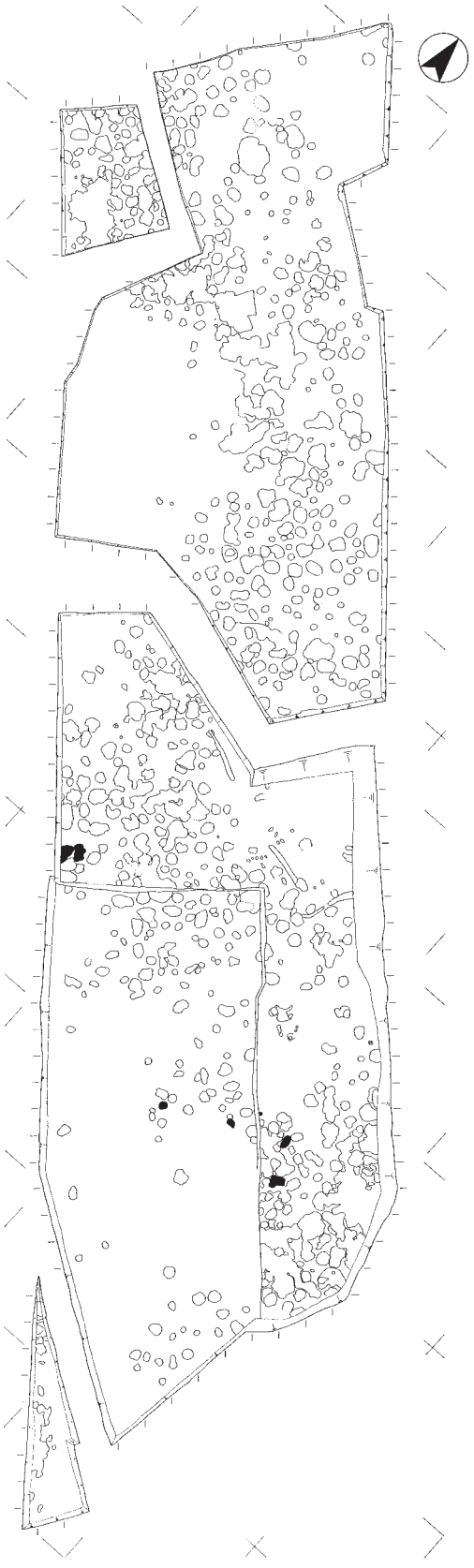
④　出土位置

状況が判明するものでは、平面で見るとオーバーハング部に挟まるように出土するもの（ＳＫ28・322・476・486）、土坑縁付近から出土するもの（ＳＫ74・83・91・94・377・384・401）、中央付近から出土するもの（ＳＫ310・409・482・520）などであり、いずれかに偏る傾向はない。土層との関係がわかるもので見るとＳＫ476のように床面直上から出土するものもあるが、最下層ブロック土上面から出土するもの（ＳＫ377・401・486など）が多い。筒江浦石遺跡では、土器は土坑底部でなく、埋土中位から上位にかけて多く見られることが指摘されている。出土状況から、土器自体を置くあるいは埋めることを目的としたと積極的に言えるものはない。

弥生時代後期

弥生時代末期～古墳時代初頭

第118図　相川西方遺跡遺構変遷図１



第119図　相川西方遺跡遺構変遷図２

その他、ＳＫ370とＳＫ423から出土した高杯片、ＳＫ544とＳＫ546から出土した壺片、ＳＫ630とＳＫ633から出土した壺片が接合し、接合しないがＳＫ652とＳＫ720出土の土器片は同一個体の可能性が高い。このように別土坑の土器が接合する例が大阪府西大井遺跡・万崎池遺跡・菱木下遺跡においても見られる[36]。これについて福永氏は、「葬送儀礼の中で使われた土器が割られて、埋葬の際に土壙に入れられるのではないか」とし、「親、兄弟など肉親の葬儀の際に使われた土器の破片を自らの、あるいは彼らと関係の深い人の墓に持ち込む」可能性を指摘する。一方で、多摩ニュータウン遺跡では、粘土採掘坑が見られるNo.248遺跡出土の浅鉢・石器と土器製作が行われたNo.245遺跡出土の破片が接合し、集落と粘土採掘坑を人が行き来していたことを証明するものとする。相川西方遺跡の土坑は、別土坑間の土器接合の例はあるが、埋葬に伴う土坑であるという福永氏の指摘を積極的に否定も肯定もできない。それは、別土坑間接合する土器と土層の関係が不明であるためであり、ここでは、それらの土坑が同時期に掘削あるいは掘削された状態で開いていたという可能性を指摘するにとどめたい。

（６）自然科学分析結果から

土坑が墓あるいは貯蔵穴である可能性を考えて自然科学分析を実施した。結果は第Ⅵ章にあるが、まず墓の可能性のあるＳＫ47に対してリン酸・カルシウム分析を実施したが、リン酸の数値は自然状態の範囲内に収まり、カルシウムについても対照とした検出面土壌試料との間で有意性が認められず、自然状態と判断された。

また貯蔵穴の可能性を考え、土坑埋土を洗浄したところ種実遺体があったことからその同定も実施した。ＳＫ28・ＳＫ47から試料を採取したが、ＳＫ28からは同定可能は種実遺体は検出されず、ＳＫ47からは複数種類の種実が検出された。その中で栽培種はヒエ近似種であり、その量も微量であり、貯蔵されたものとは考えられない。

以上のことより、分析した土坑は少ないが、自然科学分析から墓あるいは貯蔵穴の可能性は低いと言える。

（７）焼成実験

平成21年度に当遺跡の粘土を使用して焼成実験を行った[37]。詳細を当時のメモをもとに以下に記す。

①　作業経過

平成21（2009）年12月18日　粘土4.0kg（コンテナケースの重さ1.4kgは含まず）を４㎝角程度に割って天日干しする。

12月22日　乾燥粘土を木槌で叩き潰し、篩（３㎜）で篩い細かくする。叩き潰した後の重量3.98kg。水簸作業。乾燥粘土をバケツに移し、水を入れて粘土がほとんどなくなるまでかきまぜるとかなりの粘性を取り戻す。また、粘土の粒子が細かいためか、かきまぜるだけで大半が容易に溶ける。

12月25日　水簸開始から３日経過。粘土はほとんど沈殿せず、まだ日数がかかる模様。

平成22（2010）年１月４日　水簸開始から８日経過。25日よりは沈殿しているが、参考文献ほど上澄み液が見た目は澄んでいない。しかし、触ると粘土の沈殿が確認できたため上澄み液を捨て、沈殿している粘土をコンテナケースに移し天日干しをする。ゴミよけに本来ならば細かい網が適切であろうが薄様紙をかけることで代用。また、凍結防止のため日中のみ天日干しを行う。

１月14日　ほぼ乾燥終了。粘土重量は3.71kg。

水を少量加え練り、全体的に乾燥した粘土の塊が少なくなってきたら一本の柱状にまとめる。そして板の上で半環状にし、外面全体が乾燥するようにする。固めに絞ったタオルを被せて半日置き、生乾き状態にする。

１月15日　更に少量の水を加えよく練る（１時間程度）。ビニール袋に入れ、10日以上寝かせることとする。この段階で粘土重量は3.86kg。

３月８日　成形。10×２㎝のテストピースを、厚さ1.4㎝程度（50ｇ程度）・0.7㎝程度（30ｇ程度）、700℃・1000℃・1250℃で焼く予定であるため、２本ずつ計12本用意。

※焼成温度は700℃、須恵器と土師器の焼成温度の境界である1000℃、現在、陶芸で一般的な1250℃とした。

ちなみに、第Ⅵ章第４節にあるように相川西方遺跡他の出土土器の胎土分析から、いずれも800℃以下の温度で焼成されたと推定されている（164ページ参照）。

また、混和材として、市販の白砂（石英、粒径0.5～１㎜）を５％、10%、20%で混ぜたもの計９本（10×２×1.4㎝程度）を用意した。

以上、合計21本を約１週間倉庫内で乾燥させる。

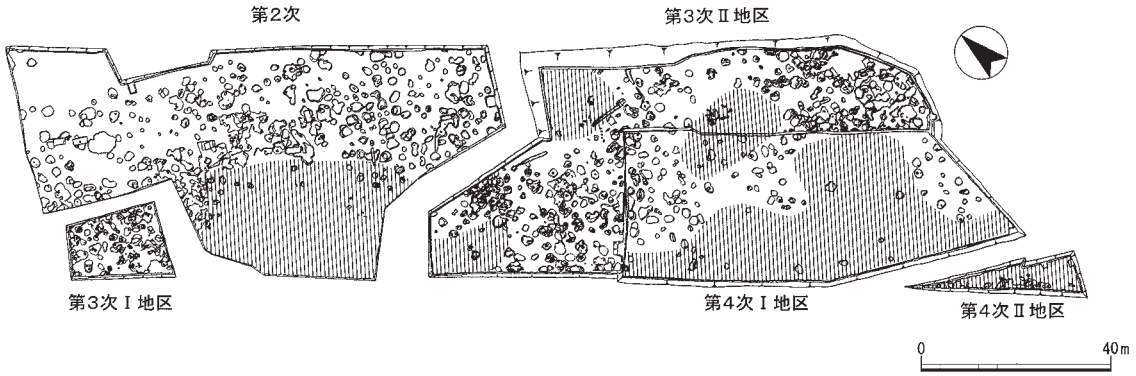
５月２日　１回目の焼成。天気：晴れ　窯場気温：16℃前後。電気窯を使い1250℃で焼成。

焼成最高温度：1250℃　焼成時間：12時間（酸化焼成）

200℃まで３時間、300℃まで１時間、以後１時間で100℃ずつ上げていき、1000℃～1250℃間は１時間かけ、1250℃に達した時点で焼成終了。炉内温度60℃前後で窯の蓋を開ける。

※標準的な本焼の焼成温度である1250℃を最高温度に設定し、到達時点で焼成を終了した。

※テストピース及び窯の湿気を除くために、200℃に達するまでの時間を長めに設定した。



第120図　褐灰色粘土と遺構との関係（１：1,600）　※トーン部は、褐灰色粘土層が見られない範囲

５月５日　２回目の焼成。天気：晴れ　窯場気温：16度前後。電気窯を使い700℃で焼成

焼成最高温度：700℃　焼成時間：８時間30分（酸化焼成）

設定温度・時間は1250℃の時と同じ。しかし最後は最高温度700℃到達後、その温度で30分焼成後終了。炉内温度60℃前後で窯の蓋を開ける。

※1250℃で成功したため1000℃での焼成は中止。

※温度計の無い土窯では700℃ぴったりで焼成を止めることができないのではと考え、700℃のまま30分間焼き続けた。

②　結果

ａ）700℃

・粘土状態から焼成後までの収縮率５％～10％。

・割れ・溶解・火ぶくれなどは無し。

・反り・歪みは乾燥時に発生したもので、土の締め方（伸ばし方）の具合によるものか。

・この粘土は、素焼き用の土として十分使用可能であると思われる。

・相川西方遺跡出土土器は色がもう少し薄いが、これは土器が使用された後出土するまでの経年変化が原因と考えられる。

・焼成時間８時間30分で問題なく焼けている㊳。

ｂ）1250℃

・粘土状態から焼成後までの収縮率約15％。

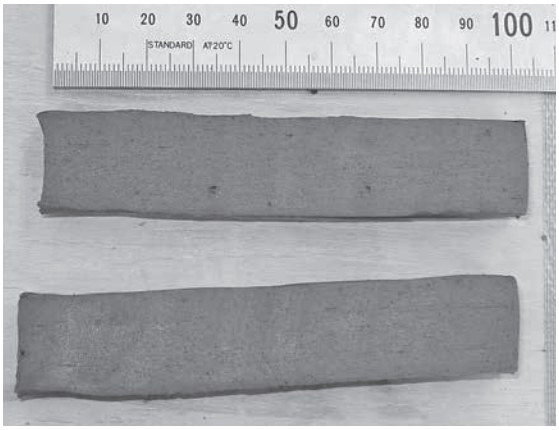
・割れ・溶解は無し、火ぶくれ・石はぜあり。

・反り・ゆがみは700℃の時と同じ理由である。

・この粘土は、本焼（焼き締め）用の土としても使用可能であると思われる。

※1000℃用テストピースは、今後可能なら還元焼成を行うことを考え、焼かずに保管。その場合の焼成温度は、1000℃～1250℃を考えている。

粘土を半環状にまとめ乾燥



焼成前のテストピース

焼成後のテストピース（700℃）

第35表　焼成実験テストピースの法量変化

焼成前法量 【長辺×短辺×厚】 （cm）	10×2×1.4	10×2×0.7	石英５％混 （10×2×1.4）	石英10％混 （10×2×1.4）	石英20％混 （10×2×1.4）
700℃焼成後法量	8.9×1.8×1.1	8.9×1.9×0.5	9×1.8×0.7	9×1.8×0.9	9.1×1.8×0.9
	8.9×1.8×1.1	8.9×1.7×0.5			
1250℃焼成後法量	8×1.7×1.1	8×1.8×0.6	8.3×1.7×0.8	8.3×1.8×1.0	8.5×1.7×0.9
	8×1.8×1.1	8×1.8×0.5			

③　まとめ

相川西方遺跡で採取した粘土を焼成した結果から、この粘土は土器（土師器・須恵器・陶器など）の材料として、水簸等の精製を行った場合、十分に使用可能であると判断できる。

3　粘土採掘活動の復元

これまでにみた状況から、相川西方遺跡の土坑群は墳墓あるいは貯蔵穴ではなく、粘土採掘坑の可能性が高いという結論に至った。そこで粘土採掘の工程を推定してみたい。

（1）試し掘り

多摩ニュータウン遺跡でもそうであるが、採掘目標とする粘土層がそこにあるかどうかのテストピットがあった。それは断面形状がオーバーハングを呈さず、深さは粘土層を突き破りその下の砂層まで達するものであった。そのような土坑は相川西方遺跡では見られないが、ＳＫ487（第66図）の底は第８層黒褐色シルト層に達しながらも第６層褐灰色粘土の位置で横方向に掘り進めている。粘土掘削を行いながら更に採掘可能な粘土がないかを確認しているのではないだろうか。

（2）本掘削

掘削作業は数人の共同作業で、穴に入って掘削する人物、排土を捨てる人物が想定される。相川西方遺跡で見ると、土坑の規模は大人１人が入ることのできる広さはあり、掘り下げながら中で作業できる広さを確保したであろう。そしてその後、目標とする粘土を採掘していく。その粘土層の部分のみを横方向に掘り進める。

粘土採掘対象は、おそらく褐灰色粘土１層のみである。多摩ニュータウン遺跡例は最低でも４枚の粘土層を採掘しており採掘量が多い。それに比べると相川西方遺跡の採掘量は多くはない。

掘削道具は、第３次調査時のメモには土坑底に鋤痕と思われるものがわずかに確認できたとあるが、詳細は不明であり、東安堵遺跡のような鋤形木製品は出土していない。土坑の深さは40～60㎝程度であり、掘削した粘土をそのまま上に放り投げたか、容器に入れて上にあげたのであろう。容器の可能性として籠製品あるいは半截された土器が挙げられる。

（3）掘削終了後

掘削終了後の土坑はどうなるのかを検討する。

ＳＫ507（第70図）の掘削状況を土層断面図から見てみる。この土坑は、２つの土坑が切り合っており、東側の土坑が古く、西側が後から掘削されている。土層図から、東側土坑を掘削し、そのあと底に５㎝程ブロック土が堆積してからしばらくそのまま開いた状態で放置される。10㎝程自然堆積が見られた後、検出面上面までまたブロック土により埋まり、その後西側土坑を掘削。西側土坑は底に５㎝程ブロック土が堆積した後、検出面までは自然に埋まっていった。土坑の埋土のところで検討したように、ブロック土は粘土がさほど含まれず、堆積した上面に凹凸があることから、粘土採掘の際の排土であり、人為的に放り込まれたものであると考えられる。

ＳＫ507に戻ると、東側土坑がしばらく放置された後、他の土坑掘削の際に出た排土により東側土坑が上面まで埋め戻され、その後に西側土坑の掘削が行われた。すなわち、東側土坑と西側土坑の掘削にはある程度時期差があるのである。地表面に残る窪み（東側土坑）からこの部分で以前に粘土が採掘されたことを想像した掘削者が、その隣接地（西側土坑）を掘削したという行動が予想される。

ＳＫ502（第69図）では、大きな土坑の方を先に掘削、上面近くまで排土により埋め戻した後、小土坑の方を掘削、そちらは中層近くまで排土で埋め戻した後放置している。この例では、時期差はさほどない可能性もある。

これらの例からわかるように、掘削完了後の土坑は排土の処理場となったのである。しかし、上までその排土で埋めるような状況は見られないことから、その後の作業のための危険性を回避する意識はさほどなかったのであろう。

掘削時に使用した道具類の処理について考える。ＳＫ486（第66図）では、底に10～20㎝の高さまでブロック土が堆積した上面に、体部がややブロック土に埋まった状態で甕(51)が出土している。その口縁部側、土坑壁際のみ別のブロック土の第４層が堆積し、そこから上は微小ブロック土と褐灰色粘土の互層となる第３層、微小ブロック土にラミナが見られる第２層、黒色粘土層の第１層が堆積する。この

土層は、土坑に排土を放り込みながら粘土採掘に使用した土器も廃棄し、後は自然に埋まるに任せたという状況を示している。この土坑も上まで埋めることはしていない。遺物の出土状況でもみたように、遺物は土坑の底からやや浮いた状態で、ブロック土上から出土していることが多い。つまり、排土を処分した後に、それらの土器を放置する。すなわち、採掘を終えると道具を処分するのである。

筒江浦石遺跡では、土器は土坑底部でなく、埋土中位から上位にかけて多く見られることなどが挙げられている。そして煮炊き用の甕が粘土採掘場に持ち込まれた理由として、昼食調理用に持参した「弁当」ではないかと考えられており、何らかの意図を持って土坑を埋め戻す際に廃棄されたとしている[39]。

その他の遺跡では、出土した土器について、粘土採掘坑で利用された目的が検討されているものはほとんどない。筒江浦石遺跡のように、弁当の入れ物であったということは否定できないが、多くが排土であるブロック土の上から、土坑１つに付き１点の土器が出土している例が多いことから、この土器は掘削に伴うものであると考える方が自然ではないだろうか。

４　相川西方遺跡産粘土の土器

相川西方遺跡で採掘された粘土に関する諸問題を挙げ、若干の検討を加えたい。

（１）粘土の発見の契機

この粘土がなぜ発見され、採掘されるようになったのかを検討したい。

第Ⅵ章にあるように、ＳＫ28・ＳＫ47の種実同定から、土坑埋土には遺構付近に生育していたと思われる植物の種実が含まれていた。これらの植物はいずれも明るく開けた場所に生育する、すなわち人里植物に属するものが多く、このことから周辺は開けた草地であったと想定されている。また、水湿地生植物も含まれ、周辺域に湿地が存在されたと考えられる。つまり、この辺りは相川沿いの草原であったのである。

時期は遡るが、相川西方遺跡では縄文時代草創期の尖頭器が出土していることから、この地が縄文時代から開けており、狩りの場として利用されていた（居住域としては利用されなかった）ということがいえる。

それが、何かがきっかけで粘土が発見される。例えば洪水等の河川氾濫により地表面が削られ、粘土が露頭することがあったのかもしれない。そうして発見された粘土は、当時の土木技術・道具でも掘削可能な比較的地表面から浅いところで採掘できるからこそ、盛んに掘削されたのであろう。

（２）採掘粘土の行方と工房

採掘された粘土自体に着目し、その搬出先について考える。

採掘粘土の総重量は多摩ニュータウン遺跡例で採掘坑群の面積から検討されており[40]、実調査面積2,405㎡で634.92t、推定面積5,500㎡で1,452tである。相川西方遺跡でもおおよそを出してみると、土坑の総面積2,283.152㎡、粘土層厚を30㎝として計算すると684.9456㎥、重量にして904.1282ｔとなる[41]。多摩ニュータウン遺跡例は1,000年という長い期間での採掘活動の結果であり、相川西方遺跡の粘土採掘量はひけをとらないものである。

採掘された粘土の利用については、土器製作あるいは住居の竈・炉構築土などが考えられる。以上のような大規模な採掘量では、やはり竈等の構築土ではなく土器製作のための粘土と考えた方が自然であろう。

そうして採掘された粘土はどこへ運ばれたのだろうか。遺構についての報告で見たように、相川西方遺跡では工房となるような建物跡などは検出されておらず、土坑群の中には粘土を貯蔵したような土坑は含まれない。このことから、採掘した粘土はそのまま遺跡外へ運び出されたと考えられる。

工房遺跡である多摩ニュータウン遺跡No.245例では竪穴住居内での粘土の貯蔵が見られるが、その量は僅かであることから、作る分のみその都度採掘してきたものと考えられている。また、時期は古墳時代後期と異なるが、津市高茶屋大垣内遺跡で検出された竪穴住居内で粘土が見られる例[42]があり、土器製作のための粘土は土坑など専用施設ではなく、住居（工房）内に貯蔵したと考えられる。

相川西方遺跡で粘土を採掘した人々はどこからやってきたのか。そして粘土はどこへ運ばれたのか。

これだけの粘土採掘を担ったからには、それなりに核となる集落が近在したはずである。多摩ニュータウン遺跡例では粘土採掘坑を検出したNo.248遺跡と工房であるNo.245遺跡とは300ｍの距離である。

そこで相川西方遺跡周辺の当該時期の遺跡を見ると、高松Ｃ遺跡は1.9㎞、上村遺跡は2.1㎞、四ツ野Ｂ遺跡にあっては3.5㎞も離れる。多摩ニュータウン遺跡例から、相川西方遺跡についても近在の工房の存在を考える方が自然ではないだろうか。ここでは、近辺に未発見の遺跡の存在を想定しておく。しかし、粘土採掘に携わった人々は、近在する工房遺跡の住民だけではなく、それ以外の集落も関わったと考えてもよいであろう[43]。

（３）相川西方遺跡粘土製土器の流通範囲

次に、相川西方遺跡産粘土で作られた土器が何処まで流通しているのかということを考える。

①　自然科学分析結果から

当該時期の他遺跡、安濃川流域の高松Ｃ遺跡、雲出川流域の四ツ野Ｂ遺跡、櫛田川流域の阿形遺跡出土の土器の胎土分析を行った。これらの遺跡を選定した理由としては、第Ⅵ章でも触れたが石井智大氏[44]による当該時期の集落動向の検討がある。

それによると、石井氏は伊勢湾西岸地域の弥生時代終末期の遺跡群を河川・山地などの地理的環境と遺跡分布から抽出するが、それぞれはおおよそ直径５～10㎞内外の範囲の広がりを持つ。そしてこの遺跡群は「どちらかといえば、内部に存在するより小規模な遺跡群こそが基礎地域や農業共同体的結合として捉えられる集団に対応するものと想定され、本稿で抽出された遺跡群自体はそれより上位のまとまりとして捉えられるのではなかろうか。」とする。すなわち、「一定の空間的領域を持つ社会集団の単位を反映している」ものである。これに相川西方遺跡をドットすると、いずれも遺跡の集中が密である安濃川流域群と雲出川流域群の境界（空閑地）に位置する。

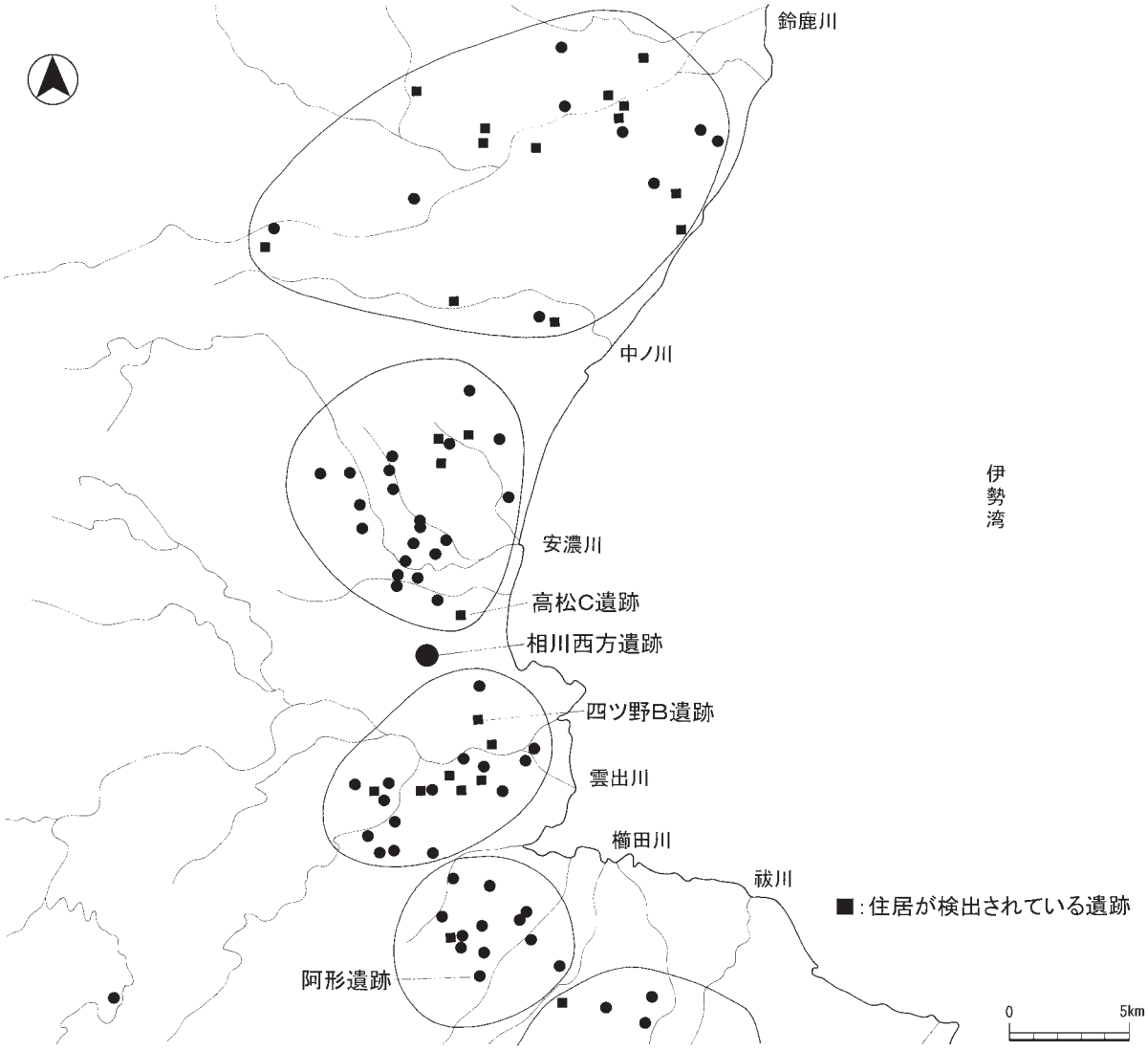
また、古墳時代後期の例であるが、相川西方遺跡の北西に位置する藤谷窯跡群は、安濃川流域の古墳群を中心に埴輪を供給した埴輪・須恵器併焼窯である。この藤谷窯跡群はこの他に、雲出川左岸に位置する古墳群や櫛田川流域の古墳にまで埴輪を供給していたことが考古学的検討、自然科学的検討からわかってきている。これは藤谷窯跡群がこの地域における拠点生産地として位置づけられ、埴輪の生産・供給体制が成立していた可能性が指摘されている[45]。これと同様な状況が弥生時代末にもあるのかを見るために、櫛田川流域も分析対象として加えた。

以上のような観点から安濃川・雲出川・櫛田川の代表的な遺跡として上記の３遺跡を採り上げ（第121図）、土器の選定には、３遺跡から各２点ずつとした上で、この時期に代表的な壺と甕を分析対象とした。

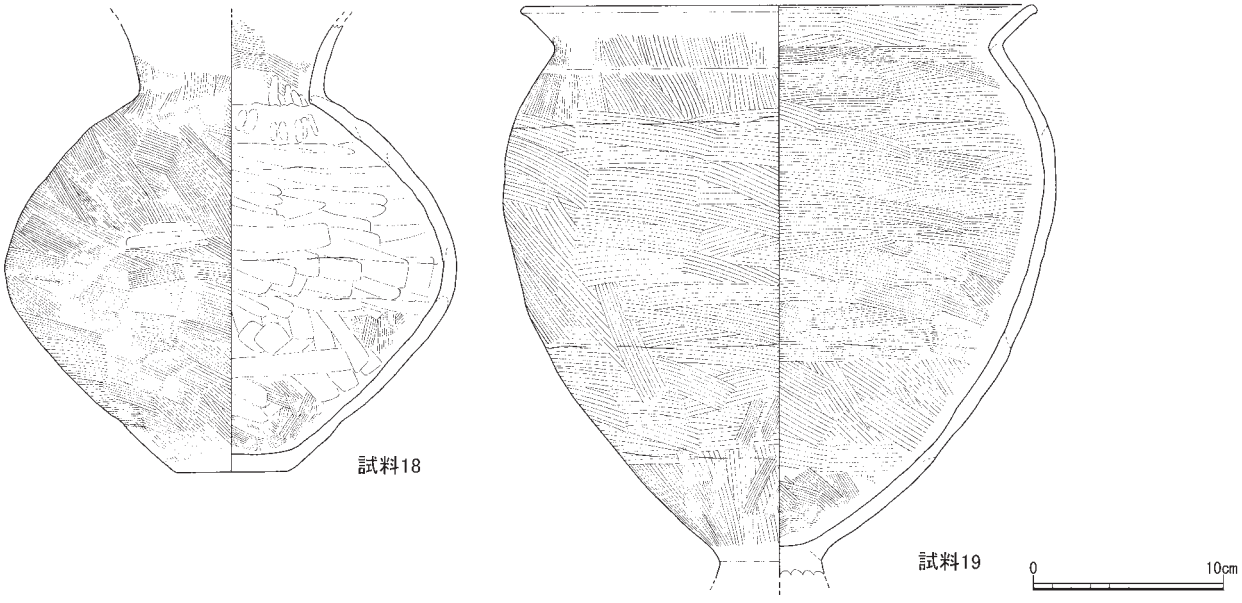
各遺跡について詳細を記す。髙松Ｃ遺跡は津市半田、岩田川右岸の半田丘陵東側斜面に立地する。発掘調査の結果、竪穴住居29棟、テラス状遺構５か所、方形周溝墓１基などが調査された。テラス状遺構は排水溝や柱穴を持つものもあり住居とも考えられるが、平面形が不整形であることから屋外作業場のような用途が想定されている。出土遺物には壺・高杯・甕などがあるがいずれも遺存状態が悪い、また、その他に大量の土錘が出土している。今回、ＳＨ25から出土した壺・台付甕について胎土分析を行った。ＳＨ25は報告書に掲載される土器から、山中Ⅰ式～廻間Ⅰ式併行期と相川西方遺跡の時期と重複する。

四ツ野Ｂ遺跡は津市高茶屋小森町、雲出川左岸に面する段丘裾に位置する。髙松Ｃ遺跡と同様、急斜面に立地する。調査では、弥生時代後期～古墳時代中期の竪穴住居87棟（弥生時代後期32棟・弥生時代末～古墳時代初頭23棟・古墳時代前期～中期26棟）、同時代と思われる掘立柱建物４棟が調査されている。また、調査地の東で銅鐸が発見されている。集落と銅鐸が隣接して検出され、他の銅鐸埋納を考える上でも示唆的な遺跡である。今回分析を行ったＳＨ35は出土した土器から山中Ⅰ式併行期の遺構と考えられる。

阿形遺跡は松阪市阿形町、櫛田川の北を流れる阪内川左岸の低位段丘に位置する。調査の結果、弥生時代後期中葉～古墳時代初頭にかけての溝５条（うち、４条は環濠と考えられる）と竪穴住居１棟が検出されている。環濠内からは、山中Ⅱ式から廻間Ⅰ式併行期の壺・甕・高杯などが多く出土し、南伊勢地域における重要な位置を占める資料とされる。今



第121図　胎土分析試料出土遺跡位置図（１：300,000）（註44文献より引用。一部改変、再トレース）



第122図　阿形遺跡　胎土分析試料（１：４）

回、ＳＤ103から出土した壺（報106）・甕（報170）について胎土分析を行った（第122図）。

分析の結果、相川西方遺跡の採掘対象となった褐灰色粘土と今回分析した土器試料を比較すると、粘土は土器の原材料となった可能性は低い。しかし、土器胎土に含まれる砂粒は調査区周辺堆積物に由来する可能性が高いことから、あくまでも採掘粘土単体ではなく周辺で採取した砂を混和材として加えて使用したと結論付けられている。つまり少なくとも、この粘土がそのまま混和材なしで土器の素地土となった可能性はないと結論付けられたのである。

また、相川西方遺跡出土土器を見てみると、高杯類と甕類では胎土が異なり、壺は両側に渡ることがわかった。また、甕と高杯という器種では胎土もしくは混和材を違えて作ることが指摘されている。

相川西方遺跡出土土器の胎土と比較すると、３遺跡の土器は粒径組成あるいは鉱物・岩石組成いずれも共通するものはなく、相川西方遺跡出土土器とは異なる材料事情（製作事情）であったと結論付けられた。しかし、分析結果が普遍的であるのかそれともその試料の特異性を示すのかは分母が少ないため判断できないとある。今後は試料数を増やしての分析を機会をとらえて実施することが必要である。

以上のように、「相川西方ブランド」の土器は現時点では不明であり、粘土採掘と土器製作には時期差がある可能性もある。すなわち、相川西方遺跡で粘土採掘に使用された土器は粘土採掘時を遡る時期のものとも考えられるのである。

その他、相川西方遺跡出土のタタキ甕（16）、台付甕（12）、受口甕（10）は他の相川西方遺跡出土土器試料あるいは他の遺跡の試料と胎土が異なるという結果がみられた。なかでも受口甕はその形状から近江系と考えらえるものであるが、胎土の違いは顕著であり、近江かどうかは別として搬入品の可能性が高いものである。これについてはタタキ甕も近畿系とされ、同様の可能性がある。

②　採掘粘土量の検討

自然科学分析からは、相川西方遺跡産粘土が使用された土器の流通範囲を明らかにすることはできなかった。しかし前述のように分析試料が少なかったため、分析結果が普遍的であるのかそれともその試料の特異性を示すのかは分母が少ないため判断できないとされた。今後、試料数を増やしながら比較対照とする遺跡を再検討する意味で、以下に考古学的検討を加える。

相川西方遺跡産粘土が使われたと思われる工房が確定できないため、作られた土器の特徴も不明であり、よって土器から流通範囲をうかがうことはできない。そこで、粘土採掘量から導き出されるおおよその土器量と、遺跡の規模を比較することで周辺遺跡の必要土器量について検討を加える。この検討は、縄文時代の例ではあるが、多摩ニュータウン遺跡例で用いられた手法を援用する。

多摩ニュータウンNo.248遺跡例のような大規模な粘土採掘坑密集地の近くには一般集落（No.245遺跡のような工房遺跡を除く）は存在しないことが指摘されている。それは、大規模な粘土採掘坑密集地で産出される粘土量は膨大で１集落で消費できる量ではなく、また採掘のための人員を用意することができないと考えられるためである。そこで、大規模粘土採掘坑は複数集落の共有採掘地として考えた方が自然であろうとする。このことから、採掘地を中心とした広い範囲を（消費）集落として捉える必要がある。粘土採掘量と実験に基づく１個当たりの必要粘土量から導き出される土器生産量、そして竪穴住居１棟当たり（住居存続年数を平均30年と仮定）の必要土器数を導き出し、周辺で検出された竪穴住居数からその流通範囲を導き出した結果、その範囲は粘土採掘坑の検出されたNo.248遺跡の南を流れる境川流域沿いの、半径５～10㎞の範囲の集落の土器の供給を担ったとする。

相川西方遺跡について検討する際に注意を要するのが、多摩ニュータウン遺跡例は約1,000年間の採掘活動で1,452tであるのに対し、相川西方遺跡は約300年間の採掘活動で904.1282ｔであるということである。単純に１年あたりの採掘量を示すと、多摩ニュータウン遺跡例は1.452ｔ／年、相川西方遺跡は3.0138ｔ／年となる。

相川西方遺跡の粘土を使用しての土師器製作実験はなされていないため、縄文土器の必要粘土量を引用することは危険であるが、縄文時代と弥生時代後期～古墳時代初頭との粘土採掘量の違いをみるため

第36表　相川西方遺跡周辺の住居を検出した遺跡

番号	遺跡名	相川西方遺跡からの直線距離(km)	立地地形	住居		時期
				種類	棟数	
1	高松Ｃ遺跡	1.8	岩田川右岸半田丘陵	竪穴住居	29	弥生時代末～古墳時代初頭
2	尺目遺跡	2	岩田川右岸半田丘陵	竪穴住居	2	弥生時代後期
3	高茶屋大垣内遺跡	2.5	高茶屋台地	竪穴住居	10	古墳時代前期
				掘立柱建物	6	
4	向山遺跡	2.8	雲出川左岸中位段丘面端	掘立柱建物	6	弥生時代後期～古墳時代前期
				竪穴住居	2	
5	平栄遺跡	3.1	岩田川右岸丘陵	竪穴住居	3	弥生時代後期
6	長持元屋敷遺跡	3.3	雲出川左岸氾濫原	竪穴住居	1	弥生時代後期
7	四ツ野Ｂ遺跡	3.6	雲出川左岸台地	竪穴住居	約30	弥生時代後期
8	柳谷遺跡	3.7	岩田川右岸丘陵	竪穴住居	5	弥生時代後期
9	大ヶ瀬遺跡	3.7	岩田川右岸丘陵	竪穴住居	4	弥生時代後期
10	位田遺跡	4.1	安濃川左岸自然堤防	竪穴住居	1	弥生時代後期～古墳時代前期
11	蔵田遺跡	4.5	安濃川左岸微高地	掘立柱建物	19	弥生時代中期・弥生時代後期
12	新畑遺跡	4.7	岩田川右岸丘陵	竪穴住居	8	古墳時代前期
13	舞出北遺跡	4.9	雲出川右岸微高地	掘立柱建物	1	弥生時代後期～末
14	雲出島貫遺跡	5	雲出川左岸砂堆微高地	竪穴住居	10	古墳時代前期
15	宮ノ前遺跡	5.5	安濃川左岸丘陵	竪穴住居	4	弥生時代後期
16	川北遺跡	9.5	志登茂川左岸丘陵	竪穴住居	75	古墳時代前期
17	草山遺跡	16	櫛田川左岸独立丘陵	竪穴住居	130	古墳時代初頭
				掘立柱建物	135	
18	地蔵僧遺跡	20	御幣川左岸低位段丘	竪穴住居	16	弥生時代後期～古墳時代前期

同様の手法で土器１点当たりの竪穴住居１棟当たりの使用土器量を導き出し、存在する竪穴住居数との比較を試みる[46]。

ここでは、弥生時代後期～古墳時代初頭の基本器種である甕を基準に考える。当該時期の甕は器高がおおよそ20～30㎝に収まるため多摩ニュータウン遺跡例で設定された土器サイズのうち最も小さい高さ30～40㎝の縄文土器を参考に引用するが[47]、縄文土器と当該時期の土器では器壁厚にも差があり、器高も差があるため、あくまでも「必要最大の量」として注意する必要がある。この法量の縄文土器を作る場合約３㎏の素地土が必要であり、混和材を除くと２㎏の粘土が必要とされる。これで採掘量を割ると、相川西方遺跡の粘土量で452,064.1個の土器を作ることができる。１年当たりにすると1,506.88個となる。

引き続き、及川氏の検討方法に基づくが、竪穴住居１棟が１年間に消費する土器を10個、１棟の存続年数を平均30年とした場合、１棟につき300個の土器が必要となる。先ほどの出来得る土器数を300個を割ると、452,064.1個÷300個＝1506.88棟となる。つまり、相川西方遺跡の採掘粘土量で1500棟を超える住居を賄うことができることになる。

③　周辺遺跡からみた流通範囲（予察）

以上の数字から相川西方遺跡周辺の集落の状況を見ていく。まずは、半径５㎞以内に竪穴住居等住居跡が検出されている遺跡のうち、弥生時代中期～古墳時代前期の遺跡をピックアップすると、第36表のようになる。ここに挙げた遺跡の竪穴住居数を足しても約150棟となり、10分の１の棟数にしかならない。そこで半径10㎞に広げると安濃川流域・雲出川流域の両群を網羅し、一部櫛田川流域にかかる多くの遺跡がその範囲に含まれる。そこでこれらの遺跡群の中で大規模に竪穴住居群が検出された遺跡の竪穴住居棟数を加えても、相川西方遺跡の粘土で作られた土器を消費することはできない。やはりこの近辺だけではなく、伊勢地域を超えて更に広範囲に流通したと考えるのが自然であろう。

弥生時代における土器流通については、長友朋子氏の検討がある。長友氏は特に近畿・九州・中国地方の弥生時代における土器の生産体制について、タイでの民族事例から復元した製作工程・技法を検討した上で、当該時期における規格度・生産量の変遷についてみている[48]。それによると弥生時代後期になると製作の合理化がすすみ、量産化への志向が始まった結果、「弥生時代中期には隣接する地域程度の距離で面的に土器移動がみられたが、後期になると（中略）長距離の交易がはじまり、このような交流網を基盤に、弥生時代終末期から古墳時代初頭になると飛躍的に日常土器の移動距離が長くなり、かつ量が多くなるという変化が認められる。」と指摘する。このような土器生産体制の変化が如実に表れたのが、既にみたような近畿圏における大規模な密集粘土採掘土坑群の展開である。相川西方遺跡の事例からも、このような事象は長友氏が検討を加えた地域だけではなく、伊勢地域においても同様であったということが言えるのである。縄文時代に比してより多くの量の土器の使用、周辺遺跡だけでなくより広い範囲への供給体制、あるいはより多くの人の移動など、土器がより広範囲に動く要因がこの時期に表れてきたのであろう。

その流通には上村遺跡・高松Ｃ遺跡など岩田川下流域の遺跡、平栄・大ヶ瀬遺跡など岩田川中流域の遺跡、雲出川左岸域の四ツ野Ｂ遺跡など近在の集落が主体的に関わったのではないだろうか。この３遺跡（群）はいずれも銅鐸出土地が隣接し、四ツ野Ｂ遺跡以外では当該時期の墳墓も見つかっている。相川西方遺跡のもう少し近在の集落の存在の可能性も考えながら、その粘土（と、それで作られた土器）に関わるこれらの遺跡と他地域との交流が考えられないだろうか。これは、古墳時代初頭における雲出川下流域の遺跡を検討した川崎志乃氏[49]の指摘するように、高茶屋大垣内遺跡・雲出島貫遺跡・雲出川右岸の西肥留遺跡・片部遺跡・貝蔵遺跡などの遺跡も有機的に結びついて成立したものであろう。

この他、相川西方遺跡の南約4.5㎞には、Ｓ字甕の混和材の採掘地として知られる雲出川も流れるという立地も[50]、この地域が一大土器生産地となる好条件と言えるだろう。粘土採掘地としてのこの地域の重要性は、その粘土が良質であったためか古墳時代後期、伊勢地域における須恵器最古の窯の操業の素地ともなった。

5　総括

相川西方遺跡では、三重県内で初めて、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての700基以上という大規模な粘土採掘坑が調査された。以下、時代を追ってまとめる。

（１）縄文時代

草創期からの有舌尖頭器、晩期の壺形土器と思われる破片が出土したのみであるが、自然科学分析の結果から、この遺構検出面ないしはその基盤層の堆積年代が、更新世後半もしくは完新世初頭と古くより安定した土地であったことがわかった。相川の水辺に集まる動物類を狙って狩猟が行われた様子がうかがえる。

（２）弥生時代後期～古墳時代初頭

この遺跡の中心となる時代であり、粘土採掘が活発に行われる。後期の土坑もわずかにあるが中心は弥生時代末～古墳時代初頭である。住居址や墓等、粘土採掘坑以外に生活活動の痕跡が全く見られないのにもかかわらず、良質な粘土の存在が知られ、活発にその採掘が行われるようになった契機が何であったのかは今後の課題である。

（３）古墳時代

遺物が出土するのみであるが、須恵器高杯脚片（106）、家形埴輪片（107）が包含層より出土している。須恵器高杯はおそらく有蓋高杯に復元できるもので、ＴＫ47併行期のものである。周辺で当該時期の遺跡はＴＫ23併行期に操業を開始する須恵器焼成窯である久居窯跡群が当遺跡の西約600ｍの位置にある。しかし、当遺跡で出土した須恵器は窯に関連した遺物とは見えないことから、集落跡もしくは墳墓が相川西方遺跡のすぐ北の半田丘陵上に存在したことが考えられる。家形埴輪の存在から、これについても埴輪・須恵器併焼窯である藤谷窯跡群が遺跡の北西約700ｍに位置するが、窯に関連する資料と考えるよりもやはり隣接する古墳の存在を考える方がよいであろう。

（４）古代

長胴甕の出土が多くみられるが、遺構は土坑５基のみである。重機による表土掘削中からほぼ完全に復元できる長胴甕が４個体、破片を含めても10個体分が出土している。単層ながらオーバーハングが見られる小土坑が１基あることから、古代にあってもわずかながら粘土採掘が展開していた可能性がある。長胴甕は採掘した粘土の容器であったのか、もしくは、穿孔した長胴甕（116）の存在から、甕を仮器化して土器棺として用いた可能性も考えられる。

（５）今後の課題

今回、出土土器と周辺遺跡出土土器の胎土分析、また材料となったと考えられる粘土の分析を行ったが、明確に相川西方遺跡産粘土が使用されたと考えられる土器は見いだせなかった。採掘年代・土坑出土土器の年代イコール採掘粘土で作った土器の年代ではなくタイムラグがあると考えるのか、もしくは土器製作には使われなかったのか。今後、広範囲で土器の胎土分析を行い、土器を通じた弥生時代から古墳時代における地域間交流の検討が重要である。

相川西方遺跡周辺では、５世紀後半から須恵器窯・埴輪窯の操業が盛んとなる。これはこの地域が弥生時代より良質な粘土が採掘できる地であることに由来する。大阪府陶邑窯跡群に対する万崎池遺跡等のように、窯に隣接して粘土採掘坑が広がる可能性があり、今後はその視点で遺跡範囲を判断する必要があるだろう。

【註釈】

① 福永伸哉「古墳時代の共同墓地」『待兼山論叢』第23号　大阪大学　1989年。福永氏と同じく土壙墓として論じているものに西口陽一氏の論考があり、このような墓が群集して造営される社会的背景についても言及している。西口陽一「畿内の群集土壙墓」『考古学研究』第37巻第１号　考古学研究会　1990年

② 京嶋覚「群集土壙の性格と意義」『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』大阪市文化財協会　1991年、同「群集土坑の再評価」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』３　大阪府埋蔵文化財協会　1995年、同「長原遺跡の粘土採掘坑と土器生産」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会　2002年

③ 及川良彦・山本孝司「土器作りのムラと粘土採掘場－多摩ニュータウンNo.245遺跡とNo.248遺跡の関係－」『日本考古学』第11号　日本考古学協会　2001年

④ その他、土坑群が検出された遺跡の発掘調査報告書においても土壙墓として論じているものがある。大阪府狐塚古墳群（原口正三「考古学から見た原子古代の高槻」『高槻市史』第１巻　高槻市　1977年）、奈良県池田遺跡（『奈良県遺跡調査概報（第１分冊）』奈良県教育委員会　1981年）、大阪府万崎池遺跡（『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』大阪府文化財センター　1984年）、大阪府菱木下遺跡（『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』大阪府文化財センター　1984年）、大阪府長曽根遺跡（『堺市文化財調査報告書』第27集　堺市教育委員会　1986年）、三田遺跡（『三田遺跡』大阪府埋蔵文化財協会　1987年）、讃良郡条里遺跡（『讃良郡条里遺跡発掘調査概要』Ⅰ・Ⅱ　大阪府教育委員会　1989・1991年）など。

⑤ 『多摩ニュータウン遺跡－No.247・248遺跡－（本文編）』財団法人東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター　2000年

⑥ 「斜面地や台地縁辺部に位置し、土坑は粘土層を掘りこむ。単独の例は少なく群を構成することなどが多い」、「一つ一つの粘土採掘坑の規模は大形のものは少なく、大形のものは複数の粘

土採掘坑が重複した結果である。」（前掲註③文献より）

⑦ 『三内丸山（２）遺跡Ⅱ』第一分冊　青森県教育委員会　1994年

⑧ ４基の粘土採掘坑と集落を確認している。平面形は不整形で床面に著しい凹凸があり、灰白色粘土層を掘り込んでいる。土坑埋土中には粘土ブロックを多量に含み、たぬき掘りが見られる。そして、斜面を掘削する。
秋田県教育委員会『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－家ノ後遺跡－』1992年、石川隆司・及川良彦・谷地薫・柴田陽一郎「家ノ後遺跡の粘土採掘坑－粘土と出土土器の分析を中心に－」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第９号　秋田県埋蔵文化財センター　1994年

⑨ 前掲註③文献によるもので、これ以降増加している可能性はある。

⑩ 前掲註②1995年文献に基づく。

⑪ 財団法人鳥取県教育文化財団『福岡遺跡』1992年、財団法人鳥取県教育文化財団『今津塚田遺跡　福岡遺跡６区』1993年

⑫ 『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』大阪市文化財協会　1991年

⑬ 『西大井遺跡発掘調査概要1992年度』大阪府教育委員会　1994年

⑭ 『東安堵遺跡』奈良県教育委員会　1983年

⑮ 『京都府埋蔵文化財情報』第18冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1985年

⑯ 「第３章　三宅遺跡」『京都府遺跡調査報告書　第18冊　本文編』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1993年

⑰ 富山県教育委員会『小杉流通業務団地内遺跡群　第７次緊急発掘調査概要』1985年

⑱ 『筒江浦石遺跡－一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路Ⅱ）建設に伴う発掘調査報告Ⅰ－』　兵庫県教育委員会　2007年、荒木幸治「古墳時代初頭における粘土採掘坑とそれに伴う具体的活動－兵庫県朝来郡和田山町筒江浦石遺跡の調査－」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　2001年

⑲ 『波志江中宿遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001年

⑳ 前掲註⑫文献

㉑ 小野久隆「Ⅶ．まとめ」『大庭寺遺跡Ⅱ・伏尾遺跡Ⅰ－調査の概要－』大阪府教育委員会　1992年

㉒ これは土壙外の対照試料との差が顕著でないが、墓が密集しているため他の墓の影響を受けたものと説明する。

㉓ 「私市円山古墳・興遺跡・三宅遺跡・日光寺遺跡に残存する脂肪の分析」『京都府遺跡調査報告書』第17冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1992年

㉔ 『安源寺遺跡発掘調査報告書』中野市教育委員会　1995年、『安源寺遺跡発掘調査報告書』中野市教育委員会　2003年

㉕ ただ、第２次調査においてはオーバーハング部は掘削していない。つまり、土坑壁が直立状態よりも外側へ広がる場合、それを追って掘削するのではなく検出したラインから直立状態で止めているということである。しかし土層断面図を作成する場合には壁・底部を確認するために掘り抜くようにしてトレンチを設けて掘削、図化しており、土層断面図がある場合にはオーバーハングの有無は確認できている。

㉖ 土坑は、調査において最終的にオーバーハング部を上から掘削したため、本来の規模よりも大きくなっている。そして平面規模は掘削完了後に作成した平面図により計測しているため、同じく検出時よりも大きくなっている。

㉗ 多摩ニュータウン遺跡では、縄文時代中期～後期と大変長いスパンであったため群毎の変遷が追えるが、相川西方遺跡は、古くとも弥生時代後期～古墳時代初頭、中断して８世紀代であるので、土器の細かな時期差は誤差の範囲であり、それを過大評価してしまうと真実を見誤る恐れもあるが、敢えて図化した。

㉘ 同様の状況は、大阪府菱木下遺跡の報告書においても記されていて、雨水の流入が調査の最も障害となったということである。前掲註④文献。

㉙ 壺30点、甕26点、高杯28点、それ以外（鉢・手焙形土器）２点である。

㉚ 京嶋氏は、弥生時代中期後葉～古墳時代前期の土壙群の特徴は、出土土器の器種は甕が主体となるものが多いが、遺跡によって出土する土器の器種に偏りがあると指摘する。前掲註②1995年文献。

㉛ 赤塚次郎「山中式という名のデザイン」『考古学フォーラム』３　1993年。川崎志乃「御浜町東里遺跡出土の遺物」『研究紀要』第10号　三重県埋蔵文化財センター　2001年。）

㉜ 森正「温江遺跡検出の土坑－丹後地域弥生時代後期における貯蔵形態の一例－」『京都府埋蔵文化財情報』第33号　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989年、「温江遺跡」『京都府遺跡調査概報』第37冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1990年

㉝ 前掲註③文献。

㉞ 奈良時代の長胴甕は完形のものが多く、焼成後穿孔を持つ長胴甕（116）もある。縄文時代の例であるが、粘土採掘坑から底部穿孔土器が出土する例が２例指摘されている。しかし、「あくまでも本遺跡は生産跡（採掘場跡）であり、勿論、墓坑が確認されているわけでもなく、通常の一般集落に共通する祭祀、儀礼が執り行われた可能性は低いものと考えている。」とある。前掲註③文献より註釈（7）。

㉟ 東安堵遺跡出土の甕もススが付着することから祭祀に使われたとする。前掲註⑭文献。

㊱ この他にも、大阪府大庭寺遺跡（1989年調査）において１組の接合（約３ｍ離れた土坑間）が、同遺跡（1991年度調査）において8組の接合（それぞれ約１～８ｍ離れた土坑間）がある（「Ⅳ.大庭寺遺跡の調査成果」『大庭寺遺跡Ⅱ・伏尾遺跡Ⅰ－調査の概要－』大阪府教育委員会　1992年）。また、兵庫県筒江浦石遺跡においても１組の接合がある（前掲註⑱荒木2001）。

㊲ 芳村俊一『やきものをつくる　日本全国身近な土を焼く』双葉社　2001年　を参考に実施した。

㊳ 三重県明和町北野遺跡では６世紀中頃～８世紀中頃にかけての土師器焼成坑225基が検出されている。この成果に絡んで、三重県埋蔵文化財センターにて土師器焼成実験が行われた。これは、実際に現地と同じような地形・地質の土地に北野遺跡で検出された二等辺三角形もしくは円形の焼成坑を掘削、「覆い焼き」の状況を変えた計４回の野焼きにて復元した土師器甕を焼成した（うち１回は失敗）。野焼きであるので、本報告書にあるような一定の温度管理にある状況ではないが、成功した実験では窯詰した土師器の大半が良好に焼成できた。焼成時の最高温度は、成功した各３回でそれぞれ860℃、700℃、767℃であった。焼成時間は計測したのが５時間までで、その時点もなお100℃を超える計測地点が大半であった。『研究紀要　第７号－土師器焼成坑と古代土器の生産と流通－』三重県埋蔵文化財センター　1998年）

㊴ 前掲註⑱兵庫県教育委員会　2007年

㊵ ここでは粘土層厚を平均20㎝と最低に見積もって計算されている。

㊶ 当遺跡の粘土では重量を出していなかったため、多摩ニュータウン遺跡の事例を引用した。それによると、１㎥の粘土＝1.32ｔ（自然乾燥重量）である。前掲註③文献より。

㊷ ＳＨ250・306・342など。『高茶屋大垣内遺跡（第３・４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2000年

㊸ 多摩ニュータウン遺跡例においても、半径10㎞の集落遺跡は土器供給先であるとともに採掘作業員の調達先でもあることが指摘されている。

㊹ 石井智大「弥生時代終末期における遺跡群の検討－伊勢湾西岸地域の弥生時代終末期社会分析の前提として－」『研究紀要』第17-1号　三重県埋蔵文化財センター　2008年）

㊺ 藤田充子「Ⅴ結語」『藤谷窯跡群発掘調査報告』津市教育委員会　2000年（『津市埋蔵文化財センター年報４』平成10年度　津市埋蔵文化財センター　2000年　に所収）、『にんごう遺跡・にんごう古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2014年

㊻ 検索したが、弥生時代後期～古墳時代の土師器における必要粘土量を検討した論に当たることができなかった。

㊼ 多摩ニュータウン遺跡例では、採掘対象となった粘土層の粘土に約30％の砂を混和材として入れ、縄文土器を製作する実験を行っている。それによると、約３㎏の素地土で高さ30～40㎝の土器が製作可能であり、このサイズを平均的な縄文土器のサイズとすると約２㎏の粘土が必要となる。これを採掘量で割ると、317,460個の土器が製作できるとする。多摩ニュータウン遺跡は粘土採掘の操業期間が約1,000年と長く、前述の高さの土器では年間約317個の土器が生産できるとする。前掲註③文献より。

㊽ 長友朋子「第２章　弥生時代の土器生産体制」『弥生時代土器生産の展開』六一書房　2013年

㊾ 川崎志乃「古墳時代初頭の雲出川下流域の遺跡群」『研究紀要』第17-1号　三重県埋蔵文化財センター　2008年

㊿ Ｓ字甕胎土研究会「Ｓ字甕の混和材を考える」『考古学フォーラム』９　考古学フォーラム　1998年